昭和八年十二月十五日印刷
昭和八年十二月二十日發行
昭和十四年十一月十五日再版發行

國譯一切經 密敎部 五

【定價 金一圓五十錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番
發行所 株式會社 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（三）三九四四番
（三）〇四〇番

製本所　兩角製本所

索引

（頁數は通頁を表す）

—セ—

—ソ—

—タ—

—密教部五索引終—

置せよ。最後に其の虎𤙖泮吒莎訶字を安け。謂はゆる闍嚩攞闍嚩也攞悉地娑馱也儞馳儞跛娜儞跛跢南、帝闍也帝闍也、拔馱也忙尾覽忙阿尾瞼囉乞沙散儞甜俱嚕𤙖泮吒莎訶。

是の如く等の求請の句を以て、其の物を光顯せよ。前後中間に種種に重ねて說くに、亦妨ぐる所なし護摩畢已つて、次に白き羯囉尾囉花を持誦して、其の物の上に散じて、光顯を作すべし。或は赤き羯囉尾囉花を持誦し、或は白芥子を用つてし。或は蘇摩那花を用つて光顯を作せ。先づ塗香を用つて手に塗り、以て其の物を按じ、次に諸花を以て持誦せよ。而して白芥子を散じ、次に香を燒き之を薰じ、次いで後に香水を持誦して灑げ。應さに知るべし、是の如く次第に初中後夜の三時に本藏主の眞言を以てし、香水の眞言を持誦して灑ぐべし。次いで本持の眞言を誦じて、灑ぎ畢已り、前の如く護摩念誦すること、乃し日出に至れ。此の法を具せば速に成就を得ん。是の如く諸物を光顯にし。及び己身を光顯にすれば、決定して速に物を成就することを得ん。其の物は縱ひ少くとも亦大なる驗しを護ん。此の法を具せん者は、其の物の增多に及び淸淨なることを得ん。是の故に應さに光顯の法を作すべし。此を一切成就祕密の法と名く。諸の節日に於て、是の如く光顯の法を作すべし。餘日は時に隨つて光顯を作せ。念誦の遍數滿じ已つて成就の法を作さんと欲はん時には、先づ初夜に具に光顯の法を作して、然して後に成就すべし。

蘇悉地羯羅經卷（終）

【一〇六】赤き羯囉尾羅花。赤色の躑躅こと。

の角に軍持瓶の印を置くべし。次に南面に於て拔折羅の印を置き、東南の角に棄那梧の印を置き、西南の角に羯攞賒瓶の印を置き、西面に於て今剛鉤の印と、金剛拳の印とも置くべし。西南の角に計利吉羅の印を置き、西北の角に遜婆の印を置くべし。復た東面に於て輪を置け、右邊に佛眼、佛母の印を置き、又北面の蓮花印の右の邊に、半拏羅嚩思寧部母の印を置け。次に南面に拔折羅の印を置き、右邊には忙莽計部母の印を置け。次に曼荼羅の門の外に於て、前の所說の如く、能摧諸難軍荼利の印を置き、前に依つて供養せよ。復た北面に於て六臂の印と、馬頭の印と、多羅の印と、戰捺羅の印と、及び當部に於ける所有の眷屬とを置いて、次第に安置せよ、其の形皆白し。復た東面に於て、如來鑠底の印と、帝殊囉施の印と、無能勝明王の印と、無能勝妃の印とを置くべし。復た南面に於て、當部の內に於ける所有の眷屬を次第に之を安ぜよ。然して西面に於ては意に隨つて三部の諸印を安置せよ。次に外院に於て俱尾羅等の八方大神を置け、其の空處に於て、任に三部の內の成辦諸事の眞言主等を置くべし。次に中臺に於て所持の部主の印を置け、所成就の物をば、本法の所說に隨つて、其の中に置き、其の部主の中臺の上に安ずべし。其の物の東邊に眞言本所持の印を置き、其の物の西邊に護摩の爐を安け。次に西邊に於て持誦の人坐して、各各に本眞言を以て、法に依つて召請し、前の所說の如く、次第に供養し畢つて、三部の母の明を以て、次第に護摩して其の物を光顯にし、然して後本眞言を以て護摩して光顯を作せ。諸の光顯の法の中に於ては、護摩を最と爲す。凡そ初めて護摩するには、先づ部母の明を以て香水を持誦して、其の物を灑淨せよ。護摩旣に畢らば、亦是の如く灑げ。或は忙莽計の心明を用ゐ、或は四字の明王の眞言を用ゐよ。三部に通じて護摩して光顯を作せ。其の所用の眞言に隨つて護摩を作さんものは、初に且く其の眞言を誦し、次に求請の句を誦し、復た中間に其の眞言を誦せよ。復た求請の句を誦して後、亦其の眞言を誦すれば、還つて求請の句を安ずべし。是の如く眞言の中の三處の上中下分に、求請の句を安

は其の成就の相應に隨ひ、或は本法の所說に於て、每日三時に、蘇蜜酪を用つて和するに胡麻を以てして、護摩を作すべし、或は本法に依つて乳の粥を祀り、或は酪の飯を祀れ。所成就の物をば、每日三時に香を以て之を薰じ、香水を以て灑ぎ、眞言を以て加被し、其の物を觀視して、吉祥の環を以て、指の上に貫き置き、其の物を搗按して牛黃水、或は白芥子を以て、物の上に灑散し、及び節日に於て、諸の供具を加へて、彼の物に奉獻せよ。若し白月に成ぜんとせば、十五日を取り、若し黑月に成ぜんとせば、十四日を取れ。斯の如く作法して、其の物を光顯せよ。皆部母の眞言を用つて、復た重ねて諸の花香・花鬘等の物を加へて供養せよ。香を以て手に塗り、芽草環を置いて所成の物を按じ、晝夜持誦せよ。夜の三時に於ては、百八遍を誦ぜよ。斯の如くして成就物を光顯にし、始より終に至るまで、皆是の如くすべし。若し此の法を具すれば、速に成就を得ん。

佛部の光顯の眞言に曰く、唵、諦惹塞尾儞、悉䟦娑馱野、虎𤙖泮

蓮華部の光顯の眞言に曰く、唵、挹比挹比儞跛野、摩訶室利曳、莎嚩訶。

金剛部の光顯の眞言に曰く、唵、入嚩攞入嚩攞野、畔度哩、莎嚩訶。

三部の法に於て、皆赤き羯羅微羅花を用ふ。眞言を以て持誦して、其の物に散灑せよ。或は忙落底花を用ひ、或は白芥子を用ゐよ。首末と中間とに、皆應さに是の如く其の物に散灑すべし。或は警界あり。異相を見るに及んでも、亦是の如く散せよ。成就せんと欲するに臨んでも、亦是の如く散すれば、便ち光顯を成す。若し蘇等の物を成就せんと欲はば、香水を眞言して用つて其の物に灑げ、便ち光顯を成ず。是の如くの法を以て、物を光顯にせよ。縱ひ成ぜずとも間斷すべからず。或は曼荼羅を作さんにも以て光顯を爲せ。前の如く地を淨め、五種の色を用つて曼荼羅を作せ。其の量は四肘にして、一門を開け。內院の東面に先づ輪印を置き、東北の角に、鉢の印を置き、東南の角には袈裟の印を置くべし。次に北面に於て蓮華の印を置き、西北の角に瀨拏棓の印を置き、東北

隨つて、彼の眞言を誦じ用つて加被せよ。本尊の前に於て、安ずる所の瓶は、還つて彼の眞言を用つて之を加被せよ。其の臺の內の瓶をば、明王の眞言を用つて加被を作すべし。門に當つて軍荼利の爲めに安置する所の瓶も、亦須らく彼の眞言を用つて加被すべし。臺の曼荼羅の東面の兩角に於て、安置する所の瓶の東北の角のものは、部母の眞言を以てし、東南の角のものは、部母の眞言を用ゐ、西北の角なるものは、能辨諸事の眞言を用ゐ、西南の角のものは、一切の眞言を用ゐよ。是の如く此の上の瓶を加被し已り、及び供養し已つて、次に右に遶るべし。前に灌頂の法を說くが如く、此も亦是の如く吉祥の瓶を安置せよ。謂ゆる穀實と、藥草と、花果と、香樹と、枝葉と、花鬘と、及び寶と瓶との內に置いて、新帛の繒綵を用つて、其の頸に纒へ、諸の灌頂の法も皆是の如くすべし。卽ち同伴をして行者の頂に灑がしむ。其の同伴の者は、皆須らく持誦如法淸淨なるべし、或は阿闍梨に灌頂を配與せんことを求むべし。諸の作障を除遣せんと欲ふが爲めの故に、先づ軍荼利の瓶を用ゐ、而も灌頂を用つてせよ。第四に應さに所持の眞言の瓶を用ゐて灌頂すべし。其の餘の二瓶は意に隨つて用ゐよ。是の如くし畢已つて、應さに牛糞と、塗香と、薰香と、芥子と、線釧と、衣服とを以てすべし。皆應さに受用して灌頂を作し已るべし。復た諸部を息んが爲めの故に、應さに護摩を作し已つて、便卽ち發遣すべし。或は淨處に於てせよ。但し一の彩色を以て、小曼荼羅を作れ。極めて正方ならしめよ。其の量は二肘なり。三部の大印を安置し、西面は朔の印なり。前の如く淨瓶を安置し、法の如く灌頂すれば、能く諸部を離れて、本尊歡喜したまひ、久しからずして速に此の祕密最勝の悉地を成ずべし。

光物品第三十四

復次に如法に灌頂し畢已つて、護摩を作すべし。三七日を經、或は一七日、或は一月を經よ。或

食金剛の印、次の右には拔折羅の印、次の左には金剛棓の印なり。諸餘の眞言及び明等の印は、左右に安置し乃し兩角に至る。次に西面の門の南に於て、梵王の印、及び梵吉祥明王、並に諸の眷屬を畫せよ。乃至南の角の門の北には[一〇三]嚕達羅神の印及び妃の印を畫け、並に諸の眷屬をば乃至北の角にす。次に第三の曼荼羅の門には、八方神の各眷屬と與なるを畫いて、其の位を滿さしめよ。第二の曼荼羅の門の外に於て、右邊には難陀龍王を畫き、左邊は跋難陀龍王なり。第三の曼荼羅の門の外に於て、右邊には孫陀龍王を畫き、左邊は優婆孫陀龍王なり。曼荼羅の外には、[一〇四]甘露瓶の印を畫け。是の如く曼荼羅の法を作し供養せんものは、如法は三種の護摩を作すべし。毗娜夜迦を遣除せんと欲ふが爲めの故に、阿毗遮嚕迦の事を作すべし。自の利益の爲めの故に、補瑟徵迦の事を作すべし。諸の災難を息んが爲めの故に、扇底迦の事を作すべし。應さに當部の成辦諸事の眞言を以て、阿毗遮嚕迦の事を作すべし。或は甘露瓶の眞言を用つて、三部に通じて用ゐよ。應さに當部の心明を以て、補瑟徵迦の事を作すべし。應さに當部母の明を以て、扇底迦の事を作すべし。曼荼羅所集の聖者と一切の諸天とに於て、各各に本眞言を以て、三種の護摩を作せ。或は成辦一切事の眞言を以て護摩を作せ、其の護摩の處は、曼荼羅の南門の東にして作せ。護摩の法の蘇等の諸物の如きは、三事の眞言を以て、各の祀ること百遍し、或は其の數を加へよ。威を諸の眞言に加へんと欲ふが爲めの故に、應さに是の如くの三種の護摩を作すべし。次に三部の諸の眞言等の爲めに、各の祀ること七遍せよ。其の三部の主には應さに數を加へて祀るべし。或は但三部各祀ること百遍し、如し辨ぜざらんものは七遍し、三遍して亦滿足することを得べし。所持の眞言主は臺の曼荼羅の內の部尊の下に於て安置せよ。曼荼羅の外の東面に於て、別に訶利帝母を安じ、南面には輸利尼を安置せよ。西面には[一〇五]翳迦勢吒を安置し、北面には句吒醯利を安置すべし。彼の所樂に隨つて當に奉獻すべし。法の如くに諸の眞言を供養し已り、及び護摩し已つて、前に安ける瓶をば爲る所のものに

【一〇三】嚕達羅(Rudra)神とは伊舍那天なり。

【一〇四】甘露瓶は軍荼利の幟織物なり。

【一〇五】翳迦勢吒(Ekajaṭarākṣasa)とは、一髻羅刹なり。

く、明王の曼荼羅の淨地等の法も、皆應さに是の如くすべし。其の曼荼羅は須らく方四角にして、[九六]四門を安置す。其の量[九七]八肘或は七(肘)、或は五(肘)なり。唯西門を開け、界道の五色は法の如く畫飾して、其の臺の量の如くせよ。次の外をば半を減じ、次の外は准じて然かせよ。此の西面の四肘の外に於て復た[九八]曼荼羅を作れ、其の量五肘、或は四(肘)、或は三(肘)なり。唯東門を開け、或は根本の大曼荼羅の如くにして、灌頂の處所は半を減じて作れ。凡そ曼荼羅の地勢は、皆北は下し卸すを說いて吉祥と爲す、但曼荼羅の地勢、北は下し卸すものを說いて最勝と爲す。或は一種の彩色を用つて之を畫け、角の外に於て、三肘の拔折羅を作れ、中臺の內に於て、如法の八葉の蓮華を畫作せよ。諸の曼荼羅も亦應さに是の如くすべし。蓮華葉の外に周匝して吉祥の妙印を畫作せよ。四門の中に於て拔折羅を畫け。復諸の角に於て吉祥瓶を安け。外の灌頂の曼荼羅に於ても、亦た是の如く作すべし。凡そ灌頂せんと欲はば、必ず四種の瓷を置ける所の處を須ゐ、並に界の角を衞り、持誦する所の眞言及與び明等に隨つて、其の臺の內に於て本尊の印を畫き、並に一の瓶を置け、所持の眞言は、其の部類に隨つて本尊の主印を畫け、謂はゆる佛頂と、蓮華と金剛となり。應さに知るべし。此の法を最も祕密と爲す。所持の眞言、名號を識らず、及び部に貫ならざるものには、應さに一の瓶を安ずべし、辦諸事と名く。或は成就義利の瓶を安じ、或は一の瓶を安ずるを、諸眞言と名く。次の外の東面に佛頂の印を畫け。右邊には部母の印、左邊には部心の印、次の右には鑠底の印、次の左には牙の印、次の右には阿難、次の左には須菩提なり。諸餘の眞言及び明等の印を左右に安置し、乃し兩の角に至る。次の北面に於て觀自在菩薩の印を畫け、右邊には部母の印、左邊には部心の印、次の右には[一〇〇]落叉彌の印、次の左には多羅の印、次の右には成就義菩薩の印、次の左には大勢至菩薩の印、諸餘の眞言及び明等の印、左右に安置し乃し兩角に至る。次に南面に於て[一〇一]金剛の印を畫け、右邊には部母の印、左邊には部心の印、次の右には金剛拳の印、次の左には[一〇二]

[九六] 四門を安置　蘇悉地は胎藏に依るが故に西門を開く。
[九七] 八肘　一肘は一尺六寸なれば一丈二尺八寸。
[九八] 曼荼羅とは、正覺壇なり。
[九九] 貫ならずとは部屬に配列せられざる意。
[一〇〇] 落叉彌(Lakṣmī)とは大吉祥變菩薩の印。
[一〇一] 金剛印とは金剛薩埵なり。
[一〇二] 食金剛印とは金剛夜叉なり。

復次に廣く成就物の量を說かん。成就物とは、謂く身の莊嚴の具たる諸の器仗と、種種の衣服となり。世の常法に用ふる所の量數の如くし、冶研し細末にして成就の法を作せ。若し雌黃の法を成就せんと欲はば、五兩を上法と爲し、三兩を中法と爲し、[八八]一兩を下法と爲す。若し牛黃の法を成就せんと欲はば、一兩を上法と爲し、半兩を中法と爲し、[八九]一分を下法と爲す。若し雄黃の法を成就せんと欲はば、二兩を上法と爲し、一兩を中法と爲し、半兩を下法と爲し、若し[九〇]安膳那の法を成就せんと欲はば、三分を上法と爲し、二分を中法と爲し、一分を下法と爲す。若し蘇の法を成就せんと欲はば、七兩を上法と爲し、五兩を中法と爲し、三兩を下法と爲す。若し灰の法を成就せんと欲はば、五兩を上法と爲し、三兩を中法と爲し、二兩を下法と爲す。若し鬱金香の法を成就せんと欲はば、量は雌黃に比せよ。[九一]安怛陀那の法に於て種種の丸藥の成就を說くは、其の數須らく二十一丸を作るを上法と爲し、十五丸を中法と爲し、七丸を下法と爲すべし。本法の中に於て諸物の量少き時は、應さに其の數を加ふべし。或は都量に依り、或は本法の如くし、或は世に貴ぶ所の量にせよ。數の多少も亦之に依るべし。應さに念誦の功力を觀じ、及び同伴の多少を觀ずべし。應當に具さに備ふべし。[九二]本尊の恩眷の境界の許多なるが如く、任に成就すべし、悉地の法に上中下あれば、諸物の數量も、亦た復た是の如し。

[九三]灌頂壇品第三十三

復次に廣く諸物を成就する祕密の妙法を說いて、速に悉地を得せしめん。若し成就の法を起首せんと欲はば、先づ諸の悉地の具を備辨ずべし。護摩の法を以て威を本尊と眞言とに加へ、及び[九四]自ら灌頂して[九五]灌頂の曼荼羅を作れ。如法に供養し灌頂を作し已つて、然して後に起首して成就の法を作せ。若し大灌頂曼荼羅を作さんものは、能く一切の諸事を成就することを得ん。前の所說の如

【八八】一兩とは日本の十匁に當る。
【八九】一分とは一兩の四分の一なり。
【九〇】安繕那(Añjana)とは樹木の名稱にして、其の葉を眼藥に和合して用ふ。
【九一】安怛陀那(Antardhāna)は隱形の法なり。
【九二】本尊の恩眷。本尊眷屬等の夢中に示す所の分量の如くすること。
【九三】灌頂壇。息災灌頂壇のこと。
【九四】自ら灌頂して。法成就のために行法毎に之を行ず。
【九五】灌頂曼荼羅とは正覺壇の名なり。

取物品第三十

復次に我れ今取物の法を說かん。白黑の二の月の八日・十四日・十五日・日蝕の時・地動の時日、其の[八三]午の前に於て其の物を取れ。念誦の時に於ては、警界を得已つて諸物を取れ。或に澡浴淸淨にし不食持齋して、善の警界を求めて諸物を取れ。所說の須物隨方の處所にして是の物あらば、貴貨に就て[八四]價直を酬はずして諸物を取れ。或る時には自ら威力を增加し、飢寒を堪忍して種種の異相を覺らん、爾の時に當つて諸物を取れ。其の取る所の諸物は、各本性の上中下品に依つて皆好きものを取れ。法の如く得已つて、應さに精進を加へて成就の法を作すべし。

淨物品第三十一

復次に今諸物を淨むる法を說かん。[八五]五淨を用つて洗へ、[八六]洗ふべからざるものは、五淨を以て之を灑ぎ、諸物の量を觀じて、五淨を末に和し、雄黃を乳に和して末に作し、朱砂を牛尿に和して末に作し、牛黃を蘇に和して末に作し、彩色を乳に和して之を調せよ。唯安膳那藥は空冶いて末に作れ刀輪等の物は牛糞水を用つて洗へ、餘の所說のものの洗ふべき物等をば、先づ牛尿にて洗ひ、次に胡麻水に洗ひ、次に香水に洗ひ、諸餘の物等の世に稱用する所をば、水に之を洗ふべし。或は香水に洗ひ已つて、次に諸事の眞言水を用つて灑淨し、次に部心(主)の眞言水を用つて灑淨し、次に部母の眞言水を用つて灑淨せよ。但洗ふべきものは先づ五淨にて洗ひ、次に胡麻水にて洗ひ、次に香水にて洗ふべし。淨むべき所の如きは皆是の如くすべし。

物量品第三十二

[八三] 午の前に於て云々。一切草木等を午時より以前に之を取ること。
[八四] 價値を云々、直切らざること。
[八五] 五淨とは、牛の尿・糞・乳。酪・酥なり。
[八六] 洗ふべからざる云々灑水なり。
[八七] 物量品は成就物の物量を說く。

銅にて作り、或は白梅檀木にて作れ。若し抜折羅の法を成就せんと欲はば、好鑌鐵を以て抜折羅を作れ、長さ十六指にして兩の頭に各三股を作れ、或は紫檀木にて作り、或は三の寳にて作れ、謂はゆる金と銀と熟銅となり。若し雄黄の法を成就せんと欲はば、當に雄黄の色の融金の如くなるを取り、塊を分片に成すべし、復た上に光あらんもの、是の如くなる集黄は能く上事を成ぜん。若し牛黄の法を成就せんと欲はば、當に黄牛の牛黄を取るを上と爲すべし。若し刈唎迦藥を成就せんと欲はば、當に其の藥の色金錢花の如きものの上好なるを取るべし。若し素嚕多安膳那藥を成就せんと欲はば、蚯蟮の糞の如くなるもの上好なり。若し白氎布を成就せんと欲はば、細軟のものを取つて毛髮を揀び去り、鬱金香を以て之を染むべし。若し護身の線を成就せんと欲はば、白氎の縷を取つて細細にして三を合せて股に爲せ、復た三股を以て索に合せ、童女をして合せ撚らしめ、皆須らく右に合すべし、或は縷の全きを合せよ。若し華鬘の法を成就せんと欲はば、闍底花を取つて鬘に作れ。若し牛糞灰の法を成就せんと欲はば、蘭若に乾ける所の淨き牛糞を取り燒いて白き灰と作し、龍腦香に和して用ゐよ。若し木屐の法を成就せんと欲はば、室唎鉢嚹尼木を取つて木屐を作つて、上に其の蓋を安ずるなり。若し傘蓋の法を成就せんと欲はば、當に孔雀の尾を以て作りて、新しき端しき竹を以て其の莖を作るべし。若し弓箭を成就せんと欲はば、槍と稍と獨股と叉と[八一]棓と及び諸の餘の器仗と、世に用ふるものに隨ひ、意に隨つて作るべし。若し世間の鞍馬車乘の牛羊一切の鳥獸、諸餘の物等を成就せん欲はば、世人の輩の共に將て上と爲るに隨ひ、意樂に隨つて作れ。或は本法に依つて、是の如く制作せよ。若し吠多羅を成就せんと欲はば、應さに[八二]族姓の家に生れて、盛年無病にして卒死して體に瘢跡なく、由ほ未だ脹壞せず、諸根具足するを取るべし。是の如くの屍を取つて成就を作せ。意の所作の上中下の法に隨つて、取る所の物も亦た復た是の如し、心の怖畏なくして、方に此の法を作すべし。

【八一】棓。棒のこと。

【八二】族姓家。貴族の商家なり。

成諸物相品第二十九

復次に我れ今成就物の是の三部の眞言に依る悉地を說かん。謂はゆる眞陀摩尼と、賢瓶と、雨寶と、伏藏と、輪と、雌黃と、刀と、此等の七の物は上が中の上なり。能く種種の悉地をして福德を成就し增益し、乃至法王の法を成滿せしむ、況んや餘の世事をや。佛部と、蓮花部と、金剛部との三部の眞言に、皆是の如くの勝上の成就あり。三部の中に於て、受持の者に隨つて、具さに五通を獲るを上悉地と爲す。言く七物とは若し眞陀摩尼を成就せんと欲はん者は、法驗成し已つて、當に金臺を作るべし。量は長さ一肘にせよ。或は銀を用つて作り、莊嚴を精細にし、臺の頭に摩尼珠を置け、其の珠は紅頗梨の光淨にして翳(くもり)なきを用ゐよ。或は好き水精を如法に圓に飾れ。此の害を成ぜんには、應さに夜に念誦すべし、臺の圖樣を作れ。若し雨寶の法を成就せんと欲はば、法驗成し已つて但だ當に誠心を以て、五由旬の內に能く金・銀・種種の雜寶を雨らさん。若し伏藏の法を成就せんと欲はば、法驗成し已つて、但だ當に誠心に所念の處に隨ふべし。伏藏より金銀・諸珍を發起し、貧乏に濟給し種種に費用すとも其の藏盡くることなし。若し輪仙の法を成就せんと欲はば、鑌鐵を以て輪を作れ、量は圓にして兩指一磔にせよ。輪に六の輻輞を安き、緣は銛利にすべし。是の如く作法せば、速に悉地を得ん。若し雌黃の法を成就せんと欲はば、光れる雌黃の日の初めて出でたる色光の如く、亦は融金の色光の如くなるを取れ、是を上好と爲す。若し刀の法を成就せんと欲はば、好鑌の刀を取れ、量は長さ兩肘にせよ、小指を以て齊ぎる闊さ四指、諸の瑕病なく、其の色紺青にして柔施鳥の頸の如くせよ。若し佛頂の法を成就せんと欲はば、當に金を以て佛頂を作ること、猶し畫印の如くすべし。臺の上に安置し、其の臺の根には薩頗胝迦寶を用ゐよ。若し蓮華の法を成就せんと欲はば、金を以て八葉の蓮華を作り、兩指一磔手の量の如くせよ。或は銀を用つて作り、或は熟

供養し、退還し發遣して祈願することと請召の法の如くすべし。降臨の字を去つて、退還の字を置くべし。[七八]殘餘する所の穀蘇蜜酪等をば、並に一處に和して用つて火天に祀れ。眞言三遍して護摩を作し、復た本眞言の字數の多少を觀じて之を念誦せよ。復供養を作し本尊を護衛し、並に己身を護し如法に發遣せよ。

[七九]備物品第二十八

復次に廣く諸の成就の支分を說かん。謂く諸の眞言を成就せんと欲ふが故に、先づ當に諸の雜物の分を備辦すべし。然して後に應さに先承事の法を作すべし。若し已に先承事する者ならば、次に應さに念誦すべし。謂はゆる諸の雜塗香、諸の雜燒香なり。五種の堅香は、謂く沉水香と、白檀香と、紫檀香と、沙羅羅香と、天木香となり。七膠香は謂く乾陀囉娑香と、薩闍囉娑娑香、安悉香と、蘇合香と、薰陸香と、設落翅香と、室利吠瑟吒迦香となり。白芥子と、毒藥の鹽と、黑芥子と、胡麻油と、牛蘇と、銅瓶と、銅椀となり。五寶は謂く金と銀と眞珠と螺貝と赤珠となり。五穀は謂く大麥と、小麥と、稻穀と、小豆と、胡麻となり。五藥は謂く乾託迦哩藥と、勿哩訶底藥と、娑訶藥と、娑訶提婆藥と、稅多擬里疙哩迦藥蜜となり。五色線は、謂く靑と黃と赤と白と黑となり。童子をして線を合さしめよ。金剛杵と、燈炷と、燈盞と、瓦椀と、五種の彩色となり。佉他羅橛、乳木の枝と、苦練木の椀と、大杓と、小杓と、[八〇]牛黃と、鑌鐵と、紫檀と、護淨と、線淨となり。浴衣と、黑き鹿皮となり。鉢孕瞿花と稻穀花と、木履と、冒餌草と、大茅草と、設多布澁波迦香と是れなり。花を採る筐飮食に緣つて須ふる所の蘇と蜜と沙糖と石蜜と等の物なり。數珠の上の所說の如し。種々の諸物は皆預め之を備へ。然して後應當に先承事を作し、及び廣く念誦すべし。

[七八] 殘る所の云々。雜和供なり、小野は混沌供と云ふ。

[七九] 備物品。此品には諸の辨備の物諸の器物等を擧ぐ。

[八〇] 鑌鐵。堅利の物なり。

たるものを須ゐ、通じて一切の護摩の法に於て、條の端直なる者を用ゐよ。其の上下を觀て、一向に之を置き、香水もて淨く洗ひ、細き頭は外に向け、麁き頭は身に向け、蘇に兩頭を搵して、爐內に擲げよ。扇底迦等一一の法を作す時には、各本法に依つて、先づ[七七]摶食を出して護摩を作せ。是の如くの軌模遍く一切に通ず。每日食を作さん時には、先づ一分の食を出して、尊の前に置在いて、護摩の時を待つて先づ取用すべし。念誦の時に兩手を置くに雙膝の間に在るが如くす。護摩の時も亦是の如くすべし。沉の香木を以て、量長さ四指、麁さ頭指の如きを、蘇合香に搵して、百八護摩せよ。此の法は深妙にして、眞言の威を益す。是の如く作す時は、遍く諸部に通ず。或は安悉を用つて、蘇に和して護摩すること、復た一百八遍せよ。或時には空に薩闍囉婆を用つて、護摩を作すこと一百八遍せよ。皆能く眞言の威力を增益す。眞言の法を成就せんと欲ふが爲めの故に、諸の護摩を作さんには、先づ部の尊主を請し、次に本尊を請して、然る後に法に依て護摩を作せ。眞言の法を成就せんと欲ふが爲めの故に、諸の護摩を作さんには、先づ部母の眞言を用ゐ、本尊を護衞し、次に自身を護せよ。然して後に法に依て乃ち護摩を作せ。眞言の法を成就せんと欲ふが爲めの故に、諸の護摩を作せ。若し法了らん時には、加す眞言の力を增益せんがための故に、應當に部心の眞言を念誦すべし。諸の眞言法を成就せんと欲ふが爲めの故に、諸の護摩を作せ。初めの時には皆大杓を須ゐて酌んで施せ、了らんと欲ふ時にも、亦大杓を用ゐよ、中間に在ては應さに小杓を用ふべし。眞言の法を成就せんと欲ふがための故に、諸の護摩を作せ。若し法の了る時は、部心の眞言を用て、閼伽を眞言して、之を供養すること、曼拏羅法の中に說く所の如し。護摩の次第の法を作さんことも、亦應さに是の如くすべし。先づ阿毗遮嚕迦の法を作し、次に補瑟徵迦の法を作し、次に扇底迦の法を作して、護摩了已んなば、本持の眞言を用つて、淨水を眞言し、手を以て遠く巡らして、爐中に散灑せよ。是の如く三度の護摩都て了んなば、復た火天に啓して重ねて餘供を受けて如法に

【七七】摶食。食を摶めて食す。

の念誦護摩供養の法則の如くせば、亦復た能く威力を増力せしむ。

護摩品第二十七

復次に廣く護摩の法則を説いて、持誦者をして速に悉地を得せしめん。尊像の前に於て護摩の爐を作り、須らく方一肘にすべし、四面に[六六]椽を安け、量の深さ半肘にせよ。若し圓爐を作らば、其の量准じて然なり。念誦の處は若し房室に在らば、應さに外に出でて尊形を望み穿ちて爐を作るべし。其の事業に隨ひ[六七]法に依つて之を作れ。[六八]乳木等の物及以び香花をば右邊に置き、護摩の器皿をば左邊に置き、諸事の眞言を用て、諸物等に灑げ。芽草の座に坐せよ。攝心靜慮にして[六九]閼伽を捧持し、明王を啓請して、閼伽水を傾けて、少しく爐中に灑ぎ、復た一花を以て、一眞言を誦じて眞言主に獻ぜよ。穢を除かんが爲めの故に、應さに計利吉里の眞言を誦じ、並に手印を作すべし。衞護の爲めの故に、軍荼利の眞言を以て、水を灑いで淨を作し、乳木を火に燃せよ。既に燒火し已らば、先づ火天を請せよ。我れ今火天の首を奉請す。天中の仙、梵行の宗敬なり。此の處に降臨して護摩を受納したまへ。次に請召火天の眞言を誦すること上に同じ、火天を召し已つて、[七〇]先づ閼伽水を以て、三度灑淨せよ。淨五穀蘇酪等の物を取つて、誦するに眞言を以てし、三遍護摩して火天を祈り奉る、眞言は上に同じ。火天に食を祀りなば、一心に標想し、火天を迎送して本座に置け。後に計利吉里の眞言を誦し、並に手印を作つて、復其の火を淨めよ。一切の護摩皆應さに是の如くすべし。次に本尊を請せよ。先づ本尊の眞言一遍を誦して、本座に安住せしめ、法に依つて供養せよ。願はくは尊、護摩の食を受くることを垂れたまへ。[七一]護摩する所の木は、謂く鉢邏輸木、[七二]烏曇摩羅木・鉢攞訖沙木・尼倶陀木・[七三]佉他囉木・[七四]閼伽木・吠宮訖那木・[七五]閼沒羅木・迦濕沒羅也木・[七六]閃弭木・阿簸麼哩迦木・閼説替那木なり。此の十二種の木は、枝を取る量の長さ兩指一折にせよ。皆濕潤にして新しく採り得

[六六] 椽を安け。是は土壇の時の事なり。
[六七] 法に依て之を作れ。息災・增益・降伏等の法に隨て爐を作ること。
[六八] 乳木等の物。護摩の支具を行者の左右に置く樣なり。
[六九] 閼伽を棒持。漱口なり。
[七〇] 先づ閼伽水を以て。漱口なり。
[七一] 護摩する所の木。護摩木の種類十二種を明す。
[七二] 烏曇摩囉木。願木と云ふ瑞應花なり。
[七三] 佉他羅木。紫檀(アカガシ)木。
[七四] 閼伽木。榅桲マルメルなり。
[七五] 閼沒囉木。唐李なり。
[七六] 閃弭。拘杞根なり。

の相を委ふし已つて滿足の法を作すべし。或は眞言を受持の者と異にして、或は加し或は減じ、字數不同なりと見ば、心に便ち疑ひを生ぜば、應さに法に依つて滿足の法を作すべし。先づ紙葉牛黃を以て、錯れる所の眞言を抄寫して、如法に明王の眞言を供養し、及び衞護し已つて、眞言主の座に置き、復た乳水を取ること並に本法に依れ、但し空蘇を用ゐよ。明王而も助を加へたまはんことを求むるが爲めの故なり。應さに護摩を作さんには茅草の鋪を布くべし。先づ部の尊主を禮し、次に部母を禮し、次に諸佛を禮して、是くの如くの啓を作すべし、唯願はくは諸佛及び諸の聖衆、助けを加へて衞護し玉へと。是の如く啓し已り、茅草の上に於て頭を東に面して臥せ、其の夢の中に於て、本尊相を示さん。牛黃を以て寫す所の紙葉の上に、加あり減あらん。本尊は還つて牛黃を以て、題注して字數滿足し玉はん。乃至加減の點畫も亦皆[六五]楷定せん。眞言錯らずば、但錯らずと云はん。或は夢中に於て指受して滿足し玉はん。此の法を作さん時、作法して衞護せよ。魔を除かんが爲めの故なり。

增力品第二十六

復次に謂く威力を增加せんと欲はば、應さに護摩を作すべし。或は蘇蜜を用ひ、或は時に乳を用ひ、各各別に作せ。或は油麻を用て、蘇に和して護摩せよ。或は膠香を用て蘇に和して護摩せよ。或は蓮華を用て蘇に和して護摩すべし。或時は窣娑閑囉娑を用ゐ、或は山間に於て、常に五淨を服して餘飡を食せず。本部の花を取り、十萬枚に滿ち、一一に眞言して、本尊に妙香の塗香、及び香・花・燃・燈・食等を奉獻せよ。各眞言を誦じて、百八遍を經、一日三時にして、三日を經よ。是の如く供養せば、威力を增加すべし。或は堅木を用て燃して以て燈と爲し、一日三時に七日を經ば、能く眞言をして威力を增加せしむ。或時には迦弭迦食を供養せよ、亦た威力を增さん。上に說く所

[六五] 楷定。楷は式法の義にして後世の則と成ること。

の悉地の眞言を受與せん時は、應さに軌則に依つて、如法に之を受くべし。先づ誦持の爲めの故に、弟子久しからずして、當に悉地を得べし。先づ眞言主の處に於て[六〇]啓請し陳表して此の眞言を授けよ。斯の弟子の與に願はくば加被を作し、速に悉地を賜へ、と。手に香花を捧げて、一百八遍、或は[六一]一千遍を誦し、便ち弟子を呼び來つて、之を授與せよ。[六二]復た是の言を作さく、我れ今の時に於て、本明主を廻らして、弟子に授與す、唯願はくは照知して、爲めに悉地を作したまへと。弟子も言すべし、我れ今の時に於て、已に明主を受けつ、誓つて今日より乃し菩提に至るまで、而も廢忘せじと。上の所說の如くして、師主が弟子をして眞言の法を受けしめば、當に成就を得べし。此を離れて受けんものは悉地を得ず。此の如くして悉地の眞言を受得せば、中に於て決定して成就せんこと疑なし。先悉地に由らば、先承事せざれ。眞言既に爾り、悉地藥の受法も亦然なり。或は復人あり、先承事し已つて、次に念持して法則に依つて、廻して人に授與すべし、所得する所の者は、先承事せざれども、但念持を作さんに、便ち成就することを得べし、眞言を受くることは、悉地の爲めの故なり。先づ師主の處に於て、[六三]廣く奉施を作すべし。花菓・諸根・名衣・上服・金・銀・摩尼・諸の雜寶物・種種の穀・麥・蘇蜜・乳酪・男女・童僕・種種の臥具・奇妙の革屣、嚴身の具、已成就の藥、象・馬・牛・犢、餘の乘等、乃し自身に至るまで、亦持して奉施し、僕と爲つて使はれ、久しく承事を經て、劬勞を憚からず、合掌虔誠し珍重して奉施すべし。是の如く施を行ずれば、速に悉地を得。廣く說くこと上の如し。種種の物は先づ須らく阿闍梨に奉施し已つて、然して後に眞言の妙句を受くべし。

滿足眞言品第二十五

復次に持誦の人、其の[六四]夢中に於て、眞言主の身の諸の支分（增）加せりと見ば、應さに知るべし眞言の字の（增）加せるなり。支分の減少せる若きは、應さに知るべし眞言の字の少たるなり。是

【六〇】啓請、陳表、表白と同じ、我が誠を陳表するの義。
【六一】一千遍。實は一千八十遍なり。
【六二】復是の言を作す云々。密敎の意は法曼荼羅即ち本尊の故に、種子眞言は即ち本尊なり。
【六三】廣く奉施云々。二十六種の施物なり。
【六四】其の夢中に於て。本尊相を示すこと。

し、[五六]七の膠香と及び五の堅香とを以て、一一の香等に一眞言を誦し、一護摩を作せ。數一千二百遍を滿ち已つて、祈る所の願は速に前相を見ん。祈請の軌則、若し法に依つて作さば、速に成就を得ん。其の相貌を見て疑ふことあらざるなり。

受眞言品第二十四

復次に廣く眞言を受くる法を說かん、雙膝を地に着け、先づ尊者阿闍梨の處に於て、廣く布施を作し、手に妙花を捧げて、慇重の心を發し、阿闍梨の處に於て三遍口づから受けよ。眞言多きは受誦することを得ず、應さに[五七]紙葉[五八]牛黃を用つて之を寫し、受取して隨意に之を誦すべし。[五九]先づ曼荼羅に入り已る後、餘時に於て眞言を受けば、良日時に於て、尊者、阿闍梨の處に於て、廣く奉施を作し、前の如く之を受けよ。是の如く正しくして眞言を受けなば速に成ぜん。縱ひ先に承事の法を作さずとも便卽ち持誦せんに、亦成就を得べし。復新しき瓶の諸の病を離れたるものを以て、諸の花葉・七寶・五穀を置て、一一に法の如くせよ。唯水を着けされ、至誠心を作して、廣く供養を作せ。阿闍梨先づ紙葉を取り、諸の眞言主の名を書寫して、瓶の中に置き、莊嚴し供養すること、灌頂の法の如くせよ。此の法を作す時は、或は一日を經、或は三日を經て、不食齋戒すべし。日暮の間に於て、則ち牛黃を以て諸の眞言・名號を抄して、瓶の中に置て獻ぜよ。塗香と花と香と燈とを以て、幷に本眞言を以て、護摩を作すこと百八遍し、廣く作動して聖衆諦に聽きたまへと求めよ。三日を經滿じて、其の弟子をして先づ淨く身體を洗浴し香馥ならしむ。手に吉祥芽草の指環を著け、眞言を以用て百八遍を誦して、其の瓶を眞言し、幷に香を以て薫じ、心を傾けて禮を作し、一葉を取り已つて、復重ねて頂禮せしめよ。是の如くして受くる者は、速に悉地を得ん。若し更に別に諸餘の眞言を誦せば、所受の眞言の悉地は退失しなん。若し弟子の處に於て、心に歡喜を生じて、自所持

【五六】七の膠香木の汁の香にして皮膠にあらず。

【五七】紙葉。一帖二枚等と言ふが如し。

【五八】牛黃。藥種なり。此の藥を以て眞言等を寫すこと多くこれあり。

【五九】先づ曼荼羅に入り。受明灌頂なり。

め一たび眞言しては一結し、當に結ぶこと七結すべし。復た眞言七遍し、隨つて左の肘の上に繫け、右脇にして臥し、眞言主を思念せよ。[五一]進止を得已つて、意に隨つて住し、茅座に安置せよ。上に花を敷散して、尊形を想念せよ。其の夢中に於て、自の部主を見、或は眞言主を見、或は明主を見ば當に知るべし、此の相は成就の相なり。或は三寶を見、或は諸の菩薩を見、或は四衆を見、或は供養を見るは、悉地の相なり。或は自身眞言を誦持して、諸の事（相）等を作すと見、或は身に白淨の衣服を着すと見、或は他（人）來つて恭敬し供養すと見るは、當に知るべし勝上の悉地纔に近づきぬ。或は山峯の上に登ると見、或は象に乘ると見、或は大河海を渡ると見、或は菓樹の上に昇ると見、或は師子に乘ずと見、或は牛・鹿・馬なぞの諸餘のものに乘り、或は飛鵝・孔雀一切の飛禽に乘り、[五二]或は美女の身に纓絡を被、手に花瓶を持し、或は香花蓋もて圍繞し行道すと見、或は象馬車乘なぞの諸の寶物等を受得すと見る、是等の相を見るは悉地の相なり。或は夢に花・菓根・牛蘇・乳酪・稻花等の物の所成就の藥を得るは悉地の相なり。先づ承事せん時には、夢に成就の藥を示し、及び數珠を得る、是の相を（見ることを）得る者は、當に知るべし。卽ち須らく持誦の法を作すべきを。或は自身を糞穢すと見、或は澡浴清淨なりと見、或は身に瓔珞を帶すと見る、是の相を見已らば、便ち持誦を作すべし、當に速に悉地すべし。持誦の法を作さんには、闍底花一百八枚を取つて、部母の眞言と本眞言とを兼ね用ひ、和して一百八遍を誦して、之を供養せよ。復た白栴檀香を取つて眞言百遍（を誦）せよ。是の如く祈請し意に隨つて臥せ。夢に本眞言主、自ら當に相を現ずべし。又[五三]烏施囉藥を取つて[五四]搗き和して眞言主の形像を作り、烏里弭迦と[五五]蟻の土とを和して其の器を作り、牛乳を滿ち盛り、像の乳の中に置け、或は蘇と乳と蜜とを用つて和して器の中に置き、像を中に置いて誦すること一八遍して、三時に供養せよ。是の如く供養すれば、本尊歡喜して速に相現することを得。復た白黑の二つの月の八日・十四日・十五日、或は日月蝕の日に於て食せず、持齊して廣く供養を作

【五一】進止を得云々。本尊の指南を蒙る義にして、此品に因て四十三の好相を說くなり。得進止とは本尊の指麾を得ることにして、卽ち夢中に敎示を蒙るなり。

【五二】或は美女の身等。總じて世間吉祥の相を見るは卽ち出世の好相なり。

【五三】烏施囉藥茅根香なり。

【五四】搗き和して。摩末すること。

【五五】蟻の土。蟻穴の邊に蟻の集むる所の土なり。

と菓と香と、五種の穀子と種種の塗香と、或は堅香の末とを置け。新しき綵帛を以て其の瓶の頸に繋け、諸の[四五]鞞樹の枝、或は乳樹の枝を挿み部の尊主の眞言を用ゐ、或は部母の眞言を用つて眞言すること百八遍して、然して後に其の眞言主の頂に灌げ、應さに金を用つて作り、或は沉檀を以て其の形を作り、座の上に置て之を灌頂すべし。灌頂既に了らば、復た當に花香等の物を獻供すべし或は諸の纓絡と種種の供具とを供養し、及び護摩を作し並に念誦を加へよ。是の如く作さん者は、能く本尊をして威力を增加せしめ、速に悉地を得ん。先承事の者、念誦を作さん時、應さに本尊に灌ぐべし。閼伽器を取らんにも[四六]本尊を標想して之を灌頂せよ。[四七]或は自ら浴し了らん時、復た應さに本眞言主を想念して、三度七度而も之を灌頂すべし。先承事の時、廢忘すべからず、或る時には乳を用ゐ、或る時には蘇を用ゐ、或る時には蜜を用ゐて、瓶の中に盛り滿ち內に七寶を置き、如法に執持して本尊の頂に灌げ、所祈の願は速に滿足することを得ん。

祈請品第二十三

復次に廣く祈請の法則を說かん。白黑の二つの月の八日・十四日・十五日、或は日月蝕の時に於て、[四八]一日食せず或は三日を經、或は七日を經、澡浴清淨にして新淨の衣を着せよ。此の晨日を離れて祈願せんには、應さに白月を用ゐ、扇底迦の眞言を誦して之を祈請すべし。後に幕間に於て諸の湯水を以てし、及び眞言を用つて澡浴清淨にして、諸の垢穢を除き、五處を灑霑せよ。如法に本眞言主を供養し、復た閼伽を獻じて、眞言一百八遍を加誦し、[四九]閼底花の未だ大に開かざるものを用つて栴檀香水を灑ぎ持つて之を奉獻せよ。又廣く食を獻ぜよ、烏那梨食と名く、食の中に酪を加ふべし忙攞底花を以て、鬘を作り供養せよ。先づ牛蘇を取つて、護摩を作すこと一百八遍せよ。次に[五〇]婆析羅娑を用つて護摩すること一百八遍、白氈の縷と或は布線の縷とを用つて、童女をして索を合さし

【四五】鞞樹。多羅樹のこと。

【四六】本尊を標想。意に観想して灌頂するなり。

【四七】或は自ら云々。行者の自身を澡浴するなり。

【四八】一日食せず。唯一心にして餘念を離れ、食をも念はざるなり。

【四九】閼底花。本土になし、或は白豆蔻ならんか。

【五〇】婆析羅娑とは白膠香ヌルデノ木のヤニなり。

多少を観じて、之を念誦して本尊に奉獻し、次に塗香及以び燒香の奇なる香氣の者を獻じ、復た飲食を獻ず。先に陳說せるが如く、加ふるに沙糖及び酪を以てせよ。復た護摩を作すに木を燒くこと一百八枚なり。木は[三九]量を過さざれ。次に乳酪を用つて蜜に和して護摩すること一百八遍せよ。次に蘇と酪とを用つて粳米の飯に和して、一百八遍して而も護摩を作せ。此の三たびの護摩は三七日、或は一七日、或は復た五日、或は復た三晨を經よ。此の三つ既に已らば應さに乳粥を取つて、和するに牛蘇を以てし、一百八遍して復た護摩を作すべし。此れ既に終了んなば[四〇]閼伽の器を取つて誦するに眞言を以てし、一百八遍を經、少水を傾け致して護摩を作せ。此等の法を作さば眞言威を增さん、謂く異の眞言をば其の威を截斷して、自ら增益を得ん。或は眞言を損益し、或は雜截せられて眞言行ぜざらん。或は眞言に繫縛せられ、或は異の眞言、遞相に交雜し、或は眞言の字缺け、或は眞言の字增す。上の如く等の患を盡く皆除去して威を增すことを得ん。諸の護摩の中に說く所の藥草は隨つて其の一を取り、一日夜を經て護摩を作せ。[四一]此等の（眞言）主は、歡喜して威を增すことを得ん。復た諸香を取り和して香泥に作し、本尊の形に作つて、忙攞底花を獻じ、樹膠香或は堅木香を燒いて、一日三時に眞言を以て、一百八遍を誦すれば、眞言主は歡喜して威を增すことを得ん。尊形を作つて荷葉の上、或は芭蕉の葉、或は乳樹の葉、或は諸草の葉に置くべし。直に晝日のみに非ず、夜も亦之を獻ぜよ。法事了らん時には、法の如く發遣して[四二]大河に送り置け、上記の次第の如く、此の法則に依つて作さば、本尊歡喜して速に悉地を賜ふべし。

[四三]本尊灌頂品第二十二

復た次に先づ承事すること了つて、若し眞言主をして威德を增加せんと欲ふが故に、應さに之を灌ぐべし。取るに金の瓶或は銀銅等、或は新しき瓦の瓶を以て、香水を盛り滿して[四四]五寶と花と葉

【三九】量を過ぎざれ。十二指量に過ぎず、又一百八の數量なり。

【四〇】閼伽器云々常の漱口香水なり三度之を漱ぐ初には嘘口、次は尊口次は供養後皆口に身意を兼ぬるなり。

【四一】眞言主とは本尊なり。

【四二】大河に送り云々。七日作壇等の破壇の後は、大河に流すなり。

【四三】本尊灌頂品。此の品は本尊の頂に灌で威光を增益ならしむるなり。

【四四】五寶。瓶中に入るるなり、花葉等は瓶の蓋となる。

佛部の五淨の眞言に曰く、娜謨皤伽嚩底、烏瑟膩沙野、弭秣𨁝、弭囉制始米、扇底迦囉、莎嚩訶

蓮華部の五淨の眞言。娜謨剌怛娜怛囉𨁝野、娜莫阿利野、嚩路枳諦濕嚩囉野、菩提薩埵野、摩訶薩埵野、摩訶迦嚕抳迦野、唵、野輸制、莎嚩訶。

金剛部の五淨の眞言。娜謨剌怛娜怛囉耶野、娜謨室戰拏跋日囉皤拏曳、摩訶薬𠳐灑栖那皤鉡曳、唵、始棄始棄、嚧摩黎鉢囉胜、鉢囉皤莎嚩梨、諦制諦饒嚩底、鉢囉皤嚩底、莎嚩訶。

黄牛の乳酪蘇糞尿を取つて、各別に眞言して百八遍を經、和して一處に置いて復た百八遍し、波羅捨の中に之を盛れ、或る諸の乳樹の葉、或は閼伽の器にせよ。復た茅草を以て攪て眞言を誦すること一百八遍を經て、後に面を東に向け蹲踞して坐し、頓に三合を服す。是の如く三度、藥の升合の如くせよ。之を服する時に當つて語を致すべからず。念誦の時、像聲語を現せば、先づ應さに簡擇すべし。卽ち部の尊主の眞言を誦し及び印せよ。若し是れ魔の作ならば自然に退かん。或は語言を出すこと、本法と異ならば、當に知るべし魔の作なりと。或は語言を出し、惡事を作せと勸めば、亦是れ魔の作なり。若し惡夢を見ば、卽ち須らく[三五]先づ部母の眞言を誦して一百八遍を經べし。若し先に部母の眞言を誦せずんば、念誦すべからず。若し念誦の時に其の數減少ならば休止すべからず若し增するは過なし。上の所說の念誦の次第の如く、皆須らく之に依るべし。若し此の法に異にして悉地を求めんと欲すとも得べからざるなり。

增威品第二十一

復次に今神威を增益し歡喜せしめて、所持の眞言を而も速に成就することを說かん。先づ香水を具へて[三六]身首を澡浴し、[三七]上の時日に於て諸の供養を加へよ。復た蘇摩那花[三八]一百八枚を取れ、一一の花を取つて眞言を誦すること二十一遍を經、或は七遍を經、或時は三遍せよ。先づ眞言の字數の

【三五】先づ部母云々。其の法の部母の呪なり。

【三六】身首。本尊の身首のこと。

【三七】上の時日とは上成就を爲し得る時日を指す本經中卷の分別悉地時分品第十二を見よ。

【三八】一百八枚天竺に於ては總じて物の數を一枚一枚等と云ふ。

の飲食を獻じ曼荼羅を塗り、及以び護摩し燃燈等の供並に須らく之を加ふべし。或は法の中に但持誦して自然に驗の見はるることを說くは、前に張る所の像・舍利塔等忽然として搖動し、或は光焰の出るは、當に知るべし久しからずして速に成就を得ん。[三二]成就を得ん時に何の相貌かある、謂はゆる身輕く病苦永く除き、勝慧を增益して心に畏る所なく、身に威光現はれ、勇健增益し、夜夢に常に清淨の實事を見、心恒に安泰ならん。誦念の時及び事業を作すに、疲倦を生ぜずして、身より奇香を出し、或は勇旅を行じ、尊の德を欽敬して、眞言主に於て深く敬仰を生ぜん。成就の時に如し上の事を現ぜば、當に知るべし卽ち是れ成就の相貌なりと。先づ承事了つて法則に依つて本尊を供養し、應さに獻供を加へ及以び護摩すべし。先づ承事の法、數に依つて旣に了つて、次に應さに須らく悉地の念誦を作すべし。復た先づ求願し其の夢中に於て警界を希ふべし、[三三]先の承事の法を作す時に、念誦せし所の處にして悉地の念誦を作すべし、處を移すべからず。諸の難事あつて移し去る者は、所住の處に至つて、復た須らく先づ承事の法則を作して、然して後に乃ち悉地の念誦を作すべし。若し前に依らずして念誦せぜ、應さに治罰を作すべし。部の尊主の眞言の取つて一千遍を誦せよ、或る時は本(誦)持の眞言を念誦して十萬遍を經よ。若し此を離れては、還つて前の說の如く、先づ承事を作すべし。正念誦の時に忽然に錯誤して餘の眞言を誦せば、旣に錯誤なりと知つて誠心を以て過を懺せよ。放逸に由るが故に斯の錯誤を致す。願はくは尊過を捨したまへ。と便ち頂禮を申べて、復た須らく始めより之を念誦すべし。忽ちに穢處に於て心放逸にして、故に本眞言を誦せば、便ち自ら覺り已つて[三四]應さに治罰を須ふべし。持誦の處に至つて、部の尊主の眞言を誦すること七遍せよ。半月半月に一日食せざれ。次に五淨を服せよ、五淨の眞言を誦すること百八遍を經て、然して後に之を服せよ。此の五淨を服するときは、半月の中に食する所の穢惡の食、當に清淨なることを得て、眞言力を增すべし。

【三二】成就を得る云々。以下法成就十三の相貌あり。

【三三】先の承事の法云々。修行者は必ず此文を憶念すべし。

【三四】應に治罰云々。自己を治罰する事。

を作り、曼荼羅を塗れ、先づ[二九]承事の眞言を誦ぜよ。既に了つて請祈未だ得ざれば、中に於て廢闕することを得ざれ。一時・二時・乃至[三〇]一嚮に應當に念誦すべし。間斷することを得ざれ。若し魔鄣著いて身心を病擾するときは、則ち精誠ならず、便ち常に放逸し身心疲勞し、時節に違し法則に依らず、或時に浴せずして持念誦し、及以び護摩を作したるは、[三一]數と作すべからず、心を攝して行を用ゐ法に依て念誦せよ。其れ此の數は應さに記して數とすべし。護摩を作さん時、念誦の時、請召の時、此の三事の中に有らゆる眞言の遍數を、一一皆須らく法に依つて數を滿つべし。縱ひ數滿せんと欲はんに、一を缺き未だ了らざるに、而も鄣起ることあらば、更に頭より數ふべし。若し法に依らずして作すときは皆成ぜず。若し法に依つて曼荼羅を作すことあらん時、或は日月蝕の時、此の二時に於ては法を加へて念誦せよ。其の福增高にして久しからず成就せんこと疑ひあることなし若しは八大靈塔に於てし、或は過去の諸佛の菩薩の行を行じたまひし處に於てせよ。最も勝上と爲す。或は正月十五日の時に於てするを亦勝時と爲す。或は師主の處に於て、眞言を受けんには、先づ承事を經て便ち當に念持すべし、久しからずして速に成ず。或は夢中に於て眞言の主、而も指授したまふと見ば、彼の法則に依て、亦速に成就せん。彼の念誦の人、供養をして增加すれば處所尊勝なり。或は當に時分に更に精誠を加へば、其の數未だ滿たざれども、唯此れ勝れる故に、眞言主悅で而して成就を賜ふべし。當さに知るべし、此の法は悉地速かなりと雖も、久しからずして當に壞すべし。是の義を以ての故に、先づ承事し了つて得る所のものを、說いて堅固と爲す。先づ承事せん時には、應さに廣く供養すべし。日月の蝕の時、八日・十四日・十五日に於て、復た加へて諸の神仙衆に獻供せんこと餘部に說けるが如し。前等の日に諸の善事業・齋戒等の事を加ふべし。是の日に復た加へて本明の眞言主を獻供すべし。瓶に香水を盛つて花枝を挿み垂れ、或は閼伽の器を取つて甘露軍荼利の眞言を用つて之を眞言し、自ら其の頂に灌いで能く魔鄣を除け、或は其の日に於て諸

【二九】承事の眞言。承事とは先持誦にして前行を謂ふ。
【三〇】一嚮。一向に間欠することなく眞言を念誦すべきこと。
【三一】數を作すべかなず。放逸にして作さば念誦の數に入ることなきこと。

に知るべし亦能く眞言を念誦すべきことを。若し是の如くせば諸明(王は)歡喜して法驗成し易し、持誦の人は瞋怒を生ぜざれ、慾樂を求めざれ、自ら下るべからず、伴をも勸めて勞苦せざれ、恐れを生ぜざれ、過ぎて勤求せざれ、輕慢を生ぜざれ、念誦の時異語を作さざれ、身疲極すると雖も之を縱放せざれ。[二六]諸の惡氣を制して、世間の談話皆思念せざれ、本尊を捨てざれ、縱ひ奇相を見るとも之を怪むべからず。念誦の時は、亦種種の相を分別せざれ、持誦し了らん時は、應さに部の尊主の眞言を誦すべし、或は部母の眞言を誦せよ。此の眞言を誦して當に衞護を得べし、部の法に違ふことなかれ、本法に依つて念誦し了已れ。或は本數に過ぐとも亦畏る所なかるべし。應さに誠心を起し祈請を作して云ふべし。我れ本法に依つて、念誦の數を滿す、唯願くは尊者、領受して證を爲し、其の夢中に於て爲めに教誨を授けたまへと。正念誦の時、若し謦欬昏沈欠呿して眞言の字を忘るること有らば、卽ち起つて水に就いて灑淨の法を作せ。縱ひ數珠を掐つて[二七]一を欠いて匝らさんと欲せんに、斯の病(なやみ)至ること有らば、灑淨し訖已つて還つて首めより念せよ。鄣隔せられなば、爲めに須らく一一に皆始めより心に念ずべし。數珠を掐つて將に畢らんとするの時には、禮を申べて一拜し終つて復始めよ。又一禮を畫像の前に申べよ。或は塔の前に於てし、或は座所に於てす。念誦の處に隨つて、數珠一匝して一たび尊顏を視て一禮を作せ。念誦し了已んなば、心を淨慮に安じ或は眞言及び其の尊主を想ふて、三時に念誦せよ。但し初中後誠心に遍數の多少を作意して、皆一類に例して增さず減さざれ。三時に澡浴し三時に地を塗り、花・香・水種種の供養を獻る、萎める花を除去し、應さに[二八]三衣を具すべし。又內衣をば一日三時に浣濯せよ。其の衣乾燥せば、香に薰じ灑淨せよ。一一の時の中に隨つて一を作すことを聽す。別に睡衣及以び浴衣を置け、此の二時に於て內衣を栫換し、日別に一たび洗へ。其の衣乾燥せば薰灌を以てするを聽す。尊に獻ずる鉢器は三時に洗滌せよ。既に萎花を除いては續いて新しきものを置け。三時に常に大乘般若等の經を讀み、及び制多

【二六】諸の惡氣を制して云々。下風欠伸の類なり。

【二七】一を欠いて云々。如上の障等の起ることあらば、文の如く、改めて初より之を誦すべし。

【二八】三衣を具すべし　法服なり、內衣と睡衣と浴衣とを三衣といふ。

べし。此の數に過ぐるは應さに十千遍已上を誦すべし。初め之を誦せん時は如上の數を滿し、其の部類を觀ずべし、或は上中下、或は三種の事、或は聖者の說か、爲天の所說か、爲地居天の說かと觀じて、細に部類を觀、當に之を誦持して乃し成就に至るべし。是の如く初めて誦せんに若し先づ誦して遍く念持を滿せざれば、所求の下法すらも尙成ずることを得ず、況んや上中の悉地成就を求むるをや、是の義を以ての故に勝上の心を作して先づ念誦すべし。但し諸の眞言を初て誦持せん時に、已に先の說の如く誦持の遍數を分ちて十分と爲し、然して後念誦すべし。旣に滿しなば[二一]眞言主に悉地の因緣を祈請せよ。初めに[二二]相貌なくは、復頭めより第二第三の祈請を作せ、若し相貌あらば卽ち當に法に依つて眞言を念誦すべし。若し[二三]警界なくば棄てて誦すべからず。祈請の法則は請召の法と同じ、祈請の時其の夢の中に於て、眞言主面を背いて去り、或は與に語らずと見ば、應當に更に須らく起首して念誦すべし、是の如く再三せよ。若し夢中に於て眞言主と與に語ると見ば、當に知るべし此の人は久しかずして成就せん。若し警界なくば誦持すべからず。若し强いて念持せば恐くは人に禍を與へん。初めて持誦せん時は、淨密の處に於て起首し、誦持して初日より誦持し乃し疲極に至るまで、遍數の多少一ら須らく定めに依るべし、加減すべからず。先づ三時の念誦の法を說かば、晝日の初分と後分と此の二時に於て應當に持誦すべし。中分の時は加ふるに澡浴を以てして諸の善業を造すべし。夜の三時に於けるも亦上に同じ、中分の間は消息の事あり、夜中の時に於て持誦せば、阿毗遮嚕迦の法・[二四]安怛駄嚢の法・起米多羅の法を作し、夜分に於て作すを、說いて勝上と爲す。若しくは晝は念誦し、夜は護摩を作せ。若しくは夜は持誦し、晝は護摩を作せ。多く諸藥を具へて念誦の前に而も護摩を作せ。持誦し了つて後に復た護摩を作すべし。若し能く是の如くするを最も其の上と爲す。前の如く先づ所說の團食を出して、護摩を作すべし。前後を問ふこと無く恒に此の法に依て念誦し護摩せよ。或は法の中に於て[二五]但護摩を作して成ずることを得るは、當

[二一] 眞言主とは本尊を指す。
[二二] 相貌とは効驗を意味す。
[二三] 警。或は境の字か。
[二四] 安怛駄嚢(antardhāna)は隱形の法なり。
[二五] 護摩を作す云々。護摩供養に合壇護摩と離壇護摩との二種ある中、今晝夜互に作すは離壇なり。護摩を作すとき必ず眞言を誦する故に但作護摩といふ。

右の手の大指を以て無名指の頭を捻ぜよ。直ぐ中指・小指を舒べて微し屈して、頭指を以て中指の上節の側りを抑す。左の手も亦然なり。

右の手に念珠を掐ることは、一切に通じて用ゐよ。若し阿毗遮嚕迦には、其の母指を竪て數珠を捻する印なり。菩提子の珠をば佛部に用ゐ、蓮華子の珠は觀音部に用ゐ、嚕挪囉叉子の珠は金剛部に用ふ。三部に各の此等の數珠を用ふるを最も勝上と爲す、一切の念誦に應當に執持すべし。或は木槵子、或は多囉樹子を用ゐ、或は土珠を用ゐ、或は螺珠を用ゐ、或は水精を用ゐ、或は眞珠を用ゐ、或は牙珠を用ゐ、或は赤珠或は諸の摩尼珠を用ゐ、或は咽珠或は餘の草の子を各々部に隨つて其の色類を觀て取て念持すべし。若し阿毗遮嚕迦の法を作すには、諸の骨を用ふべし。而も數珠に依つて速に成就を得、復た護持して法驗を增さんが爲めの故なり。

佛部の持珠の眞言。唵、那謨皤伽嚩底、悉睇睇、娑馱野、悉馱剌梯、莎嚩訶。

蓮華部の持珠の眞言。唵、素麼底室唎曳、鉢頭麼摩理抳、莎嚩訶。

金剛部の持珠の眞言。唵、跛日囉、爾且惹曳、莎嚩訶。

前の珠印を用て各々の部中に依て之を念誦せよ。念誦の時は珠を當心に置き、高下することを得ざれ、數珠を捧げん時は、微少く頭を低れて至誠の心を以て三寶を頂禮せよ。次に〔二〇〕八大菩薩を禮し、次に明王の眷屬を禮して、次に眞言を持誦すべし、眞言主を想ふことは目前に對するが如くすべし。是の如く誠を傾すべし。散亂して心に別境を緣ずべからず。但諸の眞言の初に唵字及び嚢塞迦噓の字あらば、應さに靜心の中に、扇底迦の念誦を作すべし。補瑟微迦の念誦には皆緩く誦すべし。或は心に念誦せよ、或は眞言ありて後に件抻吒の字あらば、當に知るべし皆應さに急の聲を桜作して、阿毗遮嚕迦の念誦、及び餘の忿怒の念誦を作すべし。三部の眞言は應さに字數の多少を看るべし。字が十五ならば、應さに十五落叉遍を誦すべし、字が三十二ならば、應さに三落叉を誦す

〔二〇〕八大菩薩八大菩薩曼荼羅經の中に在り。

懺悔す。諸佛の知り玉ふが如く、並に皆懺悔す。至誠の心を起して盡形までに、佛と法と僧寶と涅槃の正路とに歸命し上る。衆生の一切の苦を除かんが爲めの故に、三寶に歸命し上る。是の如く歸依し、頭頂を以て禮し已つて、歡喜踊躍して、菩提心を發し、勝上解脱の甘露悉地の佛果を求む。世間の衆生には無量の諸苦あり、我れ當に救度して惡趣を離れしめ、諸の煩惱を除き、解脱を得しむべし。所有の衆苦種種に覊迫す。今大悲を起し菩提心を發して、苦の衆生の爲めに、而も歸依と作り無主の衆生には爲めに歸主と作り、失路の衆生には爲めに導師と作り、恐怖の衆生には爲めに無畏を作し、苦惱の衆生には爲めに安樂を得しめん、衆生の煩惱をば我れ爲めに除滅せん。我れ過去以來より發す所の勝心を以て、諸の善業の六波羅蜜、一切の功德を修し、盡く皆一切衆生に廻施して正路に歸し、同じく妙果に昇り速に佛道を成ぜん。乃し菩提に至るまで懈怠を生ぜず、菩提心を發し衆生を悲念し大慈心を起さん。彼れ衆苦あり何れの時にか除滅せん。心を淨めんが爲めの故に、常に六念を持し、心一境に住して散亂せざれ、我を執すべからず。又過現の諸佛の願を發し玉ふが如く（我も亦）應さに發願の如く諸の淨業を生ずべし。願くは衆生と與に諸德を成就せん。復た過現所生の功德をば、願くは一切衆生に與へて無盡の財を獲しめん。復た能く捨施し智慧を増益して大忍辱を成し、常に善品を修して、宿命智を識り、心に大悲を懷かん、願くは諸の生類の所生の處に如上の事を具せんと。次に應さに合掌して本部の尊主を頂禮し[一九]明王を憶念すべし。次に法則に依つて諸の事業を作さば、先づ右の手を以て數珠を取り、左の手の中に置き合掌して之を捧げ、明王を思念し珠を數へて眞言を誦せよ。

佛部の淨珠の眞言。唵、遏部羝弭惹曳悉睇、悉馱剌梯、莎嚩訶。

蓮華部の淨珠の眞言。唵、阿密栗譎伽米、室唎曳、室唎靡重抳、莎嚩訶。

金剛部の淨珠の眞言。唵、枳攞枳攞、滂遂攞抳、莎嚩訶。

[一九] 明王を憶念。眞言を憶念すること。

護身結界及び餘の法を作し已つて、然して後に心を攝して安祥として念誦せよ。念誦の人の所坐の座には、青芽草を以て而も其の座を作れ。座の[一六]高さは四指、闊さは[一七]二磔手、長さは[一八]十六指なり。是の如くの座は、初めて念誦する時、及び持誦の時も、皆應さに受用すべし。或は迦勢草を用ゐ或は餘の青草等を用ゐ、或は部の法に隨つて、乳樹木を取るを寂も要妙と爲す。用つて床座に作れ量も亦上の如くして淨く剗治し、或は諸葉を用ゐよ。或は枝莖を以て、上の如く而も褻し、隨つて事法を觀じて、枝葉を取つて用つて座と爲せ。座の上に結跏趺坐して、扇底迦の上成就の法を作し半跏趺坐して補瑟徵迦の中成就の法を作し、兩足を垂れ坐して、阿毗遮嚕迦の下成就の法を作せ。供養既に了らば、應さに誠心を起して佛を讃歎し、次に法僧を歎じ、次に觀自在を歎じ、次に明王大威金剛を歎ずべし。迦他に曰く、大慈救世の尊は、善く一切衆を導き、福を以て功德海を持し玉ふ、我今稽首して禮し上る。眞如捨摩の法は、能く貪瞋の毒を淨め、善く諸の惡趣を除き玉ふ、我今稽首して禮し上る。得法解脱の僧は、善く諸の學地に住せる、勝上の福德田なり。我今稽首して禮し上る。大悲觀自在は、一切の佛讃歎し、能く種種の福を生じ玉ふ、我今稽首して禮し上る。大力忿怒の身は善哉持明の王として、難伏の者を降伏し給ふ、我今稽首して禮し上る。

是の虔誠を作して佛菩薩を讃し、又復掌を合せ慇重の心を起して、餘の諸の佛菩薩の相好の功德を讃ずべし。其の讃歎の文は、應さに諸佛菩薩の所說の歎偈を用ふべし。自ら讃歎(文)を作るべからず。既に已りなば至誠の心を起して諸罪を懺悔せよ。我今十方世界の諸佛世尊と、羅漢聖僧と及び諸の菩薩とを歸命し上る。我等を證知し玉ふべし。過去より今生に及ぶまで、煩惱に心を覆はれて、久しく生死を流られ、貪瞋癡に覆はれて諸の惡業を造れり。或は佛法と菩薩と聖僧と父母と尊處と一切衆生の有德と無德とに於て、如上の處に於て造る所の諸惡一切の罪業あらん。自作教他し、見作隨喜して、身口意業に廣く諸罪を聚む。今諸佛菩薩に對して、誠心を以て所造の衆罪を

[一六] 高さ四指指量に五分量と七分量との二說あり。
[一七] 二磔。佛の一磔は周の一尺、人の磔手は五寸なり。
[一八] 十六指。五分量に約せば八寸なり七分量に約せば一尺一寸二歩。

し、結界し、法を以て相ひ治するに眞言具はらずとも、力を增さんが爲めの故に、治罰の眞言たるが故に、覺を發さんが爲めの故に、及び餘の諸事に述べざる所は、亦當部の五の中の眞言を以て、隨つて其の一を取つて以て之を用ゐよ。當に悉地を得べき部心の眞言は、能く本尊を護し、及び己身を護す。護身の時には三遍或は復た七遍を誦すべし。其の頂髮を結して一髻に作れ。若し出家の人ならば、袈裟の角を結べ、或は線索を結んで持繫して身を護れ。或は頭指を眞言して、遍く五處に點ぜよ。亦護身を成す、謂はゆる頂と額と兩の膊と咽の下と心の上となり。或は牛黃、或は白芥子、或は閼伽水を以て、隨て其の一を取り、而も用つて護身せよ。若し阿毗遮嚕迦の法を作さば、應さに部の尊主の眞言を用つて自身を護すべし。若し扇底迦の法を作さば、應さに忿怒金剛の眞言を用つて之を護すべし。若し補瑟徵迦の法を作さば、應さに部の尊主の眞言、及び忿怒金剛の眞言を用つて、兼ねて之を護すべし。若し眞言主現ぜん時、持誦の人怖れなば、應さに部の尊主の眞言を用ゐて用つて自身を護すべし。但諸事を作さん時には、常に二の眞言を以て自身を護せよ。謂く部の尊主及び忿怒の眞言なり。念誦了らん時には應當の發遣すべし。發遣の時には彼の[一五]眞言主を護し、或は部の尊主の眞言、或は部母を用ゐよ。或は部心を以て、亦自身を護して而して作すこと意に隨ふべし。若し穢處不淨等の處に於けるも、事に緣つて須らく往くべし。先づ烏樞澁摩の眞言を誦して、印を作し五處を印持して意に任せて往け。仍て須らく常に眞言を誦して癡忘することを得ざるべし。澡浴の時には先づ伏鄣の眞言を誦して護身し、乃至浴し了るまでに、應さに廢忘すべからず。伏鄣の眞言とは忿怒甘露軍茶利なり。食を喫はん時には、部の尊主の眞言を用つて、護身し念持せよ。臥さんと欲はん時には、部母の眞言を用つて護身せよ。若し諸の法を作さんに、遂に乃ち護持の法則を作すことを忘れなば、魔をして興らしめん。魔を除かんと欲ふが故に、速に應さに當部の明王の眞言を誦持して、自身を將護すべし。一切の魔鄣は其の便りを得ず。上の如く備さに

【一五】眞言主本尊なり。

金剛橛の眞言。唵、跋日囉枳羅、虎𤙖抪。

忿怒吉利枳羅の眞言。唵、枳里枳里、跋日囉、虎抪𤙖。

忿怒甘露軍荼利の眞言。那謨剌娜娜怛囉耶野、那謨跋日羅矩嚕馱野、摩訶嚩擺跛邏訖囉摩野、薩嚩弭起娜毗那舍囊耶、唵、虎嚕虎嚕、底瑟侘底瑟侘、畔馱畔馱、訶娜訶娜、阿密栗羝、虎𤙖抪。

若し本法の中に是の如き等の金剛墻の眞言有らむ、重ねて之を結すべし。諸事既に了つて、次に持誦すべし、之を持誦せん時には、先づ當部母の眞言を誦せよ。

佛部の母の眞言。唵、嚕嚕塞普嚕、入嚩擺、底瑟侘、悉馱路者泥、薩嚩剌詑娑馱額、莎嚩訶。

蓮華部の母の眞言。唵、迦制弭迦制、迦憓迦制、迦縿弭迦縿、迦憓迦制、嶓迦嚩底弭惹曳、莎嚩訶。

金剛の母の眞言。娜謨露迦馱室利曳、那莫商迦鉩扇底迦鉩、緆縿緆縿、緆置抳、迦鞞野緆置抳、莎嚩訶。

先づ此の母の眞言を誦して能く本尊を衞れば、能く衆罪を蠲き諸の災鄣を除いて、悉地の門と而も相應することを得ん。但佛部の忙麽鷄の眞言を誦ずれば亦二部に通ず。初夜に持誦せば諸天衞を增す。若し本法に於て而も已に說かば、持誦の時に先づ此を念ずれば、本法に隨つて之を念誦すべし。或は本法に於て獨勝の眞言あらば亦先づ誦すべし。槃別することなくば上の所說の供養の次第の如し。乃至除穢し、護淨し、結界せよ。一切等の事に、初に持誦せん時、及び作法せん時、扇底迦等の所作の事の時に、皆之を作すべし。若しは[一四]本部の尊主の眞言を以てし、或は本部の心眞言を以てし、或は一切の眞言王の眞言を以てし、或は蘇悉地の法王の眞言を以てし、或は一切の事の眞言を以てせよ。此の五種の眞言は三部に遍くあり、隨つて諸事を作さんには、各の本部に於て、應さに其の一を取て用て之を作すべし。謂はゆる自護し、及び同伴を護し、請召し、灑水し、潔淨

【一四】本部の尊主部主なり。

て座を淨めんが爲めの故に、香水を眞言し灑いで座を潔うせよ。又誦すること七遍して地の方界に灑げ、能く諸穢を除いて清淨なることを得べし。

吉利枳羅の眞言。唵、枳里枳里、跋日羅、跋日里部訥、畔馱畔馱、虎鈝柿。

〔一三〕此の上の眞言を以て、地と方とを護し訖つて、虚空界を結するには、應さに次の下の蘇悉地の眞言に同じかるべし。燒香を執持して、當に眞言を誦して空中に薰馥して、諸の穢惡を除けば、清淨なることを得べし。

蘇悉地の眞言。唵、素悉地迦履、入嚩里䫂、娜娜慕訥䫂曳、入嚩囉入嚩囉、畔馱畔馱、歌娜歌娜虎鈝柿。

此の金剛部の蘇悉地の眞言は、遍く諸事に通じて空界を結するに用ゐよ。

佛部の結空界の眞言。唵、入嚩擺、虎鈝。

此の佛部の空界を結する眞言は唯當部のみに通ず。

蓮華部の空界を結する眞言。唵、鉢頭弭儞、皤伽嚩底、慕歌野慕歌野、惹蘖慕歌䫂、莎嚩訶。

此の蓮華部の空界を結する眞言は、唯當部のみに通ず。次に當に部心の眞言を用つて、香水を眞言して諸方に散灑すべし。復た明王の根本の眞言、或は心眞言、或は眞言主の使者の心眞言を以て、隨つて其の一を取り用て方界を結せよ。或は此の諸の心眞言を以て結界を作せ。所結の處には垣墻を置くが如くせよ。當部の仙天常に當に護衞して能く鄣を作ること無るべし。若し諸部の事に法を爲すことあらば、甘露軍荼利の法に依つて之を遣除すべし。又五種の護衞の法則あり、常に道場の室內に於て之を作せ、謂く金剛墻と、金剛城と、金剛橛と、忿怒吉利枳羅と忿怒軍荼利となり。

部母の金剛墻の眞言。唵、縒囉縒囉、跋日囉、跛囉迦囉、虎鈝柿。

金剛城の眞言。唵、弭塞普囉、捺囉訖麗、跋日囉半惹囉、虎鈝柿。

〔一三〕此の上の云々　地結の印言を以て四方結に通用するなり。

に準ぜよ。若し塗香・燒香・花及び飲食の獻ず可きもの無くば、但本色の眞言を通じ及び此の手印を以て之を獻ぜよ。表して云へ、供物の求め得べきことなし、但眞心を納れたまへと、後に閼伽を作すべし。眞心を以ての故に、速に其の願を滿たさせたまふ。此れを離れて外に四の供養あり、遍く諸部に通じて一切處に用ゐよ。一には謂く合掌、二には閼伽を以てし、三には眞言及び慕捺羅を用つてし、四には但運心なり。此の善品の中に隨つて作すべし。或は復た長時の供養の中には、寂も運心に過ぎたるはなし。世尊の說きたまふが如く、諸の法行の中には、心を其の首と爲す。若し能く心を標して供養する者は、一切の願を滿つ。若し諸餘の事を成就せば、應當に諸の障を爲すものを發遣すべし。若し遣除せずんば後に傷れの及ばんことを恐る。所以に先づ須らく遣除の法を作すべし。忿怒の眞言を誦し、或は當部の成就諸事の眞言を用つて、鄣を遣除し已つて、先づ次に應さに本部尊の眞言を誦して水を眞言して、遍く請して護摩し及び手印を倫うすべし。

佛部の請火天の眞言。唵、阿起娜曳、蘓寫合寫、嚩歌曩野、莎嚩訶。

此の眞言を誦すること、三遍して火天を請召し、食を燒いて供養せよ。

護摩の眞言。唵、阿起娜曳、蘓寫合寫、嚩歌曩野、揖比揖比儞跛野、莎嚩訶。

次に牛蘇を持し、此の眞言を以て、一たび眞言して一たび燒け、三遍を滿ちて火天に供養せよ。

金剛部の忿怒金剛の眞言。唵、枳里枳里、跛日羅、矩嚕駄、鉡沛。

此の眞言を以て、一たび食を眞言し、一たび火食を燒き作法して、地中にして諸の鄣を作すものを除遣せよ。又此の眞言を用ゐ、或は部尊を用つて遍く花等に灑げ、復吉利枳羅忿怒の眞言幷に印を用ゐよ。當に眞言を誦して[三]左の手に印を作して、遍く印し塗香・燒香・飲食・花等を作淨して穢を除くべし、自ら身を淨むるが爲めの故に、應さに右の手を以て香水を掬持して、目に香水を觀て心眞言を誦じ、自身の頂に灑いで、作淨し除穢すべし。復た一切の事の眞言幷に忿怒の眞言を用つ

【三】左の手に云々。右の手には物を取るが故に左に印を作すなり。

せよ。或は餘の時に於て諸の花菓を得て、本尊の意に稱つて須らく奉請すべし、然して之を獻ずべし。之を請ずるの時に當ては手の爪指を合せ、本方に隨つて但誠心を至して奉請すべし。或は兩手を以て諸の閼伽の器を捧げて、之を請召して、然して後に所得の物を敷獻せよ。若し上中下の事、及び扇底迦等を成就せんと欲せば、皆須らく加するに眞言及び慕捺羅を以てして、請召を作すべし。諸餘の事等を成就することを作さんに、或は障り起ることあらん、或は魔興つて燒し、或は者を病しめ苦を加さん。爾の時に當つて事緣既に速かならば、當に閼伽の器を辨ずることを待つべからず、便卽ち〔二〕用心して本尊を啓請し除遣の法を作せ、上の所說の如く大小に隨つて成就を擬欲せば、閼伽を以て之を請せよ。急難等の事あらば、誠心に之を請すべし。若し復人あつて諸部の尊を歸仰することを得んと欲はば、應當に常に召請の法則を作すべし、持誦の人速に成就を得ん。

供養品第二十

復次に尊を奉請し已りなば、次に部類或は諸の事業を作して、其の大小を觀じ、法則に依つて之を供養せよ。既に奉請し已んなば、是の如くの言を作せ。善來尊者、我等を愍れむが故に、道場に降臨したまふ。復哀愍を垂れて、當に此の座に就て坐して微獻の供を受けたまふべし。復誠心を起して頻りに與に禮を作して、而も尊に白して言さく、大悲愍れみを垂れて本願を成ずるが故に、而も見に降臨したまふ。我が所能として本尊を啓請するに。是の如く三時に皆應さに此れに依るべし。前に已に說くが如く、應さに須らく供を辦ずべし。先づ塗香を獻じ、次に花等を施し、復燒香を獻じ、次に飲食を獻じ、次に乃し燈を燃せ、其の次第の如く忿怒王の眞言を用ゐよ。此等の供物悉く清淨にして、善く人の心を悅ばしむ、各本色の眞言を用つて、而も之を眞言せよ。塗香を獻じ已つて各の其の名を列ねよ。如は前の說に依つて卽ち閼伽を奉れ、是の如く花香及び飲食等、皆亦此れ

〔二〕用心。觀念なり。

き時、此の眞言主の部主の所に至て請して云く、今某甲有つて某の事の爲めに奉請すと。若し發遣の時にも、亦復是の如し。所作の事已りなば、願くは尊、證知して意に隨ひて去り玉へと。明王妃の眞言は女仙等を請するに用ひ、明王の眞言は諸の眞言主を請すべし。或は眞言主の明王の眞言の所請を受けざることあらん。要ず明王及び明王妃の眞言を以て、然も依り請すべし、別部に說くが如し、閼伽を置く時には、應さに眞言を誦すべし。大は一遍し、中は三遍し、下は七遍せよ。極小は二十一遍せよ。上の所說の閼伽の法則の如し。先づ兩の膝を地に着けて、應さに須らく手に淨き茅草の環を着け、閼伽を捧げ持ち燒香に之を薰ずべし、是の如くして請を作すべし、仰ぎ願らくば唯尊者、本願を以ての故に道場に降赴し、哀愍を垂れて此の閼伽及び微獻の供を受けたまへ。眞言主あり、名けて獨勝奇加忿怒と曰ふ。諸餘の眞言の召請を受けずんば、彼の所說の眞言を用ふれば、然も所請に降りたまふ。彼の諸の眷屬も、亦餘の眞言の請を受けずんば、亦彼の眷屬の眞言を用ゐて、之を請召すべし。但請召に緣らば心眞言を用ゐよ、或は根本或は明王妃の所說の眞言を說いて、而も用つて請召せよ。部心の眞言は遍く三部に通ず、彼れを用つて請召せよ。當に降赴せしむべきには翳醯の字を加へよ。此れは更に秘密なり。速に其の願を滿つ、之を請する時に當り、誠心に禮を作し、再三して啓白せよ。大慈悲者、本願に依つて道場に來降したまへと請ふ。若し誠心にあらずば、多の念誦を徒にせん。乃至眞言も亦皆慇重にせよ。[七]兩の手を用て閼伽の器を捧げ、頂戴して供養するを上悉地と爲し、心の間に置くを中の悉地と爲し、臍の間に置くを下の悉地と爲す。[八]先つ本尊の畫像を觀よ、其の像若し立たば持誦の人も亦應さに立ちて請すべし。畫像若し坐せば亦坐じて請すべし。又彼の像を觀んには躬を曲げ立てる勢にすれば、亦應さに之に斅びて之を奉請すべし。當に之を請すべき時には、先づ本尊の所止の方を觀じて、而も彼れに面して請し、然して便ち[九]身を廻らして、閼伽の器を尊像の前に置け。復秘觀[一〇]あり、作す所の扇底迦等の諸餘の方所にて而も之を請召

【七】 兩手を以て云々。平等性智の定に入て閼伽香水を捧ぐるなり。
【八】 本尊の畫像。行者本尊の威儀の如くして之を召請す、又本尊所在の方角に向て之を請すべきなり。
【九】 身を廻して云々。若し行者東方に向はゞ、觀音を請ずる時は身を廻して西方に向て之を請ずるなり。
【一〇】 復た祕觀あり雙足を浴すこと。兩足は定慧福智なり。

奉請品第十九

復次に若し本尊の室に入らんと欲はゞ、先づ尊の顔を覩て、十指の爪を合せ、當に少しき頭を低るべし。復器を以て淨水を盛つて、所作の事に隨つて本の獻花を置き、復は塗香を置き、本法に依つて而も閼伽を作らんには、香を燒き之を薫じて眞言を誦ずべし。閼伽を眞言すること七遍して、則ち當に奉請し已つて法に依つて供養すべし。[五]閼伽を盛る器には、當に金銀を用ゐ、或は熟銅を用ふべし。或は石を以て作り、或は土木を以てし、或は螺を取つて作り、或は束底を用てし、或は荷葉を用ゐて以て綴りて器を作るべし。或は乳樹の葉をもつてす、如上所說の閼伽の器等は、用ふるの時に當つて、須らく次第を知るべし。若し扇底迦には當に白器を用ふべし、補瑟徵迦には當に黃器を用ふべし。阿毗遮嚕迦には當に黑器を用ふべし。上中下の悉地成就を作すにも、前の所說に類して應さに之を用ふべし。扇底迦を作すには、所用の閼伽に少しく小麥を置け、補瑟徵迦には胡麻を着くべし、阿毗遮嚕迦には、當に粟米を置くべし。又扇底迦には乳を置き補瑟徵迦には酪を置き、阿毗遮嚕迦には應さに牛尿を置くべし。或は自の血の着けよ、遍ねく通用せんには、應さに稻花と塗香と及び花と胡麻と[六]茅草環とを着くべし。熟銅の器を用つて盛るに閼伽を以てせよ。若し此の器なくば所得のものに隨つて亦遍く通用せよ。請召の時には應さに當部の明王の眞言、及び慕捺囉を用ふべし。若し本法にして已の請召の眞言を說くことあらば、應當に取つて用ふべし、別の者を取ること無れ。先づ當部の尊を請し、次に明王の妃を請せよ。三部の中にも皆應さに是の如くすべし。本法に若し請召の眞言なくば、應さに明王等の眞言を用つて之を請召すべし。本法に請召の眞言を說くと雖も、眞言是れ下ならば豈に部主を請す合けんや。若し本法の眞言を以て請召せば當に速に成就すべし、難かることを生ずべからず。本法に若し請召の眞言及び發遣あらば、當に之を請すべ

【五】閼伽を盛る云々。總じて供養の器物の通稱なり。

【六】茅草環。茅草は如來之を布て成道せしを以て吉祥草とも名く、清淨の物なれば之を用ふ、茅草環に三蟠と一蟠との兩說あり。

下の分に能く大果を成ずるを。謂く辟支佛の位を成滿せしめ、謂く菩薩の十地を成滿せしめ、乃至成佛を大果報と爲す。復大德行を成ず、謂く多くの諸の眷屬前後に圍遶す、是の如くの願を滿ずる者を大德行と爲す。復能く久しく位に住す。謂く王處と、轉輪王處と、長壽仙處とを得。是の如くの願を滿ずる者を久住位と爲す。形儀廣大にして威光遠く照し、教修廣大にして此の四德を具する者は、是れ下品の眞言なりと雖も、能く上品を成す。若し上品の中に此の德を具せざれば、是れ上品の眞言なりと雖も下品の用なり。諸佛・菩薩の所說の眞言は是の如くの轉次あり。佛・菩薩の所說の者は、下品に屬すと雖も、亦能く上品等の事を成就す。或は尊等の所說の眞言の中に、唯一事を具すとは、謂く扇底迦の法と、補瑟徵迦の法と、阿毘遮嚕迦の法となり。一事を具すと雖も中に於て各上中下品あり。豈に下品の眞言能く上事を成ずることあらんや。猶し青泥の妙蓮華を出すが如し、固に疑ひなきなり。豈に上品の慈善の眞言、能く忿怒の下品の成就を成ずることあらんやといはば、白檀木の其の性清凉なれども、若し風擊ち相楷すれば、自然に火起すが如し、因緣なきに非ざるなり。是の如く差互して次第にあらずと雖も、諸餘の悉地皆疑慮すること勿れ。身分の悉地を上品の成就と爲し、諸藥の悉地を中品の成就と爲し、富饒の悉地を下品の成就と爲す。若し復人あつて久しく下品の眞言を持誦する時は、縱ひ自ら力なくとも、本尊の邊に於て、上品を轉求せんに上品自ら成ず。若し上品の眞言の中に於て、心に猶豫を懷いて念持し供養し、復精誠ならずんば、上品の眞言に於てすと雖も、彼の念誦の心輕きに由つて、敢て下品の成就を招く。故に知んぬ。持誦は皆心意に由ることを。[三]且く諸天の中にも亦[四]貧者あり、諸の鬼部の內にも亦富强あるが如し。此れ彼れ然るが如く、眞言も亦爾なり。一一の眞言に皆三の悉地を具す、謂く上中下なり、誠心の念誦は皆悉地を獲べし。

【三】且らく諸天云々。諸天とは五類諸天にして、卽ち上方天（世界）住空天（欲界第三天以上）遊空天（日、月星）地居天（欲界地上より三十三天に至る）地底天（焔摩天諸龍等）なり。

【四】貧者。人界に降て棗を盜む等。

卷の下

分別成就品第十八

我れ今復三部の悉地成就を說かん。空に乘じて自在にして進む、此れを最上と爲す。形を藏し跡を隱すを、中成就と爲し、世間の諸事を下成就と爲す。此の三種の上中下乘の世間の事等の三種の成就を成すを、上中下に隨つて更に之を分別せよ。三部の上成就の法は、持明仙を得、空に乘じて遊往し、五通を成就す、又多種あり、或は[一]諸漏斷盡を得、或は辟支佛地を得、或は菩薩の位地を證し、或は一切の事を知解し、或は辯才多聞、或は[二]吠跢羅尸を成じ、或は藥叉尼を成じ、或は眞陀摩尼を得、或は無盡の伏藏を得、上等の事を具するを、上が中の上成就の法と名く。三部の中成就の法は、跡を藏し身に於て大勢力を得、先來は懈怠なりしに、而も精勤することを得。修羅宮に入り、長壽の藥を得て、鉢隷史迦天の使と成り、或は能く鬼を使ひ、能く娑羅埿爾迦の樹の神を成就し、或は多聞を成じて、未だ所聞を經ずして、深き義理を悟り、或は藥を合せ成して、纔かに足と頂とに塗れば、卽ち遠き所に涉れども、疲乏あることなし、如上の所說は、悉く中の上成就の法と名く。三部の下成就の法は、衆をして喜見せしめ、或は衆人を攝伏し、或は能く惡人を懲罰し、諸の怨衆を降し、及び餘の下事を、下が中の下成就の法と名く。若し藥物等を成就せんと欲はば、三種の成あり。光焰を上と爲し、烟氣を中と爲し、煴煖を下と爲す。復次に聖者の眞言を上成就と成し、諸天の所說を中成就と爲し、世天の眞言を下成就と爲す。復次に佛部の眞言を上悉地と爲し、蓮華部の眞言を中悉地と爲し、金剛部の眞言を下悉地と爲す。若し上の眞言を以て下成就を欲求せんと欲はゞ下の成就を得ん。或は下の眞言を以て、上を祈求せば上成就を得ん。或は中の眞言を以て上下を成ぜんとせば、亦等しく成就す。眞言の中に此の四德を具す。當に知るべし卽ち悉く上中

[一] 諸漏斷盡云々。羅漢を指す。

[二] 吠哆羅。(vetāla) 此には尸と云ふ、卽ち死屍なり。

（他身の像に）着けなば、遍身皆痛まん。瞋を以て鞭打し、及び花を以て打つて、前の二の眞言を用ゐ、其の瞋心を以て供養を作せ、譬へば鬼魅を治罰するが如く、本尊を治罰する法も亦是の如し、斯の如くの法は敎に依て作し、自ら專らにすることを得ざれ。若し尊來現して其の成就を與へ、本願を滿し已んなば、則ち前の事を止めて、扇底迦の法を作せ、或は毒藥を自己の身血と胡麻の油と鹽と赤芥子とを以て總て相和し、竟夜護摩すべし。本尊時に慞惶して唱へて言く、止ね爲すこと莫れ、卽ち成就を與へんと、かくの如く作法すること、三日を經已つて、亦復來つて成就を與へずんば、又勇猛を加へ、無畏の心を以て、便ち己が肉を割いて、護摩すること三遍せよ。本尊卽ち來つて、彼の歡喜を乞はゞ、心に求むる所の願卽ち成就を與へん。若し闕する過あらば、一一に而も說かん。假使五無間を犯すとも、九夜を經て肉を割き護摩せんに、決定して來つて其の成就を與へん。此れは是れ眞言と鬪諍するの法なり。無畏の心を以て、如法に護身して方に而も作すべし。必ず空しく過さじ、成就を得已んなば、卽ち應さに速に扇底迦の法を作すべし。若し愆過を說かば、卽ち須らく補闕すべし。諸の成就の事の中に於て、此の曼荼羅を最と爲す。中に於て三種の事を作し、三種の果を得。中に於て應さに一切の諸事、及以び護摩を作し、本尊を治罰すること、鬼魅を治するが如くすべし。每時の供養皆新物を用ゐよ、護摩の物も亦復是の如し。此の法は放逸にすべからず、澡浴清淨にして、法の如く護身し、輕慢すべからず。明かに藏經を解して、方に此の法を以て、本尊を治罰せよ。若し此れに違するものは、卽ち自損せしめん。

を布き、及び一百八の香爐に、諸の名香を燒いて、亦其の處に置け、內院の一面は、其の量を七肘にし、外院の一面は三肘にせよ。餘は是れ中央なり。所有の啓請及び供養等は、皆悉く前の如くせよ。護摩の法に准せよ。次に當に別說すべし。中に於て本眞言を以て羯羅舍瓶を置き、其の瓶の四面にして護摩の法を作せ。其の內院の東面に於て、遍く佛部の諸尊を置き、其の北面に遍く蓮華部中の諸尊を置き、其の南面に於て金剛部中の諸尊を置き、西面に於て嚕達囉神、及び多聞天王と、各の眷屬とを置け。前の所說の使者等の尊、內院に若し容受せずば、當に外院に置くべし。其の護方の神は、諸の眷屬と與に各の本方の位に置け。其の三部の主、及び嚕達囉、多聞天王とは、先づ本處に置け。次に復各の明王と、明妃と、辨事の眞言主等と、幷に諸の使者とを置け、次第に安置せよ。外門の前に於て軍荼利尊を置き、及び無能勝尊を置け。是の如く法に依つて曼荼羅を作し、成し已らば本部の心を用つて啓請を作し、次第に供養せよ。卽ち四方に於て念誦を作し、然して後に其の瓶の四面に置く所の爐には、各彼の部の中に依つて護摩の法を作せ。是を增益の諸尊の護摩と名く。其の供養の食には那羅を用つて獻ぜよ、此の法を作し已らば、一切の諸尊便ち增益を成ぜん。是の如く念誦し護摩し已つて、更に部母の眞言を以て蘇を護摩せよ。次に本尊の眞言を以て、乳の粥に蘇を和して護摩を作せ、更に部母の眞言を以て、胡麻を三甜に和して護摩を作せ、又部母の眞言を以て、蘇を用ゐて護摩せよ。此の法を作し已らば、一切の尊卽便ち充足することを得、及び增益を成じて、圓滿具足し、悉く皆歡喜して速に成就を與ふべし。若し此の曼荼羅を作さんこと、乃至七度せんに決定して成就すべし。前の如く念誦し及び八塔を巡ること、乃至七遍して、此の曼荼羅を作さんに、若し成ぜずんば、卽ち阿毘遮嚕迦の法を以て本尊を苦治し、蠟を以て其の形像を作り、其の眞言を取つて、而も之を念誦せよ。先づ部母及び明王の眞言を誦して、中間に本尊の眞言を置き、阿毘遮嚕迦の法を以て護摩し、芥子の油を以て、其の形像に塗つて、便ち壯熱を着けよ。若し他を伏せんに

と、江河と、潬渚とに住すべし。遊戯を以の故に、應さに其の處に住すべし。彼に於て便ち前の如くの勝境あらば、或は先成の仙衆と共に住すべし。

成就具支法品第十七

我れ今復具足して悉地を作す法を說かん。其の物成ぜずんば、法の如く禁住し護持し藏し棄てて、前の如く更に先念誦の法を作し、乃至還て成就の法を作せ。是の如く作し已つて、若し成ぜずんば、重ねて精進を加へ、又更に念誦して成就の法を作せ。是の如く七遍を經滿して猶ほ成ぜずんば、當に此の法を作さんに決定して成就すべし。謂はゆる乞食し精勤し念誦し、大恭敬を發して、八の聖跡を巡つて禮拜し行道し、或は復大般若經を轉讀すること七遍し、或は一百遍し、或は勝物を持して僧伽に奉施し、或は海に入る海邊に於て、或は海島に於て、應さに一の窣覩波を作ること數一百に滿ち、一一の窣覩波の前に於て、如法を念誦し、一千遍を滿し、最後の第一百の塔、若し光を放たば當に知るべし作法決定して成就すと。復一千の窣覩波を作り、一一の前に於て千遍を念誦せば、假使無間の罪を造るも、其の數滿じ已んなば、作法を須ひざるも、自然に成就せん。又一切の眞言念誦すること一俱胝せば、決定して成就す。若し時念誦を作さん者は、十二年を經ば、縱ひ重罪あるも亦皆成就せん。假使法は具足せざるも、皆成就を得べし。又念誦の遍數及び時滿ち已んなば、卽ち當に增益の護摩を作すべし。或は復此の成辦諸事の曼荼羅を作し、中に於て而も四種の護摩を作すべし。或は山の頂に於てし、或は牛群の先より所住の處に於てし、或は恒河の渚にして、其の他を平治して、曼荼羅の量の百八肘なるを作るべし。一百八の瓶を置き、其の四門に於て柱を立てて門と爲せ、各門の前に於て寶臺を建立して、種種に莊嚴し、以て名花・枝條を作り、鬘を作つて其の門の柱及び角の幢の上に繫け、遍く其の處を圍し、蘇を以て燈を燃して、一百八に滿し、曼荼羅

中と下との成就も此に准じて應さに知るべし。深く慚愧を生じて恭敬供養し及び財物を施せ。所得の進止は其の處分に依れ、是の如くの事を以て物の價を歸還せよ。物成就し已んなば、先づ閼伽を獻じて、如法に分與せよ。本眞言を誦し及び手印を作し、心を以て本尊を觀念し、及び明王明妃の眞言を誦し、乃至觀念して然して後に其の物を受用すべし。意に隨つて空に昇り、衆仙の所に至らんに、彼能く懷し及以び輕蔑することなし。縱ひ怨敵あるも亦能く損することなけん。彼の成就者は、常に本尊を念じて廢忘すべからず。其の成就物をば、常に須らく心に念じ、或は眼を以て視るべし。明王の眞言法を持するが爲めの故に、諸仙を恭敬し、明妃を持するが故に、諸の怖畏なし。三摩耶の印を作し、及び部の印を作し、及び眼を以て物を視ること皆廢すべからず。仙と與に相見ん時は、應さに先づ起ちて敬ひて問訊して言ふべし。善來安樂なりや、復何より至るやと、彼若し所問あらば、善言を以て答ふべし。空を遊行せん時は、神廟の上に於て過ぐべからず。及び獨一の樹と、並に四衢道と、諸仙の居處、及以び城墩と、祭祀の壇と、婆羅門の集會の處と、邪法仙衆の所居の處とをも、亦過ぐべからず。增上慢の故に、彼等を經て過ぎなば、必ず當に墮落すべし、放逸なるが故に、而も墮落せん時は、即ち應さに明王の眞言を持誦し、及以び思惟すべし。若し已に墮落し及び墮せんと欲はん時にも、便ち本位の虛空を得ん。無形色と雖も天眼を以て道を見ん。譬へば成者の心を起せば、即ち至るが如く、亦定に在るに動ぜずして、即ち至るが如し。是の故に彼の先成就の路に遊べば、福力を以ての故に、自然の衣服隨意の宮殿あり。花林・園觀・種種の諸鳥天女の遊戲・歌舞・伎樂・種種の欲樂熾然の光明を用ふること、猶し劫初の如意寶樹の能く諸願を滿つるが如し。居止の爲めの故に、寶石座と爲り、下に渠水流れ、軟草地に布き、種種の瓔珞・嚴身・娛樂の具あり。諸の吉祥樹に甘露の菓あり、乃至意樂し憶念する處に隨つて、皆其の前に現ず。縱ひ是の如くし已るも、常に須らく護身すべし、廢忘すべからず。應さに清淨の園林と及び諸の山頂と、幷に海の洲島

用し、一分をば比丘・比丘尼・鄔波索迦・鄔波斯迦等に奉施すべし。諸有らゆる未物の法皆是の如くせよ、先づ閼伽を以て尊等に奉獻して後に本分を取れ、其の先成就の者の分をば、閼迦を以て供養して、其の價値を倍して、自ら取つて受用せよ。其の價直とは供養是れなり。其の阿闍梨若し在らざる時は、其の分をば價直を還し歸りて自ら受用せよ。其の價直とは心に慚愧を生ずる卽ち是れ價直なり。曼荼羅の外に出で、先成就の者に奉らん時は、應さに是の言を作すべし。諸の先成の者は、本分を受取して、手に閼伽を取れ。第二第三も應さに是の如く唱ふべし。若し取る者なくば、卽ち當に加持を同伴の人に與ふべし、疑慮を懷くこと勿れ。彼等虔誠の心を以ての故に、供養するを以ての故に、堅く戒を持するが故に、行人に侍ふが故に、卽ち是れ先成の人なり。是の故に其の分を彼等應さに受くべし、三たび之を唱ふる時、彼の同伴の者の應さに是の如く報ずべし。我等は卽ち是れ成就の者なりと。行人自ら其の物を分つて同伴等に與へよ。其の物若少にして分つべからざる者は、卽ち安善那及び牛黃等は分つべからざるなり。應當に心を以て其の分量を作して自ら受用すべし。是の如き物唯一人用ひて分つべからざるものあり、輪刀等是れなり。其の本法の所説の成就に隨つて、應さに是くの如く作すべし。其の檀像等も亦分つべからず。本法の中の成就の物に於て、其の量縱ひ少くとも任（意）に本量に加して、成就を作して同伴等に與へよ。或は先成の人の物の量に依て成就を作せ。縱ひ其の半に減ずるも、亦成就を得べし。或は本法の所説の分量に於ては、皆須らく依行すべし。行人物を分つて同伴に與へん時は、應さに處分して言ふべし。汝等我に隨つて種種に驅使せりと。彼然も諸して已後に當に之を與ふべし。或は若し一身に成就して餘人を利益せば、此の藏敎或は餘法の中に依ること並に皆通じて許す。分ちて同伴等に與へん時は、其の功勞に隨つて節限して物を分ちて偏儻すべからず。物成就して已んなば、先づ應さに本尊に供養して、深く慚愧を生じ慇懃に再び請すべし、然して後に分つべし。一切の諸部の法も皆是の如し。

す時、眞言の中に於て其の殺の句を置くべし、若し物を將て來らば、卽ち其の法を止めよ。從つて歡喜を乞へ、彼若し已に其の物を用ゐ、餘物を將て替ふるも、亦た其の事を止めよ。或は已に其の物を用ゐ、復た物の替ふることなきも、且來つて悔謝せば、亦事の事を止めて、彼に歡喜を施せ。彼或は損失し及び分つて他に與へ、殘れる所に隨つて持ち來つて還すことあらば、亦其の事を止めて、彼に歡喜を施せ。應當に金剛徵那羅を眞言を以て、護摩を作すべし。或は大怒を用つてし、或は不淨忿怒を用つて護摩を作し、或は當部の所說の却追失物の眞言に於て、護摩を作せ、然も此の三種の眞言は三部に通ずる眞言なり。

唵、阿趁娜曳、蘇寫合寫、嚩歌曩野、莎嚩訶。

火天を請じ已つて團食を持し、一たび明し一たび燒して三團食を滿て、火天を供養せよ。

又護摩の眞言。唵、阿趁娜宅、蘇寫合寫、嚩歌曩野、揖比揖比個跛野、莎嚩訶。

又蘇を持して一たび明し、一たび燒して、亦三遍を滿て、火天に供養せよ。

金剛部の瞋怒金剛の眞言。唵、枳里枳里、跋日羅矩嚕馱、吽柿。

此の眞言を以て一たび明し、一たび燒して、火食の作法せよ。成就護摩法の眞言。

那謨刺怛娜怛羅耶野、那謨室戰拏跋日羅幡拏曳、摩訶藥乾漽栖那幡彈曳、唵、歌囉歌囉跋日羅、麼詫麼跋跋日羅、度曩度曩跋日羅、歌曩歌曩跋日羅、馱歌馱歌跋日曜、幡者幡者跋日曜、娜囉娜囉跋日曜、娜囉耶娜囉耶跋日曜、弭娜囉耶弭娜囉耶跋日曜、瞋娜瞋娜跋日曜、頻娜頻娜跋日曜、虎吽柿。

此の眞言を誦して護摩の法を作さば、速に成就を得。若し其の物を得、或は替りの物を得ば、卽ち其の物を護し、兼て及び護身し、當に節日に於て、次第に而も光顯等の法を作すべし。其の中成就の物も、下成就の物も、皆一分を以て世尊に奉施し、一分をば阿闍梨の處に奉施し、一分をば先成就の者に奉施し、一分をば同伴等の人に奉施し、一分をば自ら取つて兩分に作して、一分をば自

置き、各各次第に法の如くし、內院の東面には、金剛佛頂等の諸餘の佛頂と、佛毫と、佛眼と、佛鑠底と、佛牙と、佛慈と、及び無能勝等の自餘の明王と、及び能辦諸事の眞言等と、諸餘の眞言と、及び諸の使者とを安置せよ。其の東面に於ては、各各次第に法の如く安置せよ。近門の兩邊及び門外の者も、亦復前の如く法に依て安置せよ。其の外院に於て、八方神を置け、西門の南邊には、梵天王及與び眷屬を置け、西門の北邊には摩醯首羅と、及び妃后と那鉢底等の諸の眷屬と倶なると、及び七忙怛羅母と、及び八龍王と、幷に諸の眷屬と阿修羅王と諸の眷屬と、歸依佛者の大威德神とを置き、其の外院に於て、各各法の如く次第に安置し、誠を至し啓請して、次第に供養せよ。外の西面に於ては、護摩の爐を置き、蠟を以て其の物を盜める者の形を作つて、簸箕の中に置て、阿毗遮嚕迦の法に依つて、啓請し祭祀して供養し護摩せよ。次に刀を以て其の形を割て護摩を作せ。或は本部の所說の阿毗遮嚕迦の法に依り、彼に依つて作せ。或は本尊自ら盜み及び成を與へ玉はざるも、亦是の如く作せ。黑月の五日より十四日に至る來(このか)たの中間に、作法するを說いて勝吉と爲す。其の形をば復た杖を以て鞕ち、及び火を以て燃き、種種の猛法を以て打棓し、末但那の刺を以て金剛橛の法に依つて、用つて身分を刺せ。黑芥子の油を以て鹽に和して、遍く其の身に塗つて、意に從つて苦楚せしめて、之を害することを致し、復た屍に蓋ひし衣を以て其の形を覆ひ、赤線を以て纏ひ、赤色の花を獻じて、自の眼を持誦し、目を怒らして之を視よ。眞言の中に於て訶責の句を置いて、每日に之を打つべし。若し物を將て來らば、卽ち當に休止すべし。中夜に應さに是の猛利の法を作すべし。俱徵那羅木を用つて、黑芥子の油を塗つて護摩を作せ、又毒藥及び己身の血と芥子の油と鹽と及び黑芥子とを以て、總じて與に相和して、盜物者の名を稱して護摩を作し、八百遍を經よ、或は但己身の血を用つて、鹽に和して護摩を作せ。是の如く苦持せんに、若し物を還さずんば卽ち更に死に至る、猛法を作すべし。阿毗遮嚕迦の法の中に於て、說く所の殺法なり。遍く其の法を作

を置き、左に商羯羅を置き、右に微惹耶を置き、右の門に迦利を置き、左の門に難陀目佉を置き、左に金剛軍を置き、右に蘇摩呼を置き、及び諸餘の大忿怒等を置くべし。成就の爲めの故に次第に安置し、法の如く啓請して、赤色の花及び赤き食等を以て、次第に供養せよ。前の所說の阿毗遮嚕迦の法の如く、此に於て應さに作すべし。門の外に置く所の本尊には、應さに美妙の花等を以て、如法に供養すべし。其の外院に於て八方神を置き、及び本部の諸餘の使者等の尊を置いて、亦須らく是の如く供養すべし。其の中央に於て護摩の法を作せ、其の爐は三角にして、一一に前の如く、七枚の織き佉地羅を以てし、己身の血を以て塗て用つて護摩し、或は苦練木を用ゐ、或は屍を燒ける殘りの柴を用ゐて用つて護摩せよ、火著き已る後に、屍を燒ける灰を以て、己身の血に和して用つて護摩し、及び毒藥と己身の血と芥子の油と及び赤芥子との四種を以て、相和して用つて護摩せよ。復此の四種の物を取つて、物を偷める者の形に作り、其の上に坐せしめ、左の手を以て片片に割折して護摩を作せ。若し能く瞋を伏する者、及び法を明むるものあらば、應さに此の法を作すべし。其の偷物者憧惶恐怖し賫持して、行者に親付せば、便ち應さに彼に無畏を施すべし。時に彼が與に扇底迦の法を作せ、若し作さずんば彼便ち命終しなん。部は將らん所の物に、更に復加添して、密に尊の前に置け、又成就物をして盜して日久しからんとするを、若し追つて取らんと欲はば、卽ち應さに此の三部に通ずる成辦諸事の曼荼羅を作るべし。四方にして作れ、中央に蘇悉地羯羅明王の印を安置し、內院の南面に金剛忿怒と、大忿と、忙莽雞と、金剛鉤と、金剛食と、金剛拳と、金剛火と、金剛母特伽羅と、金剛怖畏と、金剛商羯鏁と、計利吉羅と、慧金剛と、金剛無能勝とを置き、及び諸の大忿怒、及び諸の使者と、諸の大威德の眞言主等を置き、其の南面に於て、次第に安置せよ。內院の北面に能滿諸願と、觀自在の、馬頭明王と多面多手と、能現多形と、耶輸末底と、大吉祥と、落乞澁弭と、濕吠多と、半拏羅嚩悉額と、跢囉と、戰捺囉と、末囉と、所有の眞言と、及び明と、諸使者等とを

便即ち受用して亦其の願を果せ。或は若し初夜ならば或は即便ち禁住して但念誦のみを作し、其の本時に至つて方に受用すべし。其の中成就も此に准じて應さに知んぬべし。其の初夜に於ては下の悉地を成し、其の中夜に於ては中成就を獲、明相の動ずる時に於ては上成就を獲ん。其の中成就を中夜に成ずる者は、如法に禁じ已んぬれば、縦ひ明曉に至つて受用するも亦得。其の下成就は此に准じて應さに知るべし。各本時に於てすることを、其の助成の者、若し受用せざれば亦吉と爲さず、其の物縦ひ成ずとも即ち受用せず、又禁住せず、其の平曉に至つても、亦受用せざれば、其の物猶し萎める花の若く、亦は穢食の如くして用ふるに堪ふる所なからん。念誦するを以ての故に、眞言を啓請して、其の物の中に入れよ。時既に過ぎ已りなば其の驗亦失す。又成就物初の相現ずと雖も、然も成就せずんば、當時に若し其の相を禁じて、以後に還つて光顯等の法を作し、及び諸の節日に、供養し灌頂せば便ち成就を作さん。三年を經るに、若し成ぜずんば、當に知るべし、此の物は成ずることを得べからずと。上成就の法は、三年に至るを限りとし、若し中成就は第六月に至り、若し下成就は其の時を限らず、成就の法を損するも、亦た復た是の如し。

被偸成物却徵法第十六

我れ今當に被偸の物を却徵する法を說くべし。其の物成し已り、或は成就を作すの時にも、其の物偸まれ、物を偸まれる時、或は其の形を見、或は但物を失ふて偸者を見ざらん時に、日宿を擇ばず亦斷食せずとも、瞋怒を發起して現前に速に應さに此の曼荼羅の法を作すべし。屍を燒ける灰を用つて、三角に作り、唯西門を開き、外門の前に於て、其の本尊を置き、內院の東の角には、蘇悉地羯羅明王を置き、右に金剛忿怒を置き、左に大忿怒を置き、右に金剛拳を置き、左に金剛鉤を置き、右に金剛計利吉羅を置き、左に毗摩を置き、右に勢吒を置き、左に賓棄羅を置き、右に阿設寧

り。或は日の盡きんとするが如くなるは、應さに知るべし即ち是れ火天の難なることを。其の南方に於て是の難現ずることあらん、謂く死屍の形にして甚だ怖畏すべく、高聲に叫喚し、手に大刀を執つて皆悉く鼻を劓り、手に髑髏を執つて人の血を盛つて飲み、頭上に火燃るは、應さに知るべし、即ち是れ焔摩の難なることを。西南方に於て是の難現ずることあん、謂く其の屎を雨らして曼荼羅を穢し、及び種種の形、甚だ怖畏すべきは、應さに知るべし、即ち是れ泥哩羝の難なることを。其の西方に於て是の難現ずることあらん、謂く雨・雷電・霹靂・雹等せば、應さに知るべし即ち是れ龍王の難なることを。西北方に於て是の難現ずることあらん、謂く大黑風起ることあるは、應さに知るべし、即ち是れ風神の難なることを。其の北方に於て是の難現ずることあらん、謂く大藥叉及び女藥叉、行者を惱亂せん、應さに知るべし、即ち是れ多聞天王の難なることを。東北方に於て是の難現ずることあらん。謂く象頭・猪頭・狗頭異形にして、各火山を持せば、應さに知るべし、即ち是れ伊舍那の難なることを。其の上方に於て諸天現じて大威德を具することあるは、應さに知るべし、即ち是れ上方天の難なることを。下方の天の難は地動き及び裂く、應さに知るべし即ち是れ阿修羅の難なることを。上成就を作すに方に斯の難を現ず。是の如く等の難は、中夜に於て現ぜん。凡そ上成就の難の相は還て大なり、中下の成就は此に准じて應さに知んぬべし。夜の三時に於て、是れ其の上中下の相あり。時と相應せば即ち是れ成就なり。時と相應せざるは即ち成就にあらず。其の三種の相は謂く煖氣と烟と光となり。是の如く三の相は、應さに次第に現ずべし。若し上成就には即ち三の相を具し、若し中成就には、前の二の相を具し、若し下成就には唯初の相のみを現ず。或は若し持誦すること虔誠にして、初夜の時に於て三相次第に現ぜば、即ち部母の明を以て其の光を禁住し、或は明王の心を以て、其の相を禁住し、及以び牛黃を持誦して塗り灑ぎ、或は手に以て按じ、或は蘇を用つて灑ぎ、或は以て花を散じ、或は白芥子を散じ、或は但水を灑ぎ其の相を禁住すべし。

は、逢ふ所の瓶に隨つて、皆右に遶りて過ぎよ。到り已つて諸尊を頂禮し、及以び遍く觀じて、各各に本眞言を以て閼伽を奉れ。或は部心の眞言を以て奉獻せよ。所請の眞言主をば、當に明王の眞言を以て請召すべし。所請の明王をば、當に明妃を以て請召すべし。已に本印を視及び本眞言明等を誦し、或は但都て一印を視、其の眞言及び明を誦せよ。若し是の如く作さば、速に悉地を得ん。其の成就の物をば、閼伽の器の中に置くことあり、或は瓶の上に置き、或は手の內に掬合し、或は但心念し、或は嚩囉弭迦の器に置き、或は葉の上に置き、近く內の本尊の前に置くべし。所成の諸器をば、皆牛黃を以て之を塗る。次に白芥子を用つて護を作せ、次に摩辣底花を持誦して、其の物を供養せよ。牛黃を以て塗るが故に、便ち禁住を成し、其の芥子を用つてすれば、便ち作護を成し、花を以て供養すれば、便ち光顯を成ず。此の三種の法は次第に應さに作すべし。廢闕することを得され。本尊の前に於て成就物を置け、中に於て餘物間隔することを得ざれ。成就物をば、兩種の法を用ゐ、以て成就を爲せ。一には謂く手印、二には白芥子なり。成就物をして速に驗あらしむる故に、數々閼伽・花香等の具、及び酪を獻じ、數々供養すべし。其の助成就の人、其の物を護るが故に、常に其の處に在りて、是の如く供養物を安置し已つて、然して後手を以て之を按じ、或は眼を以て觀よ。其の不散の心を以て、徐徐として持誦し、中間に數々其の物を光顯ならしめよ。是の如く相續し、竟夜持誦して、間斷せしむること勿れ。其の夜の三時に閼伽等を以て次第に供養すべし。若し須らく外に出でて口を漱がんには助成の人をして、替へて物の前に坐し、續次して念誦せしむべし。其の持誦の人廢忘する所あらば、其の所助の人皆須く補闕すべし。持誦の時、若し大難至らば、助成の人は應さに其の難を拒ぐべし。如し禁ずること能はずんば、行者自ら白芥子を散じて以て其の難を辟け、助成の人は、其の物を持誦すべし。時に東方にして是の難現ずることあらん、謂く大に雨雷せば、應さに知るべし。帝釋の難なることを。東南方に於て是の難現ずることあらん、謂く火色の大人な

子を散し、及び花鬘を擲てよ。器仗を以て擬り及び之を撃たん時には、本處を移動することを得ざれ。若し本處を移さば彼當に便を得べし。是の故に應さに須らく本處を動ぜざるべし。本藏の中に於て有らゆる護身の印、難摧伏の者をば、持誦し供養し己身の邊に置くべし。若し極大猛害の難來ることあらば、應さに自ら彼の諸印を用ゐて以て之を擲打すべし。或は先より來た持誦して功あらん眞言を以て、白芥子を誦して、難者を散撃せんに、必ら玆に止まされば、即ち應さに外に出で、好飲食を以て、加以て豐多にして、如法に彼の諸の難衆を祭祀すべし。一切の護法に總て九種あり。謂く辟除諸難と、結地界と、結虚空界と、結曼荼羅界と、結方界所と、結金剛墻と、結金剛鈎欄と、護物と、護身となり。以て諸難を除く、成就を作さん時は、斯の如き等の法皆須らく憶念すべし。或は若し前の護方の人を辨ぜずんば、應當に其の當方の器仗を置くべし。此も亦辨ぜずんば、諸の方所に於て、那羅遮の器仗を置け。或は弓をば張り箭を揣けて、諸の方所に置け、或は成就の人を助けん與めに、明かに藏法を解き、智方便あり、持誦に功ありて、戒行清潔なるを、門の中に立て在いて、諸事を助辨し諸難を辟除せよ。乃至內院をも外院にも、彼皆應さに助くべし。所有の一切の諸事は、暮門に至りて皆須らく辨足すべし。日纔に沒し已んなば、即ち起首して成就の法を作すべし。中間に困(つか)れん時は、曼荼羅の外に出で、水を含んで口を漱ぎ、軍茶利の眞言を以て、持誦の水を用つて、三掬を含むべし。或は本尊の心眞言を以て、少許の牛蘇を持誦して用つて之を飲せよ。有らゆる疲極當に除愈することを得べし。復蜜を以て蓽撥に和し、佛部母の明を用て持誦して以て其の眼に塗れば、昏沈難起るも即便ち除愈せん。先づ誠心を以て面を東に向けて立ち、諸尊を觀察して歸命し啓請すべし。其の三種の吉祥の瑞應に於ける、中に於て隨つて好相を得ば、歡喜の心を以て成就を作せ。先瑞を見るに隨つて成就せんこと亦爾り、是の故に行者應さに先瑞を觀ずべし。先づ當に須臾に蘇悉地羯羅明王を觀察すべし。次には則ち右遶して諸事の瓶を辨ぜよ。曼荼羅に入らん時に

る香花と燈と種種の飲食とを以て、持誦し光顯にして、然して後に供養せよ。念誦に於て及び曼荼羅の所說に於て供養する如く、此も亦是の如く作すべし。若しは淨室の中に於て、作すことも亦復是の如くせよ。是の曼荼羅王の種種の供養は、應さに四倍を加ふべし。此れは是れ秘密の法なり。供養し畢已なば、次に應さに外に於て法の如く祭祀すべし。蘇を以て燈を燃し、其の炷は鮮淨にせよ。本尊に供養せん一一の物は、皆須らく閼伽を奉獻すべし。若し是の如く作法せば、本尊速に驗あることを得しめん。明王の眞言を用つて、白芥子を持誦し、或は能辨諸事の眞言を用ゐ、或は先より持する功あらん眞言を用つて、持誦して近く成就物の邊りに置き、用つて諸難を置けんに、便卽ち退散す。又本印主の印を用つて左邊に置き、或は但大刀を持誦して左邊に置き、其の八方の所に於て各丈夫を置け。初め東方に於て、其の人帝釋の裝束を作して、手に拔折羅を執れ。形色一ら帝釋の如くす。南方に於ては其の人燄摩の裝束を作し、手に但拏棓を執れ。西方に於ては其の人龍王の裝束を作し、手に羂索を執れ。北方に於ては其の人毘沙門の裝束を作し、手に伽陀棓を執れ。東北方に於ては、其人伊舍那の裝束を作して、手に三股叉を執れ。東南方に於ては、其の人、火神の裝束を作し、狀仙人の如くして、手に軍持及び數珠を執れ。西南方に於ては、其の人羅刹王の裝束を作し、手に刀を執り横へよ。西北方に於ては、其の人風神の裝束を作し、手に幢旗を執れ。帝釋は白色、燄摩は黑色、龍王は紅色、毘沙門は金色、伊舍那は白黄色、火神は火色、羅刹王は淺黑雲の色、風神は青色なり。其の所著の衣も、皆亦是の如し。其の人は皆須らく戒を受け極めて清淨ならしむべし。大膽勇ありて善く護身の法を作し、形色端正に盛年肥壯にして、所執の器仗も、皆須らく持誦すべし。頸と兩肩とに於ては花鬘を交絡せり。白芥子を備へて、善く難の相を知れ。若し難の至ることあらば、卽ち白芥子を散じて、用つて之を打ち、或は花鬘を擲て、或は難、衆多にして大怖畏を現ぜば、當に所執の器仗を以て遙に之を擬るべし。彼若し相逼らば器仗を以て擊ちなば、白芥

よ。然して後啓請して如法に供養し護摩し念誦し起首し成就せよ。其の啓請する所の諸尊には、應さに明王の眞言を用ふべし。或は部母の明を用つて、曼荼羅所有の諸尊を請ぜよ。各爲に瓶を置くことは、前の曼荼羅所有の諸法の如く、此の成就の法も亦皆是の如し。若し此等の曼荼羅の中に於て、成就を作さん者は、縱ひ護身の法を具足せずとも、亦悉地を得てん。彼の諸尊に自ら其の誓あるが爲めなり。若し我等を請じて曼荼羅に赴かしめんには、虔誠の心を以て法の如く供養すべし。我等當に彼れに所求の願を與ふべしと。是の故に此に於て應さに難なくして、必ず加護を爲すことを知んぬべし。若しは部心の眞言及び以部母を用ゐ、或は明妃と能辨諸事の眞言と、幷に部內の護身の眞言とを用つて、而も用つて啓請し、身と諸の界とを護らば、速に成就を得べし。此れは是れ三部の秘密の法なり。復次に三部に通ずる秘密曼荼羅を說かん。法の如く界道の拔折羅を置き、中央には本部主の印を置き、其の前に本眞言主を置け。或は前の如く羯羅詩の瓶を置け、其の物をば器等の中に盛りて、其の瓶の上に置け。內院の東面には如來の印を置き、北面には觀自在の印を置き南面に金剛印を置け、西面の右邊には嚕達羅を置き、左邊には多聞天王を置け。前の所說の明王の曼荼羅の如く此も亦是の如く次第に安置せよ。右邊には部母の明を置き、左邊には辨事の明を置け。蓮華と金剛との二部の左右も亦爾り。西面の右には嚩(宜喬反)唎を置き、左には落乞澁彌を置け。東西の兩の角には[七七]鉢及び支伐羅を置け。北面の兩の角には、但拏棓及び軍持瓶を置け。南面の兩の角には、拔折羅及び母特伽羅を置け。西面の兩の角には[七八]輸羅及び寶瓶を置け。外門の前に於ても、別に處所に立置して無能勝を置くべし。東面の門の前には訶利帝母を置き、南面の門の前には句吒祇唎迦を置き、北面の門の前には翳迦契吒を置き、其の外院に於て、意に隨つて遍く諸印を置て、法の如く啓請し供養せよ。此れは是れ秘密の都曼荼羅なり。中に於て作す所の成就の諸物は、皆悉地を得べし。頂行すら此に於ては尙ほ便りを得ず。何に況んや諸餘の毗那夜迦をや。諸の美な

【七七】但拏(daṇḍa)棓寶棒のこと。
【七八】輸羅。此に叉といふ。

面の一所に於て日天子を置き、宿と與に圍繞せよ。[七六]西門の曲の兩邊に於て、難陀跋陀龍王を置け、佛部の中に於ける所有の使者等の類の眞言及び明をば、其の外院の四面に於て、意に隨つて安置せよ。然して後に法に依つて啓請して、次第に供養し護摩し念誦せよ。最中央に於て、其の本尊或は成就物を安くべし。曼荼羅の法に於て說く所の護身等の事の如し。此れ亦是の如く次第に應さに行ずべし。此れは是れ佛部の成就諸物の曼荼羅の法なり。一切の諸難は、能く便を得ること無し、中に於て作法せば、速に成就を得ん。一切の諸尊衞護を增加し玉ふ。前の如く五の彩色を以て曼荼羅を作るべし。唯圓を改めて作れ。其の內院の東面の處中に於ては蓮華印を置け。右に七多羅明を置き、左に七吉祥明を置き、次の左右に六大明王を置け、右に半拏羅嚩悉顊を置き、左に耶輸末底を置け。近門の兩邊には一髻明妃及び馬頭明王を置け。外門の前に於て、能辦諸事の瓶を置け。門及び角に於て、拔折羅を置き、中に蓮華を置け。其の外院に於て、梵天と、及び因陀羅と、摩醯首羅等と、淨居の諸天、及び無垢行菩薩と光鬘菩薩と、莊嚴菩薩と、無邊龍王と、難陀、及び優波難陀龍王とを置け。及び商佉持明仙王と諸持明仙と倶なり。前の諸方の護世の如し。此の部の中に於て、所有の使者の諸類の眞言、及び明をば意に隨つて安置せよ。前の所說の安置の次第の如く、此も亦是の如くすべし。一切の諸難能く便を得ることなく、應當に此の中に、成就の法を作さんには、前の如く方に作すべし。先の界道の如く、內院の東面に於て、蘇悉地羯羅を置け。右に忝金剛明妃を置き、左に金剛拳明妃を置け。右に遜婆明王を置き、左に計唎枳里明王を置け。右に拔折羅尊を置き、左に拔折羅但吒を置け、右に金剛母特迦羅鎚を置き、左に金剛商羯羅を置け。右に金剛鉤明妃を置き、左に忙莽計明妃を置け。其の外院の東邊に於て、勝慧使者・金剛慧使者・摩醯首羅及び妃、多聞天王及び諸の藥叉を、其の外門の前に於て、能辦諸事の瓶を置け。金剛部の中に於て、有らゆる使者の眞言及び明・部多・毗舍遮・乾闥婆・摩喉羅伽及び持明仙・八方護世をば、各外院に於て次第に安置せ

【七六】西門の曲　曲は門の脇の引込たる所。

の曼荼羅は、或は[七一]乾末を用つて彩色し、或は種種の香末を用つてし、或は濕色を以てするに、牛毛の筆を用つて畫け、諸角の外に於ては、三股杵を畫け、其の諸の界道は、遍く三股杵の形を作り、還つて[七二]金剛墻の眞言を用つて持誦せよ。復其の界の杵形の中に於て、更に復一の杵を横へ置け、遍く應さに是の如くすべし。側をば金剛鉤欄と名く、還つて金剛鉤欄の眞言を用つて持誦せよ。是の如く作し已らば能く壞するものあることなし。是の故に中に於て成就の法を作せば、諸門の中及び門外に於いて、各拔折羅を置くべし。其の成就の法は或ひは淨室の中に於て作し、或ひは露地に於て作せ。曼荼羅の量は、五肘或は七或は八、或は其の所成就の事を觀じて、事に隨つて大小に而も作せ、諸門の當中に[七三]拔折羅を置き、諸の角の上に於ては瓶を置き、外門の所に於ては、能辨諸事の瓶を置くべし。內の東面に於て、法輪の印を置き、右邊に佛眼の印を置き、左邊に佛の毫相の印を置く。右に牙の印を置き、左に鑠底の印を置く。右に五種の佛頂を置くべし。次第に左右に佛部の中に安置せよ。所有の諸尊は、意に隨つて次第に左右に安置せよ。最後の兩邊には阿難及び須菩提を置け。次に下の近門には[七四]無能勝を置け。次に外院の東面に於ては、悉達多明王を置き、北面には大勢至尊を置き、南面には妙吉祥尊を置き、西面には軍勢曜尊を置く。東面の右には、梵天と及與び色界の諸天とを置き、左には因陀羅より上は、他化自在に至り、乃至地居天神を置け。東南の方に於て、火神を置き、諸の仙人と與んじて以て眷屬と爲せ。南方に於て焰摩王を置け。毗舍遮と布單那と諸の魔怛羅と與んじて眷屬と爲せ。西南方に於て泥利帝神を置け、諸の羅刹と與んじて眷屬と爲せ。西面の門に於て嚩嚕拏神を置け、諸の龍衆と與んじて眷屬と爲せ。門の北には地神を置け、諸の阿修羅と與んじて眷屬と爲せ。西北の方に於て風神を置け、諸の伽路拏と與んじて眷屬と爲せ。北方に於て多門天王を置け、諸の藥叉と與んじて眷屬と爲せ。東北方に於て伊舍那神を置け、諸の鳩槃荼と與んじて眷屬と爲せ。復東面の一所の處に於て[七五]日天子及與び曜等を置け。復西

【七一】乾末　乾燥したる粉末なり。

【七二】金剛墻　三股杵形にしたる鐵欄。

【七三】拔折羅　金剛杵のこと。

【七四】無能勝　釋迦は自性輪彌勒は正法輪無能勝は敎令輪なり。

【七五】日天子等云々　九曜十二宮は日に隨て繞る故に、日天の方に在り、二十八宿は月に宿る故に月天子の方に在り。

る護摩の如くせよ。應當に廣く三鉢多の法を作して、其の物を護摩すべし。是の如く作し已んなば、速に成就を得ん。三鉢多已らば、洗濯して淨からしめ、然して後に如法に灌頂し畢已て、供養し護持して本尊の前に置て、更に種種の飲食を加へて本尊に供養し、及び當さに八方の護世を祭祀すべし。亦須らく如法に護摩の地を供養すべし。然る後に諸の澡豆及び阿摩羅を以て、自ら如法に澡浴し、其の午時に於て、手を以て其の物を按じて、而も念誦を加へよ。[六六]又更に別に其の線を辨じ、前に依つて法の如く持誦せよ。臂釧と衣と灰と芥子と水とも、一一に皆須らく前の如く持誦すべし。成就を作さんと欲はん時には、是の如くの護身の物をば、先づ須らく持誦して後の用に擬充すべし。是の如く念誦し護身して、諸物成就の時、所用あらん處卽ち驗あり。是の故に應さに須らく豫め先づ持誦して、花等の供養の物を備擬すべし。亦須らく加法し持誦して側近に置くべし。[六七]次に則ち法に依り、曼荼羅を作り、如法に供養して成就を作すべし。能辨諸事の眞言を用つて、[六八]五色界道の線を持誦して、四橛の上に纏へ、軍荼利の眞言を以て、瓶を持誦して、外門の前に置き、纏むる所の線の兩の頭は、倶に瓶の頸に繫けて、稍寬縱ならしめよ。出入の時每に軍荼利を思念して、線を擧げて入れ、其の線、若しは軍荼利の眞言を以て持誦するも亦得、或は本法の眞言を取つて持誦するも亦得、前の所說の難を辟除する法の如し。先づ其の處を淨めて、然して後作法すべし。[六九]其の時に外に於て八方の護世大神、幷に諸の眷屬を祭祀せよ。其の瓶の上に於て、拔折羅を置き、或は菓あらん枝條を置くべし。其の瓶及び線は、或は當部の明王を用つて持誦し、或は部心を用つてし、或は部母を用つて持誦して、以て其の處を護し、或は當部に於ける所有の[七〇]契印、各本方に於て之を安置し、以て諸難を辟くべし。其の橛は金剛橛の眞言を以て持誦すること百遍、其の橛の上を、一頭に三股杵の形、或は一股杵の形を作れ。是の如く作り已つて、淨室の外に於て、四の角に之を釘つ、若し曼荼羅を作らば、界道の角に於て之を釘つ、此を金剛橛の法と名く。能く諸事を辨ず。其

【六六】此より巳下は第二十問云何んが身を持護せん、第二十一問、云何んが廣く法を持し何れの偈の眞言をか誦する、第三十二問、云何なるか諸藥の相、第三十八問、云何して郭礙を作す相を知るの四問の答說。

【六七】此より巳下は正しく、云何んが廣く法を持し何れの偈の眞言をか誦するの答說なり。

【六八】線・瓶を持誦して其の處を結淨するなり。

【六九】其の時云々。八方神等を祭祀す。

【七〇】契印。梵語 mudra の譯、諸尊の本誓を表はす標幟なり。

知るべし。然して後に不散亂の心を以て、三簸多の法を作せ、心を以て其の物を光明にし、及び之を散灑せよ。手に杓を執つて緩く其の蘇を擧み、其の物の上に置いて、本眞言を誦して、其の莎字に至つて、即ち爐中に瀉げ。[六四]其の訶の字を呼ぶとき、還つて其の物に觸れ、却つて蘇器に至らしめよ。是の如く[六五]三處に來去して、物に觸れ斷絕することを得ざれ。是を三簸多の護摩の法と名く。一千遍を經、或は一百遍せよ。或は眞言の廣・略或は復成就の下上輕重を觀じ、乃至護摩すること二十一遍、此を都說遍數の限と名く。三簸多の時は、杓を以て遍ねく其の物を霑して、皆潤膩ならしめよ。初に物を置く時には、先づ水を以て灑ぎ、次に按をして持誦し、次に以て復看、次に供養(物)を獻ぜよ。護摩し畢已なば、還た須らく是の如くすべし。成就曼荼羅に於て說く所の三種成就の相、此の法を作さん時、若し相現ずることあらば、即ち須らく之を禁むべし。應さに知るべし久しからずして即ち成就を得ん。其の物若し大ならば、右邊に置け。左の手に執るべきものは、左邊に置いて、而も之は三簸多せよ。若し有情の物を成ぜば、其の形像を作り、杓頭に觸れて護摩を作せ。若し自身を成ぜば、杓を以て頂に觸れて、護摩を作せ。若し他の爲めの故に三簸多を作さば、但其の名を稱して護摩を作せ。其の成就物にも、復三種の差別あり、一には但名を稱し、二には物を以て蓋ふて之を隔てよ。三には但處現して眼に視見する所にす。是の如きは皆其の蘇を用つて護摩を作せ。若し蘇を得ざれば、當さに牛乳を用ふべし。或は蘇に乳を和し、或は三甜を用ゐ、或は成就の差別を觀じて、應當に酪を用ふべし。或は本所說の如く、而も用つて護摩し、或は油麻を以て器仗を護摩せよ。若し吠多羅を成ぜば、應さに堅木香の心を用つて護摩すべし。或は蘇合等の諸餘の汁香を用ゐ、或は其の物の差別と、及び成就の差別とを觀じて、當さに諸類の香物の、法と相應せる者を取つて、護摩を作すべし。若し犬宍を成ぜば、還つて彼の脂を用ゐよ。諸餘の宍の類も、彼れ復是の如し。其の成就物は、或は畫いて前に置き、此の所に三簸多の法を以て說くことは、或は前に說け

【六四】其の訶字云々。訶字を唱ふる時、杓を返して成就物に觸るるなり。

【六五】三處。蘇器・爐・成就物との三處を指す。

に作るべし、其の量は意に隨へ。東面に[五七]執金剛を置き、右邊に明王を置き、左邊に忙莽計を置け。右邊に軍荼利忿怒を置き、左邊には金剛鉢を置け。右邊に棓を置き、左邊には大刀を置け。右邊に拳を置き左邊に遜婆を置け。右邊に提防伽を置き、左邊に、[五八]鉢揶顙乞差跛を置け。右邊に[五九]忿怒火頭を置き、左邊の近門に[六〇]金剛可畏眼を置け。右邊の近門に金剛無能勝を置き、曼荼羅の外に本部の能辨諸事を置くべし。諸餘の外院及び供養の法は、皆前に說くが如し。是れは是れ金剛部補闕の法なり。是の如くして供養畢已りなば、好夢を得ることを求むべし。晨朝に澡浴して白淨の衣を著け、稻穀花及び青き俱蔞草香美の白花を以て、所作の曼荼羅の地を供養せよ。然して後に牛糞を以て遍く塗掃して、却て後に[六一]三䟦多の護摩を作せ。右邊に酪と俱蔞草と蘇と蜜と胡麻と及び飯とを置け。所有の護摩の物は皆右に置き、左には遏伽の器を置け、蘇を舉む杓、及び諸物を舉む杓は、當さに前に置くべし。蘇を隔てゝ次に杓を置け。前の成辨諸事の眞言を用つて、其の物等に灑げ。部主の尊を請じて安置し、供養には本眞言を用ゐよ。閼伽を以て其の本尊を請じて、亦復安置すべし。自身の前には蘇を置き、蘇の前には火を置け。蘇と火との中間に成就物を置け。冣初に自身、次に蘇、次の物、次に火、次は本持の尊及び部主の尊なり。前の如く五種の物をば置く、次(第は)應さに知んぬべし。部主の左邊に帝闕寧の明を置き、右邊に成辨諸事を置くことは、前の所說の護摩の法の中の次第の如く安置せよ。初には青き俱蔞草を敷いて、酪に和せる飯を置き、稻穀の花を散じて、渉縛悉底の供を獻じ、好美の香を以て供養し、然して後に法に依つて護摩の事を作せ。所成就の物をば、金器と或は銀と熟銅と石と商佉と螺と木と囀弭迦と土器等とに置け、[六二]阿說他樹の葉を敷き、上に器を置け。或は有乳の樹の葉を敷け。或は閼伽樹の葉、或は芭蕉樹の葉、或は蓮華の葉、或は新淨の[六三]白氎、隨つて之を取つて敷け。又葉を五重にせよ。先を地上に敷いて成就の物を置き、復葉を以て五重にして其の物を覆ひ、或は是に散ずべし。或は種種の衣、或は諸の雜物を次第に應さに盛る所の器を

[五七] 執金剛。金剛杵を持する尊。今に金剛薩埵なり。
[五八] 鉢揶顙乞差跛とは步擲明王。
[五九] 忿怒火頭烏瑟沙摩。
[六〇] 金剛可畏眼、獨股杵の如くして目を著けたるものなり。
[六一] 三䟦多 (Samāpta)。究竟成就の義、作成就の護摩を修す。
[六二] 阿說他樹。無罪と翻ず、柳の木なり。
[六三] 白氎。白さ毛織物。

に佛を置き、右邊に佛毫を置き左邊に佛の鑠底を置け。右邊に佛慈を置き、左邊に佛眼を置け。右邊に輪王佛頂を置き、左邊に[四九]白傘蓋佛頂を置け。右邊に帝殊囉詩を置き、左邊に[五〇]勝佛頂を置け。右邊に超越佛頂を置き、左邊に[五一]須菩提を置き、右邊に[五二]阿難を置くべし。西南の角に於て鉢を置き、西北の角に於て[五三]錫杖を置け。右邊に訶利帝母を置き、左邊に無能勝を置け、曼荼羅の外に於て、能辨諸事を置き、中央に輪を置き、上に於て其の所成就の物を置き、或は本尊を置くべし、外院に八方神を置き、門の兩邊に難陀及び跋難陀龍王を置くべし。各本眞言を以て請し、或は部心の明を以て、都べて請して、法に依て供養し、然して後に護摩すべし。其の諸尊等は、或は其の印を置き、或は其の座を置き、本眞言を以て淨火を成し已つて、蘇蜜を護摩すること一百八遍せよ。又酪飯を以てし及び胡麻を用ひ、各本眞言を以て護摩すること百遍、其の事畢已て復百遍を誦せよ。此は是れ祕密にして愆過を補する法なり。所供養の物は皆香美を須ゐよ。其の[五四]所献の食は烏那囉の供及び砂糖の酪に和せるを(用ふべし。)此の法を作さん者をば、諸尊皆滋充し歡喜することを得せしめて、速に成就を得べし。但闕を補ふのみに非ず、亦半月にし、或は節日に於てし、或は復毎日に、此の曼荼羅を作つて、諸尊を供養すべし。皆滋充することを得せしめて、速に成就を與ふ。若し辨ぜざらん時には、力に隨つて作せ。前の所說の佛部の曼荼羅の法の如く、此の蓮華部の法も亦皆彼に同なり。唯改めて圓に作れ、其の量は意に隨てせよ。東面に觀自在を置き、右邊に馬頭明王を置き、左邊には首毘嚕波を置け。右邊に[五五]三目を置き、左邊に四臂を置け。右邊に六臂を置き、左邊に十二臂を置き、右邊に能滿諸願を置け、又右邊に耶輸末底を置き、左邊に大吉祥を置け。右邊に多羅を置き。左邊に戰捺囉を置くべし。近き門に右邊に[五六]濕吠多を置き左邊に半拏囉嚩悉顭を置き、中央に蓮華を置け。曼荼羅の外には本部の能辨諸事を置くべし。此は是れ蓮華部の補闕の曼荼羅の法なり。前の所說の佛部の曼荼羅の如く、此の金剛部も亦復是の如くして、然して須らく方さ

【四九】白傘蓋佛頂、梵の Sitâtapatroṣṇîṣa 異相金剛なり。
【五〇】勝佛頂、梵の Jayoṣṇîṣa 無比金剛なり。
【五一】須菩提　梵の Subhûti 釋迦十大弟子の一。
【五二】阿難　梵の Ânanda 釋迦十大弟子の一。
【五三】錫杖、梵の Khakkhara-m 僧侶・修驗者の携帶する杖。
【五四】所献の食、今は主要のもののみ二を擧げたるなり。
【五五】三目、以下の五尊は詳ならず、或は曰く四臂は毗倶胝、六臂は如意輪、十二臂は大白衣、能滿は隨求なりと。
【五六】濕吠多(Śvetâ)大白身。

を持誦せよ。次に復た牛蘇を以て護摩し、或ば牛乳を用ひ、或は蘇と蜜と胡麻とを以て和して、護摩を作し、後に酪飯を以て護摩すべし。本法の中に於て說く所の諸物、皆應さに護摩すべし。各曼茶羅の內の所有の眞言を以て、遍く護摩を作せ。各の眞言を以て、香水を持誦して、其の物に灑げ。[四五]前の所說の物を、光顯にする法の如く、此も亦是の如く　自の眼を持誦して、用つて其の物を看よ。心に眞言を誦して、是の如く作法すれば、其の物は卽ち奉請することを成ず。凡そ一切の物に奉請の法を作すに、速に成就を得べし。或は本法の所有の一切の供養、及び祭祀の法に於て、一一に皆應さに具さに此の奉請の法を作すべし。曼茶羅の中にして、亦通じて其の物を受持し、亦は通じて其の物を光顯にせよ。中に於て若し成就を作さん時、諸の作鄣のもの、亦便を得じ、亦通じて物を淨めんには、灌頂の法に依れ。亦通じて其の物に灌頂し、亦通じて自身に灌頂せよ。此は是れ祕密にして能く諸事を辨ずる勝曼茶羅なり。若し此の法を作さば、久しからずして成ずることを得べし。

[四六]補闕少法品第十五

我今當さに闕少を補する法を說くべし。物を受持し已つてより、毎日　三時に澡浴し、三時に供養し、及び護摩を作して、手に其の物を按ずべし。三時に衣を換へ、節日には斷食して、供養等の法、皆須らく增加すべし。三時に禮拜し懺悔し隨喜し勸請し發願せよ。三時に讀經し、及び曼茶羅を作せ。三時に歸依し[四七]受戒し、三時に護身すべし。是の如く作法するときは、定めて成就を得。或は放逸に由つて闕少あることを致さば、卽ち應さに部母の明二十一遍を持誦すべし。卽ち滿足することを成ず。若し此の法を闕きなば、成就するとも闕けなん。或は若し闕することあらば、更に須らく一十萬遍を念誦すべし。復應さに此の曼茶羅を作つて、前の闕少を補し、然して後に方に成就を作すべし。其の曼茶羅は方にして四角、四門を安くこと、前の所說の如くして[四八]界道を分布せよ。東面

【四五】前の所說　上の圓備成就品等を指す。

【四六】此の品の中半品は行者若し放逸にして闕少ある事あるを恐れ、今其の闕少を補ひ作壇するの旨を陳べて行者をして速に成就を得せしむることを明す。

【四七】受戒し　菩提心戒・三昧耶戒の印・明を結誦すること。

【四八】界道　曼茶羅の輪廓いふ。

と、我已に久時に念誦し護摩して、堅く戒行を持ち、此の眞心を以て、諸尊を供養し上る、願くは後の七日に道場に降赴し、我を哀愍したまふが故に、此の微供を受け、大慈悲を以て、我をして成就せしめ玉へ。是の如く乃し其の七日を滿るに至るまで、時に依つて啓請し、然して後に作法せよ。又閼伽・花香・飮食及び讃歎等を以て、毎日の暮時に、別して一方の護世神を供養せよ。乃ち三方に至ても、皆應さに是の如くすべし。又香を以て手に塗り、其の手を持誦して、以て其の物を按じて之を奉請せよ。復燒香を以て物に薫じて奉請すべし。又復斷食し、好き時日を取つて、略して曼荼羅を作つて、奉請の物を用ゐよ。或は但し一色を用つて、圓曼荼羅を作らば、唯一門を開いて、中に八葉の蓮華を置け。其量は二肘にせよ。次に餘の外院は、意に隨つて大小に作れ、先づ內院に於て、三部の主を置け。西面の門の北には[三五]摩醯首羅及び妃を置き、佛の右邊には[三六]帝殊囉施を置き、左邊には[三七]佛眼を置け。次に觀自在の右邊には、[三八]摩訶室利を置き、左邊には[三九]六臂を置け。次に金剛の右邊には、[四〇]忙莽計を置き、左邊には明王心を置け、西邊の門の南には[四一]吉里吉利忿怒及び[四二]金剛鉤を置け、上に說く所の如く、皆內院に於て安置せよ。次に外院に於て[四三]八方神を置き、及び能辨諸事の眞言主等を置け。內外の二院には、心に敬重する所の眞言主等樂のままに皆安置すべし。外門の北邊には、軍荼利を置き、門の南には無能勝を置け、各心眞言を以て請じて供養せよ。蓮華の上に於て、成就の物を置いて、之を供養せよ。或は蓮華の上に於て、滿てる迦羅賒瓶を置き、上に於て其の成就の物を置け、或は蓮華の上に於て、合子を置て、中に物を盛れ。或は蓮華の上に其の瓦器を置て、中に物を盛れ、其の物或は花臺の中に於て盛つて、蓮華の上に置て、加ふるに手を以て按じて、其の物を持誦すること千遍し、或は一百遍せよ。次に復た花を持誦し以て物の上に擲げ。次に復た蘇を以て安悉香に和して燒き、之を薫ぜよ。次に復た香水を微しく物の上に灑げ。次に復[四四]部母の明を以て、其の物を持誦せよ。曼荼羅の所有の諸尊に於て、各彼等の眞言を以て、其の物

【三五】摩醯首羅 Maheśvara 翻じて大自在天といふ。

【三六】帝殊囉施、Tojas 光聚佛頂のこと。

【三七】佛眼、梵に Buddhalocana といひ。佛の法界普遍の眼を人格化したる尊、三世諸佛の母。

【三八】摩訶室利（Mahā-śrī）大吉祥の明。

【三九】六臂、如意輪觀音・大威德明王の如き六臂の尊。

【四〇】忙莽計金剛部の母。

【四一】吉里吉利忿怒軍荼利明王（Kuṇḍali）のこと。

【四二】金剛鉤梵に Vajrāṅkuśa 鉤引金剛といふ。

【四三】八方神、八方を守護する尊。

【四四】部母の明、佛部ならば佛眼の眞言、蓮華・金剛之れに準ず。

已らば、先づ應さに斷食すべし。曼荼羅淨地の法の如く、或は念誦の室の法の如くして、應さに其の地を淨むべし。處所清潔なれば速に靈驗を得ん。初に成辨諸事の眞言を以てし、或は軍荼利の眞言を用つて白芥子等の物を持誦して、其の地に散打して、諸難を辟除せよ。佉達羅木を以て、[二六]橛四枚を爲れ、其の量二指にせよ。[二七]拆籤して一頭を剡り、一股杵の如くし、紫檀の香泥を以て、其の橛の上に塗れ。復緋の線を以て之を纏ひ、[二八]拔折羅橛の印を以て、拳に作つて之を執れ、此の眞言を以て持誦すること一百八遍して、四角に釘し、橛の頭を少しく現せ。一の白幡を作つて、曼荼羅の東面に於て、長き竹竿の上に懸けよ。金剛墻の眞言を以て、鐵末を持誦すること、百遍して、三股拔折羅を作れ、頭をば相接して、曼荼羅を圍繞して、金剛墻と爲せ。[二九]復金剛鉤欄の眞言を以て、鐵末を持誦すること、百遍して、亦三股拔折羅を作つて、各横さまに竪たる拔折羅の上に置いて、曼荼羅を繞らし、金剛鉤欄を爲せ。[三〇]外の曼荼羅の門には、軍荼利の眞言を以てし、拔折羅の印を以て、其の門を護れ。第二重の門には、[三一]訶利帝母を以て、其の門を護し、中臺院の門には、[三二]無能勝を以て、其の門を護るべし。此等の護門は、三部に通用す。或は其の一を用つて、通じて三の門を護れ。此の三の理者は、皆諸難を摧き、能く壞るものあることなし。此れ是の祕密は、成就の物を護るなり。[三三]其の臺を中心には、[三四]五つの寶物を埋めよ。若し人民集會の處に於て、曼荼羅を作らん時には、其の五寶物をば、之を埋むべからず。但し所成の物の下に置き、若しは中庭、及與び室內に於てせよ。或は佛堂の中に曼荼羅を作らん時も、亦復是の如し。以上の五處には、但香水を持誦して灑がば、卽便ち淨を成ず、地を掘ること假らざれ。若し本念誦の室の中に於て此の法を作さば、速に成就を得べし。諸の窟中に於て成就の法を作す合らず。壞室の中に於ても亦作す合らず。曼荼羅を作らんと欲はん時には、七日已前黃昏の時に於て、敬仰の心を以て、諸尊を觀念すること、目前に對ひたてまつるが如くして、奉請して言さく、三部の中に於ける一切の諸尊、及び本藏の中に於ける諸尊と眷屬等

[二六] 橛　橛は深く打込み高くせずして糸を曳く。
[二七] 籤　細き意。
[二八] 拔折羅橛の印、獨股の印なり。
[二九] 已下は上方界を結する法式。
[三〇] 已下曼荼羅の門を護る法式。
[三一] 訶利帝母 hāritī 鬼子母神と稱せらる國土・一切人を皆擁護すと云ふ。
[三二] 無能勝　梵の阿波羅爾多 Aparājita。
[三三] 已下は中心を結護する法式。
[三四] 五寶物、金・銀・眞珠・螺貝・赤珠。

好香と及び[二〇]暈虹を見ることあり。此の相の中に於て天より降る所の者をば上成就と爲し、空に於て現ずる者は是れ中成就なり。地に於て現ずる者をば下成就と爲す。此の三相に於ける九品の分別は、上の所現の如し、皆是れ吉祥なり。此に反して見ん者は、卽ち不成就なり。此の相を見已つて深く歡喜を生じ、是の如くの心を以て、後に方便して成就の事法を作すべし。

[二一]奉請成就品第十四

次に奉請成就の法を說かん。[二二]前に說く所の如きは、時節・星曜及び[二三]瑞相等なり。曼荼羅を作る法の中、及び成就の法の中に於て、廣く陳說せり。若し不善の相現ぜん時は、卽ち部母の明を以て、牛蘇を護摩すること、一百八遍を經て、然る時に作法せば、亦悉地を成就することを得ん。[二四]前に分別する所の曼荼羅の地は、亦彼に依つて成就を作すべし。若し上成就なれば山の上に於て作せ。若し中成就は池の邊に於て作せ。若し下成就なれば處に隨つて作せ、或は眞言と相應する處にして作せ。若し此の處に依つて成就を作さざれば、稍遲からん。舍利骨ある制底の中に於て一切の[二五]內法の眞言を作さば、皆成就することを得ん。佛の生處等の八大の制底は、成就の中に而かも最も上と爲す。然も菩提道場に於ては、一切の難なくして、能く成就と相應す。魔王尙ほ彼の處に於ては、其の難を爲さず。況んや餘の諸類をや。是の故に一切の眞言は決定して成就せん。凡そ是れ猛利の成就は、塚間に於て作し、或は空室に於てし、或は一神獨居の廟に於てし、或は逈かなる獨樹の下、或は河邊に於て當さに成就を作すべし。若し女藥叉を成就せんと欲はん者は、林間に於て成せ、或は龍王の法を成就せんと欲はん者は、泉の邊りに於て作せ、若し富貴の法を成就せんと欲はん者は、屋上に於て作せ若し使者の法を成就せんと欲はん時は、諸の人民の集會處に於て作せ。若し諸穴に入る法を成就せんと欲はば、窟の中に於て作すべし。此は是れ祕密に成就の處を分別するなり。地を簡擇して定め

【二〇】暈　日月の傍氣なり。
【二一】奉請成就品　行者が眞實の心を以て三部の諸尊道場に臨降したまへ、我が所願を悉地成就せしめ玉へと祈願啓請するなり。
【二二】前に說く云々　前の時分品を指す。
【二三】瑞相等　前の圓備成就品の所說なり。
【二四】前に分別する云々　前の擇地品の所說を指す。
【二五】內法の眞言　出世の佛菩薩の眞言なり。

然も此の三明は、當部に之を用ゐよ。其の持誦の繩をば、毎日繫け持ち作法して光顯にせよ。若し曼荼羅を作らん時、之を念誦せん時は、節日の時に於て、皆須らく繫け持つて難部を除かしむ。又[11]眼藥を合せば、蘇嚕多と、安膳那と、澁砂蜜と、龍腦香と、[12]蓽撥と、丁香皮と、得伽囉香と、自ら生ずる石蜜と、各の等分を取りて擣き篩ふて末に爲して、馬口の沫を以て、相和して細に研き、復此の明を以て持誦すること百遍すべし。之を成就せん時には數數面を洗ひ、藥を以て眼に塗れば、懈怠及び惛沈する所を除去す。諸難起ることあるも、夢に預め警見せん。

佛部の合眼藥の眞言。唵、入嚩攞路者抳、莎嚩訶。

蓮花部の合眼藥の眞言。唵、弭路枳額、莎嚩訶。

金剛部の合眼藥の眞言。唵、吽度嚩揖跛鞐、莎嚩訶。

此の三の眞言は本部なり。持用して眼藥を合せよ。或は單に水を呪して數々面・眼を洗はば、亦惛沈睡部を除くことを得べし。

若し成就せん時、念誦すること疲乏せば、白栴檀香を以て水に和して、部心の明を用て、持誦すること、七遍して三掬を飲め、成就せんと欲はん時には、先づ水を以て身に灑ぎ、應さに善相を取れ、方さに成就すと欲ふべし。[13]善相を見るとは、謂く商佉と、輪と、鉤と、魚と、右旋の印と、白蓮華と、幢と、莎悉地迦の印と、滿瓶と、[14]萬字の印と、金剛杵と[15]花鬘となり。或は端正の婦人の[16]瓔珞を以て身を嚴るを見、或は懷姙せる婦人と或は衣物を擎ぐるとを見、或は歡喜の童女を見、或は淨行の婆羅門の新しき白衣を着するを見、或は車・象・馬に乘じ根藥と及び菓とを見、或は奇事を見、或は雷の聲を聞き、或は[17]吠陀を誦する聲を聞き、或は螺を吹き角を吹く諸の音樂の聲を聞き、或は孔雀と[18]鴝鵒と鸚鵡と鶖鶬と[19]吉祥鳥との聲を聞き、或は善言を以て慰愈するの音を聞かん。謂く起居安樂・成就・可意の言なり、或は慶雲と閃電と微風と細雨とを見、或は天花を雨し、或は

【一一】眼藥を合する法を說く。
【一二】蓽撥、印度の胡椒の木の實なりといふ。
【一三】善相　三十二の善相を說く、吉祥の貌なり。
【一四】萬字の印とは今時流布の書き樣に順逆あり。
【一五】花鬘、梵語の mala 鮮妙の花を連ねて鬘となしたる物の名。
【一六】瓔珞　印度にて男女貴賤を問はず身に佩ぶる裝具。
【一七】吠陀 veda 梵語、印度最古の經典にして、外道の四聖典なり。
【一八】鴝鵒　鴝はクマタカ、鵒は斑鳩に似たる鳥、シヤコ。
【一九】吉祥鳥とは鳳凰なり。

成さんと欲せば、下の悉地を作すべし。是の如くの春・冬・及び雨後節には、亦應さに三種の悉地を成就すべし。此の中の九品の分別は、類に隨つて分配すべし。初夜の分に於ては、下成就の時なり。中夜の分に於ては、中成就の時なり。後夜の分に於ては、上成就の時なり。初夜の分に於ては、是れ扇底迦の事を作す時なり。中夜の分に於ては、是れ阿毗遮嚕迦の事を作す時なり。後夜の分に於ては、是れ補瑟徵迦の事を作す時なり。此の三事に於て、九品に分別して類に隨つて相應して、其の時節を知れ。其の時分に現ずる所の相に於て、上中下を辨ずべし。然れども日月蝕の時に於ては、卽ち當に作法して時分を觀ぜざるべし。凡そ猛利の成就、及び阿毗遮嚕迦の事には、日月蝕の時、最も是れ相應す。凡そ成就を起首せば、三日・二日・一日斷食すべし。上中下の事は日に類して應さに知るべし。

圓備成就品第十三[五]

復次に當さに[六]本法の闕少せる支具を成就することを說くべし[七]若し身力濟さざることを恐れなば、斷食を須ふること勿れ。念誦の遍數滿ち已つて、成就を起せんと欲はば、更に須らく誦（持）し護摩すべし。花香を供養し、種種に讃歎せよ。[八]本尊を觀念して、白氎の縷を取つて、童女に縄を合せしめ、前の如く作法し繫げて七結に作して、明を誦すること七百遍して、晨朝の時に於て、以て其の腰に繫けよ。夢に精を失せさらん。

佛部の眞言索には[九]倶摩履の眞言。唵、惹曳倶摩㗚、徵訖囉畔馱顉、莎嚩訶。

蓮花部の眞言索には、矩嚨儗抳の眞言。唵、畧訖釤、矩嚨矩嚨儗抳、莎嚩訶。

金剛部の眞言索には、忙莽鷄の眞言。唵、句爛駄履、畔駄畔駄、虎鈝抐。

初中後分の間に、[一〇]求請の句を誦すべし。若自の本法に求請の句なくば、應さに取て之を安ずべし。

【五】圓備成就品、先づ念誦の遍數已り成就を作さんとする時、闕少せる支具を滿足して速に悉地を成就せしむるなり。

【六】本法、行者の所修の本法なり。

【七】若し自身の力能く斷食に堪ふれば斷食すべし、前品に三日・二日・一日と說くが如し。

【八】眞言索を作る法を說く。

【九】倶摩履(Kumārī) 童女と譯し、倶摩羅天の女性。

【一〇】求請の句とは求むる所の願望を申ぶる語句の意。

卷の中

[一]分別悉地時分品第十二

復次に我今吉祥成就の時節を解說せん。行者知り已て悉地を尋求すべし。[二]謂く時節とは八月・臘月・正月・二月・四月、此等の五の月の白の十五日に上成就を作すべし。其の四月の時には、必ず雨難あり、其の二月の時には、必ず風難あり。正月の時に於ては、種種の難有り、唯臘月のみありて、諸難の事なし。八月の時に於ては、雷雹霹靂の難あり。如上所說の難は、皆成就の相なり。此の五箇月には、但上成就の法を作すことを求めしむ。亦當應に扇底迦の事を作すべし。亦卽ち此の五の月の黑の十五日に、中下の二成就の法を作すべし。亦當應に補瑟徵迦の事と、阿毗遮嚕迦の事とを作すべし。月蝕の時に於ては、最上の物を成就す、日蝕の時に於ては、上中下の成就の物に通(用)す。或は月の一日・三日・五日・七日或は十三日に、應さに諸の一切の事を成就することを作すべし。若し最上に成就を作さんには、應さに上の宿曜の時を取るべし。其の中下の法は、此に類して應さに知んぬべし。然も諸宿の中には鬼宿を最と爲し、若し猛利の成就を作すには、還て猛利の宿曜の時等に依れ、或は三種の事法と相應すべし。其の所成就も亦三事に依て作すべし。或は本法の所說の如くし、或は本尊の指授に依るべし。然も十二月の一日より十五日に至るまで、其の中間に於て、一切の成就及び事を作すべし、或は[三]本尊の指し玉ふ日を取れ。或は諸月の中の白と黑との十三日に亦成就することを得ん。[四]七月・八月は是れ雨時の後の節なり、應さに此の時に於て扇底迦の法を作すべし。九月・十月は、是れ冬の初の節なり、應さに此の時に於て、補瑟徵迦の法を作すべし。三月・四月は、是れ春の後の節なり、應さに此の時に於て、阿毗遮嚕迦の法を作すべし。正月・二月は是れ春の初の節なり、應さに此の時に於て一切の事に通ず。五月・六月は、是れ雨の初の節なり。要ず

【一】前文既に持誦の眞言相・供物等を說けり然れども好時分を分別ぜざれば速に悉地成就を得ること難きが故に今持誦者の爲めに分別悉地時分品を說く。
此の品より已下總て二十三品は、第十四問の云何なるをか扇底迦とする巳下の二十九問の答說なれども、其の答は必ずしも問の次第に依らず、今の品は云何扇底迦等の三問の答說なり。

【二】時節を說くに七と爲す今は月を料簡して成就を作す。

【三】本尊の指し玉ふ日とは、夢告等に依ること。本尊の進止。

【四】十二月・七月・八月の三時の初後によつて三事及び三種の悉地を作すべきを說く。

しは言く三時に念誦せば、三時に供養すべし。是の如く法に依つて當さに速に成就すべし。持誦の人飲食を獻ぜず。本部に違せば、其の人乃ち魔障に著かれて、身に精光なく、風燥飢渇し、恒に惡思想して本尊の眞言を成就すること能はず。皆眞言に菓食を獻ぜざるに由るなり。應當に前の白黑の二月等の日に依て、廣く供養を設けて、本尊幷に諸の眷屬に奉獻すべし。初め持誦せん時には、前等の日に於て、扇底迦の食を作つて、持誦の處を遠かり、四方に之を棄てよ。此に於て說かず。或は本部に通ぜず、縱ひ通ずる所あらんも、諸の下味を以て上成を求め、及び所制の食の臭惡の類をば、皆用ふべからず。常に酪の飯を獻ずべし。其の諸部の中に上中下の扇底迦等を求め、幷に諸天の眞言等に通（用）せば、應さに是の如く供養すべし。若し本所制の食なくば、其の所得に隨ひて、本部の眞言を以て之を眞言すべし。此の藥香は美にして尊主に奉るに堪へたり。我れ今奉獻す、哀愍を垂れて受け玉へ。

治食の眞言に曰く、阿歌囉阿歌囉、薩嚩悉地耶馱囉、布爾哆、莎嚩訶。

此の眞言は遍く三部に通ず、食を眞言して後に所持を誦し、食を眞言して之を奉獻すべし。

を求めんもの而も之を奉獻すべし。如上は略して諸の獻食の法を說きつ。各の本部に隨ふべし。所求の事法皆已に略して陳ぶ。或は[一五五]餘方に於ては、飲食の味異れり、其の色味を觀じ、類に隨つて之を獻ずべし。食を獻ぜんと欲はん時には、先づ淨く地を塗り、香水を遍く灑ぎ、諸葉を淨め洗ひて後に、蓮の葉と鉢羅勢葉と諸の[一五六]乳樹の葉と、或は新しき氈布等を以て、其の上に敷き設けて、後に諸の餚饍を下すに、之の葉を依用せよ。扇底迦には、水より生ずる諸葉及び餘の奇樹の葉等、或は芭蕉等を用ゐよ。又補瑟徵迦には、拔羅得計樹の葉・閼伽樹の葉、或は時に隨つて得んものを用ゐよ。又阿毗遮嚕迦には[一五七]雌樹の名葉を用ゐよ。謂く芭蕉の始めて生ぜる葉、或は蓮の葉及び苦樹の葉等なり。又女仙の眞言には鉢隷迦使乾樹の葉、又地居天等には、草を以て之を用ゐよ。上中下の法を求めんには、善く須らく知解すべし。先づ地を塗り灑いで、後に諸葉を敷いて、當さに淨く手を洗ひ口を漱ぎ[一五八]水を噉むべし。次に須らく食を[一五九]下すに、先づ渉悉底迦食を下し、次に圓根と長根と菓とを下し、次に諸の粥を下し、次に羹臛を下し次に飲を下し、次に乳と酪とを下すべし。各本法に隨ひ、此に依つて此を下せ。若しは曼荼羅を作り、及び諸事を成就して諸の境界を得んと擬さば、應當に倍加して淸淨の飲食と花・菓等との類を奉獻すべし。初め持誦の時には、其の所辦に隨ひ所得の味に隨ひ、彼の本法に依て、之を奉獻すべし。若しは[一六〇]白と黑との二月の八日と十四日と十五日と、日月の蝕の時と、地動の時とには、廣く供養を加ふべし。若し護摩の時に須ふる所の物をば、先づ本尊主の前に辦じ置け、若しは持誦の人、食はんと欲する時毎に、先づ一分の食を出して、亦同じく尊の前に置け。先に護摩を作して而して後に食する如きは、應さに預め食を作して、之を出し置くべし。先づ供養の所辦の食を設け已つて、然して後に應當に念誦を起首すべし。諸の花藥と及び諸の飲食とを獻じて、常に須らく之を念ずべし、廢忘すべからず、仍て本法に依れ。若しは言く一時に念誦せば、一時に諸の根と菓と食とを供養し、若しは言く二時に供養し、若

[一五五] 餘方とは他方の食を奉獻する法。

[一五六] 乳樹とは汁の出づる木をいふ。

[一五七] 雌樹の名葉とは上に女名果・女名食等といふの例なり。

[一五八] 水を噉むとは口を淸むること。

[一五九] 下すとは、供物を備ふる意。

[一六〇] 白と黑と云々、九ヶの時なり、この時に供物を備ふべし成就の時なればなり。日月蝕の時は支那に不吉の時とすれども印度には吉祥の時となす。

に莎悉底食・烏比路迦食・及び餘の力の辨ずる所の食を獻ずべし、砂糖・酪飯・根菓・乳粥等是れなり。此の迦弭迦食は、通じて一切に獻じ、唯阿毗遮嚕迦を除くべし。獻法の中に於て徵質覩路食を用ふることありと見ば、迦弭迦食の中に、三兩種の上異の飲食を加ふることを以てすべきこと是れなり。獻法の中に於て烏肥嚕食を用ふることありと見ば、前の迦弭迦食を以て倍加して多く置くこと是れなり。獻法の中に於て[一五二]三白食用を用ふることありと見ば、乳・酪・蘇の飯を以てすべきこと是れなり、復[一五三]三甜食ありと見ば蘇・蜜・乳の飯是れなり。獻法の中に於て薩嚩薄底迦食ありと見ば、裟也里迦食・陵祇里迦食・蓨沒梨耶食・底羅比瑟吒劍食・酪飯・根菓なり。前の所說の食の中に於て、一兩の味を取り、之を稻穀の花・諸の花及び葉に置き、盛るに大器を以てし、水を置きて中に滿て、持誦の處を遠かりて棄る是れなり。獻法の中に於て扇底迦の食ありと見ば、當さに莎悉底と、乳の粥と、稻穀の花と、蘇と、蜜と、乳と及び乳煎と、大麥の飯と、徵若布羅の食とを用ふべし。決然として災を除く、疑ひを懷くこと勿れ。獻法の中に於て、補瑟徵迦の食ありと見ば、應さに酪の飯と、酪の粥と、歡喜團と、烏路比迦と、砂糖と、室唎吠瑟吒迦と等の食を用ふべし。決めて能く願を滿たさん、疑を懷くこと勿れ。獻法の中に於て、阿毗遮嚕迦の食ありと見ば、應さに[一五四]赤粳米の飯を用ふべし。或は句捺囉嚩子、或は赤色に染め作める飯、或は油麻・餅・裟布跛迦・蓨沒梨也・訖迦囉粥等を用ゐよ。決めて能く魔を降す。疑を懷くこと無れ。若し藥叉の眞言を持するに、獻食の法なくば、應さに此の法に依つて、之を奉獻すべし。當さに赤粳米の飯と根と菓と蜜水と、及び蜜と砂糖と米粉の餅等とを用ふべきもの是れなり。女天の眞言等を持せんには、應さに羹飯・豆子・曜等の甜漿水・鉢囉拏鉢哩瑟吒迦啙葉味等及び諸の菓子を獻ずべし。一切の女天には、應さに是の食を獻ずべきなり。上成就を求めんと欲はば、本部の獻法のもの應さに此に依つて獻ずべし。諸の飲食の根菓・香等の衆の共に談ずる所、其の味の美なるもの多くして而も復貴きものあり。此の如くの上味をば上成就

【一五二】三白食とは乳と酪と酥となり。
【一五三】三甜食とは蘇と蜜と乳の飯なり。
【一五四】赤粳米とは赤き大唐の米なり。

具せざるをば、所作の食に隨つて、八部等に用ゐよ。獻食の時には先づ[147]巾葉等を敷いて莊嚴を爲し、先づ涉悉底迦食・烏路比迦食・布波食を置け、是の如く先づ三部に作つて共に同しくし、復本部所須の飲食の如く、力に隨つて之を獻ぜよ。[148]粳米の飯と、六十日に熟せる粳米の飯と、大麥の乳の飯と、種ゑずして自ら生えたる粳米の飯と、粟米の飯とを以て、須らく獻ふべくんば法に依つて之を獻ぜよ。及び諸の香味奇美の羹臛と、幷に諸の豆臛とても之を奉獻せよ。乳煮の大麥の飯と及び種ゑざるに自ら生えたる粳米の飯とは、上成就を求めよ。粳米の飯と及び六十日熟の粳米の飯とは、中成就を求めよ。粟米と及び飯とは下成就を求めよ。扇底迦の法を上成就と爲し、補瑟徵迦の法を中成就と爲し、阿毗遮嚕迦の法を下成就と爲す。飯食・根菓・飯粥を供獻せんことは、上中下に依つて之を奉獻せよ。扇底迦の法は、上(品の悉地)にして佛部なり、補瑟徵迦の法は、(中品の悉地)にして蓮華部なり、阿毗遮嚕迦の法は、下(品の悉地)にして金剛部なり。最上の悉地と及與び中下となり、善く須らく法に依り類に隨つて知んぬべし。羹臛の中に味甘甜のものは扇底迦に用ゐ、味酢甜なるものは補瑟徵迦に用ゐ、味苦辛淡のものは阿毗遮嚕迦に用ゐよ。乳の粥をば扇底迦に用ゐ、石榴の粥、酪の粥等をば補瑟徵迦に用ゐ、訖娑囉の粥は謂く胡麻・粳米・豆子等なり、阿毗遮嚕迦に用ゐよ。前に各の說ける諸の食味等の如く、或は方所に隨つて種種に異あり、上中下を觀じて之を奉獻せよ。或は諸味の衆の稱讃する所、或は自愛の者あらば、應さに持して佛に獻ずべし。或は本部の眞言の所說の獻食の次第あらば、宜しく當さに之に依るべし。若し彼に異ならば成就を得ず。食の中に顯なる者及以び惡香あるものをば金剛部に用ゐよ。前に說ける塗香・燈・食等は、各の本部に依れ、扇底迦等は當品も之に依れ。眞言の性は喜とや爲ん怒とや爲んと觀ぜよ。次に復之を觀ぜよ然も[149]何事をか成さんと、復細しく[150]何等の願をか滿ると尋察すべし。既に觀知し已つて前に獻ずる所の食は力に隨つて之を獻ずべし。[151]獻法の中に於て迦弭迦食を用ふることありと見ば、應さ

【一四七】巾葉葉、葉の字恐らく剩、これ瓶の下に敷く薄き板のこと、卽ち食巾なり。
【一四八】粳米の飯とはウルイネなりこれに三種あり、一に常の米、二に六十日にて收穫の米、三に自然生の米となり。
【一四九】何事をか云々、謂く敬愛・鉤召等を指す。
【一五〇】何事の願とは增益を指す。
【一五一】獻法の中とは此の中に十二の獻食法あり。

く甘からず、是の如くの圓根をば、金剛部に用ゐよ。是の如くの三部の扇底の迦の法等、及び上中下に並に同じく通用せよ。略して圓根を說きつ、善く其の部に隨ひ上中下に依つて用て之を獻ぜよ。是の如く分別すれば速に成就を得ん。斯の圓根・長根の生長及び所用の如法の類を說くこと是の如し。若し葱蒜韮の根と、及び餅の味の極めて臭く辛く苦き等をば用つて獻ずべからず。莎悉底食・烏路比迦食・布波食・嚩拏迦食・及び餘の紛食、或は種種に依れる胡麻團の食、或は種種に作れる白糖の食・歡喜團の食・莽度失食・毗拏迦食・儐抳拏句釋迦食・阿輸迦嚩侈也食・指室羅食・餅食・過羅叱瑟叱迦食・賒句離也食・鉢鉢叱食・布剌拏食・莽沙布波食・微諸鐸迦食・補沙嚩多食・羅嚩抳迦食・葉部迦囉迦食・俱矩知食・羅莽迦食・桁娑食・昔底迦食・鉢嘌香指里迦食・室利布囉迦食・吠瑟微迦食・瞋諸迦食・叱那囉迦食・愚拏捕囉迦食・質但囉布波食・却若羅食・愚拏鉢鉢吒失薩伽吒迦食・竭多食・種種の藥避侈儐拏布波食・囉若桁沙食・沙若迦食・竭嘌多布囉嘌食・劫謨微迦食・句莎里迦食・三補吒食・捨拏嚩食・訶哩儜食・釋句囊食・弭囊食・種種の鉢囉抳悖嘌瑟吒迦食・地比迦食・若羅訶悉底儞闍食・羯羯囉儐拏迦食・嚩羅伽多食・嚩底微迦食・乞澁底迦食・迦若羯哩抳迦食等なり上の如き等の食、或は砂糖を用つて作り、或は蘇油を以てし、或は油麻を以て和して作ること、其の本部の如し。法に隨つて用ゐよ。法に依つて奉獻すれば、速に成就を得ん。米粉の食を、佛部に(獻)ずれば、扇底迦及び上成就を作す。若し一切の麥麵の食をば、蓮花部に(供ずれば)、補瑟徵迦及び中成就を作す。若し油麻と豆子との食を金剛部に(供ずれば)、阿毗遮嚕迦及び下成就を作す等なり。一切の諸の食味を用ふる中に、白糖を用つて莊る所の者をば、佛部の中に常に當さに用ひて獻ずべし。若し室利吠瑟吒迦食をば蓮華部に用ゐよ。若し歡喜團の食をば金剛部に用ゐよ。若し布波迦食をば藥叉に用ゐよ。若し女名食をば、眞言の妃と后とに用ゐよ。女名食とは、劍謨里食・鉢鉢徵食なり。是は諸食の中に最も復美味なるものなり。上成就を求むるには、用つて奉獻せよ。其の次の味の如きは、餘の二部に用ゐよ。此の中に

種の粥と、及び諸の飲食とを用ふべし。此の四種の食は通じて諸部に獻ず。末惹布囉迦菓は、[139]普く三部に通ず、又石榴菓と注那菓とは、以て亦三部に通ず。其の次第を示さば、各の一部に通ずべし。若し味ひ甘甜なるは、扇底迦に用ゐよ。若し味甘酢なるをば、補瑟徵迦に用ゐよ。若し味辛淡なるをば、阿毗遮嚕迦に用ゐよ。若し[140]多羅樹の菓・萠子菓・尾羅菓・儞跛囉菓、及び臭き菓にして衆の樂はさる所は亦獻ずべからず。或は上味の菓あらん、世に復多く饒かにして復冣貴なるもの、此の如くの菓を獻ぜば、上成就を獲ん。或は諸菓あり、其の味は次美にして、世に復求め易く、價貴き所なきもの、此の如くの菓を獻ぜば、中成就を獲ん。或は諸菓あり、其の味苦く辛く淡き等、世に復豐にして足り、價復冣も賤なるもの、此の如くの菓を獻ぜば、下成就を獲ん。若し意を加へて奉獻せんと欲はば、應さに女名菓を取るべし、謂ゆる[141]柹子・杏・桃等の菓は、以て女天に獻ぜよ。諸樹より生ぜる菓の苦味なきもの、眞言のは妃と后とに獻ぜよ。室利泮羅菓をば通じて[142]三部の一切の忿怒に獻ぜよ。囀拏菓をば、唯一切の藥叉に獻ぜよ。劫比貪菓をば、室利天に獻ぜよ。鉢夜攞樹より生ぜる菓は、鉢麗使迦に獻ぜよ。是の如くの諸の菓更に多種あり、諸の異名あるは、隨て其の味を視て用つて之を獻ずべし。或は村の側、或は蘭若の清淨の處に於て、諸の草根ありて、其の味甘美ならば之を取つて奉獻せよ。亦成就を得ん。微那唎の根は、一切に通じて用ふべし。復奇美の味ある草根と抜薬とは、亦通じて奉獻せよ。直に[143]天神のみにあらず、[144]人中にも亦用ゐよ。若し山中に生ずる所の根の美味なる者は、佛部に供獻せよ。又[145]熟芋の根も、亦佛部に通(用)せよ。又迦契嚕劍の根・微那唎の根・囀也賜の根・倶擧知の根・及び餘の[146]圓根の水より生ぜるものは、蓮花部に用ゐよ。又一切の藥の圓根の味苦く辛く淡きと、及び多種の生芋とをば、金剛部に用ゐよ。又色白く香しく味極めて甘美なるもの、是の如くの圓根は、佛部に供獻せよ。又色黃にして香しく味太だ酸からず、亦太だ甘からざるもの、是の如くの圓根をば、蓮花部に用ゐよ。又赤色にして香しく、味苦く辛く淡く氣臭

【一三九】末惹布囉迦菓とは甘菓子の類をいふ。

【一四〇】多羅樹、形椶櫚に似て直生し、葉は書寫に用ゐらる。

【一四一】柹子・杏・桃・カキ・アンズ・モモ。

【一四二】三部の云云、三部に各各忿怒尊あり。

【一四三】天神、諸佛より諸天に至る本尊のこと。

【一四四】人中、夜叉・羅刹等の如き地居のもの。

【一四五】熟芋の根とは煮たる芋なり。

【一四六】圓根、烏芋の類。

は、次の香油を用ゐよ。阿毗遮嚕迦の法には、下の香油を用ゐよ。若し[一二六]諸の香木の油をば扇底迦に用ゐよ。若し油麻の油をば、補瑟徵迦に用ゐよ。若し[一二七]白芥子の油をば、阿毗遮嚕迦に用ゐよ。阿怛婆菓の油をば、眞言の妃と后とに用ゐ、及び諸の女仙に用ゐよ。若し諸菓の油をば、眞言主に用ゐよ。若し苦樹の菓を油をば、諸天に用ゐ、及び[一二八]摩訶迦羅に用ゐよ。若し魚の脂をば、鬼を祀るに用ゐよ。若し諸の畜生の脂をば[一二九]藥叉を祀るに用ゐよ。若し拔羅得鷄の油、麻子の油は、[一三〇]下類の天を祀るに用ゐ、及び四姉妹・遮門茶等に用ゐよ。若し寒林の中に[一三一]吠多羅を起すものには、犬宍の脂を用ゐよ。諸油の中に[一三二]犛牛の蘇は上なり、擇びて三部に通(用)せよ。又白牛の蘇は、扇底迦に用ゐ、黃牛の蘇は補瑟徵迦に用ゐ、烏牛の蘇は阿毗遮嚕迦に用ゐよ。若し本部あらんには、別に之を分別すべし。亦は彼に依て用ゐよ。若し諸の藥の中に生ずる所の油をば、補瑟徵迦に用ゐよ。若し諸香の中に生ずる所の油をば、扇底迦に用ゐよ。若し惡しき香氣の油は、阿毗遮嚕迦に用ゐよ。如上に略して燃燈の法則を說けり。善く自ら之を觀ずべし。縱ひ此は說かずとも、當さに審かにして之を用ふべし。燈油の部に依らざるものありと雖も、本部の眞言を以て之を眞言して亦通じて供養せよ。燈は能く障を却け然も障を淨除す。我れ今奉獻す、哀愍して受くることを垂れ玉へ。

燈の眞言に曰く、唵、阿路迦野阿路迦野、薩嚩苾地耶駄囉、布爾爹、莎嚩訶。

此の眞言を誦し已つて、次に[一三三]本持の眞言を誦して之を眞言せよ。復た淨法を作して諸過を除くが故に、前の品に說くが如し、准じて持修するが故に。

[一三四]獻食品第十一

復次に我れ食を獻ずべき法を說き、說の天仙をして悉く皆歡喜し、速に成就することを得せしめん。略して獻食を說かん。應さに[一三五]圓根と[一三六]長根と諸菓と[一三七]蘇餅と油餅と諸の[一三八]羹[illegible]等と、或は種

【一二六】諸の香木の油とは、諸の香木より搾り出す油なり。
【一二七】白芥子、芥は辛子、辛性なれば調伏法に用ふ。
【一二八】摩訶迦羅(Mahakala)梵語、大黑天なり。
【一二九】藥叉(yakṣa)梵語、勇健と譯し印度の鬼神なり。
【一三〇】麻子、麻の子なり。
【一三一】吠多羅を起す死尸を起す法、犬肉の油を用ふ。
【一三二】犛牛、純黑色の牛なり。
【一三三】本持の眞言、本尊の眞言のこと。
【一三四】獻食品、第十三問の云何なる食をか供養するの答說、菓子餅等其數繁多なり。
【一三五】圓根、芋等なり。
【一三六】長根、牛蒡・長芋等の類なり。
【一三七】餅、印度の餅は干菓子の類をいふ。
【一三八】羹[illegible]、[illegible]

の如く、善く須らく分別して其の[二〇]所用に應じて根・葉・花・菓は時に合ひたるを(加)持して獻ぜよ。又四種の香あり、應さに須らく之を知るべし。謂ゆる[二一]白性香と、籌丸香と、塵末香と、作丸香となり。亦須らく要らず應用の所を知るべし。若し扇底迦の法には、籌丸香を用ゐよ。若し阿毗遮嚕迦の法には、塵末香を用ゐよ。若し補瑟微迦の法には、作丸香を用ふべし。一切に攝通して自性(香)を用つて、籌丸香に合して置け、沙糖を以て塵末香・樹膠香に和して、應さに好蜜を用つて丸香に合和すべし。或は蘇と乳と沙糖とを以て、蜜に替へて香に和し、自性香の上に少(量)の蘇を着くべし。如し當部の所燒の香を求むるに、若し得ずんば、所有の香に隨つて、先づ當部に通じて、先づ此の部の香を眞言を誦して香を眞言し、然して後に所持の眞言を誦せよ。合和香法には甲・麝・紫鉚等の香を置かざれ。亦末偭也等を用つて香を和合すべからず、亦過分して惡氣をして香氣なからしむることを致さざれ。此の林野の樹香・膠香を以て、能く一切の諸人の意願を轉ぜよ。諸天の常の食をば我れ今將に獻ぜんとす、哀愍して愛くることを垂れ玉へ。

燒香の眞言に曰く、阿歌囉阿歌囉、薩嚩苾地耶駄囉、布爾羝、莎嚩訶。

此の眞言を誦して香を眞言し、後に所持の眞言を誦し、香を眞言して燒け、如法に獻ずるが故に。

[二二]燃燈法品第十

復次に當さに三品の燃燈の法を說くべし。法に依るを以ての故に、諸の天仙をして歡喜し成就せしむ。金を以てし銀を以てし[二三]赤と熟との銅を以てし、或は瓷瓦を以てして燈盞を作れ。此の五種の中に法に隨つて取用せば、本神歡喜す。[二四]燈炷を作る法は、白氎の花にて作り、或は新しき[二五]氎布にて作り、或は蒻句羅樹の皮の絲にて作り、或は新淨の布にて作れ。諸の香油の衆の樂ふ所の者を用ゐよ。或は諸の香しき蘇油を用ゐよ。其の扇底迦の法には、上の香油を用ひよ。補瑟微迦の法に

[二〇] 所用に應じ、部・尊の類に隨つて奉獻すべし。
[二一] 自性香、擣磨せざる沈水香・白檀香等の香なり。
[二二] (正藏、一八、六七〇) 燃燈法品第十二問の云何なる燈油の相の答說。この品の中に二十三種の諸の香油等を燃じて諸尊に供養し、悉地成就の法則を說く。
[二三] 赤熟銅、今の唐金なり。
[二四] 燈炷、燈心なり。
[二五] 氎布、毛織物なり。

塗香の眞言を用つて香を眞言し已つて、本尊に奉獻すべし。

〔二五〕分別燒香品第九

復次に今三部の燒香の法を說かん、謂く〔二六〕沈水・白檀・鬱金香等なり。其の次第に隨ひて取つて供養せよ。或は三種の香を和して、三部に通じ、或は一香を取つて、隨つて(各)部に通じて用ゐよ。香の名を列ねて曰く、室唎吠瑟吒劍汁・娑折(沙羅樹膝と云ふ)・囉娑・乾陀羅素香・安悉香・娑落翅香・龍腦香・薰陸香・語苦地夜目劍・祇哩惹密・訶梨勒・砂糖・香附子・蘇合香・沈水香・嚩落劍・白檀香・紫檀香・五葉松木香・天木香・襄里迦・鉢哩門攞嚩・烏施藍・石蜜・甘松香及び香菓等なり。若し三部の眞言の法を成就せんと欲はば、香を合和すべし。室唎吠瑟吒迦樹の汁香は、遍く三部に通じてて諸天に獻ぜよ。安悉香は通じて藥叉に獻ぜよ。薰陸香は通じて諸天の天女に獻ぜよ。娑折囉娑香は地居天に獻ぜよ。娑落翅香は女使者に獻ぜよ。乾陀囉娑香は男使者に獻ぜよ。〔二七〕龍腦香と、乾陀羅娑香と、娑折囉娑香と、薰陸香と、安悉香と、薩落翅香と、室唎吠瑟吒迦香と、此の七の膠香を和して以て之を燒けば、遍く九種に通ず。此の七の香を說いて最も勝上と爲す。(就中)膠香を上と爲し、堅木香を中と爲し、餘の花葉根等をば下と爲す。蘇合・沈水・鬱金等の香を和せるを第一と爲し、又白檀と〔二八〕沙糖とを加へたるを、第二の香と爲し、又安悉と薰陸とを加へたるを、第三の香と爲す。是の如く三種の和合は、隨て其の一を用つて遍く諸事に通ず。又地居天等及以び護衞には、應さに薩折囉沙・沙糖・訶利勒を用ひて以て和して香と爲して、彼等に供養すべし。又五の香あり、〔二九〕謂ゆる沙糖と、勢麗翼迦と、薩折囉娑と、訶梨勒と、石蜜となり。(これ等を)和合して香と爲して、三部に通じて一切の事に用ゐよ。或は一の香あり、遍く諸事に通ず。如上の好香は、衆人の貴ぶ所の上妙の和香なり。如し是の香なくば、所得の者に隨つて、亦三部に通じて諸餘の事に用ゐよ。上の所說の合和香法

〔二五〕分別燒香品、第十一問の云何なる香をか燒香とするの答說、佛・蓮・金の三部により燒香の法則を說示す。

〔二六〕沈水・白檀・鬱金香、何れも香料なり、沈水香は其木白楊に似て冬青の葉の小なる如し。

〔二七〕龍腦香等七種の燒香を說く。

〔二八〕沙糖、甘蔗の根を煎じて之を作るといふ。

〔二九〕謂ゆる沙糖等五種の燒香を說く。

具して、先人の合はする所の香氣の勝れたるあらば、亦三部に通ず。或は唯沈水香を少しく龍腦香に和し、以て塗香と爲して佛部に供養せよ。或は唯白檀香を少しく龍腦香に和し、以て塗香と爲して蓮華部に用ゐよ。或は唯鬱金香を少しく龍腦香に和し、以て塗香と爲して金剛部に用ゐよ。又紫檀を以て塗香と爲し、一切の金剛等に通じて用ゐよ。完豆蔻(部)脚句羅惹底・蘇末那、或は濕沙蜜・蘇澁咩羅・鉢孕瞿等を以て塗香と爲し、用つて一切の女使者天に獻ぜよ。又甘松香・濕沙蜜・完豆蔻を以て塗香と爲し、用つて明王の妃后に獻ぜよ。又白檀・沈水・鬱金を以て塗香と爲し、用て明王(部)に獻ぜよ。又諸の香樹の皮を以て塗香と爲し、用つて諸の使者に獻ぜよ。又所得の香に隨つて以て塗香と爲し、地居天に獻ぜよ。或單に沈水香を用ひて以て塗香と爲し、[二二]三部九種の法等、及び明王妃[二三]一切處に通じて用ゐよ。若し別に扇底迦の法を作すことあらば、白色の香を用ゐよ。若し補瑟徵迦の法には、黃色の香を用ゐよ。若し阿毗遮嚕迦の法には、紫色の無氣の香を用ゐよ。若し大悉地を成ぜんと欲はば、前の汁香及以び香菓を用ゐよ。若し中の悉地を(成せんと)欲せば、堅木香と及以び香花とを用ゐよ。若し下の悉地を(成せんと)欲せば、根皮の香と花菓とを用ひて以て塗香と爲して、之を供養せよ。香を和合する分には、[二三]有情の身分の香を用ふべからず。謂く甲香・麝香・紫鉱等の香、及以び酒酢或は分に過ぎたる者の世に愛せざる者は、皆用つて之を供養すべからず。又四種の香あり、謂く塗香・末香・顆香・丸香なり。一の香を用ふるに隨て壇を畫いて花と爲して日別に供養せよ。之を獻ぜんと欲はん時には、是の如くの言を誓ふべし。此の香は芬馥なること天の妙香の如し、清淨に護持して、我今奉獻す、唯納受を垂れ、願をして圓滿せしめ玉へ。

塗香の眞言に曰く、阿㰤羅阿㰤囉、薩嚩悉地耶馱囉、布爾䟦、莎嚩訶。

此の眞言を誦して塗香を眞言し、後に[二四]所持の眞言を誦じ、淨持すること法の如くして、尊に奉獻せよ。若し一香を求むるに而も得ること能はざれば、隨つて塗香を取つて之を眞言し、復本部の

【二二】三部九種の法とは三部に各各三部の法を具するが故に九種といふ。
【二三】一切處、明王・妃以外の諸の使者を指す。
【二三】有情の身分の香とは、瓜・皮・髮・骨・脂等を簡ぶ意。
【二四】所持の眞言、行者の常に所持する呪を用ふべし。

て之を供養せよ。若し如上の花葉・根菓の獻ずべき無くば、曾見曾聞の獻供養の花、或は自ら曾て獻ぜし花、所應に隨て想運して供養せしめよ。最も勝上の供養尊法と爲す。前の如く花菓等の獻ありと雖も、若し能く心を至して虔虔に合掌頂奉して、本尊に花菓を供養せよ。是の如くの心意の供養は最上なり。更に過ぎたるものなし、常に應さに是くの如くの供養を致すことを作すべし。疑惑を懷くこと勿れ、即ち成就を得べし。

塗香藥品第八[一〇九]

復次に今三部の塗香藥の法を說かん。[一一〇]諸の眞言に隨て供養すべきものは、能く衆福を成ぜん。其の香藥を名けて曰く香附子・句吒曩吒・青木香・嚕落迦烏施囉舍哩嚩・煎香・沈香・欝金迦・白檀迦・紫檀迦・嚕嚛拏・肥嚕鉢囉（或は粉忙囉鉢怛囉）・拏劒婆囉藍・（五粒松と云ふ）・娑北喃迦鉢特莽劒（栢木と云ふ）・帶囉鉢嘌泥迦利也劒（或は㕦里而囉、里沸㘓子と云ふ）丁香・婆羅門桂皮・天木・鉢孕瞿閉乳羅操囉箕泥・闍細囉嚩劒嚕・迦畢貪・喏達囉・訖嚂母劒・頗里迦嚕・曩里迦・始嚩擔辟・蘇嚩嘌拏賒迦藍・忙攞抃伽・并皮多利・三嚩婆・怛嘌拏忙斯（甘松香と云ふ）・那莽難・莽嚕聞・母羅計施耽（水蘇と云ふ）・忙羅本曩言・翳羅米夜𠰒囉・曩却設癡羅嚕利嚩・蹉比迦・怛胡綏僞閣・設多補蹉波（廻香）・訶𪛁蔬蓿草拏迦脚（白荳蔻）・句蘭若底・頗囉諸囉劍・却泮藍婆縮嫗・闍地夜莽劍・戰茶都嚕（蘇合香）・瑟劍・鉢囉婆怛婆縛・計薩藍等の類及び膠汁なり。謂ゆる龍腦香・言陀羅婆・婆遮囉婆・安悉香・薰陸香・設落翅勢嚕婆迦等、及び餘の膠ある樹の香ばしき者、並に本部に隨て善く須らく合和して用ふべし。諸草の香と根汁の香と花等の三物を和して塗香と爲したるは、佛部の供養にせよ。又諸の香樹の皮、及び白栴檀香・沈水香・天木香・煎香等の類、并に香菓を以て、前の如く分別し、和して塗香と爲して蓮華部に用ゐよ。又諸の香草の根と花菓葉等と和して塗香と爲しては金剛部に用ゐよ。或は塗香の諸の根葉を

【一〇九】塗香藥品第十問の云何なる香をか塗香とするの答說。今此の品は數十の香藥を合して塗香と爲して諸尊に奉獻する法則を明す。
【一一〇】法則と相應し供養すれば皆能く一切の悉地を成す。

隨つて當さに用ふべし。其の闍底蘇末那花をば、唯通じて佛に獻ぜよ。若し紅蓮花ならば、唯通じて觀音に獻ぜよ。若し靑蓮花は、唯通じて金剛(部)に獻ずるを各の說いて上と爲す。佛部の中に、扇底迦の法を作さんには、闍底蘇末那花を用ゐ、補瑟徵迦の法を作さんには、紅蓮花を用ゐ、阿毗遮嚕迦の法を作さんには、靑蓮花を用ゐよ。餘の二部の中には、此に類して之を作せ。上色の香花、中色の香花、下色の香花事に[一〇六]隨つて分ち用ふ。或は花の條を用ゐ、或は墮ちたる花を用て、天后に獻ぜよ。說いて上勝と爲す。紫・白の二色の羯囉末囉花は、用て忿怒尊主、及び諸の使者に獻ぜよ。說いて上勝と爲す。句吒惹花・底落迦花・婆羅花・迦嚟瞻迦囉花・阿娑曩努嚕莾花・尾螺花・迦宅嚧花等、隨つて其の一を取り、遍く三部に通じて、之を供養せよ。及び上中下の除災等の三には、復種種の諸花を以て、合成して鬘を爲れ。或は種種の花を以て、聚めて供養せよ。遍く九種に通じて用ふ。諸花の中に唯臭き花、刺樹に生ぜる花、苦辛の味ある花をば除け、供養するに堪へず、前に廣く花を列するに、名なきものをば、亦た用ふべからず。又木菫花・計得劍花・阿地目得迦花・膏句藍花・佞簸花等も、亦用ふべからず。長時の供養に、九種に通ずるものは、紅花・閃弭花・鉢囉孕句花・骨路草等、及び稻穀花と油麻とを相和して供養せよ。如上所說の種種の花等の供養は、最も勝上たり。如し此の類の諸花の獻ずべき無くば、但白粳米を用ゐよ。爛碎なるものを揀んで之を供養せよ。亦九種に通じて互に諸花を用ふることを得ざれ。如し作法の時、求むるに得ざらんものは、所得の花に隨つて、亦通じて供養せよ。若し花を以て供獻せば、應さに當部の花の眞言を用つて、花を眞言して獻ずべし。若し花の獻ずべき無くば、應さに蘇囉三の枝葉、或は莾嚕聞葉・灘敦葉・耽忙羅葉・訖嚟瑟拏末利迦葉・忙覩彌伽葉・闍羅惹迦葉、及び蘭香等の葉を用つて、替へて之を獻ずべし。如し此等の枝葉なくば、嚩落迦の根・甘松香の根・[一〇七]巷栢・[一〇八]牛膝の根、及び諸の香藥の根・香菓等を用つて、亦通じて供養すべし。謂はゆる丁香・豆蔻・宍豆蔻・甘𦼮桃、諸の香菓等、幷に通じて花に替へ、用つ

【一〇六】隨つて云云、設使ひ一種の花にても上中下を辨知して三部の三品に獻ずべし。

【一〇七】巷栢、岩檜葉のことなり。

【一〇八】牛膝、イコヅチのことなり。

し。是の願を發して言く、此の花は清淨なり、生處復淨なり、我今奉獻す。願くは納受を垂れて、當さに成就を賜ふべしと、獻花の眞言に曰く、

[一〇三]阿歌囉阿歌囉、薩嚩苾地耶馱囉、布爾底、莎嚩訶。

此の眞言を用て、花を眞言して、三部に供養せよ。若し佛に獻ぜん花は、當さに白花の香しきものを用て、之を供養すべし。若し觀音（部）に獻ぜんには、應さに[一〇四]水中の所生の白花を用つて、之を供養すべし。若し金剛（部の諸尊）に獻ぜんには、應さに種種の香花を以て、之を供養すべし。若し地居天に獻ぜんには、時に隨つて取る所の種種の諸花を供獻せよ。應さに獻すべき花とは、忙攞底花・簸吒羅華・蓮花・瞻蔔迦花・龍蘂花・（母單の花に似たり）[一〇五]嚩句藍花・倶物頭花・娑羅樹花・末利花・摩亦迦花・喩底迦花・勢破理迦花・句嚕嚩劍花・迦淡聞花・末度擯抳迦花・怛嘌拏花・彥陀補澁波花・本曩言花・那嚩忙里迦花・阿輸劍花・母注捃難花・那莽難花・注多曼折利花・勿勒蒭頒鉢羅花・迦宅嚧花・建折娜藍花・擯抳釖花・優鉢羅花・得蘗嚧花・捃難花・迦羅末花等なり。林・邑・蘭若・水・陸に生ずる所の上の如き等の花に於て、應さに須らく善く三部・三品・三等を知つて、花を用つて供獻すべし。忙攞底花・得蘗嚕花・捃難花・末理迦花・喩底迦花・那龍蘂花・上の如き等の花を用ては、佛部に供獻せよ。優鉢羅花・倶物頭花・蓮花・娑羅樹花・勢破理羅聞底迦花・本娜言花・得蘗嚧花、上の如き等の花を用つては、觀音部の中に供獻するを勝と爲す。

青蓮花・鉢孕儸花・葉花・枝條の餘の說かざる者等を用つては、金剛部の中に通じて供獻すべし。如上の花の中に、白色の者は、扇底迦の法を作し、黃色の者は、補瑟徵迦の法を作し、紫色の者は、阿毗遮嚕迦の法を作せ。是の如くの花の中に、味ひ甘きものは、扇底迦の法を作し、味ひ辛きものは、阿毗遮嚕迦の法を作し、味ひ淡きものは、補瑟徵迦の法を作せ。或は淨處に生ずる所の枝花あり、或は始めて芽を生ずる茅草、或は小草の花、或は中樹の花、大樹の花、種種の諸の花は、類に

[一〇三] この眞言は三部に通用す。

[一〇四] 水中の云々、白蓮華のこと。

[一〇五] 是等の諸の花名は梵語にして恐らく支那に無き花なる故に翻ぜざるべしと。

樂はば、常に應に勇進すべし、懈怠を生ずること勿れ。斯くの如くの所制は、常に須らく繼念すべし。若し爾らずんば、則ち制戒に違し、大重罪を獲て、成就する所無けん。身等の諸根恒常に定に在りて、世間の諸欲に貪著すべからず。常に勸めて斯くの如くの律制を依行して、廢忘せざれ。若し晨朝の時に諸罪を誤犯し、若し暮間に至らば、卽ち懺悔すべし。若し夜時に於て、諸業を誤犯せば、明けて晨朝に至つて、誠心に懺悔すべし。恒に須らく清淨にして、法に依つて念誦し、及び護摩供養等の事を作すべし。常に[九八]本戒に依つて、應さに是くの如く作意して、時日を遣度すべし。[九九]明王の戒の中に、常に須らく作意せば、久しからずして、悉地を獲る位の中に住すべし。

[一〇〇]供養花品第七

復次に分別して三品の法を說かん。扇底迦の法、補瑟徵迦の法、阿毗遮嚕迦の法、及び[一〇一]餘の諸法、是を三品と爲す。三部に各の三等の眞言あり、謂ゆる聖者の說、諸天の說、地居天の說、是を三部と爲す。聖者の說とは、謂く佛・菩薩・聲聞・緣覺の說き玉へるもの、是を聖者の眞言と爲す。諸天の說とは、淨居天より乃し三十三天に至るまでの諸天の所說、是を諸天の眞言と爲す。地居天の說とは、夜叉・羅刹・阿修羅・龍・迦樓羅・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅・部多・卑舍遮・鳩槃茶等の所說、是を地居天の眞言と爲す。若し扇底迦の法を作さば、應さに聖者の眞言を用ふべし。若し補瑟徵迦の法を作さば、應さに諸天の眞言を用ふべし。阿毗遮嚕迦の法を作さば、應さに地居天の眞言を用ふべし。若し上成就を求めん者は、應さに聖者の眞言を用ふべし。若し中成就を求めん者は、まさに諸天の眞言を用ふべし。若し下成就を求めん者は、應に地居天の眞言を用ふべし。是の如くの三部に、各の三等の成就あり。三種の法を作す中に、倶に當さに等しく水陸所生の諸種の色花を用ふべし。[一〇二]名色の差別は、各の本部に依つて、善く之を分別せよ。以て花を眞言して、當さに之を奉獻すべ

【九八】本戒、眞言乘の四重の禁戒を指す。
【九九】明王の戒の中今の經の所說の法則なり、明王とは眞言をいふ。
【一〇〇】供養花品、此品は第九問の云何なる花をか供養するの答說、この內に七十九種の妙花を三部の諸尊に供養する義を明す。
【一〇一】餘の諸法鈎召・敬愛等の法を指す。
【一〇二】名色の差別、白・黃・赤等の種種の色を指す。

に諸の所求の願を成滿せん。作法の時は、當さに茅草を用つて鐶に作り、右の手の無名指の上に貫き置くべし、應に當部の三字半の心眞言を誦すべし。眞言一百八遍、或は一千八遍して後に指の上に安ず。

佛部の心眞言に曰く、唵、爾娜職。

觀音部の心眞言に曰く、唵、阿嚕力。

金剛部の心眞言に曰く、唵、跋日囉姪力迦。

若しは供養の時、若しは持誦の時、若しは護摩の時には、應に草鐶を著すべし。鐶を著するを以ての故に、罪障除滅し、手清淨なることを得て、所作吉祥なり。復白氎の糸、及以び麻の縷を取りて、童女をして染めて、紅色或は鬱金色に作さしめ、合せて線索に作り、眞言の結を作せ。一たび眞言して、一たび結び、一七結を滿ちて、本尊の前に置き、眞言を以て索を眞言すること、一千八遍せよ、念誦の時、及び護摩の時、若しは消息の時、午暮の時なり。皆持して腰に繫けよ。眠るにも精を失せず、常に應さに繫け佩ぶべし。眞言に曰く、唵、歌囉歌囉畔駄額、升訖囉駄囉抳、悉駄剌梯、莎嚩訶。

　若しは念誦の時、若しは護摩の時、若しは梳髮の時、着衣の時、偏袒の時、臥の時、洗淨の時、凡そ著し脫ぐ所の上の淨衣服は、皆之を眞言せよ。若し大小便には、應さに木履を著くべし、若し本尊の前及び和上阿闍梨の前、諸の尊宿の前に詣るには、皆著くべからず。諸尊の處に於て身口意を以て、之を供養せよ。若し悉地速に成ずることを得んと樂はん者は、若し制多及び比丘僧を見ば、應さに常に禮敬すべし。若し[九六]外天の形像に遇ふには、但應さに合掌し或は[九七]伽陀を誦すべし。若し尊者を見ては、亦應に禮を致すべし、若し妙法を聞かば、深く敬信を生ずべし。若し菩薩の不思議の相を聞き、或は眞言所成の諸事を聞かば、皆應さに歡喜し、心に踊躍を懷くべし。若し成就を

【九六】外天の形像、外道等の貴ぶ日天等なり。

【九七】伽陀、梵語 gātha 贊頌と譯す卽ち經中に五言・七言の句をなすもの。

娜謨剌怛娜怛囉耶野、那莫室戰拏跋日囉幡拏曳、摩訶藥乞灑栖奈幡韗曳、唵、枳里枳里、跋日囉、避壓囉莎捺囉跋羅訖嚩底、摩訶矩嚕馱弭惹野、顊訖鱗韗、虎鉡虎鉡抪抪、畔駄畔駄囉。

金剛の諸事には、應に火天を用つて、木を燒くべし、或は[九三]苦練木、或は屍を燒ける殘火の燼木を取れ、或は白栴檀木、或は紫檀木、隨つて一木を取つて、刻んで三股[九四]金剛杵を作れ。呼摩を作さん時、及び念誦の時には、常に左の手を以て執持せよ。能く諸事を成するが故に、杵と號す。是れ善成就の者なり。若し常に此金剛杵を持する者は、一切の毗那夜迦、鄣難を爲す者は、悉く皆恐怖し馳散して去る。紫檀香の泥を以て、金剛杵に塗り、本尊の前に置き、當さに如上の眞言を以て、花・香を眞言して供養すべし。其の諸の事業は、金剛の秘密微細にして、悉く能く諸餘の事等を成就す。諸事を作さん時は、常に須らく右の手に珠索を帶持して、香を以て之に塗り、眞言を誦すべし。眞言一百八遍し、或は一千八十遍す。

金剛明王の珠索の眞言に曰く、唵、枳嚩枳嚩、莎捺嚩抳、莎嚩訶。

此の明王の大印をば、栊莽鷄と名く、能く一切の明王の眞言を成し、亦能く增益し及び能く眞言の字句を滿足し、亦能く諸餘の法事、及び護身の事を成就す。眞に但是れ諸の明王の母なるのみに非ず、亦是れ一切金剛の母なり。若し金剛部の珠索は、一の[九五]嗚嚕捺囉叉を著けて、線の中に置き、後に繫ぎて結と爲せ。金剛部の中、既に爾り、餘の二も知んぬべし。佛部の珠索は、應さに佛母の眞言を用ふべし、若し蓮華部の珠索ならば、應さに半拏囉嚩斯泥を用ふべし、云く觀音母の眞言なり、佛母の眞言に曰く、

娜謨皤伽嚩底鄔瑟抳灑野、唵、嚕嚕塞普嚕、入嚩攞、底瑟侘悉馱路者儞、薩嚩剌詫娑駄儞、莎嚩訶。

觀音母の眞言に曰く、娜謨囉怛娜耶嚩耶野、唵、迦制弭迦制、迦移迦驇伽制、皤迦嚩底弭惹曳、莎嚩訶。

此の珠索を帶持する者には、毗那夜迦は障を爲すこと能はず。身清淨なることを得て、當さに速

【九三】苦楝木、アウチの木のこと。

【九四】金剛杵、如來の智慧の鋭利なるを表示せる法具、これに獨股・二股・三股・四股・五股・九股等數種あり。

【九五】嗚嚕捺囉叉は金剛子なり。

六指は相著けて、微しく屈す。印を以て水を掬し、眞言三遍して、本尊を浴し奉る。此の印は、三部に通じて用ふ。復其の處に於て、所持の眞言を誦すること、隨つて多少に任す。然して始めて常の念誦の處に往くべし。乃至未だ彼の到らざる已來は、瞋疾を懷き、[八二]諸境に隨順すること勿れ。身心清淨にして、敬つて[八三]本神を想ふて徐く之れに往け。堅く禁戒を持すること、前の所制の如く、常に持して忘れざれ。既に彼の所に到つては、即ち應に法の如く、諸の事業を修して、之を念誦すべし。常に須らく法の如く、曼荼羅を作つて、供養し持誦すべし。若し疲倦あらば、當さに須らく、大乘經典を轉讀すべし。或は[八四]制多を作れ。諸餘の善事も、常に廢忘せざれ。日に須らく三たび、[八五]三寶に歸し、三度諸餘の罪業を懺悔し、三時に誓ひて大菩提心を發すべし。若し是の如くならば、當に成就を得べし、三時に發願して、勝事を成じ、諸罪を除かんと願へ。故に應に常に教に依て、諸の善業を作して[八六]惠施を行じ、大慈悲を具すべし。諸の法教に於て、慳悋を生ぜざれ、常に忍辱を懷き、精進して退せず、深く歸結を懷いて六念を心に繼ぎ、諸に所聞の經典に文義を思ひ、常に須らく眞言法品を轉讀すべし。當さに須らく眞言法經を供養すべし、經に依つて善く妙曼荼羅を畫きて、應さに須らく自ら入つて之を發すべし。初には諦信の[八七]比丘を定めて之に入れ、[八八]比丘尼と[八九]優婆塞と[九〇]優婆夷とは次に隨つて之に入れよ。並に皆堅固に菩提心と決定心と正見心とを發し、曼荼羅に入り了らば、應當に手印を結ぶ法、及び眞言を持する次第・法則を授與し、正に廣く爲に眞言の法則を宣說すべし。[九一]白月の八日、或は十四日・十五日、及以び月盡の日、或は十一月の十五日、是の如くの日倍供養を加へ、法に依り持誦して、護摩の法を作せ。加ふるに禁戒を持し、常に勤めて憶念し、倍々諸事を加ふれば、即ち眞言速疾に成ずることを得べし。護摩を作すに向かん時には、當さに須らく手を以て[九二]拔折羅を持し、瞋怒金剛の眞言、一千八十遍を誦し、或は百八遍して、一切の事を作すべし。瞋怒金剛の眞言に曰く、

【八二】諸境、色聲香味觸法等の六境。
【八三】本神、本尊をいふ。
【八四】制多、制底(caitya)と同じく塔なり、大疏に制底と質多と體同じ、此の中祕密は心を佛塔と爲すとあり。
【八五】三寶に歸し云々、已下は五悔なり。
【八六】惠施を行じ云々、已下は六度の善業を修す、惠施は財施、法教云々は法施共に檀度、懷忍辱は忍度、不退精進は精進度、深信は戒度、六念は禪度、經典は般若度なり。
【八七】比丘、梵語、苾芻(bhikṣu)淨乞食と譯す、僧侶のこと。
【八八】比丘尼(bhikṣuṇī)梵語乞士女と譯し、尼僧なり。
【八九】優婆塞(upāsaka)梵語、在家にして佛道修行の男子。
【九〇】優婆夷、在家の佛弟子たる女子をいふ。
【九一】白月、月の上十五日間をいふ。
【九二】拔折羅(Vajra)梵語金剛と譯す、今は三股金剛杵をいふ。

自灌頂の眞言に曰く、唵、賀佉里里、虎𤙖柿。
此の眞言を以て[七七]二手に水を掬して、眞言三遍して、自ら其の頂に灌げ、是の如く三度して、次に頂髮を結べ。眞言に曰く。[七八]唵、素悉地迦㘑、莎嚩訶。
此の眞言を以つて、髮を眞言すること三遍して、頂に當てて髻を作せ。若し比丘ならば、右の手を拳に作して、大拇指を舒べ、頭指を屈して、大指の頭の上を押へ、頭指をして圓に曲げ、眞言三遍して印を頂上に置く。
佛部の結髮の眞言に曰く、唵、尸祇尸契、莎嚩訶。
蓮華部の結髮の眞言に曰く、唵、尸契、莎嚩訶。
金剛部の結髮の眞言に曰く、唵、尸佉寫、莎嚩訶。
次に應に手を洗ひ、三度口を漱ぎ、本尊主を浴し上る。佛部の[七九]漱口・飮水[八〇]灑淨の眞言に曰く、唵、摩訶、入嚩囉𤙖。
蓮華部の漱口・飮水・灑淨の眞言に曰く、唵、覩覩囉、炬嚕炬嚕、莎嚩訶。
金剛部の漱口・飮水・灑淨の眞言に曰く、唵、入嚩理多、嚩口理抳𤙖。
漱口・飮水・灑淨を作し已らば、面を本尊所居の方に向け、本尊を觀念して、眞言を持誦し、及び手印を作し、水を取り三掬して、本尊を浴し、幷に[八一]閼伽を奉ると想へ、或は水中に於て、意に隨つて念誦して、方に道場に詣すべし。
佛部の獻水の眞言に曰く、唵、帝囉𡅅勃阿、莎嚩訶。
蓮華部の獻水の眞言に曰く、唵、避哩避哩、𤙖柿。
金剛部の獻水の眞言に曰く、唵、微濕嚩、嚩日嚩、莎嚩訶。
其の手印の相は、二手掌を仰むけ側めて相著けよ。二頭指を以て、二大拇指の頭を捻して、餘の

【七七】二手に云云、灌頂の印なり。
【七八】通用の結髮眞言なり。
【七九】漱口、行者の口を漱ぐこと、護摩の時には護摩爐の口を漱ぐをいふ爐の口を本尊の口と觀ずる故に。
【八〇】灑淨、加持香水ともいひ、水を灑ぎて清淨ならしむるをいふ。
【八一】閼伽(argha)梵語、圓滿と譯す供の意なれども今は修法の時佛に供し佛の身體を洗淨し奉る水なり。

是の如きを頻りに聞くも、亦捨棄せざれ。復彼の諸の惡しき責罵をも瞋らざれ。何を以ての故に、並に是れ魔なるが故に、唯須らく精進すべし。退心して惡思し、諸の邪境界を攀緣して、諸根を縱放すべからず。恒常に護淨して、之を念誦すべし。[七一]若し大悉地の成就を求めんと欲はば、自ら誦持する所の眞言を以て、魑魅魍魎を攝伏すべからず。亦自他を擁護せざれ。亦難を救ひ諸の惡毒を禁ぜざれ。直ちに所持の眞言のみに非ず、[七二]諸餘の眞言をも亦作すべからず。所有隨用の一切の眞言、皆頻頻に而かも作すべからず。亦人と互に驗力を諍はざれ。[七三]若し悉地を求めなば、當に須らく三時に洗浴し、三時に持誦すべし。浴する每に、眞言水を以つて之を洗浴すべし。

水の眞言に曰く、唵、虎𤙖吹娜、跋日囉拏囉。

此の眞言を以つて、水を眞言すること七遍して、洗浴せよ。一切の魔族、毗那夜迦も災惱を爲さず。眞言せざる水を用ひざれ。

土の眞言に曰く、唵、顙佉曩、皤素睇、莎縛訶。

此の眞言を以つて、土を眞言すること七遍して、當さに少水を以つて、土に和して、之を攪いて則ち身に塗揩し、如法に洗浴すべし。一切の毗那夜迦は災惱を爲さず。

毗那夜迦を辟くる眞言に曰く、[七四]唵、阿密栗底、吹曩吹曩、虎𤙖𢩦。

此の眞言を誦すること七遍して、[七五]諸の毗那夜迦を辟けて、卽ち之を澡浴せよ。

沐浴の眞言に曰く、[七六]唵、阿密栗底、虎𤙖𢩦。

此の眞言を誦すること七遍して、意に隨つて澡浴せよ。洗浴の時には、謾りに談話すること勿れ。心に須らく沐浴の心眞言を持念すべし。

沐浴の心眞言に曰く、唵、曜可理理、虎𤙖𢩦。

此の眞言を誦し乃至浴し竟つて、次に水を掬して、自ら頂上に灌げ。

[七一] 若し大悉地已下は第七問云何なるか調伏の相の答說。

[七二] 諸餘の眞言、自所持の本尊の眞言を除き餘尊の眞言を以て攝伏擁護すべからず。

[七三] 若し悉地已下は第八問云何なるか眞言を持誦する方便の次第の答說。

[七四] 辟除の眞言なり。

[七五] 諸の云云、身中の毗那夜迦の難を遣除す。

[七六] 軍荼利の眞言なり。

語と、離間和合と、惡口と罵詈と皆作すべからず。對答すべき所、多言を假さず、無益の言談は遂に習學せざれ。亦復[六〇]外道の人、及び[六一]旃茶羅の人と同住せざれ。斯の如き等の類來て相ひ問詰すとも、亦與に語らざれ。亦外の諸人と談話せざれ。唯伴と共に語れ。念誦の時に當ては、縱ひ是れ同伴なりとも、亦與に語らざれ。唯餘時をば除く、所須に非ざるよりんば、伴と與に語らざれ。亦油を以て身に塗飾せざれ。又[六二]葱蒜、蘿菔、油麻、酒、酢、及び餘の一切の諸の菜茹を喫ふべからず。米粉豆餅、幷に蒸せる畢豆、及び油麻餅、並に團に作る食をば皆喫ふべからず。一切の毗那夜迦所愛の食及び供養の殘食の油麻、粳米、豆粥、及以び乳粥、薦へらるる所の食、或は觸せられたる食、皆食すべからず。[六三]一切の車乘及以び鞍乘は、皆乘騎せざれ。一切の嚴身の具、謂ゆる鏡と花粉と藥と傘蓋とは[六四]因緣の事に非ずんば、亦用ふべからず。亦手を以て手を搯り、脚を以て脚を搯らざれ。一切の水中に、大小便せざれ。岸の側りにて、手を以て食を承けて、食すべからず。亦[六五]鍮銅の器を用つて食さざれ。諸の葉上を以て、翻へして食を盛らざれ。大小の床榻に臥さざれ。亦人と與に同處にして臥さざれ。臥せんと欲はん時には、清淨にして臥し、智慧を尋思すべし。面を地にして臥さざれ。[六六]亦仰いで臥さざれ。師子王の如く、右脇にして臥すべし。臥す時に當つて、目を張りて睡らざれ。[六七]日に再び食せざれ。斷食すべからず、多食すべからず。少食すべからず。食に於て疑ひあらば、之を食すべからず。一切の調戲と、多くの人の叢聚し、乃至女人あらんは、皆觀看せざれ。身口意等をして、所受の房舍、及び好き飲食は皆著すべからず。惡しき房舍、及び麁き飲食を受くるも、皆棄つべからず。[六八]亦紫色の衣裳を著すべからず。亦故破の衣服と、垢穢の衣服とを著すべからず。念誦の時には、內衣を著すべし。[六九]自ら謙下して愆犯多くして三種の悉地を成ずることを得るに由し無しと云はざれ。縱ひ宿業の爲めに、身諸疾に嬰るとも、亦念誦を違闕せざれ。所受の眞言は、遂に捨棄せざれ。其の夢中に於て、或は虛空に於て[七〇]聲を現じて告げて言く、汝是の眞言を持すべからずと、

【六〇】外道、佛說以外の數學。
【六一】旃荼羅(Caṇḍāla)梵語、屠者・殺者と譯す、印度最劣の一階級なり。
【六二】葱蒜、五辛の總名。
【六三】一切の車乘等は是れ嚴身の外具、鏡花等は嚴身の內具。
【六四】因緣の事秘敎の中に於て或る時は此鏡花を用ふることを許すことなり。
【六五】鍮銅の器とは律の中に銅器を許さず故に之を制し、諸葉を翻へすを不淨と爲す。
【六六】師子王の如く等、如來の臥相なり、智(右)は動じ定(左)は靜、故に定を以て、智を鎮むる貌。
【六七】日に再び食せざれ、晝過ぎて食せず餘食の法を作さざるなり。
【六八】內衣、內裙なり。
【六九】自ら謙下し、仁に當つては師にだも讓らざるなり。
【七〇】聲を現じて告げて言く、この毘那夜迦の所作なる故に從ふべからず。

復次に廣く眞言を制持する儀式と法則とを說かん。若し此の式に依らば久しからずして、當に一切の成就を得べし。[五四]若し有智の者、諸の眞言を持せんに、先づ瞋恚を斷ぜよ、乃至天神にも瞋を生ずべからず。亦餘の持眞言者を瞋嫌せざれ。諸の眞に於て、意を擅にして乃至功能及び諸の法則を分別すべからず。諸の眞言及法則に於て、深く敬重を生じ、諸の惡人に於ても、善く須らく將護すべし。何を以ての故に、能く大事を障へ及び彼を壞るが故なり。阿闍梨の所に於て、縱ひ愆過を見るとも、身業に猶ほ驕慢嫌恨して、種種の是非を談說することを生さざれ。心意に終に惡想を分別せざれ、過に於ても既に爾る耳。況んや法に依るをや。縱ひ大なる怒を懷くとも、終に自の所持の眞言を以て、他の明王を縛し、及び損害を生じ、並に苦に治罰すべからず。亦復降怨の法を作すべからず。未だ曾て阿闍梨の處に於て、眞言を受けずして、人に授くべからず。所受の人も、三寶の處に於て、恭敬を生ぜずば、復是れ外道なり。阿闍梨の所に、眞言を受得すとも、亦た與ふべからず。乃至手印及以び眞言並に功能の法、及び[五五]普行の法をば、並に與ふべからず。未だ曾て曼荼羅に入らざるものに、亦授與せざれ。[五六]一切有情(殊に)兩足の類を跳驀すべからず。乃至[五七]多足をも亦跳驀せざれ。又諸の地印を踐驀して過ぐべからず。謂はゆる(地印とは)鎚と輪と棓と杵と螺と金剛杵と等なり。及以び素より成せるも、並に踐驀せざれ。諸の餘の藥草、根莖枝葉、及以び花實も亦踐驀せざれ。亦不淨の穢處に棄てざれ。若し眞言法を成就せんと樂はん者は、應に須らく制に依るべし。[五八]大乘の正義を詰難すべからず。若し菩薩の甚深稀有不思議の行を聞かば應に諦信を生ずべし、疑心を懷かざれ。眞言を持せん人は、彼の別の持誦の人と、更相に驗を施すべからず。若し小過に緣らば、即ち降伏の法を作すべからず。成就を樂はん人は、歌詠し言詞し[五九]調戲すべからず。身を嚴るが爲めに、好て脂粉花鬘を塗飾すべからず。亦跳躑し急走し邪に行かざれ。亦河中に裸形にして浮び戲れざれ。畧して之を言はば、身の諸の嘲調と、一切の戲咲の諸の邪口業と、及び虛誑語と、心を謟汚する

【五四】若し有智の者已下は第六問の云何してか眞言速に成就するの答說。

【五五】普行の法普通の一尊法なり。

【五六】一切有情兩足の類、是れ最上勝の類にして人天等なり。

【五七】多足、下劣の蟲、人天を除き餘の有足・無足・多足等、是等も皆如來の體性を具するが故に、未來世に必ず菩提を得ん、藥草等も諸佛の三形なり。

【五八】大乘の正義、眞言乘なり。

【五九】調戲、無益の談笑。

流れて人の愛樂する所あらん。是の如くの處を說いて勝處と爲す。復蘭若の諸の麞鹿多くして、人の採捕することなく、復羆熊虎狼等の獸なきあらん。是の如くの處を說いて勝處と爲す。或は大に寒なること無く、復大に熱すること無く、其の處は人に宜く心に願ふ所の者、是の如くの處を說いて勝處と爲す。或は山の傍に於てし、或は山峰の頂の獨高臺に於てし、或は山腹に於てし、復流水有らん、是の如くの處を說いて勝處と爲す。復勝處あらん、青草地に遍く、諸の樹花多く、中に其の木護摩を作すに堪へたるあり、是の如くの處を、說いて勝處と爲す。或は舍利を安置せる塔の前に於てし、或は山中の舍利を安ずる處に於てし、或は[五一]四河の邊、或は蘭若の種種の林木茂飾し、嚴麗にして多くの人無き處あらん。或は[五二]寒林の烟り絕えざる處に於てし、或は大河の岸、或は大池の邊、或は往昔多牛ありて居せし處、或は迥獨なる大樹の下、神靈の所依として、日の影轉せざる所に於てし、或は多聚落の一つの神祠の處、或は十字の大路の邊に於てす。或は龍池の邊、是の如くの處を說いて勝處と爲す。或は佛の經(行)所至の國、是の如くの方は速に成就を得ん。但し國土の人民、三寶を信順し、恭敬して、正法を弘揚することあらん、是の如くの處は、速に成就を得ん。復國土の諸の仁衆多くして、皆慈悲を具するあらん、是の如くの處は、成就することを得ん。既に是の如くの上妙の處所を得ば、應に須らく地中の穢惡瓦礫等の物を簡擇すべし、曼荼羅品に一一に廣く明すべし、悉地の法の如く、善く須らく三部の處所を分別すべし。復須らく扇底迦の法、補瑟徵迦の法、阿毗遮嚕迦の法、是の如くの三法を分別すべし。復須く上中下の成(就)法を分別すべし。卽ち是の處に於て、心の所宜に隨つて、淨く塗灑し掃ひて、諸の事業を作さば、速に悉地の法を成就することを得ん。

[五三]持眞言法品第六

4 舍衞城の祇陀園の塔、これ神通を現じ玉ひし處。

5 曲女城の塔、忉利天より降り玉ひし所。

6 王舍城の塔、僧の分別を化度せし處。

7 廣嚴城の塔、壽量を思念せられし處。

8 拘尸那城の塔、これ入涅槃の所なり。

【五〇】 蘭若、梵語、阿蘭若、(aranya)の略。遠離處・閑靜處・無諍聲と譯す、普通は寺院を指す。

【五一】 四河、印度の四大河を指す、殑伽（Gaṅgā）、信度(Sindhu)、縛芻(Vakṣu)、徙多(Sītā)の四大河にして、倶に雪山と香醉山との間にある阿耨達池より四方に流れ出づと云ふ。

【五二】 寒林、屍體を捨つる處にして、王舍城の近くにあり。

【五三】 特眞言法品、第六問云何して眞言速に成就する、第七問云何なるか調伏の相第八問云何なるか眞言を持誦する方便次第の三問の答說、是れ密行者の通戒なり。

し。若し藥法を成就せんと欲はん時には、須く常に手を以て其の藥を按し、或は草幹を執つて用て之を按ぜよ。念誦作法せんには、事務多しと雖も、終に廢忘せざれ。行者持誦すること了らんと欲はん時には、其の伴當さに須らく側に近づき立ちて、彼の行者の念誦既に勞るゝかを見るべし。或は神を發遣する法、數珠を置く法、及び餘の法等を作すことを忘れんことを恐る。彼の忘れん處を見ば、助けて之を作すべし。並に皆な持眞言者に廻向して、所作の諸事をして、福德を生ぜしむべし。其の伴常に須らく持誦し供養して、所求の願を滿ぜしめよ。指授する所あらば、唯伴と共に語るべし。若し最勝の事を成就せんと欲ふが故に、更に一の伴を許す。展轉し合語して、參差することを得ざれ。其の伴の食する所は、行者と同ふせよ。行者の所食は法に依つて制するが如し。是の如きを具せる者は、最上の勝事の同伴と成るに堪へたり。第三の同伴の福德も亦然るべし。一ら前の所說の如し。

[四七]擇處品第五

復次に眞言を持誦して成就する處の者を演說せん。何れの方地に住してか、速に佛の得たまへる所の道を成就することを得ん。四魔を降したまふ處は、最も勝上にして、速に成就を得ん。尼連禪河の沂岸の處に於てせよ。諸難なきが故に、其の地の方所には、速に悉地を得ん。縱ひ衆魔ありとも、障を爲すこと能はず。所求の事は悉地せざることなし。是の如きの處は、速に成就を得ん。或は佛の所轉法輪の處に於てし、或は拘尸那城の佛涅槃の處、或は迦毗羅城の佛所生の處、上の如くの四處は、最も上勝と爲す。諸の障礙なく、[四八]三種の悉地決定して成ずることを得ん。又諸佛所說の勝處に於てし、復菩薩所說の勝處と、佛の[四九]八大塔とあり、或は名山の諸の林木多く、復花果多くして、泉水交り流るる有らん、是の如くの處を說いて勝處と爲す。或は[五〇]蘭若の諸の花葉渠水、交り

【四七】擇處品、上の諸品は既に所持の法能修の人を說けり、若し勝處に依らざれば速かに成就する事を得ず。卽ち第五問の云何なる方所を勝處とするの問に對する答說なり、略して三十七勝處を明す。

【四八】三種の悉地、息災・增益・降伏の三種。

【四九】八大塔

1 伽毗羅城の龍彌儞園の塔は佛陀の降誕の所。

2 摩伽陀の尼連禪河の塔、これ成道の處。

3 皮羅奈城の塔、これ轉法輪の處。

常に布施を念じ、善く解して明王の眞言を分別し、常に須らく所持の眞言を念誦して、行者と同ふし、兼て結果護身等の法を明かにせん、是くの如くの伴を得ば、則ち速に成就せん。三業調善にして、曾て師の所に於て、曼荼羅に入り、佛教に歸依して疏小の法を習はず、善く行者所須の次第を知り、言教を待たずして所求あるに隨ひ、時を知つて卽ち送らん。此の如きを具せる者を、勝れたる同伴と爲す。身意賢善にして心に憂惱なく、決定堅固にして終に退心せず、是の如くの伴を得ば卽ち速に成就す。多くの財利に於て貪着することを望まず。是の如くの德を具するを說いて勝伴と爲す。復行者に於て心に捨離すること無く、若し諸餘等の藥を成就せんと欲せば、爲めに强緣と作つて、自然の聖戒を捨離せしむべからざらん、是の如くの德を具せるを說きて勝伴と爲す。行者の處に於て規求する所なく、未だ悉地成就を得ざるより以來、終に捨離せず、縱ひ年歲を淹くして、悉地を證ずること無くとも、終に捨離の退心を懷かず、假令、大苦及餘の難事有りて、身心を逼惱すとも、亦捨つべからず。是の如くの德を具するを說きて勝伴と爲す。若し前の如く種種の德行あるは、最上の勝事を成就するに堪能なり。縱ひ前の德無くとも、但し眞言成就の法則を明かにし、幷に須らく善く諸の曼荼羅を解し、智慧高明にして、復加ふるに福德ありて持誦者に勝る。是の如くの伴は、亦能く最上の勝事を成就す。最上の事を成就せんと欲ふが爲めの故に、其の福德の伴、半月半月に、持誦者の與めに、而かも灌頂と以及び護摩とを作し、時に隨ひて辨ずる所の香・花・燃燈・諸餘の次第に依りて擁護し簡擇し、爲すこと有る所に隨つて、幷に須らく助作すべし。直に前の如く等の事を助修するのみならず、若し誦持者にして、虧失する所有らば、其の福德の伴は、經法に依り理を以て教誨し、法事をして闕くること有ること勿らしめよ。乃至事事に廣く爲めに諸行の因緣を開釋せよ。是の如きを具せる者を、最も勝伴と爲すべし。行者每日持誦の時、所行の事に及んで、時有つて忘失せば、其の福德の伴は、所見の處に隨つて、相助けて之を作して周備せしむべ

（を修して）退心を懐くこと無し、此の如くの人は、速に成就することを得。諸の菩薩及び眞言に於て、常に恭敬を起し、諸の有情に於て、大慈悲を起せる。此の如くの人は、速に成就を得。常に寂靜を樂つて、衆中を樂はず、恒に實語を行じて、作意し護淨せよ、此の如くの人は、速に成就を得ん。若し執金剛菩薩の威力自在なるを聞きて、心に諦信を生じ、歡喜して聞かんと樂へよ。此の如くの人は、速に成就を得ん。若し人少欲にして、一切に知足し、眞言を誦持し、所求の事を念じて、晝夜に絕えざれ、此の如くの人は、速に成就を得ん。若し人初めて眞言經法を聞いて、則ち身の毛竪ち、心に踊躍を懐き、大歡喜を生ずれば、此の如くの人は、則ち成就を得ん。若し人夢中に自ら悉地が、經の所說の如くなることを見て、心に寂靜を樂つて、衆と與に居せずば、此の如くの人は、速に成就を得ん。若し人常に阿闍梨の所に於て敬重すること、佛の如くせば、此の如くの人は、速に成就を得ん。若し人眞言を持誦するに、久しく効驗なくとも、棄捨すべからず、倍廣願を增し、轉精進を加へて成るを以て限りとせよ。此くの如くの人は速に成就を得べし。

分別同伴品第四

復次に當に同伴の者の相を說くべし。福德莊嚴にして、貴族に生種し、常に正法を樂つて、非法を行ぜず。復深信を懐きて、諸の恐怖を離れ、精進にして、退せず。尊教を奉行して、常に實語を作し、諸根支相、皆悉く圓滿し、身に疾病なく、過ぎて太だ長く、太だ短く、太だ肥え、太だ麁ならず、亦瘦せて小ならず、色太だ黑からず、亦太だ白からず、此の陋疾を離れたるは、福德の同伴なり。餘の諸の苦を忍び、善く眞言と印と曼荼羅と供養の次第と、諸餘の法則とを解して、常に梵行を修し、諸事に順忍し、言を出すに和雅にして、人をして聞かんと樂はしめ、諸の我慢を離れ、强記にして忘れず、教あれば奉行して相ひ推託せず、多聞にして智慧あり、慈心ありて恚ることなく、

[四〇]大乘經を讀み、謹みて法教に依ると、勤めて眞言を誦して、而も間斷せざると、所作の悉地を皆悉く成ずるものと、復須らく善く解して、漫荼羅を畫くと、常に[四一]四攝を具し、[四二]大法を求めんが爲めに、[四三]小緣を樂はざると、永く慳悋を離なると、曾し師に從つて、大漫荼羅に入つて、灌頂の法を受くると、[四四]先師の爲めに德者と讚歎せられ、汝今より往き灌頂を授け、阿闍梨と爲るに堪へんと、斯の印可あらば、方に自ら漫荼羅の法則次第を造せしめて、乃ち弟子に眞言を授與するに合へり。若し此の者に依りて受くる所の眞言は、速に成就することを得んこと疑を懷くべからず。若し和上阿闍梨の處に授からずして、擅に眞言を誦せば、徒らに功勞を施して、終に果を獲ず。夫れ弟子の法は、阿闍梨に恭侍すること、猶し三寶と及び菩薩等（と對するが）の如くすべし。何を以ての故に、謂く能く（大法を）授與する[四五]歸依處なればなり。諸の善事に於て、而も首めの因と爲り、現世は安樂にして、當來には果を獲、謂く阿闍梨に依るが故に、當さに嗣で久しからずして、無上正等菩提を得べし。是の義を以ての故に、之を敬ふこと、佛の如くするを以て、弟子と爲せ。阿闍梨に承事するに懈怠あることなく、勤持して授かる所の明王及び明王妃を闕かざれば、當に悉地を得べし、必ず疑を得ることなかれ。

[四六]分別持誦相品第三

復次に我今眞言を持誦し成就する行相を說かん。當さに須らく三業をして、內外淸淨ならしめ、心散亂せず、曾て間斷なくして、常に知慧を修し、能く一法を行じて、衆事を成就すべし。復慳悋を離るれば、所出の言詞に滯礙あることなく、衆に處して畏れ無く、所作皆辨ず。常に慈忍を行じ、諸の諂誑を離るれば、諸の疾病無く、常に實語を行ずれば、善く法事を解す。年歲小壯にして、諸根身分、皆悉く圓滿す。三寶の處に於て、常に敬信を起し、大乘微妙の經典を修習して、諸善功德

【四〇】大乘經、祕密を修學して三乘教を謗らず。
【四一】四攝、布施・愛語・利行同事。菩薩はこの四事を以て衆生を攝化す。
【四二】大法、眞言密教。
【四三】小緣、小乘教。
【四四】先師、傳法の阿闍梨を指す。
【四五】歸依處とは阿闍梨を意味す。
【四六】正藏、一八、六六五、分別誦相品、第四問の云何なるか成就者の弟子なるやの問に對しての答の中にて、持誦者成就の行相を明す、金剛頂經に四種の念誦を說けり、一に音聲念誦。二に金剛念誦、唯舌を動ずる念誦三に三摩地念誦、心念これなり。四に眞實念誦、字義の如く修行するこれなり。

義に准じに、應さに知んぬべし。若し眞言あつて、字の數少しと雖も、初めに[三〇]唵の字あり、後に莎訶の字あらば、當さに知るべし、此の眞言は速に能く扇底迦の法を成就すと。或は眞言あつて、初めに[三一]吽字あり、後に[三二]柿吒の字あり、或は[三三]𠸪普の字あるは、此は是れ訶聲なり、上の如くの字ある眞言は、速に阿毗遮嚕迦の法を成就することを得、或は眞言あつて、初めに唵字なく、後に莎訶の字なく、又吽字なく、亦柿等の字なく、及び𠸪普等の字なくんば、當さに知るべし、此れ等の眞言は、速に補瑟徵伽の法を成就すと。若し復人ありて、諸餘の鬼魅、及び[三四]阿毗舍等を攝伏することを求めんと欲せば、當さに使者及び[三五]制吒迦等の所說の眞言を用ふべし、速に成就を得ん。若し復異部の眞言ありて、能く一切の事を成就すと云ふは、但だ能く本部の所說のみを成就して、餘部には通ぜず、猶ほ經に彼れに眞言ありて、毒を除き病を除くが爲めの故に、之を說くと演ぶることもあるも、亦能く餘の諸の苦を除く、當に卽ち其れは一切に通じて用ふと知るべし。善く其の部を知り善く眞言の所應の用處を識り、亦須らく其の眞言の功力を知るべく、復須らく善く眞言を修する法を解すべし。所求の願に隨ひて、當さに須らく誦持して彼の眞言を誦すべし。

[三六]分別阿闍梨相品第二

復次に我今當さに阿闍梨の相を說くべし。一切の眞言は、是れに由りて得るが故に、阿闍梨を知るを最も根本と爲す。其の相は如何ん、[三七]謂く支體圓滿し、福德莊嚴なると、善く須らく出世生の法を知解すると、恒に法に依り住して非法を行ぜざると、大慈悲を具して、衆生を憐愍すると、[三八]貴族に生長すると、性調ひ柔和にして、共住することと有るに隨ひて、皆安樂を獲ると、聰明智慧、辯才無礙なると、能く忍辱を懷き、我見を懷かざると、善く妙義を解し、深く大乘を信ずると、設ひ[三九]小罪を犯すも、猶ほ大怖を懷き、身口意の業に（於て）善く調柔を須ふると、心常に悅樂すると、

【三〇】 唵（Oṁ）に供養等の義あり。
【三一】 吽(hūṁ)に降伏、除障等の義あり。
【三二】 柿吒(phaṭ)は叱聲。
【三三】 𠸪普。
【三四】 阿毗舍(āveśa) は遍入と譯す。鬼魅に執はれたる小兒を指す。
【三五】 制吒迦(Ceṭaka)は使者。
【三六】 正藏、一八、六六四。
【三七】 謂く支體圓滿し云々、巳下阿闍梨の相二十三相を明す。
【三八】 貴族、深祕の釋によらば大菩提心を體得するを以て貴族となす。
【三九】 小罪、眞言門の四重禁の中、若し一刹那なりそう、其の中の一罪を犯すをば、小罪となす。

又佛部の中には、大忿怒[二一]阿鉢囉爾鞞の眞言を以て、阿毗遮嚕迦の法を爲す。

忿怒の眞言に曰はく、唵、虎嚕虎嚕、戰拏里摩燈倪、莎嚩訶。

又蓮華部の中には、大忿怒[二二]施婆嚩訶の眞言を以て、阿毗遮嚕迦の法を爲す。

施婆嚩訶の眞言に曰く、娜謨刺怛娜怛囉耶野、娜謨摩訶室里野曳、唵、鑠枳曳縒摩曳、謀睇曳、悉睇悉睇、娑駄野、始廢始廢、始梵伽𩕳始梵米、阿嚩歌、薩嚩遏詫娑駄顈、莎嚩訶。

又金剛部の中には、大忿怒軍荼利の眞言を以て、阿毗遮嚕迦の法を爲す。

忿怒の眞言に曰く、娜謨刺怛娜怛囉耶野、娜莫室戰拏、摩訶跋𨁈囉矩嚕駄野、唵、虎嚕虎嚕、底瑟侘底瑟侘、畔駄畔駄、歌曩歌曩、阿密㗚底、虎𤙖抃吒。

復た眞言有て、三部に入らずんば、彼の眞言の文字に隨ひて、而も扇底迦等の三種の法を辨ぜよ眞言の中を見るに、若し[二三]扇底句嚕の字、[二四]莎悉底句嚕の字、[二五]閼莽の字、[二六]鉢囉閼莽の字、[二七]烏波閼莽の字、[二八]莎訶の字あらば、當さに知るべし卽ち是れ扇底迦の眞言なり。若し補瑟置迦の字あらば、當さに知るべし卽ち是れ補瑟置迦の眞言なり。若し[二九]句嚕の字あらば、當さに知るべし、卽ち是れ阿毗遮嚕迦の眞言なり。復眞言の句義慈善なる有らば、當さに知るべし扇底迦の用に入る。若し眞言の句義に猛怒なる(義)有らば、當さに知るべし、卽ち阿毗遮嚕迦の用に入る。若し眞言ありて、非慈非猛ならば、當さに知るべし、卽ち補瑟徵迦の用に入ると。若し速に扇底迦を成ぜんと欲せば、當さに佛部の眞言を用ふべし。若し速に補瑟徵迦を成ぜんと欲せば、當さに蓮華部の眞言を用ふべし。若し速に阿毗遮嚕迦を成ぜんと欲はば、當さに金剛部の眞言を用ふべし。此の經は深妙なること、天中の天の如しと云ひ、上中の上と言ふことあるは、若し此の法に依らば、一切の諸事にして、成就せざることなければなり。此の經は金剛の下部に屬すと雖も、佛敎を奉ずるが爲めに、亦能く上の二部の法を成就す。譬へば國王の敎勅あるに隨つて、自ら亦依行するが如く、此の法も、亦爾なり。

[二一] 阿鉢囉爾鞞(Aparājita) 無能勝明王、密號は勝妙金剛、大疏には釋迦の化身なりと。

[二二] 施婆嚩訶(Śivāvaha) 此に寂留と云ふ。此菩薩は無量壽の定門を主る。

[二三] 扇底句嚕(śanti-kuru) とは「息災を作せ」との意。

[二四] 莎悉底句嚕(svssti-kuru) とは「吉祥を作せ」との義。

[二五] 閼莽(ākgama ?)

[二六] 鉢囉閼莽(parākgama)

[二七] 烏波閼莽(upākgama)

[二八] 莎訶(svāhā)

[二九] 句嚕(kuru) は「爲せ」の意。

吒・制徵等（の眞言）は是れ下成就なり。扇底迦の法、補瑟徵迦の法、阿毗遮嚕迦の法は、三部の中に於て、各各に皆有り、應さに須らく善く知つて、次第を分別すべし。若し佛部の中には、佛母の眞言を用ひて、扇底迦の法を爲す。佛母の眞言に曰く、那謨皤伽縛底、鄔瑟抳灑野、唵嚕嚕塞普嚕、入嚩攞、底搘佗、悉馱路者爾、薩末囉訖娑、馱爾莎嚩訶。

若し觀音部の中には觀音母の[一八]半拏羅縛悉儞の眞言を用つて扇底迦の法を爲す。觀音母の眞言に曰く、那謨囉怛娜怛羅耶野、唵、迦制弭迦制、迦養迦薏迦制、皤伽縛底弭惹曳、莎嚩訶。

若し金剛部の中には、執金剛母の[一九]忙莽鷄の眞言を用つて、扇底迦の法を爲す。金剛母の眞言に曰く、那謨刺怛娜怛囉耶野、娜莫室戰拏跋日羅幡拏曳、摩訶藥起灑栖娜幡彈曳、娜謨路迦馱窒㗚曳、娜莫商迦嚓扇底迦賖、縕襂縕襂、具置𩕳伽彈野、縕置底、莎縛訶。

又佛部の中には、明王最勝佛頂の眞言を以て、補瑟徵迦の法を爲す。明王の眞言に曰く、那謨跛囉底歌姤、瑟膩灑野、薩嚩怛囉幡邏爾彈野、捨麼野捨麼野、扇底但底、達麼邏惹皤使羖、摩訶蜜儞曳、薩嚩遏訖娑馱儞、莎縛訶。

又觀音部の中には、明王[二〇]歌野圪利嚩の眞言を以て補瑟徵迦の法を爲す。明王の眞言に曰く、唵、阿蜜㗚姤、皤慕皤縛、娜莫。

又金剛部の中には、明王蘇皤の眞言を以て、補瑟徵迦の法を爲す。明王の眞言に曰く、娜謨刺怛娜怛羅耶野、那莫室戰拏、跋日囉幡拳曳、摩訶藥起灑栖娜皤彈曳、唵、蘇皤𩕳蘇皤虎吽、圪里覺拏圪里疊拏、虎吽、圪里疊拏幡野虎吽、阿曩野抱、薄伽畔、苾地耶邏惹、虎吽抪吒。

【一八】半拏羅縛悉儞（Paṇḍaravāsinī）白處若しくは白衣と譯す觀音部の部母なり。

【一九】忙莽鷄（Māmakī？）は金剛部の部母なり。

【二〇】歌野圪利嚩（Hayagrīva）は馬頭と譯す。

何んが分配して分數を爲す。云何んしてが成就物を受用する。云何んしてか物を失ふて却て得しめん。云何んせば破せられて却て彼れに着かん。云何んしてか鄣礙を作す相を知らん。云何んしてか漫荼羅を成就せん。云何なるか事法の漫荼羅。云何なるか灌頂の漫荼羅。如上の所問、其の要なるものに隨つて、唯願くは尊者大慈悲を具し、一一に分別して、廣く我が爲めに說き玉へ。

[六]爾の時[七]吉祥に一切を莊嚴し給へる持明大執金剛應供養者は、彼の[八]大精進忿怒に告げて言はく善哉、善哉、大忿怒よ、能く我が所に於て、斯くの如くの問を發する。應當に一心に是の勝上微妙の法則たる蘇悉地羯羅の五つの莊嚴の法を聽くべし。何をか謂つて五と爲す。一には謂く精進、二には謂く明王、三には謂く除鄣、四には謂く諸の勇猛の事を成就し、五には謂ぐ一切の眞言を成就す。此の蘇悉地經は、若し餘の眞言法を持誦して成就せざる事あらば、當さに兼て[九]此の經の根本眞言を持せしむべし。當に速に成就すべし。[一〇]三部の中に於て此の經をば王と爲す。亦た能く一切等の事を成辦す。所謂護身し召請し結界し供養し、相助し決罰して、一切眞言の一一の次第を、教授し成就を得しむ。若し諸の心眞言の中に、[一一]三の虎𤙖(こうん)の字あるは、則ち能く如上所說の一切の法事を成辦す。三の虎𤙖の字の心眞言に曰く、[一二]唵、矩嚕馱曩、虎𤙖若。辨才の眞言に曰く、唵、咄嚕底、塞㗚底、馱囉抳虎𤙖嚯。

此の眞言を以て、水を[一三]眞言して、三遍身に灑ぎ作淨せよ。復次に上中下の成就の法とは、別經に說くが如し。成就を求めん者は、須らく眞言の上中下の法を解くべし。此の經には通じて三部所作の[一四]漫荼羅の法を攝す。佛部の眞言は扇底迦の法、觀音部の眞言は[一五]補瑟徵迦の法、金剛部の眞言は[一六]阿毗遮嚕迦の法なり。腋より頂に至るを上と爲し、臍より腋に至るを中と爲し、足より臍に至るをば下と爲す。眞言の中に於て、まさに三種の成就を分別すべし、斯の三部に於て、各分ちて三と爲す。善く須らく三部の中の眞言を解了すべし。明王の眞言は是れ上成就なり。諸餘の使者の[一七]制

【六】爾の時に巳下は大執金剛の答說なり。
【七】吉祥に云々大執金剛は一百八吉祥の德を以て身を莊嚴し諸寺明者の中の上首なり。
【八】大精進忿怒とは軍荼利菩薩を指す。
【九】此の經の根本眞言とは次に出づる眞言なり。
【一〇】三部とは佛部蓮華部金剛部を云ふ。
【一一】三の虎𤙖とは吽字𤙖を指す。
【一二】此は烏蒭沙麼(Ucchusma)は穢積と譯す、この明を以て自身を護持されすれば障難を免る。
【一三】眞言とは、眞言を誦じて加持する意。
【一四】漫荼羅(maṇḍala)は道場と譯す。
【一五】補瑟徵迦(pauṣṭika)は增益と譯す。
【一六】阿毗遮嚕迦(abhicāraka)は降伏と譯す。
【一七】制吒(Ceṭa)、制徵(Ceṭī)は使者及び使者女と云ふ。

蘇悉地羯羅經

巻の上

請問品第一[一]

その時、[二]忿怒軍茶利菩薩は合掌恭敬し、尊者執金剛の足を頂禮して、即ち是の問を發せり。我時に往昔、尊者の所に於て、一切明王の漫茶羅の法と及以び次第とを聞き、復た明王の諸の所眷屬の神驗威德を聞けり。願くは未來の諸の有情の爲めの故に、唯尊者よ、廣く爲めに解脫することを垂れたまへ。[三]云何が眞言を持誦する法則次第を得て、速かに成就することを得しむるや、其の諸の眞言法は一體なりと雖も、成就する所の法は其の數無量なり。云何なるか眞言の相。云何なるか阿闍梨。云何なるか成就者の弟子。云何なる方所をか勝處と爲る。云何してか眞言速かに成就する。云何なるか調伏の相。云何なるか眞言を持誦する方便の次第。云何なる華をか供養する。云何なる香をか塗香とする。云何なる香をか燒香とする。云何なるか燈油の相。云何なる食をか供養とする。云何なるをか[四]扇底迦とする。云何なるか增益の相。云何なるか降伏の相、此の三種の中に於て、各の何等の事をか成ずる。云何なるか上中下の次第成就の相。云何なる法をか請召とする。云何んが供養を修する。云何んが身を持護せん。何云んが廣く法を持し、何れの偈の眞言をか誦する。云何んが灌頂を作さん。云何にしてか眞言を試る。云何んが當さに受付すべき。云何なる字か圓なることを得る。云何にしてか增益を得ん。云何にして[五]護摩の種種の次第の法用を作す。何等の物を以てか、能く速かに成就せしめん。云何なるか藥を成すの相。云何なるか藥を受くるの相。云何んが藥を淨治する。云何なるか藥の量分。云何なるか諸藥の相。云何んにしてか諸の成就物を護する。云

【一】請問品第一、正藏一八、六六三頁。請問品は軍茶利金剛數問を發し金剛手に決を請ふ故に請問品といふ。

【二】軍茶利(Kuṇḍalī)は一般に明王と呼ばれて居る。此の經の大精進忿怒尊に當る。

【三】云何乃至灌頂の漫茶羅總て四十一問を發す。巳下各品に其の答說を明す。

【四】扇底迦(Śāntika)は息災と譯す。

【五】護摩(homa)は譯して燒供と云ふ。

(26)備辨持誦支分品 六二二	備物品第二十六 六五一	受眞言品第二十四 六八七	受眞言品第二十四 四七四
(27)成就諸物相品 六二二	成諸相品第二十七 六五二	滿足眞言品第二十五 六八八	滿足眞言品第二十五 四七五
(28)取成就物品 六二三	取物品第二十八 六五二	增力品第二十六 六八八	增力品第二十六 四七六
(29)淨除諸物品 六二三	淨物品第二十九 六五二	護摩品第二十七 六八八	護摩品第二十七 四七六
(30)諸物量數品 六二三	物量品第三十 六五二	備物品第二十八 六八九	備物品第二十八 四七八
(31)除一切障大灌頂曼荼羅法品 六二三	灌頂壇品第三十一 六五三	成諸物相品第二十九 六八九	成諸物相品第二十九 四七八
(32)光顯諸物品 六二四	光物品第三十二 六五四	取物品第三十 六八九	取物品第三十 四八〇
同下卷	同下卷		
(33)分別悉地時分品 六二五	分別悉地時分品第三十三 六五五	淨物品第三十一 六九〇	淨物品第三十一 四八〇
(34)圓備成就品 六二六	圓備成就品第三十四 六五五	物量品第三十二 六九〇	物量品第三十二 四八〇
(35)請尊加補成就品 六二六	奉請成就品第三十五 六五七	灌頂壇品第三十三 六九〇	灌頂壇品第三十三 四八一
(36)補闕少法品 六二七	補闕少法品第三十六 六五七	光物品第三十四 六九一	光物品第三十四 四八二
	被偷成就物劫徵法品第三十七 六六〇		
	成就具支法品第三十八 六六二		

右對照に依り三本の蘇悉地羯羅經に於て増減出沒の異りの存することが明かに成つた。卽ち右の表の四段の中で、第一段の經と第二段の經とが略〻同一であるのに對して、第三段の經と第四段の經とが全然一致して居ることが明かである。而して古來からの釋家は、各々其の好む所に對して、註を施して居るので有つて、三本の中で其れが正しいかに就ては、何等議論されない。

昭和八年十二月一日

譯者　阿部宥精　識

						蘇悉地羯羅經略疏第三卷	
(8)供養花品	六〇八	供養花品第八	六三九	供養花品第七	六六六	供養花品第七	四一七
(9)塗香藥品	六〇九	塗香藥品第九	六四〇	塗香藥品第八	六六九	塗香藥品第八	四二三
(10)分別燒香品	六〇九	分別燒香品第十、	六四一	分別燒香品第九	六七〇	分別燒香品第九	四二四
(11)分別燃燈法品	六一〇	然燈法品第十一	六四一	燃燈法品第十	六七〇	燃燈法品第十	四二六
(12)獻食品	六一〇	獻食品第十二	六四二	獻食品第十一	六七一	獻食品第十一	四二七
同中卷		同中卷		同中卷		蘇悉地羯羅經略疏第四卷	
(13)扇底迦法品	六一二	欠		分別悉地時分品第十二	六七三	分別悉地時分品第十二	四三〇
(14)補瑟徵迦法品	六一二	欠		圓備成就品第十三	六七三	圓備成就品第十三	四三五
(15)阿毘遮嚕迦品	六一三	欠		奉請成就品第十四	六七四	奉請成就品第十四	四三七
(16)分別成就法品	六一四	分別成就法品第十六	六四四	補闕少法品第十五	六七四	補闕少法品第十五・	四四七
						蘇悉地羯羅經略疏第五卷	
(17)奉請本尊品	六一四	奉請品第十七	六四四	被偷成物却徵法品第十六	六七八	被偷成物却徵法品第十六	四四五
(18)供養次第法品	六一五	供養品第十九	六四五	成就具支法品第十七	六六〇	成就具支法品第十七	四四九
(19)光顯法品	六一九	光顯法品第十九	六四九				
				同下卷			
(20)灌頂本尊法品	六二〇	本尊灌頂品第二十	六四九	分別成就品品第十八	六六一	分別成就品第十八	四五一
(21)祈驗相品	六二〇	祈請品第二十一	六四九	奉請品第十九	六八一	奉請品第十九●	四五七
						蘇悉地羯羅經略疏第六卷	
(22)受眞言法品	六二〇	受眞言品第二十二	六五〇	供養品第二十	六八二	供養品第二十	四五九
(23)滿足眞言法品	六二一	滿足眞品第二十三	六五〇	增威品第二十一	六八六	增威品第二十一	四七一
						蘇悉地羯羅經略疏第七卷	
(24)增威品	六二一	增力品第二十四	六五一	本尊灌頂品第二十二	六八七	本尊灌頂品第二十二	四七二
(25)護辨法則品	六二一	護摩品第二十五	六五一	所請品第二十三	六八七	所請品第二十三	四七三

(高野山八葉學會藏版)

(一)蘇悉地羯羅經　第一卷
　請問品第一　五七右
同　第二卷
　然燒法品第十一　六一左
同　第三卷
　光顯品第十九　六六左
同　第四卷
　奉請成就品　第三十三　七二左
(二)蘇悉地羯羅供養法卷上　七五右

同　卷中　七九左
同　卷下　八三左
　以　上

10祕密儀軌隨聞記第二、性寂口授、勝慧記
(一)蘇悉地經卷第一　三〇
(正藏、一八、蘇悉地羯羅經頁別本其一の註)
同　經　卷第二　三四
同　經　卷第三　四一
同　經　卷第四　四五
(二)蘇悉地供養法　卷上　四九

同　卷下　五八
　以　上

慈覺大師の蘇悉地羯羅經略疏は、正藏第十八卷內の蘇悉地羯羅經の別本其の二(六六三)の註釋であり、諸儀軌稟承錄第二の蘇悉地羯羅經の註釋は、正藏の第十八卷の蘇悉地羯羅經(別本其二)の註釋であり、祕密儀軌隨聞記第二第三の同經の註は、別本其一の釋である。

三、蘇悉地羯羅經の類本對照

蘇悉地羯羅經上卷(正藏、一八)		蘇悉地羯羅經上卷(別本其一)(同上)		蘇悉地羯羅經上卷(別本其二)(同上)		蘇悉地羯羅經略疏第一(正藏、六一)	
(1)請問品	(六〇三頁)	請問品第一	六三三	請問品第一	六六三	請問品第一	三八九
(2)眞言相品	六〇三	眞言相品第二	六三四		六六四	分別阿闍梨相品第二	三九八
(3)分別阿闍梨相品	六〇四	分別阿闍梨相品第三	六三五	分別阿闍梨相品第二			
						蘇悉地羯羅經略疏第二卷	
(4)分別持誦眞言相品	六〇五	分別持誦眞言相品第四	六三五	分別持誦相品第三	六六五	分別持誦相品第三	四〇一
(5)分別同伴品	六〇五	分別同伴品第五	六三六	分別同伴品第四	六六五	分別同伴品第四	四〇二
(6)揀擇處所品	六〇五	簡擇處所品第六	六三六	擇處品第五	六六六	擇處品第五	四〇五
(7)持戒品	六〇五	分別戒法品第七	六三七	持眞言法品第六	六六六	持眞言法品第六	四〇八

天地を動かし得るは、神佛の靈動に依る。神佛を動かし得るのは、合法的の行事を作すを必要條件として居る。而して合法的の行事法則は、獨り此の經に說示されて有るだけで、餘りの經軌に於ては、斯くまでに完全には明されて無い。この理由に依て、此の經を妙成就作法經と稱するのである。

譯者善無畏三藏（637—735 A. D.）は梵に戍婆揭羅僧訶（Śubhakarasiṁha）と云ひ、淨師子と譯し、意譯して善無畏と云ふ。元と中印度摩揭陀國の王族で、釋迦族に屬して居る。青年の時に父王の遺志に隨つて、王位に就いたのであるが、宿願止め難くして、遂に王位を捨てて出家沙門となり、那爛陀寺に學し、後に密敎の龍象である龍智菩薩の門に入つて、密敎の奧義を傳へ、菩薩の勸誘に依つて、唐土に來つて密敎を弘通することと成り、開元四年（716 A. D.）に長安に着し、玄宗皇帝の信任を得、沙門一行の如き俊秀の受法の弟子あり、求聞持法、大日經等を譯して、密敎の鼓吹に努力せられたが、今の蘇悉地羯羅經三卷は、此の大德の譯出されたものである。大日經は開元十二年に譯出され、同經疏二十卷は、一行禪師の筆錄ではあるが、同三藏の講義が主なる財料と成つて居る。この疏は開元十五年に完成し、この年の九月に一行禪師は入滅されたのである。大日經疏に於て、此の經が引用されて無い所から考うるに、一行の滅後に、今の經を譯出されたものと想はれる。三藏は開元二十三年（735 A. D.）十一月に遷化せられ、時に九十九歲であつた。

二、經の類本並に註釋

蘇悉地羯羅經と類本と並に關係書とを擧ぐれば左の如くである。

1 蘇悉地羯羅經　三卷
　大唐中天竺三藏輸波迦羅譯
　（正藏、一八、六〇三）
2 蘇悉地羯羅經（別本其一）三卷
　同輸波迦羅譯（同、六三三）
3 蘇悉地羯羅經（別本其二）三卷
　同　人　譯（同、六六三）
4 蘇悉地羯羅供養法　二卷
　同　人　譯（正藏、一八、七〇四）
5 蘇悉地羯羅經略疏　七卷
　慈覺大師撰
　（正藏、六一、三八九—四八四）
6 蘇記　妙心大　一卷
　（正藏、七五、三九—四九）
7 妙成就記　一卷　（同、四九—五二）
　以上二部慈覺大師撰
8 蘇悉地對受記　一卷　安然撰
　（同、二〇〇—二一二）
9 諸儀軌禀承錄　第二卷
　葉樹山第七世沙門眞常錄

蘇悉地羯羅經解題

一、概　要

この經は三部の中の教王と言はれて有る。その理由は金胎兩部の大敎に於て、自心是佛の理を說いて有るが、若し此の經に說示してある眞言法則に依らなければ、三密の妙法も徒勞に歸し、何等の結果をも持來たし得ないからである。蘇悉地(Susiddhi)は梵語であつて、譯して妙成就と云ふ。修法に息災・增益・降伏等の三種の別があるが、是等の修法は、徒に印を結び、徒に眞言を唱ふるも、所期の目的を達し得るものではなく、次第法則を嚴守して、觀行を修することに依つて、始て其の成果を收め得るのである。而して其の次第法則は本經に於て極て明細に說明せられてある。此の經の指示に隨つて、眞言法を修する時には、決定して所期の目的を達成し得るから、經題に於て妙成就と言はれてある。次に羯羅とは梵語であつて、具には迦羅抳(karaṇi)、譯して作と云ひ。意譯して作法と言ふ。卽ち蘇悉地羯羅とは妙成就作法の義である。經は梵語で素怛攬(Sūtra)と云ひ、貫線攝持の義で、所詮の義を一貫して攝持し散亂すること無き意である。

慈覺大師は、蘇悉地羯羅經略疏第一卷に、この經王を讃して、左の通り言つて居られる。

所言蘇悉地羯羅經者、是三部經王、諸尊肝心、緒總眞言之祕旨、該貫大經之要妙。是以精進忿怒擊衆機、發數十疑問、持明大仙悲未來、開眞言法則、致使羯羅五莊嚴遍涉眞明、而爲經緯悉地九成就、且通諸部而成階位修行之蹕、必攀三際之利、信修之類寔獲世出世驗。諸部大敎非此經王支分不備、衆尊祕法非是眞典未有妙術、陵太虛之靈翅、開地藏之神術唯是此眞典也

（正藏、六一、三八九Ａ）

語句は簡にして、而も一經の深意を評し得て餘り有りと言ふ可きである。

修法に、息災等の三種あり、修法の尊主である本尊に佛部・蓮華部・金剛部の三部あり、修法成就の相に上中下の別あり。之を三品の悉地と稱する。修法と本尊と悉地との關係を、最も組織的に說明してあるものは、此の經を措て他には無い。これ等三者の關係を、眞に理解し熟知して居なければ、眞に合法的の修法を行することは出來ない。眞言の妙行は、一指の微動に依つて、天地を動かし得ると信じられて居るが、其は合法的の所作に依つて、此の靈感が現はれて來るのである。

爾の時會中に、無量無邊不可思議の菩薩・摩訶薩・天龍・八部・轉輪王等有り。心大に歡喜して咸唱へて曰はく、善哉、釋迦如來能く此の事を說き給ふ、思議す可きこと難し。然も我等が輩、誓つて當に此の呪を護持すべし。若し人及以び非人有つて、受持し、讀誦し、書寫し、供養し、愛念し、思求する者を見ば、常に與に擁衞して災患なからしめん。若し國中に於て此の呪有るを見ば、我等彼の國の諸人を恭敬すること、佛の如くにして異なけん。各々威力を以て國境を防禦して、惡鬼と兇賊と猛將と風雨水火とをして侵損せざらしめん。百姓熾盛に、國土安寧に、財穀豐熟して諸の飢饉なく、疫疹不祥も亦退散せしめんと。爾の時に如來、讚して言く、善哉、善哉、汝等實に能く是の如く擁衞すべしと。佛、經を說き已り給ふや、諸の菩薩衆・天龍八部、皆大に歡喜して信受し奉行しき。

大陀羅尼末法中一字心呪經 畢

て轉輪王と作ることを得、壽命は一劫ならん。

【一四一】若し海岸に坐して、龍木の柴を以て火と爲し、面を西方に向け、龍花木を執り、呪を誦ずることと十萬遍して火中に燒かば、當に即ち海水激して波濤と爲し、騰浪涌溢すべし。爾の時に當つて、幸に憂怖すること勿れ。但し志誠を以て專心に呪を誦ぜよ。水中に即ち眞の婆羅門を現じて、求むる所皆得、せしむる所皆作さん。

【一四二】若し地上に於て千葉の蓮花を畫き、其の上に坐して呪を誦ずること十萬遍せば、其の地即ち裂け、神有つて出現せん。持呪の人と同伴等と共に、即ち虚空に騰り、明仙衆に於て其の大主と爲つて、壽命一劫ならん。

【一四三】若し十二月一日より十五日に至るまで、闍提花を取つて一一に呪を誦じ、佛の頂上に散じて十萬遍を滿せば、頂より即ち光を出し、人身の上を照して【一四四】五神通を得せしめ、若し其の花を呪じて百萬遍を滿せば、所願皆得ん。

【一四五】若し地上の【一四六】曲蟮の土を取り、一の師子を作つて牛黃もて之に塗り、坐せしめて壇中に安じて恭敬供養し、呪を誦じて師子自ら動くに至らば、即ち成就することを得て所求皆得ん。

若は師子に乘騎して、生ぜんと願ふ所の處に、速に彼に到ることを得、命は梵天に同じからん。

若は象及び水牛を作つて、一ら前の法に依れ。若しまた聲を出さば、諸天皆來り、索むるものは皆得、せしむる所は皆作さん。

此の轉輪王の呪は、須むる所の事は皆成就することを得。須むる所の物あらば、一ら心願に依つて、淨信の意を以て此の法を作さば、成就せずと云ふこと無けん。

爾の時に世尊、斯の法を說き已つて、復是の言を作し給はく、我れ若し廣く此の呪の威力の諸法を成就することを說かば、劫を窮むとも盡ること無けん。汝等當に知るべし、要略して說けりと。

【一四一】以下は海水湧沸法を明す。
【一四二】以下は騰空得仙法を明す。
【一四三】以下は所願皆得法を明す。
【一四四】五神通。天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神境通。
【一四五】以下は成就師子法を明す。
【一四六】曲蟮。蚯蚓のこと。

れば、已身を護り得、若し二遍を誦ずれば、朋友・財物皆擁護を蒙る。

【三四】若し蓮華の法を成就することを得んと欲はば、紫檀木を以て一蓮華を爲り、三日食すること勿れ。左の手に花を執つて像前に坐し、呪を誦じて其の火出づるに至れ。爾の時に當り、諸の同伴に及ぶまで虚空に飛騰し、明仙の衆に於て轉輪王と爲る。彼に於て命を捨てば、西方極樂國土に生ずることを得ん。

【三五】若し摩羅末伽の土（唐には鼴鼠の土と云ふなり。）を取り、沙を以て共に和して金剛杵を作らば、長け十二指にし、手づから執持して家家に乞食せよ。必定して人と共に語ることを得ざれ。呪を誦ずること十萬遍せよ。其の杵の上頭に孔を作つて白芥子を著れ、日月蝕の日に至つて像の前に呪を誦じ、其の杵の中の芥子をして聲を作さしめば、求願する所のもの皆成就することを得。若し杵を以て山を撃たば、山自ら摧破せん。凡そ施爲する所、咸意に遂ふことを得ん。若し其の杵を將て海に入らば、海水意に隨はん。若し此の杵を執つて呪法を誦持せば、一切の毘那夜迦、障礙することを得ず。

【三六】若し河海深水の中に入らんには、其の水腰に至るまでにして、十萬の蓮花を取り、水中に一呪一擲せよ。當に卽ち妙吉祥天女出現して、所願皆得べし。

【三七】若は蓮華三十萬莖を取り、呪を誦じて前に依つて水中に之を放て。求むる廣大願、皆意に稱ふことを得。

【三八】若は蓮華五十萬莖を取り、呪を誦じて前に依つて水の內に之を放て。最極の廣願、隨はずと云ふこと有ること無し。

【三九】若し月の一日に【四〇】闍提花香（梔子華香に似たり。）を取り、呪を誦ずること一百八遍して、一一に呪像の足の前に散じ擲げ、一日に三時して十五日に至るまで、此の法を作さば、其の像の足の上より火光を現出し、持呪の身に入つて、當に卽ち現ぜざるべし。諸の伴等と共に卽ち虚空に騰り、明仙の衆に於

す。

【三三】以下は滅障法を明す。

【三四】以下は成就蓮華法を明す。

【三五】以下は成就杵法を明す。

【三六】以下は求願望法を明す。

【三七】以下は求廣大願法を明す。

【三八】以下に求極廣願法を明す。

【三九】以下は作持明輪王法を明す。

【四〇】闍提花。闍底蘇末那花（Jātikusuma）のことか。果して然らば、肉冠花と譯す。また忍冬、或は豆蔻とも稱せらる。

一に之を呪じ、滿じて一千八遍に至らば、卽ち前に依つて無盡の金藏を得。

[二六]若し沈香木丼に前の三味に依つて之を燒かんに、二十一日の內、日日に三時、一時に誦ずること一千八遍すれば、一切の諸天・龍神、皆來つて使者と爲る。

[二七]若し粳米及び酥・酪・蜜を以て、火に與れて之を投じ、呪を誦じて一千八遍に滿せよ。卽ち無盡の百味の食飮を得ん。

[二八]若し安悉香を以て圓めて梧桐子の如くし、三味と與に和して、一一に呪を誦じて之を燒き、一千八遍を滿足せよ。一切の藥叉來つて使者と爲る。

[二九]若し阿輸迦華[三〇]（唐には忘憂華と云ふ。）及び三味を以て、呪を誦すること一千八遍して一一に之を燒かば、一切の藥叉女來つて使者と爲る。

[三一]若し龍花及以び三味を燒かば、一切の諸龍來つて使者と爲る。

[三二]若は沈香及び三味等を燒き、前に依つて呪を誦ぜよ。一切の金剛來つて使者と爲る。

[三三]若は末怛那果[三四]及以び三味を燒き、前に依つて作法せよ。一切の明仙皆來つて使と爲る。

[三五]若は沈香木を以て火と爲し、酥合香を燒いて呪ずること一百八遍せよ。一切の健達縛來つて使者と爲る。

[三六]若し熏陸香[三七]を燒かば、一切の餓鬼來つて使者と爲る。

[三八]若し戸利縛色得伽[三九]藥を、沈水香に和して之を燒かば、一切の緊奈洛來つて使者と爲る。

[四〇]若し白[四一]膠香を燒かば、一切の毘那夜迦來つて使者と爲る。一百八遍を誦ぜよ。

[四二]若し白芥子及び白芥子の油を燒き、一千八遍呪を誦じ了已らば、國王歡喜せん。若は一日に三時して七日の內に至れ、作法卽ち成就す。

[四三]若し日の前に對して、呪を誦ずること十萬遍すれば、一切の惡障皆悉く消滅す。若し一遍を誦ず

【二六】以下は使天龍法を明す。
【二七】以下は得百味飮食法を明す。
【二八】以下は使藥叉法を明す。
【二九】以下は使藥叉女法を明す。
【三〇】阿輸迦華。aśoka 無憂華と譯す。
【三一】以下は使龍法を明す。
【三二】以下は使金剛法を明す。
【三三】以下は使持明仙法を明す。
【三四】末怛那果。madana 醉果と譯す。
【三五】以下は使健達縛（Gandharva）法を明す。健達縛（Gandharva）は譯して尋香と云ひ、天の樂神である。
【三六】以下は使餓鬼法を明す。
【三七】薫陸香。kunduru 乳香・乳頭香とも稱す。石の如くに凝結した樹脂。
【三八】以下は使緊奈洛（Kiṃnara）法を明す。緊奈洛（Kiṃnara）は人非人と譯し、八部衆の一である。
【三九】戸利縛色得伽。梵の śrīvāsa に當るか。若し然りとすれば、薫陸香に類似す。
【四〇】以下は使毘那夜迦（Vināyaka）法を明す。
【四一】白膠香。梵に sarjarasa と云ふ。娑羅樹（sālavṛkṣa）の汁を製したものである。
【四二】以下は使王歡喜法を明

け。卽ち成就することを得ん。

[一〇三]若し雨を祈らんと欲はば、烏圖末羅木（三藏云く其の木梔子に似たり。）を取り、木を燒いて火と爲し、幷に酥・酪・蜜を以て之を燒け。七日の內に於て、卽ち成就することを得ん。

[一〇四]若し一國を護らんとには所求あらば、前の所說の如く、桑の木を取つて之を燒け。

[一〇五]若し長命を欲求せば、十二月の一日より十五日に至るまで、淨潔の食を乞ふて呪を誦じ、總じて三十[一〇六]滿遍に滿し、月盡の日に至り、二日已前より食を喫せずして、黑牛乳一升を取り、呪を誦じて一百八遍に滿し得て、須く香花を以て佛を供養すべし。其の乳を自ら服すれば、卽ち長命を得。若し十日の內に其の酥・酪・蜜を燒き、及び[一〇七]菰蔞草を以てすれば、卽ち長命を得。

[一〇八]若し逆賊を降伏せんことを求めば、獨頭及び[一〇九]婆邏迴を取つて、呪ずること一千八遍、賊をして婆邏迴の聲を見聞し、及び獨頭を見せしめよ。卽便ち自ら縛せられん。

[一一〇]若し一切の草子を少少しく取つて、一の新なる瓶瓮に盛り滿し、水を和して之を誦ずること一百八遍、其の苗子及び水を取つて身に浴せよ。一切の諸惡除かれて、害を爲すこと能はず。

[一一一]若し人有つて諸の毒藥を食せば、孔雀の尾を取り、呪を誦ずること十萬遍せよ。毒を禁じ及び諸の惡病、皆除差することを得。

[一一二]若し一切の天行の熱病には、索を結び呪ずること一百八遍して、其の人の項に繫けよ。一切の熱病に除愈することを得べし。

[一一三]若し佉陀羅木（唐に[一一四]櫁木と云ふ。）を以て火と作し、酪・酥・蜜を相和して火中に燒き、呪ずること一百八遍、一遍ごとに一燒して少少しく之を燒け。卽ち伏藏を得ん。若し紫檀を以て刻んで、蓮花を爲ること滿十萬箇、大江河に於て入ること腰の際に至り、一一に之を呪じて其の水中に放たば、檀花の數に依つて、卽ち金藏を得ん。若し毘利婆木（三藏云く、其の木[一一五]榠樝に似たり。）を以て火と爲し、幷に前に依つて三昧を一

【一〇三】以下は祈雨法を明す。
【一〇四】以下は護國法を明す。
【一〇五】以下は求長命法を明す。
【一〇六】滿。萬の誤か。
【一〇七】菰蔞草。黃烏瓜のこと。
【一〇八】以下は降伏逆賊法を明す。
【一〇九】婆邏迴(Balaka)。鶴の一種。
【一一〇】以下は除諸惡法を明す。
【一一一】以下は禁毒及除諸惡病法を明す。
【一一二】以下は除天行病法を明す。天下の熱病。流行病のこと。
【一一三】以下は得伏藏法を明す。伏藏とは、土中に埋伏せる寶藏を云ふ。
【一一四】櫁木。櫁は我國ではカシと訓ず。
【一一五】榠樝。木葉果實、共に木瓜に似た一種の果。

を熟銅の〔九三〕鈔鑼の中に於て之を安じ、日月蝕の時に至つて、日夜に呪を誦ぜよ。煙出でば、即ち此の藥を以て其の眼中に內れよ。其の持呪の人、即ち形を隱すことを得、隱形の人の與に其の主と爲らん。

〔九四〕若し刀の法を成就せんと欲はば、〔九五〕瘢無き刀を取り、二十三日或は二十九日に於て其の像を供養し、衆生食を散じて自身を護淨し、左の手に刀を執り、呪を誦じて刀の聲出づるに至れ。當に即ち空に騰つて、所願意に隨ふべし。又若し火出でんに、同じく伴ふ所の人、火を見ることを得る者は、並に悉く空に騰り、一切の騰空の人の與に主と爲らん。

〔九六〕若し金剛杵を成就せんと欲はば、好き〔九七〕鋌鐵を取り、長さ十六指にして打つて三稜に作れ。上下〔九八〕各〻三頭に作り、磨るに紫檀を以てして、用て其の上に塗れ。十二月一日より其の像を供養し、一日より始めて四僧の齋を設け、日に漸く一僧を加して、須く呪を持してより十三日に至つて、僧を供養し了るべし。即ち食を喫はず、十五日の夜に至つて〔九九〕舍利塔の前に於て圖像を供養し、然すに酥燈を以てすること一百八盞、自ら茅草に坐して此の呪を受持し、兩手に杵を執り、呪を誦じて之を呪ぜよ。其の杵より即便ち火出でば、其の持呪の人、即ち昇つて仙となることを得。其の同伴等も亦空に騰ることを得、明仙の主と作つて、神力猶し金剛の如く、壽命は一大劫にして、命終已後、金剛菩薩の處に生ぜん。更に若し輪・刀・器仗等の物を、成就することを求めんと欲はば、一ら前の法に依れ。即ち成就することを得ん。

〔一〇〇〕若し家內の諸惡を除かんと欲はば、地に火爐を作り、四邊に蓮花を畫作し、火爐內に桑の木を取つて柴を作り、幷に酪及び酥、蜜を以て、一日三時に呪を誦すること一千八遍せよ。三日の內に至つて、即ち成就することを得ん。

〔一〇一〕若し一城一村を護らんと欲はば、七日の內に於て〔一〇二〕除彌迦木を燒き、及び酥・酪・蜜を以て之を燒

【九三】鈔鑼。ドラのこと。即ち、銅製盆形の器である。
【九四】以下は成就刀法を明す。
【九五】瘢。疵に同じ。
【九六】以下は成就金剛杵(Vajra)法を明す。
【九七】鋌鐵。鋌は樸のこと。
【九八】各作三頭。三股である。
【九九】舍利塔。舍利は具には舍利羅(Śarīra)と云ひ、遺骨の意、塔は塔婆(stūpa)の略。舍利を安置せる塔であるから、爾か云ふ。
【一〇〇】以下は除家內諸惡法を明す。
【一〇一】以下は護城護村法を明す。
【一〇二】除彌迦木。除彌迦は枸杞のこと。

若し大自在天及び諸天等の前に於ては、七日の內に呪を誦ぜよ。若し身を現ぜずんば、卽ち頭をして破れしめん。

[八四]若し日月蝕の日、須むる所の湯丸藥等を和合せんには、先づ須く預め備へ、其の日に呪を誦じて日月の明淨なるに至るべし。其の藥等の法、速に卽ち成就せん。

[八五]若し婦人有つて男女を求めば、先づ其の呪を誦ずること一百萬遍、沈水香を燒いて供養せよ。須、く十二月一日より起首して十五日に至るまで、道場の中に於て供養し、幷に三七の僧齋を設くべし。其の婦人は一日三時に香を燒き、呪を誦じて心に念じ、發願して男女を請求せよ。其の十五日の夜二更の時に、烏油麻を取り酥を以て之に和し、呪を誦ずること一遍して一廻之を燒き、一百遍を滿せよ。其の夜の[八六]四更に當に境界、或は菩薩の形狀等を見ば、卽ち自ら之を知るべし。若し彼の婦人の心中に念ずる所、便ち其の願を獲んとならば、香を燒いて常に像の前に於て、此の呪を持念せよ。卽ち成就することを得ん。

[八七]若し隱形を求めば、雄黃藥を取れ。[八八]一小兩の中の[八九]半兩なり。人の乳を取り、和合して以て五丸と爲し、沈水香を取り、合子を作つて之を盛り、一丸を取つて一千八遍を誦ぜよ。及び白芥子も亦五顆を以て、一千八遍を誦じて、一一に並に合の內に於て之を盛れ。須く日月の蝕の日に至つて呪を誦ずべし。其の合子の內に、若し其れ聲有らば、一切衆生此の呪人を見て、悉く皆歡喜し、須むる所皆得ん。若し其れ煙を出さば、其の持呪の人、卽ち身を現ぜず、至る所の諸の處に、皆其の主と爲つて、壽命は一小劫ならん。若し火焰を出さば、其の持呪の人、身卽ち端正にして猶し天童の如く、年十六に似、諸の天神の與に主と爲り、壽命は一大劫にして、百寶藏門悉く皆自ら現ぜん。

[九〇]若し牛黃の法を成就せんと欲はば、一ら雄黃の法に依つて作すべし。

[九一]若し眼藥の法を成就せんと欲はば、[九二]石安善那及び青蓮華・青木香・各々重さ一錢を取れ。其の藥

【八四】以下は成就湯丸藥法を明す。

【八五】以下は求男女法を明す。

【八六】四更。丑刻、卽ち午前二時。

【八七】以下は隱形法を明す。

【八八】一小兩。十錢。

【八九】半兩。五錢。

【九〇】以下は成就牛黃法を明す。牛黃とは、藥種中最も貴いもので、或は牛の膽中に之を得、或は口より之を吐くと。

【九一】以下は成就眼藥法を明す。

【九二】石安善那。安善那は梵に añjana と云ふ。礦石に似てゐる所から石安善那と云ひ、青黑色で、或は眼藥とし、或は隱形藥として用ふと。

伐吒木を用て柴と爲し、唐には多根木と云ふ。三藏云く、廣州より出づるなりと。酪・酥・蜜の飯を内に於て之を燒け。意に藥叉を呼喚して來らしめんと念ぜば、其の酥・酪・蜜の飯を以て呪を誦すること一千八遍して、其の食を一呪一燒せよ。當に毘沙門・諸藥叉衆等、速に彼の處に來ることを得べし。曷迦木の花を取つて、前に於て之を迎へよ。諸の藥叉の曰はく、當に須く我等をして、何事をか作さしむべきやと。彼れ即ち告て言はく、毎日須く一の藥叉をして、我が門戸を守らしむべし。作さしむる所の事をば、即ち當に之を作すべし。須むる所の物をば、當に能く之を來すべし。若し乘騎を須めば、即ち之に騎ることを得べし。若し長年の藥を須めば、當に即ち之を與ふべしと。

〔七八〕若し金剛神を降伏せんと欲はば、先づ須く四千三十二萬遍を誦ずべし。十二月一日より正月十五日に至つて、須く佛を供養し、幷に三七の僧齋を設くべし。當に須く發願して、此の供養の功德を以て金剛に廻施すべし。夜の二更の時に當り、起つて結加坐し、其の火の中に於て、〔七九〕安息香を燒いて呪を誦ぜよ。其の香丸は梧桐子の大さの如し。誦ぜん時、意に金剛神を見んと念ぜば、呪じて三更に至れ。即ち當に雷鳴り、地動じ、天より種種の妙花を雨すべし。金剛即ち來らん。及び一切の〔八〇〕天龍八部菩薩等、來つて共に圍繞せん。其の持呪の人、香湯水幷に花を取り、出で迎へて恭敬し禮拜せよ。金剛當に即ち告て曰ふべし。汝、何の願をか求むるやと。乞ふに隨つて皆得て、壽命一劫ならん。若し此の身を捨てば、即ち金剛の住處に生ぜん。

〔八一〕若し餘の明仙を成就せんと欲はば、亦須く此の金剛の法を作すべし。即ち當に之を成ずべし。

〔八二〕若し佛の呪法を成就せんことを須めん者、及び觀世音の呪法、梵天の呪法、大自在天の呪法、及び世出世に須く此の法を作すべし。

〔八三〕若し餘の呪を持して成就せずんば、即ち須く此の呪を餘の呪と共に、七日の内に之を誦ずべし。即ち成就することを得。若し其れ成ぜず、及び現驗せずんば、其の呪神等、即ち當に滅亡すべし。

【七七】毘沙門（Vaiśravaṇa）。多門と譯ず。四天王の一で、北方を鎭護する財寶神である。

【七八】以下は降伏金剛神法を明す。

【七九】安息香。梵に guggula と云ひ、安悉香とも譯す。安息香樹の樹皮から取つた脂汁塊で、燒香或は藥膏に用ふ。

【八〇】天龍八部。天（Deva）・龍（Nāga）・夜叉（Yakṣa 勇健）・乾闥婆（Gandharva 尋香）・阿修羅（Asura 非天）・迦樓羅（Garuḍa 金翅鳥）・緊那羅（Kiṃnara 人非人）・摩睺羅伽（Mahoraga 大腹行・大蟒）。右の八部衆中、天龍が特に勝れて居るから、天龍八部と云ふ。

【八一】以下は成就餘明仙法を明す。

【八二】以下は成就諸呪法を明す。

【八三】以下は成就餘明法を明す。

衆の與に王と爲らん。一切の天龍、持呪の人を見ば、即ち當に禮拜供養すべし。壽命は一大劫ならん。彼に於て命を捨て、即便ち金剛の地に生じて金剛の境界を見ん。

〔六九〕若し像を成就せんと欲はば、一の像を畫け。像より火出づるに當り、即ち虚空に騰つて明仙と作ることを得ん。

〔七〇〕若し別の法を成就せんと欲はば、先づ此の呪を誦ずること十萬遍、一日一夜、必ず須く斷食して大供養を設くべし。〔七一〕遏迦木を取つて火を作り、烏麻と牛酪と酥と蜜とを呪ずること一千八遍して、少少其の火中に投げば、即ち成就することを得て、心の所願のもの皆圓滿することを得ん。

〔七二〕若し大自在天を降伏せんと欲はば、先づ須く大自在天を供養すべし。南邊に坐せしめ、烏麻等の四物を火燒くことを作し、呪を誦じて一千八遍を滿足せよ。自身先づ須く潔淨防護すべし。呪を誦ずること七遍して、水を以て身を灑げ。時に當つて即ち聲出づること有らん。恐懼すべからず。大自在天當に即ち身を現じて、願ふもの皆得べし。

若し〔七三〕那羅延及び梵天王等を成就せんと欲はゞ、當に此の法を作すべし。即ち成就することを得。先づ須く自身を護すべし。

〔七四〕若し須く藥叉如母及び姉妹妻を喚ぶべきには、無憂花を取り、彼の名を誦念して、一日三時に其の花を呪じ、一百八遍に至つて火の内に之を燒け。七日の內に於て即ち能く至ることを得、願ふものは皆得。若し母及び姉・妹・妻、若し七日の內に來らずんば、彼の藥叉の頭破れて、當に即ち降伏すべし。

〔七五〕若し諸龍を喚ばんには、當に龍華を取つて、燒くこと上の法の如くすべし。

〔七六〕若し藥叉を呼喚せんと欲はば、三月の內に酪飯を取り、日に三時、各ゝ呪ずること一百八遍して、月盡の日に至れ、一日一夜、當に須く斷食して佛像を供養すべし。諸の藥叉等、須く飲食を與ふべし。

白傘蓋と譯し、佛頂呪の異名である。故に大佛頂悉達多鉢多囉呪は、大佛頂如來心呪に同じ。

【六八】此の呪。一字の呪を指す。

【六九】以下は成就像法を明す。

【七〇】以下は成就別法を明す。

【七一】遏迦木。榅桲のこと。

【七二】以下は降伏大自在天法を明す。大自在天は梵に摩醯首羅（Maheśvara）と云ひ、八臂三目を有し、白牛に騎り、白拂をとり大威力ありと云ふ。正法に害を爲す魔王で、或は色界の主、或は第六欲天（他化自在天）の主と稱せらる。

【七三】以下は召那羅延（Nārāyaṇa）及梵天王（Brahman）法を明す。那羅延(Nārāyaṇa)は堅固力士と譯し、毘瑟紐(Viṣṇu)の化身である。大象の七十倍の力ありと云ふ。

【七四】以下は喚藥叉(Yakṣa)女母姉妹妻法を明す。藥叉(Yakṣa)は譯して輕捷鬼と云ふ。飛行迅速の鬼類である。

【七五】以下は喚諸龍法を明す。

【七六】以下は喚藥叉法を明す。

ん。

五九 若し死人の法を成就せんと欲はば、六〇瘡瘢無く未だ損壞せざる者を取り、將ゐて壇の中に於て其の地上に臥せしめ、面をして上に向はせ、四箇の六一佉陀囉を作つて、一色の木を用て橛と爲し、其の脚手に繫けよ。持呪の人は心上に坐し、寶物を擣き末と爲して少少之を取り、一一に呪を誦じて死人の口中に內れ、死人口を開いて舌上に如意寶珠を吐出すに至れ。其の寶を取り得ば、即ち明仙の間に於て轉輪王と爲り、心の所願に隨つて、器仗即ち自ら現じ來らん。其の身に光明を出現し、四方一百餘驛を照し得て、壽命自在ならん。意に若し他の世界に王と作らんと須めば、即ち能く意の如く命を捨てゝ、能く六二無垢世界に生ぜん。

六三 若し第二の死人の法を成就せんと欲はば、一ら上の說に依り、橐の木を取つて橛と爲せ。即ち鐵末を以て一一に呪を誦じて、少少死人の口中に內れ、其の舌を出すに至つて、即ち其の舌を割れ。同伴の人と共に亦虛空に騰つて、所願即ち得、壽命一小劫ならん。若し此に於て命を捨てば、一六四贍部洲に生じて王と爲ることを得ん。

六五 若し鉤の法を成就せんと欲はば、茅草を取つて一の鉤を作れ。一の手の大さの如くして、六六五牛物の中にて之を洗ひ、一日一夜斷食して、而も其の鉤を取つて手に執ち、金剛菩薩を供養し、一百盞の酥燈を然して、先づ六七大佛頂悉達多鉢多囉の呪を誦じ、以て其の身を護して後に六八此の呪を誦せば、能く成就せしめん。前の輪の法の如く、若し一日光明所照の處を經んとならば、一の土壇を積み、即ち橐木を用て四箇の橛を作り、之を呪すること七遍して、一一の角の中に釘著せよ。便ち當に十方法界を結得すべし。第二更の中に於て結加趺坐して、一心に彼の鉤を供養し、一切の佛及び菩薩を頂禮せよ。當に彼の鉤を取り、手に執つて呪を誦ずべし。所有の地獄の受苦の衆生、即ち能く苦無けん。持呪の人、當に即ち聲を聞きて虛空に飛騰すべし。手に此の鉤を把らば、一切の明

【五九】　以下は成就吠多羅法を明す。吠多羅(vetāla)を今は死屍の意に取る。

【六〇】　瘡瘢。瘢痕のこと。

【六一】　佉陀囉。梵に khadira と云ひ、紫橿・檜木と譯す。

【六二】　無垢世界。八歳の龍女が男子と變じて、成佛した世界の名で、南方に位す。

【六三】　以下は又法を明す。

【六四】　贍部洲。南贍部洲(Jambu-dvīpa)のこと。舊には南閻浮提と云ふ。閻浮は即ち贍部(Jambu)で樹の名、提(Dvīpa)は洲と譯す。吾人の住する世界を總稱したもので、此の洲の中地に贍部樹が多く茂生する所から、贍部洲と云ひ、須彌山(Sumeru)より南方の鹹海中に位するから南と云ふ。この國は壽命短夭、果報悲愁の苦があるけれ共、値佛聞法に於ては、他須彌山の東・西・北の三洲の及ばざるところとせらる。また淫欲を斷じ、識念力あり、能く精進勇猛なること諸天に越ゆ。故に此の國は佛果の妙證を得るに最も適し、この國に生るゝは、吾人の至大の幸福とせらる。

【六五】　以下は成就鉤法を明す。

【六六】　五牛物。乳・酥・酪・糞・尿。

【六七】　大佛頂悉達多鉢多囉。悉達多鉢多囉(Sitātapatra)は

く其の所に至り、持法の人を將ゐて明仙の處に入り、卌立して王とせん。其の人、身力金剛菩薩に同如じからん。若し意に所在の處に往かんと欲はば、意に隨つて無礙ならん。壽は一大劫にして、能く彌勒菩薩の正法を說き給ふ處を見ん。若し生處を樂求せば、自在に意の如くにして、卽ち往生することを得ん。

〔五四〕若し雄黃の法を成就せんと欲はば、好き者の〔五五〕一兩を取れ。鬼星の現る丶夜、三日斷食し、又衆僧の食を設け、其の衆の前に於て合掌して從つて進止を乞へ。若し衆僧許さば世尊を供養し奉り。一切衆生に於て慈悲の心を發し、其の佛前に於て一千盞の牛酥の明燈を然せ。呪を持するの人、自身を佛に施して、作法し竟已つて乞願し、當に其の雄黃を取つて呪を誦ずべし。若は熱、若は煙、若は火光出でん。三相を現し已んなば、少しく雄黃を取つて、眉間に點著せよ。一切の天龍・鬼神及び人・非人卽ち來つて奉事せん。其の持呪の人、壽命は千年ならん。若し額の上に點ぜば、卽ち身を現ぜず、天神も亦見ること能はず。若し現ぜんと欲須せば、亦意に隨ふことを得ん。壽命は三千年ならん。若し現に火出でば、卽ち明仙と成らん。所有の同伴並に虛空に騰つて、諸の仙人に勝れ、壽命は一劫ならん。若し此の身を捨てば〔五六〕覩史天に生ぜん。

〔五七〕若し戟を執る法を成就せんと欲はば、當に好鐵を用て戟を爲るべし。一周年の間、戟を執つて呪を誦じ、沙を取つて一の塔を作り、前に於て食を著いて衆生に施與し、其の塔の前に於て左の手に戟を執り、〔五八〕加趺して呪を誦ぜよ。卽ち種種の光明を出して、呪を持するの人、卽ち虛空に騰らん。大自在天衆、持法の人を迎へ、種種の好花を以て身に散じて圍遶せん。餘の見る所の人も、皆共に空に騰らん。彼の持法の人、能く大王と爲らん。常以に大自在天・諸の天仙人、皆來つて恭敬し、壽命は一大劫ならん。若し惡心有つて來り相向はば、當に卽ち墜落すべし。諸天龍鬼すら尙惡むこと能はず、何に況や凡夫をや。若し此の身を捨てば、西方極樂世界に生ずることを得

明す。
〔五三〕鐵鋌。鋌はアラガネ。
酥・酪。酪とは乳から取つたものを云ひ、酥とは酪を更に精製したものを云ふ。
〔五四〕以下は成就雄黃法を明す。
〔五五〕一兩。唐の一兩は、卽ち十錢目である。
〔五六〕覩史天。都史多天の略。舊に兜率と云ふ。梵語 Tuṣita の音を寫したもので、譯して上足・妙足・知足・喜足などと稱す。五欲天中の一で、夜摩天と樂變化天との中間に位し、下から第四重の天である。この天に內・外の二院あつて、內院は彌勒菩薩の淨土、外院は天衆の欲樂處である。
〔五七〕以下は成就戟法を明す。
〔五八〕加趺。結跏趺坐の略。跏は足を組む義、趺は跗に同じく足の甲を云ひ、兩足を交結して、足の甲を更互に兩髀の上に安ずる坐相を、結跏趺坐と云ふ。

十三日及び月盡の日なり。身變化することを得て、十五日の内に必ず成就することを得ん。若し此れ成就せば、一切諸法も亦成就することを得、一切の神通及び一切の佛菩薩の法を得。此の世界の中にして轉輪王と作り、千子圍遶せん。

【四七】若し佛頂の法を作さんと欲はば、金、或は銀、或は銅、或は鑞の、一手掌の大さの如きを用て、佛頂の如くし、如上の法に依つて呪を誦ぜよ。頂より火光を出して、即ち空に騰ることを得、一切衆生の與に説法して、壽命一大劫ならん。

【四八】若し如意瓶の法を成就せんと欲はば、當に一の金瓶を作るべし。一切の穀子、一切の藥子、及び諸の寶物を以て、其の瓶の中に滿し、其の瓶の上に白淨の疊布を蓋ひ、【四九】臘月の一日より起首して呪を誦じ、一周年に至れば、即ち成就することを得て、其の瓶の中に於て、所須の物、常に取るとも盡きざらん。

【五〇】若し其れ如意寶を得んと欲はば、若は金、若は寶、若は水精、一ら前の法に依り、布を以て上に蓋て、呪を誦すること一年せば、速に成就を得て所求皆得ん。若は天中に在り、若は人間に在らんに、手に此の寶を持せば、即ち【五一】轉輪王と作らん。彼の像の前に於て、呪を誦すること萬萬遍せば、即ち虚空に騰つて、壽命一大劫ならん。

【五二】若し金剛杵の法を成就せんと欲はゞ、紫檀を以て金剛杵一枚を爲れ。若し紫檀無くんば、【五三】鐵鋌も亦得。五の牛物を以て之を洗へ。五牛物とは、謂ゆる乳・酪・酥・糞・尿なり。常に臘月十五日を以て、其の像の前に於て清淨にして廣く供養を設け、一百盞の牛酥を然して燈となせ。又香湯を以て金剛杵を洗へ。其の持法の人、身を以て一切の諸佛菩薩に布施せよ。後に於て轉輪王の呪を用て其の身を護り、十五日の夜の二更の中に至つて、其の右手を以て金剛杵を執り、當に像の前に於て一心に呪を誦すべし。其の金剛杵、遂に火焰を現ぜん。一切の天仙諸龍鬼等、其の部衆と與に咸

す。

【四五】以下は得神通變化法を明す。

【四六】白月。黑月に對する語。十五夜の滿月より、前十五日を白月と云ひ、後十五日を黑月と云ふ。この一月兩分の名は、月の盈缺を以てする印度の曆法に由來す。

【四七】以下は成就佛頂法を明す。

【四八】以下は成就如意瓶法を明す。

【四九】臘月。十二月のこと。

【五〇】以下は成就如意寶法を明す。

【五一】轉輪王。梵に Cakra-vartti-rājan と云ひ、譯して轉輪聖王、轉輪聖帝、或は單に輪王と云ふ。此の王は身に三十二相を具し、位に卽く時、天より輪寶を感得し、其の輪寶を轉じて四方を降伏するから、轉輪王と稱す。增劫には人壽二萬歲以上に至れば出世し、減劫には人壽無量歲より八萬歲の時までに出世す。其の感得の輪寶に、金・銀・銅・鐵の四別あるに隨つて、輪王に四種を成し、金輪王は東・南・西・北の四洲を、銀輪王は東・西)南の三洲を、銅輪王は東・南の二洲を、鐵輪王は南閻浮提の一洲を領す。

【五二】以下は成就金剛杵法を

【三八】八戒を受持して、當に世尊を畫いて、轉輪王の像の說法の容に作すべし。一切世界主の座の下に、梵王・聖金剛菩薩を畫け。佛の上に雨花蠻天子を畫き、【三九】座の下に持法の人を畫け。

爾の時に世尊釋迦牟尼、復妙吉祥童子を觀じて告て言く、諦かに聽け、妙吉祥童子、[1]一[3]字轉輪王大威德の、[2]略して[4]畫像の法を說きつ。我れ今之を說くことは、惡時の衆生をして安樂を得しめんが故なり。

【四〇】若し作法せんと欲はゞ、手に香爐を持して、諦かに佛の面を觀たてまつれ。其の像の面を以て西方に向け、前に於て種種の香花を以て供養し、持法の人、每日三時に【四一】沈水香を燒き、面を佛像に向け、此の神呪を誦ずること滿一百萬遍して、然して後に作法せよ。持法の人は、須く戒を持すべし。每に須く三日食を喫すべし。謂ゆる乳・酪・粳米なり。【四二】齋を破することを得ざれ。一切衆生に於て慈念の心を發し、菩薩戒を持せよ。此の人、凡そ功德の事を作さんと欲する所、及び一切の病を療せんに、皆意の如くなることを得ん。常に須く一切の三寶を供養すべし。

【四三】若し輪の法を成就せんと欲はゞ、鐵を以て輪を作り、其の輪を二轂にせよ。佛像の前に於て一の方壇を立て、月の一日より十五日に至るまで、三時に洗浴して沈水香を燒き、呪を誦じて百萬遍に至れ。常に諸花を用て供養を爲せ。十五日已んなば、更に一の壇を作つて、中に其の輪を安じ、兩手を以て上に蓋て、至心に呪を誦ぜば、輪より火光を現じて、當に持法の人、能く虛空に昇つて、明呪の中に於て其の仙の主と爲るべし。若し餘人も見ば、亦空に騰ることを得ん。

【四四】若し傘蓋の法を成就せんと欲はゞ、新なる白傘蓋を作り、種種の金銀寶物を以て莊嚴し、內に一口の幡を懸て、手に其の傘を把り、一ら前の法に依つて呪を誦せば、當に即ち火出づべし。其の持法の人、即ち虛空に騰ること、皆上の說の如くならん。

【四五】若し作法せんと欲はゞ、【四六】白月十五日及び五節の日を取れ。謂ゆる月の八日・十四日・十五日・二

【三八】八戒。具には八齋戒・八關齋・八支齋と云ふ。俱舍論では、殺生・不與取・非梵行・虛誑語・飮諸酒・塗飾香鬘舞歌觀聽・眠坐高廣嚴麗床上・食非時食の八種の非法を離るゝを云ひ、薩婆多論・成實論・智度論では、塗婆香鬘と舞歌觀聽とを分けて二となし、總じて九戒を立て、此の中、前の八は戒で、後の一は齋であるから、前後合せて八戒齋と名くと云ふ。此の八戒は在家の男女が、一日一夜受持する戒法である。

【三九】座の下。聖金剛菩薩の座の下を指すか。

1、3、2、4、亂脫。

【四〇】以下は念誦法式を明す。

【四一】沈水香。梵に agaru と云ひ、また速香・紫丁香・沈香水沈などと譯す。沈水香とは、木の心節を水に置くと沈む所から、其の名を得たのであると。

【四二】齋。或は時に作る。齋とは不過中食、時食のこと。齋食とは不過中食の法を指す。凡そ戒律の上では、食に就て時非時を分ち、正午以前を正時、以後を非時とし、正時には食す可く、非時には食す可からずとす。故に齋食とは時中の食、即ち正午以前に作す食事を云ふ。

【四三】以下は成就輪法を明す。

【四四】以下は成就傘蓋法を明

[三三] 若し眞の婆羅門を降伏せんと欲はば、好名花及び白芥子を取つて、一ら前の法に依れ。即ち意の如くなることを得ん。

[三四] 若し筏舍の人を降伏せんと欲はば、酪・乳・酥を取つて、一ら前の法に依れ。即ち成就することを得ん。

[三五] 若し戍達羅を降伏せんと欲はば、酥を取り土に和して、一ら前の法に依れ。

[三六] 若し一切の惡人及び惡星宿を降伏せんと欲はば、酥及び油麻を取り、之を燒くに一ら前の法に依れ。

上に說く者の如きは、須く七日の內に三時に藥を燒き、洗浴して、呪を誦すること一百八遍すべし。即ち成就することを得ん。

爾の時に世尊、斯の語を說き已つて、文殊師利を呼んでの給はく、汝が呪法の中に、上の如くの威力あり。後末世に於て、此の法能く一切衆生をして、受持し行用せしめん。更に種種の諸法あり。我れ今略して說かんと。

此の語を說き已つて、爾の時に世尊、默然として住し給ふ。時に四部の大衆、白して言さく、世尊、唯願くば慈悲を以て、更に餘の法を說き給へ。未來の衆生に安樂を得しめんが故にと。

爾の時に釋迦牟尼佛、復た更に淸淨天宮を觀察して、妙吉祥童子に告て曰はく、善く聽け、我れ今略して一字轉輪王の威德の呪及び畫像の法を說かん。惡世の有情の精進に少しく、明慧に少しく、廣く畫像の法を受持すること能はざる者をして、我れ今略して畫像の法を說かん。諸の有情を利益せんと欲ふが爲の故にと。速に吉祥の義を得せしめんが爲の故に。

[三七] 若し最勝の法を受持せんと欲はば、新白疊の長け一丈、濶さ六尺にして、未だ縷を斷たさるものを取れ。膠を以て彩色と爲ること勿れ。其の畫像師は、香湯を以て洗浴して新淨の衣を著し、

【三三】以下は降伏婆羅門(Brāhmaṇa)法を明す。

【三四】以下は降伏筏舍法を明す。筏舍(Vaiśya)とは印度四姓の第三、商賈の族を云ふ。

【三五】以下は降伏戍達羅法を明す。戍達羅(Śūdra)とは同じく印度四姓の第四、農人奴隷の族を云ふ。

【三六】以下は降伏惡人及惡星宿法を明す。
1、3、2、4、闕說。

【三七】以下は畫像法を明す。

に作り、意を彼の人に屬けよ。卽ち成就せず。

若し彼の前の人をして成ぜしめんと欲はゞ、卽ち其の拳を開け。還て故の如くなることを得ん。

若し此の法を作さんと欲はゞ、先づ須く洗浴して鮮淨の衣を著すべし。自の法、卽ち成就することを得ん。

[二一]若し他人を護持して、一切の惡鬼、皆敢て近かざらしめんと欲はゞ、當に此の呪を誦ずべし。自身を護る所、他人を護る所、鬼神を呼ぶ所、鬼神を遣ふ所、求むる所の事業、並に此の呪を用ゐよ。

[二二]若し諸の呪を持するに、神驗あること無くんば、爲に此の呪を誦ずること一百萬遍せよ。卽ち所得の境界を成就することを得ん。若し効驗無くんば、[二三]其の神、當に卽ち消滅すべし。

[二四]若し天神來つて爲に給使せんことを欲はゞ、當に油・麻・酥・蜜・酪等を取つて之に和し、少し一撮を取り、一たび呪じて[二五]「一遍」一たび火中に投れて之を燒き、一百八遍に滿し、一日に三時して、七日の內に至るべし。其の神、卽ち來つて、便ち使者と爲らん。

[二六]若し諸天を降伏せんと欲はゞ、[二七]天蓼木一百八片を取り、一一に呪を誦じて、其の火中に投れよ。

[二八]若し其の神を降さんと欲はゞ、其の名字を念じ、一日三時に作法して、七日の內に至れ。速に來り降伏せん。

[二九]若し諸の龍女を降伏せんと欲はゞ、酪・蜜・乳を取り、一日三時に一百八遍を誦じて、火中に於て燒き、七日の內に至れ。卽ち成就を得ん。

[三〇]若し藥叉及び藥叉女を降さんとならば、一ら前の法に依り、酪飯を取つて之を燒け。卽ち成就を得ん。

[三一]若し健達縛及び其の女を降伏せんと欲はゞ、一切の香を燒き、一ら前の法に依つて、種種の花を燒け。一切の[三二]八部女神、卽ち來つて降伏せん。

【二一】若し。以下は護他人、遠惡鬼法を明す。

【二二】若し。以下は成就諸呪法を明す。

【二三】其の神。法の如くして成就せざる時は、本尊を治罰す。

【二四】以下は天神給侍法を明す。

【二五】一遍。此の二字は餘分か。

【二六】以下は降伏諸天法を明す。

【二七】天蓼木。杉木の一種か。

【二八】以下は降伏本神法を明す。

【二九】以下は降伏諸龍女法を明す。

【三〇】以下は降伏藥叉及藥叉女法を明す。

【三一】以下は降伏八部女神法を明す。

【三二】八部。具には八部鬼衆と云ふ。乾闥婆(Gandharva 尋香鬼)。毘舍闍(Piśāca 食血肉鬼)・鳩槃荼(Kumbhāṇḍa 甕形)・薜荔多(Preta 餓鬼)・龍(Nāga)・富單那(Pūtana 臭餓鬼)・夜叉(Yakṣa 勇健鬼)・羅刹(Rākṣasa 捷疾鬼)。

諸の佛子等に告ぐ　汝等今善く聽け　我れ今此の呪の　諸の功德を具足せるを說かん
當來惡世の時に　我法將に滅せんと欲せんときに　能く此の時の中に於て　我が末法を
護持し　能く世間の惡毒害の　諸の鬼神と　及び諸の天と魔と人との　一切の諸の呪
法を除く　若し此の呪の名を聞かば　皆悉く自ら摧伏せん　我が滅度の後に　舍利[一七]を
分布し已つて　當に諸の相好を隱し　[一八]身を變じて此の呪と爲るべし　佛に二種の身あり
眞身と及び化身となり　若し能く供養する者は　福德異ること有ること無し　此の呪も
亦是の如し　一切の諸の天人　能く希有の心を生じて　受持し及び供養せば　得る所
の諸の功德　我身の如くして異ること無けん　此の呪王の功德　我れ今但し略して說か
ん

爾の時に世尊、此の頌を說き已つて、諸の衆會の爲に、斯の轉輪王如來の頂髻の法を說き、能く他の法をして速に卽ち毀壞せしめ、能く自の法をして速に成就を得せしむ。一切の菩薩の共に讃歎する所なり。之を誦念する處は、四方面の[一九]五百驛の內に於て、一切の惡鬼皆自ら馳散す。一切の呪師、其の本法を行ずるに、此の呪を聞き已んなば、皆悉く摧壞し、一切の諸天の所有の神通皆悉く退失す。其の持呪の者、他の法を滅せんと欲せんに、他の法に滅せられず、持呪者の存念する所の處に由つて、一切の世間及び出世間の諸の持呪者、及び諸の惡星、摧伏せずと云ふこと無けん。

[二〇]若し善男子、大乘を護らんが爲、若は自身の爲、若は怨敵に對せんに、手を以て一把の青草を執り、呪すること一百八遍して、意に彼の人を忿り、刀を以て草を斬り、彼の法を壞すと念ずべし。卽便ち斷壞せん。

若し彼の前の人をして、呪法成就せざらしめんと欲はば、呪を誦ずること七遍して、手を以て拳

二人以上部黨を組んで修行得果する部行獨覺との、二種類がある。

【一七】舍利（śarīra）。佛の身骨を指す。

【一八】身を變じて……。生身の佛圓寂して舍利と成り、舍利身變じて文字と爲る。是れ生身、法身と成る深旨である。

【一九】五百驛等。五百驛とは、五百由旬（yojana）のこと。輪王一日の行程である。故に驛と云ふ。之を一字金輪の五百由旬斷壞の德と稱す。

【二〇】若し善男子。以下は降伏惡人法を明す。

部（上聲）林（去聲）此れは是れ唐音舌を彈じて之を呼べ

爾の時に釋迦牟尼佛、復た諸の天仙衆に告げ給はく、汝等諦かに聽け。[八]妙吉祥童子、此の[九]陀羅尼において、我れ今、曼陀羅の法、及び念誦の法、[一〇]火食を設くるの法を說いて、速に成就せしめんと欲す。若し人有つて、能く此の陀羅尼最勝の妙法を持せんに、若し吉祥の日と、及び諸星等とを知らずとも、汝諸の天神、障礙を爲すこと勿れ。若し能く我が敎法を行ずる者あらば、汝等天衆、是の人を護持せよ。一切の鬼神、及び諸の毒惡の[一一]毘那夜迦等も、亦當に守護すべし。損害することを得ざれ。方便をもて護念して、[一二]十力の敎の中に於て、信解を生ぜしめよ。是の語を說き已つて、即ち[一三]三摩地に入り給ふ。謂ゆる一切如來頂生三昧なり。諸の有情の不善業を除かんが故に。爾の時に世尊、彼の三摩地に入り已り給ふに、十方の諸佛、如來の淸淨天宮に在すを觀察して、一一に皆來り集會して、各〻釋迦牟尼佛に、呪を說き給へと請し奉り、而も頌を說いて曰はく、

佛大威德を說き給ふことは　諸の有情を利せんが爲なり　能く一切の呪を成ず　願あるは皆滿足す
一切の佛已に說き給へり　此の呪王の威德は　能く諸の呪の中に於て　一字にして尊上たり
頂より生じて大威德あり　其の力は思議し難し　善く諸の妖邪を除き　諸の惡星宿と
毒害の[一四]母神等と　及び彼那夜迦と　惡類の諸鬼神との　有情を逼惱する者を退く
當來濁世の中にして　誦持すれば安樂を得　善哉[一五]天人師　願くは衆生の爲に說き給へ

爾の時に十方の諸佛、此の頌を說き已つて、默然として住し給ふ。爾の時に當つて、三千大千世界の一切有情の所住の處、忽然の間に、大火焰を放つて威光赫耀す、而も皆一有情の類をも損せず。爾の時に釋迦牟尼如來、一切の淸淨天宮を觀察して、諸の菩薩摩訶薩、及び諸の[一六]緣覺・聲聞・天仙の諸の大衆に告て言く、汝等諦かに聽け、即ち頌を說いて曰はく、

【八】　妙吉祥童子。文殊師利法王子（Mañjuśrīkumārabhūta）のこと。

【九】　曼陀羅。曼荼羅（Maṇḍala）。

【一〇】　火食。護摩（Homa）のこと。供物を火中に投じて諸尊聖衆に供養す、是れ即ち護摩法であるから、爾か云ふ。

【一一】　毘那夜迦（Vināyaka）。常隨魔と譯す。人身にして象鼻、常に人に隨侍して、障難を爲す惡鬼神である。故に又障礙神とも云ふ。

【一二】　十力の敎。佛は十力を有し玉ふから、佛の敎を總稱して十力の敎と云ふ。

【一三】　三摩地（samādhi）。等持と譯す。平等に任持する意。即ち、能觀の心と所觀の法と、一如一相と成る義。

【一四】　母神。七母鬼神を指す。

【一五】　天人師（Deva-manuṣya-śāstṛ）。如來十號の一。如來は天と人との敎師であるから、天人の師と名く。今は釋迦牟尼如來を指す。

【一六】　緣覺（Pratyekabuddha 辟支佛）。新に獨覺と譯す。無佛世に出でて、或は十二因緣の理を觀じて斷惑證理し、或は飛華落葉の外緣に因つて、自ら無常の理を感じて得悟するもの。この緣覺に、唯獨り修行して悟を開く麟角喩獨覺と、

大陀羅尼[一]末法中一字[二]心呪經

大唐天竺三藏寶思惟詔を奉じて譯す

是の如く我れ聞きき。一時佛、淨居天[三]宮の不可思議の種種の莊嚴ある一切菩薩の衆會の中に在して住し給ふ。及び諸の天龍・藥叉[四]・健達縛[五]・阿素洛[六]等、星宿・天仙ありき。皆是れ十地の菩薩の方便化現にして、此の會に在り。爾の時に世尊、蓮華藏界に坐し、大衆・諸の天仙等を觀察して、後末世の時の一切衆生を利益せんと欲するが爲の故に、一切如來最上大轉輪王頂の三昧[七]に入り給ふ。卽ち眉間より一の大光を放つ。其の光普く十方世界の一切の佛刹に遍ず。其の中の衆生、斯の光に遇ふ者、歡悅せずと云ふことなし。其の光遍じ已るや、佛の所に還り至り、圍遶すること三匝して、如來の頂に入る。入る時に當つて、復種種の莊嚴の相を現ず。其の光の内に忽に聲有つて曰はく、我は是れ大轉輪王一字の呪なり、無量の天仙、恭敬し圍遶せりと。爾の時に、光中に復た聲を出して告て曰はく、釋迦如來、我は是れ一切如來の智慧、轉輪王の一字心呪なり。一切の過・現・未來の一切諸佛に於て、我は是れ最上の祕密心呪なり。寶蓋佛・娑羅樹王佛・無量光佛・無勝佛・妙佛眼・妙幢佛・花王佛、彼等の諸佛普く皆已に說き、一切の過去の無量の諸佛も亦皆隨喜し給ふ。汝今當に未來の衆生の爲に、斯の呪を敷演して、諸の衆生をして大利益を獲しむべしと。爾の時に世尊、斯れを見聞し已つて、諸の大衆に告げ給はく、汝等當に知るべし、云何なるをか名けて、一字の轉輪王の呪とする。卽ち呪を說いて曰はく、

(梵字) 此れは是れ梵本一字の呪なり

【一】大陀羅尼。金輪の陀羅尼(dhāraṇī)のこと。

【二】一字。(梵字)(bhrūṃ)の一字を云ふ。

【三】淨居天(Śuddhāvāsa-deva)。色界第四禪天中の一天である。この天には異生の雜なく、たゞ欲界九品の思惑を斷盡して、不還果を證した聖者のみ居るから淨居天といひ、また不還天とも云ふ。これに五等の差別がある。

【四】藥叉(Yakṣa)。勇健と譯す。

【五】健達縛(Gandharva)。尋香と譯す。

【六】阿素洛(Asura)。非天と譯す。

【七】三昧。三摩地(samādhi)の訛、靜慮又は等念の義。能觀の心と所觀の法と、一如一相と成る意。

亦之に參加す。神龍二年以後は、更に譯經に從事することなく、精勤禮誦、毎晨朝香を磨して水と爲し、佛像を塗浴し、然る後食を攝り、衣鉢の外は隨つて得れば隨つて施す等、恒に福業を修す。後請うて龍門山に、外國の法式に則つて一寺を建立して、天竺寺と號し、制度等都て西域に倣ひ、門徒學侶と同居してゐたが、開元九年（721A.D.）遂に享壽一百餘歳にして、此の寺に入寂す。仍て塔を構へて旌衣す。其の所譯の經は、左の七部九卷である。

1 空羂索陀羅尼自在王咒經三卷（長壽二 693A. D. 正藏、二〇）
2 佛說隨求卽得大自在陀羅尼神咒經一卷（長壽二 693A. D. 正藏、二〇）
3 大方廣菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼經一卷（長安二 702A. D. 正藏、二〇）
4 佛說浴像功德經一卷（神龍元 705A.D. 正藏、一六）
5 佛說校量數珠功德經一卷（神龍元 705A. D. 正藏、一七）、
6 大陀羅尼末法中一字心咒經一卷（神龍元 705A. D. 正藏、一九）
7 觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經一卷（長壽二—神龍二 693—706A. D. 正藏、二〇）

（開元釋敎錄第九、貞元新定釋敎目錄第十三、宋高僧傳第三）

昭和八年十一月二十日

譯者　阿部宥精　識

吠多羅法、(11)成就吠多羅叉法、(12)成就鉤法、(13)成就像法、(14)成就別法、(15)降伏大自在天法、(16)召那羅延及梵天法(17)喚藥叉女母姉妹妻法、(18)喚諸龍法、(19)喚藥叉法、(20)降伏金剛神法、(21)成就餘明仙法、(22)成就諸咒法、(23)成就餘明法、(24)成就湯丸藥法、(25)求男女法、(26)隱形法、(27)成就牛黄法、(28)成就眼藥法、(29)成就刀法、(30)成就金剛杵法、(31)除家內諸惡法、(32)護城護村法、(33)祈雨法、(34)護國法、(35)求長命法、(36)降伏逆賊法、(37)除諸惡法、(38)禁毒及除諸惡病法、(39)除天行病法、(40)得伏藏法、(41)使天龍法、(42)得百味飲食法、(43)使藥叉法、(44)使藥叉女法、(45)使龍法、(46)使金剛法、(47)使持明仙法、(48)使健達縛法、(49)使餓鬼法、(50)使緊奈洛法、(51)使毘那夜迦法、(52)使王歡喜法、(53)滅障法、(54)成就蓮華法、(55)成就杵法、(56)求願望法、(57)求廣大願法、(58)求極廣願法、(59)作持明輪王法、(60)海水湧沸法、(61)騰空得仙法、(62)所願皆得法、(63)成就師子法を說き、前後合せて七十六種の諸咒咀法が列してある。

之を要するに、同じく釋迦金輪を說く雜部密教に屬する經でも、菩提流志三藏所譯のものになると、經の中心尊格たる釋迦牟尼佛は、一轉して直に大日如來と稱せられ得る素地が出來て居るから、此の點から推察すれば、菩提流志三藏が、支那に梵本を請來せらるゝ當時に於ては、印度の密部藏經は、雜部密教から純密教に移らんとする轉向機であつたことが、容易に窺はれるのに反して、本經は譯經史の上から見ても、金輪佛頂一字呪法の初出であるだけに、其の思想としては最も單純であつて、菩提流志三藏所譯のものと比較すると、そこに可成りの逕庭がある樣に想像される。

五　譯者阿儞眞那の略歷

本經の譯者阿儞眞那(Ratnacinta 寶思惟)は、北印度迦濕彌羅(Kaśmīra)國の刹帝利(Kṣatriya)種の人である。幼にして出家し、禪誦を業となす。具戒を受けてからは、專ら律品を研精し、慧解群に超え、學眞俗を兼ね、最も乾文咒術に秀で、加ふるに化導を以て心とす。遂に東遊して武周長壽二年(693A. D.)支那洛陽に來り、勅を受けて天宮寺に居る。其の年より中宗の神龍二年(706A. D.)まで、同寺・佛授記寺・福先寺に於て譯經に從事す。罽賓(Kaśmīra)沙門尸利難陀(Śrīnanda)及び婆羅門居士李無諂・李無礙等、證文・譯語・筆受の任に當る。睿宗の太極元年壬子(712A. D.)四月、所譯の經を繕寫して內に進む。又天冊萬歲元年(695A. D.)明佺等が佛授記寺に於て、武周刊定衆經目錄を撰するに當り、師も

	經名	卷數	部類	本尊	譯者	年代	請來	大正藏
本	一字佛頂輪王經	五	雜密經	釋迦金輪	菩提流志	景龍三(709A. D.)		一九
異譯	菩提場所說一字頂輪王經	五	雜密經	釋迦金輪	不空	天寶一二(753A. D.)	空海・圓仁・圓珍	一九
	一字奇特佛頂經	三	雜密經	釋迦金輪	不空	天寶五—大曆六(746-771A. D.)	空海・圓仁・圓珍	一九
	一字頂輪王念誦儀軌(一字奇特佛頂經に附隨する念誦法)	一	胎金合軌	釋迦金輪	不空	天寶一二(753A.D.)	最澄・空海・圓仁・圓珍・圓行・惠運	一九
	金輪王佛頂要略念誦法	一	金界軌	大日金輪	不空	天寶五—大曆六(746-771A.D.)	空海・圓仁・圓珍・惠運	一九
	一字頂輪王瑜伽觀行儀軌	一	金界軌	大日金輪	不空	天寶一二(753A. D.)	空海・圓仁・圓珍	一九
	金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌	一	金界軌	大日金輪	不空	天寶五—大曆九(746-774A. D.)	空海(錄外)・圓仁・圓珍	一九

四　本經の内容概觀

本經は開元釋教錄第九に依れば、阿儞眞那(Ratnacinta)が神龍元年(705A.D.)大福先寺に於て譯出したもので、其の際、婆羅門居士李無諂が譯語の任に當つたことに成つて居る。之を譯經史上から見れば、金輪佛頂一字咒法の初出であつて、雜部密敎に屬し、釋迦金輪の法が說き明してある。本邦へは誰人に依つて請來されたのか未だ詳でないが、古來、近江梵釋寺の經藏から現れたと稱せられて居る。

初に釋迦牟尼佛が淨居天宮に於て、一切如來最上大轉輪王頂の三昧に入り、大轉輪王一字心呪を說き給ふ因緣と、此の咒は一字ではあるが、諸の咒の中に於て最も勝れ、五百由旬斷壞等の廣大甚深の功德を有することゝを述べ、次に(1)降伏惡人法、(2)護他人及遠惡鬼法、(3)成就諸咒法、(4)天神給侍法、(5)降伏諸天法、(6)降伏本神法、(7)降伏諸龍女法(8)降伏藥叉及藥叉女法、(9)降伏八部女神法、(10)降伏婆羅門法、(11)降伏筏舍法、(12)降伏戍達羅法、(13)降伏惡人及惡星宿法を說き、進んで金輪佛頂像法として、世尊を轉輪王の像の說法の容に作り、其の下に梵王と聖金剛菩薩、上に雨花璺天子、座の下に持法の人を畫くべきことを明し、次で念誦法式を示し、最後に(1)成就輪法、(2)成就傘蓋法、(3)得神通變化法、(4)成就佛頂法、(5)成就如意瓶法(6)成就如意寶法、(7)成就金剛杵法、(8)成就雄黃法、(9)成就戟法、(10)成就

(bhrūṃ)の一字を眞言とする佛頂尊で、諸佛頂中の最尊なるを、世間の轉輪聖王中、金輪王の最勝なるに比して、一字金輪と云ひ、又金輪佛頂とも名く。而して金輪の五百由旬斷壞の德と稱せられて居る樣に、此の尊の威德神力は、十地一切の諸大菩薩すら怖るゝ程、極めて熾盛なものである。故に菩提場所說一字頂輪王經卷第一には、「若有㆑人誦持處、五百由旬內一切明、世間出世間不㆓流通㆒、不㆓成就㆒」(正藏、一九、一九五C)と云ひ、甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌にも同じく、「若有㆑人、誦㆓持頂輪王等佛頂㆒、五百由旬內、修㆓餘部密言㆒者、請㆓本所㆑尊念誦、聖者不㆓降赴㆒、亦不㆑與㆓悉地㆒、由㆓一字頂輪威德攝㆒故」(正藏、二一、四六、A)と言つてある。斯の如く一字金輪法を修する者ある時は、五百由旬の內に於て餘尊の法を修しても、此の尊の威光に覆はれて、其の效を奏することが出來ないと云ふ所から、此の修法を行ふ際には、佛眼の眞言を誦じ、其の助に依つて悉地成就を得ることになつてゐる。この事を一字佛頂輪王經卷第一に、「若常誦㆓是一字佛頂輪王呪㆒時、每當㆘先誦㆓此佛眼呪㆒七遍、滿已乃安、誦㆓是一字佛頂輪王呪㆒、時數畢已、又誦㆓佛眼呪㆒數一七遍㆖、則得㆓安隱㆒無㆓諸燒惱㆒」(正藏、一九、二二七B)と述べてある。修法の時、散念誦の初後に、必ず佛眼の呪を誦するのは、全く此の理由に基くのである。

此の尊に大日金輪と釋迦金輪とあり、前者は金剛の寶冠を戴き、智拳の大印を結び、師子座の日輪白蓮臺に處し、後者は螺髮形をなし、法界定印を結び、印上に輪を安じ、須彌山に坐す。而して大日金輪は金剛界の大日、釋迦金輪は胎藏界の大日とせらる。常の修法に於ては此等二者の中、大日金輪を以て本尊とし、その身を黃金色又は白色となして、八葉の白蓮華上に安ず。是れ金剛界果德の智佛が、胎藏界因德の日輪三昧に住した相であつて、此の本尊は兩部不二の法身を表した最勝深祕の尊である。(詳細は時處儀軌解題參照)

尙、一字金輪を說ける經軌を表で示すと、次の如くである。

典名	卷數	部屬	法類	譯者	翻譯年時	請來者	正藏卷數
大陀羅尼末法中一字心呪經	一	雜密經	釋迦金輪	阿儞眞那	神龍元(705A. D.)		一九
同　五佛頂三昧陀羅尼經	四	雜密經	釋迦金輪	菩提流志	景龍三(709A. D.)	最澄	一九

3　明呪 (vidyā)

眞言は凡慮を超越した如來不思議智の結晶で、自體淸淨圓明であるから、能く之を念誦すれば、無明煩惱の闇を悉く消破して、身心共に圓明淸淨となるから、爾か名く。

4　呪・神呪

眞言を念誦する者の、能く神通を發して災患を除くことが、彼の世俗の呪禁法の能く神驗を顯すのと、一分相似して居るから、爾か云ふ。

以上の說明で窺ひ知らるゝ樣に、或は眞言、或は陀羅尼、或は明呪、或は呪、神呪と言つた所で、決して別物を指すのではなく、ただ同一物に對して、其の重きを置く一邊を擧げて名けた異稱に過ぎないのである。故に不空三藏は總釋陀羅尼義讃に、「或有一字眞言、乃至、二字・三字、乃至、百字・千字・萬字、復過此數、乃至無量無邊、皆名陀羅尼・眞言・密言・明」(正藏、一八、八九八、B)と言つて居る。

一般には本質的に區別する何等の理由もなく、眞言は總じて短句のもの、陀羅尼は大隨求陀羅尼・佛頂尊勝陀羅尼等の如く多く長句のもの、と考へられて居るが、これは大なる誤解と評すべきである。

二　眞言の分類

眞言を形の上から分類すると、大呪・中呪・小呪の三種となる。

1　大　呪

或は根本陀羅尼・根本呪・大心呪とも稱し、諸尊の內證本誓功德等を、最も委細に說き示した眞言陀羅尼を云ふ。

2　中　呪

或は心眞言・心祕密呪・心呪とも稱し、根本陀羅尼の心要を說いた眞言で、その尊の內證祕密の眞實精要を示す。

3　小　呪

或は隨心眞言・心中心呪とも稱し、諸尊の內證本誓を說いた眞言の中、最も肝心祕奧を抽出した眞言であるから、爾か名く。

以上の外、大呪・小呪・一字呪の三種とする場合もある。一字呪とは種子を眞言として誦ずるか、或は種子に歸命の句(namaḥ samanta-buddhānāṃ)を加へて眞言としたものを指すのであるから、何尊の種子でも一字呪と言はるゝ筈であるけれ共、常に一字呪と稱する時は、一字金輪の種子(bhrūṃ)を指すことに成つて居る。而して此の一字呪のことを、如來心中の勝法であると云ふ意で、心呪とも稱するのである。題號に一字心呪經と言つてあるのは、全く此の義に外ならない。

三　一字金輪に就て

梵名を翳迦訖沙羅勃駄烏瑟尼沙斫訖羅(Ekākṣara-buddhoṣṇīṣa-cakra)と云ひ、正しくは一字佛頂輪と翻す。勃嚕唵

斯の如く眞言咒文は釋尊の出世せらるゝ以前、已に印度一般に流行して居つたのであるが、釋尊はかゝる世俗の眞言咒文に對して、如何なる態度を取られたかと云ふに、外道婆羅門の徒が、生活の資糧を得る爲に行ふ咒術に對しては、毫も假借する所なく極力之を排斥せられたが、外道降伏の爲とか、或は活命の爲ではなく、全く自護の爲に行ふ咒術に對しては、固より之を排斥せられた形迹なく、反つて大に其の必要を説示し、且つ其の功德を皷吹せられた明證は、殆ど枚擧に遑のない程である。

世俗の眞言咒文に對する釋尊の態度が、以上の如くであつたから、原始佛教の僧團の中には、眞言咒文が可なり盛んに行はれてゐたものと想像される。部派佛教當時彼の法藏部・大衆部等に咒藏が存在してゐたことは、この事實を證據立てゝ居ると思ふ。

ターラナータ (Tāranātha) の佛教史に依れば、初期大乘佛教の學者たる馬鳴 (Aśvaghoṣa) でも、龍樹 (Nāgārjuna) でも、無著 (Asaṅga) でも、世親 (Vasubandhu) でも、皆眞言持誦の行者であつたことに成つて居る。されば彼等は一方では、般若皆空の思想を宣揚し、又他方では、唯識中道觀の思想を强調することに努むると同時に、其の實際生活に於ては、眞言持誦の行人であつたのである。又、法華經・涅槃經・華嚴經等の完成期の諸大乘經典中には、諸佛諸菩薩諸天善神の數が多くなつたばかりでなく、諸の眞言の數も亦多くなり、謂ゆる密教々理まで稍ゝ完成の域に達し、それが更に一段と發達して、終に兩部大經に至つて燦然たる密教々理に組立てられたのであるが、その金胎兩部の大經に於ては、殊に此の眞言を尊重し、佛陀出世の目的は、此の眞言の內容を衆生に悟らしめんが爲

に外ならないのであるから、佛教の眞生命は眞言にありとして、それに佛一代の教法を統攝することゝなつたのである。

而して此の眞言のことを諸經典の中には、陀羅尼・明咒・咒・神咒等と說いて居る。以下項を分けて簡單に說明しよう。

1 眞言 (mantra)

大日如來三密中の語密とし、如來の言語は眞實にして理に契ひ、全く虛妄が無いから眞言と云ふと說き、釋摩訶衍論中に說く、五種言說の第五如義言說に配す。別言せば、眞言は諸法の實相を象徵する爲の密號名字であるとす。

2 陀羅尼 (dhāraṇī)

眞言の一字・二字或は數字等、字語の多少に拘らず、字々に能く無量の教法義理を總攝任持し、之を誦する者をして、一切の障礙を除き、無邊の利益を得しむる功能があるから、義譯して總持・能遮と云ふ。

大陀羅尼末法中一字心呪經解題

題號の大陀羅尼（mahā-dhāraṇī）とは、一字佛頂輪（Ekākṣara-buddhoṣṇīṣa-cakra）の眞言[illegible]（bhrūṃ）を指し、一字心呪とは、同じく其の種子[illegible]（bhrūṃ）を指す。そこで眞言と咒と陀羅尼とに就て、一言する必要があると想ふ。

一　眞言と呪と陀羅尼

眞言とは梵語の曼怛羅（mantra）を譯したもので、此の語は密敎特有の語ではなく、婆羅門教に於て古くから用ゐられて居つた語を、そのまゝ踏襲したのである。然らば、如何にして眞言が生れて來たかと云ふに、元來神祕を愛好する印度人は、その民族性の自然の發露として、常に超自然的の存在を信じ、而もそれ等存在は吾々人類と決して沒交渉のものでは無く、人類が專心に希願することに依つて、それ等に本來法爾として具つて居る本誓なり、念願なりを媒介として、自ら結合することゝなり、斯くて願望は圓滿に成就せられ、現實の拘束や心の苦痛は驅除されて、解脫安穩の理想界に導き入れらるゝものと考へて居つたのである。然し單に瑜伽觀行の上で、諸天善神の冥助を念願するのみでは物足らなく感ぜられて、妙號を呼び掛けるとか、或は祈願する意志表示を爲すとか、これ等が折重つて、眞言持誦の形を取つて現れて來たのである。而して此のマントラは旣に梨俱吠陀一・三四・六に、「我れ今咒文を以て頂禮しつゝ、汝に近づく」と言つてあるから、その淵源する所は極めて古いことが解る。斯樣に眞言咒文は梨俱吠陀にも存在するのであるが、それは意志表示の一形式に過ぎなかつたのである。然るに降つて阿闥婆吠陀になると、それが一轉して、一種の靈力を有する絕對の價値あるものと見做さるゝに至つた結果、息災・增益・降伏の三種の咒術が行はれ、更に降つて奧義書時代には、其等三種の咒術に相應する眞言咒文が現れて居る。

印度思想に於て種子として最も重用視されたのは、言ふまでなく、かの唵（oṃ）字である。唵字はもと間投詞であつたが、後に眞言咒文の冠頭に置かれることになり、梵書時代には梵の種子と見做されたばかりでなく、阿（a）、汙（u）、麽（m）の三字に分解され、それが奧義書時代になると、三神に配されて、遂に三神一體思想を構成するに至つてゐる。

又かの神祕語たる莎訶（svāhā）の如きも、古奧義書の眞言の中に澤山使用されてゐる。

心悅豫し、智慧聰明にして憶念し、大威德有つて衆人に敬愛せられ、また能く福智の資糧を成就して善根を增長し、面貌端正にして光輝愛す可く、若し尊者聖觀自在菩薩不空羂索心呪王法を成就すること有らば、即ち是の如くの無量の功德を得ること、(譬へば、)[129]如意寶及び[130]劫臘波樹の、求むる所皆得るが如し。此の神呪法は、假使百千俱胝劫の生を經て求むるとも、尙得べきこと難し。何に況や、小福の衆生にして此の法を得んをや。法尙得難し、何に況や成就をや。當に知るべし、此の呪は見聞することを得難し。(此の呪は)一切如來の護持する所、一切菩薩の同じく入る所、一切如來の共に成就する所、一切諸天の擁衞する所なるを以て、常に呪人の供養する所と爲る。是の大福聚は、能く衆生に應じて皆滿足を得しめ、無上正等菩提を示現す。若し人有つて、此の呪を受持し、諸の花香・幢幡・寶蓋を以て供養し、恭敬し、尊重し、讃歎せば、終に地獄・餓鬼・畜生の諸惡趣中に墮せずして、常に極樂世界の阿彌陀佛の前に生じ、壽命無量にして、一切皆聖觀自在菩薩の威德神力の如くならん。

第二十六呪

[131]南謨囉哆那　怛囉夜耶　南謨阿弭哆婆耶　怛他孽多耶　南謨阿唎耶　跋嚧吉帝失筏囉耶　菩提薩埵耶　摩訶薩埵耶　摩訶迦嚧尼迦耶　怛跢他　唵　阿慕伽鉢囉底喝多　僧訶囉　僧訶囉鉾泮吒

此れは是れ收除の呪なり。凡そ結壇の事畢つて、收除せんと欲する時は、先づ此の呪を誦じ、然る後に之を除け。

不空羂索陀羅尼自在王呪經(終)

---

ayaka)、即ち常隨魔のこと。常に人に隨侍して、障難をなす惡鬼神である。

【一二〇】呪起死屍鬼。起死屍鬼は、梵に吉遮(Kṛtya)と云ひ、此の鬼を死屍に著け、其の尸を呪して之を起たしめ、鬼をして去て人を殺さしむるを云ふ。

【一二一】魘魅。文前に同じ。

【一二二】蠱毒。害毒。

【一二三】赤瘡。麻疹。

【一二四】黑瘡。顔面に生ずる黑き斑。

【一二五】塞建陀(Skanda)。個偈鬼。

【一二六】癲鬼。癲は癲癇を指す。Unmāda(作顛者)?

【一二七】影鬼。或は癭を指すか。Chāyā(顛影者)?

【一二八】悅豫。よろこびたのしむこと。

【一二九】如意寶(cintāmaṇi)。寶珠のこと。この珠を所持すれば、一切の所願を顯現すること、意の如くであるから、爾か名く。

【一三〇】劫譬波樹(kalpa-taru)劫譬波(kalpa)は時分の義。時に應じて、一切所須の物を出す樹と云ふ意で、帝釋天の喜林園に在ると稱せる。

【一三一】namaḥ ratna-trayāya nama (ārya) amitābhāya-tathāgatāya nama ārya-avalokiteśvarāya bodhi-sattvāya mahā-sattvāya mahā-karuṇikāya tadyathā oṁ amogha aparājita(?)samāham samāhara hūṁ phaṭ.

して乃し成佛するが故に。我れ今、呪人を安慰して精進を勸發し、之が爲に授記す。當に[104]阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。呪人授記を得已つて、菩薩行に依つて次第に修習せば、一切自在にして靜慮三摩地を得、是の如き自在の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得ん。是れに由つて呪人先づ自在を求めよ。若し未だ嘗て菩提を樂はざる者有らば、應に淨信を生ずべし。信力に乘ずるが故に、一切の事成ずること速にして、彼岸に達す。若し信ぜざれは、假ひ百千倶胝の多劫を經て、精進すとも、其の功を唐捐して、終に[105]證を獲ること無く、阿耨多羅三藐三菩提を遠離せん。世尊是れに由つて衆生の意樂を了知し玉ふが故に、之が爲に授記し玉ふ。呪人も是れに由つて、世尊の前に於て授記を求むるが故に、佛之が爲に(授)記し給ふ。その時呪人、授記を得已らば、應に知るべし、決定して我れ當に成佛すべし、[106]天人師・無上[107]福田と爲ると。而も是の心を發すべし、我が下劣の身は、不淨のの所生にして、無常敗壞なり、壽命短促にして生滅に逼迫せらる、また何の所用がある、(然れども、)如來の不壞の身を求めんが爲の故に、此の身を持養し、發願して身・語及び意に不善の業を作さず、常に身・語及び意に善業を行じて、必ず當に[108]五趣の身を捨離すべしと。佛因を修行して精勤苦行せば、持呪の人、定んで菩提を證せん。神呪の力を以ての故に、能く不可思議の功德力を積集するが爲の故に、如來の陀羅尼を誦持するが故に、殊勝の三摩地力を修習するが故に。是れに由つて、如來の呪藏中に、此の如き神呪には、大印法及び結壇法幷に入壇法、攘災法・增益法・治罰一切[109]障礙鬼法有りと說く。若し信有らば、呪の方便を以て障礙鬼を調伏し、能く菩薩の種種の神變・所作吉祥・善巧方便を現じ、無病長壽にして諸の煩惱を滅し、五無間業を離れ、また能く厄難災障を銷滅し、能く疫病を除き、及び能く[110]呪起死屍鬼・[111]魘魅、幷に起屍鬼及び惡徵祥を除き、また能く毒藥・[112]蠱毒・器仗・[113]赤瘡・[114]黑瘡・痔瘻・[115]塞建陀鬼・[116]癇鬼・[117]影鬼・小兒鬼をして、呪力に由るが故に害を爲すこと能はさらしめ、また色力・富貴・自在・安樂を得て、[118]身

かに十方世界を觀、且つ勝法を見る處。

(五) 色究竟天(Akaniṣṭha)、色界究竟の妙處。

【一〇〇】聖果。菩提 (bodhi)涅槃(nirvāṇa)。

【一〇一】授記 (vyākaraṇa)。佛が眞實語を以て、しか〳〵の因緣により、將來必ず當に作佛すべし、との記別を授與し給ふを云ふ。

【一〇二】倶胝那庾多阿僧企耶劫。倶胝(koṭi)の億、那庾多(nayuta)は十萬、阿僧企耶劫(asaṃkhya-kalpa)は無數時分。即ち、無限の長時を指す。

【一〇三】般若(prajñā)。譯、智慧。

【一〇四】阿耨多羅三藐三菩提 anuttara-samya-saṃbodhi.

【一〇五】證を獲る。無上菩提の果を得ること。

【一〇六】天人師 (Deva-manuṣya-śāstrin)。如來十號の一。佛は一切天人の教師であるから、爾か名く。

【一〇七】福田。田の穀物を生ずる如く、應に供養すべき者に於て、之を供養すれば、必ず能く福報を受くとの義で、信者の依りて以て、福善を植うべきものゝ稱。

【一〇八】五趣。地獄・餓鬼・畜生・人間・天上。

【一〇九】障礙鬼。毘那夜迦 (Vin=

衆生を利益し哀愍せんと欲し玉ふが爲の故なりと。時に時呪者、是の如くの相を見ば、歡喜踊躍して、また種種の供養の具を以て、聖觀自在菩薩に供養し、應に不空羂索心呪王を誦ずべし。乃し聖觀自在菩薩の像、其の座上に於ける示現隱沒して、如來出現し、金色の臂を申べ、呪人を安慰して、是の如くの言を唱へ玉はん。汝は如來の大悲者なり、汝を哀愍するが故に、汝が希求する所（に隨つて）、我れ當に汝が願を滿足せしむべしと。時に呪人、世尊を瞻仰し、踊躍歡喜して右に遶ること七匝して、香花をもて供養し修敬し已畢らば、世尊に白言せよ。我れ今肉眼にて如來を見たてまつることを得たり、我が希求する所は、願くば滿足せしめ玉へと。その時に世尊、呪人に告げて言はく、汝の意樂に隨つて、悉く當に汝に與ふべし。汝今何をか求むるや。若しは多聞を求むるか、若しは財寶富貴自在を求むるか、若しは呪仙を求むるか、若しは如來の法の中に於て、聲聞・緣覺の菩提を求むるか、若しは[九六]灌頂菩薩の位を求むるか、若しは人中の無病長壽を求むるか、或は婆羅門家・居士・[九七]大種姓家・轉輪王家・殊勝生處に生ぜんことを求むるか、若しは[九八]四大王衆天・三十三天・焰摩天・覩史多天・化樂天・他化自在天・梵身天・[九九]淨居天に生ぜんことを求むるか、及び[一〇〇]聖果を求むるか、是の如く等の處、所求（に隨つて）皆得。如來の神力を以ての故に、福德加持の故に、如來の祕密の神呪の故に、聖觀自在菩薩の願力の故に、不空羂索心呪王の威力の故に、持呪の人の意樂清淨の故に、如來の語言には虛謬無きが故に、諸の希求する所、必ず當に成就すべしと。若し呪持者、如來の前に於て[一〇一]授記を得んと欲せば、如來亦爲に授記し給ふ。愚夫、少智をもて分別して、是の如き疑を生ずべからず。佛智は成じ難し、要ず無量百千[一〇二]倶胝那庾多阿僧企耶劫を經て、淨業を修行し、百千業行の善巧方便もて、方に成滿することを得るものなり、云何んが少呪法を以て一生に修集して、便ち授記を得んやと。此の疑を起すこと勿れ。何を以ての故に、持呪の人、[一〇三]般若・善巧・方便・信力・精進力・念力・三摩地力を修行するを以て、是の因緣に由つて、一切成就

五欲の境に對して喜事多く、聚集して遊樂するから、また喜樂集とも義譯す。

（五）化樂天(Nirmāṇaratayaḥ)、常には樂變化天と云ふ。五欲の境に於て、自ら變化して娛樂するから、爾か名く。

（六）他化自在天（Paranirmitavaśavartina）、欲界天の主にして、他をして自在に五欲の境を變化せしめ、それを假りて自己の樂となすから、爾か名く。

以上の六天の中、四王天は須彌(Sumeru妙高)山の半腹にあり、忉利天は須彌山の頂上に在るから、地居天(Bhauma)と名け、焰摩天已上は虛空中に住在するから、空居天(Antarikṣavāsina)と名く。

【九九】淨居天。聲聞の第三果、即ち不還果を證せる聖者のみ居つて、異生の雜無き處。色界の第四禪にあつて、これに五天ある。

（一）無煩天(Avṛha)、欲界の苦及び色界の樂を離れ、苦樂共に滅して煩雜なき處。

（二）無熱天(Atapa)、淸涼自在にして、一切の熱惱なき處。

（三）善現天(Sudṛśa)、形色轉た勝れて、善く變現し、且つ能く勝法の顯るゝ處。

（四）善見天(Sudarśana)、定中の障礙漸く微にして、明

若し持呪の人、呪王の親しく近住することを用ゐざる時は、卽ち自ら遠く去るも、呪人憶念せば、時に應じて卽ち至り、或は伏藏を將て持呪の人に與へ、或は伏藏を示さん。若し持呪の人、鬼病者を見て、意に療治せんと欲せば、使者卽ち爲に除遣し、并に之を治罰せん。若し寒熱等の病を患はば、能く除滅せしめ、亦能く一切の水・火・刀・劍・毒藥・雲・龍・盜賊を禁止し、また能く他軍怨敵を摧破し、持呪者(の意)に隨つて、作す所違ふこと無けん。呪人瞋る時も、亦敢て瞋らず、亦逃避せず。呪人若し如法にせず、及以び怯弱なれば、卽ち成就せず。是れに由つて、呪人は常に、應に如法に福業を勤修すべし。多功を假らずして、而も成就することを得ん。

成就見如來法分第十六

若し如來を見たてまつることを得んと欲すること有らば、其の持呪の人、十善業を行じ、慈悲心を起し、增上せる意樂を發し、精進堅固にして、自ら要す期せんことを誓ひ、一切衆生を利益せんと欲するが爲に、三寶に供養せよ。聖觀自在菩薩の像前に於て、地を塗つて壇を造り、力の辦ずる所に隨つて、種種の資具・燈燭・華香を用て供養し、其の身を淸淨にして鮮白の衣を著し、日別に三時に洗浴して、幷に衣服を換へ、其の壇內に於て或は三日、或は七日斷食し、結跏趺坐して如來印を作り、應に不空羂索心呪王を誦ずべし。その時、聖觀自在菩薩の像身震動し、或は神變を現じ、或は行き、或は坐し、或は低く、或は昂く、或は一身・多身、或は麁、或は細を現じ、或は起つて空に騰り、大光明を放たん。若し此の如き種種の異相を見ば、當に知るべし。卽ち是れ呪法成就せりと。其の持呪の人、應に普賢をして、如來を見たてまつることを得さしむべし。また此の相に由つて、聖觀自在菩薩、普賢菩薩をして、世尊に奉請せしめて、呪人に見たてまつらしむ(と知るべし。)また此の相に由つて、當に知るべし、如來、聖觀自在菩薩の啓請する所を允許し玉ふは、一切

【九六】 灌頂菩薩。灌頂(abhiṣeka)は、印度に於ける世俗の王位繼承の儀式に由來す。今、灌頂菩薩と云ふは、十地の中の第十法雲地(dharma-megha-bhūmi)の菩薩が、佛位受職の時、諸佛より甘露の法水を、其の頭上に灌がるゝを指す。

【九七】 大種姓家。剎帝利(Kṣatriya)、卽ち印度四姓の第二、王種を指すか。

【九八】 已下他化自在天に至るまでを、六欲天と稱す。
(一)四大王衆天、持國・廣目等。
(二)三十三天(Trayastriṃśa)、忉利天のこと。帝釋天を中央とし、四方に各八天あるから、合せて三十三天となる。この三十三天を總稱して忉利天と云ひ、又天數に從つて三十三天とも名く。
(三)焰摩天(yāma)、善時、亦は時分と譯す。時時快なる哉と唱へるから、爾か名く。
(四) 覩史多天(Tuṣita)、一般には兜率天と云ひ、妙足・知足・喜足などと譯す。

衣を以て頭を蒙み、[八七]定の手印を作り、應に不空羂索神呪王を誦ずること、滿一千八遍すべし。その時、卽ち大聲及び大光明有るべし、或は空中より華下らん。持呪の人、是の如きを見聞すとも、驚怖すべからず。當に知るべし、卽ち是れ、尊者不空羂索王を見たてまつる法の成就せるなりと。然る後に、座より起つて燒香散華し、一心に尊者聖觀自在を憶念して、遍く十方を觀ぜよ。卽ち聖不空羂索神呪王を見たてまつるに、南方より來り、空に乘じて行き玉ふ。威光晃曜として百千電の如く、一切の珍寶をもて其の身を莊嚴し、面に三目有つて瞋怒の相を現し、口(狗)牙上り出で、髮は火焰の如く、其の色靉靆たること、猶し夏雲の如し。身に四臂有つて、一手には劍を執り、一手には索を執る。執る所の劍索に、火焰の光有り。赤き衣服を被、鼻中より氣を出すこと、盛んなる火焰の如く、虛空に遍滿して明耀なり。一切の手足、皆眞金・金剛・末尼[八八]及び[八九]吠琉璃を以て之を莊嚴し、大龍王を以て瓔珞と爲す。其の形怖る可し。是に於てか大笑聲は、天鼓の如く、山河を振涌し、樹木を摧折す。持呪の人、是の如くの種種の異相を見ると雖、驚怖すべからず。但し不空羂索心呪王を誦じ、及び專心に聖觀自在菩薩を憶念して、燒香散華し、また淨水を以て白粳米に和し、之を散じて供養せよ。その時呪王、空より下る。容貌寂靜にして、猶し天身の如く熙怡微笑し玉ふ。呪人を讃して言はく、善哉、善哉、我れ今歡喜す、汝何事をか求むるや、若しは自在安樂、若しは[九〇]曷囉闍を求むるか、[九一]斫羯羅伐(頞)底曷囉闍位と作すか、若しは隱形、若しは騰空、若しは呪仙、若しは呪仙斫羯囉伐(頞)底曷囉闍、若しは帝釋、若しは梵王、若しは[九二]護世(者)、若しは[九三]宿住隨念智、若しは[九四]五通、若しは預流果・一來果・不還果・阿羅漢果・辟支佛果、乃至[九五]阿耨多羅三藐三菩提道なりや、汝の所樂に隨つて、其の所樂者を禮拜求索せよと。(呪者)上の所說の如くして、應に是の言を作すべし。汝我が與に使者と作る可しと。その時呪神、爲に使者と作り、處分有るに隨つて、皆悉く能く作し、所行の處には、常に之に隨逐し、所見所聞をば、呪人に向つて說かん。

【八七】定の手印。二手相合し、二無名指及び二中指、並べ屈して掌に至らしめ、各〻の背を相著け、小指・頭指・大指、並べ竪てゝ各〻相離れしむ。
【八八】末尼(maṇi)。寶。
【八九】吠琉璃(vaiḍūrya)。青色の寶石にして、七寶の一。
【九〇】曷囉闍(Rāja)。王。
【九一】斫羯羅伐(頞)底曷囉闍(Cakravarti-rāja)。譯、轉輪王。
【九二】護世者。持國・增長等の四天王を指す。四天王は世界を守護する神であるから、總じて護世者と云ふ。
【九三】宿住隨念智。宿命智のこと。宿世の生命を知る智。
【九四】五通。具には五神通と云ふ。天眼・天耳・他心・宿命・神境。
【九五】阿耨多羅三藐三菩提 anuttara-samyak-saṃbodhi.

其れをして降雨せしめば、過失有ること無けん。龍他の國に至つて甘雨を降注せば、一切の苗稼・甘蔗・稻穀悉く皆成熟し、又能く彼の多くの諸の水牛と、彼の國の衆生とをして、之に因つて耕植せしむ。此れに由つて、饑饉・疫病・鬪戰・諍論を遠離し、また賊盜及以び惡獸なく、衣食豐足し、安隱快樂にして、一切の人民皆善事を行じ、貧乏に惠施し、禁戒を堅持し、廣く福業を修し、恆に無常を念じて、是の如くの言を說かん。我等衆生邊國に生じて、無量の時より來た饑饉に逼迫せらる。應に知るべし、皆是れ大龍の威德力の故に、我等が輩をして、是の如くの無量の苦惱を捨離せしむと。大龍是れに由つて無量の福を得、また彼の國の爲に承事供養し、龍王歡喜して人民を守護す。時に持呪の人、彼の龍を攝取し、勸めて誓願を立てゝ、常に一切衆生を利益せしめ、また受戒を與へば、彼の龍、此の善根力に因るが故に、畜生の身を捨てゝ[八四]不退地を得、乃至無上菩提を證獲せん。其の持呪の人、衆生を利せんが爲に其の命を施すが故に、[八五]檀波羅蜜乃ち圓滿することを得、また地獄・餓鬼・畜生趣の中に生ぜず、常に人天に生じて速に佛地を得ん。

成就見不空羂索王法分第十五

若し不空羂索神呪王を見たてまつることを得んと欲すること有らば、其の持呪の人、應に先づ洗浴して新淨の衣を著し、禁戒を堅持し、然る後に空閑の處を擇ぶべし。或は樹下に於てし、或は塔邊、或は園林中に於て、白月八日或は十四日を以て、治地作壇して水を用て之に灑ぎ、吉祥草を敷いて、應に此の呪を誦ずべし。自ら頂髮を結んで、其の身を護せよ。呪に曰く、

[八六] 唵一　旃慕伽上二　跛囉視多三　咯叉咯叉四　我某甲五　[illegible]呼奄反六　撥七　娑嚩訶八

此の呪を誦じ已らば、應に不空羂索王呪を誦ずべし。白芥子を呪して三遍四方に散ぜば、卽ち一切の障礙・鬼神、退散馳走して、能く惱亂すること無きを得ん。然る後に、草上に於て結跏趺坐し、

【八四】不退地(avinivartanīya or avaivartika-bhūmi)。功德善根愈々增進して、退轉退失することなき位。一般には、菩薩初地の位を指す。

【八五】檀波羅蜜(dāna-pāramitā)。施到彼岸と譯す。六波羅蜜、亦は十波羅蜜の一。

【八六】oṁ amogha aparājita(?) rakṣa rakṣa hūṁ phaṭ svāhā.

淹時にして、還つて人間を憶へば、即ち龍宮の有ゆる珍寶・衣服・飲食・香華・繒綵[七八]、及び諸の樂器・書績[七九]等の事、悉く皆殊勝にして、人中に無き所を綵つて、龍呪人に與へ、彼の物を齎持して、須臾の頃に於て(倶に)還つて本處に至り、(其の龍) また呪人に語つて、是の如くの言を作さん。更に何をか求めんと欲せらるゝやと。呪人報じて言へ、衆事已に辦ず、意に隨つて去れと。其の龍その時、空に昇つて逝かん。

若し彼の呪人、意に龍を移して他國に置かんと欲せば、即ち龍の池に往き、此の呪を誦じて結界自護せよ。呪に曰く、

第二十五なり。（丹本には、此の呪却つて第二十四段に在り。）

[八〇] 唵　阿慕伽　烏波味賒　許泮吒半音

丹本に呪有り。云く、（此の呪、宋・鄉二本には無し。丹本には此の呪有つて、第二十五段の呪と爲す。）

[八一] 唵　阿慕伽　毘社耶　摩訶那去漫陀漫陀　娑婆訶

此れは是れ護自身の呪なり。結界せんと欲する時、先づ此の呪を誦じて以て十方を呪し、心に隨つて遠近に其の界畔を作らば、一切の非人能く便を得ること無し。淨き黃土を以て其の界內に於て、淨地を選擇して四方壇を作り、其の壇內に於て燒香散華して、應に羂索を畫いて、猶し蛇形の如くすべし。龍の羂索と名く。其の時呪人、右足の[八二]拇指を以て畫きし索の頭を躡み、不空羂索心呪王を誦すること一百八遍すべし。其の龍その時、身焚灼せらるゝが如し。(則ち) 呪人の前に至る。呪力を以ての故に、瞋怒有りと雖も、害を爲すこと能はずして、即ち其の形を變じて以て水蛇と爲る。呪人之を取り、以て瓶內或は[八三]篋笥中に置かば、逃避する所無けん。所去の處には、恒に將に隨逐せよ。飲ますに乳汁を以てして、其の軀命を存せ。設ひ餘國に旱澇の不調有つて、能く之を貿易するに、以て財物を取るとも、護國の爲の故に貨を將て賣らされ。若し國土に旱澇の不調有るともい

破る、これである。

【七四】五欲。色・聲・香・味・觸の五境に對する欲情。

【七五】贍部洲(Jambu-dvipa)。具には南贍部洲と云ふ。我々の住する此の世界を指す。

【七六】倶胝(koṭi)。億。

【七七】淹時。久しい間。

【七八】繒綵。キヌ。

【七九】書績。績は繪に同じ。

【八〇】oṁ amogha upaveśya hūṁ phaṭ. これ呪座神の呪である。

【八一】oṁ amogha vijaya mahā-nāga bandha(?)bandha svāhā. これが護自身呪である。

【八二】拇指。オヤユビ。

【八三】篋笥。物を入れる箱。

施すに、貧窮を捨離して大富貴を得、所求滿足して自在無礙ならしめんと。呪人珠を得ば、龍に語つて言へ、汝宮に還る可し、我れ若し汝を須めば、念に應じて來る可し、遺忘することを得ること無かれと。呪人、此の如意寶珠を得ば、所須皆遂げ、無量の諸の衆生類を利益して、皆快樂富貴自在ならしめん。呪人また種種の香華を以て、寶珠を供養すべし。ただ自ら見るべく、他人に示すこと勿れ。若し他(人)に示さば、珠即ち神變を失へ、また自在ならず。後若し賣る時は、百　倶胝の價の中に於て、但し其の半を得、また更に賣る時は、又半價を減じ、是の如く後後にまた更に賣る時は、常に其の半を減じて、乃し石の如く一ら(價に)直る所無く、之を地に棄つるも、光明有るとと無きに(至らん)。若し後時に於て佛の出世有らば、此の如意珠、還つて神變有つて海中に入らん。是の如き福力は、皆神呪に由る。若し是の如くならずんば、如意寶珠は甚だ得べきこと難し。若し彼の呪人、時に氣旱し稼穡燋黃するを見ば、心に彼の龍を念ぜよ。其の龍その時、人形に化作し、念に應じて至り、呪人を頂禮して是の言を作さん。仁者、また何をか須めらるゝやと。呪人報じて言へ、今氣旱して苗稼登らず。(汝)甘雨を降して、普く潤澤せしむべしと。是の時間に於て、即ち龍形に復し、空中に昇つて大雲雨を興し、一切に普洽して豐足せざること無けん。是の事を作し已らば、呪人に白して言はん、其の作すべき所は、我れ今已に辦ずと。呪人告げて言へ、本所に還るべし、我れ若し憶念せば、汝當に我に赴くべしと。其の龍、是に於て呪人の足を禮し、即ち沒して現れずして本宮に還る。

若し彼の呪人、龍宮に於て遊觀する所有らんと欲せば、彼の龍を憶念せよ。其の龍、即ち能く念に應じて至り、是の言を作さん。仁者、また何をか須めらるゝやと。呪人報じて言へ、龍宮に往いて、遊觀する所有らんと欲すと。即ち呪人を將ゐ、欻然として去つて、彼の龍宮に至り、龍呪人を變じて以て龍子と爲し、共に遊戲すと雖も、終に彼の龍毒の爲に傷けられず、呪人遊戲すること

界九品の思惑中、前の六品を斷ずるも、尙後の三品あるが爲に、欲界の人と天とに一度受生する位を、一來果と云ふ。一來とは、一度往來の義。これ聲聞四果中の、第二果である。

【七〇】 不還(anāgāmi)。欲界九品の思惑中、殘餘の後三品を斷じ盡して、再び欲界に還來せざる位を、不還果と云ふ。爾後生を受くれば、必ず色界・無色界にして、これ第三果である。

【七一】 阿羅漢(arhat)果。阿羅漢は殺賊・應供・不生などと譯し、色界・無色界の、一切の思惑を斷じ盡せる聲聞の極果を、阿羅漢果と云ふ。一切の見惑・思惑を斷じ盡せば、殺賊と云ひ、既に極果を得て、人天の供養を受く應き身であるから、應供と云ひ、永く涅槃(nirvāṇa)に入つて、再び生死の果報を受けないから、不生と稱す。

【七二】 阿耨多羅三藐三菩提(anuttara-samyak-saṃbodhi)。譯、無上正徧智。

【七三】 五無間業。無間地獄の苦果を感ずる五種の惡業、即ち五逆罪のこと。一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿羅漢(Arhan)を殺し、四に佛身より血を出し、五に和合僧を

を證得せん。是の故に、此の壇に入る者は大福業を成じ、智慧・神通・宿命(智)を具足し、乃し十地所有の功德皆悉く成就し、衆の魔の一切の境界を超越し、怨敵を摧伏し、諸の障惱を斷じ、乃し[73]五無間業悉く皆銷滅して、無量の功德皆悉く成就すべし。

成就調伏諸龍得自在分第十四

その時。聖觀自在菩薩、また調伏龍法を説き玉ふ。若し諸龍を調伏して、自在を得んと欲すること有らば、持呪の人、應に彼の龍所居の處に往至し、淨き黄土を取り、用て牛糞に和して壇場を塗作し、栴檀香及び沈水香を燒いて散華供養すべし。應に尊者聖觀自在不空羂索心呪王を誦ずること一百八遍すべし。(一百八遍を滿ぜば、)龍所居の池水皆枯竭し、龍及び龍女自然に現れ、皆悉く歡喜して呪人を頂禮し、呪者を讃して言はん、善來、善來、何すれぞ此に至るやと。呪者報じて言へ、我に欲する所有り、希くば(汝)能く爲作せよと。龍卽ち問うて言く、何の所須かあるやと。呪者報じて言へ、我が思念する所に、汝宜しく隨順して、速に我が心に應ずべしと。其の龍、聞き已つて呪人を頂禮し、忽然として現れず。須臾の間に、龍所居の池水還つて滿ち、龍及び眷屬、本宮に歸つてまた暴惡なること無く、其の性調柔にして不放逸に住し、常に呪人重ねて其の罰を加へ、自在及び其の眷屬を失せしめんかと懼れ、惡道に墮するを恐れ、[74]五欲を貪せず、呪人後に於て、財物を求め、廣く惠施を行じて衆生を饒益せんと欲して、彼の龍を念ずる時、其の龍卽ち童子の形に變作して、念に應じて至り、身服を珍寶をもて種種に莊嚴し、呪者の前に胡跪して問はん、何事をか作さんと欲せらるゝやと。呪人報じて言へ、我れ財物を須め、以て貧乏に施さんと(欲すと。)龍また報じて言はん、今(仁者の)意樂に隨つて、當に滿足せしむべしと。是の語を作し已つて、卽ち海中に入り、如意寶珠を取つて呪人に奉施し、而も大願を發さん。如意珠を以て[75]贍部洲の一切衆生に

することと。

【五八】邪見。因果の道理を撥無する謬見。

【五九】第二・第三等。卽ち三説すること。

【六〇】導師 (Nāyaka)。佛の尊號。佛は能く人を導いて、佛道に入らしめるから、爾か云ふ。

【六一】兩足中尊。常には單に兩足尊と云ふ。佛の尊號。佛は兩足を有する有情の中に於て、尊貴第一であるから、爾か名く。若し密敎に依れば、兩足を福智の二德とし、佛は此の功德を二足として、法界に遊行し給ふと解す。

【六二】已下は臣壇の法を明す。

【六三】已下は民壇の法を明す。

【六四】三道。三色を以て畫かれた界道である。

【六五】長夜。凡夫が生死に流轉して、無明煩惱の夢から覺めざる間を云ふ。

【六六】辟支佛。Pratyeka-buddha.

【六七】菩提 (bodhi)。覺又は智と譯し、佛陀證悟の眞實智慧を指す。

【六八】預流(srotāpanna)。聲聞乘の人が、三界の見惑を斷じ已つて、方に聖者の流に預參する位を、預流果と云ふ。これ聲聞乘最初の聖果である。

【六九】一來(sakṛdāgāmi)。欲

中尊と作り、一切衆生をして、煩惱の病を斷じて、諸の律儀を受けしむべしと。是に於てか呪人、王に不空羂索心呪印法を授けて、壇外に引出せよ。また應に次第に、王の眷屬を引(入)すべし。一一壇に入れて、王の受法の如くせよ。其の事畢已らば、王及び眷屬、應に財寶什物を以て呪人等に施し、方に自ら宮に還るべし。

若し臣壇を造らんには、縱廣一十六肘にし、其の壇内に於ける所有の界道には、金銀を用ふること勿れ。其の力分に隨つて、諸の綵色を用ゐよ。呪王等の諸の形像を畫く時は、王の壇法の如くせよ。應に飮食を壇内に置いて供養すべし。壇の四面に於て各ゝ幢幡を立て、四吉祥瓶に各ゝ水を滿し盛り、用て四方に置け。壇に入るべき者は、先づ淨く洗浴して新淨の衣を著し、衆の名香を燒いて散華供養し、所有の法用は皆王壇の如くせよ。

若し民壇を造らんには、縱廣八肘にし、其の壇内に於て、應に尊者聖觀自在菩薩の呪王像及以び印文を畫くべし。其の餘の形像は、彼の王と臣との壇法の如くすべからず。若し壇を畫かん時は、赤・白・黃色を用て三道を界て。其の吉祥瓶は、或は白銅を用てし、或は赤銅を用てし、或は銀を以て作れ。自らの力分に隨つて、嚴に香華・幡蓋・種種の飮食及び、諸の果子を辦じて、而も供養と爲せ。壇に入るべき者は、洗浴して受戒し、壇場に入出する一切の軌則は、皆王法の如くせよ。是の如くの壇場の所有の利益は、皆是れ世尊の善巧方便にして、衆生を調伏し、長夜に於て解脫を得しめ玉ふ(が故なり。)若し聲聞を求めば、即ち聲聞乘を以て之を調伏し、若し辟支佛を求めば、即ち辟支佛乘を以て之を調伏し、若し菩薩を求めば、即ち大乘を以て之を調伏し、若し是の如き祕密神呪を以て調伏せん者には、即ち神呪を以て善巧方便して、善道乃至菩提に趣かしめ玉ふ。是の故に。此の神呪に於て、應に疑惑を斷ずべし。若し佛及び菩薩所說の神呪を成就すること有らば、此の如くの人は、即ち預流・一來・不還・阿羅漢果・辟支佛果を得、乃し阿耨多羅三藐三菩提

---

ahā.

これ獻供神の呪である。

【五〇】 彈指。指を彈き鳴らすこと。之に歡喜・警告・許諾等の諸義がある。印度の習俗に從へば、人の房室を訪ふ時は、必ず先づ戶前に於て彈指し、其の室の主の許諾を得て後入るを常とす。眞言行者は此の風習に準じて、道場に入る時は、彈指三振して吽字(hūṁ)三遍を唱へ、法界道場の門を開くと觀想す。

【五一】 白綃。綃はキヌ。

【五二】 葷辛。葷は蔬菜の息きもの、辛はからきもの。小蒜・大蒜・韮・芸薹・胡荽・興渠・慈葱等を指す。

【五三】 無畏。安穩蘇息の義。

【五四】 我見。吾身の五蘊(色・受・想・行・識)假和合の體なることを知らずして、實に我身ありと計度分別するを云ふ。

【五五】 衆生。五蘊の法の和合の中に於て、實の衆生あつて生ずと妄計すること。

【五六】 命者。五蘊の法の中に於て、我の命根あつて、連續して絕えずと妄計すること。

【五七】 補特伽羅(pudgala)。舊に人、新に數取趣と譯す。五蘊の法の中に於て、我れ能く修行する人にして、不能の人に異ると妄計し、又我れ人道に生じ、餘道に異ると妄計

第二十四　丹本には、此の呪却つて第二十三段に在り。

[四九]唵　阿慕伽　阿囉闍　鉢囉二合底車傑囉伽跛店孽里二合　醯拏　孽哩二合醯拏沫林
娑婆訶

此れは是れ呪座神の呪なり。若し坐せんと欲する時は、先づ此の壇を以て壇內の座を呪し、然る後に上に於て結跏趺坐し、其の兩手を以て蓮華印を作り、不空羂索心呪を誦ぜよ。是の如く誦ぜば、呪の威神力(に依るが)故に、虛空の中に於て異相現ること有り。或時は說法の聲有るを聞き、或は[五〇]彈指、或は善哉と唱ふる聲を聞き、或は雨華を見ん。誦呪の人、是の如くの不可思議吉祥の事を見聞し已らば、卽ち所作の壇法成就せりと知り、王及び眷屬を、應に卽ち壇に入るべし。是の誦呪の人、卽ち座より起つて、聖觀自在菩薩及び諸の聖衆を頂禮し、壇の內より出でゝ王の右手を執り、引いて壇門に至り、王をして合掌せしめ、卽ち[五一]白繒を取つて王の兩目を掩ひ、王をして諸佛菩薩及び神呪王、幷に多羅天女・毘俱胝天女・摩麼雞天女・金剛使天女、及び大勢至菩薩・普賢菩薩を敬禮せしめ已つて、王をして發心して至誠に懺悔し、大誓願を作して、手に妙華を捧げしめよ。呪人王を引いて、西門より入つて壇の中に至り、所捧の華を以て諸の像前に於て、意に隨つて置かしめ、所置の華處をば、卽ち以て師と爲せ。(呪人)胡跪合掌して菩薩戒を受け、(是の言を作せ。)(今より已後、我れ)永く酒肉を斷じ、[五二]葷辛を食せず、また餘の邪魔外道に歸せず、恩を知つて恩に報いん。唯願くば、三寶・菩薩・聲聞、慈念を以て加護せられよ。今より已後、衆生類に於て常に[五三]無畏を施し、誓つて斷命せず、菩提心を發して眞實言を出し、邪行を爲さずして常に正見を行じ、[五四]我見(を除き)、及び[五五]衆生・[五六]命者・[五七]補特伽羅(有ること無しと悟り)、一切の[五八]邪見を起さず、出離を勤求し、空法性を證して、終に一切の諸相に執著せずと。[五九]第二・第三も亦復是の如くして、卽ち誓言を作せ。願くば、是の如きより生ずる所の功德を以て、速に出間を出で、當に[六〇]導師・[六一]兩足

身心の過患を除かしめんが爲である。現今でも、傳法灌頂受明灌頂の際には、三摩耶戒壇に於て必ず之を受者に與へて嚼ましむ。優曇鉢羅(udumbara)、或は阿說他(aśvattha)木を以て製するを正規とするが、多くは口說により、柳・桑・楮・穀・棗等の如き、香氣又は乳ある木を代用す。大疏五・蘇悉地經上・略出經四等に詳しく說く。

【四三】 oṁ amogha(不明)hūṁ phaṭ. これ治罰呪である。

【四四】 oṁ amogha aparājita(?) bandha(?)bandha rakṣa rakṣa rāja sarva-sattva hūṁ kuru oṁ phaṭ svāhā. これ結界の呪である。

【四五】 oṁ trailokya-vijaya amogha-pāśa mahā-samaya samaya tiṣṭhanāṁ mahā-samaya prataha hūṁ jaḥ. これ結壇の呪である。

【四六】 oṁ amogha rakṣa rakṣa hūṁ phaṭ. これ護自身の呪である。

【四七】 oṁ(不明)amogha dama dama(不明)dhūpa(不明)svāhā. これ呪香の呪である。

【四八】 oṁ amogha(不明)puṣpa(不明)hūṁ phaṭ. これ呪華の呪である。

【四九】 oṁ amogha rāja prati-śāli(不明)gṛhṇa sin sv=

吒半音　娑婆訶

此れは結壇の神呪なり。結壇せんと欲する時は、先づ此の呪を以て水を呪し、灰或は白芥子を呪して四方に散灑するに、其の遠近に隨はば、卽ち界畔を成じて防護を爲す。呪に曰く、第二十なり。丹本には、の呪却つて第十九段此に在り。

[四五] 唵　帝囉嚕枳耶　徽闍耶　慕伽播賒娑蟒囉　三摩耶　地瑟咤南　摩訶娑蟒耶鉢囉二合答波𤙖若

此れは是れ禁自身の呪なり。若し道場に入らんには、先づ此の呪を以て自身を呪禁して、非人をして其の便を得しめざれ。呪に曰く、第二十一なり。丹本には、此の呪却つて第二十段に在り。

[四六] 唵　阿慕伽　囉叉囉叉自稱名　𤙖泮吒半音

此れは是れ呪香の呪なり。若し壇場に入つて燒香せんと欲する時は、先づ此の呪を以て香を呪し、然る後に之を燒いて供養せよ。

第二十二丹本には、此の呪却つて第二十一段に在り。

[四七] 唵　阿慕伽　淡磨淡磨　鉢囉　底　掣度誇忙　徽藍麼　娑婆訶

此れは是れ呪華の呪なり。若し壇場に入り、華鬘を以て供養せんと欲する時は、先づ此の呪を以て華鬘を呪し、用て壇場に散ぜよ。

第二十三丹本には、此の呪却つて第二十二段に在り。

[四八] 唵　阿慕伽　阿訶囉　阿訶羅　布澁波達嚩闍徽麼　阿遮唎尼　𤙖泮吒半音

此れは是れ獻供神の呪なり。獻供せんと欲する時は、先づ此の呪を以て水・粳米及び諸の雜華を呪し、然る後に壇の內に散灑して、奉獻し供養せよ。」

す。四種阿修羅王の一。最後のが適譯か。

【三六】 難地迦印。nandika ?

【三七】 莎底迦印。sotika ?

【三八】 萬字印文。卐。

【三九】 健陀洛娑香（gandhāla ?）。安息香(guggula)を指すか。

【四〇】 俱盧舍(krośa)。牛叉は鼓の聲の聞き得る最大距離。故に一牛吼と義譯す。五百弓(dhanuḥpañcaśatāni)或は五里。一弓は六尺四寸、故に五百弓は三千二百尺。支那の一里は、我國の六町に當る。

【四一】 非人。人に對して天龍八部、及び夜叉(yakṣa)・惡鬼の冥衆を、總じて非人と稱す。

【四二】 楊枝。梵に憚哆家瑟詑(dantakāṣṭha)と云ひ、齒木と譯す。楊枝は義譯。佛制比丘十八物の一。凡そ印度の習俗に從へば、答を請じて饗應せんとする時は、其の前日に、香華を以て嚴飾せる齒木を贈り、以て懇請の意を表するを常とす。客之を嚙むことによつて、口中及び腹中の邪氣を拂ふ。今入壇者に之を與へるのは、此の世俗に準ずるものであるけれども、これに由つて、菩提心を發し、三業の宿障を淨除し、三世無碍智の牙を以て諸の煩惱を嚼み碎き、

ふべし。また金・銀・赤銅を以て、八大瓶を作れ。其の瓶には皆、栴檀・沈水・龍腦・欝金を用ゐよ。此の諸香を和して彼の瓶の上に畫かば、卽ち貫華を以て其の瓶項に繋け、各〻水を滿し盛つて壇の中に置け。また好香・酥・蜜・乳・酪、是の如くの五物を取り、各〻四器に盛つて壇の中に安著せよ。酥を以て飾を煮、砂糖・石蜜を用て餅の上に塗り、粳米飯及以び乳糜、若しは胡麻粥、若しは大麥粥(等)、種種の好食を取れ。但し血肉を除け。皆盤を以て盛り、壇の中に供養せよ。壇外の四面に牆を築き、塹を掘り、或は籬柵を竪て、又壇に等しく四面に各〻一門を開き、其の門外に於て、人を[四〇]して守護せしめ、其の守護者には、身に甲を被せ、手に器仗を執らしむべし。また壇外を去る一俱盧舍に、四面を周匝して、四兵(卽ち)象兵・馬兵・車兵・歩兵を陳列して守護と爲し、(以て)敵・非[四一]人を禦げ。其の持呪の人、香湯をもて沐浴して、新淨の衣を著し、吉祥法を作し、呪を誦じて自護し、非人をして其の便を得しめざれ。また壇外に於て、一小壇を立てよ。卽ち其の王及び王の眷屬にして、入壇すべき者には、小壇内に於て、香湯をもて洗浴して、純白の衣を著せしめ、八戒齋を持たせ、一日一夜を經て皆斷食せしめ、(自ら)口に[四二]楊枝を嚼み、白芥子を呪し、(又)王自身及び諸の眷屬をして、皆手に之(楊枝)を執らしめよ。吉祥瓶水を以て王の頂上に灌ぎ、王をして正念(に住せしめ)、方便を以て安慰し、至心に改悔せしむべし。其の誦呪の人、卽ち先づ壇に入り、諸の呪神衆に、香華・飲食及以び燈明を以て種種に供養して、聖觀自在菩薩を禮し、應に此の呪を誦じ、白芥子を呪して十方に散ぜよ。呪に曰く、第十八なり。(丹本には、此の呪却つて中卷に在り。)

[四三]唵　阿慕伽　赦䫜耶　赦䫜耶・舛泮吒

此れは是れ結界呪なり。結界せんと欲する時は、先づ此の呪を以て白芥子を呪し、十方面に散じして防護を爲せ。呪に曰く、第十九なり。(丹本には、此の呪却つて第十八段に在り。)

[四四]唵　阿慕伽　鉢囉二合底訶多　漫陀漫陀囉叉囉叉(自稱名)囉攘　薩婆薩埵舛　俱藍唵泮

舍那)のこと。大自在天の化身にして、欲界の第六天に居す。

【二六】　大自在。梵に摩醯首羅(Maheśvara)と云ひ、或は色界頂色究竟天の主とし、或は欲界頂他化自在天の主とす。今は前者を指すか。

【二七】　以下の四龍王は、共に八大龍王の一である。

【二八】　娑竭羅(Sāgara)。譯、海。

【二九】　阿那婆踏多(Anavatapta)。譯、無熱。

【三〇】　難陀(Nanda)。譯、喜。

【三一】　鄔波難陀(Upananda)。譯、賢喜。

【三二】　光明。毘盧遮那(Vairocana遍照)阿修羅王を指す。

【三三】　羅怙羅(Rāhula)。覆障、障持などと譯す。また此の阿修羅王は、帝釋と戰ふ時、能く手にて日月を執り、以て其の光を障蔽する所から、執月とも譯さる。法華經序品所說の四種阿修羅王の一。

【三四】　毘摩質怛羅(Vemacitra)。譯、淨心・綺畫・寶飾・綺飾・綵畫など。乾闥婆(Gandharva)の女を娶り、其の娘を帝釋に嫁せしむ、これ卽ち、舍脂夫人である。故に帝釋の舅に當る。

【三五】　吼聲。梵に佉羅騫馱(Kharakaṇṭha)と云ひ、また吼如雷、或は廣肩胛などと譯

ぎ、面を尊者に向けて合掌恭敬す。普賢菩薩の像の下に於て、應に[17]摩麼雞（周に我所と言ふ）天女・金剛使天女を畫くべし。大勢至菩薩の像の下に於て、應に[18]多羅（周に瞳子と言ふ）天女・[19]毘倶胝（周に顰目と言ふ）天女を畫くべし。其の多羅天女は白色の衣を著し、餘の三天女の衣は皆雜色なり。此の四天女並に天衣を著し、衆寶をもて嚴飾し、顔貌和悦にして熙怡微笑し、悉く皆[20]胡跪して偏に右の肩を袒ぎ、尊者の前に向つて合掌恭敬す。また觀自在菩薩の像の前に於て、應に不空羂索呪王を畫くべし。其の形色相は、赤に非ず、白に非ず。衣服赤色にして、頭髮動搖し、面に三目有り、赤色にして赤光(を放ち)、[21]耳璫垂下し、口より四牙を出す、二は上に二は下に、兩眉を或は嚬め、下脣を時に動かし、身に四臂有り、長短の瓔珞交はつて胸臆に垂れ、尊者の前に於て雙膝を地に著け、躬を曲げて瞻仰し、耳を側けて聽く。

また尊者の兩邊の近處に於て、應に[22]梵王・[23]帝釋及び[24]那羅延・[25]自在・[26]大自在等の諸天の衆を畫くべし。各ゝ本形に依つて、依服・莊嚴(の具を持し)、倶に尊者に向ひ、合掌して立つ。壇の四面に於て、[27]各ゝ一大龍王を畫作すべし。謂ゆる[28]娑竭羅龍王・[29]阿那婆踏多龍王・[30]難陀龍王・[31]鄔波難陀龍王、(即ちこれなり。)壇の四角に於て、各ゝ一阿素洛王を畫くべし。謂ゆる[32]光明阿素洛王・[33]羅怙羅阿素洛王・[34]毘摩質怛羅阿素洛王・[35]吼聲阿素洛王、(即ちこれなり。)是の壇を結し已らば、また諸印及び諸器仗を作つて、壇場を莊嚴せよ。謂く、螺形の印・輪形の印・蓮華形印・[36]難地迦印・[37]莎底(丁履反)迦印・[38]萬字印文を畫作すべし。又應に棓・鑼・戈・戟、及び弓・箭等の諸器仗の形を畫作すべし。また白蓋、若しは幡、若しは幢を作れ。畫かんと欲する時は、應に畫師をして、先づ淨く洗浴して新淨の衣を著せしめ、八戒を受持せしむべし。應に欝金・牛黃・雄黃・金精・朱砂を取つて、勝妙の彩色にすべし。膠を以て和すること勿れ。當に[39]健陀洛婆香汁及び酥を用て之に和し、此れを以て畫くべし。壇の周遍に於て、應に青・黃・赤・白の四種の色の旛を懸くべし。壇上は應に白蓋を以て、之を覆

す。

長跪—兩膝を並べて地に着け、兩脛を空に翹げ、兩足の指を以て地を支へ、身を挺して立つこと。曼荼羅諸尊の中、奉教使者は多くこの姿である。今もこれを指すか。眞言宗では、禮文・九方便等を誦ずる時に、此の坐法を用ふ。

互跪—左右の兩膝を、互に地に着けて跪くこと。但し佛法は、右膝を地に着け、其の足指を地に竪て、右の股を空に置き、左膝を竪てゝ、左足地を踏むを通相とし、現今は右膝・右足を地に着け、左足を瓜立てして腰を据う。對揚・奉送等に用ゐるのは、即ち此の坐法である。而して佛、行事久しき時、男僧には互跪、尼僧には長跪せしめ給ふ。これ女子體弱く、長跪互跪より易き爲である。

【二一】耳璫。耳かざり。

【二二】梵王(Brahmā)。色界の初禪天の王。

【二三】帝釋。梵に釋提桓因、又は釋迦提婆因達(陀)羅(Śakradevendra)と云ひ、能天主と譯す。忉利天の主。

【二四】那羅延(Nārāyaṇa)。勝力・堅牢などと義譯す。帝釋天の眷屬にして、その力量は、大象の七十倍ありと言はる。

【二五】自在。自在主(Īśāna伊

し。壇の四面に於て各ゝ一門を開き、門を去ること遠からずして、皆雙柱を竪て、種種に莊飾して吉祥門を作り、此の門外に於て諸の妙華を布き、周遍して圍遶せよ。壇の東門外に二天王を畫いて、其の門を守護せしめよ。左邊には應に[七]持國天王を作るべし。右邊には應に[八]増長天王を作るべし。倶に衣甲を被り、器仗をもて嚴淨し、瞋怒の面を作して眼光赤色なり。持國天王は手を以て劍を執り、増長天王は手を以て[九]棓を執る。壇の南門外に應に二王を畫いて、其の門を守護せしむべし。左邊には應に[一〇]醜目天王を作るべし。右邊には應に赤目神王を作るべし。此の二王の面は皆黑色にして、赤金にて身を嚴り、皆衣甲を被て、其の手に弓・箭・刀・劍を執持す。壇の西門外に二藥叉王を畫いて、其の門を守護せしむべし。左邊には應に[一一]末尼跋達羅藥叉王を作るべし。右邊には應に[一二]布栗拏跋達羅藥叉王を作るべし。此の二王を作るには、應に本色の如くすべし。種種に身を莊嚴して衣甲を被、手に斧・索を持す。壇の北門外に二天王を畫いて、其の門を守護せしむべし。左邊には應に[一三]多聞天王を作るべし。右邊には應に金剛手天王を作るべし。此の二王を畫くには、各ゝ本色に依れ。衆寶をもて莊嚴し、器仗を執持す。正しく壇の中に於て、聖觀自在菩薩の形像を畫け。其の像は、立つて蓮華座中に在り。頂上は[一四]螺髻にして、紺髮垂下し、首上の寶冠に無量壽佛を畫け、其の尊者の身は、一切の莊具をもて之を嚴飾し、形狀は白色にして[一五]頗胝迦の如く、應に四臂に作すべし。右邊の二手、一は蓮華を持し、一は[一六]澡罐を持す、左邊の二手、一は數珠を持し、一は施無畏にす。面貌端嚴にして、熙怡寂靜なり。圓光の上に天華を畫作して、之を嚴飾せよ。其の胸の前に於て、萬字の印を作り、俯身低視せしめよ。尊者の左邊に大勢至菩薩の形像を畫け。其の形色相は、白金色の如くにして、身に天衣を著け、衆寶をもて嚴飾せり。偏に右の肩を袒ぎ、面を聖觀自在菩薩の前に向けて合掌恭敬す。また右邊に於て、普賢菩薩の形像を畫作せよ。其の形は彼の白蓮華色の如く、頂を螺髻に作し、紺髮を垂下し、面貌端嚴にして熙怡微笑し、偏に右の肩を袒

【七】持國天王。Dhṛtarāṣṭra.
【八】増長天王。Virūḍhaka
【九】棓。大きな杖。
【一〇】醜目天王。廣目天王(Virūpākṣa)のこと。
【一一】末尼跋達羅(Maṇibhadra)。譯、寶賢。夜叉(Yakṣa)八大將の一。
【一二】布栗拏跋達羅(Pūrṇabhadra)。譯、滿賢。夜叉八大將の一。
【一三】多聞天王。Vaiśravaṇa.
【一四】螺髻。頂髮を留め、之を結んで螺形に作すこと。
【一五】頗胝迦(sphaṭika)。玻璃に同じ。譯して水精と云ふ。
【一六】澡罐(kuṇḍikā)。澡瓶に同じ。
【一七】摩麽雞。Māmakī.譯、金剛母。註に「我所と言ふ」とあるは、麽麽迦羅(mamakāra 我所)と明かに誤解して居るのである。
【一八】多羅。Tārā. 眼の義。此の天女は、觀音の眼中から生じたので、多羅と名く。譯、瞳子。
【一九】毘倶胝。Bhṛkuṭi. 皺の義。此の天女は、觀音の額上の皺の中から生じたので、毘倶胝と名く。譯、瞋目。
【二〇】跏跪。跏は胡を正しとす。胡人跪坐の法と云ふ意で、胡跪と名く。或は長跪の異名とし、或は互跪の異名と

卷の下

成就入壇法分第十三

その時、聖觀自在菩薩、不空羂索神呪の壇法を說き玉ふ。此の壇は是れ大乘の法にして、諸の菩薩の攝受する所と爲す。其れ壇に入るべき若しは王、若しは臣、若しは諸の凡夫、持願者と佛とを平等に想へ。呪を持するを以ての故に、能く自他を益し、惡趣に生ぜずして、常に善道に生ず。故に入壇者は、勤修して供養すべし。其の持呪者は精進の甲を被、踴躍歡喜して、一切衆生を饒益せんと發起し、慳悋を生ぜずして、專ら其れに心を注ぎ、壇法に依つて用て如法に之を作し、嫉妬を遠離し、矯詐を懷かず、諸の[一]諂曲なく、所了知の法は之を念じて忘れず、諸の衆生に於て希求する所なく、善巧方便して心行を平等にし、所作勇決にして能く速に成就し、我慢を起さず、諸の諍論を離れ、[二]禁戒を守持し、洗浴し護淨せよ。是の如くの人は、方に呪を持して此の壇場に入るに堪へたり。

[三]其の所作の壇法に三種あり。一には地壇、二には國壇、三には民壇なり。若し王の爲に作さば、名けて地壇と爲し、大臣の爲に作すをば、名けて國壇と爲し、凡人の爲に作すをば、名けて民壇と爲す。地壇は大に作り、國壇は中に作り、民壇は小に作る。若し此の大・中・小の法に依らざれば、便ち惡事起つて、或は王、或は臣、及び誦呪者に諸の惡事あり。是れを以て應に知るべし、當に法に依つて作すべきを。若し壇を作らんと欲せば、先づ星日を擇び、若し[四]路に善相に逢はば、(其の)吉祥地を選べ。或は河邊、或は山林處、或は園苑中に於てし、應に荊棘・骨石・瓦礫・高下不平・穢草・稠林ある險惡の地を離るべし。其の好處に於て、惡土を除去して好土を之に塡め、泥塗摩拭して、平坦なること掌の如く、周遍の細滑なること、猶し鏡面の如くせよ。若し王壇を造らんには、縱廣各〻三十二[五]肘あり。應に金・銀・眞珠等の末を用て、赤・白・黃・綠・黑色に和して、[六]其の道を界すべ

【一】諂曲。他を欺く爲に嬌態をなし、曲げて人情に順ふを云ふ。諂は媚びへつらふこと。

【二】禁戒。佛が制定せられた法律で、非を禁じ、惡を戒めたもの。

【三】以下は、地壇(王壇)・國壇(大臣壇)・民壇(一切凡庶人壇)の三種の壇法を明す。

【四】路に善相云云。地の色を擇んで、善惡の相を知る。

【五】肘(hasta)。約八寸。然るに一尺五寸、二尺などの異說がある。

【六】其の道を界す。これ即ち、五色界道である。

復次に法あり。若し諸鬼に魅著せらるゝが爲に、或は痩せ、或は[六七]癲せば、應に神呪を誦じて白芥子を呪すべし。或は呪すること三遍、或はまた七遍して、火中にて之を燒け。我れ今また[六八]火燒の法を說かん。先づ牛糞を以て壇に(塗)作し、壇の中(に於て)、應に菩提樹木及び[六九]捨彌木・[七〇]牛膝草等を燒き、酥・酪・蜜を以て相和して、之を呪すること一百八遍、一遍ごとに一燒すべし。是の如く呪を誦じて、或は一日、或は三日せよ。若し[七一]藥叉鬼の爲に著せられば、應に聖觀自在不空羂索神呪を誦じて、白芥子或は一切の種子を呪し、一遍ごとに一燒し、或は[七二]安悉香を白芥子に和して之を呪し、一遍ごとに一燒すべし。是の如く呪を誦じて、或は一日、或は三日せよ。若し天龍神鬼の爲に著せられれば、白檀末及び沈香末を以て相和し、呪し已らば、一遍ごとに一燒すべし。是の如く呪を誦じて、或は一日、或は三日せよ。若し一切の鬼神の爲に著せられれば、應に胡麻を取り、以て芥子に和し、或は白芥子に和して之を呪し、一遍ごとに一燒すべし。是の如く呪を誦じて、或は一日、或は三日せば、卽ち一切の諸鬼をして除滅せしめん。若し[七三]抂橫及び諸の災厄ありし(時)、或は星惡相を現せし(時)、若しくは王難・鬪諍・饑饉の事には、應に牛乳を以て鹽に和して之を呪し、一遍ごとに一燒すべし。是の如く呪を誦じて、或は一日、或は三日せば、一切の惡事、卽ち自ら銷滅せん。

【六七】癲。癲癇を指す。
【六八】火燒。護摩(Homa)のこと。
【六九】捨彌木。Śami
【七〇】牛膝草(aparamārga?)。ヤブジラミの異名。
【七一】藥叉鬼。Yakṣa
【七二】安悉香(guggulu)。安息香とも云ふ。安息香樹の樹皮から取つた脂汁塊。
【七三】抂橫。抂は枉の過か。禍難のこと。

此の神呪を誦じて、童子の髪を結び已らば、また雜華を取つて所呪の童子の手中に滿し、又妙香を以て若しは熏じ、若しは塗り、及び末は之を散じ、また粳米と華水とを呪して壇內に灑散し、應に沈香を燒いて、不空羂索神呪を誦ずべし。華を呪すること三遍せば、童子の面に散ぜよ。童子の身動き、若し語らしめんと欲せば、應に此の呪を誦じ、淨水を呪して童子の面に灑ぐべし。呪に曰く、第十五なり。丹本には、此の呪却つて第十四段に在り。

[六三]唵　阿慕伽　鉢囉底訶多囉叉囉叉自稱名　薩婆婓曳弊　吽漫陀　泮吒　娑婆訶

此の神呪を誦ぜば、手を以て所呪の人に觸るゝことを得ざれ。此の如く呪し已らば、童子卽ち語らん。若し(過)去・(未)來・現在の好惡の事を問はば、皆能く之に答へん。其の持呪者、若し童子に著ける神を[六四]發遣せんと欲せば、また應に此の呪を誦ずべし。呪に曰く、第十六なり。丹本には、此の呪却つて第十五段に在り。

[六五]唵　阿慕伽囉闍　鉢囉二合底訶多吽沒地耶咤待耶　若朧波波耶　吽吽泮吒半音

復次に法あり。若し(禁病人の法を)成立せんと欲せば、手を以て所呪の人を摩觸せよ。其の病をして差えしめん。(先づ)應に壇場を作つて、諸の香華を散じ、また沈香を燒き、病人を壇の中に安置して坐せしめ、之を呪して動かしむべし。其の持呪の人、無名指を以て(病人を)押せ。一本に云く、左手の中指及び無名指を捏して印を作り、其の中指をもて、彼の病人を呪せよと。病人卽ち語つて、是の誓言を作さん。我れ今放捨して、終に敢て來らずと。若し發語せざれば、應に此の呪を以て、更に之を治罰すべし。呪に曰く、第十七なり。

[六六]唵　阿慕伽　鉢囉底訶多孽車孽車　娑婆訶丹本には、此の呪第十六段に在り。下卷の第十八段の呪は、此の中の呪と爲す。

此の呪を誦じ已らば、所呪の病人の身、火熱の如くなりて、是の如くの言を作さん。我れ今卽ち去つて、永く復來らずと。

【六三】oṁ amogha aparājita (?) rakṣa rakṣa sarva (不明) hūṁ bandha (?) phaṭ svāhā.
これ結童子髮呪である。

【六四】發遣。本土に送還すること。

【六五】oṁ amogha rāja aparājita (?) hūṁ (不明) hūṁ hūṁ phaṭ.
これ呪淨水灑童子面呪である。

【六六】oṁ amogha aparājita (?) gaccha gaccha svāhā
これ放去呪である。

んと欲せば、應に信心を發して清淨の業を修し、精進堅固にして心に疑惑なく、至誠決定し、常に報恩を懷いて慈悲心を起すべし。此れ諸の菩薩の方に能く成就する所にして、諸の下劣[55]怯弱の有情(の能ふ所には)非ず。何を以ての故にとならば、佛教の中に由るに、(佛)先づ[56]阿難の爲に、四種の不思議の法を說き玉ふが故に。(其の四種とは、)謂ゆる末尼寶珠の威力は不思議なり、神呪の威力は不思議なり、妙藥の威力は不思議なり、佛の境界の威力は不思議なり、(卽ちこれなり。)若し能く呪を誦すること一百八遍せば、一切の諸鬼所著の病を皆除差することを得ん。或は一日乃至七日を經て、專ら聖者不空羂索神呪を誦するに、下の一遍に至らば、乃至[57]發(吒)の聲一句のみにて、若し[58]天行時氣の一切の熱病を患ふとも、悉く能く除差せん。

復次に法あり。應に白線を呪すること二十一遍すべし。一遍ごとに一結して、以て病人に繫けば、卽ち一切の諸病を除差することを得ん。亦復諸鬼の擾亂するところと爲らず。

復次に法あり。若し[59]瘧鬼の病にて、四日を經て患ふ者には、先づ應に泥をもて四角の壇を作るべし。諸の香華を散じ、其の病者をして壇の中に坐せしめ、また麵を以て病人の形像を作り、應に不空羂索心王の神呪を誦して病人の名を稱へ、[60]淳鑌鐵の刀を用て段段に之を截るべし。病人見聞して、心に卽ち驚怖せば、瘧鬼捨離して永くまた來らず。

復次に法あり。若し人を呪せんと欲せば、洗浴し淸淨にして、新淨の衣を著し、先づ神呪を誦じて自ら其の身を防し、後に牛糞を以て壇を(塗)作し、四方面に隨つて種種の色を畫き、諸の雜華を散じ、及び[61]白食を置いて壇場を供養し、應に童男或はまた童女を取り、洗浴し淸淨にさせ、妙香をもて身を塗り、白淨の衣を著せしめ、種種の莊具にて其の身を嚴り、壇の中に於て結跏趺坐せしむべし。應に此の呪を誦じて、童子の髮を結ぶべし。呪に曰く、第十四なり。

[62]泮吒半音　丹本には、泮吒半音無し。此の中は、卽ち下の第十五呪にあり。

【五五】怯弱。意志の薄弱なこと。

【五六】阿難(Ānanda)。譯、慶喜。釋尊の從弟にして、佛成道の年に生れ、釋尊五十五歲の時より二十餘年間、侍者となつて東西の化導に隨行し、佛入滅の際にも、側近に事へし十大弟子の中、阿難は多聞第一と稱せられ、佛滅後、その敎法を編集するに當つて、經文の大部分は、この人の記憶裡に存せしものを、原案とせられたと言はる。

【五七】發(吒)。phaṭ 破壞の義。

【五八】天行時氣等。流行の熱病を云ふ。

【五九】瘧鬼。オコリの疫鬼。

【六〇】鑌鐵。鋼鐵のこと。

【六一】白食。淸淨なる食物。

【六二】phaṭ.

て、沐浴し清淨にして、新淨の衣を著し、八戒を受持し、廣大に聖觀自在菩薩を供養し已つて、尊者の前に於て結跏趺坐し、先づ佛を念じ已り、後に不空羂索心王神呪を誦すること一百八遍すべし。其の持呪の人、先づ應に彼の[四三]火遍處定に入るべし。彼の葉中より烟の出づるを待つて、卽ち泥を以て壇を塗り、眼藥を取つて菩提樹葉の內に置け。若し火より星焔出でて、此の藥を燒練せば、其の持呪の人、卽ち作る所の眼藥成就せりと知り、應に芥子等を呪して十方に散じ、及び呪を誦じて自ら己身を護り、藥を取らんと欲する時は、先づ此の呪を誦ずべし。呪に曰く、第十三なり。

[四四]唵　阿慕伽　鉢囉底訶多吽什筏囉什筏囉泮吒娑婆訶

此の呪を誦じ已つて、卽ち眼藥を取れ。石上にて之を研り、其れをして末と爲して、眼中に安著せば、卽ち餘人をして、誦呪の者を見ることを得ざらしむ。また身能く自ら一切の伏藏を見、往かんと欲する處には、其の意樂に隨つて、或は入り、或は出づ。また能く自ら一切の菩薩・天・龍・[四五]藥叉・[四六]健達縛を見、及び一切衆生の若しは天趣に在るを見、或は[四七]那落迦中[四八]傍生・[四九]餓鬼（道中）に、若しは沒し、若しは生ずるを悉く能く見、若しは諸の衆生の福を作し、罪を作すを悉く能く見、一切の處に於て常に自在を得て、諸の供養を作し、また能く[五〇]阿素洛窟及び諸の龍宮を見、また能く類に隨つて變化（の身）を示現し、往くべきには便ち往いて障礙あること無く、神通を證得して諸の佛所に往き、自ら見え已つて、[五一]阿耨多羅三藐三菩提の[五二]記を受くることを得、また諸の大菩薩に灌頂せらるゝが爲に、諸の菩薩の出離方便の一切の善巧を得、諸の靜慮三摩地門に於て自在を得、[五三]根力・菩提分法を成就し、又一切の[五四]呪陀羅尼を得て、畏るゝ所無からん。

成就除鬼著病法分第十二

その時、聖觀自在菩薩、また成就能除一切著鬼魅法を說き玉ふ。若し持呪の人、此の法を成就せ

【四二】蘇毘羅 (suvīra)。大重にして銀銚に似てゐると云ふ。
【四三】火遍處定(tejaskṛtsnāyatana)。十遍處定の一。火の一法を觀じ、それをして一切處に周遍せしむるを云ふ。
【四四】oṁ amogha aparājita (?) hūṁ jvala (?) jvala phaṭ svāhā.
【四五】藥叉。Yakṣa
【四六】健達縛。Gandharva.
【四七】那落迦(Naraka)。譯、地獄。
【四八】傍生 (Jiryañca)。畜生のこと。傍行する生類と云ふ意で、傍生と譯す。
【四九】餓鬼。Preta.
【五〇】阿素洛。Asura.
【五一】阿耨多羅三藐三菩提 (anuttara-samyak-sambodhi)。譯、無上正遍覺。
【五二】記。具には記別(vyākaraṇa)と云ひ、佛が弟子の成佛可能なる事を預言して之を記し、委しく劫數・國土・佛名・壽命等の事を分別するを云ふ。
【五三】根・力・菩提分法。五根・五力・七覺支。
【五四】呪陀羅尼。法・義・呪・忍の四種陀羅尼の一にして、眞言密敎の謂ゆる陀羅尼(dhāraṇī總持)で、佛菩薩の禪定より發する秘密語を云ふ。

ば、持呪の人、是の如くの言を作せ。善來姉妹、若し我等を攝受せんが爲の故に來らば、願くば此の香華を持して、我が同伴に與へよと。其の同伴の人、此の婇女を觀、所愛者に隨つて即便ち手を執り、取つて以て妻と爲せ。此の婇女、其の人の心に愛重せらるゝを知るが故に、猶し婢使の如くに之に承事す。此の同伴の人の去らんと欲する處に隨つて、情に任せて來往す。其の形色相は少き童子の如く、遊戲して五塵[37]の境界を受用し、若し人身を捨てば、即ち天身を得て呪仙を成就せん。其の持呪者、是の如く呪を誦ぜば、乃至更に勝妙の婇女に五百の眷屬有つて、室より來り、種種の衣服・莊具及び諸の香華を執持し、呪人を頂禮して、是の如くの言を作さん。善哉聖者、我は攝受し哀愍せられんと欲するが爲の故に、久しきより來た此に在り。唯願くば、此の衣服等を領受せられよと。三請するに至らば、其の持呪の人、諸の呪仙を調伏せんと欲するが爲の故に、應に其の請を受くべし。受くる所に隨つて、持呪の人及び諸の婇女、便ち沒して現れず、(其の持呪の人)、呪仙轉輪王の位を成就し、若し人身を捨てば天身を得、一切の呪仙皆來り、恭敬して其の足を頂禮し、吉祥(の言を以て)稱讃し、願くば常に世に住せられよと(乞ひ)、種種の音樂を奏し、諸の歌舞を作し、百千の寶幢・幡・蓋を建立し、歡樂具足す。其の持呪の人、自在に天王の果報を受用し、其の心安樂にして、然も常に佛を念じ、菩薩の行を忘失せざれば、宿命智[38]を得て一切の諸の惡趣門[39]を超過し、亦五塵の境界に耽著せず、恒常に諸佛菩薩を見ることを得て、能く無量の有情を教化し、無上菩提道の中に於て、不空智諸陀羅尼三摩地門[40]に入らん。

成就眼藥分第十一

その時、聖觀自在菩薩、また成就眼藥法を說き玉ふ。其の持呪の人、若し此の法を成就せんと欲せば、應に雄黃・牛黃[41]・及び蘇毘羅[42]眼藥を以て、香葉中に於て此の三種を裹み、白月十五日に於

【三七】　五塵。色・聲・香・味・觸の五境を云ふ。この五能く眞性を染汚するから、塵と名く。

【三八】　宿命智(Pūrvanivāsānusmṛtijñāna)。自己及び六道の衆生の、宿世に於ける善惡・住所等、一切を識知する智を云ふ。

【三九】　惡趣門。惡趣とは、衆生が惡業の因を以て趣くべき所を云ひ、これに三惡趣―地獄・餓鬼・畜生、四惡趣―三惡趣に修羅(Asura非天)を加ふ、五惡趣―三惡趣に人と天とを加へ、修羅を天に屬せしむ―がある。而して種々の惡趣差別すれば門と云ふ。

【四〇】　陀羅尼三摩地(dhāraṇī-samādhi)門。陀羅尼三摩地とは、無量の總持(陀羅尼)を發せしむる禪定(三摩地)を云ひ、佛菩薩所得の此の禪定は、佛所具の無量の禪定に入る門戶であるから、門と云ふ。

【四一】　牛黃(gorocanā)。牛の病塊にして、其の膽の中より之を得。これに數種あつて、牛をして吼喚喝迫して得るものを、生黃と名け、殺して角から得るものを、中黃と名け、牛が病死した後に、その心中から剝ぎ取つたものを、肝黃と名く。中に就て、藥用としては、生黃最も效驗ありと云はる。

て空中にて下り、其の寶物の地に入れる深淺の所有の尺數に隨ひ、其の燭此の尺數に依つて空中に住すべしと。持呪の人、藏所に來至して明了に處を知り、結界して之を圍むを待つて、其の燭を方に滅すべし。伏藏を知り已つて、後に若し取らんとする時は、應に[三四]乳糜及び[三五]油麻粥を以て、天(藏)神を祭るべし。是の如く祭り已らば、其の同伴と共に往いて之を取れ。珍寶を取得せば、分つて三分と爲し、一分をば自ら己身の爲にし、一分をば其の同伴に與へ、一分をば同伴と共に和順して三寶に供養し、又自身所得の一分を以て、一切衆生の共用する所に與へよ。若し能く是の如くせば、自身の一分(の布施に由るが故に)、乃至持呪の人の命、未だ[三六]期を盡して之を用ふるとも、盡くること無からざらん。

成就入婇女室分第十

その時、聖觀自在菩薩、また成就入婇女室法を說き玉ふ。若し持呪の人、此の室に入らんと欲せば、應に同伴腹心の者を將ゐて、先づ當に具足して吉祥法を作し、以て自身を呪し、然る後に往いて其の室に至るべし。其の室は愛す可く、常に流泉・浴池、及び諸の華果・種種の樂具有つて、世間皆此の室を以て是れ靈仙の處とす。若し入らんと欲する時は、其の持呪の人、當に白月十五日に於て、八戒齋を持し、澡浴し清潔にして、白淨の衣を著し、然る後に往いて泉水の出づる處に至るべし。應に稻・粟・大麥・小麥・大豆・小豆、及び胡麻等の七種の穀を以て、乳・酪・酥に和して、不空羂索心神呪王を誦じ、一一の遍每に、常に此の穀を以て火中に散じ、要ず此の室の其の門をして、自ら開かしむべし。持呪の人、室の門開くを見るとも、驚怖すべからず。輒ち起つことを得ざれ。應に專ら呪を誦ずべし。若し婇女有つて、各各種種の華香を執持し、室より出でて呪人に語つて言く、善來尊者、唯願くは我が是の如くの香華を受けよと。其の持呪者、輒く受くべからず。乃至三請せ

【三四】乳糜。牛馬等の乳を以て米粟に和し、煮て粥と爲したもの。
【三五】油麻粥。黃麻子並に其の油を以て米粟に和し、煮て粥と爲したもの。
【三六】期を盡す。壽命を盡すこと。

き、持呪者をして、宿世の所有の生事を憶念せしむ。若し持呪の人、童子に過去・未來・現在の事を問はば、皆實に依つて答へて終に虚妄無けん。

成就使死屍取伏藏分第九

その時、聖觀自在菩薩、取伏藏の法を説き玉ふ。若し地中の伏藏を取らんと欲すること有らば、其の持呪の人、先づ當に呪を誦すべし。自身を防し已つて、即ち[二八]塚間に往き、丈夫の屍の身形の上に[二九]瘡瘢なきものを取つて、應に洗浴を與ふべし。屍を洗浴し已らば、即ち香華を取つて之に供養し、(酥油を以て)其の兩足に塗り、便ち呪を誦じ、屍を呪して起さしめば、是の如くの言を作さん。尊師、今我に何事をか與へ玉ふやと。彼の屍即ち從つて、紙・筆・墨を索む。其の持呪の人、即ち紙等を齎して死屍に與へば、彼の屍即ち如法に、取伏藏珍寶の法を抄寫して持呪の人に與へん。若し持呪の人、抄寫を用ゐざれば、即ち屍に語つて言へ。汝應に我が爲に、自ら取つて將來すべしと。其の屍、言の如く即ち將來せん。所得の珍寶は、應に如法に受用すべし、[三〇]三寶に供養し、及び一切衆生に施與せば、此の死屍、持呪の人に隨ひ、所得の珍寶、若し受用盡くれば、即便ち送り來らん。若し三寶、及び一切の[三一]沙門・[三二]婆羅門・貧窮の衆生に施さざれば、即便ち送らず。若しは持呪の人、自身墓中に至ることを欲せず、又復彼の屍を起たしめんと欲せざらん。若し自ら能く伏藏の處を知らば、應に彼に往いて取るべし。若し夜中に取らんには、應に同伴を將ゐて功徳を愛樂すべし。(其の同伴は)同心同行にして、深く罪業を怖れ、善く經論を解する聰慧の者にせよ。先づ吉祥禁身呪を作し已つて、即ち蘇膏を以て塗布して燭と爲し、不空羂索心神呪王を誦ずること一百八遍せよ。[三三]捨(詩可反)彌木を用て大火聚を然き、誓願を發せ。一切衆生をして、永く貧窮の苦惱等の事を斷ぜしめんが爲に、即ち蘇燭を以て空中に擲向す。廣大の伏藏有るの處に隨つて、其の燭即ち伏藏の上に於

【二八】塚間(śmāśānika)。墳墓處。

【二九】瘡瘢。キズアト。

【三〇】三寶。佛・法・僧。

【三一】沙門(Śramaṇa)。譯、修善・勤勞・勤息等。

【三二】婆羅門(Brāhmaṇa)。譯、淨行。印度四姓中の最上位の族稱で、僧侶・學者の階級を云ふ。

【三三】捨彌(śami)木。譯、枸杞。

[二四]南謨尊者、願くば我が意樂に隨つて、一切の事業を悉く皆圓滿ならしめ玉へと。其の持呪の人、此の願を作し已らば、(自身)及び諸の同伴、心の去く處に隨つて、皆意の如くなることを得、時に吉祥瓶、其の體[二五]淨瑠璃の如くに變現して、持呪の人等の爲に童子を現作し、常に能く承事し恭敬し供養せん。

成就策使羅刹童子分第八

その時、聖觀自在菩薩、また策使羅刹童子の法を說き玉ふ。若し使はんと欲する時は、其の持呪者、應に先づ羅刹童子を畫作すべし。色相・形容は童子の像の如くし、一切の莊具を以て其の身を嚴飾し、頭の上に於て五髮髻を爲り、面狀は喜悅にし、身相は端嚴にし、衣服は黃色にして、空に乘じて行くが如くにし、手に蓮華を執り、其の體は金色にせよ。是の如く畫き已らば、密處に安置せよ。若しは佛堂中、若しは房內に在け。白月八日或は十四日に於て、八戒齋を持し、像幀前に於て、散華・燒香・末香・塗香・諸の華鬘を懸け、及び種種の飲食をもて供養を爲し、其の像前に於て結跏趺坐し、不空羂索心神呪王を誦ずること一百八遍せよ。現前に卽ち羅刹童子見れて、持呪の人の希願する所有るに隨つて、皆滿足せしめん。其の持呪者、童子に語つて言へ、汝今我が驅策使者と作るやと。童子答へて言く、是の如し、是の如し。我れ當に策勵されて承事供養すべし。汝の驅使に隨つて、皆速疾に成辦することを得しめて、疲厭を生ぜずと。其の持呪の人、常に應に勤心して童子の形像を供養すべし。輕欺を作さざれ。若し食せんと欲する時は、先づ童子に與へ、遺忘することを得ざれ。若し能く是の如く驅使自在ならば、所須の財物、皆能く之を與へ、亦復其の[二六]伏藏の處を示し、持呪の人の所須に隨つて、莊具と及び資財とを、皆爲に[二七]將來して、乏少する所無けん。而も此の童子の、若しは眼に見る所、若しは耳に聞く所、皆來つて、密に持呪の人の耳邊に向つて說

【二四】南謨(namaḥ)。譯、歸命。

【二五】瑠璃(vaidūrya)。譯、遠山(須彌山 Sumeru の異名)寶。青色の寶石で、七寶の一。

【二六】伏藏。土中に埋伏せる寶藏。

【二七】將來。持ち來ること。

呪吉祥瓶呪、曰く第十二。

[二〇]唵　阿慕伽　阿波囉耳多　訶曩訶曩　吽泮吒半音

此の呪もて吉祥瓶を呪せよ。呪もて瓶を呪するの時、瓶に異相現れん。或は傾き、或は側き、或は動き、或は搖がん。呪人見已つて常の如く呪を誦じて、驚怖すべからず、亦其の結跏趺坐を解かざれ。何を以ての故に、吉祥瓶を以て[二一]末尼珠の如く、心の所欲に隨つて一切皆得んには、要ず當に策勵じて功を加へて、方に成就を得べきが(故に)。此の吉祥瓶は大威力有つて、甚だ成就し難し。若し成ずることを得れば、自在安樂にして福業を增長す。是れに由つて、呪人は常に勤めて精進し、空過して諸の放逸を恣にすべからず。若しは吉祥瓶の中より火の[二二]日(然)焔を出し、或は金銀・末尼・眞珠・瓔珞・諸寶の色相を出し、或は時に種種の衣服を出現し、また諸天の美妙の婇女、及び諸の殊勝の童男童女、或は丈夫の嚴淨に裝飾せる(妙相)を現じ、或はまた城邑・聚落及び諸の[二三]巷陌、象馬・車乘・一切の人衆、宮殿・園林・美妙の飲食、香華・幡蓋・諸の音樂等を示現せん。是の如くの種種の異相を見ると雖も、常の如く呪を誦じて驚起すべからず。其の時、聖觀自在菩薩、また自身を變じて普賢菩薩の形像を現作し、無量の菩薩眷屬に前後に圍遶せられて、彼の瓶中より忽然として出現し玉ふ。聖觀自在菩薩、此の相を現じ玉ふ時、如上所現の一切の神變の種種の異相は、悉く皆隱沒し、たゞ尊者の現作し玉へる普賢菩薩の形像と、無量の菩薩とのみ有つて、皆共に彼の時呪の人を讚して言はく、善哉、善哉、汝能く此の神呪法を成就せり、汝の所求に隨つて、皆當に汝に與ふべしと。呪人聞き已つて卽ち座より起ち、合掌恭敬して尊者を右遶し、頂禮供養して是の言を作せ。たゞ願くば尊者、當に我を攝受して、吉祥瓶を施し玉ふべしと。聖觀自在菩薩所現の普賢菩薩言はく、善男子、汝の求むる所、我れ今汝に施さん、意に隨つて受用すべしと。呪人吉祥瓶を取得し已らば、頂上に置け。また香華を以て種種に供養し、吉祥瓶に從つて、乞願して言せ。

【二〇】 oṁ amogha aparājita hana (?) hana hūṁ phaṭ.

【二一】 末尼珠。末尼 (maṇi) は寶と譯す。

【二二】 日。然でなければ通じ難い。

【二三】 巷陌。チマタ。マチノミチ。

應に[一一]四大天王を畫くべし。諸の寶物を以て其の身を莊嚴し、皆甲仗を被、手に刀劍を執る。其の壇の東面には、應に金剛を畫くべし。南面には刀劍、西面には[一二]棓を畫き、北面には[一三]鐸を畫け。其の四角に於て赤色の[一四]旛を畫き、種種の華を散じ、壇場の中に於て、諸の彩色を以て吉祥瓶を畫き、雜華鬘を用て瓶の項に繋け、蓮華の池の水を取つて瓶中に盛り滿し、また香華・妙藥幷に諸の雜果・一切の種子、及以び金・銀・眞珠等の寶を以て、並に瓶內に置け。また四盤を以て、一盤には酪を盛り、一盤には蘇を盛り、一盤には乳を盛り、一盤には蜜を盛り、瓶の四面に於て各ゝ一盤を置け。其の持呪者は、須く五人を伴ふべし。勇健無畏にして皆器仗を嚴にし、其の四方に於て各ゝ一人を立たせ、五人の中に於て心腹を得たる者一人を簡び取り、持呪者と隣近して住せしめよ。五人の外に更に一人を取り、勇猛無畏にして能く難事を爲す者を、洗浴し清淨ならしめて、新淨の衣を著せしめよ。其の持呪の人は、壇の四方に於て種種の飲食を散ぜよ、(唯し)血肉等を除け。吉祥瓶の前に於て吉祥草を取り、座に敷いて坐し、當に水及以び粳米を呪して、十方に灑散すべし。燒香・散華して如法に結界せよ。

第十一

[一五]唵　阿慕伽　播奢鉢囉底訶多帝矖嚕枳耶微闍耶　囉叉自稱名　吽吽泮吒半音

此の呪もて自身と同伴とを呪せよ。是の如く呪し已つて、應に[一六]大印を作り、聖觀自在菩薩不空羂索心神呪王を、若しは一日・二日誦ずべし。此の呪を誦する時、若し[一七]毘那夜迦鬼の來ること有らば、故に相驚怖して障礙を作さん。其の持呪の人、應に勇猛を起すべし。恐懼を生ずること勿れ。常の如く呪を誦じて、心を散亂すること莫れ。また壇の南面に於て、[一八]羅刹娑の可畏の聲を聞かん。其の誦呪の人、白芥子を呪すること七遍して、之を散ぜよ。諸の羅刹娑尋で卽ち退散して、障礙すること能はず。[一九]南(東)・西・北方も亦復是の如し。

【一一】四大天王。東方持國天王(Dhṛtarāṣṭra)、南方增長天王(Virūḍhaka)、西方廣目天王(Virūpākṣa)、北方多聞天王(Vaiśravaṇa)。金剛(vajra)。金剛杵を指す。
【一二】棓。大なる杖。
【一三】鐸。スズ(錫)。
【一四】旛。或は幡に作る。
【一五】oṁ amogha pāśa(不明)trailokya-vijaya rakṣa hūṁ hūṁ phaṭ.
【一六】大印。蓮華印を指す。
【一七】毘那夜迦(Vināyaka)。常隨魔と譯す。人身にして象鼻、常に行者に隨侍し、その隙を窺つて障難を爲す惡鬼神である。
【一八】羅刹娑(Rākṣasa)。
【一九】南。東の誤であらう。

諸の惡鬼神(をして)皆自ら隱沒(せしめ)、諸毒を銷散して、歡樂圓滿(ならしむ)。一切の福業を皆增長することを得(しめ)、一切の罪行を悉く能く除滅(せしむ)。猶し孝子の其の父を、恭敬し供養し尊重するが如し。彼の持呪の人、若し自身の安隱快樂を欲せば、彼の使者に於て、輕欺して惡を作し、及び瞋怒を懷くことを得され。應に淨く洗浴し、常に勤めて呪を誦じて供養を修すべし。口に妄言せざれ。其の心、一切衆生を哀愍して無畏を施興し、三寶の所に於て深く淨信を起し、常に諸華を散じ、及び華鬘を懸け、燒香・末香是の如く等を以て、尊者聖觀自在菩薩に供養すべし。又先づ種種の飮食・散華・燒香・然燈を以て使者に供養し、乃し一日の中に於て、忘れて供養せざることを得され。若し供養せされば、求むること成らず。若し其れ使者隱沒して現れずんば、卽便ち捨去せらる。是の故に持呪の人は、放逸すべからず、常に精進を修して懈怠すべからず。尊重處に於て、常に勤めて供養し、恒に菩提[八]の心を忘失せざれ。施[九]・戒・忍・精進・定・慧に於て、應に常に修習すべし。慳悋・汚戒・塵垢を遠離し、生死の中に於て常に怖畏を生じ、深く慚愧の心を懷き、常に正念にして、智慧觀察を散亂することを得ざれ。若し是の如く作さば、卽ち能く一切の呪業を成辦せん。

成就吉祥瓶法分第七

その時、聖觀自在菩薩、また成就吉祥瓶法を說き玉ふ。持呪の人、若し法を成就せんと欲せば、應に同伴を結び、並に十善[一〇]を修し、至つて心を堅固にすべし。壇を作らんと欲する時は、應に好處を選ぶべし。若しは山林地・吉祥の所、或は是れ往昔仙人所住の寂靜の處を、如法に修理し、洗浴し清淨にして、俱に新衣を著し、唯麥子及以び乳糜を食ひ、八戒齋を受け、同伴の人と與に呪を持して自護し、心に隨つて遠近に四方壇を作り、面の各一門に香泥をもて地を塗り、香を以て葉を畫き、應に雄黃・赤土・紫檀等の末を用て、其の道を界すべし。其の壇の内に於て四方面に隨つて、

【八】菩提の心。菩提(bodhi)は覺智の義で、覺智を求むる心を指す。

【九】施・戒等。これ卽ち、六波羅蜜(pāramitā到彼岸)である。

【一〇】十善。不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不慳貪・不瞋恚・不邪見。

成就驅策僮僕使者分第六

その時、聖觀自在菩薩、また是の言を作し玉ふ。若し驅策僮僕を成就せんと欲せば、其の持呪者、先づ僮僕者の形を造作すべし。而も此の使者は、即ち是れ不空羂索王神呪の僮僕なり。容貌端正にして、當に一切の[一]莊飾の具を以て其の身を嚴るべし。其の頭上に於て[二]五髮髻を作れ。身の色相は猶し童子の如し。若し作らんと欲する時は、應に白檀を用ふべし。或は紫檀、或は妙香檀を用てし、或は[三]天木、或は一切の木を用てせよ。若しは金、若しは銀、以て其の形を作れ。若し畫幀の時は、或は白氎の上に、或は絹の上に於てせよ。其の僮僕者の所有の衣服は、皆赤色に作せ。[四]燕脂を以て紫礦汁に和し、又[五]朱砂及以び[六]鬱金の若しは根、若しは香・諸の雜色等を取つて、其の形相を畫き、應に端嚴にして、面目喜悅熙怡微笑ならしむべし。其の身の形相は淺黄白色にし、應に兩臂を作るべし。一手は[七]菴摩羅果を執り、一手は種種の華を持す。其の像を常に密處に安置し、散華・燒香・末香・塗香・然燈・種種の飲食を供養と爲せ。又像の前に於て、不空羂索王呪を誦すること一千八遍せよ。其の持呪者は、應に八戒を受けて、慈悲心を起すべし。呪法即ち成ず。即ち能く彼の使者の形を覩見し、驅策自在にして、此の持呪者の所有の處分、皆成辦することを得、然も其の使者の、若しは耳に聞く所、若しは眼に見る所、皆來つて持呪の人に向說せん。持呪者(の驅使する所)に隨つて、去處より能く速に往來し、(爲に)一切の事業を皆成就することを得しめ、又能く持呪の者に、一切の財寶を施與し、持呪の人の心に去らんと欲する處に隨つて、其の使者即ち將に去來す。持呪者の住止の處に於ては、常に淨く掃灑し、若しくは泥をもて地を塗り、所有の一切の隱密の事及び吉祥の事、皆來つて向說し、一切の惡聲、一切の苦惱、悉く皆銷滅し、一切の病患を能く除愈せしむ。

【一】莊飾。莊嚴校飾。
【二】五髮髻。頭髮を五つの髻に總べ結びたるを云ふ。
【三】天木。杉木か。
【四】燕脂。燕支(紅色を取る草の名)の脂のこと。但し今時繪畫に用ふる物とは、色多少異り、この燕脂は黑味を帶ぶと。
【五】朱砂。朱となる砂。
【六】鬱金。(kunkuma)。香草の名。其の花黃金色にして、根は染料として用ゐ、花は壓搾して汁をとり、他物に和して香を作る。
【七】菴摩羅果 (amalaka)。餘甘子と譯す。其の果實は胡桃に似、初め之を食する時は、稍〻苦澀の如く、其の水を飲むに及んで、美味便ち生ず、仍て餘甘と名くと。

衣服・幢幡・寶蓋・塗香・末香・燒香・散華を以て、恒常に聖觀自在菩薩を供養して、報恩の心を作せ。若し能く是の如くせば、即ち彼の使者、日日に供承して、五百人所須の資具・飲食・衣服・塗香・末香・燒香・散華、一切具足することを得、乃し持呪の者、〔九九〕盡形已來、意に隨つて皆乏少する所無きを得ん。

は、白芥子七粒を以て南天の鐵塔を打開さ、法界塔の中に入つて、金剛薩埵より親しく兩部の大經を授傳せらる。

【八五】 oṁ amogha aparājita(?) oṁ hūṁ phaṭ.

【八六】 oṁ amogha trailokya-vijaya karma hūṁ phaṭ.

【八七】 oṁ amogha rakṣa svāhā.

【八八】 oṁ amogha hūṁ kha.

【八九】 oṁ amogha dama(?) dama hūṁ phaṭ.

【九〇】 oṁ amogha (不明) hūṁ phaṭ.

【九一】 oṁ amogha vijaya hūṁ phaṭ.

【九二】 曷囉闍 (Rājn) 譯、王。

【九三】 阿耨多羅三藐三菩提 (anuttara-samyak-sambodhi) 無上正等正覺。

【九四】 不退轉 (avaivartika)。佛道修行の道程に於て、功德善根愈〻增進して、更に下位に退失退轉することなきを云ふ。

【九五】 現身。父母所生の肉身を指す。

【九六】 齋。八戒齋を指す。

【九七】 佛・法等。これ即ち、三寶である。

【九八】 貪・瞋等。これ即ち、三毒である。

【九九】 盡形。詳しくは盡形壽と云ひ、壽命を盡す意。

已つて求むる所、皆遂ぐることを得。即ち菩薩の諸の三摩地を得、[九三]阿耨多羅三藐三菩提に於て不[九四]退轉を得、[九五]現身に宿世生事を憶念し、及び無量百千の功德を得べし。

成就使者能辨事法分第五

その時、聖觀自在菩薩、また使者能辨事法を說き玉ふ。此の使者は、即ち是れ聖觀自在菩薩不空羂索王神呪の使なり。若し驅使せんと欲せば、應に綵色を以て、及び氎布幀の上に使者の形を畫くべし。又藥叉童子の像を作れ。頭髮直く竪つて盛んなる火焰の如く、面目瞋怒・綠眼・平鼻、形貌は赤色にして身に赤衣を服し、口より四牙を出して二は上に二は下に、其の舌は口に於て或は入り或は出で、一手には劍を持ち、一手には索を執り、嚴身の具皆悉く周備せり。作法せんと欲する時は、白月八日或は十四日に、[九六]齋を持し潔淨にして、幀像を四衢道中、或は空室内に安置し、應に華香及び諸の飮食を以てし、血肉等を除いて種種に供養すべし。其の持呪者は、先づ應に呪を誦じて自ら身を防護し、氎幀前に於て、不空王呪を誦ずること一百八遍すべし。この時使者、其の人の前に現れ、持呪者に語つて言く、何の所須をか欲するやと。若し處分するを見ば、皆能く成辨せん。其の持呪者、心の所欲に隨つて使者を依行せば、時に使者見聞する所に隨つて、悉く皆具に說かん。若し持呪の人、日に金錢百文を索めば、時に應じて即ち得ん。然も別に用ゐ、及び悋惜を生ずべからず。但し[九七]佛・法・僧寶を供養すべし。是の如くの事は、たゞ當に自ら知るべし。輒く人に向つて、之を說くことを得ざれ。亦復人と共に怨を結ぶことを得ざれ。應に淨食を食すべく、雜食を得ざれ。每食の時、先づ己身の一分の飮食を減じて使者に供養し、然る後に自ら食すべし。常に須く憶念すべく、之を忘るゝことを得ざれ。心に常に[九八]貪・瞋・癡等を捨離し、妄語することを得ざれ。誠諦の言を出して他の爲に說法し、一切衆生に於て、常に饒益慈悲の心を起すべし。また香華・

【六九】萬字。卐の形で、梵に śrīvatsalakṣaṇa と云ひ、吉祥海雲の相である。是れ印度に相傳する吉祥の標相にして、經典に說く所多し。
【七〇】末尼(maṇi)。寶珠。
【七一】白縵。縵は無文の繒紈(カトリギヌ)。
【七二】三時。晨朝・日中・黃昏。
【七三】律儀。攝律儀・攝善法・攝衆生の三聚淨戒を指す。
【七四】乳糜。乳で造つた粥。
【七五】酥(ghṛta)。牛乳を煮沸して製す。
【七六】酪(dadhi)。牛乳を精製したもの。
【七七】石蜜。氷砂糖。
【七八】栴檀(candana)。譯、與樂。最も芳香高き香。
【七九】沈水。梵に agaru と云ふ。
【八〇】蘇合。梵に turuṣka と云ふ。
【八一】龍腦。梵に karpūra と云ふ。
【八二】oṁ amogha aparājita(?) rakṣa rakṣa hūṁ phaṭ.
【八三】oṁ amogha bandha(?) hūṁ hūṁ phaṭ.
【八四】芥子(rājikā)。加良志(辛子)のことで罌粟又は蔓菁子ではない。此の芥子は、其の性堅辛にして、摧破降伏の義に相應する所から、之を加持して降魔結界す。龍猛菩薩

若し同伴人を呪せんと欲する時は、應に此の呪を誦すべし。水を呪すること一百八遍し、或は白芥子及び淨灰を呪して、其の壇內に於て同伴に散灑せよ。卽ち彼の人を護り、惡魔・鬼衆能く惱亂すること無し。

呪香呪、呪に曰く、第八なり。

八九唵　阿慕伽　淡磨淡磨　許泮吒

若し香を燒く時には、先づ此の呪を以て、種種の香を呪すること二十一遍し、然る後に香を燒いて恭敬供養せよ。

呪飲食及華果呪、呪に曰く、第九なり。

九〇唵　阿慕伽　趁醯利儜　趁醯唎儜　許泮吒

若し飲食及び華果等を以て、之を散ぜんと欲する時は、先づ此の呪を誦じて、呪すること一百八遍し、然る後に其の壇外に於て、四方面に隨つて遍く之を散ぜよ。

隨作事成就呪、呪に曰はく、第十なり。

九一唵　阿慕伽　毘闍耶　許泮吒

何事を作すに隨つても、若し此の呪を誦ぜば、悉く皆成就す。

持呪者、是の法を作し已らば、應に不空陀羅尼自在王呪を誦ずべし。若しは聖觀自在菩薩の像幀の動くを見るの時も、或は煙出づる時も、或は焰出づる時も、常の如く呪を誦じて、驚怖すべからず。若し幀の動くを見ば、富貴自在を得、若し煙出づるを見ば、九二曷囉闍位を成就し、若し焰出づるを見ば、騰空自在にして、呪仙を成ずることを得。其の誦呪者、若し焰の出づるを見るも、心に驚怖なく、身動搖せざれば、卽ち聖觀自在菩薩、其の人の前に現れて之を安慰し玉ひ、其の人、見

正しく開敷せる白蓮華。

【五六】粳米。ウルチ。

【五七】幀。ハリギヌ。繪畫をゑがくに用ふる絹を指す。

【五八】絹氎。氎は細密の織物。

【五九】綖。イトスヂ。

【六〇】堅泥耶(Aiṇeya)。鹿の梵語。また鹿王の名とす。

【六一】澡瓶。梵に Kuṇḍikā (君持・軍持に作る)と云ひ、雙口の水瓶にして、比丘所持十八物の一である。

【六二】施無畏。施無畏印のこと。卽ち、臂を伸べて上に向け、五指を竪てゝ掌を外に向はしむるを云ふ。此の印は能く一切衆生の種種の怖畏を除いて、安樂無畏を施すから、爾か名く。

【六三】髆。カタボネ。

【六四】耳璫。璫はミミカザリ。

【六五】臂釧。腕輪。

【六六】白月。また白分(śukla-pakṣa)と云ふ。印度の暦法は、月の盈缺を以て白黒の名を立て、月の盈より滿に至る前十五日を白月となし、月の虧より晦に至る後十五日を黒月(kṛṣṇa-pakṣa黒分)とす。

【六七】界道。これ卽ち五色界道であつて、此の界道は、通路にして而も境界であるから、爾か名く。

【六八】螺形。螺は梵に śaṅkha (商佉)と云ふ。

八三 唵　阿慕伽　漫陀　鈝鈝　泮吒

若し鬼神を呪せんには、先づ此の呪を誦じ、五色の綖を呪すること一百八遍して、壇の四面に繋け、然る後に水を呪すること一百八遍し、或は八四芥子を呪し、或は淨灰を呪して、四方面に隨つて壇内に之を散ぜよ。卽ち一切の惡鬼神等をして、能く惱亂すること無からしむ。

禁惡鬼呪、呪に曰く、第四なり。

八五 唵　阿慕伽　鉢囉底訶多唵鈝泮吒

若し惡鬼を禁ぜんには、應に此の呪を誦ずべし。水を呪すること一百八遍し、或は白芥子を呪し、或は淨灰を呪して、四方面に隨つて壇外に之を散ぜよ。諸の惡鬼をして、其の便を得ざらしむ。

禁惡魔呪、呪に曰く、第五なり。

八六 唵　阿慕伽　帝囇路枳耶　毘闍耶　倶嚕磨鈝泮吒

若し魔を呪せん時は、應に此の呪を誦ずべし。水を呪すること一百八遍し、或は白芥子及ひ淨灰を呪して、其の壇外に於て十方に散灑せよ。卽ち諸の惡魔を禁じて、嬈亂すること能はざらしむ。

禁諸惡魔鬼呪、呪に曰く、第六なり。

八七 唵　阿慕伽　囉叉（自稱名）　娑婆訶

若し諸の惡魔鬼を禁ぜんと欲する時は、應に此の呪を以て、水を呪すること一百八遍し、或は白芥子及び淨灰を呪して、自の頂上・額上・心上及び兩肩上に點じ、遍く其の身に灑ぐべし。卽ち一切の惡鬼・惡魔をして、惱亂すること能はざらしむ。

呪同伴人呪、呪に曰く、第七なり。

八八 唵　阿慕伽　鈝佉

上（八）不非時食の八となし、薩婆多論・成實論・智度論等に依れば、第六を塗飾香鬘と舞歌觀聽との二に分け、總じて九戒とし、前の八戒と後の齋法とを合して・八戒齋と名く。

【四七】 四梵行。四梵住とも名け、慈・悲・喜・捨の四無量心を云ふ。

【四八】 吉祥草。茅草（kuśa?）を云ふ。之を吉祥草と名くることは、如來成正覺の時、吉祥童子之を捧げ、如來敷いて座となし、以て成佛し給ふ、吉祥童子が奉つた草であるから、吉祥と云ひ、又如來が之を敷いて、最吉祥の正覺を成じ給ふたから、吉祥草と名く。

【四九】 結跏趺坐。跏は足を組む義、趺は跗に同じく足の甲を云ふ。卽ち、兩足を交結して、足の甲を更互に兩髀の上に置いて坐るのを、結跏趺坐と稱す。

【五〇】 曼陀羅華（mandārava）。小白蓮華。

【五一】 摩訶曼陀羅華（mahāmandārava）。大白蓮華。

【五二】 鉢特摩華（Padma）。紅蓮華。

【五三】 嗢鉢羅華（utpala）。青蓮華。

【五四】 倶沒陀華（kumuda）。黃蓮華。

【五五】 奔荼利華（Puṇḍarika）。

周遍に皆流泉・浴池有つて、處處に青草皆悉く充遍せば、應に黃土を用て泥と爲して地に塗るべし。種種の修理は盡く如法にせしめ、荊棘・瓦礫・骨石ある諸の惡しき土地に於てせざれ。其の壇の四面に、金精・赤土・雄黃・石灰及び紫金、色は青・黃・赤・白及以び紫色を以て、其の[六七]界道を畫き、壇の四面に於て各々一門を開け。門外に各〻二吉祥柱あり。其の壇內に於て、應に[六八]螺形・[六九]萬字香印を畫くべし。門內に各〻二吉祥瓶あり。其の處所に隨つて、應に浴池を作るべし。池の內に嗢鉢羅華・俱沒頭華・奔茶利迦華を周遍せしめ、池の四邊に於て、應に鵝の形を畫くべし。華鬘を貫ける如く周帀圍遶して、應に像幀を壇場の內に置くべし。種種の華を散じ、種種の香を燒き、幢幡・寶蓋を以て之を供養せよ。或は金・銀・諸寶及以び赤銅を用つて、吉祥瓶を作り、一切の諸の妙香藥、[七〇]末尼・眞珠・金・銀銅等の寶を盛り滿し、和雜して之に盛れ。雜華の繩を以て、其の瓶の項に繫けよ。燒ける稻穀を取つて華と作し、散じて以て壇上を嚴飾し、應に[七一]白縵を以て之を覆ふべし。壇の四角に於て各〻一人を立て、身に甲仗を被せて之を守護せしめよ。是の時呪師、每日[七二]三時に洗浴し清潔にして、新淨の衣を著し、三業を清淨にして[七三]律儀を受持し、聖觀自在菩薩の像前に於て、應に[七四]乳糜・[七五]酥・[七六]酪・沙糖・[七七]石蜜を以て、器中に盛り滿して之を供養すべし。後に[七八]栴檀・[七九]沈水・[八〇]蘇合・[八一]龍腦、是の如く等の香を以て和雜し、之を燒いて供養を爲せ。像幀前に於て吉祥草を敷き、結跏趺坐して蓮華印を作り、心に安じて合掌し、一切の諸佛菩薩を敬禮して、即ち護身の呪を誦ぜよ。呪に曰く、第二なり。

[八二]唵　阿慕伽　鉢囉底訶多囉叉囉叉（自稱名）　吽泮吒

若し身を護らんと欲する時は、自らの髮一莖を取り、應に此の呪を以て、呪すること二十一遍すべし。常に自身を護り、能く損害すること無し。

呪鬼神呪、呪に曰く、第三なり。

比丘と云ひ、乞士と譯す。
【三八】婆羅門（Brāhmaṇa）。淨行と譯す。印度に四姓階級ある中の、最上位の族稱で、僧侶・學者の階級を云ふ。
【三九】善趣。六道の中に於て、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四惡趣に對し、人・天の二を善趣とし、或は地獄・餓鬼・畜生の三惡道に對し、修羅・人・天の三を善趣とす。
【四〇】怨賊。人の命を害し、人の財を奪ふもの。
【四一】居士（Kulapati）。仕官を求めず、寡欲德を蘊み、財を居き大に富み、道を守り自ら悟る四德を備へた士の美稱。今は在家にて佛道を志すものゝ稱となる。
【四二】歸依處。歸依とは、子が父に歸し、民が王に依る如く、勝者に歸投し、依伏するを云ふ。
【四三】腹心。腹となり心となる人。
【四四】三業。身業・口業・意業。
【四五】阿蘭若（araṇya）。遠離處・閑靜處・無諍聲と譯し、多く精舍・寺院を標する目とす。
【四六】八戒齋。在家の男女の一日一夜受持する戒法で、俱舍論に依れば、（一）不殺生（二）不偸盜（三）不婬欲（四）不妄語（五）不飮酒（六）不塗飾香鬘舞歌觀聽（七）不眠坐高廣嚴麗床

聲あるを聞かんも、亦驚怖せざれ。若しは空中に諸の天の音樂・歌舞・唱伎を見聞すとも、驚異すべからず。或は天より[五〇]曼陀羅華・[五一]摩訶曼陀羅華・[五二]鉢特摩華・[五三]嗢鉢羅華・[五四]倶沒陀華・[五五]奔荼利華等を雨らすを見るとも、亦驚怪せざれ。この時聖觀自在菩薩、其の人の前に至つて唱言し玉はく、善哉、善哉、汝能く是の如く我に供養し、神呪を誦持す、何の求むる所かあるやと。其の誦呪の人、即ち坐より起ち、尊者の前に於て、香を燒き華を散じ、水を[五六]粳米に和し、及び諸の雜華を聖觀自在菩薩に供養し、右に遶ること三匝して、頭面をもて足を禮せよ。菩薩その時、其の意樂に隨つて、悉く皆之を與へ玉ふ。

成就畫像[五七]幀法分第四

その時尊者、畫像法及び成就呪法を說き玉ふ。若し聖觀自在菩薩の形像を畫く時は、應に[五八]絹氎を織るべし。其の長短に隨ひ、兩頭を截たざれ。所用の綵色を和するに、香膠を以てし、餘の膠を取ること勿れ。畫師は先づ八戒齋法を受け、然る後に、方に聖觀自在菩薩の形像を畫くべし。其の身黃白にして、首に華冠を戴き、紺髮分れて兩肩の前後を被ひ、慈顏和悅して百千光を放ち、清淨殊勝の面に三目あり、純白の[五九]綖を以て肩臆に交絡し、[六〇]翳泥耶鹿王の皮を以て肩上を覆ひ、寶帶を莊飾して以て其の腰に繫く。尊者は四臂にして、左邊の上手には蓮華を執持し、下手には[六一]澡瓶を執持し、右邊の上手は[六二]施無畏、下手には數珠を執り、皆珍寶を以て之を嚴飾す。身には天衣を著け、蓮華の上に立つて大威德あり。瓔珞の短長は[六三]髆に交つて垂れ下り、[六四]耳璫・[六五]臂釧及以び手環、皆之を寶飾し、頂上に無量壽佛を畫作し、其の幀內に於て種種の華を畫け。若し壇を作らんと欲せば、春秋時に於て、[六六]白月八日或は十五日の吉祥星の下に、好時を選擇し、無風無雲なれば、即ち城外に於て好處を擇取し、其の方地に隨ひ諸の樹木有つて、根莖・枝葉・華果茂盛し、條蔓交加し、

【二六】莫呼洛伽(Mahoraga)。譯、大腹行・大蟒神。
【二七】部多(Bhūta)。鬼類の一種。
【二八】畢舍遮(piśāca)。譯、食血肉鬼・噉精鬼。
【二九】拘畔荼(Kumbhāṇḍa)。譯、瓶腹・甕形。人の精氣を噉ふ鬼。
【三〇】星宿鬼。星宿とは、又宿曜とも稱し、七曜・九執・十二宮・廿八宿等を指す。
【三一】直心。正直にして、諂曲なき誠實を云ふ。
【三二】貪愛等。これを三毒と云ふ。
【三三】三寶。佛寶・法寶・僧寶。
【三四】幢幡。共に旌旗の屬。幢は梵に馱縛若(dhvaja)と云ひ、幡は波哆迦(patākā)と云ふ。竿柱高く秀でゝ頭に寶珠を安じ、種々の綵帛を以て莊嚴するを幢と名け、大菩提心の標幟とす。幡は佛菩薩の威德を表示する物にして、長帛の下に垂るゝを云ひ、其の種類頗る多く、材料・形狀・用途等によつて名を異にす。
【三五】華蓋。花を以て飾れる傘蓋、(Chattra)。
【三六】蓮華印。二の腕相著け、十指散じ竪てゝ小しく曲げ、上に向けて蓮華の開くが如くす。これ千葉蓮華の印である。
【三七】苾芻(Bhikṣu)。舊譯に

薩を見上ることを得。或は[三七]苾芻の形を現じ、或は[三八]婆羅門の形を現じ、或は童子の形を現じ、或は帝王の形を現じ、或は宰官の形を現じて、誦呪の人を讃し、是の如くの言を作し玉ふ。善哉丈夫、汝能く我が所說を受持す、汝が愛樂する所、皆圓滿することを得ん、汝今呪を持す、心に何の欲する所かある、意の求索に隨つて、能く汝が願をして、速に成就することを得せしめんと。是れに由つて、一切の業障を滅することを得、永く地獄・畜生に墮せず、常に一切の諸の[三九]善趣の中に生じて、般若現前し、辯才滯り無く、正念を增長し、諸天隨順して伴侶と爲り、所作自在にして障礙あること無く、大威神を具す。また能く呪を持せば、心の所欲に隨ひ、一切の[四〇]怨賊侵奪を爲さず、賢聖に讃歎せられ、常に國王・大臣・婆羅門・[四一]居士等の爲に敬重せられ、一切の衆生に愛樂せられ、供養恭敬せられ、承事禮拜せられ、善言讃歎せらる。常に一切の驚怖の者の與に[四二]歸依處と作り、能く一切の善人・[四三]腹心を得。若し常に此の神呪を誦ずる者有らば、[四四]三業の惡障皆悉く銷滅し、若し誦ずること萬遍せば、所須の飮食・臥具・湯藥・衣服・什物、乏少する所無く、安樂無病にして長壽自在ならん。

成就親見聖觀自在菩薩法分第三

若し人、聖觀自在菩薩を親しく見たてまつることを得んと欲せば、應に寂靜なる山寺の塔廟の中に往くべし。或は園林・河邊・深山・巖谷・[四五]阿蘭若處に、新淨の衣を著し、[四六]八戒齋を持し、菩薩戒を受け、三業を淸淨にして三摩地に入り、[四七]四梵行を修して悋惜する所なく、諸の持戒福德の人の邊に於て、常に歡喜を求め、然る後に聖觀自在菩薩の像の前に於て、其の呪法を受け、旣に法を受け已らば、即便ち彼の淸淨の處に於て、[四八]吉祥草の上に[四九]結跏趺坐し、應に不空羂索心呪を誦ずべし。一心不動にして、若しは晝にまれ、若しは夜にまれ、驚せず怖せず、乃し忽ち虛空の中に、虎の嘯く

---

tti)は禪定の一種である。

【一四】辟支佛(Pratyekabuddha)。獨覺と譯す。

【一五】般若(prajñā)。智慧。

【一六】斫羯羅伐頼底曷羅闍(Cakravarti-rāja)。譯、轉輪王。

【一七】吉祥瓶。賢瓶・德瓶・善瓶・如意瓶・有德瓶などとも云ひ、意に隨つて所求のものを一切出す瓶である。

【一八】如意珠(cintāmaṇi)。寶珠から種々の所求のものを出すこと、意の如くであるから、如意と名く。

【一九】羅刹娑(Rākṣasa)。惡鬼の總名で、暴惡・可畏などと義譯す。

【二〇】阿素洛(Asura)。非天。

【二一】陀羅尼門。陀羅尼(dhāraṇī)は總持と譯す。一字の中に無量の教文を總攝し、一法の中に一切法を任持し、一義の中に一切義を含容し、一聲の中に無量の功德を包藏するから、爾か云ふ。

【二二】藥叉(Yakṣa)。譯して輕捷鬼と云ふ。飛行迅速の鬼類である。

【二三】健闥縛(Gandharva)。尋香と譯す。天の樂神。

【二四】揭路荼(Garuḍa)。譯、金翅鳥。

【二五】緊捺洛(Kiṃnara)。譯、人非人。樂神の名。

應に隨つて作す所、一切皆得、使者を驅策するに、進退違ふこと無く、[19]羅刹娑をして、意に隨つて轉ぜしむ。また能く[20]阿素洛窟に入り、或は衆香を燒き、或は藥を眼中に置けば、能く地下の一切の伏藏を見、所爲の事業、自在に成就し、衆病を療治し、鬼神を調伏して、壇場を守護せしめ、諸の龍王をして歡喜悅樂せしめて、降雨止雨に皆自在を得。また能く彼の一切の人中に於て自在を得、能く一切の衆罪厄難をして、悉く皆銷滅せしめ、資財寶物、求むる所皆得。また能く無邊の[21]陀羅尼門及び三摩地門を成就す。此の大不空羂索神呪の法は、諸の呪の中に於て、功德最上殊勝廣大にして、能く一切の天・龍・[22]藥叉・[23]健闥縛・阿素洛・[24]揭路茶・[25]緊捺洛・[26]莫呼洛伽・諸[27]部多鬼・一切餓鬼・[28]畢舍遮・[29]拘畔茶・[30]羅刹娑・星宿鬼・障礙鬼等をして、承事供養し、尊重讚歎せしむ。また帝釋、諸梵王等の爲に擁護せられ、また一切の成呪仙者の爲に共に慶慰せられ、また常に一切の散亂を離れて所著無き者の爲に承習せられ、所說を受持せられ、供養恭敬せられ、尊重讚歎せらる。

成就受持供養神呪法分第二

その時、聖觀自在菩薩摩訶薩、また神呪の法を說き玉ふ。若し此の神呪を誦ぜんと欲する時あらば、先づ洗浴して新淨の衣を著し、潔淨にして呪を誦じ、菩薩戒を受け、慈悲心を起して衆生の意樂を哀愍し、眞實語を作し、嫉妬を遠離し、一切の有情を利益し安樂ならしめ、[31]直心淨信をもて功德を受樂し、[32]貪愛・瞋恚・愚癡を捨離し、[33]三寶を憶念して心に報恩を期すべし。廣く聖觀自在菩薩摩訶薩に、燒香・散花・塗香・末香を供養し、[34]幢幡、及び諸の[35]華蓋を以て莊嚴すべし。尊者の前に於て、一心に淨信し、意樂を堅固にして、應に聖者不空羂索心神呪王を誦すること、一百八遍すべし。卽ち不空陀羅尼三摩地門に入つて、[36]蓮華印を作し、出入の息を禁じ、默然として住せよ。是れに由つて、此の人の應に作すべき所の事、皆具足することを得ん。卽ち夢中に於て、聖觀自在菩

說盡苦道無所畏。

【五】 十八不共一切佛法。(一)身無失(二)口無失(三)念無失(四)無畏想(五)無不定心(六)無不知已捨(七)欲無滅(八)精進無滅(九)念無滅(十)慧無滅(十一)解脫無滅(十二)解脫知見無滅(十三)一切身業隨智慧行(十四)一切口業隨智行(十五)一切意業隨智行(十六)智慧知過去世無礙(十七)智慧知未來世無礙(十八)智慧知現在世無礙(智度論卷第二十六)

【六】 四聖諦。苦・集・滅、道。

【七】 神足。五神通の一神足通のこと。

【八】 根。五根。

【九】 力。五力。

【一〇】 菩提分法。七覺支。

【一一】 以下は如來の十力の一、知一切諸禪三昧力(sarva-dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatti-saṃkleśa-vyavadāna-vyutthāna-jñāna-bala. 一切靜慮解脫三摩地三摩鉢底出離雜染清淨智力)を指す。

【一二】 靜慮(dhyāna)。禪定のこと。常に靜閑に處して佛道を思惟し、念念に休止することなきを云ふ。

【一三】 三摩地三摩鉢底。三摩地(samādhi)は定・等持・等至など〻譯し、行者の心意が、所觀の法に全く一致し相應するを云ひ、三摩鉢底(samāpatti

不空羂索陀羅尼自在王呪經

唐天竺三藏寶思惟　詔を奉じて譯す

卷の上

[1]南謨囉哆那怛囉夜耶　南謨阿唎耶　阿弭哆婆耶　怛他蘗多耶　南謨阿唎耶　跋嚧吉濟　失筏囉耶　菩地薩埵耶　摩訶薩埵耶　摩訶迦嚧尼迦耶　怛跌他　唵阿慕伽鉢囉底喝多許許泮吒　娑婆訶

是の如くの所說の不空陀羅尼自在王呪は、即ち是れ一切秘密[2]神呪の主なり。若し人有つて、能く此の神呪を誦じて之を成就せば、即ち能く一切の神呪に通達す。但し是の呪法は、所有の事業を皆圓滿することを得。

成就尊者說不空神呪功德分第一

その時、聖觀自在菩薩摩訶薩、また不空羂索神呪王法を說き玉ふ。若し成就せば、福唐捐ならず。能く無量無邊の諸の衆生界をして、一切の業障悉く皆清淨ならしめ、能く無量の福德資糧を集め、善根を增長し、方便善巧をもつて無邊の智慧境界に通達し、[3]六波羅蜜多皆圓滿することを得。また能く無上菩提・[4]四無所畏・[5]十八不共一切佛法、及び[6]四聖諦・[7]神足・[8]根・[9]力・[10]菩提分法を證得す。また能く諸の[11]三摩地[12]三摩鉢底[13]靜慮解脫を示現す。また能く[14]聲聞・辟支佛及び如來地を證得して、[15]般若・聰慧・利根を成就し、大威德・精進・勢力有つて、辯才・騰空隱形を具足し、[16]斫羯囉伐囉底羯囉闍と爲り、一切自在にして能く呪仙を成じ、世の安樂を獲、[17]吉祥瓶及び[18]如意珠を得、

【一】Namaḥ ratna-trayāya nama āryā-mitābhāya-'ata-hāgatāya nama ārya-avalo-kiteśvarāya bodhi-sattvāya mahā-sattvāya mahā-karu-ṇikāya tadyathā oṁ amogha aparājita ? hūṁ hūṁ phaṭ svāhā.

【二】神呪。呪とは陀羅尼・眞言の異名。眞言陀羅尼を念誦する者が、廣大の功德靈驗を顯すこと、恰も彼の世間の呪禁法の神驗と一分相似して居るから、眞言亦は陀羅尼を神呪と云ふ。而して如來の言語は、眞實にして虛妄がないから、眞言(mantra)と云ひ、又如來の言語は、一字一文に能く無量の敎法義理を總攝任持するから、陀羅尼(dhāraṇi 總持)と名け、且つ眞言は如來の不思議智の結晶であるから、能く之を念誦すれば、身心共に惱を悉く消滅して、無明煩圓明清淨となると云ふ上から、明(vidyā)とも稱するのであるが、これ等は決して別種のものではなく、觀察の方面を異にした所から生じた、同一の物の異稱に過ぎない。

【三】六波羅蜜多(Pāramitā 到彼岸)。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧。

【四】四無所畏。一切智無所畏・漏盡無所畏・說障道無所畏・

聖不空羂索神呪王（瞋面三目、四臂有つて劍索を執り、赤色の衣を著し、大龍王を以て瓔珞と爲す）南方より來り、空に乘じて行き給ふを見るも、驚怖することなく、只管不空羂索心呪王を誦じ、專心に聖觀自在菩薩を憶念して供養すれば、呪王は容貌寂靜にして、天身の如く熙怡微笑して虛空より降り、呪人を讃して、一切の所願を悉く皆滿足せしめ給ふと說いてある。

李無諂の本には、護身の呪を第二十六段の呪としてあるが、これは已に第二段に出て居るのであるから、前者の如く、段數を附けない方が宜しからうと思はれる。又、觀自在菩薩則ち南方より空に從つて降りと成つて居るが、此の觀自在菩薩は明かに不空羂索神呪王の誤である。

成就見如來法分第十六（不空羂索明主呪王見如來成就品第十六）

若し如來を見たてまつらんと欲する時は、聖觀自在菩薩の像の前に於て壇を造り、日別に三時に洗浴して、幷に衣服を換へ、其の壇內に於て或は三日、或は七日斷食し、結跏趺坐して如來印を作り、不空羂索心呪王を誦するに、瑞相現れば、更に歡喜踊躍して、種々に聖觀自在菩薩に供養し、重ねて不空羂索心呪王を誦ずれば、聖觀自在菩薩の像、其の座上に於ける示現隱沒して、如來出現し、金色の臂を舒べ、持呪の人を安慰して、世出世の有ゆる悉地を皆圓滿せしめ給ふ旨を明し、次に若し人有つて、此の呪を受持し、諸の花香・幢幡・寶蓋を以て供養し、恭敬し尊重し讃歎すれば、終に地獄・餓鬼・畜生の諸惡趣中に墮することなく、常に極樂世界の阿彌陀佛の前に生じ、壽命無量にして、一切皆聖觀自在菩薩の威德神力の如くなること得と言つて、不空羂索心呪王の持誦の功德の廣大無邊なることを述べ、卷末に壇を收除する時の呪を出して、第二十六段としてある。

李無諂の本には、斷食のこと無く、且つ收除の呪を第二十七段としてある。

之を要するに、本經は終始一貫、祕密神呪の功德の偉大なることを高調したものであつて、阿彌陀佛等の淨土往生思想が歡迎された當時、之に對抗して、眞言陀羅尼の功力に依り、其の願望を成就せんことを期待した時代に、編纂されたのではないかと思はれるのである。從つて密敎思想は、此の時代から頓に擡頭して來たのではないかとも想像されるのである。

昭和八年五月末日

譯者 阿部宥精 識

ことなどが、前者との相違である。此の外、前者が第十八呪白芥子散於十方呪として居る呪を、前品に第十七段の治罰呪として出し、前者の第十九結壇呪を第十八結界呪と爲し、第二十禁自身呪を第十九結壇呪と爲し、第二十一呪香呪を第二十護自身呪と爲し、第二十二呪華呪を第二十一呪香燒呪と爲し、第二十三獻供神呪を第二十二呪華呪と爲し、第二十四呪座神呪を第二十三獻供神呪と爲し、且又前者が次の第十四品に至つて、第二十五段護自身呪としてゐる呪を、今の品に出して、第二十四段の呪座神の呪としてあるが、これは前品でも述べた如く、賓思惟の本の大きな誤であつて、李無諂の方が正しいのである。

成就調伏諸龍得自在分

第十四（不空羂索明主呪王降伏龍品第十四）

若し諸龍を調伏して、自在を得んと欲する時は、龍の池の所に往き、結界自護して方壇を作り、其の壇内に龍の羂索を畫き、然る後に持呪の人、右足の大指を以て索の頭を躡み、不空羂索心呪王を誦すること一百八遍すれば、龍忽に現れて水蛇と爲り、或は甘雨を降注し、或は海中より如意寶珠を取來つて奉施し、或は龍宮に遊行せしめるなど、意樂に隨つて皆滿足を得しめ、龍は人民を守護する福德力に因つて、畜生の身を捨てゝ不退地乃至無上菩提を證獲し、持呪の人は、一切衆生をして、貧窮の苦惱を捨離せしめる爲に、所得の珍寶を悉く布施し、乃至は衆生利益の爲には、其の命をも施すことに因つて、檀波羅蜜を圓滿し、常に人天に生じて、速に佛地に至ることが出來ると說いてある。尙此の品には、第二十五段護自身呪の外に、丹本に呪有りと言つて、一呪が出してあるが、第二十五段のは護自身呪でなく、呪座神呪であつて、後の丹本の一呪が却つて護自身呪である。

李無諂の本には、前者が護自身呪と稱して居る呪を、前品の第二十四段に出して、呪座神呪とし、此の品には、前者が丹本に云くとして出して居る呪を、第二十五段護自身呪として、唯其の一呪だけ說いてあるが、これは確に後者の方が正しいのである。

成就見不空羂索王法分

第十五（不空羂索明主呪王見不空王成就品第十五）

若し不空羂索神呪王を見たてまつらんと欲する時は、洗浴して新淨の衣を著し、空閑寂靜の處を擇び、白月八日或は十四日に作壇し、自ら頂髮を結び、呪を誦じて護身し、然る後に、不空の呪を誦じつゝ、白芥子を三遍四方に散じて結跏趺坐し、帛を以て頭を裹み、定の印を作り、不空の呪を誦すること一千八遍すれば、

壇に地壇(王壇)・國壇(大臣壇)・民壇(一切凡庶人壇)の三種の別があつて、地壇は大に、國壇は中に、民壇は小に作り、若し此の大・中・小の法を亂せば、必ず過患を生ずるから、誓つて如法に作すべきことを先づ戒め、次に王壇・臣壇・民壇の順序で、各〻其の壇法が說き明してある。王壇は縱廣各〻三十二肘にし、五色界道を作り、四門外に雙柱を竪て、東門外の左に持國天王、右に增長天王、南門外の左に醜目天王、右に赤目神王、西門外の左に末尼跋達羅(Maṇibhadra)藥叉王、右に布栗拏跋達羅(Pūrṇabhadra)藥叉王、北門外の左に多聞天王、右に金剛手天王を畫き、壇の中心に聖觀自在菩薩(蓮華座に立ち、首上の寶冠に無量壽佛在し、白色にして四臂、右蓮華・澡罐、左數珠・施無畏、胸の前に萬字の印を作る)その左邊に大勢至菩薩、右邊に普賢菩薩、普賢の像の下に摩麼雞(Māmakī)と金剛使との二天女、大勢至の像の下に多羅(Tārā)と毘倶胝(Bhṛkuṭī)との二天女、聖觀自在菩薩の像の前に不空羂索呪王(赤色の衣を著し、三目・四牙・四臂にして、雙膝を地に著け、躬を曲げて觀自在を瞻仰す)尊者の兩邊に近く梵王・帝釋・那羅延・自在・大自在等の諸天衆、壇の四面に娑竭羅(Sāgara)・阿那婆踏多(Anavatapta)・難陀(Nanda)・鄔波難陀(Upananda)の四大龍王、四角に光明(Vairocaṇa)・羅怙羅(Rāhula)・毘摩質怛羅(Vemacitra)・吼聲(Kharakaṇṭha)の四阿素洛王を畫き、又印器仗莊嚴壇を作る。卽ち、螺形・輪形・蓮華形・難地迦(nandidak?)・莎底迦(ṣaṭka?)・萬字等の印及び棓・钁・戈・戟・弓・箭等の諸器仗の形を畫作し、壇上には八大瓶を置き、又種々に莊嚴し供養し、壇に等しく四面に各〻一門を開き、其の門外に於て、人をして守護せしめ、且つ壇外を去る一倶盧舍(krośa)に、四面を周匝して、象・馬・車・步の四兵を陳列して防護の任に當らせ、更に壇外に一小壇を作り、此の壇に於て灌頂することに成つて居る。臣壇は縱廣十六肘にして、形像は王壇に同じく、民壇は縱廣八肘にして、唯聖觀自在菩薩の像と印文とを畫き、莊嚴供養は其の力に應じて、辦備すべきことが明してある。而して此の品には、呪白芥子散於十方呪・結壇呪・禁自身呪・呪香呪・呪華呪・獻供神呪・呪座神呪の七呪が說いてある。

李無諂の本に於ては、前者の地壇・國壇・民壇が次での如く、上品・中品・下品と成つて居り、四門外に雙柱なく、聖觀自在菩薩は水精色にして、左の上の一手に蓮華瓶(寶澡罐)を執り、左の下の一手は施無畏手にし、右の上の一手に數珠を把り、右の下の一手は施無畏に作し、其の右邊に大勢至、左邊に普賢を伴つて居り、前者の諸天衆の第二帝釋、第三那羅延の代りに梵輔天を出し、同じく四阿素洛王の第四吼聲王が婆稚(Bandhi 縛者)王に代り、且つ壇外に小壇が設けられてない

に於て結跏趺坐して、先づ諸佛を憶念し、然る後に火遍處定に入つて、不空羂索心王神呪を誦すること一百八遍するに、彼の藥中より烟出でば、泥を以て壇を塗り、次で眼藥を取つて菩提樹葉の內に置き、乃し火より星焰出でて、此の藥を燒練すれば、卽ち眼藥成就せりと知つて、四方を結し、及び己身を護り、呪を誦じて眼藥を取出し、石上にて之を磨り、細研して末と爲し、それを眼に塗れば、或は一切の伏藏を見、或は神通を證得して佛所に往き、自ら見え已つて、無上正等菩提の記を受くることを得、或は又一切の呪陀羅尼力を得ることが出來ると明してある。

李無謟の本も粗相同じ。

成就除鬼著病法分第十二 （不空羂索明主呪王禁諸鬼神所著品第十二）

若し能除一切著鬼魅の法を成就せんと欲する時は、信心を發して清淨の業を修し、精進堅固にして心に疑惑なく、至誠決定し、常に報恩を懐いて慈悲心を起すべしとて、先づ持呪の人に對して勸誡し、次に此の不空羂索神呪を誦すること一百八遍すれば、一切の諸鬼所著の病を皆除差することを得、或は一日乃至七日に、其の不空羂索呪を誦するに、唯し泮吒(phat)の字のみにて能く一切の壯熱の氣を除くことを得、或は白線を以て呪すること二十一遍するに、一たび呪しては一たび結び、都合二十一結して病人に繫くれば、一切の諸病を除差することが出來る旨を明し、次に瘧鬼の病を療治する法、人を呪する法（この中に結童子髮呪・呪淨水灑童子面呪・發遣著童子神呪を說く）、禁病人の法（この中に治罰呪を說く）、禁諸惡鬼神所著法の四種の呪法が示してある。

李無謟の本には、前者に於て第十四結童子髮呪とする泮吒(phat)の呪なく、前者の第十五呪淨水灑童子面呪を以て第十四結童子髮呪と爲し、前者の第十六發遣著童子神呪を以て第十五淨水灑童子面呪と爲し、前者の第十七治罰呪を以て第十六放去呪と爲し、且つ前者が卷下の第十三品に於て、第十八結界呪としてゐる呪を此の品に出して、第十七治罰呪としてあるが、これは明かに寶思惟の本の間違であつて、李無謟の方が正しいのである。此の一事に徵しても、前者が未再治本であることが容易に領解されると同時に、後者は譯成つて後、新に手を加へられた原本と校合して、泮吒の呪を除き、以て其の誤を訂正したものではないかと想像されるのである。

〔卷の下〕

成就入壇法分第十三 （不空羂索明主呪王入壇品第十三）

は、先づ呪を誦じて護身し、然る後に墳墓處に往き、未壞の男子の死屍を呪して起語するを待ち、その屍の索むるまゝに紙・筆・墨等を渡さば、彼れ卽ち如法に、取伏藏珍寶の法を抄寫して持呪の人に與へ、或は又自ら將ち來ることを說き、次に若し夜中に取らんと欲する時は、先づ同心同行の者を擇んで同伴と爲して護身し、然して後に酥燈を然し、不空羂索心神呪王を誦ずること一百八遍して、その酥燭を空中に擲向すれば、酥燭は伏藏の上に於て、寶物の地に入れる淺深の尺數に隨ひ、空中にて下るを以て、それを見て直に藏所に至り、結界決定するを待つて燭を滅し、掘鑿して寶處に到らば、先づ藏神に供養し、其の後に初て、同伴と共に取るべきことが明してある。但しこゝに注意すべきことは、持呪の人に、三寶に供養するとか、或は一切衆生に施與して、永く貧窮の苦惱等の事を斷ぜしめる爲とかといふ、敬虔な而も利慾を超絕した大慈悲心が無ければ、假ひ求めても此の法は成就しないと云ふことである。

李無諂の本に於ては、酥燈を空中に擲向して伏藏處を知る說段が、前者よりも餘程簡略に述べてある。

成就入婇女室分第十（不空羂索明主呪王入窟品第十）

若し婇女の室に入らんと欲する時は、善人と與に結んで同伴と爲し、身を護して流泉・浴池ある室に至り、白月十五日に八戒齋を持し、澡浴して白淨の衣を著し、如法に護摩供を作して、不空羂索心神呪王を誦ずれば、其の室の門自ら開き、中より婇女出でて、同伴の人の妻と爲り、婢使の如くに之に承事するも、持呪の人はそれに心を奪はれること無く、尙も續けて呪を誦ずれば、勝妙の婇女、五百の眷屬に圍遶せられて室より來り、その持する所の衣服等を、法の爲の故に受けば、諸の婇女と共に隱沒して現れることとなく、或は呪仙轉輪王の位を成就し、或は恒常に諸佛菩薩を見ることを得て、能く無量の有情を敎化し、無上菩提道の中に於て、不空智諸陀羅尼三摩地門に入ることが出來ると說いてある。

李無諂の本には、前者の入婇女室が入窟と成つてゐて、窟とは謂はく阿修羅(Asura)の住窟なりと言つてある。但し其の窟から婇女が現れることは、前者と全同である。

成就眼藥分第十一（不空羂索明主呪王成就安善那藥品第十一）

若し眼藥の法を成就せんと欲する時は、雄黃・牛黃・蘇毘羅眼藥の三物を合して香葉中に褁み、白月十五日に沐浴して新淨の衣を著し、八戒を受持し、廣大に聖觀自在菩薩を供養し已らば、尊者の前

〔巻の中〕

成就驅策僮僕使者分第六
（不空羂索明主呪王成就制摘迦品第六）

若し不空羂索王神呪の僮僕を驅策せんと欲する時は、五髮髻を有し、一手には菴摩羅果を執り、一手には種種の華を持せる歡喜の相貌の童子形を、或は畫き、或は木を以て作り、其の像を常に密處に安置して種々に供養し、然る後に像の前に於て、不空羂索王呪を誦ずること一千八遍すれば、驅策自在なる旨が述べてある。

李無諂の本には、僮僕者を制摘迦（Ce-ṭaka 奴僕の義）としてある。但し今の制摘迦は善相にして、不動尊の二童子の一なる忿怒形の制吒迦とは、相違して居る。又前者に於ては、字句を挿入しなければ解し難い所があるが、此の本にはそれが無い。

成就吉祥瓶法分第七
（不空羂索明主呪王成就賢瓶法品第七）

若し吉祥瓶法を成就せんと欲する時は、善人を求めて同伴と爲し、方壇を築いて四門を開き、其の壇の四面には、金剛・刀劍・棓・鉞並に四天王を、壇場の中心には、吉祥瓶を畫き、有信の人、五人を簡び取り、其の中の四人をして、壇の四方を守護せしめ、殘りの一人を驅使に充て、かくして壇を建立し已らば、吉祥瓶の前に吉祥草を敷いて坐し、呪を誦じて如法に結界し、然る後に呪吉祥瓶呪を以て、吉祥瓶を呪すれば、聖觀自在菩薩、自身を變じて普賢菩薩の形像を現作し、無量の菩薩眷屬に前後に圍遶せられて、彼の瓶中より忽然として出現し、持呪の人を讃して、吉祥瓶を授與し給ふと說いてある。

前者には五人の外に更に一人を取りと成つて居るが、これは李無諂の本の五人が正しいやうである。今は後者に基いて、五人としたのである。

成就策使羅刹童子分第八
（不空羂索明主呪王成就使者品第八）

若し策使羅刹童子の法を成就せんと欲する時は、頭上に五髮髻、面狀は喜悅、身相は端嚴、衣服は黃色、其の體は金色、手には蓮華を執れる羅刹童子の像を畫き、白月八日或は十四日に八戒齋を持し、種々に供養して後、像幀前に結跏趺坐して、不空羂索心神呪王を誦ずること一百八遍すれば、忽ち羅刹童子現れて、自在に驅使することが出來ると明してある。

李無諂の本も亦同じ。

成就使死屍取伏藏分第九
（不空羂索明主呪王取伏藏品第九）

若し地中の伏藏を取らんと欲する時

成就畫像幀法分第四 （不空羂索明主呪王成就像法品第四）

此の品には、畫像法と成就呪法とが明してある。先づ聖觀自在菩薩の形像を畫く時は、絹氎を織り、而も兩頭を截つことなく、畫師をして八戒齋法を受けしめて後に、畫かしむべきことを諭し、次に其の相貌は三目四臂（左、蓮華・澡瓶 右施無畏・數珠）にして、頂上に無量壽佛を畫作すべきことを説き、其の壇は方壇にして、四面に各〻一門を開け、門外に各〻二吉祥柱を建て、門内には二吉祥瓶を置き、壇內には螺形・萬字香印を畫き、壇の四角に於て各〻一人を立て、身に甲仗を被せて之を守護せしめ、然る後に呪師は、毎日三時に洗浴清淨にして、新淨の衣を著し、三業を清淨にして律儀を受持し、聖觀自在菩薩の像の前に種々に供養し、供養し已らば、像幀前に吉祥草を敷き、結跏趺坐して蓮華印を作り、一切の諸佛菩薩を敬禮して、護身呪・呪鬼神呪・禁惡鬼呪・禁惡魔呪・禁諸惡魔鬼呪・呪同伴人呪・呪香呪・呪飲食及華菓呪・隨作事成就呪を順次に誦じ、最後に不空陀羅尼自在王呪を誦ずべしとの成就呪法を述べ、末尾に成就の好相三種が明してある。

李無諂の本には、壇門外に雙柱が無い。然し能く再治されてあるので、前者に於て稍〻通じ難い箇所も、充分明かに成つて居る。

成就使者能辦事法分第五 （不空羂索明主呪王成就緊羯羅品第五）

若し聖觀自在菩薩不空羂索王神呪の使者を驅使せんと欲する時は、氎布幀の上に、赤色にして身に赤衣を服し、口より四牙を出し、手に劍・索を執れる藥叉童子の像を畫き、白月八日或は十四日に、八戒齋を持し、幀像を四衢道中、或は空室内に安置して、種種に供養し、然る後に氎幀前に於て、不空王呪を誦ずること一百八遍すれば、使者忽ち持呪の人の前に現れて、一切の所須を、皆悉く成辦することが說いてある。

李無諂の本には、青色の衣を著して索を持すとあつて、劍のことは說いて無く、又幀像は夜分に安置することに成つて居り、且つ使者を緊羯羅（Kiṃkara）と明記してある。蓋し梵名緊羯羅は、疑問詞の緊（kim）と、作爲の義の羯羅（kara）との合成にして、何事を作すべきかを問ひ、その命令の通りに働く意であるから、婢僕の義となるので、前者は義に依つて使者といひ、後者は梵名を存して緊羯羅と言つたのであらう。但し今の緊羯羅は惡相であるから、不動尊の二童子の一なる柔軟相の矜羯羅とは、形貌が全く相反して居る。

聖觀自在菩薩摩訶薩が、また不空羂索神呪王法を說き給ひ、其の功能として、若し能く此の法を成就すれば、一切の衆罪厄難障礙を銷滅し、諸天の爲に常に擁護せられて、世間出世間の所有の悉地を、速疾に獲得することが出來ると言つて居られる。

李無諂譯の本は、經首に陀羅尼呪を出すことなく、今の讚歎品第一の初にそれを擧げて、これを祕密一切明主不空自在王陀羅尼と名くといひ、次に此の呪法の功德の廣大無邊なることを讚歎して居ることは、前者と全く同樣である。

成就受持供養神呪法分第二（不空羂索明主呪王受持成就品第二）

此の神呪を誦ぜんと欲する時は、先づ洗浴して新淨の衣を著し、菩薩戒を受け、一切の有情を利益し安樂ならしめ、貪・瞋・癡の三毒の煩惱を除き、常に佛・法・僧を念じて忘失することなく、廣く聖觀自在菩薩摩訶薩に、燒香・散花・塗香・末香等を供養し、且つ幢幡・華蓋を以て莊嚴し、然る後に尊者の前に於て、聖者不空羂索心神呪王を誦すること一百八遍し、かくて不空陀羅尼定に入つて蓮華印を作り、出入の息を禁じ、默然として住せば、成就することが出來る。即ち、夢中に聖觀自在菩薩が、或は比丘、或は婆羅門、或は童子、或は帝王等の形と成つて現れ、誦呪の人を讚して、能く汝が願をして、速に成就することを得せしめんと告げ給へば、一切の業障を滅し、常に諸の善趣の中に生じて、賢聖に讚歎せられ、國王・大臣・婆羅門・居士等の爲に敬重せられ、所須の飲食・臥具・湯藥・衣服等、乏少する所なく、安樂無病にして、長壽自在なることを得と記してある。

李無諂の本も亦同じ。

成就親見聖觀自在菩薩法分第三（不空羂索明主呪王見成就品第三）

聖觀自在菩薩を親しく見たてまつらんと欲する時は、園林・河邊・深山等の空閑寂靜の處に往き、新淨の衣を著し、八戒齋を持し、菩薩戒を受け、然る後に聖觀自在菩薩の像の前に於て、其の呪法を受け、既に法を受け已らば、彼の清淨の處に於て、吉祥草を敷き、其の上に結跏趺坐して、乃し聖觀自在菩薩が、持呪の人の前に現れて讚言し給ふまで、或は虎の嘯く聲、或は音樂の聲などを空中に聞き、或は又、紅・青・白等の諸蓮華が天より雨るを見るとも、恐怖することなく、晝を以て夜に繼いで、熱心に不空羂索心呪を誦すれば、一切の所願を悉く成就することが出來ると明してある。

李無諂の本には、幾分後人の手が加つて居る樣に思はれる。

譯して居ることを、波崙が知らなかつたが爲か、或は己が筆受した經本を權威あらしめんが爲か、以上の二者を出でないことは勿論であるが、李無諂と寶思惟との關係が、前述の如くである所から察すれば、李無諂が翻譯の際、寶思惟の譯本に就て一言も發しないと云ふことは、想像し得べからざる所であり、且つ前文に「兩京を巡歷して、善友を尋參し、(中略)、大周聖曆三年三月七日の景辰に於て、幸に此の經を得たるは」とあるのは、波崙が東都の佛授記寺に於て、沙門德感が筆受した、寶思惟譯の十六品本を得たことを指してゐるのではないかとも、思はれないことはないから、或は後者の意に基いて、左樣に言つたのではないかと推測されるのである。尙序に「曾て隋朝に翻ずる所の別本六十三紙ありと聞くも、未だ嘗て見ざるなり」とある中の、隋朝に翻ずる所の別本とは、隋の開皇七年(587 A. D.)に闍那崛多(Jñānagupta)三藏が譯した、不空羂索呪經一卷(正藏、二〇、三九九)を指してゐるものと思はれる。其の後、李無諂の譯に先じて、唐の顯慶四年(659 A. D.)には、玄奘三藏譯の不空羂索神呪心經一卷(正藏、二〇、四〇二)があり、同じく唐の長壽二年(693 A. D.)には、菩提流志(Bodhiruci)三藏譯の不空羂索呪心經一卷(正藏、二〇、四〇六)と、今の寶思惟譯の三卷本とがあるに拘らず、「未だ嘗て見ざるなり」とか、「斯の土に未だ行はれず」とかと明記してある所から察すると、支那に於ては不空羂索法が、當時未だ一般から餘り歡迎されてゐなかつたことが想像し得られる。然し今の寶思惟の譯が、闍那崛多玄奘兩譯よりも、頗る增廣發達してゐることは確である。而して李無諂譯の經が、校訂されてあつて能く意が通する所からか、祕密儀軌傳授の際には、專ら此の經を依用することに成つて居るので、寶思惟譯の經が、古來學者に依つて、殆ど注意されて無いことだけは事實である。

　次に本經の各品の內容を概觀し、併せて李無諂譯との相違をも列記して見よう。括弧の中は李無諂本の品號を示す。但し後者には卷別なく、全一卷となつてゐる。

〔卷の上〕

　經首に先づ不空陀羅尼自在王呪を出し、この呪は一切祕密神呪の主であるから、若し人有つて、此の神呪を受持して誦ずれば、能く一切の明呪に通達し、且つ有ゆる事業を悉く皆圓滿することを得と述べて、此の呪法を以て諸法の上首と爲す旨が明してある。

成就尊者說不空神咒功德分
第一(讚歎品第一)

一十六品を翻じ、合せて一卷と爲し、將て北天竺迦濕彌囉(Kaśmira)國に就く。婆羅門大德僧迦彌多囉(Saṃghamitra)、以て同じく梵本を勘へ、久視元年(700 A. D.)八月景午朔十五日庚申、勘會粗畢る。則ち擬して將に進めんとす。此の十六品は、斯の土に未だ行はれず。曾て隋朝に翻ずる所の別本六十三紙ありと聞くも、未だ嘗て見ざるなり。願ふ所は皇基永固にして、德十方を覆ひ、金枝瓊萼欝茂して常に榮え、三大願力劫劫に窮り無く、四弘誓心生生に盡きること無く、苦海傾竭して、三寶永く存せんことを。時代遷遠して、聞く者疑を生ぜんかと恐るゝが故に、拙言を述べて、之に序すと云ふ爾、(正藏、二〇、四〇九、B)

と。

前述の如く、開元錄第九(正藏、五五、五六六、B)、並に貞元錄第十三(正藏、五五、八六六、C)に依れば、李無諂は新羅僧明曉の請に應じて、聖曆三年(700 A.D.)三月、佛授記寺に於て此の經を翻譯し、久視元年(700 A. D.)八月、其の所譯の經を齎して罽賓(Kaśmira)に到り、重ねて梵本を勘へ、而る後に之を流布したことに成つてゐる。然るに今の序に依ると、明曉には關係なく、波崙が主となつて翻譯を請ふたやうに見えるが、これは恐らく、波崙が明曉から依賴を受けて李無諂に請ひ、自らは筆受の任に當つたものと解すべきであらうと思はれる。又序中の「幸に此の經を得たるは」の此の經と、「以て同じく梵本の不空羂索經一十六品を翻じ」の同じく梵本とは、李無諂所持の原本を指すものであり、「婆羅門大德僧迦彌多囉、以て同じく梵本を勘へ」の梵本は、李無諂所持のものとは異り、後人に依つて、多少修正を加へられたものゝ樣に思はれる。何となれば、開元錄第九(正藏、五五、五六六、B)、貞元錄第十三(正藏、五

五、八六六、C)に依つて知られる如く、寶思惟が經を譯す場合には、李無諂が多く譯語の任に當つて居るのであるから、兩人が各々異つた梵本を持つて居やうとは到底想像されないのに、寶思惟譯の本が未再治である爲に、或は文字の不足を補ひ、或は不用と思はれる文字を除くことに依つて、意味が能く通ずるとか、或は眞言の音譯語が前後統一してないとか、或は一經を通じて二十七呪ある中、第十四呪より二十五呪に至るまで、呪と呪名とが入違つてゐるとかと云ふ理由の外に、李無諂譯の經には、確に修正を施し、且つ字句を添加した原本を譯出したと認められる所が、二、三に止らないからである。更に又、序の中に「此の十六品は、斯の土に未だ行はれず」と言つてあるが、これは長壽二年(693 A. D.)、即ち聖曆三年(700 A. D.)亦は久視元年(700 A. D.)より七年前に、已に寶思惟が十六品を完

不空羂索陀羅尼自在王呪經解題

本經は唐の寶思惟(Ratnacinta)に依つて、長壽二年(693 A. D.)十月、東都佛授記寺に於て譯出されたもので（開元錄第九「正藏、五五、五六六、C」「貞元錄第十三「正藏、五五、八六七、A」)、北印度嵐波國の婆羅門李無諂が新羅國僧明曉の請に依つて、唐の久視元年(700 A. D.)八月、洛陽佛授記寺に於て翻譯した不空羂索陀羅尼經一卷(正藏、二〇、四〇九)は、その同本異譯である。但し後者には、終に不空羂索呪印一卷を附加し、其の中に二十二種の印明を說き、更に母身印呪・身印呪・口法印・牙法印・心中心呪・續驗灌頂印呪の五印六呪が明してある。然し此の不空羂索呪印一卷は、宋・元の本に依れば、「不空羂索心印品第十七沙門慧日翻續附成十七品」とあり、又明本にも、「心印品第十七沙門慧日翻續附成十七品」とあるから、沙門慧日の譯であつて、前十六品の李無諂の譯とは、全く別なものであることが解る。而して卷末の五印六呪の如きは、宋・元・明の三本に無いのであるから、或は後人が添加したのではないかとも想像されるのである。この外、後者には經の首に、福壽寺沙門波崙撰の序がある。即ち、

若し夫れ此の經は、乃ち二諦を該ねて而も遺無く、因果を括て而も斯に盡す。謂つ可し、萬行を引くの導首、菩提に進むの神足、生死を超ゆるの靈翼、涅槃に昇るの聖翮なり。信知せんに法門幽密、敎旨沖玄にして、世智の能く議するところに非ず、聰辯の測る所に匝ず。大菩薩有て觀自在と號す。大悲十方に周く、法界の群迷を愍むが故に、此の經を說いて、其の正路を示し玉ふ。斯れ乃ち久しきに正覺を成ず、是れ能仁の本師なり。故に能く十方法界に身を現ぜざる莫く、普く群機に應じて、隨緣化益し玉ふ。若し其れ名を聞かば、罪を滅すること、日の薄氷を銷するが如く、禮念すれば、恩を蒙ること、月の蓮蘂を敷くに似たり。巍巍蕩蕩として、聖德高玄なり。事は言說の端を超え、理は思量の表に絕つ。余愚暗なりと雖も、少くして法門を慕ひ、兩京を巡歷して、善友を尋參し、每に總持を念ずること、飢せるが如く渴せるが若し。大周聖曆三年(700 A. D.)歲次戊(庚)子三月庚戌朔七日の景辰に於て、幸に此の經を得たるは、死して再び生けるが如し。是に於て、西京寶德寺の僧惠月、常州正勤寺の大德惠琳、叱于智藏等の數人と共に、北天竺嵐波國婆羅門の大首領なる李無諂を請じて、以て同じく梵本の不空羂索經

摧破の義。
【一四三】 hūṁ
【一四四】 非人。人間に非ざる鬼畜の類、即ち、天龍八部及び夜叉、惡鬼の冥衆を總て非人と云ふ。
【一四五】 觸身忿怒烏芻瑟摩(Ucchuṣma)。除穢忿怒尊。穢跡金剛・不壞金剛・受觸金剛・穢積金剛・不淨潔金剛・不淨忿怒金剛・火頭金剛などゝ義譯す。能く穢惡を轉じて、清淨ならしむる德を有す。故にこの尊の神咒を持誦する者は、其の功德に依つて、除病・避難受福・敵伏等の效驗を得。
【一四六】 Oṁ dhṛlyṁ(?)
【一四七】 四時等。字義に依れば、四時は四轉を、三時は三句を、二時は理智を表す。
【一四八】 一。一時は隨得。
【一四九】 無間一切時。隨所向處、一切皆是。
【一五〇】 先當觀覽乃至一念頓蕩除。[illegible]字の功能を明す。
【一五一】 劫。具には劫簸(kalpa)と云ひ、時分と譯す。最大長時期の名。
【一五二】 色(rūpa)。有形の物質。
【一五三】 嚩字。[illegible]字。
【一五四】 忉利天(Trāyastriṃśa)。三十三天と譯す。欲界六天中の第二、須彌山(Sumeru)の頂、地上八萬由旬の高所にある。この天の有情の身長一由旬、壽一千歲(世間の百年をその一日一夜とす)、城廓八萬由旬、喜見城と名け、帝釋天王はその勝殿に居す。
【一五五】 種智。佛の一切種智のこと。佛智は一切種々の法を知るから、一切種智と名く。
【一五六】 餘の四。肉眼・法眼・慧眼・佛眼。
【一五七】 性成の密言。自性成就の密語と云ふ意。本有の出生であつて、隨方有爲の文字と異ることを表す。
【一五八】 迴施。本文には、迴於其福聚とあつて、施が於と成つて居るが、施の方が前文と比較して、より良い樣に想はれる。
【一五九】 三寶。佛・法・僧。
【一六〇】 一四句。前の一切如ニ虛空一。虛空亦無相、諸法相應、舒ニ遍於一切一。の四句の偈を指す。
【一六一】 以下は第一略行。
【一六二】 以下は第二略行。
【一六三】 Oṁ jina jik(?)
【一六四】 普賢跏。半跏坐のこと。
【一六五】 以下は第三極略行。
【一六六】 以下は第四極々略行。
【一六七】 勝身三麼耶乃至一切印已成。安流で畢印に此の印明を用ゐるのは、今の文に基く。其餘流では大金剛輪を誦ず。其の故は、此の眞言に補闕の功能があるからである。安流も亦、十八道等には之を用ふ。
【一六八】 又一切如來同一乘。勝身三麼耶の深義である。
【一六九】 此の議。略儀軌を指す。

極略念誦の儀を開演せん　瑜伽を修する者の　多法を好樂せず　或は衆の世務に迫られて　廣法を用ゐば闕せんことを恐るゝが爲なり　先づ智拳印を結び　即ち勝身を以て加持せよ　次に供養の儀を陳べて　即便ち念誦を作せ　亦闕少する所無し　[一六六]若し更に極めて驅迫せられんに　時分を間闕せんかと恐れんものは　但し智拳印を作つて　本尊の密言を誦すること　七遍或は三遍せよ　即ち行・住・坐に任せて　意に隨つて念誦を作せ　若し珠を執つて數を記せば　一百八未だ滿ぜざるに　中間に語すべからず　若し語を要せば當に　嚂字を舌の上に觀ずべし　縱ひ語すとも間と爲らず　或は唯し身勝

大三摩耶の印を結んで　便ち念誦せよ亦　支分皆闕せざることを得　何が故ぞ此の二印は　獨り用ゆるも具法を成ずるや　纔に智拳を結ぶを以て　能く諸の如來を攝して入住處に隨順せしむ　[一六七]勝身三麼耶は　適に此の印を結ぶ時　一切の印已に成ず　十方三世の佛の　所說の密印　盡く此の印の中に在り　[一六八]又一切如來　同一聚に密合して　此の一法身を成ず、　更に二相有ること無し　諸佛皆隨喜し　菩薩咸く敬奉し　天・龍・人・非人　攝伏せられて歸命す　是の如くの義に由るが故に　諸の印の助を待たずして　一をもて一切の印を成ず　若し常の如き念誦には　當に廣儀軌に依るべし　[一六九]此の義を執して　懈怠の心を生ずべからず　我れ諸の瑜伽　大祕密經の中に於て　至綱要を捜括して　金輪王　速成佛理趣　瑜伽の儀軌を略集し竟んぬ

一字頂輪王瑜伽念誦儀軌　終

て、珠數の製法・[illegible]職・功德等を說かしめ給ふ。(正藏・一七、)

【一三二】斷漏。漏は煩惱の異名。

【一三二】母。母珠を指す。

【一三三】觀念於一字。以下は[illegible]の字輪觀である。

【一三四】諸法本無壞。以下は[illegible]字を、भ(婆bha)र(羅ra)ऊ(嗚ū)म(摩ma)の四字に分つて觀ずること、並に其の功德を明す。

【一三五】奢摩他(śamatha)。寂靜・寂止、亦は單に止と譯す。纔に阿字を觀ずれば、即ち諸法の本不生を了知す、本不生を知るから、是れを奢摩他と名く。

【一三六】毘婆舍那(vipaśyanā)。觀亦は正見と譯す。

【一三七】雙運。觀念を作す時毎に、定慧を雙べ運ぶから、爾か云ふ。

【一三八】Bhrūṃ maḥ(?)

【一三九】聖衆得離縛。解界である。

【一四〇】各歸於本宮。撥遣である。一三二四　亂脫。

【一四一】誦佛母密言。一字咒の功德は廣大で、餘咒に勝れて居るから、餘咒の威光皆隱る。故に一字咒の後には、必ず密に佛眼の眞言を、七遍誦ずることに成つてゐる。

【一四二】無能勝明王。是れ大乘降魔の相である。明の[illegible]字は

[一五七]性成の密言なり　三世の佛の法教は　皆廣く此の字を明せり　其の義說くとも窮め難し　粗其の大略を陳ぶ　謂ゆる餘の諸字といふは　皆梵字に瞻ゆ　是れ隨方の文には非ず　念誦すること既に終畢んなば　其の福聚を[一五八]迴施せよ　普く諸の有情をして我が如くして異有ること無からしめんと　復[一五九]三寶を敬禮し　悔し喜し勸請し向せよ　外に出でゝは大乘を轉ぜよ　乃至[一六〇]一四句までせよ　塔を印じ衆善を修せよ　此を以て福業を積めば　加持資糧の故に　悉地速に現前す　[一六一]又略儀軌を演べん　先の如く𤚥字を誦じ　用て菩提心を發すべし　左の趺右の股を押し　右の足左の股に安ぜよ　是れ如來の結跏なり　即ち智拳印と　身勝と及び灌頂とを結び　拍掌し已つて又金剛合掌の儀を陳べ　唵字を誦じて供養せよ　又部母を以て加持し　智拳に住して念誦せよ　終畢るときは前の儀の如くせよ　[一六二]又略儀軌を說かん　先づ一切佛　部心の印密言を用て　五處を印ぜよ或は四ところせよ　其の印は八指を以て　右左を押し相叉へて掌の内に交へ合せ　二大指を並べ竪てゝ　右の頭指の側に著け　一切佛の心を誦ぜよ

[一六三]唵爾曩仍入聲而孕反

適に此の印明を以て　自身を加持する時は　便ち諸佛の身に同ず　即ち部母を以て加持し　智拳を作つて念誦せよ　坐は前の如く全跏し　或は輪王坐に作れ　脚を交へ或は一を垂れ　乃至獨つの膝を竪てよ　輪王の三種の坐なり　或は[一六四]普賢跏を作れ　左の掌右の腿を承け　右の趺左の髀を鎭めよ　普賢跏乃ち成ず　是等の坐は意に隨へ　即ち金剛合掌し　唵字を誦じて供養せよ　數限畢らば復陳べよ　智拳にして一字を誦じ　晝は部心の印を用てし　夜は佛眼の印を以て　五處を印じて護を作せ　[一六五]復次に又

茶羅では、無能勝金剛と稱して、釋迦院の釋迦牟尼佛の下方(左)に居す。

【一二四】佛眼如來母。金輪の曼茶羅に佛眼尊を列するにつき、諸儀軌禀承錄第十には「金輪と佛眼とは、不斷に相離れず。大日金輪は金の智月、胎の理日に住し、佛眼は胎の理日、金の智月に住して、同じく倶に不二の身也」(＝左)、「凡そ金輪と佛眼とは、倶に不二の尊なれども、佛眼は胎の大日、金の智月に住し、金輪は金の大日、胎の理日に住す」(二六右)と言つてある。是れ理智不二五爲主伴の義を表したものと、解して居るのである。但し佛眼尊は部母であるから、加へるのである。

【一二五】三摩地念。三摩地念誦のこと。即ち、都て舌を動かさず、定心に住して、眞言の字相・字義等を觀ずるを云ふ。

【一二六】三字の密言。[梵字]。

【一二七】菩提心密語。[梵字]字。

【一二八】金剛語心。[梵字]字は金剛語菩薩の種子心である。

【一二九】rnih

【一三〇】瑜伽珠經。具名を金剛頂瑜伽念珠經と云ひ、唐の不空譯(天寶五—大曆六(740—771A.D.))、空海の請來。金剛頂經十萬廣頌中より略出すと云ふ。毘盧遮那佛、金剛薩埵に勅し

一四六唵特勒二合迦

此の加持を作すに由つて　一切の穢處に入るに　魔障便を得ず　次に念誦の時を明さん

瑜伽教王の中に　如來の稱讃し給ふ所は　時方處有ること無し　當に知るべし間あらしめざるなり　一四七四時と或は三時と　二時と乃至　一四八一と　一四九無間一切の時となり　三といふは謂ゆる晨と午と昏となり　夜半を加へて四と成す　二時といふは謂ゆる晨と暮となり　一時は暇を得んに隨ふべし　初より乃し終に至るまで　皆此の儀軌に依るべし　或は壇淨室なくんば　處に隨つて念誦を作せ　一五〇先づ當に嚂字を觀じて　身を淨め及び處を淨むべし　字を頂上に安じ　智火を發して焚燒せよ　身も處も灰燼すら無うして　清淨なること虛空の如くせよ　纔に此の三昧に住すれば　百一五一劫に積める重罪も　一念に頓に蕩除す　夫れ三摩地に入るには　身心の相を計し　及び一五二色等を分別せされ　但し諦かに一境を觀ぜよ　是の法の加持に由つて　三界を淨めて空にして虛なり　即ち虛空の中に於て　一五三婀字を觀じて殿と成して　一五四忉利天宮の如くせよ　又寶殿の内に於て　前初の如く觀念せよ　婀字心月と成ると　次第復殊ならず　是れ佛の不空の體なり

疑しき所の不淨の者あらば　皆嚂字を觀じて焚け　此の法界心の　密言の威力に由るが故に　淨むる所法界の如し　當に嚂字の義を知るべし　謂ゆる一切の法は　本より淨にして垢染無し　諸法清淨なるが故に　淨も染も不可得なり　阿字は菩提心なり

一五五種智の本源なり　是れ一切の字の母なり　十方三世の佛の　所説の一切の法は　此の字體に非ずといふこと無し　纔に念ずれば即ち　一切如來の法を稱するに同じ　眼に於て此の字を觀ずれば　即ち能く天眼を成じ　一五六餘の四も悉く具足す　諸根例して知んぬ可し　乃至鐵石に於て　安布して諦かに觀念すれば　能く動かし及び金と成る　此れ

は、五百由旬の内に於て、餘尊の法を修しても、此の尊の威德力に斷壞されて、其の悉地を得ずと云ふ、之を金輪の五百由旬斷壞の德と稱す。

【一一七】悉地。(siddhi) の音譯で成就の義。

【一一八】盡以虛空界。是れ虛空を道場と爲し、行者其の中に住して、自身本尊と成る觀文である。

【一一九】一字金輪の眞言は悉地成就の呪であるから、他の法を修して驗なき時、此の尊の眞言を誦ずれば、その助を得て必ず成就を得。而して虛空を道場と爲して、其の中に住するのであるから、局定せる道場なく、此の時は一切時皆時刻、一切處即ち密場であつて、皆悉地現前するのである。題額に一切時處念誦成佛と云ふは、此の意に外ならない。

【一二〇】以下は一字金輪曼荼羅を明す。

【一二一】七珍。以下に示す寶輪寶・珠寶・寶女・馬寶・象寶・主庫藏神寶・兵寶の七寶を指す。

【一二二】摩尼(maṇi)。寶。

【一二三】無能勝。(Aparājita)を無能勝と譯す。釋迦牟尼佛の斷德を表し、其の威德廣大、能く之に勝るものがないから、爾か名く。即ち、釋迦如來の敎令輪身の名とし、現圖胎藏曼

戲論の　輪王の實相の定を獲得す　乃至一念に於て　淨心相應するが故に　無上の正智を獲　無始より積める罪障　頓に滅して餘有ること無く　十方の諸の如來　本尊皆現前して　希求する所の願を滿し　世間出世間　一切皆賜與し給ふ　乃至現生に於て本尊の身を成就す　復身勝の印を結んで　三字の密言を誦ぜよ　即ち菩提心を觀じ阿字門を思惟せよ　諸法本より不生なり．是れを[一三五]奢摩他と名く　諦かに字體を觀ずる　是れ[一三六]毘婆舍那なり　此れを名けて[一三七]雙運とす　諸觀皆是の如し　又勝身の印を結び　心・額・喉・頂に於て　各〻一たび印を掣き開いて　此の解脫の心を誦ぜよ

[一三八]勃嚕唵三合

此の印密言に由つて　[一三九]聖衆縛を離るゝことを得　[一四〇]各〻本宮に歸つて　瑜伽を修習する者　解脫の地に至り給ふ　復佛眼の印を結び　[一四一]佛母の密言を誦じて　前の如く身を加持せよ　又本部の中の　[一四二]無能勝明王の　密言を用て自身の　五處を印ぜよ前の法の如く　八指右をもて左を押して　掌の内に各〻交へ合せ　大指を開いて微しく屈し少し頭指の側を離れしめて　此の心密言を誦ぜよ

[一四三]吽短く呼べ

此の加持を作すに由り　一切の時處に於て　魔冤侵すこと能はず　虎狼諸の毒虫　惡心の人[一四四]非人　盡く能く陵屈すること無し　如來初めて成佛し給ふとき　菩提樹下に於て　此の印密言を以て　天魔の軍を摧壞し給ふ　若し便易の處に入るには　[一四五]觸身忿怒　烏芻瑟摩の印を用てせよ　右の手常の如く拳にし　大指を翹てゝ　五處を加持し先の說の如くして　此の心密言を誦ぜよ

【一〇五】左低身。左は衆生界で下位を表すから、左方に曲げるのは、自身を卑下する義であつて、是れ尊敬の至極である。

【一〇六】嬉戲等。以下の嬉戲・花鬘・歌・金剛舞は、是れ四内供の印密言である。

【一〇七】Oṁ vajra-sattva-saṅgraha.

【一〇八】vajra-ratnam anuttaram.(?)

【一〇九】vajra-dharma-gāyanaiḥ.(?)

【一一〇】vajra-karma karobhava.(?)

【一一一】婆伽梵(Bhagavān)。世尊。

【一一二】佛眼の印密言。佛眼は部母であるから、一切の散念誦の初に、佛眼の眞言を誦ず。

【一一三】Namaḥ samanta-buddhānāṃ oṁ buddha-locani svāhā.

【一一四】瑜伽者(yogin)。行者。

【一一五】舍利。具には舍利羅(śarira.)身骨の意で、殊に佛陀の遺骨を指す。

【一一六】五百由旬等。由旬(yojana)は帝王一日行軍の里程であつて、或は四十里と云ひ、或は三十里と云ふ。但し支那の一里は我國の六町に當る。輪王の威德は極めて熾盛であるから、此の尊法を修する時

て　拔濟し利し安樂ならしめ　爲に正法輪を轉じて　神通遊戲を現し　一切の魔を摧伏して　現に悉地を證せしめ　悦意受用等をなして　還り來り自身に入つて　一二五三摩地念に住し　乃し疲倦するに至つて已れ　或は百八にし七にし三にせよ　復勝身の印を結んで　一二六三字の密言を誦ぜよ　三にし七にし所宜に隨ふべし　即ち菩提珠を取つて　合掌の內に盤け置き　心に當てゝ密語を誦ぜよ　一二七菩提心の密語なり　三遍し或は七遍して珠を捧げ頂上に安じて　一二八金剛語の心を誦ぜよ

一二九囕

此の密語を以て　念珠を加持するに由るが故に　所誦の尊の密語　一珠を掐て過し已れば　一たび一千遍と成る　二手を心の前に當てゝ　各五指を攝り聚めよ　母珠より初め起し　一たび誦じて掐ること一遍して　密言を齊平にせよ　母珠に至つて却き迴し母珠を越ゆべからず　驀過せば越法の罪あり　萬にまれ千にまれ或は百八にまれ　一の數を常の定と爲し　增減あるべからず　數限既に終畢んなば　還つて捧げ合せ加持して　淨處に放ち置け　珠を敬ふこと由し佛の如くして　輕しく棄觸すべからず　一三〇瑜伽珠經に云く　珠は菩薩の果を表す　中が絕するを　一三一斷漏と爲す　線貫は觀音を表す　一三二母をば彌陀佛と爲す　是を以て越ゆべからず　珠に由つて功德を積み　速に成就を獲るが故に　次に前の供養を陳べ　復智拳印を結んで　前の三摩地に入れ　一三三一字を觀念して　其の字義を思惟せよ　一三四諸法は本より無壞なり　塵も無く亦染も無く　淸淨なること虛空の如し　淸淨なること空の如くなるが故に　一切の法無壞なり　諸法不壞の故に　一切の法無染なり　諸法染に非るが故に　空も淨も不可得なり　字義を觀じて相應し　心理に緣住して　其の字を緣ぜず　同一體淸淨にして　法界に遍周し　無

【九六】四生。胎・卵・濕・化。

【九七】無緣の悲。無緣とは、無緣の衆生をも攝取して捨てない悲愍の廣大なる意で、同體の大悲に安住し給ふ大乘菩薩の大慈心を指して、無緣の悲に住すと云ふ。

【九八】一切智智(sarva-jñāna)。一切の智の中で最尊最勝なる智、即ち大日如來自然覺の眞智を云ふ。

【九九】三輪。惑・業・苦の三を云ふ。惑に依つて業を作り、業に依つて苦を感じ、更に苦に依つて惑を起し業を作る等、此の三輪轉して止むことがないから、輪と稱す。

【一〇〇】三摩地(samādhi)。定又は等持と譯す。心を一境に平等に持念する意。

【一〇一】最勝出生種種供養藏廣大儀如來。藏は梵語の bhājana の譯で、種々に供養する爲の寶財を藏する器物の義。廣大儀如來とは、廣大な儀式を集めて一體とせる如來と云ふ意で、虛空庫菩薩の異名。

【一〇二】Oṁ

【一〇三】諸佛の海會。曼荼羅海會を指す。

【一〇四】一百八名讚。是れ四智の讚を一百八名の讚と名ける本說である。其の故は、百八名を斂めて四智と爲すからである。

には　尊皆降赴せず　亦[一一七]悉地を賜はず　輪王の威徳を以て　諸法を斷壞するが故なり　所以に一切の時に　先づ是の加持を作せ　何が故ぞ事法の儀においては　時處に非ずして　念誦して成就を求むることを許さゞる　輪王の威徳　最勝無極の尊なるが爲なり　限約なく　非時處に降赴すべからず　純淨にして戲論なし　敎命は犯す可からず　是の故に期を失へずして　輒ち稱誦し啓請せよ　瑜伽理趣の門は　自心に建立する所なり　自身を本尊と爲して　諸の如來の體を集め　加持して己身と爲し　[一二八]盡く虛空界を以て　宮殿と爲して安住せよ　自身中に處して　本尊の瑜伽に住し　聖眷屬を以て圍繞して　大曼荼羅を成ず　是れに由るが故に無礙なり　又諸の行者　空無相の　如來の體性に達せざるが爲の故に　瑜伽中の敎王は　唯一平等にして淨なり

身を觀じて空相なりと知れば　即ち是れ自ら本尊なり　此の勝解に由るが故に[一二九]一切の時處に於て　念誦するに成就を獲　又前の智拳を作り　一字の密語を誦じて身に觀ずること前の說の如くせば　心月の中の輪臍に　一字の金色なるを現ず　舌の端にも亦是の如し　[一三〇]則ち是の字輪と爲り　其の輪轉輪と爲る　色金の如き容を持し[一三一]七珍を備へて圍繞せり　寶輪寶は前に在り　餘の寶は右旋して置かれ　珠寶は無量の[一三二]摩尼衆の圍繞せると與なり　次に寶女も亦　無邊の綵女と倶なり　馬寶及び象寶主庫藏神寶　各自眷屬を領して　無量の衆待立せり　兵寶は金剛を持し　[一三三]無能勝を師とせり　[一三四]佛眼如來母は　寶と共に八方に居せり　世の金輪王の　七寶眷屬を具せるが如く　如來頂輪王も　佛の無上の寶を以て　眷屬と爲して圍繞せり　是の觀念を作す時　本尊の密語を誦じて　一一に遍く諦かに觀ぜよ　自の成佛身の　遍體の毛孔の中より　等しく一切　世界の微塵數の　如來の身を流出して舒遍し　諸の有情界を盡し

【八八】慳貪。をしみむさぼること。

【八九】五眼。肉眼・天眼・法眼・慧眼・佛眼。

【九〇】般若(prajñā)。智慧。

【九一】阿修羅(Asura)。非天。常に帝釋と戰鬪をなす神。

【九二】傍生(Jiryañcn)。舊に畜生と譯す。傍生とは傍行する生類の意。

【九三】無間。無間(avīci)地獄のこと。八熱地獄中の第八の最重苦處で、五逆罪の一を造つた者は、無間にこゝに墮して、一劫の間痛苦を受け、休息の間斷がないから、爾か名く。倶舍論第十一に依れば、此の贍部洲の下、二萬を過ぎて無間大地獄が有つて、深廣各々二萬、故に彼の底は、此處を去ること四萬由旬であると言つてある。而して有情の造業に從ひ、この報を受けるのに、趣果無間・受苦無間・時無間・命無間・身形無間の五種がある。

【九四】莊嚴樹。劫樹のこと。佛身を莊嚴するには衣に由る。今は行者莊嚴樹を奉るに由つて、己が莊嚴樹の如き身を得んと希願するを云ふ。

【九五】六趣。地獄(Naraka)・餓鬼(Preta)・畜生(Jiryañcn)・修羅(Asura)・人(manuṣya)・天(Meva)。

調を以て此れを稱へよ

一〇八 嚩日羅二合曬怛曩二合麼弩路上覽

前の印を臍より　漸く上げて口に至して寫せ　是れ歌を奏するなり卽ち誦ぜよ

一〇九 嚩日羅二合達磨誐去也奈

心に當てゝ右に旋轉し　金剛合掌し已つて　復頂上に安ぜよ　金剛舞を進むると名く

前誦の如く復唱ふべし

一一〇 嚩日羅二合羯磨迦路婆嚩

是の祕密　瑜伽の歌詠讃を陳べて　如來を歎揚し奉るに由るが故に　成佛すること尙難からず　況や諸の成佛を求めんをや　應に知るべし何を以ての故に　謂ゆる一切の樂は

一一一 婆伽梵　金剛薩埵の樂に如かず　是の故に速に成就す　次に本部母 一一二 佛眼の印密言を以て　心に當てゝ誦ずること七遍し　四或は五處を印ぜよ　四といふは心と額と喉と頂となり　五といふは額と左右の肩と　心と喉となり頂上に散ぜよ　處ごとに各誦ずること一遍せよ　其の印は前の如く　金剛合掌を作り已つて　二頭指を並べ屈して甲を合せ大を並べ竪てゝ　各頭指の側りを押せ　謂ゆる佛眼の密言とは

一一三 曩莫三滿跢沒馱引南唵沒馱引路者儞娑嚩二合訶

部母の加持に由つて　本尊幷に眷屬　皆共に喜んで愛念し給ふ　一一四 瑜伽者に縱ひ　違犯闕法等有るとも　矜愍して過を見給はず　亦他に陵逼せられず　諸の密語を持する者

若し此の法を作さざれば　微しも闕少することを得ざれ　況や三麼耶を犯さんをや

若し瑜伽に依らずして　事法の念誦を作さば　壇 一一五 舍利に對はず　時處に非ず不淨にして　輙く印を結び念持すれば　決定して殃咎を獲　諸尊を修行する者 一一六 五百由旬の內

(argha)を六種供養と稱し、次での如く、持戒(śīla)・忍辱(kṣānti)・精進(virya)・禪定(dhyāna)・智慧(般若prajñā)・布施(dāna)の六波羅蜜(pāramitā)を表すとす。

【七九】五法身。戒(śīla)・定(samādhi)・慧(prajñā)・解脫(vimukti)・解脫知見(vimukti-jñāna)の五分法身のこと。

【八〇】五無漏(anāsrava)。漏は漏泄・漏落・留住の義で、煩惱の異名。今五無漏といふは、五分法身を指す。

【八一】炎承。承は蒸の義で、むしあつきこと。

【八二】四八大人相。常には略して三十二相と云ふ。

【八三】八苦。生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎會苦・求不得苦・五盛陰苦。

【八四】變化苦。五衰の苦を指す。天人が死ぬ時には、必ず五種の衰相を現ずると云ふ。經論の說が一定してゐないが、大體次の如くである。一、衣裳垢膩。二、頭上花萎。三、兩腋汗出。四、身體臭穢或は身失二威光一。五、不レ樂二本座一。

【八五】普賢。普賢金剛薩埵のこと、亦是れ大日如來である。

【八六】氛蘊。氛は氣を本義とす。

【八七】解脫味。空・無相・無願の三解脫門を指す。

ん　舞を供ずるを以て神通を得ん　瓶を奉るを以て賢瓶を得て　能く意願を滿悅せん
寶を進むるを以て衆寶を獲ん　[九四]莊嚴樹を貢るに由つて　佛衣覺樹を得ん　幢を奉る
を以て寶を雨すことを得て　能く遍く貧乏を濟はん　幡を供ずるを以て魔を超勝せん
鈴を獻ずるを以て衆歸從せん　瓔を奉るを以て嚴具を獲ん　鬘を進むるを以て寶冠を得
ん　花を上るを以て佛容を得ん　復此の福聚を以て　無盡　無餘の有情界の　[九五]六趣
[九六]四生等に迴施せん　乃至自の身と　心と口との三金剛の　地水火風界を以て　無邊
の　等虛空法界に周遍して　一切の含識に與へ　悅意して之を受用せしめん　此の
[九七]無緣の悲に住して　常に拔濟し利樂し　彼と共に同じく迴向して　願くば大菩提を成
じ　[九八]一切智智に應ぜん　復是の觀察を作さまく　一切の法は皆空なり　[九九]三輪の體有に
非ず　當に知るべし無所得なりと　是の[一〇〇]三摩地に住して　能く眞實に拔濟すれば
無限の福利を獲て　所作速に成就す　是の觀念を作す時　[一〇一]最勝出生　種種供養藏
廣大儀如來の　一切供養の心を誦ずべし

[一〇二]唵

此の密語印を以て　加持する威力に由るが故に　縱ひ觀想成ぜずとも　[一〇三]諸佛の海會に於
て　皆上の如く等の　諸の供養雲海有つて　眞實に具に成就す　諸佛の誠諦　法爾
の所成なるに由るが故なり　次に當に本尊　[一〇四]一百八名の讚を誦ずべし　金剛合掌を作り
心に當てゝ　[一〇五]左に身を低れよ　是を敬禮の儀とす　美韻の調を以て　此の金剛歌を
唱ふべし　次に[一〇六]嬉戲の密　言を誦じ印は前の印を用ゐよ

[一〇七]唵嚩日羅二合諸同薩埵僧上糵囉二合賀

金剛掌を改めずして　臂を合せ舒べて額に安ぜよ　即ち是れ花鬘を獻ずるなり　清雅の

業を内證とし、虛空の如き平等心の庫に藏してある功德の財を、自在に出して衆生に施與する所から、此の名がある。

【七一】劫樹（Kalpa-taru）。劫波樹の略。帝釋天の喜林園に在つて、時に應じて一切所須の物を出すと云ふ。劫波は時分の義、この樹の花の開閉によつて晝夜を知る、故に劫樹と名くと稱せらる。印度では此の喜林園の劫樹に擬して、種々の華香瓔珞の寶を樹に掛けて、衆庶に施すを常とす。故にまた寶樹とも名く。

【七二】白拂。白毛の拂子。

【七三】繖。キヌガサ。

【七四】贍部洲（Jambu-dvīpa）。舊譯には閻浮提と云ふ。閻浮は即ち贍部（Jambu）で樹の名、提（Dvīpa）は洲と譯す。吾人の住する世界を總稱したもので、此の洲の中地に、贍部樹が多く茂生する所から、其の名を得、また須彌山（Sumeru）より南方の鹹海に在るから、一般に南贍部洲と云ふ。

【七五】本體の香。天人には本有として生得の薫香があるから、爾か名く。

【七六】等引。平等引發の義。

【七七】六趣。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天。

【七八】塗香等。以下の塗香・華・焚香（燒香）飲食・燈明・閼伽

深く悲傷し愍む可し　我れ今云何んが救ふべきと　復是の思惟を作さまく　我が積める所の福業を以て　用て彼を拯濟すべし　我れ[七八]塗香を獻ずるに由つて　當に[七九]五法身を獲べし　願くば此れより等流せる[八〇]五無漏の塗香を以て　熱惱の者を磨瑩し　諸の地獄の　一切の劇[八一]炎承を奮破せん　花を獻ずるが故に當に[八二]四八大人の相を得べし　復此の福を迴向して　妙覺の花臺を成じ　光を舒べて遍く照觸し　人天の趣の　諸欲の境に耽著して[八三]八苦に纏逼せらるゝと　天の樂の[八四]變化する苦とを驚覺して　願くば彼の諸の天と人とをして　菩提心敷榮し　[八五]普賢の常樂を獲せしめん。我れ焚香を奉るに由つて　佛の無礙智を得　悅澤にして端嚴を具し　此の香雲を迴施して　寒水の苦に[八六]氛馥せん　食を獻ずるを以て法喜と　禪悅と　[八七]解脫味とを獲て　餓鬼趣に迴施し　普く諸の微妙の　天の甘露の飲食を雨らし　願くば加持の食を食せしめて　皆悉く充足することを得しめ　永く飢渴の苦と[八八]慳貪の惡習業とを離れしめん　燈を獻ずるを以て[八九]五眼を得て　以て[九〇]般若の燈と爲し　[九一]阿修羅を照曜して　永く矯誑の心と　恚癡によつて鬪諍を好むとを斷じ　[九二]傍生の鞭撻に逼められ　互相に害して食噉するを　願くば慈悲心を得て　常に人天の路に生ぜしめん　色無色界の天の　三昧の味に耽著せるをば　願くば此の惑纏より脫ぜしめん　閼伽香水を獻ずるを以て　平等性智　三界法王の位を證せん　此の降注の　金剛甘露の水を迴施して　水居の者を灌沐し　永く傍生趣を離れしめて　速に淨法身を獲しめん　及び下[九三]無間と　一切の諸の地獄とに徹して　苦を具に碎いて塵の如くし　皆清涼の地と成さん　苦を受くる諸の群品　解脫して淨土に生ぜん

嬉を奉るを以て常に悅を受け　笑を獻ずるを以て佛憐念し給ふ　歌を奉るを以て法音を得

【六六】印密言。印は勝身三昧耶の印を指す。

【六七】印心等。以下の印成五智の法門は、合理的に説明することが出來ない。ただ三密加持に依つて體得した五智を、しばらく身の五處に配したに過ぎないと解するのが、最も隱當な行方であると思はれる。勿論觀念の世界の所行であることは、更めて言を俟たつまでもない。尤も諸儀軌稟承錄第十（二十七右）・冠註即身成佛義下（十右）には、種々な說明が試みてあるけれ共、何れも牽强附會の說であつて、贊意を表し難い。今便宜上、九識・五智・五佛の關係を圖示すれば、左の如くである。

第八識—大圓鏡智—阿閦佛（金剛堅固の體）

第七識—平等性智—寶生佛（福聚莊嚴身）

第六識—妙觀察智—阿彌陀佛（智慧身）

前五識—成所作智—釋迦佛（變化身）

第九識—法界體性智—大日如來（虛空法界身）

【六八】trāṁ

【六九】hoḥ（？）

【七〇】虛空庫藏大菩薩の密言。(Oṁ)を指す。虛空庫（Gaga-Gunagañja）菩薩は、供養の事

[六九]穀

此の拍掌の儀に由つて　輪王及び眷屬　適悅して愛順し　速に瑜伽者の意願悉地の果を滿し給ふ　當に堅固の體を獲べし　次に供養の儀を陳べて　尊幷に聖衆に奉れ　金剛合掌に作せ　儀式は前に說くが如し　自の頂上に安じ　[七〇]虚空庫藏　大菩薩の密言を誦じて　當に是の思惟を作すべし　印の中より　諸の供養雲海の　閼伽衆の香水と　諸天の妙伎樂と　歌と舞と嬉戲等と　塗香と花と燒香と　飮食と燈と賢瓶と　[七一]劫樹と諸の寶類と　[七二]白拂と　[七三]繖と臺と閣と　寶幢と幡と鈴と珮と　珠と瓔と帳と花鬘と　宮殿と天の男と女と　及び人と天との所有の一切の受用の物とを流出すと　此の[七四]贍部洲と　及び十方の佛土とに於て　水陸の諸花等と　人天の意樂の者の　福感と幷に變化と　嬋娟たる花の馝馞たると　又諸の天人の　所有の[七五]本體の香と　和合變易の香と　燒香と塗と抹香と　種種の差別の類の　氣馥にして妙に意を悅ばしむるを以てし　復諸の人天の　所有の本體の光と　自性及び差別の　殊勝悅意の光とを獻じ奉り　三世三界の中の　一切の天の供養の　衆多種の差別　金剛頂・經　と　及び諸の祕密教と　一切の衆の大乘の　契經等とに說く所の如き　廣大の供養の具を　先づ本尊　幷に眷屬等に奉獻し已つて　次に[七六]等引して　十方の諸の世界の　盡虚空法界の　微塵刹土の中の　諸佛の大海會に周遍して　一一の聖衆の前に　普く供養して住すとおもへ　復十方を觀察して　是の如くの願を發して言ふべし　我れ今諸佛に請し奉る　未だ法輪を轉じ給はざるには　願くは速に法輪を轉じ給へ　涅槃に入らんと欲し給ふには　願くは常に住して世に在せと　復是の如くの念を興すべし　無邊の諸の含識　[七七]六趣に淪溺し　自心の虚妄に由つて　種種の業報を感じ　佛性を壞れども知らず

の義。
【五三】諸法相應。表德實相・互相涉入の義。
【五四】大法輪。八輻金輪を指す。
【五五】以下は大日金輪の形像を示す。是れ即ち金剛界の智佛が、胎藏界の日輪三昧に住した相である。
【五六】遍照如來。大日如來(Mahā-vairocana-tathāgata)のこと。
【五七】金剛拳。是れ安祥寺流所傳の金剛拳の證文である。
【五八】智拳印。是れ大日金輪の智拳印である。金輪は自受用身であるから、金界大日の智拳印とは聊か異つて、印の表を心に向はしむ。之を智向前印と名く。
【五九】bhrūṁ
【六〇】壽・年。壽は長壽。年は變じて少年の相となること。
【六一】最勝印。智拳印の別名。
【六二】頂輪王勝身三摩耶。また如來勝身三摩耶と名く。大日金輪の祕印で、此の印は直に佛の身形を結び顯すから、勝身三摩耶と云ふ。
【六三】Oṁ bhūḥ khaṁ.
【六四】此毘盧遮那佛。以下の文は、大師即身義に引證し玉ふ。
【六五】一字。(bhrūṁ)の一字を指す。

す・是の故に智拳と名く　復金剛輪を觀じて　心月輪を莊嚴すべし　次に[六二]頂輪王の勝身三摩耶を結んで　心・額・喉・頂を印ぜよ　其の印は前の如く　堅き金剛合掌に作れ　即ち中指を並べ竪てゝ　猶し青蓮葉の如くし　頭指を屈して各ゝ　中指の背の上節に安ぜよ　當に印相の義を知るべし　大指をば結跏と爲し　中指をば佛身に像る　名と小とは光焔を成す　二の掌は日月輪なり　腕は師子座を表す　是の故に如來の勝身三摩耶と名く　當に此の密語を誦ずべし。

[六三]唵僕欠

[六四]此の毘盧遮那　佛の三字の密言は　[六五]共に一字にして異ること無し　適に[六六]印密言を以て　[六七]心を印ずれば鏡智を成じて　速に菩提心　金剛堅固の體を獲　額を印ずれば當に知るべし　平等性智を成じて　速に灌頂地の　福聚莊嚴の身を獲　密語を以て口を印ずる時は　妙觀察智を成じ　即ち能く法輪を轉じて　佛の智慧身を得　密言を誦じて頂を印ずれば　成所作智を成じて　佛の變化身を證し　能く難調者を伏す　此の印密言に由つて　自身を加持すれば　法界體性智　毘盧遮那佛の　虚空法界身を成ず

即ち印を分つて二と爲し　金剛拳を以て額より　等引して腦後に至らば　則ち二頭指を竪てゝ　處毎に三たび相繞らせ　小指より歴く散じて　天衣を垂れ下すが如くにして　一切灌頂　三麼耶寶の心を誦ぜよ

[六八]怛嚂二合引

此の印密言に由つて　即ち虚空界の　一切の佛世界　金剛の寶冠と　輪鬘と繒綵とのごときを以て　具足灌頂に與ることを蒙る　聖衆を悅ばしめんが爲の故に　二手を心の前に當て　掌を平かにして三たび相拍つて　此の密言を誦ずべし

たゞ華嚴は、十の滿數について重々無盡の義を說くから、開いて十とし、密敎の金剛頂部(瑜伽)は、五智について五法を建立するから、合して五とするのみ。故に五悔を又普賢行願とも名く。

【四四】結跏趺坐。跏は足を組む義、趺は跗に同じく足の甲を云ひ、兩足を交結して、足の甲を更互に兩膣の上に安ずる坐相を云ふ。また半跏趺坐に對して、全跏趺坐とも稱す。半跏趺坐とは、一足を一膣の上に架して坐するを云ふ。

【四五】輪跏。具には輪王跏と云ふ。轉輪王の坐法で、之に三種ある。即ち、脚を交へると、一を垂れると、獨つの膝を竪てるとである。後の本文に出づ。

【四六】左の手等。是れ法界定印である。

【四七】性成就。諸法自性本有成就の義。

【四八】〃

【四九】魔羅(Māra)。能奪命・障礙・擾亂・破壞などゝ譯し、常には單に魔と云ふ。

【五〇】根・塵・識。六根・六境・六識。

【五一】伽他(gāthā)。譯して頌と云ふ。偈及び偈頌に同じ。偈頌は梵漢併稱したもの。

【五二】一切如虛空。是れ遮情

なりと照すべし　空の體を勝解するに由つて　自ら本心を徹見するに　皎潔にして滿月の如し　能取所取を離れたり　自性の光明成じて　菩提の體堅固なり　復月輪の內より　[五四]大法輪を踊出せり　金剛の所成にして　輻輞皆鋒銳れり　其の色檀金の如し　遍く大威光を流すこと　塵數の日を聚めたるに過ぎて　月輪の面に依住せり　金剛は極堅を表す　圓は福智の滿を顯す　利をば無戲論とす　諸の妄執を斷壞す　光は一切智を表す　諸の愚瞑を除破す　是を以て輪の形を現す　量虛空に同なるが故に　虛空の諸の如來　盡く輪の內に入り給ふ　[五五]即ち此の智輪を觀ぜよ　變じて金輪王　[五六]遍照如來の身と成る　形服素月の如くにして　一切の相好を以て　用て法身を莊嚴せり　金剛の寶冠を戴き　輪鬘を首の飾と爲し　衆寶莊嚴の具をもて　種種に身を校飾せり　智拳の大印を持して　師子座の　日輪白蓮臺に處せり　智拳印とは謂ゆる　中小名をもて拇を握り　頭指大の背に柱へて　[五七]金剛拳乃ち成ず　右を以て左の頭指の　一節を握つて面を心に當てよ　是れを　[五八]智拳印と名く　當に此の密言を誦ずべし

[五九]勃嚕唵（三合此の國には字の同なるもの無きを以ての故に、三字の聲を以て一字と成す。急に之を呼べ。）

三密纔に相應すれば　自身本尊に同じて　能く佛智に遍入し　成佛猶難からず　智と[六〇]壽と力と年とを獲　一切に遍行することを得て　現に大菩提を證す　故に　[六一]覺勝印と名く　若し此の瑜伽を修すれば　設ひ現に無量の　極重の諸の罪障を造るとも　必ず能く惡趣を超えて　刻疾に菩提を證す　此の最上　甚深微密の義を顯さんが爲の　故に此の大印に住せり　拳は能く堅く　諸佛の智法海を執持し　堅く固めて散失せずして　能く一切の印を成ず　故に金剛拳と名く　右を以て左の頭指を執ることは　十方の刹土の中に　唯一佛乘の　如來の頂法のみ有つて　等しく諸佛の體を持せるをあらは

【三三】六根。眼・耳・鼻・舌・身・意の六官。根は能生の義。此の六よく六識を生ずるから、六根と名く。

【三四】用三密淨除。三密淨なれば三業清淨にして、六根も亦清淨となる。

【三五】法香水。加持作法する所の香水。

【三六】以法。法は三密を指す。

【三七】嚩字。[illegible]字。

【三八】喩迦(Yoga)。瑜伽と同じ、相應と譯す。

【三九】五輪。五體の異名。兩臂・兩膝・頭首。此の五輪を地に著けて禮するを、敬禮の至極とし、常には五體投地と云ふ。

【四〇】oṁ sarva vid.（?）

【四一】羯磨(Karma業)菩薩。金剛業(Vajra-karma)のこと。此の尊は一切の供養の事業を內證とす。故に此の尊の印明を結誦して、諸供物を加持すれば、事業悉皆成就す。

【四二】悔喜等。前の眞言は禮拜で、通じて五悔具る。即ち、至心歸命・至心懺悔・至心隨喜・至心勸請・至心廻向これである。

【四三】普賢の行願等。凡そ一切の佛菩薩の行願は、普賢菩薩の十大願を出づることなく、五悔と十大願とは開合の不同で、その法體は一味である。

の如く合掌し　自心に當てゝ即ち　諸指を以て右、左を押し　初分を互相に交へて金剛合掌を成ぜよ　一切の諸の密印　此れより生ずるに非ざること無し　故に虛空庫と名く　印を結び密言を誦じて　頂上に安じ運心して　自身遍く　一一の如來の足を禮し奉り　復身を捨てゝ奉獻すと想うて　捨身の眞言を誦ずべし　諸佛菩薩衆において
　求請して加持を念ぜよ　一切金剛　不空三摩耶　諸佛事業の心を誦ずべし

四〇 唵薩嚩（七可反下同）勿（微一反）

此の印密言に由つて　自身を等流して　十方の無邊界　微塵刹土の中の　諸佛の大海會に遍じ　咸く皆自身有つて　四一羯磨菩薩の如く　一一の尊の前に於て　諸の供養の具を持し　身を捨てゝ奉獻し事ふまで　皆加持を受くることを崇むる　四二悔と喜と勸請と向と　四三普賢の行願と　瑜伽と花嚴とのごときに依れ　即ち　四四結跏趺坐して　全にし半にし或は　四五輪跏せよ　皆右を以て左を押し　身を端くし支節を定めよ　四六左の手を跏の上に仰け　右の手を仰けて左に安じ　即ち大悲心を發して　盡無餘の有情を　拔濟し利し安樂ならしめよ　此の　四七性成就の　菩提心の密言を以て　意に隨つて之を念誦して　菩提勝心を發すべし

四八 婀

適に密言を誦じて　菩提心を發すに由るが故に　諸の罪障を摧滅し　諸の悅意の樂を獲て　一切の佛に等同なり　四九衆の魔羅に超勝せり　障礙を爲すこと能はず　諸の世間　廣大の供養を受くべし　復次に諦かに觀ずべし　五〇根・塵・識の諸法は　自性本より皆空なりと　又　五一伽他の義を思へ　五二一切は虛空の如し　虛空も亦無相なり　五三諸法相應するが故に　一切に舒遍すと　此の四句の偈を誦じて　觀る所の彼彼の境　皆空亦空

と。

【二九】　違越。本誓念願に違ふ意。

【三〇】　齒木（danta-kāṣṭha）。三昧耶戒壇に於て、受者に嚼ましむる木。本來は優曇鉢羅（udumbara）、或は阿說他（aśvattha）木を以て製するのであるが、優曇鉢羅は支那・日本に無いので、香氣又は乳ある木を代用す。虫喰なく節なき枝を選び、其の丈十指量、或は十二指量に作し、木の根を細く、末を太く削る。抑〻印度の習俗に從へば、客を請する前日に、香華を以て嚴飾した楊枝（齒木）を贈るを常とし、客が楊枝を嚼んで其の汁を飮む時は、腹中の病を除き、宿食を消すから、後食する所の物は中らずとす。密教では此の世法に準じて、齒木を嚼ましむ。但し、深祕に約せば、三世無碍智の牙を以て煩惱を嚼摧し、身心の過患を除かんが爲である。

【三一】　葷𦼮。葷は葱・蒜の如き辛臭の蔬菜を云ふ。

【三二】　觸。人の觸れた穢れた食物と云ふ意。但し、金剛藥叉明王の印明を以て加持すれば、直に淸淨なる食物と成る。之を觸食加持と云ひ、瑜祇經卷下、大金剛焰口降伏一切魔怨品第十二に見ゆ。

べし　違越すること勿れと　及び外の儀式を修め　洗漱して　齒木を嚼め　豆蔻を噉ひ香を塗り　身口をして香潔ならしめよ　葷雜と酒と肉と諸殘と　觸とを食すべからず　常に身を潔くし服を淨くし　内外をして無垢ならしめよ　爪甲を長くし　穢に居し教に違して處すべからず　内といふは謂ゆる　六根なり　三密を用て淨除せよ　外といふは謂はく諸の儀軌なり　法の香水を以て灌沐せよ　或は外緣備はらずんば　即ち　法を以て淨除せよ　此の理趣最勝なり　當に　囕字を觀念すべし　下の文に廣く明すが如し　内外の垢を淨除すれば　沐せずして浴を成じ　常の服當に淨衣となるべし　蕩滌して虛空に等しく　無垢にして法界の如し　事理倶に相應するをば　如來最も稱讚し給ふ　喩迦を修習せん者は　師に從つて本尊の　瑜伽儀軌を受け已つて　明了にして疑惑無うして　然して乃ち勇進して修すべし　一切の時處に於て　念誦するに皆成就す

若しは閑靜の處と　名山と意樂に隨ふと　高峰の最も殊勝なるとに於てし　或は諸教の所說の　諸佛稱讚し給ふ處　若しは舊き塔殿宇　或は精室を創めて建てゝもせよ　教に依つて地を淨治して　牛糞を以て遍く塗り　極めて細滑ならしめ已つて　又白檀香を磨り　曼荼羅を泥拭して　方にまれ圓にまれ大小に隨つて　諸の聖位を羅列し　時花を散じて莊嚴し　力に隨つて供具を辦ぜよ　塗香と閼伽水と　焚香と飲食と燈と幡と蓋と鈴と珮とのごときを　壇の四邊に陳設せよ　若し本尊の像あらば　室の内に西に面けて安じ　瑜伽者は東に面ひ　初めて道場に入らん毎に　佛は常に世に住し給へりと想うて　五輪を以て地に著け　教の如く歸命して禮し奉れ　復諦かに諸佛　虛空界に遍滿して　側塞し給ふこと胡麻の如しと觀ぜよ　即ち是の心を發すべし　我れ今普く禮獻し奉ると　即ち香を取つて手に塗り　一切供養　最勝出生の印を結べ　先づ常

此の四心は普く無量の衆生を緣じ、無量の福を引くから、無量心と名く。

【三一】佛性戒。佛性三昧耶戒のこと。傳法灌頂を授くる以前に授くる作法。此の三昧耶戒は密教修行の指針で、眞言行者は入壇受法の前行として、必ず之を受くるのが常規と成つてゐる。

【三二】禁。禁戒のこと。即ち、四重禁戒・十重禁戒を指す。四種の重禁とは、不捨離菩提心・不應捨正法・不慳悋一切法・莫不利衆生行を云ひ、無畏三藏禪要には、密教獨特の十重禁戒を說く。四重と十重とは開合の不同で、共に眞言乘の命根として、之を破ることを深く誡め、灌頂の時、三昧耶戒壇に於て授く。三昧耶戒は三種菩提心を以て戒體とし、四重禁等を戒相とす。

【三三】輪壇。曼荼羅(Maṇḍala)道場を指す。

【三四】三麼耶(samaya)。誓戒。

【三五】執金剛。金剛薩埵(Vajrasattva)を指す。

【三六】含識。有情のこと。又生命あるもの。

【三七】三麼地(samādhi)。等持・等念・定と譯す。心が散亂麁動を離れて、一境に止住する意。

【三八】餘諸道具。佛道具のこと

を行じ　身命財を捐捨して　厭悔し顧悋すること無きと　[18]瑜伽教を學ぶことを求めて
恒に大精進　大慈誓願の鎧を被　[19]三解脱門を欣び　心[20]四無量を樂ふと　諸の有情を哀愍し　拔濟の心　間無うして　乃し成佛せしむるに至ると　灌頂の師若し　此の如くの勝法器を見ば　種種の方便を以て　慰誘して先づ爲に　大乘祕密の門を設け
三世の諸の如來　皆此の法に入るに因つて　速に一切智を獲給へりと　種種に開示し已つて　教へて菩提心を發さしめ　[21]佛性戒と　金剛堅固の　[22]禁とを授與し　當に引いて　[23]輪壇に入り　灌頂受職せしめ已つて　聖會を瞻覩せしめ　[24]三麼耶を告げ示すべし
今より成佛に至るまで　菩提心を捨つること莫れ　阿闍梨を敬仰すること　諸佛世尊の如くすべし　所有の言教誨をば　當に盡く奉行すべし　師の短を尋求せざれ　煩惱の行を見るに隨つて　貪染本淨なりと觀ぜよ　諸の同學の處に於て　嫌恨の心を生ぜざれ　敬ふこと[25]執金剛の如くせよ　乃し諸の[26]含識に至るまで　亦輕惱すべからず
諸天神仙等をば　皆禮事すべからず　敬はずして凌蔑すること勿れ　觀る所の一切の物　故に騎驀すべからず　壇の内の　諸聖の執持し給ふ所のものに同じきこと有るが爲なり　親り阿闍梨に從つて　對受せる諸の儀軌と　印契と及び密言と　微妙の[27]三麼地と　輪と金剛杵と鈴と　及び　[28]餘の諸の道具とを　成就を求むるが爲の故に　乃し佛位に登るに至るまで　恒に持して暫くも捨てざれ　此の教法の中に於ては　一字をも　未灌頂の者に向つて說くべからず　本尊の諸の教法は　本受法の師を除いては設ひ諸の同行の人なりとも　亦爲に說くことを得ざれ　縱ひ已に成就を得たりとも　纔に說かば便ち散失して　現には諸の殃禍を招き　中夭して地獄に墮せん　是の故に常に
此の三麼耶の禁を守護せよ　諸佛共に演說し給ひ　衆聖皆保持し給ふ　應に學す

ず。本尊の三密と行者の三業と相應涉入する義。故に今は、三密の瑜伽を宗とする眞言密教を指す。
【一二】無相無言の法。有相の體に即して、無相の法を成す。
【一三】此の三昧。三昧は三摩地(samādhi)の訛、靜慮又は等念の義。此の三昧とは、大日尊一字頂輪王の三摩地を指す。修此三昧者、現證佛菩提の二句を、大師は即身義に於て、即身成佛の證文として最初に引用せらる。
【一四】阿闍梨(Ācārya)。教授と譯す。
【一五】族姓。具には族姓子(Kula-putra)と云ひ、印度四姓中の隨一を指す。
【一六】三寶。佛・法・僧。
【一七】六度。六波羅蜜(pāra=mitā 到彼岸)のこと。即ち、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を云ふ。
【一八】瑜伽教。眞言密教を指す。
【一九】三解脱門。空・無相・無願を云ひ、此の三種の觀門は、能く行者をして涅槃(nirvāṇa)の境界に證入せしむるから、三解脱門と名く。
【二〇】四無量。慈(maitri)・悲(karuṇā)・喜(muditā)・捨(upekṣā)の四無量心を云ふ。

金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌

特進試鴻卿大興善寺三藏沙門大廣智不空詔を奉じて譯す

稽首して[1]普賢を禮し奉る　諸佛轉輪王　[2]大菩提を現證して　名を金剛界に受け給ふ
教勅輪を轉ぜんが爲に　自の頂より　[3]大金輪明王を流出し給ふ　威光衆の日に
逾えたり　[4]七寶具に圍遶せり　一切佛頂　輪王の輪王たり　纔に奇特の身を現ずるに
諸の聖衆皆沒す　勝絶不共にして　[5]唯佛一體なることを顯すが故なり　則ち彼の
[6]婆伽梵　[7]自性の智光を以て　威曜ある日輪を成じ　遍く無餘界を照し　諸の暗瞑を摧
壞して　菩提心をして生ぜしめ給ふ　復[8]身口意の　一切金剛界なるを以て　佛の事業
輪を成ず　其の量虚空に同じ　諸の有情界に遍じて　彼の罪障と　妄執と諸の[9]結使
とを爍斷す　不共の法を演べんが爲に　[10]髻珠七寶を賜ひて　菩提を頓證せしむ　是
の故に當に歸依すべし　我れ金剛頂　瑜伽大教王に依つて　[11]瑜伽を修する者の爲に
此の微妙の　成佛の理趣門を纂集す　自心に等覺を成ず　深奥にして能く量るもの罕な
り　且く言を以て　[12]無相無言の法　毘盧遮那佛　一字頂輪王の　殊勝祕密の法
瑜伽念誦の儀を　詮示せん　[13]此の三昧を修する者は　現に佛菩提を證す　傳法の[14]阿
闍梨　先づ弟子を簡擇せよ　淨信決定の者の　宿し諸の善根を殖ゑたると　[15]族姓に
して相好を具せると　孝と忠と義との德を備へたると　深く[16]三寶を敬重すると　大乘
を渇愛すると　諸の菩薩の　世に順ずる諸の方便　隨機化度の事を聞覩して　疑惑の
心を生ぜざると　樂しんで菩薩の行を修し　勇進して怯弱ならざると　法を護り[17]六度

【一】普賢。金剛界大日如來を指す。普は遍一切處の義、賢は最妙善の義で、此の德を究竟成就せる大日如來(Mahā-vairocana-tathāgata)を、普賢如來又は普賢法身と稱す。
【二】大菩提(mahā-bodhi)。菩提は覺智の義で、本有無垢の清淨心に當る。
【三】大金輪明王。大日金輪を指す。
【四】七寶。金輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・主藏臣寶・主兵臣寶。
【五】唯佛一體。佛菩薩の所有の功德、皆此の一尊に歸す。
【六】婆伽梵(Bhagavān)。世尊の義で、金剛界大日を指す。
【七】自性智光等。自性は本不生の義。以下は金剛界大日が、胎藏の日輪三昧に住することを顯す。
【八】身口意等。法身の三密の體性は、堅固不壞なること金剛の如くであるから、譬に寄せて金剛界と云ふ。界は體性の義。
【九】結使。結も使も共に煩惱の異名。
【一〇】髻珠七寶。轉輪聖王は七寶を具し、且つ髻中に明珠を祕す。今は一字頂輪王を轉輪王に比して、即身成佛の祕法を授與するに譬ふ。
【一一】瑜伽(yoga)。相應と譯

藏を尊信して居られたかゞ、容易に想像し得られる。

三藏が開元八年（720 A. D.）洛陽に入り、大暦九年(774A.D)入滅せらるゝまで、都合五十有五個年、假に天寶五年（746 A. D.）の再天歸唐後から計算すれば、二十有九個年、其の間に翻譯せられた經典數に就て見るに、

三朝所翻經請入目錄流行表………………七十七部、一百一卷
趙遷の行狀…………一百二十餘卷
飛錫の碑文…八十三部、一百二十卷
大師の付法傳…………一百五十卷
貞元錄十五……………………一百一十部、一百四十三卷

となつてゐるが、謂ゆる不空譯と稱して現存するものは、百七十三部であつて、之を其の內容から分類すると、大體次の如くである。

金剛頂部…………四十五部
胎藏部…………七　部
金胎不二部…………二十五部
雜密部…………六十九部
其　他…………二十七部

而して臨終陳情辭表に依れば、「所レ得金剛頂瑜伽十萬頌、諸部眞言及經論五十餘萬頌、冀總翻譯少ミ答國恩ト、何夙願之未レ終、忽生涯之已盡、此不空所ニ以爲ト恨也」（正藏、五二、八四六、B）と言つて居られるから、後世支那四大翻譯家の一人に擧げらるゝ程、多數の經典の翻譯を完了し、殊に密敎經軌の翻譯に於ける至大なる功績は、到底看過す可からざるものであるに拘らず、三藏は恒に心中窃に、其の不足を慚愧して居られたことが察せられる。三藏こそ勢力絕倫にして、弘道宣布の念に厚き、支那密敎第一の法將と稱す可きである。三藏が斯く偉大な業績を後世に殘し、且つ唐代密敎家の唯一人者として、其の名を竹帛に垂れ得たのは、勿論三藏の天性が頴悟聰敏であつたことに由來するのであるが、又他方、玄宗（713—756 A. D.）、肅宗（756—763 A. D.）、代宗（763—780 A. D.）の三皇帝の外護が、大に與つて力あつたことを見逃してはならない。

付法の弟子は頗る多く、一一枚擧に遑がないが、金閣寺含光・新羅國慧超・青龍寺慧果・崇福寺慧朗・保壽寺元皎・同覺超の六人は、六大弟子と稱せられて最も有名である。中に就て、兩部の大法を付屬された者は、青龍寺慧果唯一人である。付法の弟子の外、俗弟子も亦尠くなかつた。（不空表制集・貞元錄十五・同十六・宋高僧傳一・大唐故大德贈司空大辨正廣智不空三藏行狀・不空碑文・付法傳・仁王護國般若經疏法衡鈔一等）。

昭和八年十一月十日

譯者　阿部宥精識

南桃園に於て、仁王護國般若波羅蜜多經二卷・大聖文殊師利菩薩讃佛法身禮一卷・大乘密嚴經三卷を譯し、仁王經に御製の序を賜り、九月帝勅して、資聖・西明の二寺に百座仁王道場を建て、並に百師をして密嚴經を轉ぜしめ、同月不空上表して、御製序の寵恩を謝す。十月二十三日、長安資聖寺に於て、無遮大會を設けて仁王經の慶讃を行ひ、實に一時の盛觀を極む。次で同年十一月一日、勅して不空を特進試鴻臚卿に補し、大廣智三藏の號を賜ふ。大曆四年（769 A. D.）十二月十九日、天竺大乘僧伽藍の例に倣ひ、天下寺院食堂中に、賓頭盧（Piṇḍola-bhāradvāja）尊者の上に文殊像を置き、以て上座と爲さんことを奏請し、同年大虚空藏菩薩所問經八卷を譯す。同五年（770 A.D.）夏、五臺山に入つて功德を修し、同六年（771 A. D.）十月十二日、代宗皇帝誕生の嘉節に當り、開元以來の譯經七十七部一百一卷、並に目錄一卷を表進して入藏を請ひ、同月二十二日、勅して錦綵絹等八百疋を不空に、綵各三十疋を翻經十十大德に賜り、同七年（772 A. D.）正月二十七日、上表して所譯經軌の入藏を謝す。同年十月十六日、不空の奏により、天下の寺內に大聖文殊師利菩薩院を建てゝ、文殊の塑像を安置することを許さる。同八年（773 A. D.）五月、大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴經三卷を譯し、同年十月、天下の大寺七僧・小寺三僧をして、新置の文殊院に於て、國の爲に長時に、文殊師利功德莊嚴經を講宣せしめんことを請ふ。大曆九年（774 A. D.）夏、不空病に罹る、帝痛く宸襟を惱し、勅して醫藥を賜ふ。六月十一日、更に開府儀同三司を加へ、肅國公に封じ、食邑三千戶を賜ふ。同月十五日、平素所持せし先師金剛智三藏相傳の金剛鈴杵・銀盤子・菩提子・水精念珠並に合子を遺物として、代宗皇帝に進献す。かくて同日午時、香水澡沐して衣服を換潔し、東首倚臥、右脇累足、北面闕庭を瞻望して大身印を結び、奄然として遷化せられた。時に享壽七十、法臘五十であつた。此の年が實に我國の寶龜五年に當り、且つ十五日が高祖弘法大師の誕生の日であることは、そこに何等かの因緣がある樣に想像される。皇帝の宸悼殊に深く、朝を輟むること三日、諸弟子に勅して、各々和順して瑜伽觀行に住し、本教に依つて修行せしめ、また葬送威儀並に遺書に依らしめ、葬日には白米・粳米・白麵各五車四百石、柴十車、油七石、炭三車、錢三十萬、二十八日には、造塔錢二百二十五萬・直絹七百五十二匹を賜ひ、七月五日には、司空の官を追贈し、大辨正廣智不空三藏和上の謚號を加へ、八月二十八日には、李元琮をして舍利塔及び碑を、長安大興善寺の本院に造らしめ給ふ。是等の諸事實に徵し、代宗皇帝が如何に三

寶瓔珞・般若梵夾・雜珠・白氎等の賜物を奉進す。帝勅して鴻臚寺に居らしめ、續いて宮中に召し、壇を建てゝ親しく五部灌頂を受け、尋で淨影寺に移住せしむ。この歳雨を祈つて功あり、帝大に嘉悦し、紫袈裟一副、絹二百匹並に智藏の號を賜ふ。同八年（749 A. D.）本國に還ることを許され、長安を發して南海郡に向つたが、路次疾に染み、韶州に寄止す。同十二年（753 A. D）河西節度使西平郡王哥舒翰の奏請に依つて、長安に歸り、尋で河西に赴き、翰の請に依つて、金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經三卷・菩提場所說一字頂輪王經五卷・一字頂輪王瑜伽經一卷・一字頂輪王念誦儀軌一卷を譯出す。同十四年（755 A. D.）武威郡開元寺に入つて、翰及び大官、士庶數千人の爲に灌頂を授く。弟子含光は五部法を、李元琮は金剛界大曼荼羅を受く。同年七月安祿山の叛起り、同十五年（756 A. D.）五月勅を河西に下し、不空を長安に召還して、大興善寺に住せしめ、壇を立てゝ轉禍禳災の祈禱を修せしむ。至德中肅宗靈武に在るや、密に不動尊八方神旗經を進め、同二年（757 A. D.）十月上表して、兩京の復收を賀し、同二十三日再度肅宗の還都と、叛亂の平定とを表賀し、同月尊號を册するに方つて、帝に灌頂を授け、その功に依つて翻譯を許され、且つ度僧を賜ふ。同十二月九日玄宗上皇の還京を表賀す。爾來兩帝の尊崇、愈ゝ深厚を加ふ。乾元元年（758 A. D.）正月三日、不空の本院に齋を設け、特に香を賜ひ、同三月十二日、中京慈恩寺・薦福寺、及び東京聖善寺・長壽寺・福先寺、並に諸州縣舍寺・村坊等に、玄奘・義淨・善無畏・菩提流志・寶勝等の諸三藏所持の梵夾を捜訪し、翻傳を修補せんことを奏請して勅許を得、六月十一日、師子國より請來せる經論の翻譯を許され、九月一日、虎魄寶生如來像一軀、梵書大隨求陀羅尼一本を進む。肅宗は乾元年中、不空を請じて入內せしめ、道場を建てゝ護摩法を行ぜしめ、親しく轉輪聖王位七寶灌頂を受く。同二年（759 A. D.）宿曜經二卷を譯す。上元元年（760 A. D.）閏四月十四日、宮苑都巡使李元琮の奏により、勅を不空に下し、大興善寺に於て、國の爲に灌頂道場を造り、息災、增益法を修して、群兇消滅並に聖壽長久を祈らしむ。寶應元年（762 A. D.）四月、肅宗崩じ、代宗卽位するや、信任益ゝ厚く、同年十月十三日、彫白檀摩利支像一軀、梵書大佛頂陀羅尼一本を表進し、廣德元年（763 A. D.）十一月十四日、上表して灌頂道場を長安大興善寺に置き、每載夏中及び三長齋月に、國家の爲に之を建修せんことを請うて勅許を得、同二年（764 A. D.）正月、大興善寺に大德四十九員を置かんことを奏請す。次で永泰元年（765 A. D.）四月二日勅許を得、大明宮

任に當つた英髦の師で、三藏の門弟中最も俊れた人であるから、此の人の說が眞實であらねばならない。仍て三藏は大唐神龍元年(705 A. D.)十二月、北天竺婆羅門の子として生れたものとす。天性頴悟聰明、一聞能く通じ、十四歳にして、闍婆國(Java)に於て金剛智(Vajra-bodhi)三藏に遇ひ、沙彌(Śrāmaṇera 勤策男)として和上に師事し、常に左右に侍して梵語を學び、倶に海路支那に向ひ、開元八年(720 A. D.)東都洛陽に達す。開元十二年(724 A. D.)不空齡弱冠に及び、洛陽廣福寺一切有部石戒壇に於て、具足戒を受く。これより律典を學び、聲明論に精通し、常に師の左右を離れず、譯經道場の譯語に從事す。既にして師の夢寐に依つて、眞法器たることを認められ、直に五部灌頂・護摩・阿闍梨法・毘盧遮那經・蘇悉地儀軌・諸部眞言行等の新瑜伽五部三密の大法の傳授を受く。開元二十九年(741 A. D.)七月廿六日、師金剛智本國に歸る勅許を得られ、次で東都廣福寺に至つて病を發し、同年八月十五日遂に入涅槃せらるゝに遇ひ、遺旨を奉じて再び天竺に往かんと欲す。時に詔あつて、國信を賫し、先づ南海郡に至るや、採訪使劉巨鱗、灌頂を受けんことを懇請す、仍て法性寺に於て道場を建立し、相次で人を度すること百千萬衆、その年十二月崑崙の商舶に乘じて、弟子の含光、慧䛒等僧俗三七人と倶に廣州を發し、訶陵(Kaliṅga)國界に至る頃、大黑風の襲來に遭ふ。不空右手に五股杵を執り、左手に般若佛母經篋を持して作法し、大隨求陀羅尼を誦ずるに、輒ち風偃み怒濤鎭る。又鯨鯢の屬、頭を交へて出沒するに遇ふ、不空作法前の如く、慧䛒をして娑竭羅龍王經を誦ぜしめて、此の鯨難を免るゝことが出來た。斯樣に惡風鯨魚の危難に遭ひ、激浪狂瀾と戰つて、具に種々の辛酸を嘗めたが、何れも皆眞言妙法の威力に依つて退散せしめ、一年を經ずして師子國に達す。國王大に喜び、宮中に請じて供養奉仕すること七日、次で佛牙寺に居らしむ。不空乃ち普賢阿闍梨(龍智菩薩のこと)に謁し、金寶・錦繡等を奉獻して、求法の懇志を陳ぶ。仍て龍智阿闍梨、十八會金剛頂瑜伽法門・毘盧遮那大悲胎藏を開き、壇場を建立し、五部灌頂を授く。弟子含光・慧䛒も、亦同じく之を受く。かくて師子國に留ること三年、廣く密藏及び諸經論を求め、三密護身・五部契印・曼荼羅法・三十七尊儀形色像・瑜伽護摩等、皆備に精練し、性相また其の源を盡す。次で五天を周遊すること二年、陀羅尼教金剛頂瑜伽經等八十部、大小乘經論二十部、合計一千二百卷を携へ、小使彌陀を伴とし、再び師子國を發し、天寶五年(746 A. D.)海路歸唐して、玄宗皇帝に謁し、師子國王尸羅迷伽(Śīla-megha)の表、及び金

准胝法を以て第一祕法とし、一字金輪法は長者に非ざれば、之を修すべからずと定められてあつた程である。

以上で本儀軌の內容を概觀し終つたのであるが、要する所、金剛頂瑜伽大教王に依つて纂集された此の微妙の成佛の理趣門は、自心に建立する所であつて、盡虛空法界を以て道場と爲し、自身中に處して、本尊の瑜伽に住し、聖眷屬を以て圍遶して、大曼荼羅を成ずと觀想することになつて居るから、若し此の觀が成就すれば、虛空を道場と爲して、行者自身其の中に住するのであるから、局定せる道場とてはなく、一切時皆時刻、一切處卽ち密場であつて、何れの時處も皆速に悉地現前の時處と成るのである。之に反して、設ひ事相が備つても、若し此の觀が成就しなかつたならば、悉地は到底得難いのである。題額に一切時處念誦成佛と言つてあるのは、全く前者の意に外ならない。本儀軌が如何に瑜伽觀行に重きを置いて居るかは、此の一事に徵しても、容易に窺ひ知られる。從つて本法は、勝法器を種々の方便を以て慰誘して、然る後に初めて授與することに成つて居る。文に「此の教法の中に於ては、一字をも未灌頂の者に向つて說くべからず」等と言つてあるのは、此の法の尊重す可きことを深く誡めたものである。

二、本儀軌の末註

本儀軌の末註に金剛頂經一字頂輪王儀軌音義一卷がある。此の音義は、本邦人が音訓を施したのであるが、其の撰者は不明である。和州豐山初瀨總持院の快道、享和元辛酉年（1801 A. D.）秋八月、此の本を求めて寫し置き、同年冬十月更に之を梓行し、大正新修大藏經は右の長谷寺藏本を底本として上鉛し、現に其の第十九卷（三二七、A）に載せてゐる。

三、譯者不空三藏の略傳

三藏は梵に阿目佉跋折羅（Amogha-vajra）、唐に譯して不空金剛（705—774 A. D.）、或は單に不空と稱し、法諱を智藏と云ふ。三藏の出生地に就ては、五天說（表制集四）・南天說（貞元錄十五、略付法傳）・西域說（表制集六・貞元錄十六・續貞元釋經錄上、付法傳二）・北天說（表制集四、宋高僧傳一）の四說があるが、以上の中で、有力なのは南天、北天の兩極端說である。南天竺說の主唱者圓照は、貞元錄等の撰述者であり、また表制集の集錄者であつて、當時史家として重きをなして居た人であるが、他方の北天竺說の代表主張者飛錫は、大興善寺大德四十九人中の一員で、三藏の碑文並に影讚の撰者であり、且つ三藏が傳譯に從ふや、常に其の譯場に侍つて、筆受・潤文・證義の

て居る。

本儀軌に示す修法の順序を列記すると、先づ「若し本尊の像あらば、室の内に西に面けて安じ、瑜伽者は東に面ひ」と說き、次に虛空庫菩薩の印明を結誦して、諸供物を加持し、次に結跏趺坐して、菩提心の密言を誦じて菩提心を發し、その滿月輪中より大法輪を踊出し、この智輪變じて、智拳の大印を持し、師子座の日輪白蓮臺に住し給ふ金輪王遍照如來の身と成ると觀じ、次に勃嚕唵の一字眞言、頂輪王勝身三摩耶の印密言、灌頂の印密言、拍掌並に密言を誦じ、次で再び虛空庫藏大菩薩の印密言を結誦して、塗香・華鬘・燒香・飲食・燈明・閼伽の六種供養を初め、諸大乘經典所說の廣大の供養の具を、本尊、眷屬並に十方の諸の世界の、盡虛空法界の微塵刹土の中の、諸佛の大海會に周遍して、一一の聖衆の前に奉獻して住すと思惟し、次に金剛合掌を作つて、本尊一百八名の讃を誦じ、次に嬉戲・花鬘・歌詠・法舞の四內供の印密言を結誦し、次に佛眼の印密言を以て、心に當てゝ誦ずること七遍し、四或は五處を印じ、次で又前の智拳を作り、一字の密語を誦じて身に觀ずれば、心月の中の輪臍に現れた金色の一字は輪となり、其の輪轉輪となつて、色金の如き容を持し、輪王の七寶並に佛眼尊を以て圍遶せる曼荼羅を成ずと觀念し、次に重ねて勝身の印を結んで、三字の密言を誦じ、同時に菩提珠を取つて、合掌の內に盤け置き、心に當てゝ菩提心の密語を誦じ、次に金剛語菩薩の密言を以て、念珠を加持し、復智拳印を結んで、勃嚕唵の字輪觀に入り、更に又身勝の印を結び、三字の密言を誦じて菩提心を觀じ、阿字門を思惟し、次で復亦勝身の印密語を結誦して、解界し撥遣し、最後に復、佛眼の印を結び、佛母の密言を誦じて、前の如く身を加持し、更に無能勝明王の心密言を以て、身の五處を印ずることに成つて居る。

此の外、修法に關する注意として、便易の處に入るには、觸身忿怒烏芻瑟摩の印密言を結誦すべきことを明し、念誦の時は、四時と或は三時と、二時と乃至一と、無間一切の時とであり、其の處は、若し壇淨室なければ、處に隨つて念誦を作せと言つて、一切處即ち密場であるから、瑜伽教王の中に、如來の稱讃し給ふ所は、時方處有ること無しと說き、末文に多法を好樂せず、或は衆の世務に迫られて、廣法を用ゐば闕せんかと恐るゝ者の爲に、四種の略行を示してゐるが、常の念誦には必ず前述の廣儀軌に依る可きで、此の略儀軌に執して、懈怠の心を生じてはならないと固く訓誡してある。

之を要するに、此の法は謂ゆる五百由旬內斷壞の法であるから、最深祕とする所であつて、昔東寺に於ては、此の法及び

一佛乘の如來の頂法のみ有つて、等しく諸佛の體を持せるをあらはす、是の故に智拳と名く」と云ひ、又「纔に智拳を結ぶを以て、能く諸の如來を攝して、入住處に隨順せしむ」とも述べてある。

次にこの智拳印のことを、亦は覺勝印とも名くと說いてある。卽ち、「三密纔に相應すれば、自身本尊に同じて、能く佛智に遍入し、成佛猶難からず。智と壽と力と年とを獲、一切に遍行することを得て、現に大菩提を證す、故に覺勝印と名く」と。

智拳印或は覺勝印は、「若し此の瑜伽を修すれば、設ひ現に無量の極重の諸の罪障を造るとも、必ず能く惡趣を超えて、剋疾に菩提を證す。此の最上甚深微密の義を顯さんが爲の故に、この大印に住せり」と言つてある如く、生佛一如、凡卽是佛の深義を結び顯したもので、卽身成佛の大事が此の一印にあるから、無所不至印、外五股印等と共に最極祕印とされて居る。

(ロ)勝身三昧耶　凡には頂輪王勝身三昧耶、如來勝身三昧耶と云ふ。是れ前者と同樣、大日金剛の祕印で、此の印は直に佛の身形を結び顯すから、勝身三昧耶と名けるのである。(諸儀軌稟承錄第十、二七右)故に文に、「心・額・喉・頂を印すれば、如來の四智を獲、自身を加持すれば、法界體性智、毘盧遮那佛の虛空法界身を成ず」と說き、或は「勝身三麼耶は、適に此の印を結ぶ時、一切の印已に成ず。十方三世の佛の所說の密印、盡く此の印の中に在り。又一切如來、同一聚に密合して、此の一法身を成ず、更に二相有ること無し。諸佛皆隨喜し、菩薩咸く敬奉し、天・龍・人・非人、攝伏せられて歸命す。是の如くの義に由るが故に、諸の印の助を待たずして、一をもて一切の印を成ず」と述べて、その深義が明してある。

印相は金剛合掌し、中指を並べ竪て、青蓮葉の如くし、二頭指を屈して、各二中指の背の上節に安く。而して大指は結跏趺坐、中指は佛身の體、名小は光焰、二掌は日月輪、腕は師子座を、夫々標幟したものとされて居る。

5　眞　言

眞言は種子と同じく勃嚕唵(bhrūṃ)の一字である。然るに文に、「此の毘盧遮那佛の三字の密言[(唵 oṃ)(僕 bhūḥ)(欠 khaṃ)]は、共に一字()にして異ること無し」と言つて、勝身三昧耶には、或は勃嚕唵の一字眞言を用ゐ、或は唵僕欠の三字を、六趣の凡身を轉じて、五智の佛體を成ずる密言として用ゐてある。

6　修　法

一字金輪を本尊として修する法を、一字金輪法と稱し、四種壇法の內では息災法に屬し、増福延命・歲末御修法・天災地妖・日月蝕等の時、之を修することに成つ

如く、この भ्रूं 字を भ र ऊ म の四字に分つて、觀ずべき意味が見えて居る。仍て此の字は भ (婆 bha) र (羅 ra) ऊ (嗚 ū) म (摩 ma) の四字合成であつて、婆は有(bhava)の義、之に損減(ūna)の鳴を加ふれば、三有を摧破する義、即ち應身(Nirmāṇa-kāya)であり、羅は塵垢(rajas)の義、之に損減の鳴を加ふれば、煩惱の塵染を斷除する義、即ち報身(Sambhoga-kāya)であり、摩は其の字相は吾我 (ma=ma) の義、字義は吾我不可得の意で、無我の大我は即ち法身 (Dharma-kāya) の大我であるから、此の種子に大日の三身を具して居ることが解る。その文に、「復一字を觀念して、其の字義を思惟せよ。諸法は本より無壞なり、塵も無く亦染も無く、淸淨なること虛空の如し。淸淨なること空の如くなるが故に、一切の法無壞なり、諸法不壞の故に、一切の法無染なり、諸法染に非るが故に、空も淨も不可得なり」と。次に其の功德を述べて、「字義を觀じて相應し、心理に緣住して、其の字を緣ぜず、同一體淸淨にして、法界に遍周し、無戲論の輪王の實相の定を獲得す。乃至一念に於て、淨心相應するが故に、無上の正智を獲。無始より積める罪障、頓に滅して餘有ること無く、十方の諸の如來、本尊皆現前して、希求する所の願を滿し、世間出世間、一切皆賜與し給ふ。乃至現生に於て、本尊の身を成就す」と。故に此の一字の種子眞言は、即身成佛の眞言と稱せられて居る。

3 三昧耶形

經の說文には、「復月輪の內より、大法輪を踊出せり、金剛の所成にして、輻輞皆鋒銳れり」と云ひ、或は又、「即ち此の智輪を觀ぜよ、變じて金輪王遍照如來の身と成る」と言つてあるから、輪であることは確である。而して金輪に八輻・十二輻・三十二輻・千輻等の異說ある中、本儀軌の金輪は、諸儀軌稟承錄第十（二六左）に依れば、八輻輪であることに成つて居る。

4 印契

本儀軌には、智拳印と勝身三昧耶との二印が示されてある。

（イ）智拳印　その智文に、「智拳印とは、謂ゆる中小名をもて拇を握り、頭指大の背に柱へて、金剛拳乃ち成ず。右を以て左の頭指の一節を握つて、面を心に當てよ、是れを智拳印と名く」と。是れ即ち、大日金輪尊の結び給へる智拳印である。金輪は自受用身(Svasambhoga-kāya)であるから、金剛界大日の智拳印とは聊か異つて、印の表を心に向はしむることに成つて居る。故に特に智向前印と呼ばれてゐる。(諸儀軌稟承錄第十、二六左)而して此の智拳印を釋して、「右を以て左の頭指を執ることは、十方の刹土の中に、唯

の內容を叙說することゝする。

1　形　像

五智の寶冠を戴き、智拳印を結ぶ。その說相は下の如くである。「卽ち此の智輪を觀ぜよ。變じて金輪王遍照如來の身と成る。形服素月の如くにして、一切の相好を以て、用て法身を莊嚴せり。金剛の寶冠を戴き、輪鬘を首の飾と爲し、衆寶莊嚴の具をもて、種種に身を校飾せり。智拳の大印を持して、師子座の日輪白蓮臺に處せり」と。卽ち、身相は金剛界大日如來と同じく、而も日輪中に住し給ふのである。是れ金剛界の智佛が下つて胎藏界の日輪三昧に住した相であつて、凡聖不二・迷悟一體・卽事而眞の深理を表したものであり、其の內證は無漏の果智生ずる時も、凡夫に異らざる義を顯して、智界果德の尊、理界因德の三昧に處し、形相其者が直に、謂ゆる父母所生肉身速證大覺位の玄旨を標幟したものである。

右の單獨の形像の外に、大日金輪を本尊とし、其の周圍に輪王の七寶及び佛眼尊を安置して建立した曼荼羅が明してある。此の曼荼羅は、金輪佛頂を主尊とするから金輪曼荼羅、若くは一字金輪曼荼羅と稱せられて居る。その說文は下の通りである。「心月の中の輪臍に、一字の金色なるを現ず、舌の端にも亦是の如し、則ち是の字輪と爲り、其の輪轉輪と爲る。色金の如き容を持し、七珍を備へて圍遶せり。寶輪寶は前に在り、餘の寶は右旋して置かれ、珠寶は無量の摩尼衆の圍遶せると與なり。次に寶女も亦、無邊の綵女と倶なり。馬寶及び象寶、主庫藏神寶、各自眷屬を領して、無量の衆待立せり。兵寶は金剛を持し、無能勝を師とせり。佛眼如來母は、寶と共に八方に居せり。世の金輪王の、七寶眷屬を具せるが如く、如來頂輪王も、佛の無上の寶を以て、眷屬と爲して圍遶せり」と。之を圖示すると、左の如くである。

主藏臣寶　主兵臣寶　佛眼尊
象寶　一字金輪　金輪寶　珠寶
馬寶　玉女寶

（覺禪鈔第一所載）

主藏臣寶　主兵臣寶　佛眼尊
象寶　一字金輪　金輪寶
馬寶　玉女寶　珠寶

（曼荼羅集所載）

2　種子

此の尊の種子が勃嚕唵（[illegible] bhrūṃ）の一字であることは、諸經軌の一致する所であるが、本儀軌には其の字輪觀の許に、恰も [illegible] 字を [illegible] の四字と爲るが

に面けて安じ、瑜伽者は東に面ひ」とあるから、そこに胎藏法の思想も織込まれてゐることが窺はれる。何となれば、胎藏曼荼羅は因曼荼羅であるから、東の方に安置し、阿闍梨は座を西の方に設けて、東に向つて念誦し、金剛界は果曼荼羅であるから、胎藏曼荼羅に相對して、西の方に安置し、阿闍梨は東方に坐して、西に面つて念誦するを常とするからである。

次に會處に就て考察するに、忉利天宮でないことは、「忉利天宮の如くせよ」とあるに依つて明かである。然し他に會處と認むべき所がないから、同一系統に屬する經軌と比較對照して、推定を下すより外に途がないのである。そこで一字頂輪王瑜伽經を見るに、本經には「忉利天宮の慾樂を受け、意に隨つて快樂を得て、餘の世間と相雜る」(正藏、一九、三二五、B)、「他化自在宮に遊んで、意を恣にして安樂自在に、乃至意の樂ふ所のまゝならん」(同上)、及び「能く須彌頂に遊んで、一切世間も見ること能はず」(同上)と言つて、以上の三處が明してある。而して第一の忉利天說は、一字頂輪王念誦儀軌に、「我れ今、忉利天宮會、釋迦牟尼如來所說、無比力超勝世間出世間眞言上上、一切佛頂主宰一字頂輪王念誦儀則に依る」(正藏、一九、三〇七、C)と云ひ、又上軌と同本の題下の註に、「忉利天宮所說の經に依つて譯す」(正藏、一九、三一〇、C)とあるから、有力な論據を與へるものであるが、然し前述の理由と、更に「忉利天宮と雖も、亦見ること能はず」(正藏、一九、三二五、B)との文に依つて、忉利天宮でないことは確である。第二の他化自在天宮說も、亦他に何等記することなく、採用するには餘りに薄弱である。次に第三の須彌盧頂に關しては、上揭の文の外に、「亦能く須彌四天王下層の四藥叉の世界に遊戲して、無量の有情の利益を作し、正道を失して曠野に漂ひ、賊王水火等に逼らるゝものに、是の悲憫の心を起して、一切の繋縛の處に於て、我れ當に成就し已つて、皆解脫を得しむべし」(正藏、一九、三二五、B)とあるから、以上の三說中、此の須彌盧頂を以て會處と推定することが、最も妥當の樣に想はれる。且つ一字佛頂輪王法を示す初期の諸經の多くが、釋迦牟尼佛が一字頂輪王の三昧に入つて、諸魔を降伏する爲に說かれたものであることは、吾人の想像を大に助長せしむるものである。若し果して然りとすれば、一字頂輪王瑜伽經は第四會の所說となる。(金剛頂瑜伽經十八會指歸、正藏、一八、二八四C、參照)從つて當經と同一の思想內容を有する本儀軌も、亦復第四會の所說と推測しても、敢て不可なからうと信ずる。

本儀軌は全部五字句の偈頌から成つて居るが、便宜上、左の數項に分けて、其

金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌解題

一　本軌の內容概觀

本儀軌は略して一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌、金輪時處軌、時處軌とも稱し、不空三藏の譯（天寶五—大曆九746—774 A. D.)で、本邦へは空海（錄外774—835 A. D.)、圓仁(794—864 A. D.)、圓珍(814—891 A. D.)の三師に依つて、請來されたことに成つて居る、而して空海錄外の請來に就て、諸儀軌稟承錄第十には、「進官の錄に載せざることは、即身成佛の深旨此の中に在り、若し官家に進むる時は、自由し難きが故に、祕して之を殘し置くなり」(二六右)と述べてある。右の文で明かに知らるゝ如く、或は一字金輪の一字を深祕に解釋して、「纔に奇特の身を現ずるに、諸の聖衆皆沒す、勝絕不共にして、唯佛一體なることを顯すが故なり」と說き、或は「此の三昧を修する者は、現に佛菩提を證す」などと言つて、本儀軌は大日金輪に就て至極大切の法であり、又即身成佛の深旨を說ける祕經であるから、大師は即身成佛義の中に、二經一論八箇の證文の一として、今の「此の三昧を修する者は、現に佛菩提を證す」の二句を最初に引用し、更に後に、「此の毘盧遮那佛の三字の密言は、共に一字にして異ること無し、適に印密言を以て、心を印ずれば、鏡智を成じて、速に菩提心金剛堅固の體を獲、額を印ずれば、當に知るべし、平等性智を成じて、速に灌頂地の福聚莊嚴の身を獲、密語を以て、口を印ずる時は、妙觀察智を成じ、即ち能く法輪を轉じて、佛の智慧身を得、密言を誦じて、頂を印ずれば、成所作智を成じて、佛の變化身を證し、能く難調者を伏す、此の印密言に由つて、自身を加持すれば、法界體性智、毘盧遮那佛の虛空法界身を成ず」の謂ゆる印成五智の法門も引證して居られる。本儀軌は其の題號に金剛頂經の四字を冠し、或は「諸佛轉輪王、大菩提を現證して、名を金剛界に受け給ふ、敎勅輪を轉ぜんが爲に、自の頂より大金輪明王を流出し給ふ」と云ひ、或は「我れ金剛頂瑜伽大敎王に依つて、瑜伽を修する者の爲に、此の微妙の成佛の理趣門を纂集す」と說き、又作法中に、四內供印、四智讚等が明してある點から推察すれば、金剛界法に屬するものであることは、容易に肯首されるのであるが、然も曼荼羅を泥拭して、本尊を安置する文に、「若し本尊の像あらば、室の內に西

覆ふ。念誦の時は覆帛を去り、瞻禮供養し、念誦畢れば却つて帛を以て覆ひ愼んで人をして見せしむること勿れ。何を以ての故にとならば師從り儀軌畫像の法を受くればなり。若し轉た人の與に像を呈せば魔に便を得らる。當に須く祕密にすべし。

七倶胝佛母所說准提陀羅尼經（終）

を以て用ひて壇を塗る。此の法を作す時には身に黑衣或は青衣を著け、面を南に向け左脚をもつて右脚を押して蹲居坐す。本尊を黑色に觀じ、臭香氣無く黑色或は青色の花を取つて供養す。供養する所の飮食香花菓子燈燭地等は並に皆黑色或は青色なり。月の二十三日從り月の盡日に至り、午時中夜の二時を取りて念誦す。夜は護摩を作す、眞言に曰く。

叶者禮主禮准泥令某甲跛囉二合喃伽多野吽發吒

次に准泥佛母畫像法を說く。截らざる白疊の毛髮を去れる者を取りて淨壁に幀り、先づ應に壇を塗るべし。閼伽飯食を以て力に隨つて供養す。畫師は應に八戒齋を受け畫像を淸淨にすべし。其の彩色中に皮膠を用ふること勿れ。新器中に於て良を調へて應に准提佛母の像を畫くべし。身は黃白色にして結跏趺坐し、蓮花上に坐す。身は圓光を佩び輕縠を著け、十波羅蜜菩薩の衣の如し。上下皆白色に作る。復天衣角絡瓔珞頭冠有り、臂環は皆螺釧を著け、檀慧は寶環を著く。其の像面には三目有り、十八臂なり。上二手は說法の相を作し、右第二手は施無畏を作す。第三手は劒を執り、第四手は寶鬘を持ち、第五手は掌に倶緣菓あり、第六手は鉞斧を持ち、第七手は鉤を執り、第八手は金剛杵を執り、第九手は念珠を持つ。左二手は如意寶幢を執り、第三手は開敷紅蓮花を持ち、第四手は[九四]軍持、第五手は羂索、第六手は輪を持ち、第七手は[九五]商佉、第八手は賢瓶、第九手は掌に般若に梵夾あり。蓮花の下に水池を畫き、池中に難陀龍王塢波難陀龍王あつて蓮花座を拓く。左邊に持誦者を畫く。手に香爐を執つて聖者を瞻仰す。准提佛母は持誦の人を矜愍し、眼下に顧視す。上に二淨居天子を畫く。一を倶素陀天子と名づく。手に花鬘を持ちて下に向ひ、空を承けて來り、聖者を供養す。

像を畫き已り、力に隨ひ[九六]僧次をもつて七僧を請ひ供養し、光明を開かんことを請ひ、呪願讚歎す。像の下に於て應に[九七]法身緣起の偈を書くべし。像を精室に將うて祕密に供養し、帛を以て像を

【九四】軍持(Kuṇḍikā)水瓶なり。

【九五】商佉('Saṅkhaḥ)螺具なり。

【九六】僧次は僧の席次。衆僧を請來するに當り、その數を撰決により定めず、位次によリ定む。

【九七】偈云。諸法從緣起、如來說是因、彼法因緣盡、是大沙門說。

唵者禮主禮准泥（某甲をして若し他人の爲ならば彼の名字を稱へ念誦せしむ）扇底矩嚕娑嚩二合引賀

[八九]布瑟置二合迦法は延命、官榮、伏藏、豐饒、聰慧、聞持不忘、藥法成就、金剛杵等成就、或は師子象馬の類を作るを求むるに、眞言を以て加持すること三たびせば相現ず。上中下の所求に隨つて果を獲ること[九〇]悉地に廣く說くが如し。持明仙を求めて阿蘇囉窟及び諸八部鬼神窟に入らんと欲し、入るを求むる者は皆得。及び地位神通を證し、[九一]二種の資糧圓滿を求めて速に無上菩提を成ずるを增益法と名づく。此の法を作す時には身に黃衣を著し、面は東に向けて結跏趺坐し、本尊を黃色に觀じ、供養する所の香花飲食菓子燈燭地等は並に皆黃色なり。月の八日從り十五日に至り、日に三時念誦し、夜は護摩を作す。眞言に曰く。

唵者禮主禮准泥令某甲布瑟徵二合矩嚕娑嚩二合賀

[九二]伐施迦囉拏法は若し一切人の見者をして歡喜心を發さしめんと欲し、若しは男若しは女天龍八部藥叉女を攝伏鉤召し、及び鬼神を攝伏し、諸怨敵有つて不饒益の事を作すに皆心を廻して歡喜せしめ、諸佛護念加持するなり。是れを攝召敬愛法と名づく。此の法を作す者は身に赤衣を著け、面を西に向け二膝を竪て脚を並ぶ。普賢坐と名づく。本尊及び供養する所の香花飲食菓子燈燭地等を觀ずるに並に皆赤色なり。十六日從り二十三日に至り、日に三時念誦し、夜は護摩を作す。攝召の眞言に曰く。

唵者禮主禮准泥令某甲嚩試矩嚕娑嚩二合賀引

[九三]阿毘遮嚕迦法は五無間を犯し、方等大乘を謗り、佛性を毀滅し、君主に背逆し、正法を惑亂せる。是の如きの人に於て深く悲愍を起し、應に降伏法を作すべし。驢糞を以て、或は駝糞、或は燒尸灰

【八九】布瑟置迦(Puṣṭikaḥ)增益、增長、長榮の義。

【九〇】蘇悉地羯羅經分別成就品第十八。

【九一】菩薩佛果を證せんとする時福智の二法その資糧と爲す。

【九二】伐施迦囉拏 (Vaśīkaraṇa)敬愛と譯す。

【九三】阿毘遮嚕迦(Abhicāraka)調伏、降伏等と譯す。

無取捨に由るが故に卽ち平等無言說を得。

平等無言說に由るが故に卽ち無因無果を得て般若と相應し所得無し。以て方便と爲して勝義の實に入れば則ち法界直如を證す。此を以て〔八二〕三摩地念誦畢已ると爲す。

應に根本印を結ぶべし。

次に澡浴の印を結べ。

次に〔八三〕五供養の印を結べ。

次に讃を誦して歎じ、閼伽を獻ず。

次に〔八四〕阿三麼擬儞の印を結び、左轉一匝して解界す。

次に寶車輅の印を結び大母指を以て外に向け中指の頭を撥して聖者を送り本宮に還し奉る。奉送の眞言に曰く。

唵者禮主禮准泥蘗車蘗車婆誐嚩底娑嚩二合婆嚩南布娜囉引誐麼那野娑嚩二合引賀

次に三部の三麼耶印を結び各眞言を誦すること一遍、佛を禮すること前の如し。懺悔し隨喜し勸請發願して無上菩提に廻向す。隨意經行し大乘經典花嚴大般若等の經を轉讀し、塔像を印し、舍利を浴し、右に旋遶し、〔八五〕六念を思へ。此の福聚を以て自ら求むる所の悉地に廻向す。

次に息災增益敬愛調伏の四種法を說く。

〔八六〕扇底迦法は罪を滅し、障を轉じ、災害を除き、鬼魅疾病、囚閉枷鎖疫病國難、水旱不調、蟲苗稼を損じ、〔八七〕五星本命を淩逼すること悉く皆除滅し、煩惱解脫す。是を息災法と名づく。此の法を作す時、白衣を著て面は北を向き、脚を交へ膝を竪つ、〔八八〕吉祥坐なり。本尊を觀ずること白色にして、飲食菓子香花燈燭地等を供養す。悉く皆白色なり。月の一日從り八日に至り、日に三時念誦し、夜は護摩を作す。息災の眞言に曰く。

〔八二〕五種念誦、四種念誦の一なり。定心に住して心月中に眞言の文字を觀ず。

〔八三〕五供養。塗香、華鬘、燒香、飯食、燈明を云ふ。

〔八四〕阿三麼擬儞印。火院印なり。

〔八五〕六念。念佛、念法、念僧、念施、念戒、念天を云ふ。

〔八六〕扇底迦（Śāntikaḥ）息災と譯す。

〔八七〕五星、
歲星――木
熒惑――火
太白――金
辰星――水
鎭星――土
本命、人の生年により北斗七星の一をその人に屬する本命星とす。

〔八八〕吉祥坐。息災法相應の坐なり。祕藏記には箕坐と云ふ。

を炳現し、滿月の皎潔なる光明の如く、大精進を起し決定して證を取るべし。若し能く懈怠せず、功を專にせば必ず當に本源清淨の心を見るを得べし。圓明中に於て唵字を想ひ、餘の八字は右旋して圓明上に於て布列す。定中に於て須く眞言の字を見ること分明なり。既に散動せずして定を得ば、即ち般若波羅蜜と相應す。即ち圓明の月輪を畫け。

次に應に字母種子の義を思惟すべし。

唵字は是れ三身の義、亦是れ一切法本不生の義なり。

者字は一切法不生不滅の義なり。

禮字は一切法相無所得の義なり。

主字は一切法無生滅の義なり。

禮字は一切法無垢の義なり。

准字は一切法無等覺の義なり。

泥字は一切法無取捨の義なり。

娑嚩二合字は一切法平等無言說の義なり。

賀字は一切法無因の義なり。

一切法本不生に由るが故に即ち不生不滅を得。

不生不滅に由るが故に即ち相無所得を得。

相無所得に由るが故に即ち無生滅を得。

無生滅に由るが故に即ち無垢を得。

無垢に由るが故に即ち無等覺を得。

無等覺に由るが故に即ち無取捨を得。

次に[七四]泥字を想ひ、右左の兩髀上に安き、小指を以て觸る。

次に[七五]娑嚩二合字を想ひ、右左の兩脛上に安き、小指を以て觸る。

次に[七六]賀　字を想ひ、右左二足掌に安き、小指を用ひて觸る。

眞言を想布し、印を結び加持するに由るが故に行者の身は卽ち准泥佛母の身と成り、一切の業障を滅除し、無量の福德吉祥を積集して其の身は金剛不壞の體と成る。若し能く常に專注し觀行せば一切悉地皆[七七]見前するを得て速に無上正等菩提を證す。

[七八]次に根本印を結び、根本眞言を誦すること七遍、頂上に印を散ず。卽ち菩提子の念珠を取る。一百八を具し、法に依つて貫穿す。卽ち塗香を以て其の珠上に塗り、二手を以て掌中に珠を捧げて心に當て、眞言七遍を誦して念珠を加持す。眞言に曰く。

唵尾嚧引遮那引麼羅娑嚩二合引賀引

加持し頂戴して心口に是の願を作して言く、我れ今念誦せんと欲す。唯願くは本尊諸佛菩薩加持護念したまへ。願くは速に隨意所求悉地圓滿を得しめたまへと。然る後に左手の無名指大指を以て珠を承け、右手は大指無名指を以て珠を移す。手は說法相の如し。當に心の前に於て珠を持ちて念誦すべし。其の聲は不緩不急にして心專注して緣を異にせず。自身は本尊の身に同じく相好具足すと觀ず。又身前の壇中に於て七倶胝佛母は眷屬と與に圍遶し、了了分明に對坐すと觀じ、娑嚩二合賀の字を稱ふる每に同時に一珠を移す。或は一百八或は一千八[七九](十)をもつて念誦の遍數と爲し、常に限定を須ゆ。若し一百八を滿さずんば卽ち悉地を求むる遍數に充たず。念誦を畢已り、珠を掌中に蟠げ、頂戴し發願して是の願を作して言く。我が念誦の功德を以て一切衆生の修する所の眞言行は上中下の悉地を求むるに速に成就を得んことを。

[八〇]珠を篋中に安き、卽ち[八一]定印を結び端身閉目して心を澄し意を定め。當に胸臆に於て身內に圓明

【七四】nahe
【七五】svā
【七六】ha
【七七】見、別本現に作る。
【七八】初めに加持念珠、次に正念誦。
【七九】別本十字あり。
【八〇】字輪觀。
【八一】定印。彌陀定印なり。二手外縛して仰け、二頭指の中節を屈して相背け竪て合せ、二大指相柱へて二頭指の端を押す。

娑普二合砧悉體二合怛嚩二合引進底多麼囉貪二合去瑟砧二合 李佉惹曩頷惹以反下同 那儞底薩帝知曳反曩跛囉二合曩跛囉二合庫舞二合地𠼝囉始嚟野薩怛梵帝知曳反囉弭焰二合引惹閉去怛母二合頷帽引儞儞曳反嚩日哩二合 擔枳邏馱淰二合 素囉哩補婆嚩南跛囉二合 吠捨野底阿引哩野二合嚩路引枳帝皤悉蘗底諾僧捨間薩怛多惹播引多 半音呼多諾反 曩悉底二合 薩怛梵三合引曩那娜惹蘗底緊旨儞也二合羯底二合毘藥二合壹底娑迦羅播引跛曩引 舍頷婆誐嚩底跛恥多麼引怛囉二合悉地迦哩布囉野麼努引 囉貪冥臬娜底曩怛梵二合 娑麼二合 嚩迦室子二合多半音

次に本尊陀羅尼布字法を說く。

頂從り足に至つて一一眞言の字を觀ぜよ。屈曲分明にして光明を流出し、六道四生に輪廻する有情を照し、深く悲愍を起し安樂を施與す。陀羅尼の九字を用ひて行者の身に布列す。即ち[六六]如來印を以て八大菩薩の加持する所の身を成ず。若し息災、增益、降伏、敬愛を作さば、四種法に隨つて所謂る白黃黑赤なり。悉地を成辦す。

即ち布字の印を結べ。二手內に相叉へ、二大指二頭指二小指相合し即ち成ず。

[六七]唵字を想ひ頂に安き、大母指を以て頭上に觸る。

次に想へ、兩目[六八]童人の上に倶に[六九]者字を想へ。復大母指を以て右左の眼上に觸る。

次に[七〇]禮字を想ひ、頸上に安き、大母指を用ひて觸る。

次に[七一]主字を想ひ、心に當て大母指を以て觸る。

次に[七二]禮字を想ひ、左右の肩上に安き、大母指を以て觸る。

次に[七三]准字を想ひ、臍上に安き、大母指を以て觸る。

【六六】如來印。金剛智譯に曰く、即ち想へ、自身猶し釋迦如來の若く、三十二相、八十種好、紫磨金色、圓滿身光ありと。

【六七】Oṁ

【六八】童、別本、瞳に作る。

【六九】ca

【七〇】le

【七一】cu

【七二】le

【七三】śu

り、本尊、諸佛菩薩の一切の聖衆に供養すと。此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、當に普く法界に遍じて三摩地成就するを得べし。

次に飲食の印を結べ。

前の根本印に准じ、左頭指を以て二大指の頭を捻じ即ち成ず。眞言を誦すること三遍、眞言に曰く。

唵准娑嚩二合引賀引

想へ、此の印より無量の光明を流出し、一一の光明道に無量の天妙種々飲食雲海有り、本尊、諸佛菩薩の一切の聖衆を供養し、當に[六三]法喜禪悅食、三解脫の最勝味、[六四]三摩地成就を得べし。

次に燈印を結べ。

前の根本印に准じ、二頭指を以て各二大指の頭を捻じ即ち成ず。眞言を誦すること三遍、眞言に曰く。

唵泥娑嚩二合引賀

想へ、此の印從り無量の光明を流出し、一一の光明道に無量の種々の七寶燈燭雲海有り、本尊、諸佛菩薩の一切聖衆を供養すと。當に般若波羅蜜光明あり、[六五]五眼清淨を得べし。

次に讃を誦して歎ぜよ。

阿嚩怛囉左覩囉娜二合舍引囉馱二合娑壓二合囉哩補句致鉢囉二合拏壓跛娜尾唎帝阿者禮怛齡娑哩素儞祖禮悉翰思准泥薩囉二合悶底南引娑嚩捨壓儞娑嚩二合引罕引帝薩跛囉二合拏吠怛儞也二合他引訖灑二合囉引拏藥帝阿尾儞多薩怛嚩二合拏壓頞囉二合臬那路引迦怛囉二合野引囉他二合迦唎囉訖多二合引囉尾二合引那戍引鼻頞播引怛囉二合迦囉鐸訖使二合頞

【六三】法喜禪悅食、法喜食とは愛樂の大法を以て法資を得て道種を長じ、心に歡喜を生じ、世味を嗜まず、常に正念を持するを云ひ、禪悅食とは禪定を得るに由て自ら資けて慧命を長養し、道品圓明にして、正念現前し、心常に喜樂、世味に貪せざるを云ふ。

【六四】三解脫、空解脫、無相解脫、無願解脫を云ふ。

【六五】五眼。肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼を云ふ。

べし。

次に塗香の印を結べ。

前の根本印に准じ、二大指を以て右頭指の下節に博著して卽ち成ず。眞言〔六〇〕（を誦すること）三遍眞言に曰く。

唵禮娑嚩二合引賀引

想へ、此の印從り無量の光明を流出し、一一の光明道に無量の天妙の塗香秣香雲海有つて本尊、諸佛菩薩の一切聖衆に供養すと。此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、當に一切如來の〔六一〕戒定慧解脫解脫知見の香を證すべし。

次に花印を結べ。

前の根本印に准じ、二大指を以て左頭指の下節に博著し卽ち成ず。眞言を誦すること三遍、眞言に曰く。

唵主娑嚩二合引賀引

想へ、此の印より無量の光明を流出し、一一の光明道に無量の天妙雲海有り、本尊、諸佛菩薩の一切の聖衆に供養すと。此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、當に大慈三摩地成就するを得て能く無邊の衆生を利樂し、諸災難は身に著せざるべし。

次に燒香印を結べ。

〔六二〕（前の）根本印に准じ、右頭指を屈して二大指の頭を捻じ卽ち成ず。眞言を誦すること三遍、眞言に曰く。

唵禮娑嚩二合引賀

想へ、此の印從り無量の光明を流出し、一一の光明道に天妙燒香雲海を無量に和合し倶生する有

〔六〇〕別本誦字あり。

〔六一〕香は熏聞を以て義と爲すが故に五分法身の香を感證す。

〔六二〕別本前字あり。

二手内に相叉へ、二中指を竪て頭相著け、二頭指を以て二中指の背を捻じ、二大指を側めて二頭指の根下に附け即ち[五六]根本印を成ず。前の根本印に准じて微に二大指を屈して掌に入れ即ち閼伽印を成ず。眞言を誦すること三遍、眞言に曰く。

唵者禮主禮准泥遏鉗鉢羅二合底蹉婆誐嚩底丁曳反娑嚩二合引、賀引

行者は聖衆を思惟するに了々分明なり。自身は諸佛聖衆の足下に在つて手に七寶の閼伽器を持ち、香水を盛り聖衆の足を浴すと想へ。閼伽香水を獻ずるに由つて行者の[五七]三業清淨にして煩惱の垢を洗滌し、業障消滅す。

次に蓮華座の印を結べ。

前の根本印に准じ、二大指を並べて身に向つて竪て、此の印從り無量の師子座を流出し、一切聖衆に獻じ奉るに是の諸聖衆は各々皆坐したまふと想ひ運らせ。眞言に曰く。

唵迦麼邏娑嚩二合引賀

座の印を結び眞言を誦し聖衆に獻じ奉るに由るが故に、行者は當に十地滿足するを得、金剛の座を得べし。

[五八](次に澡浴の印を結べ)

前の根本印に准じ二大母指の頭を以て二中指の中節を捻じ即ち成ず。眞言を誦すること三遍、眞言に曰く。

唵者娑嚩二合引賀引

想へ、此の印從り無量の光明を流出し、一一の光明道に無量の七寶賢瓶有りと。天妙香水を滿して一切の聖衆に灌注し澡浴すと想へ。復想へ、空中に無量の天樂有り、本尊、諸佛菩薩の一切聖衆に供養すと。此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、行者は久しからずして當に[五九]法雲地を證す

【五六】根本印、准提佛母の根本身印なり。

【五七】三業、身口意の三業なり。

【五八】別本には次結澡浴印の文あり。

【五九】法雲地、第十地なり。菩薩の修行の功滿じ、唯務めて衆生を利益し、大慈雲の如く、普く一切を覆ふが故に。

すこと三匝して是の思惟を作せ。所有る障者、[五二]毘那夜迦、諸惡鬼神は遠く走りて去る。來る所の聖衆は[五三]本三摩耶を越えたまはずして大悲をもつて住り、願くは加護を垂れたまへと。

曩莫三滿多勃馱引南引唵戶魯戶嚕戰拏里麼引蹬者娑嚩二合引賀

次に牆界の印を結べ。

前の[五四]地界の印に准じ、右頭指を屈し、左頭指を展べ、右に旋すこと三匝せよ。心に隨つて近遠即ち金剛堅固の城と成る。諸佛菩薩すら尙ほ違越したまはず、何ぞ況んや諸餘の難調伏者、毘那夜迦及び毒蟲利牙爪の者は輔近すること能はず。眞言に曰く。

唵准儞儜鉢囉二合迦囉耶娑嚩二合引賀引

次に上方網界の印を結べ。

前の牆界の印に准じ、左頭指を展べ、右は左を押へ中節に當て相叉へて即ち成す。此の眞言を誦すること三遍、眞言に曰く。

唵准儞儜半惹囉娑嚩二合引賀

眞言を誦し、印を結び加持するに由るが故に、即ち金剛堅固不壞の網となる。

次に火院密縫の印を結べ。

左手を以て右手を掩ひ背相重ね、二大指を直く竪てて即ち成す。眞言を誦すること三遍右に旋すこと三匝し、金剛牆の外に金剛火有つて圍遶すと想へ。眞言に曰く。

唵阿三莽擬伽以反儞吽引發吒半音

此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、大結護密縫を成じ、諸魔の入るを被らず。

次に[五五]閼伽の印を結べ。

【五二】毘那夜迦(Vināyakah)常隨魔と譯す。
【五三】本三摩耶、聖衆各の本誓。
【五四】地界印、地界橛の印なり。
【五五】閼伽(Argha)水、香水等と譯す。

皆受用を得。

次に寶車輅の印を結べ。

二手內に相叉へて掌を仰け、二頭指横に相拄へ、二大指を以て頭指の根下を捻じ、七寶車輅を想へ。佛部の使者は七寶車輅に駕御し、空に乘つて去り、[四九]色界頂の阿迦尼吒天の毘盧遮那佛の宮殿中に至る。眞言七遍を誦せよ。眞言に曰く。

唵覩嚕覩嚕吽引

眞言を誦し、印を結び加持するに由るが故に、七寶車輅は色界の頂に至る。准提佛母幷に八大菩薩及び諸聖衆は眷屬に圍遶せられて七寶車輅に乘じたまふ。

次に請車輅の印を結べ。

前の印に准じ、大指を以て身に向けて中指を撥し、卽ち成ず。眞言七遍を誦せよ。眞言に曰く。

曩莫悉底哩二合野地尾二合迦南一引恒他引蘖多引南二唵嚩日囉二合擬伽以反羯哩灑二合也娑嚩二合引賀

眞言を誦し加持するに由るが故に、聖衆は本土從り來つて道場の空中に至つて住まりたまふ。

次に請[五〇]本尊の印を結べ。

車輅より道場に下降したまふ。前の[五一]第一根本印に准じ、二大指を以て身に向けて招く。眞言を誦すること三遍。眞言に曰く。

唵者禮主禮准泥翳醯曳二合呬婆誐嚩底丁以反娑嚩二合引賀

次に無能勝菩薩の印を結び障者を辟除す。

二手右は左を押へ內に相叉へて拳を作り、二中指を竪て頭相合し卽ち成ず。身を遶つて左に旋ら

[四九] 色界頂、色究竟天なり。梵に阿迦尼吒(Akaniṣṭhaḥ)と云ひ、法身說法の會場なり。

[五〇] 本尊、准提佛母なり。

[五一] 第一根本印、准提佛母根本身印なり。卽ち二小指二無名指を內に相叉へ、二中指を直く竪てゝ頭相着け、二頭指の頭を二中指の上節の側に附け、二大指各二頭指の側に附く。

二手外に相叉へ、二頭指二大指並へ直く竪て卽ち成す。佛母[四五]心眞言を誦し、身の五處を印す。所謂る額、次に右肩、次に左肩、次に心、次に喉なり。頂上に散ず。眞言に曰く。

唵迦麼黎尾麼黎准泥娑嚩二合引賀引

護身印を結ぶ時、大慈心を起し、遍く六道四生を緣じ、一切有情に[四六]大誓を披らせんと願ひ、堅固の金剛甲冑を莊嚴し、速に無上正等菩提を證す。

次に地界橛印を結べ。

二手內に相叉へ、二大指、二頭指、二小指を竪て、各相合す。左の頭指を屈して鉤の如くし、三たび大母指を掣きて地を指して印成す。一たび掣いて眞言を誦すること一遍。眞言に曰く。

唵准儞儞枳邏野婆嚩二合引賀

此の印を結び眞言を誦し、地界を加持するに由るが故に、下水[四七]際に至つて金剛座の如く、天魔及び諸障者は惱害を爲さず。少しく功力を加ふるに速に成就を得。

[四八]持誦者は次に應に壇の中心に於て八葉の大蓮華を想へ。上に師子座有り、座上に寶樓閣有り、諸の瓔珞繒幡幢蓋を垂れ、寶柱行列し、妙天衣を垂れ、香雲を周布し、普く雜花を雨し、諸音樂を奏し、寶瓶閼伽天妙飮食あり、摩尼をもつて燈と爲す。如し曼荼羅無きも、但し空中に於て觀想して卽ち成ず。此の觀を作し已つて應に此の偈を誦すべし。

我が功德力と、如來の加持力とを以て、及び法界力を以て、普く供養して住す。

此の偈を誦し已り、卽ち大虛空藏菩薩の眞言を誦して曰く。

唵誐誐曩三婆嚩嚩日囉二合解引

此の眞言を誦し加持するに由るが故に、想ふ所の供養の具は眞實と異ること無く、一切の聖衆は

【四五】心眞言、諸尊の眞言には大、中、小の三種あり、中眞言を心眞言と云ふ。

【四六】大誓、菩薩の四弘誓なり。

【四七】水際、水輪際なり。

【四八】道場觀を說く。

相好分明にして目前に對ふが如し。眞言に曰く。

唵怛他引蘖都納婆二合嚩引野娑嚩二合引賀

此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、卽ち一切如來を警覺し、悉く當に行者を護念し加持すべし。光明を以て照觸し、所有る罪障は皆消滅するを得、壽命長遠にして福慧增長す。佛部の聖衆は擁護し歡喜し、生生世世に諸惡趣を離れ、蓮花より化生して速に無上正等菩提を證す。

蓮花部三摩耶印

二手を以て虛心合掌し、二頭指二中指二無名指を散じ開き、屈して蓮花形の如くし、印を安じて心に當て眞言七遍を誦し、觀自在菩薩の相好具足すと想へ。頂の右に於て散ず。眞言に曰く。

唵跛娜謨二合引納婆二合嚩引野娑嚩二合引賀引

此の印を結び眞言を誦するに由るが故に、卽ち觀自在菩薩等の[四三]持蓮花者を警覺す。一切菩薩の光明照觸して所有る業障は皆悉く除滅し、一切菩薩は常に善友と爲る。

金剛部三摩耶印

左手を以て翻して外に向け、右手の掌を以て背けて左手の背に安き、左右の大小指を以て互に相鈎け、金剛杵の形の如くし、心に當て安き、金剛手菩薩を想へ、眞言を誦すること七遍、頂の左に印を散ぜよ。眞言に曰く。

唵嚩日嚧二合納婆二合嚩引野娑嚩二合引賀引

此の印を結び及び眞言を誦するに由るが故に、卽ち一切金剛聖衆を警覺し、加持擁護して所有る罪障皆除滅するを得、一切の苦痛は終に身に著せず。當に金剛堅固の體を得べし。

[四四]次に第二根本印を結べ。護身に用ふ。

【四三】持蓮花者、蓮華部の聖衆。

【四四】佛母の心眞言及び印を以て護身を爲す。

汝天の親護者、諸佛道師に於て、殊勝の行を修行し、[三八]地波羅蜜を淨む。魔の軍衆を破るが如く、釋師子は世を救ひ、我も亦魔を降伏し、我は曼荼羅を畫く。

地天の眞言を誦して曰く。

曩莫三滿多　沒馱引南引畢哩二合體以他及微曳二合娑嚩二合賀

偈を誦して加持し已り、然る後に檀香を以て[三九]九箇の聖位に塗り、滿月の如く新淨の供具、金銀熟銅商佉貝玉石瓷木等の新器を以て諸飯食及び好香草燈燭閼伽香水を盛り、力に隨つて有る所をもつて布列し供養す。若し在家出家菩薩にして成就を求むる者は應に自ら誓つて菩提心戒を受くべし。眞言に曰く。

唵沒引地止多母怛跛二合引娜野弭

菩提心は一切の我執を離れ、[四〇]蘊處界を離れ及び能取所取を離れ、法に於て平等なり。自心は本より不生にして自性空なるが故に。過去一切の佛菩薩の菩提心を發せるが如く、我も亦是の如し。此を自ら誓つて菩提心戒を受くと名づく。一遍誦するに由つて勝義諦を思惟し、無量無邊無爲の功德を獲得し、三業を莊嚴して乃し菩提道場に至るまで其の複間斷すること無し。速に一切業障を滅し眞言速に成就を得、本尊現前すること花嚴入法界品に慈氏菩薩が善財童子の爲に菩提心の功德を說くが如し。自ら菩提心戒を誓ひ已り、全跏半跏隨意にして坐し、端身閉目して卽ち定印を結べ。空中に准提佛母は七倶胝佛の與に圍遶せられ虛空に遍滿すと想へ。定中に一切諸佛及び准提佛母を禮し、然る後に[四一](香)を以て手に塗り、[四二]應に契印を結ぶべし。

佛部三摩耶印二手虛心合掌、二頭指を開き屈し、二中指の甲の下の第一節の側を輔け、二大指は各二頭指の根の下に附して卽ち成ず。心に當て眞言七遍を誦し、如來の三十二相八十種好を想へ、

【三八】地波羅蜜。十地に於て修する波羅蜜の義、卽ち十波羅蜜なり。

【三九】九箇聖位。覺禪鈔第二十五(正藏、圖像第四卷九〇七頁)には九箇の聖位は誰なるや之を尋ぬべしと。準提經會釋卷上には、準提佛母及び八大菩薩なりとし、八大菩薩は觀自在、彌勒、虛空藏、普賢、金剛手、文殊師利、除蓋障、地藏なりと。

【四〇】蘊、處、界。五蘊、十二處、十八界なり。

【四一】香字別本にあり。

【四二】以下三部三摩耶の印、眞言。

を得て日月に齊し。

又法あり、[二九]三道寶階により天從り下りたまへる處の寶塔に於て行者乞食し旋遶して倶胝遍誦するに卽ち[三〇]無能勝菩薩願を與へて爲に妙法を說き、無上菩提道を示すを見る。或は[三一]訶利底母を見るに此の人を將ゐて自らの宮中に入り、長年藥を與へ、童に還り年少端正にして喜ぶ可く、[三二]伏藏を獲得すること大人許可す、應に廣く三寶を利益すべし。一切菩薩安慰し、其の正道を示し乃し菩提道場に至るを得。

又法あり、若し人宿善根無く、菩提種無く、菩提行を修せざるも、纔に一遍誦せば菩提法芽を生ず、何に況んや常に能く念誦し受持するをや。

七倶胝准提陀羅尼念誦儀軌

若し此の陀羅尼を修習し成就を求むる者有らば、先づ須く澡浴し、應に淨衣を著くべし。道場を嚴飾し本尊を安置す。力に隨つて辦ずる所なり。其の道場法は應に勝地を擇び、四肘壇を作り、深さ三肘を掘り、瓦礫惡土髮毛及び骨灰炭蟲蟻等を除去し、好淨土を以て塡滿して平に築くべし。掘るに惡土無くんば卽ち舊土を取つて塡む。土若し勝有らば、當に知るべし其の地是れ大吉祥にして速疾に成就すと。未だ地に墮ちざる[三三]瞿摩夷を取り、香水を以て[三四]沙好土と和して塗と爲し、[三五]無能勝菩薩の眞言を誦して加持すること二十一遍、然る後に壇に塗り、塗り已つて復五淨を取り相和す。五淨とは瞿摩夷汁牛尿酪乳酥なり。無能勝菩薩の眞言を以て加持すること一百八遍、右に旋(めぐら)して遍く壇に塗る。若し山石上に於て建立し、或は樓閣に在り、或は船上に居るも、一切賢聖は道處を得。但し五淨を以て塗拭し、東に面向して坐し、無能勝の[三六]印を結んで地に按じ、眞言七遍を誦して壇の中心を加持し、又諸藥七寶幷に五穀の各少分を取り、中心を掘ること深さ一肘、諸藥及び七寶を安け。復舊土を取り塡滿し平治し、右手を以て按じ、[三七]地天の偈三遍を誦せ。地天神を警覺する偈に曰く。

【二八】此文異本は夾註に作る。

【二九】三道寶階、佛忉利天に昇り母の爲に說法し已り降りたまふ時に天帝釋神通を以て中央に黃金、左に水精、右に白銀の階道を現ず。佛中央の階道により降りたまふと。此の位置に阿育王寶塔を建立す。(西域記四、正藏五一卷八九三頁a參照)

【三〇】無能勝菩薩。彌勒の字を阿逸多と云ひ、無能勝と云ふ。

【三一】訶利底母。(Hariti)鬼子母なり。本名歡喜母と云ふ。

【三二】伏藏。地中の寶藏なり。

【三三】瞿摩夷(Gomati)牛糞なり。

【三四】沙、別本淨とす。

【三五】眞言。曩莫三滿多沒馱引南一唵引二戶嚕戶嚕三戰拏引里四麼引蹬耆娑嚩二合引賀引五

【三六】印、二手右は左を壓し、內に相叉へて拳と作し、二中指を竪て頭相合す。

【三七】地天とは夜叉、羅刹、阿修羅、龍、迦樓羅、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、部多、畢舍遮、鳩槃荼等なり。

又法あり、兩軍相敵するに樺皮上に於て此の陀羅尼を書き竹竿上に懸け、人をして手に把らしめ眞言を誦せば彼の敵即ち破る。

又[二三]法あり、若し女人、男女無くば、牛黃を以て樺皮上に於て此の眞言を書き帶ばしむれば、久しからずして當に男女あるべし。

又法あり、若し女人有つて夫重ぜざれば、一新瓶を取り水を滿盛し、瓶中に於て七寶及び諸靈藥五穀白芥子を著け、綵帛を以て瓶項に繫け、眞言を以て加持すること一百八遍、女人をして根本印を結び印を以て頂上に安じ、水を以て灌頂するに即ち寵愛敬重を得。但敬重のみに非ず、亦子息有るを得、胎に在つて牢固たり。

又法あり、行者每に念誦する時、大印を結び眞言を誦し、塔を印すること六十萬遍を滿てば、所求の事、即ち滿足を得、觀自在菩薩、金剛手菩薩、[二四]多羅菩薩即ち爲に身を現じ、所求意の如く、或は[二五]阿蘇羅宮中の王と作り、或は菩薩地を得、或は長年の藥を得、或は敬愛の法成就するを得。

又法あり、菩提道場に於て、[二六]大制底の前に於て此の陀羅尼を誦せば、聖僧を見るを得、共語して與に悉地成就し、彼と共に同行するを得、即ち彼の聖僧と共同なり。

又法あり、高山の頂上に於て念誦すること一倶胝遍せば、金剛手菩薩此の人を將いて五百六十人を領し、同じく共に阿蘇羅宮にをいて壽命一劫なり。彌勒菩薩を見るを得て、正法を聽聞し、法を聞き已つて菩薩地を獲て不退轉を得。

又法あり、[二七]毘補羅山に上り（[二八]云く但高山に有るも亦得）、舍利塔像の前に有つて念誦し、力に隨つて香花を以て供養し、乞食して以て身命を支へ、月の一日從り十五日に至り、陀羅尼を誦し三十萬遍を滿し、其の滿つる日を取り一日一夜食せずんば、倍加供養して後夜に至り即ち金剛手菩薩を見る。行人を將いて自らの宮中に入り、行者の爲に則ち阿蘇羅窟門を示し、窟中に入つて天妙甘露壽

婆賀。

蓮華部、印、二手虛合、二大二小指各頭相著け餘六指微しく屈して各開き立て開敷蓮花の如くす。眞言、唵跛娜讀納婆嚩耶娑婆賀。

金剛部、印、二手左を覆せ右を仰げ背を合せて相つけ、右の小指を以て左の大指に叉へ、右の大指を以て左の小指に叉へ、中間の六指は手の腕に博げ三股杵の如くす。眞言、唵嚩日囉納婆嚩耶娑婆賀。

【二三】　此の法は牛黃加持として安産加持の法なり。

【二四】　多羅(Tārā)眼睛、光明、渡、救度と譯す。此の尊は觀自在菩薩の眼中より生じたるが故に此の名を得たり。尊形は諸經に依り異れども多羅念誦法に依れば左手に青蓮を持ち、右手は與願印を作すと。

【二五】　阿蘇羅（Asura）、阿修羅、阿須倫、阿素羅ともす。不端正、非天と譯す。常に帝釋と爭ふ天なり。此の天の居所は妙高の北、大海の下に在りと云ふ。胎藏現圖曼荼羅には外院の南邊にて西南隅の近くに位す。

【二六】　大制底(Caitya)積聚の義。靈廟と義翻す。

【二七】　毘補羅山(Vipula)廣博脇山と譯す。摩竭陀國にあり。

遍を誦して瘡上に塗れば卽ち愈ゆ。
又法あり、若し路行に在つて此の眞言を誦せば賊劫傷損を被らず、亦諸惡禽獸等の難を離る。
又法あり、若し鬪諍言訟論理及び談論し勝を求むる者は此の眞言を誦せば强ず勝たん。
又法あり、若し江河中に於て行くに、此の眞言を誦せば漂休及び水中の惡龍摩竭黿鼉等の傷害を被らず。
又法あり、囚禁繫閉を被る者は此の陀羅尼を誦すれば速に解脫を得。
又法あり、國中に疫病有つて、七夜油麻粳米を以て酥蜜に和し護摩を作さば卽ち災滅し國土安穩を得。
又法あり、若し豐饒の財寶を求むる者は毎日種々の食を以て護摩をなせば財寶を得て豐饒なり。
又[二二]法あり、人をして敬愛歡喜せしめんと欲する者は、眞言の句の中に彼の人の名を稱ふれば卽ち歡喜順伏を得。
又法あり、若し衣無き者は、念誦せば卽ち衣を得。
又法あり、意中に求むる所は、念誦せば皆得ること意の如し。
又法あり、若し人あり、身體支節痛めば、加持し手をもつて二十一遍痛處を摩觸せば卽差ゆ。
又法あり、瘧及び頭痛を患ふに、加持の手を以て二十一遍摩觸せば亦除差を得。
又法あり、一小壇を塗り、一銅椀を取つて淨灰を盛滿し、童子をして兩手をもつて灰椀上を按しめ、持誦者は應に眞言を誦すべし。本尊の使者は童子の身に入る。其の椀卽ち轉じ卽ち下る。童子に語るに卽ち自ら[二三]三部三摩耶の印を結び、三部の眞言を誦す。卽ち滑石を取り過ぎて童子に與ふ。童子卽ち地上に於て過去未來の事の吉凶善惡を書き、及び失脫の經論、廢忘難義の眞言印卽ち知解するを得。

【二二】此の文より、兩軍相敵するに樺皮上に於て此の陀羅尼云云の文まで金剛智譯には相當文を見ず。

【二三】三部は佛部、蓮華部、金剛部なり。佛部、印、二手虛合、二頭開き、微しく屈して各々大指の上節に附け、二大指を開きて各々二頭指の下の節文を捻ず。眞言、唵怛他誐都納婆嚩耶娑

眞言を誦すること一遍、一擲して鏡面を打つに鏡面上に於て卽ち文字有つて現はれ善惡の事を說く。

又法あり、事の善不善、成就不成就を知らんと欲せば[17]蘇摩那花の香油を取り、眞言を誦して加持すること一百八遍、右手の大母指の面に塗り、眞言を誦して聲斷絕せず、童子をして指上を觀ぜしむるに諸佛菩薩の形像を現じ、或は文字を現じて具に善惡を說く。

又法あり、若し人、鬼魅の病を患へば揚柳枝或は茅草を取り、眞言を誦して患者の身を拂へば卽ち除愈を得。

又法あり重病を患ふ者は眞言一百八遍を誦し彼の人の名を稱へ[18]牛乳を以て護摩するに卽ち差ゆ。

又法あり、若し孩子夜啼せば、童女をして右に線を搓らしめ、眞言を誦し加持し、二十一結を結び、頸下に繫げば孩子夜啼せず。

又法あり、先に白芥子を加持すること一百八遍、然る後に芥子を取り、眞言を誦すること一遍、一擲して彼の鬼魅の者を打ち二十一遍滿てば其の鬼魅馳走して病者除愈す。

又法あり、若し鬼を患ふ者あらば瞿摩夷を以て一小壇を塗り、[19]麩炭を以て地に畫きて鬼魅の形を作り、眞言を誦し石榴等を以て之を鞭てば、啼泣して馳走し去る。

又法あり、若し人あつて鬼魅に所著被れ、或は復病者身遠處に在つて自ら來る能はず、或は念誦の人又彼に往かざれば、揚柳枝或桃枝或は花を取り、加持すること一百八遍、人を使して將に病人の所に往かしめ、枝を以て病人を拂ひ、或は花を以て病人をして嗅がしめ、或は花を以て病人を打つに、是の魅卽ち去り、病者は除差す。

又法あり、若し蛇の嚙む所となり、或は[20]拏吉女鬼の所持を被れば、病人を旋遶して眞言を誦せば其の病卽ち愈ゆ。

又法あり、若し人癰腫を患ひ及び諸毒蟲に嚙まるれば檀香汁を取り土に和して泥と爲し、眞言七

【一七】 金剛智譯には、或は朱砂を以て、或は香油を以て大母指の甲に塗る。其の香油は蘇摩那花を以て胡麻油の中に浸せるもの是なりとす。

【一八】 別譯には次第草置酥中。念誦七遍擲著火中とあり。

【一九】 小麥の糠を燒ける炭。

【二〇】 拏吉は又拏吉儞(Dākinī)に作る。夜叉鬼の一類にして通力を有し、人の心臟を取り食ふと云ふ。

中に於て澡浴し、或は空に騰るを見、或は諸天女と與に娛樂するを見、或は說法するを見、或は拔髮剃髮するを見、或は酪飯を食し、白甘露を飲み、或は大海江河を度り、或は師子座に昇り、或は菩薩樹を見、或は船に乘り、或は沙門を見、或は居士の白衣黃衣を以て頭を覆ふを見、或は日月を見、或は童男童女を見、或は有乳菓樹に上り、或は黑丈夫口中に火焰を吐き、彼と共に鬪ひて勝を得るを見、或は惡馬水牛來つて觝觸せんと欲するに持誦者或は打ち或は叱り、怖れ走つて去るを見、或は乳粥酪飯を食し、或は[一一]蘇摩那花を見、[一二]或は國王を見る。若し是の如き境界を見ざる者は當に知るべし、此の人は前世に五無間罪を造ると。應に更に滿七十萬遍を誦すべし、即ち上の如き境界を見、應に罪の滅するを知り即ち先行を成ずべし。然る後、法に依つて本像を畫き、或は三時、或は四時、或は六時に法に依つて供養し、世間出世間の悉地乃至無上菩提を求むるに皆悉く獲得す。

若し有るが此の陀羅尼を修持せば、應に未來成就の處の所、有難無難、悉地の遲速を知るべし。應に一淨室に於て[一三]瞿摩夷を以て[一四]一小壇を塗り、力に隨つて供養し、[一五]結界の眞言を以て十方界を結び、[一六]香水の一瓶を以て壇の中に置在すべし。一念誦するに其の瓶動轉す。當に求むる所の事の成就の所爲を知るべし。若し動轉せずんば其の事成ぜず。

又法あり、一瓦椀を取り、香を以て塗り壇中に置き專心に念誦するに椀若し轉動せば事即ち成就す。若し動かざれば事即ち成ぜず。

又法あり、未來の事を知らんと欲せば先づ一小壇を塗り、一の具相福德の童子をして澡浴し清潔にし新淨の衣服を著せしめ、七倶胝の眞言を以て香を加持し童子の手に塗り、又花を加持すること七遍、童子の手中に置く。童子をして面を掩ひ壇中に立たしむ。又別の花を取り眞言を誦し、加持すること一遍、童子の手背を一打し乃し二十一枚に至り、即ち童子に善惡の事を問へば童子は皆說く、

又法あり、一明鏡を取り壇中に置き、先づ眞言を誦して花を一百八遍加持して已り。然る後に又

【八】十地に於て修する所の波羅蜜行にして檀戒忍進禪慧方願力智の十波羅蜜を云ふ。

【九】金剛智譯と比較するに文は全く合致せず。『若し出家乃至菩提を證せん』までの文の如きは金剛智譯には諸有所作無不諧偶。所出言教人皆信受とあり。又こゝに一萬遍、二萬遍とあるはいづれも十萬遍とあり。佛菩薩には聲絲を加へたり。

【一〇】罪滅福生の相。黑物は惡業を表す。

【一一】蘇摩那花(Sumana) 別譯には有香氣白花とす。

【一二】「國王を見る」は別譯に無し。

【一三】瞿摩夷 (Gomati) 牛糞と譯す。

【一四】別譯には四肘方曼荼羅とす。

【一五】障者を去らんが爲に一定の境域を限り避除結護するを結界と云ふ。普通此に用ふる印明は金剛橛(地結)、金剛墻(四方結)、金剛網(虛空網)、金剛炎(火院)、大三昧耶の五種印明と當部の部主明王の印明を結誦して結界す。別譯には加持香水散於八方上下結界とあり。

【一六】別譯には於曼荼羅四角及其中央。各置一香水瓶とす。

七倶胝佛母所說准提陀羅尼經

開府儀同三司特進試鴻臚卿
肅國公食邑三千戶賜紫贈司空
諡大監正號大廣智大興善寺三藏
沙門不空[一]奉詔譯

是の如く我れ聞きき。一時[二]薄伽梵、[三]名稱大城逝多林給孤獨園に在して大苾芻衆幷に諸菩薩及び諸[四]天龍八部の與に前後に圍繞せられたまひ、未來の薄福惡業の衆生を愍念して卽ち准提三摩地に入り、過去[五]七倶胝佛所說の陀羅尼を說いて曰く。

娜莫颯多南引三藐三沒馱引倶引胝南引恒儞也二合他引唵者禮主禮准泥娑嚩引二合賀引

若し眞言の行を修する出家在家の菩薩有つて此の陀羅尼を誦持し、九十萬遍を滿てば無量劫に造れる[六]十惡四重五無間罪は悉く皆消滅し、所生の處において常に諸佛菩薩に遇ひ豐饒の財寶あつて常に出家するを得。若し是れ在家の菩薩ならば戒行を修持し、堅固不退にして此の陀羅尼を誦すれば常に天趣に生じ、或は人間に於ては常に國王と作り、惡趣に墮せずして賢聖に親近し、諸天は愛敬して擁護し加持す。若し世務を營めば諸の災橫無く、儀容端正音威肅にして心に憂惱無し。若し出家の菩薩ならば、諸禁戒を具し、[七]三時に念誦し敎に依り修行せば現生に求むる所の出世間の悉地定慧現前し、[八]地波羅蜜を證し、圓滿に疾に無上正等菩提を證せん。

[九]若し一萬遍を誦し滿てば卽ち夢中に於て佛菩薩を見、卽ち[一〇]黑物を吐く。其の人、若し罪尤も重ければ二萬遍を誦して卽ち夢に諸天室寺舍を見る。或は高山に登り、或は樹に上るを見、或は大池

【一】不空は金剛名、梵名は阿目佉跋折羅(Amoghavajraḥ)と云ふ。
【二】薄伽梵(Bhagavan)智度論には有德、巧分別等と譯す。經中多く世尊と譯す。
【三】舍衞城の義譯名。
【四】天(Deva)、龍(Nāga)、夜叉(Yakṣa)、乳闥婆(Gandharva)、阿修羅(Asura)、迦樓羅(Garuḍa)、緊那羅(Kiṃnara)、摩睺羅伽(Mahoraga)以上八部を天龍八部と云ふ。中に於て天、龍最も勝れたるが故に天龍八部を名づく。
【五】七倶胝(saptakoṭi)七無數なり。
【六】十惡四重五無間罪。十惡とは殺生、偸盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、倚語、貪欲、瞋恚、邪見を云ひ、四重は所謂る淫、盜、殺人、妄語を犯して得る四重罪を云ふ。然し密教にしては捨正法、捨離、菩提心、慳悋法、不饒益行の四を四重罪とす。五無間罪は殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧を云ふ。
【七】晨朝、日中、黃昏の三時なり。

以上の如く念誦次第に大差あるを見る。而して布字法に於ては金剛智譯は各宗に色を觀ずる點は不空譯には全く無し。畫像法に於ては右の第四、及第九手の持物が異るのみなり。要するに金剛智譯の整はざるに反し不空譯は十八道立の次第となれるを見るべし。

昭和八年十二月三日

譯者 坪井德光 識

不空譯	金剛智譯
一、佛母陀羅尼	一、佛母陀羅尼
二、誦持者の功德	二、誦持者の功德
三、呪詛法二十四法	三、呪咀法三十一法
四、念誦法	四念誦法〔依梵經本有十萬頌我今略說〕
1擇地作壇	1擇地作壇印言
2受菩提心戒印言	2入道場法
3佛部三摩耶印言	3佛部三摩耶印言
4蓮華部三摩印言	4蓮華部三摩耶印言
5金剛部三摩耶印言	5金剛部三摩耶印言
6第二根本印言	6根本身印言
7地界橛印言	7辟除一切天魔惡鬼等契
8道場觀印言	8地界橛印言
9大虛空藏印言	9牆界印言
10寶車輅印言	10網言
11請車輅印言	11外火院大界印言
12請本尊印言	12車輅印言
13無能勝印言	13迎請聖者印言
14牆界印言	14蓮華座印言
15上力網界印言	15遏迦印言
16火院印言	16洗浴印言
17閼伽印言	17塗香印言

二

不空譯	金剛智譯
18蓮華座印言	18華臺印言
19澡浴印言	19燒香印言
20塗香印言	20飲食印言
21花印言	21燈印言
22燒香印言	22布字法
23飲食印言	23第二根本印言
24燈明印言	24捧數珠印言
25讚歎	25把數珠印言
26布字法	26三摩地觀念布字義
27加持念珠	27求願觀想法十二法あり
28思惟字母種子義	28五供養印言
29根本印言	29懺悔隨喜發願
30澡浴印言	30奉送本尊印言
31五供養印言	31解外火院印言
32讚歎獻印伽	32三部三摩耶印言
33解火院印言	33四種護摩法
34奉送本尊印言	34畫像法
35三部三摩耶印言	
36懺悔隨喜發願	
37四種護摩法	
38畫像法	

七倶胝佛母所說准提陀羅尼經解題

一、譯傳及び內容

本經は不空三藏譯、本朝に請來せるは慈覺、智證兩大師なり。不空は眞言宗付法の第六祖、唐玄宗開元八年（西紀七二〇）に洛陽に來り、代宗太曆九年六月（西紀七七四）に寂す。譯する所の經論七十七部一百二十餘卷なり。

本經は雜部密教に屬し、准提法に說けるものなり。佛、舍衞國に在し、比丘、菩薩、天龍八部等の爲に七倶胝佛所說の陀羅尼を說き、誦持者の獲る功德の相、三十四の呪咀法を擧ぐ。

次に七倶胝准提陀羅尼念誦儀軌を說く。初に作壇の法あり、地天眞言を以て地を淸淨にし、菩提心戒眞言を誦して勝義諦を思惟し虛空に七倶胝佛遍滿すと觀ず。次で三部三摩耶の印言、觀想を說き、第二根本の印を以て身に甲冑を莊嚴す。地橛印言により地界を加持し已て道場觀を說く、卽ち大虛空藏の眞言を以て供具を具備し、寶車輅を以て色界頂に准提佛母を迎へ、諸車輅及び諸本尊の印言を以て本尊を道場に勸請し奉る。無能勝の印言を以て障者を除き、牆界、上方網界、火院の印言を以て道場を安泰ならしめ、次で閼伽の印言にて聖者の雙足を洗浴し、蓮華座を奉り、澡浴の印言を以て天妙香水を聽衆に注ぐ、塗香、華、燒香、飲食、燈の印明を以て供養し、讚を誦して聖衆を讃歎す。次に頂より足に至る間に本尊の眞言を觀じ、根本印を結びて加持念珠、觀想、正念誦に入り、本尊を分明に觀じ、陀羅尼の一一の字義を觀じ、勝義の實際に入り、法界眞如を證して三摩地念誦法を已るのである。次に復供養、解略奉送本尊、三部三摩耶の印言を以て誦し終り、禮佛、廻向をなす。

次に四種護摩法及び准提佛母畫像法を說く。

二、二譯の比較

七倶胝佛母陀羅尼を說ける經に三譯あり。卽ち不空譯、七倶胝佛母准提大明陀羅尼經一卷金剛智譯（西紀七二三——七六）佛說七倶胝佛母心大准提陀羅尼經一三卷婆訶羅譯（西紀六七六——六八八）なり、以上三譯の中地婆訶羅譯には念誦法を說かず。ここに前二譯を比較するに次の如し。

得たまひしや。唯だ願くは世尊よ、分別解說したまへ。未來世を使て普く聞知を得しめ、大安樂を獲、横死を免れ離れ、刀杖毒藥水火盜賊のよく害する能はざる所たらしめん。佛、舍利弗に告げたまはく。我れ過去無量の佛所より此の句を聞くを得て受持し讀誦し、即ち八千萬劫の生死の罪を超越するを得たり。又念ふに過去八十萬劫に佛世尊有り、一切世間勝と名づけ、[五一]十號具足す。彼の佛世尊、我が爲に如上の章句を演說したまふ。我れ即ち數息し心をして散ぜざらしむるに、燿然と意解し結使を消伏して[五二]無生法忍を得て[五三]首楞嚴三昧に住せり。若し善男子善女人此の經を聞くを得て受持し讀誦し書寫し解說せば即ち無量無數阿僧祇劫の生死の罪を超越するを得、毒害を消伏し禍の與に對へず。佛、是の語を說きたまふ時に、五百の長者の子は無生法忍を得、無數の人天は阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。舍利弗、阿難等佛に白し言さく。世尊よ、此れ觀佛三昧海なり、請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪は所至到處に一切吉祥なり。梵天の衆に愛敬せらるるが如し。佛、阿難に告げたまはく。是の如し是の如し、汝の所說の如く、若し善男子善女人、此の經の首題の名字を聞くを得ば、常に佛及び諸菩薩を見るを得て善根を具足し淨佛國土に生れん。此の品を說きたまふ時に八十億の天子女人及龍鬼神は皆悉く歡喜して菩提心を發し、舍利弗、阿難等は佛の所說を聞いて佛に禮して退りき。

請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼經（終）

【五一】十號、如來の十號なり。如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。

【五二】無生無滅の諸法實相中に於て信受し通達して無碍不退なるを無生法忍と云ふ。此を得たる者を不退轉の位の菩薩と云ふ。

【五三】首楞嚴三昧（Sūraṅga-masamādhi）一切畢竟して堅固なるを得るを首楞嚴と云ふ。即ち佛德究竟の三昧なり。

に大安樂を施し、諸衆生をして十地を修せしむ。我れ過去無數佛より、是の消伏毒害の呪を聞き。[四九]三障を消除して諸惡無く、[五〇]五眼具足して菩提を成じ、永く三界の與に父母と作り、其に安樂を施し止息を得しむ。若し我が名號を聞く者有り、亦大悲觀世音を聞き、此の呪を誦持せば、諸惡を離れ地獄及び畜生に墮せず。蓮華より化生して父母と爲り、心淨く柔軟にして塵垢無く、必ず無上大慧明を聞くこと、必定して地の如く動かすべからず。

一切佛出世し、八十好を流出すること、明照なること日月の如く、身より大智光を出し、紫金山を燒く如し。三十二相の中に、八十好を流出すること、譬へば須彌山の大海に映顯するが如し。衆生、名を聞く者は永く三惡道を離れ、無爲處に住して、常に大涅槃を樂むを得。一切佛世に興り、衆生を安樂するが故に、異口の各々の身は、金剛座に端坐し、口より五色の光を出し、蓮華葉形の舌は、大悲者の師子を調御する法を讃歎す。護世の觀世音は、畢定して毒害を消し、三毒の根を淨め、佛道を成じて無礙なり。

爾の時、世尊は此の偈を說き已り。觀世音菩薩の名を受持する者の爲に、此の經を擁護するが故に、灌頂吉祥陀羅尼を說きたまひ而して呪を說いて曰く。

多姪哋　烏耽毘詈名住山外鬼兜毘詈名住山窟耽埤名闍日鬼波羅耽埤名食殘果鬼住一切果樹下食殘捺吒修捺吒名好偷鬼枳跋吒名殺魚鬼牟那耶名出家鬼三摩耶名三昧鬼檀提名提杖鬼膩羅枳尸名好嬈女鬼婆羅鳩卑名作破肌鬼烏詈名瓔鬼㰀瞿詈名尾鬼

莎訶

佛、舍利弗に告げたまはく、此の如き灌頂陀羅尼章句は畢定して吉祥なり。若し聞くを得て受持讀誦するもの有らば惡業障を破り終に橫死せず。舍利弗、佛に白しく言さく。世尊よ、此の神呪の如き大吉祥の句は普く一切に施すに怖畏する所無し。世尊は往昔何れの佛の所從り此の句を聞くを

【四九】惑障、業障、報障を云ふ。

【五〇】肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼を五眼と云ふ。

定智解脫知見を具し、身に水火を出し身を碎て滅度し、無數の人をして大善心を起さしむ。舍利弗、當に知るべし。若し善男子善女人、觀世音菩薩の大悲の名號及び消伏毒害六字章句を聞くを得て淨行の法を數息係念せば、無數劫に造る所の惡業を除き、惡業障を破り、現身に無量無邊の諸佛を見るを得、妙法を說くを聞いて意に隨て礙無く、[四二]三種の清淨三菩提心を發さん。若し宿世の罪業因緣及び現に所造の極重の惡行有るも、夢中に觀世音菩薩を見るを得ること大猛風の重雲を吹き皆悉く四散するが如く、重罪惡業を離るゝを得て諸佛の前に生ぜん。佛、是の語を說き已つて舍利弗に告げたまはく。我れ今此の爲に觀世音菩薩の名號と消伏毒害無上章句を受持すと。偈を說いて讚歎したまふ。

我れ[四三]提頭賴吒等に勅し、慈心もて經を受持するを擁護せしめ、大悲の名號を人に聞かしむること、譬へば天子の法の臣を護るが如し。我れ[四四]海龍伊羅鉢に勅し、慈心もて經を受持するを擁護すること、眼目を護り、己が子を愛するが如く、晝夜[四五]六時に遠離せざらしむ。我れ[四六]闍婆羅刹子と無數の毒龍及び龍女に勅し、慈心もて持經者を擁護すること頂腦を愛するが如く敢て觸れざらしむ。我れ[四七]毘留勒迦王に勅し、慈心もて持經者を擁護し、母の子を愛する心の厭くこと無きが如く、晝夜擁護して行住倶ならしむ。我れ[四八]難陀、跋難陀、娑伽羅王、優波陀に勅し、慈心もて持經者を擁護し、恭敬供養し接足禮すること、譬へば諸天の帝釋を奉ずるが如く、亦孝子の父母を敬ふが如く、猶ほ貧人の財寶を護るが如く、盲の眼及び正導を須ゆるが如くならしみ。我は一切諸鬼神、小龍毒蛇、毒害獸に勅し、一切の惡人、惡口の者は、此の呪に違逆して不善を起し、現身に白癩より膿血流れ、後に地獄の長夜の苦に墮す。是の故に應に當に慈心をもて護り、灌頂句を受持し讀誦すべからしむ。地獄は清淨なること蓮華の如く、餓鬼は破碎して八難無く、後に佛前に生じて三昧に入り、畢定して當に不退轉を得べし。普く一切

【四一】　智は慧なり。戒(sīla)定(samādhi)、慧(prajñā)、解脫(vimukti)、解脫知見(vimuktijñāna)の五分法身なり。

【四二】　三種の淨菩提心とは三乘道の心を云ふ。

【四三】　持國天(dhṛtarāṣṭha)なり。東方を守護す。

【四四】　龍は西方廣目天(Virūpākṣa)の臣なり。此處には臣を以て主を表す。伊羅鉢、又は伊鉢羅(Elāpattha)は龍の名なり。

【四五】　晨朝、日中、日沒の晝の三時と、初夜、中夜、後夜の夜の三時とを合して六時とす。

【四六】　闍婆羅刹は北方多聞天(Dhanada)の臣なり。

【四七】　毘留勒迦王(Virūḍhaka)即ち南方增長天なり。

【四八】　難陀龍王(Nanda)跋難陀龍王(Upananda)娑伽羅龍王(Sāgara)優波陀龍王(Upalaka)以上龍王名については孔雀經卷中(正、一九、四三二)參照。

坐正受し、三昧に入つて身眞金色なり。無數の人の見る者をして歡喜して菩提心を發さしむ。時に優波斯那卽ち座より起ち、尊者舍利弗の所に至り、頭面を地に著け、接足作禮し、尊者に白し言く。向には如來、數息を讃歎したまひ、是の因緣を以て大善利を獲たり。云何が數息なるや、唯願くは尊者我が爲に解說したまへ。眼と眼識は色と相應す、云何が攝し住めん。耳と耳識は聲と相應す、云何が攝し住めん。鼻と鼻識は香と相應す。云何が攝し止めん。舌と舌識は味と相應す、云何が攝し止めん。意と意識は[三五]攀緣と相應す、云何が、攝し止めん。諸顚倒想は顚倒と相應す、云何が攝し止めん。色聲香味觸は細滑と相應す、云何が攝し止めん。而して此の[三六]識賊は猨猴の走るが如く、六根に遊戲して遍く諸法を緣ず。云何が攝し止めん。時に舍利弗、優波斯那に告ぐ。汝今當に觀ずべし、地大は地無堅性なり、水大は水性不住なり、風大は風性無碍なり、顚倒に從り火大有り、火性不實なり、因緣を假りて色受想行識を生ず、一一の性相は水火風等に同じく、皆悉く如實の際に入ると。

時に、優波斯那是の語を聞き已り、身水火の如く四大定を得、五蘊の空無所有に通達し、諸結賊を殺し豁然として意解し、阿羅漢を得、身中に火を出し自ら身を碎いて般涅槃に入る。時に、舍利弗、其の舍利を收め、上に於て塔を起て已り、佛の爲に禮を作し、佛に白して言さく、世尊よ、佛は禪定第一なり甘露無上法味なりと說きたまへり。若し服する者有らば身琉璃の如く毛孔に佛を見無明行乃至老死、一一の性相皆悉く不實なること空谷響の如く、芭蕉樹の堅實無きが如く、熱時の[三七]焰の如く、[三八]野馬の行くが如く、乾闥婆城の如く、水上の泡の如く、[三九]幻の如く、[四〇]化の如く、露の如く、電の如しと觀じ、一一十二因緣を諦觀して緣覺道を成ず。或は寂定琉璃三昧に入り、佛を見ること無數、無上心を發して眞眞を修し、行住に退轉せずと。佛、舍利弗に告げたまはく。優波斯那の如きは、我が是の大悲章句數息定法を說くを聞き、無數億劫洞然の惡を破し、阿羅漢を成じ[四一]戒

【三一】肝臟は木性の故にこの氣は青色なり、同樣に肺氣は金性の故に白色、脾氣は土性の故に黃色、腎氣は水性の故に黑色、心氣は火性の故に赤色なり。然し本經にはこの心氣は略して說かず。是の如き五臟の脈氣は各本色を帶ぶと雖も合會して鼻に至る時には其の本色を失ひ琉璃の瑩徹なるが如し、故に不青不白等と云ふ。

【三二】端正にして斜曲せざるを正と云ふ。

【三三】微細にして麁大ならざる出息を長さ八寸と云ふ。

【三四】不淨觀、慈悲觀、因緣觀、界分別觀(或は念佛)、數息觀を云ふ、卽ち五停心觀なり。

【三五】境を攀緣と云ふ。心は必ず境を緣じに起るが故に。

【三六】眞性を傷害するを賊と云ふ。識は猨猴の如く境に攀緣して境の眞性を傷害する故に識賊と云ふ。

【三七】熖卽ち陽熖なり。

【三八】風塵を動かすが故に曠野中に於て猶野馬の行くが如きを云ふ。

【三九】幻師の象馬等を幻出するを云ふ。

【四〇】神通を得たる者が種々の化現を爲すを云ふ。

て虚ならず。若し聞く者有らば大善利を獲、無量の功德を得んと。是の語を說き已るに、王舍大城に一比丘有り、[二五]優波斯那と名づく。精進勇猛にして難行苦行を勤行すること[二六]頭の然るを救ふが如し。寒林中に在て無央數の大衆の與に圍繞され自ら往昔諸の惡行を作し殺生すること無量、觀世音菩薩の六字の章句を聞きて正念思惟し心を觀じ、心脈を一處に使想し觀世音菩薩を見て卽ち解脫を得て阿羅漢に成れるを說けり。云何が、當に觀世音菩薩及び十方の佛を見るを得べけんや。若し見るを得んと欲すれば端身正心にして心をして不動にし心氣を相續せしむべし。[二七]左手を以て右手の上に置き、舌を擧げて[二八]腭に向け息をして調匀ならしめ、氣をして不麁不細にし安詳ならしめ、徐に數へて一より十に至つて息念を成就し、意を分散すること無からしむ。氣をして麁ならず。亦外に向けず、不澁不滑ならしめ、嬰兒の乳を飮むに氣を吸ひ之を嗽ふが如く、不靑不白にして調和して中を得、[二九]心端從り四十脈の下の一中脈を取り、氣をして中從り安隱に[三〇]十四脈中に至らしめ、大脈從り生じて舌下に至る。復舌脈從り出でて舌端に至り、[三一]不靑不白不黃不黑にして琉璃器の如く[三二]正しくして[三三]長き八寸なり、鼻端に至り還て心根に入り心をして明淨ならしむ。

佛諸比丘に告げたまはく、此の大精進勇猛の寶幢の六字の章句は毒害を消伏する大悲の功德なり。觀世音菩薩は此の數息心の定力を以ての故に駃き水流の如く、疾く疾く觀世音菩薩及び十方の佛を見るを得。佛、諸比丘に告げたまはく、汝等善く聽け。甘露の無上法味を服さんと欲すれば、若し諸比丘已に出家を得れば、當に自ら身を攝して威儀を壞せず、端坐正受して意を外に向くること無く、苦空無常敗壞不久磨滅を觀じ、[三四]五門禪を修すべし。當に自ら身を觀じて、頭より足に至る一一の節間の皆係念停住して散ぜざらしめ、衆節は芭蕉樹の內外倶に空なるが如きを諦觀すべし。當に知るべし色受想行識も亦復是の如しと。

佛、是の語を說きたまふ時、尊者舍利弗、寒林中に在つて還つて樹下に坐し、已に佛意を解して端

【二五】優波斯那(Upasena)

【二六】智圓は請觀音經疏第四に金光明最王經の文を以て說く。金光明最勝王經第二(正、一六、四一四b)に曰く。人の火を被り、頭を燒き、衣を燒き、救ふに速に滅せしむるが如し。火若し滅せずんば心安らかなるを得ず。若し人罪を犯すも亦後是の如しと。

【二七】印度の習ひ、右を勝とし左を劣とす、而して禪定に於ては右を左の上とす、然るにこゝは是に反す。

【二八】腭は斷に同じ。

【二九】請觀音經疏(正、一八〇〇)及び請觀音經疏闡義鈔卷第四(正、一八〇一)に依れば赤肉の心(心藏)は一身の主であり、この肉心より一脈を生じ、この一脈は四大脈を生じ四肢に趣く。四大脈は各々十中脈を生じ、この十中脈は各々十小脈を生ず。かくして全心に脈は普遍す。この四十中脈の中の一卽ち優陀那(udāna)風は直に臍に趣く。息風はその源を臍に起し、この中脈により心根に入り次で舌下に至り、舌端を經て鼻端に至る。入息時はこの逆にして臍に還るを以て終りとす。

【三〇】十中脈と四大脈を合して十四脈とす。

惡賊に遇ひ其の財物を盜まれんに、三たび觀世音菩薩の名號を稱へ此の呪を誦持せば賊卽ち慈心にして道に復りて去らん。

阿難よ當に知るべし。此の如く、菩薩及び是の神呪は畢定して吉祥にして、常に能く一切の毒害も消伏し眞實にして虛ならず。普く三界の一切衆生に施して怖畏無からしむ。大擁護を作し、今世に樂を受け、後世の生處に佛を見、法を聞きて速に解脫を得。此の呪の威神は巍巍として無量なり、能く衆生をして地獄の苦、餓鬼の苦、畜生の苦、阿修羅の苦及び[二二]八難の苦を免れしむることは水の火を滅して永く盡きて餘無きが如し。阿難よ、當に知るべし。若し觀世音菩薩の名號を受持し、幷に此の呪を持するもの有らば、大善利を獲て毒害を消伏し、今世後世に不吉祥の事永く盡きて餘無く、持戒精進念定總持皆悉く具足せん。阿難よ。當に知るべし。若し此の六字章句救苦醫王の無上神呪を聞き、觀世音菩薩の大悲の名字を稱ふるもの有らば罪垢消除して卽ち現身に於て八十億の諸佛皆來て手を授け爲に大悲施無畏者の功德神力幷に六字句章を說くを見ん。佛を見るを以ての故に卽[二三]旋陀羅尼を忘るゝこと無きを得。爾の時、世尊偈を說いて言はく。

大悲大名は、人を吉祥安樂にし、恒に吉祥の句を說き、極苦を救濟する者と稱ふ。衆生若し名を聞かば、苦を離れ解脫を得ん。亦地獄に遊戲して、大悲をもつて苦を代受し、或は畜生中に處し、畜生の形を化作し、敎ゆるに大智慧を以てし、無上心を發さしむ。或は阿修羅に處し、軟言をもつて心を調伏し、憍慢の習を除かしめ、疾に無爲の岸に至らしむ。現身に餓鬼と作つて、手に香色乳を出し、飢渴逼迫者に、施して飽滿を得しむ。大慈大悲の心は、[二四]五道に遊戲して、恒に善集慧を以て、普く一切の衆に、無上勝方便を敎へ、生死の苦を離れしめ、常に安樂處を得て、大涅槃の岸に到らしむ。

爾の時、世尊是の語を說き已つて阿難に告げて言はく、是の六字章句は畢定して吉祥、眞實にし

【二二】一、地獄。二、餓鬼。三、畜生。四、北拘盧洲。五、長壽天。六、聾盲瘖啞。七、世智辨聰。八、佛前佛後。以上八は見佛聞法に障難あるものなり。故に八難と云ふ。

【二三】旋陀羅尼は具には旋陀羅尼字輪と云ふ。陀羅尼字輪に於ける一一の字の意義を順逆自在に旋轉し釋することなり。

【二四】五道は地獄、餓鬼、畜生、人、天の五趣なる。

を受持せしむ。此の呪の功德は[一九]三障永盡し、三界の獄火を免れ、衆苦を受けず、[二〇]四百四病一時に起らず。設ひ衆生有つて陣に入り鬪戰して當に害さるべきに臨むも此の呪を誦念して大悲觀世音菩薩の名を稱ふれば、鷹隼の飛ぶが如く卽ち解脫を得ん。若し衆生有つて大苦惱を受け、囹圄杻械枷鎖に閉在し及び諸刑罰の一日乃至十日、一月乃至五月なるあらば、應に當に淨心を一處に繫念し、觀世音菩薩を稱へ、三寶に歸依し、三たび我が名を稱へ、大吉祥六字章句救苦神呪を誦すべし。而して呪を說いて曰く。

多姪哋　安陀詈　般荼詈　枳由詈名斉還婆鬼　檀陀羅名一鐵棒鬼　羶陀詈名青餅鬼　底耶婆陀名與人光鬼　耶賒
婆陀名闍鬼　嚧羅賦祇名長出齒鬼　難多詈名大鬼　婆伽詈名大面鬼　阿盧羅名開目鬼　薄鳩詈名一鐘鬼兩耳著大鐘　摸鳩隸名破頭鬼
兜毘隸名住石窟鬼　沙菜訶

爾の時、世尊は是の神呪を說き已つて、阿難に告げて言く。若し善男子善女人四部の弟子、觀世音菩薩の名號を聞くを得ば、幷せて六字章句を受持し讀誦せよ。若しは曠野を行いて道徑を迷失するに、此の呪を誦するが故に觀世音菩薩の大悲心に熏じて化して人像と爲り、其の道路を示し安隱を得しめん。若し飢渴に當つては泉井、果蓏、飮食を化作して飽滿を得しめん。設ひ復、人有つて大禍に遇ひ、國土妻子財產を亡失し怨憎と會することに對はんに、觀世音菩薩の名號を稱へ、此の呪を誦念し、數息係念して意を分散すること無く七七日を經れば、時に大悲者化して天像と爲り、及び大力鬼神王像と作つて接して本土に還し安隱を得しめん。若し後、人有つて海に入り寶を採り空山曠野に虎狼、師子、毒虫、蝮蝎、夜叉、羅刹、[二一]拘槃茶及び諸惡鬼の精氣を噉ふ者に逢値せんに三たび觀世音菩薩の名號を稱へ及び此の呪を誦すれば卽ち解脫を得ん。若し婦人有つて生產の難き者、當に命終に臨んで三たび觀世音菩薩の名號を稱へ、幷に此の呪を誦持せば卽ち解脫を得ん。大

【一九】煩惱障、業障、報障、の三障は正道を障へ善心を害するものなり。

【二〇】一大不調にして百一病起り、四大あるが故に四百四病となる。

【二一】拘槃荼(kumbhāṇḍah)蜜又は冬瓜と譯す。睡眠を厭ひて人の睡眠を防げ不祥を爲す厭魅鬼なり。拘槃は冬瓜、荼は陰囊なり。睪丸冬瓜の形を爲す鬼なり。

身は常に無患にして心も亦無病なり。設使(たとひ)大火四面より來て己身を焚燒すとも此の呪を誦持するが故に龍王雨を降し卽ち解脫を得ん。設し火は身を焚き、節節疼痛すとも、一心に觀世音菩薩の名號を稱へ三たび此の呪を誦すれば卽ち除き愈ゆることを得ん。設し復穀貴の飢饉、王の難、惡獸盜賊、道路に迷ひ、牢獄に繫閉し、杻[一五]械枷鎖をもつて五[一六]繫縛せられ、大海に入つて黑風波を迴し、[一七]水色の山、夜叉羅刹の難あり、毒藥刀劍をもつて當に刑戮さるゝに臨んで過去の業に緣り現に衆惡を造り、是の因緣を以て一切の苦を受け極めて大に怖畏せば應に當に一心に觀世音菩薩の名號を稱へ幷せて此の音を誦すること一遍より七遍に至るべし。毒害、惡業、惡行、不善の惡聚を消伏することと火の薪を焚きて永盡して餘無きが如し、是の因緣を以て此の觀世音菩薩所說の神呪は一切衆生に甘露の妙藥を施すと名づけ、病の畏無きを得、橫死の畏をせず、繫縛の畏、貪欲瞋恚愚癡の三毒等の畏を被らず。是の故に、此の娑婆世界は皆觀世音菩薩を號して施無畏者と爲す。此の陀羅尼灌頂章句は無上の梵行なり。畢定して吉祥大功德海なり。衆生にして聞く者は大安樂を得ん。應に當に闇誦すべし。若し之を誦せんと欲せば應に當に持齋すべし。不飮酒、不噉肉、灰を以て身に塗り澡浴して淸淨にし、興渠の[一八]五辛を食はず、能熏の物は悉く之を食はず、婦女穢汚には皆悉く往かず、常に十方の佛及び七佛世尊を念じ、一心に觀世音菩薩を稱へて此の呪を誦持せば現身に觀世音菩薩を見るを得、一切の善願皆成就を得、後に佛前に生じて長く苦と別れん。佛、阿難に告げたまはく、王舍大城に一女人有り。惡鬼の所持にして旃陀利と名づく。彼の鬼晝夜に丈夫の形を作して來つて此の女に嬈(たわむ)れ、鬼の精は身に著して五百の鬼子を生む。汝此の事を憶ふや不や。我れ爾の時に於て此の女人に教ゆらく。觀世音菩薩を稱へば善心相續して善境界に入らんと。阿難よ、當に知るべし、此の菩薩の威神の力の惡鬼を消伏するが如く、我が身に無比の色像を見るを得ん。我れ爾の時に於て一一の毛孔に寶蓮華を現じ、無數の化佛異口同音に大悲施無畏者を稱讚し、女をして讀誦の通利

【一五】手に在るを杻と云ひ、足に在るを械と云ひ、頸に在るを枷と云ひ、身に繫ぐを鎖と云ふ。
【一六】五とは頭及び兩手兩足の五處なり。
【一七】浪の山の如きものを水色の山と云ふ。
【一八】葱、薤、蒜、韮、胡荽を五辛と云ふ。

般般荼荼囉囉名鬼母前鬼母婆私膩多姪哋如是伊梨袾梨名爲去鬼提梨首梨名叛人鬼加波梨名截髑髏鬼及縛着兩頰佉鞮端耆名食兒鬼旃陀梨名兢人鬼摩蹬耆名師子頭鬼魔王鬼師子頭勒叉勒叉字護一切衆生薩婆薩埵薩婆婆耶埤云一切可鬼莎訶云急去多荼哋伽帝伽帝膩伽帝云已去也修留毘修留毘去莫莫莫來也勒叉勒叉云守護薩婆耶埤莎訶云急去

佛に白して言く、世尊よ、此の如き神呪は乃ち是れ十方三世の無量の諸佛の宣說したまふ所なり。此の呪を誦持する者は、常に爲に諸佛諸大菩薩の護持し、怖畏刀杖毒害及び疾病とを免離し無患を得しむる所なりと。是の語を說きたまふ時に毘舍離の人は平復すること本の如し。爾時、世尊は衆生を憐愍し、一切を覆護して重ねて觀世音菩薩に消伏毒害陀羅尼呪を說くことを請ひたまふ。爾時、觀世音菩薩、大悲を心に熏じ、佛の神力を承けて惡業障を破り毒害を消伏する陀羅尼呪を說きたまふ。

南無佛陀、南無達磨、南無僧伽、南無觀世音菩薩提薩埵摩訶薩埵、大慈大悲をもつて唯願くは我を愍み苦惱を救護し亦一切怖畏の衆生を救ひ大護を得しめたまへ。

多姪哋陀呼膩名大鬼摸呼膩名水鬼闍婆膩耽婆膩阿婆熙名人瞋鬼摸呼膩此鬼口出火名曰光鬼安荼梨名曰花鬼般荼梨此鬼身白名曰白鬼輸鞞帝名極白鬼般荼囉婆私膩休休樓樓三頭鬼安荼梨兜兜樓樓名三兒鬼般荼梨名母黑兒白鬼周周樓樓入山中去不殺周周樓樓名好偷人小兒山中住鬼膩槃荼梨名出白鬼豆豆富富豆豆名欲便去鬼富富名不便來鬼般荼囉婆私膩矧墀墀名億鬼趻名不億鬼趻膩墀名最億鬼薩婆阿婆耶羯多薩婆涅婆婆陀伽莫著疑人阿婆耶鬼莫作卑離陀云餓鬼閉殿娑訶莫來急去

一切怖畏、一切毒害、一切惡鬼虎狼師子は此の呪を聞く時に口卽ち閉塞して害を爲す能はず。破梵行の人[一三]十惡業を作るも此の呪を聞く時に糞穢を蕩除し還て清淨を得。設し業障濁惡不善有るも觀世音菩薩を稱へ此の呪を誦持すれば卽ち業障を破り現前に佛を見ん。佛、阿難に告げたまはく、若し[一四]四部の弟子有つて觀世音菩薩の名を受持し、消伏毒害陀羅尼を誦念せんに、此の呪を行ずる者の

【一三】殺生、偸盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、倚語、貪欲、瞋恚、邪見の十は正理に返し、苦報の業因となる故に十惡業と云ふ。

【一四】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を四部の弟子と云ふ。

す、正に四方を主り給ふ佛世尊有り無量壽と名づけ、彼に菩薩有り觀世音及び大勢至と名づく。恒に大悲を以て一切を憐愍し、苦厄を救濟し給ふ。汝今應に當に〔八〕五體を地に投げ彼に向つて禮を作し、燒香散華し、繫念〔九〕數息し、心をして散ぜざらしむべし。十念の頃を經て衆生の爲の故に當に彼の佛及び二菩薩に請ひたてまつるべしと。是の語を說きたまふ時に佛の光中に於て西方の無量壽佛幷に二菩薩を見るを得たり。如來の神力により佛及び菩薩は俱に此の國に到り、毘舍離に往き城門の閫に住し、佛と二菩薩は諸大衆のために大光明を放ち、毘舍離を照して皆金色と作す。爾時、毘舍離の人、卽ち揚枝と淨水を具して觀世音菩薩に授與したてまつる。大悲觀世音一切衆生を憐愍救護するが故に、而ち呪を說いて曰く、普く一切衆に敎へて是の言を作す。汝等今は應に當に一心に稱ふべし。南無佛、南無法、南無僧、南無觀世音菩薩摩訶薩、大悲大名稱救護苦厄者と。是の如く三たび三寶を稱へ、三たび觀世音菩薩の名を稱へ、衆くの名香を燒き、五體を地に投げ、西方を向ひ一心一意にして氣息をして定めしめよ。苦厄を免るゝ爲に觀世音に請ふに十指の掌を合して偈を說いて曰く。

願くは我が苦厄を救ひ、大悲をもつて一切を覆ひ、普く淨光明を放ちて癡の暗冥を滅除し、殺害の苦、煩惱及び衆病を免るゝ爲に、必ず我が所に來至し、我に大安樂を施したまへ、我れ今稽首し禮す、救厄者と名づくるを聞く。我れ今自ら歸依す、世間の慈悲の父よ、唯願はくは必定して來て、我に〔一〇〕三毒の苦を免れ、我に今世の樂を施し、及び大涅槃を與へたまへ。

佛に白して言く。世尊よ、是の如き〔一一〕神呪は必定して吉祥なり。乃ち是れ過去、現在、未來の十方の諸佛の大慈大悲の〔一二〕陀羅尼印なり。佛を念ずることを得ば定で現前に佛を見ん。我れ今當に十方諸佛の衆生を救護する神呪を說くべし。

多耶哋（張鵄反）嗚呼膩（名好喉鬼）摸呼膩（名爲癡鬼）闍婆膩（名怕人鬼）耽婆膩（名叛人鬼）安荼詈（名不白鬼）般荼詈（名爲白鬼）首埤帝（名爲青鬼）

〔八〕右膝、左膝、右手、左手、頭首を五體とす。
〔九〕息を數へて心想の散亂するを防ぎ修定す。
〔一〇〕貪瞋癡の三毒。
〔一一〕神呪は陀羅尼の異名。是れ如來の難思の祕密眞實の言の義、不可思議の功力あるが故に神呪と云ふ。
〔一二〕陀羅尼(Dhāraṇī)總持と譯す、實相の義。印(Mudrā)印信、決定、不改、標幟等の義、陀羅尼印とは總持卽ち法門の體性の標幟の義なり。

請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經

東晋天竺居士竺難提[一]　晋言法喜譯

是の如く我れ聞けり。一時佛、[二]毘舍離菴羅樹園大林精舍重格講堂に住り給ひ、千二百五十の比丘と與なりき。皆阿羅漢にして諸漏已に盡き、後有を受けず。練眞金の如く身心澄靜にして[三]六通無礙なり。其の名は曰く、[四]大智舍利弗、摩訶目揵連、摩訶迦葉、摩訶迦旃延、須菩提、阿㝹樓馱、劫賓那、憍梵波提、畢陵伽婆蹉、薄拘羅、難陀、阿難陀、羅睺羅なり。是の如き等の衆の知識する所は、常に[五]天龍八部の敬ふ所と爲す。復菩薩摩訶薩二萬人有つて俱なりき。大智本行皆悉く成就し、諸根を調伏し、六度を滿足し、佛の威儀を具し、心大なること海の如し。其の名は曰く、文殊師利童子、寶月童子、月光童子、寶積童子、日藏童子、跋陀羅菩薩、其の同類十六人と俱なり、彌勒菩薩と是の如き等の菩薩摩訶薩の二萬人なり。爾の時、世尊は[六]四衆天龍八部の人非人等のために恭敬圍遶せられたまへり。

時に毘舍離國の一切の人民大惡病に遇ひ、一者眼赤きこと血の如く、二者兩耳膿を出し、三者鼻中に血を流し、四者舌噤みて聲無く、五者所食の物化して麁澁と爲り、六識閉塞すること猶し醉人の如し。五[七]夜叉有り、訖拏迦羅と名づく。面黑きこと墨の如くにして五眼有り、狗牙上に出でゝ人の精氣を吸ふ。時に毘舍離大城の中に一長者有り月蓋と曰ふ。其同類五百の長者と俱に佛所に詣づ、佛所に到り已つて頭面もて作禮して却いて一面に住し、佛に白して言く、世尊よ、此の國の人民大惡病に遇ひ、良醫耆婆、其道術を盡すも能く救ふこと能はざる所なり。唯願くは世尊よ、一切を慈愍し、病苦を救濟し、無患を得しめ給へと。爾時世尊長者に告げて言はく。此を去ること遠ら

【一】難提(Nandi)

【二】毘舍離(Vaiśālī)、恒河の南、中印度の境にあり。菴羅(Amala)桃に似たる果實を生ずる木。

【三】六通、天眼、天耳、他心、神境、宿命、漏盡通なり。

【四】十三尊名を擧ぐ、請觀音經疏闡義鈔第二、(正、三九、九八五C參照)

【五】天、梵天、帝釋天、四天王等、龍とは八大龍王等、次に夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽以上八部の衆なり。この中天、龍殊に勝れたれば天龍を特に擧げ天龍八部と云ふ。

【六】四衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷なり。

【七】夜叉Yakṣa勇健と譯す。空中を飛騰し、國人を病惱せしむ。是の鬼病のの緣と爲る。

此の句に由るのである。又此の句、或は此と相應する句は前二呪の中に發見するのみでなく、六字呪を說ける諸經即ち六字神呪王經一卷失譯人名今附梁錄、六字呪王經一卷失譯人名今附東晉錄、六字大陀羅尼呪經一卷失譯人名今附梁錄に此の六句と相應の文あり。又文殊六字神呪經一卷の唵婆髻馱那莫及び涅槃經に說く阿磨隷毘磨隷の呪等も此の類なり。要するに此の呪句を聞き能く數息定力と相應するが故に神呪の功德速疾に現はるゝなり阿那阿波那（Āvāpāna）は遣來遣去と譯す、觀慧を體と爲し、出入息を持するは皆陀羅尼なり。

以上が六字神呪に就ての鳳潭の說の大要である。智者の說が如何にも附會の說であること及び六句に對する鳳潭の說が陀羅尼の意味よりして相當意義ある解釋なることは釋淸潭氏の說いて居らるる如くである（國華一六六號）。然し乍ら、六字明として說かるゝものは次の如く分つ事が出來る。

一、觀音に關係あるもの。

請觀音經。六字呪王經。六字神呪王經失譯附梁錄。大乘莊嚴寶王經四卷天息災譯。

一、觀音に關係なきもの。

文殊師利菩薩六字呪功能法經。六字呪玄奘譯。六神呪經菩提流支譯。六字大陀羅尼呪經。聖六字大明王陀羅尼經施護譯。聖六字增壽大明陀羅尼經施護譯。

此處に於て施護譯六字增壽大明陀羅尼經及び六字大陀羅尼呪經は安陀罝般荼罝に相應せる句を持つて居て然も觀音とは關係なきものであり、又大乘莊嚴寶王經の如く觀音と關係を持ち然も安陀罝の句無きものと二種あることを知る。然る時に六の字には特殊の意味をもつにあらず呪の音の都合により六と限られ、或は數に對する習慣或迷信等と云ふ單純なる事より用ひらるゝに至れるものにあらざるか。

三、本經の流布

天台大師は本經の疏を述作し、智圓は請觀音經疏闡義鈔を撰述し、遵式は請觀音經懺儀を作り、又請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀を集むる等本經は天台に重く用ひらる。又本經に依り觀世音を請來し罪業を懺悔し、疫病を除滅する請觀音法は我が國に於ても行はる。

昭和八年十一月二日

譯者　坪井德光　識

陀羅尼呪は一切所に於て吉祥にして梵天王の如く衆の愛敬する所なりと讃歎す。又佛、若し人、此の經首題名を聞くを得ば常に佛菩薩を見て善根を具足して淨佛國に生ぜんと説く。

二、六字章句

本經に説く所の十方諸佛救護衆生神呪破惡業障消伏害毒陀羅尼、大吉祥六字章句救苦神呪を解するに當り、天台智者大師一義を以て釋し、此に對して華嚴鳳潭又一義を立てゝ此に答へて居る。鳳潭撰觀音纂玄紀によりその説を見るに次の如くである。

智者大師の説（摩訶止觀第二及び請觀音疏）、第一呪は能く感障を滅し、毘舍離の人平復するこの本の如し、第二呪は能く業障を破す。破梵行の人能く糞穢を除き、清淨を得しむ。第三呪は能く報障を破し三毒の根を清む。こゝに六字と云ふは是れ六觀音能く六道の三毒を破するが故かく云ふなり。六字と云ふは次の三種に考へ得。

一、果報に約して六字とす、即ち六道拔苦の功能を説く。

一、修因に約す、優波斯那六字章句を開き、心脈を觀じて廣く六妙門を明すが故に。

一、六根に約す、「六根六識と相應す、如何が攝せん」として六根を説くが故に。

六觀音と六道の配當は次の如し。

一、大悲觀世音―地獄道の三障を破す

一、大慈觀世音―餓鬼道の三障を破す

一、師子無畏觀世音―畜生道の三障を破す。

一、大光普照觀世音―修羅道の三障を破す。

一、天人丈夫觀世音―人道の三障を破す。

一、大梵深遠觀世音―天道の三障を破す。

鳳潭の説。

一、第一呪を以て破惑障に限るを得ず破報障をも説くが故に。又觀世音のみの説く所にあらず、十方諸佛救護衆生神呪と云ふが故に。

二、第二呪を以て破業障に限るを得ず此呪功德三障永盡と説くが故に。又觀世音一人の所説と云ふを得ず、「大悲重レ心承二佛神力一而説と云ふが故に。

三、第三呪は世尊説二是神呪一と云ふが故に、觀音のみの説とは云ひ得ず。

以上は鳳潭が智者の説を破せるものなり。次に彼の立てたる説は、六字章句とは第三呪に見る所の安陀詈、般荼詈の句である。而して比丘優波斯那が觀世音の六字障句を聞き正念思惟し、數息定力の功により觀世音及び諸佛を見るを得たるは

請觀世音菩薩消伏毒害經解題

一、譯者及び內容

竺難提は晉恭帝元熙元年正月（西紀四一九）に來朝す（開元錄三）。歷代三寶紀七には何帝年未詳とす。難提の傳記は詳ならず。

本經は雜密經聖觀音法を說くものなり佛、毘舍離菴羅樹園の精舍に在し、舍利弗等の爲に說き玉へるものなり。爾の時、毘舍離の一切人種々の疾疫の爲に惱む、爲に月蓋長者は同類五百人を具して佛前に到り、諸人病あり、耆婆の道術を以てするも救濟し得ざる由を述べて佛に救濟を求むるに、佛の曰く、西方に無量壽佛と觀音勢至の二菩薩あり、此の聖者に請ふべしと。時に、佛の威神力により無量壽佛と二菩薩出現す。長者、三寶に歸依し、菩薩に救を求むるに大悲觀世音菩薩は衆生を憐愍して十方諸佛救護衆生神呪を說く。この呪力により毘舍離の衆は一切の怖畏、刀杖、毒害、疾病の厄を免るゝを得たり。

次で佛、觀世音に消伏毒害陀羅尼呪を說くことを乞ふに、觀世音、破惡業障消伏毒害陀羅尼を說くを明し、この陀羅尼を誦持し、觀世音の名號を念ずる者は一切業障消滅し、怖畏無く、病無く、繫縛を解脫し、諸願滿足し、後に佛前に生ると說く。

又佛、王舍大城に旃陀利女あり、觀世音の名號を稱へて惡鬼の苦惱を脫し得たる因緣を說き、若し人、鬪戰の害を逃れ、諸苦惱、繫縛を解脫せんには淨心を以て一處に係念し、觀世音の名を稱へ、三寶に歸依し、大吉祥六字章句救苦神呪を呪すべしとて、その呪を說き玉ふ。次で一比丘優波斯那、精進して觀世音菩薩六字章句を聞き正念思惟し、數息觀を修して觀世音を見奉り、解脫を得て阿羅漢を成ぜる因緣を說き、數息觀法を明す。又是の如く觀世音菩薩の大悲名號及び消伏毒害六字章句、數息係念淨行の法を聞くを得る人は惡業障消滅して現身に無量の佛を見、三種の清淨三菩提心を發し、重罪業を離るゝを得て諸佛の前に生ずと。佛是の如く舍利弗に告げて偈を說いて觀世音を讚歎す。次で佛、灌頂吉祥陀羅尼を說き、此の陀羅尼を誦する者は惡業障滅して終に橫死せず、一切無畏を施す者なり、而してこの陀羅尼を一切世間勝と名づくる過去佛より聞き、數息觀を修するに燿然として意解し、結使を消伏し、無生法忍を得て首楞嚴三昧に住せりと說く。時に舍利弗、阿難は請觀世音菩薩消伏毒害

如く、其の咽針の如く、燒燃枯燋して唯骸骨を殘す。是の人は斯の苦報を受く。若し僧衆を輕慢する者は、是の人は常に貧賤の家に墮して生ずべし。所生の處に隨つて根相具はらず、背傴矬陋なり。是の身を捨て已り而も復生ずる處は多病痟瘦にして手足攣躄にして而も膿血有つて其の身に盈流し身肉を零落す。百千萬歲を經て斯の苦報を受く。若し常住地を盜用する者は大號叫地獄中に隨し、口に鐵丸を呑み、脣齒斷腭及び其の咽喉は悉く燒け、心肝腸胃を爛壞し、遍く體燋然す。時に苾芻有つて言く、業風彼を吹き死して復活くと。是に於て閻魔獄卒は罪人を驅領す。彼の自の業感により大舌を生じ、百千萬の鐵犁有つて彼の舌上を耕す。是の苦報を受け多千年を經て此の地獄より出で已り、復大火鑊地獄に入る。彼に閻魔獄卒有つて罪人を驅領し、百千萬の針を以て其の舌上を刺す。業力の故に活く。驅つて火坑て至つて而も中に擲入するに而も亦死せず。是の如く展轉して餘の地獄に入り、三劫を經歷す。是の人は復南贍部洲に於て貧賤の家に生じ其の身盲瞑なり。斯の苦報を受く。愼みて常住財物を盜用すること勿れ。若し苾芻持戒せば應に[四六]三衣を受持すべし。若し王宮に入れば應當に第一大衣を披持すべし。若し常衆中ならば應當に第二衣を披持すべし。若し作務時、或は村落に入り、或は城隍に入り、或は道行時には應當に第三衣を披持すべし。苾芻應に是の如く三衣を受持すべし。若し戒を得、功德を得、智慧を得ば、我れ苾芻に說かん、應に是の戒を持し、常住財物を盜用することを得ざるべし。猶し火坑の常住の如く、毒藥の常住の如く、重擔の如きは能く救療す可し。若し常住物を盜用する者は純く救濟する無しと。爾の時、具壽阿難陀は世尊に白して言く。佛の敎勅の如く當に行學を具すべし。若し苾芻別解脫を受持せば應に善く世尊の學處に安住し守護すべしと。時に[四七]具壽阿難陀、佛足を頂禮して遶り已つて退りき。時に諸大聲聞は各々本處に退還し、一切世間の天龍、藥叉、彥達嚩、阿蘇囉、蘗嚕拏、緊那囉、摩護囉誐、人、非人等は佛の說を聞き已り歡喜信受し佛を禮して退りき。（終）

【四六】三衣は一に僧伽梨、二に鬱多羅僧、三に安陀會と云ふ。

【四七】具壽、比丘の通稱、師より弟子を呼ぶに用ふ。

復毛孔有り、名づけて大樂と曰ふ。中に於て無數百千萬倶胝那庾多の初發心の菩薩有り。善男子よ、彼の毛孔に於て九萬九千の山有り、此の山中に於て金剛寶窟、金寶窟、銀寶窟、帝青寶窟、蓮華色寶窟、綠色寶窟、玻胝迦色寶窟有り。是の如き山王に八萬の峯有り、種々適意の華尼及び諸妙寶をもて其の上を莊嚴す。彼の峯の中に於て彥達嚩衆有り、恒に樂音を奏す。彼の初發心の菩薩は空無相無我、生苦老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、墮阿鼻地獄苦、墮黑繩地獄諸有情苦、墮餓鬼趣諸有情苦を思惟す。是の思惟を作す時、結跏趺坐して三昧に入り、彼の山中に於て住す。善男子よ、一毛孔有り、續畫王と名づく。是の中に無數百千萬倶胝那庾多の緣覺衆有り、火焰光を現ず。彼の毛孔に於て百千萬の山王有り、彼の諸山王を七寶もて莊嚴す。復種々の劫樹有り、金銀を葉と爲し、無數百の寶もて種種莊嚴し、上に寶冠珥璫衣服種々瓔珞を懸け、諸法鈴憍尸迦衣を懸く。復金銀寶鈴有つて震響すること丁丁たり。是の如き劫樹山中に充滿し。無數の緣覺彼に於て住し、常に契經、應頌、授記、諷頌、譬喩、本生、方廣、希法、論議、是の如きの法を說く。除蓋障よ、時に諸緣覺は彼の毛孔より出づ。最後に一毛孔有り、名づけて幡王と曰ふ。廣さ八萬踰繕那、中に於て八萬の山有り、種々の妙寶及び適意の摩尼を以て嚴飾と爲す。彼の山王中に無數の劫樹、無數百千萬の栴檀香樹、無數百千萬の大樹有り。復金剛寶地有り。復九十九の樓閣有り、上に百千萬の金寶眞珠瓔珞衣服を懸く。彼の毛孔に於て是の如く出現すと。除蓋障の爲に說き已る。

爾の時、佛、阿難陀に告げたまふ。[四三]若有るが業報を知らざれば、精舍內に於ける洟唾及び大小便利等今汝が爲に說くべし。若し常住地に於て洟唾する者は、是の人は娑羅樹中に生じ、針口蟲と爲り十二年を經ん。若し常住地に於て大小便利する者は、是の人は波羅奈大城に於ける大小便利中に生じて穢汚蟲と爲らん。若し常住[四四]齒木を利用する者は龜魚及び[四五]摩竭魚中に墮在して生ぜん。若し常住油床米豆等を盜用する者は餓鬼趣中に墮在し、頭髮蓬亂し身毛皆竪ち、腹は大なること山の

[四三] 佛、阿難の爲に業報の因緣を說く。
[四四] 齒木(Danta-kāṣṭham) 長さ十二寸あり、一端を叩き毛の如くし、齒牙を洗滌するに用ふ。
[四五] 摩竭魚(Makara) 鯨魚なり。

供養すべし。爾の時、除蓋障菩薩は頭面もて法師の足を禮し已り、既に其の意を滿足するを獲て彼を辭して去る。而して復祇陀林園に往詣し、到り已つて佛足を頂禮す。

爾の時、世尊釋迦牟尼如來應正等覺は告げて言く。善男子よ、汝は已に所得有るを知ると。是の如し世尊よ。是の時に於て七十十倶胝の如來應正等有つて皆來り集會す。彼の諸如來同じく陀羅尼を說いて曰く。

曩莫入颯鉢哆二合引喃引二三藐訖三二合沒馱三句引致喃引四怛儞也二合反他五去唵引左肆引祖隷引噂上禰引六娑嚩二合引賀引十

是に於て七十七倶胝の如來應正等覺は此の陀羅尼を說きたまふ時、彼の觀自在菩薩の身に一毛孔有り、日光明と名づく。是の中に無數百千萬倶胝那庾多の菩薩有り。彼の日光明毛孔中に於て復一萬二千の金山有り、其の一一の山に各千二百の峯あり、其の山の周匝は蓮華色寶を以て莊嚴を爲す。而して周匝に於て天摩尼寶の適意の園林有り、又種々の天池有り、又無數百千萬の金寶莊嚴の樓閣有り、上に百千の衣服眞珠瓔珞を懸く。彼の樓閣中に微妙の如意寶珠有り、彼の諸菩薩摩訶薩に一切所須の資具を供給す。時に諸菩薩樓閣中に入りて六字の大明を念ず。是の時、涅槃地を見、彼の涅槃地に到り、如來を見、觀自在菩薩摩訶薩を觀見し、心に歡善を生ず。是に於て菩薩彼の樓閣より出でゝ經行處に往く。而して其の中に於て諸寶園有り。而して復浴池に往詣す。復蓮華色寶山に往き、一面に在つて結跏趺坐して三昧に入る。是の如く、善男子よ、菩薩は彼の毛孔に住す。善男子よ、復毛孔有り、帝釋王と名づく。其の中に無數百千萬倶胝那庾多の不退轉の菩薩有り。是の帝釋王毛孔中に於て復八萬の天金寶山有り、其の山中に於て如意摩尼寶有り、蓮華光と名づく、彼の菩薩の心に思惟する所に隨つて皆成就を得。時に彼の菩薩彼の山中に於て、若し飲食を念ぜば滿足せざる無く、而も輪廻煩惱の苦無し。恒時に其の身を思惟し、思惟すること異ること無し。善男子よ、

已が舍宅に收むるが如し。器は盛るに盈滿せば日に曝し乾しめ、搏治扇颺して彼の糠皮を棄つ。何を以ての故にとならば精米を收めんが爲なり、是の如く餘の異れる瑜伽は彼の糠皮の如し、一切の瑜伽中に於て此の六字の大明王は精米を見るが如し。善男子よ、菩薩は斯の法の爲の故に施波羅蜜多及び持戒、忍辱、精進、靜慮、般若波羅蜜多を行ず。善男子よ、此の六字大明王は値遇すること得難し、但し一遍を念ぜば是の人は當に一切如來に衣服飲食湯藥及び座臥等の資具の一切を以て供養するを得べしと。

[四二]爾の時、除蓋障菩薩は法師に白して言く。我に六字の大明陀羅尼を與へたまへと。時に彼の法師正念思惟す。而ち虛空に於て忽に聲有つて云く。聖者よ、是の六字の大明王を與へよと。時に彼の法師思惟すらく、是の聲は何れより而も出づるやと。虛空中に於て復聲を出して云く。聖者よ、今此の菩薩は加行して冥應を志求す、是の六字の大明王を與へよと矣。時に彼の法師虛空中を觀見するに、[四三]蓮華手蓮華吉祥あり、秋月の如き色の髮髻寶冠を頂戴し、一切智もて殊妙に莊嚴す。是の如き身相を見る。法師除蓋障に告げて言く。善男子よ、觀自在菩薩摩訶薩は汝に六字の大明王陀羅尼を與へしむ可し。汝應に諦聽せよと。時に彼合掌虔恭し、是の六字大明王陀羅尼を聽く。曰く。

唵引麽抳鉢訥銘二合引吽引

是に於て彼の陀羅尼を與ふる時、其の地悉く皆六種に震動す。除蓋障菩薩は此の三摩地を得る時、復微妙慧三摩地を得、慈悲三摩地、相應三摩地を發起す。是の三摩地を得已る時に除蓋障菩薩摩訶薩は四大洲に滿つる中の七寶を以て奉獻して法師を供養す。是に於て法師告げて言く。今供養する所は未だ一字に直せず、云何んか六字の大明を供養せんや。汝の供を受けず、善男子よ、汝は是れ菩薩なり、聖者にして非聖に非らずと。彼の除蓋障復價値百千の眞珠瓔珞を以て法師に供養す。時に彼の法師言く。善男子よ、當に我が言を聽くべし。汝は應に此を持して釋迦牟尼如來應正等覺を

てはー切の根本なる六字明を云ふ。

[四二] 觀音、法師に六明を說かしむ。

[四三] 蓮華手は觀音の別名。

六字の大明陀羅尼は、若し戴持して身中に在く者有らば、是の人も亦貪瞋癡の病に染著せずと。爾の時、除蓋障菩薩は彼の足を執り白して言く。未だ明眼を具せず、妙道に迷失す。誰か引導を爲すや。我れ今渇法す願くは法味をもて濟ひたまへ。今我れ未だ無上正等菩提を得ず。善く菩提の法種に安住し、色身清淨にして衆善を壞せざらしめ、諸有情をして皆是の法を得しめたまへ。衆人說いて言く、悋惜を懷く勿れと。唯願くは法師よ、我に六字の大明王法を與へ。我等をして速に阿耨多羅三藐三菩提を得しめ、當に十二法輪を轉じて一切有情の輪廻の苦惱を救度すべし。此の大明王法は昔より未だ聞ざる所なり。今我をして六字の大明王陀羅尼を得しめたまへ。救無く依無きは爲に恃怙と作し。闇夜の中の燃明炬と爲らんと。時に彼の法師告げて言く。此の六字の大明王陀羅尼は値遇すること難し、彼の金剛の如く破壞す可らず。無上智を見るが如く、無盡智の如く、如來清淨智の如く、無上解脫に入るが如く貪瞋癡輪廻の苦惱を遠離す。[三六]禪、解脫、三摩地、三摩鉢底の如く、入一切法の如し。而して恒時に於て聖衆愛樂す。若し善男子有つて種々の處に於て解脫を求むるが爲に種々の外道の法を遵奉し、所謂る帝釋に敬事し、或は[三七]白衣に事へ、或は[三八]青衣に事へ、或は日天に事へ、或は大自在天、那羅延天、韈嚕拏中、裸形外道中に事へ、是の如き處を愛樂す。彼等は解脫を得ず、無明にして虛妄なり。空しく修行の名を得て徒に自ら疲勞す。一切の天衆、大梵天王、帝釋天主、那羅延天、大自在天、日天、月天、風天、水天、火天、閻魔法王、四大天王は而も恒時に於て云何んか我が六字の大明王を求むるや。彼等は我が六字の大明王を得て皆解脫を得るが故なり。除蓋障よ、一切如來般若波羅蜜多の母は是の如き六字の大明王を宣說す。一切如來應正等覺及び菩薩衆は而も皆恭敬し合掌し作禮す。善男子よ、此の法は大乘中に於て最上にして精純微妙なり。何を以ての故にとならば諸大乘契經、[三九]應頌、授記、諷頌、譬喩、本生、方廣、希法、論議中に於て得ればなり。善男子よ、斯の[四〇]本母を獲れば寂靜にして解脫す、何ぞ多を假らん耶。猶し精稻穀を

【三六】禪は四禪、解脫は八解脫、三摩地は等持、三摩鉢底は等至なり。
【三七】白衣は俗人なり。
【三八】青衣は沙彌なり。
【三九】應頌は重頌とも云ふ。前に說く長行の意を重ねて頌を以て說けるもの。授記は菩薩に成佛の記別を授くる經。諷頌は孤起頌とも譯す、長行無く、頌のみを說く。譬喩は經中譬喩を說けるもの。本生は佛の過去物語を說けるもの。方廣は方正廣大なる理を說けるもの。希法は佛の神力不思議を現ぜるを說くもの、論議は法理を論議せるものなり。これ十二分敎中に擧ぐるものなり。
【四〇】本母(Matrika)とゝに．

有り、大小便利もて[三一]袈裟を觸汚し、威儀有ること無しと。

[三二]爾の時、除蓋障は世尊に白して言さく。佛の敎勅の如しと。是に於て除蓋除菩薩は無數の菩薩、出家の衆。長者、童子、童女と擁從して供養を興さんと欲し、其の天蓋及び諸の供具寶冠珥璫、莊嚴の瓔珞、指鐶寶釧、憍尸迦等の衣服綺綵臥具を持し。復種々の妙華有り、所謂る優鉢羅華、矩母那華、奔拏哩迦引華、[三三]曼那囉華、摩訶曼那囉華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、優曇鉢羅華なり。復種種の樹華有り、[三四]瞻波迦華、迦囉尾囉華、波吒攞華、阿底目訖多二合迦華、嚩嘌史二合迦引設華、君去哆華、蘇摩娜華、麼哩迦引華なり。而して鴛鴦白鶴[三五]舍利有り、飛騰して隨ふ。復百種の藥有り。青黃赤白紅玻胝迦等色なり。復種々の珍果有り。是の如き等の供養の物を持して波羅奈大城に往き法師の所に詣り、到り已つて頭面もて足を禮す。彼の法師を見るに戒行缺犯して威儀有ること無しと。雖も所持の繖蓋供具香華衣服莊嚴物等を以て大に供養を興し畢已り、合掌して彼の法師の前に住つて言く。大法藏は是れ甘露味藏なり、是れ甚深法海なり、由し虛空の如し。一切の人は汝の說法を聽く。天龍、藥叉、彥達嚩、阿蘇囉、誐嚕拏、摩護囉蘖、人、非人等は汝の說法の時に於て一切皆來り、汝の說法を聽く。大金剛の如く諸有情をして纏縛輪廻の報を解脫せしむ。彼等有情は斯の福德を得。此の波羅奈大城所住の人は常に汝を見るが故に諸罪悉く滅すること猶し、火に於て林木を焚燒するが如し。如來應正等覺は汝を了知す。今無數百千萬俱胝那庾多の菩薩有り、汝に來詣して供養の事を興す。大梵天王、那羅延天、大自在天、日天、月天、風天、水天、火天、閻魔法王、幷に四大天王皆乘つて供養すと。

是の時に法師白し言く、善男子よ、汝は戲を爲す耶、實に所求有るが爲に聖者は爲に世間に於て輪廻煩惱を斷除する耶。善男子よ、若し此の六字の大明王陀羅尼を得る者有れば、是の人は貪瞋癡の三毒染汚する能はず。猶し紫磨金寶に塵垢の染著す可からざるが如し。是の如く善男子よ、此の

【三一】袈裟(Kaṣāya)不正、壞、濁、染等と譯す。比丘の法衣は青黃色白黑の五正色を避けて雜色を用ふる故に袈裟と云ふ。
【三二】除蓋障、持明法師に五六字の明を乞ふ。
【三三】曼殊沙(Mañjuṣakam)柔軟、赤色花。
摩訶曼殊沙(Mahāmañjuṣakam)大柔軟。
優曇鉢羅(Utpalam)青蓮花。
【三四】瞻波迦(Campakaḥ)金色花。
迦囉尾囉(Karavira)
波吒攞(Pāṭala)重葉樹。
阿底目訖多迦(Atimuktaka)苣勝子。
嚩㗚史迦設
君哆(Kundam)拱難花。
蘇摩娜(Sumana)花色。黃白にして甚香あり。
麼哩迦(Mallikā)蔓花。
【三五】舍利(Śāri)鳥名'Sārikāと云はるゝ鳥。

得せしむるや。世尊よ、是の如く甘露に相應する德味充滿す。世尊よ、我れ若し是の陀羅尼を聞くを得ば而ち懈惓無く、心に念し思惟して而も能く受持し、諸の有情をして而も是の六字の大明陀羅尼を聞くを得て大功德を獲しめん。願くは爲に宣說したへと。

二八 佛告げたまはく、善男子よ、若し人有つて此の六字の大明陀羅尼を書寫する者は則ち八萬四千の法藏を書寫するに同じくして而も異り有ること無し。若し人有つて天の金寶を以て如微塵數の如來應正等覺の形像を造作し、是の如く作り已り、而し一日に於て慶讃供養して獲る所の果報は此の六字の大明陀羅尼中の一字を書寫して獲る所の果報功德の不可思議にして善く解脫に住するに如かず。若し善男子善女人あつて法に依つて此の六字の大明陀羅尼を念する者は、是の人に當に三摩地を得べし。所謂る持摩尼寶三摩地、廣博三摩地、淸淨地獄傍生三摩地、金剛甲冑三摩地、妙足平滿三摩地、入諸方便三摩地、入諸法三摩地、觀莊嚴三摩地、法車聲三摩、地遠離貪瞋癡三摩地、無邊際三摩地、六波羅蜜多門三摩地、持大妙高三摩地、救諸怖畏三摩地、現諸佛刹三摩地、觀察諸佛三摩地なり、是の如き等の一百八三摩地を得と。是の時、除蓋障菩薩、佛に白して言く世尊よ、我は今爲に何處に於て我れをして是の六字の大明陀羅尼を得しめたまふや。願くは爲に宣示したまへと。

二九 佛告げたまはく、善男子よ、波羅奈大城に於て一法師有り、而して常に作意して六字の大明陀羅尼を受持し課誦すと。世尊に白して言く、我れ今波羅奈大城に往き彼の法師を見、禮拜供養せんと欲すと。佛言く、善哉善哉、善男子よ、彼の法師は値遇すること得難し。能く是の六字の大明陀羅尼を受持す。彼の法師を見れば如來を見ると同じくして異ること無く、功德の聖地を見るが如く、又福德の聚を見るが如く、珍寶の積るを見るが如く、施願如意摩尼珠を見るが如く、法藏を見るが如く救世者を見るが如し。善男子よ、汝若し、彼の法師を見れば其の輕慢疑慮の心を生ずるを得ざれ。善男子よ、恐くは汝の菩薩の地を退失し、反つて沈淪を受けん。三〇 彼の法師は戒行缺犯して而も妻子

【二八】 佛、持明の功德を說く。

【二九】 佛、持誦者の功德を說く。

【三〇】 持誦者の相を說く。

行して解脱を志求せば是の如きの人は應に與ふべし。外道異見に與ふべからずと。是の時、無量壽如來應正等覺は觀自在菩薩訶薩摩に告げて言く。善男子よ、若し是の如き五種の色寶粖有れば當に是の曼拏攞を建置し得べし。若し善男子善女人あつて貧匱にして是の寶粖を辦じ能はざる者は云何んと。觀自在白して言く。世尊よ、當に方便を以て種々の顏色を用ひて而も作り、種々の香花等を以て供養すべし。若し善男子而も亦辦ぜず、或は旅停に寄り、或は道に在つて行く時は、阿闍梨意想を運んで曼拏攞を成じ、阿闍梨印相を結ぶと。[二四]是の時、蓮華上如來應正等覺は觀自在菩薩に告げて言く。善男子よ、我が與に是の六字の大明王陀羅尼を說け。我れ無數百千萬倶胝那庾多の有情の爲に輪廻の苦惱を離れ、速疾に阿耨多羅三藐三菩提を證得せしめんが故なりと。

是の時に觀自在菩薩摩訶薩は蓮華上如來應正等覺の與に是の六字の大明陀羅尼を說いて曰く。

[二五]唵引 麼抳鉢 訥銘 二合 吽引

當に此の六字の大明陀羅尼を說くべき時に此の四大洲並に諸天宮悉く皆震搖すること芭蕉の葉の如し。[二六]四大海の水の波浪騰湧し、一切の尾那野迦、藥叉、囉刹娑、拱伴拏、[二七]摩賀迦攞等、並に諸眷屬、諸魔作障者は悉く皆怖れ散じて馳走す。

爾の時、蓮華上如來應正等覺は象王の鼻の如き臂を舒べて觀自在菩薩摩訶薩に價値百千の眞珠瓔珞を授與したまひ以て用ひて供養したまふ。觀自在菩薩既に受得し已り、持して彼の無量壽如來應正等覺に上げ奉る。彼の佛受け已り、還つて持して蓮華上如來に上げ奉る。而して是の時に於て蓮華上佛は既に是の六字の大明陀羅尼を受得し已り、而して還つて復彼の蓮華上世界の中にあり。是の如く、善男子よ、我れ往昔の時に於て、彼の蓮華上如來應正等覺の所に於て是の陀羅尼を聞くを得たり。

爾の時、除蓋障菩薩、而ち佛に白して言く。世尊よ、我をして云何んか是の六字の大明陀羅尼を

【二四】觀自在、蓮華上如來の爲に六字明を說く。

【二五】Oṁ maṇi padme hūṁ

【二六】四大海、須彌山を中央にし、その四方にある大海。

【二七】摩賀迦攞（Mahākāla）大黑と譯す。天神の名なり。

の如來に承事し供養したてまつり、未だ曾て是の六字の大明王陀羅尼を得ず。唯願くは世尊よ、我が愚鈍を救ひたまへ。不具足者に具足を得しめ、迷失路者に道路を引示し、陽災には爲に蔭覆を作り、四衢道に於て[16]娑羅樹を植うるが如し。我れ心に是の法を渇仰す、唯願くは示導し、善く究竟の道に住り、金剛年冑を擐せしめたまへと。

是の時、[18]無量壽如來應正等覺は[17]迦陵頻伽の音聲を以て觀自在菩薩摩訶薩に告げて言く。善男子よ、汝は是の蓮華上如來應正等覺を見たてまつる。此の六字の大明陀羅尼の爲の故に無數百千萬俱胝那庾多の世界を遍歷す。善男子よ、汝は應に此の六字の大明を與ふべし。此の如來は是の爲の故に此に來ると。[19]觀自在菩薩は世尊に白して言く。曼拏攞を見ざる者は此の法を得る能はず。云何んか是の[20]蓮華印を知り、云何んか是の持摩尼印を知り、云何んか思の一切王印を知り、云何んか是の曼拏攞の淸淨體を知るや。今此の曼拏攞の相は周圍四方は方に各五[21]肘量、中心の曼拏攞に無量壽を安立す。粉布するに應に[22]因捺囉二合禰攞寶粖、鉢訥麼二合囉引誐寶粖、摩囉揭多寶粖、玻胝迦寶粖、蘇嚩囉拏二合嚕二引播寶粖を用ゆべし。無量壽如來の右邊に於て持大摩尼寶菩薩を安じ、佛の左邊に於て六字の大明を安ず。四臂にして肉色白きこと月色の如く、種々の寶もて莊嚴す。左手は、蓮華を持ち、蓮華の上に摩尼寶を安ず。右手は數珠を持ち、下の二手は一切王印を結び、六字大明の足下に於て天人を安ず。種々に莊嚴し、右手は香爐を執り、左手の掌の鉢は諸寶を滿盛す。曼拏攞の四角に於て四大天王を列ぬ。種々の器伏を執持す。曼拏攞の外の四角に於て四賢瓶を安じ種々の摩尼の寶を滿盛す。若し善男子、善女人有つて是の曼拏攞中に入らんと欲する者は所有る眷屬は是の曼拏攞中に入るゝに及ばず、但其の名を書け。彼の先に入る者は彼の眷屬の名字を擲つて曼拏攞中に入れよ。彼の諸眷屬は皆菩薩の位を得。其の人中に於て諸苦惱を離れ、速疾に阿耨多羅三藐三菩提を證得す。彼の[23]阿闍梨は妄に傳ふるを得ず。若し方便善巧有つて深く大乘を信じ、加

【一六】 娑羅(Śāla)、譯して堅固と云ふ、四方に八株あり、高さ五丈、四榮四枯、下根相通し、上枝相合すと。

【一七】 無量壽佛、觀自在に六字明を乞ふ。

【一八】 迦陵頻伽(Kalaviṅka)好聲或は和雅と譯す。鳥の名なり。

【一九】 觀自在、作壇法を說く。

【二〇】 蓮華印、二年虛心合掌、二頭指、二中指、二無名指を各開き立つ。八葉の印なり。

【二一】 一肘量(Hasta)七麥は一指節、三節を一指とし、三十四指を一肘とす。

【二二】 因捺囉禰攞 (Indranīlam)帝釋青。

鉢訥麼囉誐(Padmarāgaḥ) 映結。

摩囉揭多(Marakatam)綠色寶。

玻胝迦(Sphaṭikam)水精。

蘇嚩囉拏嚕播 (Suvarṇarūpyam ?)金銀。

【二三】 阿闍梨 (Ācārya) 範師と譯す。

能く拂ひ盡して餘無し。若し有るが六字大明一遍を念ぜば獲る所の功德は而も我れ數量を說き盡す能はず。善男子よ、又大海の深さ八萬四千踰繕那にして穴口廣濶にして無量なるが如きは、我れ能く一毛端を以て滴り盡して餘無し。善男子よ、若し有るか此の六字大明一遍を念ぜば獲る所の功德は而も我れ數量を說き盡す能はず。善男子よ、又大[一二]尸利沙樹林の如きは我れ一一の葉數を能く數へ盡す。善男子よ、若し有るが此の六字大明一遍を念ぜば獲る所の功德は而も我れ數量を說き盡す能はず。善男子よ、又四大洲に滿ちて所在せる男子女人童子童女の如きは、是の如き一切のもの皆七地の菩薩の位を得るも、彼の菩薩衆所有の功德は六字の大明一遍を念ぜる功德と而も異ること有ること無し。善男子よ、又十二月の年を除き、閏の一十三月に遇ふ。餘の閏月を以て算數して年と爲し、是して天上の一劫を滿じ、其の晝夜に於て常に大雨を降らすが如し。善男子よ、是の如きは我れ能く其の一一の滴數を數ふ。若し有るが此の六字の大明陀羅尼一遍を念ぜば功德を念の數量は彼より甚だ多し。意に於て云何ん。善男子よ、又如し一俱胝數の如來、一處に在して天の一劫を經て衣服飲食座臥の敷具を以て及び湯藥受用の資具を以て種々に彼の諸如來を供養するも而も亦六字大明の功德の數量を數へ盡すこと能はず。唯我れ今此の世界に在て、我れ定中に不可思議を起すのみにあらず、善男子よ、此の法は微妙にして[一三]加行觀智一切相應す。汝未來に於て當に是の微妙の心法を得べし。彼の觀自在菩薩摩訶薩は善く是の如き六字の大明陀羅尼に住す。

[一四]善男子よ、我れ加行を以て無量百千萬俱胝那庾多の世界を遍歷し、彼の無量壽如來の所に到り、前に在つて合掌して法の爲の故に涕泣流涙す。時に無量壽如來、我が見在するを知り、及び未來を以て我に告げて言く、善男子よ、汝は此の六字の大明王の[一五]觀行瑜伽を須ふる耶と。我れ時に白し言く。我れ是の法を須ふ、世尊よ。我れ是の法を須ふ、善逝よ。渴乏の者の而も其の水を須ふるが如し。世尊よ、我れは是の六字の大明陀羅尼の爲の故に無數の世界に行き、無數百千萬俱胝那庾多

[一二] 尸利沙は吉祥の義。尸利沙樹は合昏樹なり。

[一三] 加行、正位に入る準備として修する行。觀智は法を觀ずる正智なり。

[一四] 蓮華上如來無量壽佛に六字の明を乞ふ。

[一五] 觀行は三密の觀行、瑜伽は彼此一體となれる境を云ふ。

我れ能く其の數量を救ふ。善男子よ、若し有るが此の六字の大明陀羅尼一遍を念ぜば、獲る所の功德は而も我れ能く其の數量を數ふ能はず。善男子よ、又大海の所有る沙數の如きは我れ能く其の一一の數量を數ふ。善男子よ、若し六字の大明陀羅尼一遍を念ぜば、獲る所の功德は而も我れ其の數量を數ふ能はず。善男子よ、又如し天人造立の庫廩あつて、周り一千【二】踰繕那、高さ一百踰膳那にして、脂麻を貯積し其の中に盈滿して而も針を容るる無く、其の守護者不老不死にして百劫を過ぎて其の一粒の脂麻を擲ちて外に在り。是の如くして倉內擲ち盡して餘無きも我れ能く其の數量を數ふ。善男子よ、若し六字の大明一遍を念じて獲る所の功德は而も我れ其の數量を數ふ能はず。善男子よ、又如し四大洲に種々の穀麥等の物を種植し、龍王雨澤を降澍するに時を以てし植うる所の物悉く皆成熟し、收刈俱に畢り、南贍部洲を以て而も其の場と爲し、車乘等を以て場所に般運し、治踐俱に畢り都て大聚を成す。善男子よ、是の如きは我れ能く其の一一の粒數を數ふ。善男子よ、若し此の六字の大明一遍を念ぜば獲る所の功德は我れ則ち其の數量を數ふ能はず。善男子よ、此の南贍部洲の所有る大河は晝夜流注す。所謂る枲多河、殑誐河、焰母那河、嚩芻河、設多嚕捺囉、二合河、賛捺囉二合、婆藥河、愛囉嚩底河、蘇摩誐駄河、嗰摩河、擺戍那哩河なり。此の一一の河に各五千眷屬の小河有り。其の晝夜に於て大海に流入す。是の如く善男子よ、彼等大河は我れ能く其の一一の滴數を數ふ。善男子よ、若し此の六字大明一遍を念ぜば獲る所の功德は而も我れ其の數量を數ふ能はず。善男子よ、又如し四大洲所有の四足の有情、師子象馬野牛水牛虎狼猴鹿羖羊豺兎、是の如き等の四足の類は我れ能く其の一一の毛數を數ふ。善男子よ、若し六字大明一遍を念ぜば獲る所の功德は而も我れ其の數量を數ふ能はず。善男子よ、又如し金剛鉤山王の高さ九萬九千踰繕那、下八萬四千踰繕那にして、彼の金剛鉤山王は方面各八萬四千踰繕那あり、彼の山に人有つて不老不死にして一劫を經て彼の山を旋繞して而も一匝するを得るに、是の如き山王は我れ憍尸迦衣を以て、我れ

【二】踰繕那(Yajana)四十里或は三十里を一踰繕那と云ふ。

巻の第四

[一]爾の時、除蓋障菩薩而ち佛に白して言く。世尊よ、我れ今云何んか是の六字の大明陀羅尼を得るや。若し彼を得る者は不可思議無量の[二]禪定相應し、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに同じく、解脫門に入つて涅槃地を見、貪瞋永く滅して法藏圓滿し、[三]五趣の輪廻を破壞して諸地獄を淨め、煩惱を斷除して[四]傍生を救度し、法味を圓滿し[五]一切智智をもつて演說して盡くること無し。世尊よ、我は是の六字の大明陀羅尼を須ひん。我れ此の爲の故に四大洲を以て中に七寶を滿して布施し以て書寫を爲さん。世尊よ、若し紙筆乏しければ我れ身を刺し血以て墨と爲し、皮を剝いで紙と爲し、骨を折つて筆と爲さん。是の如く、世尊よ、我は悔悋すること無く、尊重すること我が父母の如しと。

[六]爾の時、佛、除蓋障菩薩に告げて言く。善男子よ、我れ過去世時を念ずるに、此の六字の大明陀羅尼の爲に如微塵數の世界を遍歷し、我れ無數百千萬俱胝那庾多の如來を供養す。我れ彼の諸如來の處に當るに得ず而も亦聞かず。[七]時に世に佛有り、寶上如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊と名づく。我れ彼の佛前に當つて涕淚悲泣す。時に彼の如來正等覺の言く。善男子よ、汝去れ、應に悲泣する勿れ。善男子よ、汝往いて彼に到れ、蓮華上如來應正等覺を見ん。彼の處に在す彼の佛は是の六字の大明陀羅尼を知りたまはんと。善男子よ、[八]我れ當に寶上如來の所を辭し離れて蓮華上如來佛刹に往詣すべし。到り已つて佛足を頂禮し合掌して前に在り。唯願くは世尊よ、我に六字の大明陀羅尼を與へたまへ。彼の眞言王一切[九]本母は其の名を憶念するに罪垢消除し、疾に菩提を證す。此の爲の故に我れ今疲困す。我れ無數の世界に往くに而も得ること能はず。今廻りて此の處に來ると。

[一〇]是の時、蓮華上如來、即ち此の六字の大明陀羅尼の功德を說いて言く。善男子よ、所有る微塵は

【一】除蓋障、佛に六字明を得る因緣を問ふ。
【二】禪(馱衍那 Dhyāna)は定(Samāpatti)の中有心定の四禪を云ふ。禪は定と慧と平等に相應せるもの、而して慧の揀擇の作用滅じ、定の作用なる止が增加せるを定と云ふ。故に禪は心が惛沈と掉擧を離れて安和の狀態になると共によく法を揀擇し決定するを云ひ、定は心の專ら安和なる狀態を云ふ。
【三】五趣、趣は有情の所趣を云ふ。地獄、餓鬼、畜生、人、天を五趣と云ふ。
【四】傍生は畜生なり。
【五】一切智智(Sarvajñāna)一切の智の中最尊最勝なる智を云ふ。即ち本有の眞智なり。
【六】佛、過去世に於ける六字明尋求の因緣を說く。
【七】寶上如來の處に六字明を求む。
【八】蓮華上如來の處に六字明を求む。
【九】本母(Mātṛkā)、出生の義。
【一〇】蓮華上如來六字明の功德を說く。

得、淸淨智聚を得、大慈悲を得。是の如きの人は日々に六波羅蜜多を具し圓滿の功德を得。是の人は天の[二七]轉輪灌頂を得。是の人の其の口中に於て出づる所の氣は他人の身に觸れ、觸るゝ所の人は慈心を發起し、諸の瞋毒を離れて不退轉の菩薩となるを、得速疾に阿耨多羅三藐三菩提を證得すべし。若し此の戴持の人、手を以て餘人の身に觸れば所觸を蒙る者は、是の人は速に菩薩の位を得。若し是の戴持の人其の男子女人童男童女乃至異類の諸有情の身を見れば、是の如く見らるゝを得たる者は悉く皆速に菩薩の位を得。是の如きの人は而も永く生老病死の苦、愛別離の苦を受けず、而も不可思議相應の念誦を得。今此の六字の大明陀羅尼は是の如き說を作すと。

【二七】轉輪灌頂、轉輪聖王の王子、王位に即く時の灌頂を云ふ。而して授職灌頂はこの即位の灌頂の如しと說が故に是れ授職灌頂を指すものなり。

時に除蓋障菩薩は世尊に白して言く。世尊、今此の六字の大明陀羅尼は何處從り而も得と爲す耶と。佛、善男子に告げたまふ、此の六字の大明陀羅尼は値遇すること得難し、如來に至るも而も亦所得の處を知らず、[二二]因位の菩薩は云何か而も能く得處を知らん耶と。除蓋障菩薩、世尊に白して言く、是の如き陀羅尼を今佛如來應正等覺は云何んか而も知らざる耶と。

[二三]佛、善男子に告げたまふ、此の六字の大明陀羅尼は是れ觀自在菩薩摩訶薩の微妙の本心なり。若し是の微妙の本心を知るもの有れば卽ち解脫を知ると。時に除蓋障菩薩、世尊に白して言く、世尊よ、諸有情中に能く是の六字の大明陀羅尼を知る者有りや不やと。佛言く、知者有ること無し。善男子よ、此の六字の大明陀羅尼は無量相應の如來も而も尙ほ知り難し。菩薩は云何か而も此の觀自在菩薩の微妙の本心處を知るを得んや。我れ他方國土に往くに是の六字の大明陀羅尼處を知る者有ること無し。若し人有つて能く而も常に此の六字の大明陀羅尼を受持する者有らば是の持誦の時に於て九十九殑伽河沙數の如來有つて集會し、復如微塵數の菩薩有つて集會し、復[二四]三十二天の天子衆有つて亦皆集會し、後四大天王有つて而も四方に於て其の衞護と爲る。復[二五]娑誐囉龍王、無熱惱龍王、得叉迦龍王、嚩蘇枳龍王、是の如き無數百千萬俱胝那庾多の龍王有つて而も來つて是の人を衞護す。復地中の藥叉、虛空神等有つて而も亦是の人を衞護す。善男子よ、觀自在菩薩の身の毛孔中の俱胝數の如來は止息し已つて是の人を讃歎して言く、善哉善哉、善男子よ、汝能く是の如意摩尼の寶を得たり。汝の七代の種族は皆當に其の解脫を得べしと。善男子よ、彼の持明の人は其の腹中に於ける所有諸蟲は當に不退轉の菩薩の位を得べし。若し復人の此の六字の大明陀羅尼を以て身中項上に戴持する者あり、善男子よ、若し有るが是の戴持の人を見るを得ば則ち金剛の身を見るに同じ。又[二六]舍利窣堵波を見るが如し。又如來を見るが如し。又一俱胝の智慧を具する者を見るが如し。若し善男子善女人有つて而も能く法に依つて此の六字の大明陀羅尼を念ぜば是の人は而も無盡の辯才を

[二二] 因位、如來の果に對し菩薩を因と云ふ。

[二三] 六字大明の功德を說く。

[二四] 三十二天、無色四天、色界十八天、欲界六天。日月星宿天、常憍天、持鬘天、堅首天以上の三十二天を云ふ。

[二五] 娑誐囉龍王(Sāgaranāgarāja) 無熱惱(Anavataptaḥ) 得叉迦(Takṣakaḥ) 嚩蘇枳(Vasukiḥ)

[二六] 舍利('Sarira)、遺身と譯す。特に佛の身骨を云ひ、總じて死屍を云ふ。

身を遍く莊嚴す。妙塗香を以て用ひて其の體に塗り、見者は歡喜す。而し彼は恒時に佛法僧を念じ、不壞信を得、法忍慈に住し、寂滅を思惟し、輪廻を遠離す。是の如し是の如し、善男子よ、彼の緊那囉衆は心に愛樂を生ず。彼の毛孔に無數の山有り、而もその中に於て金剛寶窟、金寶窟、銀寶窟、玻胝迦寶窟、蓮華胝色寶窟、青色寶窟有り。復七寶窟を具足する有り。是の如く、彼の毛孔に於て斯の變現有り。而して是の如く、彼の毛孔に於て斯の變現有り。而して是の中に於て又無數の劫樹、無數の栴檀大樹、微妙香樹、無數の浴池、百千萬の天宮寶殿、玻胝迦をもつて莊嚴せる巧妙清淨適意の寶殿有つて彼に於て出現す。是の如き宮殿は緊那囉衆共の中に止息し、旣に止息し已つて微妙の法を說く。所謂る布施波羅蜜多法及び持戒忍辱精進靜慮智慧波羅蜜多法なり。是の波羅蜜多を說き已り各々經行す。而して是の處に於て黃金の經行道、白銀の經行道有り。是に於て周匝して而も劫樹有り。金銀をもつて葉と爲し、上に種々の天衣寶冠珥璫寶鈴瓔珞有り。是の如く彼の經行處を莊嚴す。又樓閣有り緊那囉是に於て經行し、生苦老苦病苦死苦貧窮困苦愛別離苦冤憎會苦求不得苦に沈淪し、或は針刺地獄、黑繩地獄、喝醯大地獄、極熱大地獄、火坑地獄に墮し、或は餓鬼趣に墮し、是の如く有情の大苦惱を受くるを思惟す。彼の緊那囉は是の思惟を作す。是の如く、善男子よ、彼の緊那囉は甚深の法を樂しみ[二〇]圓寂眞界を思惟す。復恒時に於て觀自在菩薩摩訶薩の名號を念じ、是の稱念に由つて而も是の時に於て諸資具悉く皆豐足するを得。善男子よ、觀自在菩薩摩訶薩は乃し名號に至るまで亦値ふこと得難し。何を以ての故にとならば彼は一切有情の與に大父母の如く、一切の恐怖の有情には之に無畏を施し、一切有情を開導して大善友と爲る。是の如く善男子よ、彼の觀自在菩薩摩訶薩には[二一]六字の大明陀羅尼有つて値遇すること得難し。若し人有つて能く其の名を稱念せば當に彼の毛孔の中に生ずるを得て沈淪を受けざるべし。一毛孔より出でゝ而も復往詣して一毛孔に入り、彼に於て而も住し乃至當に圓寂の地を證すべしと。

[二〇] 圓寂、涅槃を譯して滅度或は圓寂とす。

[二一] 六字明、唵麽抳鉢訥銘吽(Oṁ maṇi padme hūṁ)

薩摩訶薩は而も此に來るは何時に於てと爲すを知る可きやと。佛告げたまはく、善男子よ、此の有情の根の熟するの時を候ちて彼の觀自在菩薩摩訶薩先に來つて此に到ると。時に除蓋障菩薩摩訶薩は手を以て顋を搘へて是の思惟を作す。我れ今云何んか是の罪障有る、壽命長しと雖も而も所益無し、彼の觀自在菩薩を見て恭敬禮拜するを得ざること猶し盲人の道に在つて行くが如しと。時に除蓋障菩薩、復佛に白して言く。世尊よ、彼の觀自在菩薩摩訶薩は實に何時而も此に來ると爲す耶と。

爾の時世尊微笑して告げて言く。善男子よ、觀自在菩薩摩訶薩は彼れ無時に於て而も是れ來時なり。善男子よ、彼の菩薩の身は而も毛孔有り灑甘露と名づく。是の毛孔の中に於て無數百千萬倶胝那庾多の天人有つて其の中に止住す。[一七]初地、二地を證する有り、乃至十地の菩薩摩訶薩の位を證する者有り。除蓋障よ、彼の灑甘露の毛孔の中に而も六十の金銀寶山有り、其の一一の山の高さ六萬踰繕那にして九萬九千の峯有り、天の妙金寶を以て周遍莊嚴す。[一八]一生補處の菩薩は彼に於て而も住す。復無數百千萬倶胝那庾多の彥達嚩衆有り、彼の毛孔に於て而も恒時に諸音樂を奏す。除蓋障よ、彼の灑甘露の毛孔の中に又無數百千萬倶胝那庾多の宮殿有り、天の摩尼妙寶を以て周遍莊嚴す。見者は其の意適然たり。復種々の眞珠瓔珞有つて而も之を校飾す。彼の宮殿に於て各菩薩有つて微妙の法を說く。是の宮殿を出でゝ各々經行し、經行處に於て而も七十七池有り、八功德水其の中に盈滿す。種々の華有り、所謂る[一九]嗢鉢羅華、鉢訥摩華、矩母那華、奔拏利迦華、嗅彥馱迦華、曼那囉華、摩賀曼那囉華なり。其の中に充滿す。彼の經行地には復適意の劫樹有り、天の金銀を以て而も其の葉の莊嚴と爲す。上に於て諸の天冠珥璫珍寶瓔珞を懸け種々莊嚴す。彼の諸菩薩而ち經行し已り、夜分時に於て種々大乘の法を憶念し、寂滅の地を思惟し、地獄鬼趣傍生を思惟す。是の如き思惟を作し已つて慈心三昧地に入る。除蓋障よ、彼の毛孔に於て是の如く菩薩其の中に出現す。復毛孔有り金剛面と名づく。而して其の中に於て無數百千萬の緊那囉衆有り、種々の華鬘瓔珞をもつて

【一七】初地、菩薩の十地の位の最初の歡喜地を云ふ。十地とは一、歡喜地。二、離垢地。三、發光地。四、焰慧地。五、極難勝地。六、現前地。七、遠行地。八、不動地。九、善慧地。十、法雲地なり。

【一八】一生補處菩薩、釋迦如來の佛位を紹ぐ補處の菩薩卽ち彌勒菩薩なり。

【一九】嗢鉢羅(Utpa'am)青蓮花。
鉢訥摩(Padmam)蓮花。
矩母那(Kumudam)黄蓮花。
奔拏利迦(Puṇḍarikam)白蓮花。
嗅彥馱迦(Sangandhikam)勝香。
曼那囉(Mandāravaḥ)白團、或は適意。
摩賀曼那囉(Mahā-mandāravaḥ)

と。

も〔一四〕三時に於て是の觀自在菩薩の名號を念ず。而して是の時に於て彼等は一切の所須の物を獲得すと。

是の時、除蓋障菩薩、佛に白して言く、世尊よ、我れ彼の毛孔の中に入り其の所有を看んと欲すと。佛告げたまはく、善男子よ、彼の毛孔は邊際有ること無く、虛空界の如く亦障礙無し。善男子よ、是の如く毛孔は障無く礙無く亦觸惱無し。彼の毛孔中に普賢菩薩摩訶薩有り、其の中に於て行くこと十二年にして邊際を得ず。諸毛孔の一一の中を見るに各佛部有つて彼に於て住す。是の故に普賢其の邊際の近遠を見る能はず、餘の諸菩薩は云何か而も彼の邊際を見るを得ん耶と。時に除蓋障菩薩、佛に白して言く、世尊よ、普賢菩薩摩訶薩は彼の毛孔に於て行くこと十二年にして其の邊際を見る能はず、而も諸毛孔は各百佛有つて其の中に在り、普賢菩薩摩訶薩も尙ほ邊際を見るを得る能はず、我れ今云何か而も是の中に入るを得るやと。佛告げたまふ、善男子よ、我も亦是の如き微妙寂靜を見ず、彼は無相の故に。而も大身を現じて十一面を具し、而して百千眼圓滿して廣大なり。〔一五〕相應地を得て湛然寂靜なり。大智は得無く輪廻有ること無く、救度を見ず亦種族無し。智慧有ること無く、亦說くこと有ること無し。是の如く諸法は影響の如きが故に、善男子よ、觀自在菩薩は見無く聞無く彼は自性無く乃至如來も亦見ざる所なり。意に於て云何ん。善男子よ、普賢等の諸菩薩は皆具に彼の觀自在の所變化を思議す可からず、了知し能はず。善男子よ、觀自在菩薩摩訶薩は種々に變現して無量百千萬俱胝那庾多の有情を救度す。極樂世界に往生するを得て、無量壽如來を見、法要を聞くを得しめ、皆當に菩提道を成じ得べからしむと。

時に除蓋障菩薩、世尊に白して言く。何の方便を以て我をして是の觀自在菩薩摩訶薩を見るを得しむるを知らずと。佛告げたまはく、善男子よ、彼の菩薩は必ず當に此の〔一六〕索訶世界に來るべし、而して來つて我を見て禮拜供養せんと。時に除蓋障菩薩、佛に白して言く、世尊よ、是の觀自在菩

〔一四〕三時、初夜、後夜、日中を云ふ。

〔一五〕相應(Yoga)、眞理と契合するを云ふ。

〔一六〕索迦(Saha)は忍土と譯す。

斯の一一の劫樹の下に於て各一百の彥達嚩王有つて恒時に於て諸音樂を奏す。復群鹿、羽族の靈禽有り、斯の樂音を聞いて悉く皆思惟すらく。諸の有情の類多く輪廻の苦を受く、何が故に南贍部洲の人は生老病死愛別離等の是の如きの諸苦を受くるを見るやと。此の諸の禽鳥鹿等は是に於て此の大乘莊嚴寶王經の是の如きの名を思惟す。是に於て而ち天妙上味飲食、天の諸妙香、天妙衣服等の物有り、彼の所思に隨ひ如意滿足す。

【三】是の時、除蓋障菩薩世尊に白して言く、我れ今是を聞くに甚だ希有と爲す、世尊と。佛告げたまはく、善男子よ意に於て云何んと。除蓋障菩薩世尊に白して言く、是の如く有情心に唯此の經の名號を思念するに尙ほ是の如き利益安樂を獲、若し復人有つて此の經を聞くを得而も能く書寫し受持し讀誦し供養恭敬せば是の如きの人は常に安樂を得ん。或は復人有つて此の經中に於て一字を書寫せば斯人當來に輪廻の苦を受けず、而も永く屠兒魁膾の下賤の類の是の如きの家に於て生ぜず。所生の身は而も永く背傴攣躄醜脣缺漏疥癩等の不可喜の相を受けず、身相圓滿を獲得し、諸根具足し、大勢力有り。何ぞ況んや具足して受持し、讀誦し、書寫し、供養恭敬する人の獲る所の功德をや。

爾の時、世尊讃じて言はく。善哉善哉除蓋障よ、汝今善く是の如くの法を說く。今此の會中に無數百千萬の天龍藥叉彥達嚩阿蘇囉蘖嚕拏緊那囉摩護囉誐人及び非人鄔波索迦鄔波斯計是の如き等の衆皆悉く汝の是の如きの法を說くを聞く。斯の廣博の法門を聞くを得るは汝の所問に由ると。時に除蓋障菩薩世尊に白して言く。世尊よ今に於て斯の妙法を說くに天人衆等信を生ずること堅固なりと。是の時世尊讃言したまはく、善哉善哉善男子よ、汝能く是の如く重ねて復是の觀自在の身の毛孔中に現ずる所の功德を問ふ、除蓋障よ、彼復寶莊嚴の毛孔有り。是の中に無數百千萬俱胝那庾多の彥達嚩女有り。面貌端嚴にして形體殊妙種々莊嚴し、是の如くの色相、狀天女の如し。彼の衆の貪瞋癡の苦は皆彼の身分を侵す能はず、而も亦人間の少分の苦惱の事を受けず。彼の彥達嚩女は而

【三】佛、除蓋障に寶王經の功德を說く。

如し。是の時、父母子と共に一處に在り。我れ乃ち前に經歷する所の艱苦の事を具に述ぶ。父母聞き已つて我に告げて言く。汝今日に於て其の命を全くし安穩にして歸るを得たり、甚だ我が懷に適へり、復憂慮無し。我れ汝の盈す所の財寶を須ひず。今自らを緣じて年耄じ衰朽するを知る。汝の佐輔を出入の扶侍に須ひて我れ當に死に至るべし。汝主者と爲り我が身を葬送せよと。昔時父母而も是の如きの善言を作して我を慰諭す。除蓋障よ、我れ是の時に於て身商主と爲り、是の如きの危難苦惱の事を受く。

[〇]佛除蓋障菩薩に告げたまふ、時に聖馬王菩薩とは觀自在菩薩摩訶薩是れなり。是の危難の死の怖畏の中に於て我を救濟す。除蓋障よ、我れ今是の觀自在菩薩摩訶薩の功德數量を廣說すること能はず。我れ今汝の爲に是の觀自在の身毛孔中所有の功德を略說せん。除蓋障よ、觀自在菩薩の身は金毛孔有り。而して其の中に於て無數百千萬俱胝那庾多の彥達嚩有り。彼等は輪廻の苦無くして常に最勝の快樂を受く。天物の受用窮盡すること有ること無く、惡心有ること無く、憎嫉心無く、貪瞋癡無し。常に八聖道を行じて恒に法樂を受く。除蓋障よ、是の金毛孔中に於て復放光如意寶珠有り、彼の彥達嚩衆の思念し須ふる所に隨つて意に隨ひ滿足す。是の金毛孔中に於て斯の出現有り。復黑毛孔有り而して其の中に於て無數百千萬俱胝那庾多の[二]具通神仙の人有り。其の中に一神通を具する者有り。或は二三四五神通を具するの者有り。亦六神通を具する者有り。是の毛孔の中に於て復銀地を現じ、黃金山と爲り、白銀峯と爲る。三十七の愛染蓮華は其の山を莊嚴す。其の山中に於て八萬四千の神仙の衆有り。是の如きの仙衆は劫樹を出現し、深紅を身と爲し、黃金白銀以て枝葉と爲し、寶光明を放つ。又一一の毛孔に於て[三]四寶池を現じ、八功德水其の中に充滿す。而して妙華有つて池中に盈滿し、池の岸側に於て天妙香樹栴檀香樹有り。又莊嚴の劫樹有り、上に莊嚴の天冠耳璫を懸く。復殊妙の瓔珞有つて之を嚴飾す。又其の上に於て衆寶鈴を懸け、又妙衣憍尸迦服を挂く。

【一〇】佛、除蓋障菩薩の爲に觀世音の功德の一分を說く。

【一一】具通、通は通力、卽ち六神通なり。神境、天眼、天耳、他心、宿住、隨念、漏盡の六智證通を六神通と云ふ。

【一二】四寶、金、銀、琉璃、頗黎を四寶と云ふ。

刹女、好飮食を以て我が與に喫せしむ、食し已つて吁歎す。

彼の女問うて言く、大商主よ、何が故に是の如く而も吁歎するやと。是の時、我れ彼の女に告げて言く、我は本南贍部洲の人なり、自の本地を思ふなりと。彼の女、我に告げて言く、大商主よ、本地を思ふこと勿れ、此の師子國には種々の飮食衣服の庫藏、種々適意の園林浴池有り、種々の快樂を受く、云何んか彼の南贍部洲を思ふやと。我れ時に默然として住す。是の旦を過ぎ已り第二日に至る。彼の女我が與に飮食資糧を辦具す。彼の諸商人悉く皆資糧を辦具す。第三日の日の初出時を候て皆彼の域を出で、出で已つて共に相議して言く、我等今は當に宜しく速に去るべし。應に師子國を廻顧すべからざる矣と。是の語を作し已つて我れ彼の衆と與に卽時に速疾に而も聖馬王の所に往き、到り已つて彼の馬王を見るに草を喫して驟じ已り身毛を振ひ擺く。是の時、師子國の地皆震動す。馬王三たび復言ひて云く、今は何人か彼岸に往かんと欲するやと。時に諸商人是の如きの言を作す。我等今は彼岸に往かんと欲すと。時に聖馬王、其の身を奮迅して而も是の言を作す。汝等宜しく應に前進すべし、應に師子國を返顧すること勿れと。彼の聖馬王是の如く說き已る。是の時に我れ乃ち先に馬王に乘る、然る後五百の商人倶に馬上に昇る。

時に彼の師子國中の諸羅刹女、忽に諸商人の去るを聞いて、口に苦切の聲を出し、卽ち駃く奔馳して趁逐し、悲啼號哭し叫呼して後に隨ふ。時に諸商人是の聲を聞き已り、廻首し顧眄して墜つるを閃すを覺らず、其の身水中に入る。是に於て諸羅刹女、彼の身の肉を取り而して之を噉食す。是の時、唯我れ一人南贍部洲に往き、彼の聖馬王海岸の所に屆く。我れ當に下り已つて乃ち彼の聖馬王を旋遶すること三匝し畢已り、卽ち彼の處を離れ路を尋ねて行いて本住地に往き、自の所居に歸り其の家に到り已る。是の時、父母我が來り歸るを見、其の子を抱捉して欣喜し、復悲しみ涕泣流涙す。父母先に我が爲に涕泣すること恒時なり、其の眼昏翳す。因に玆に除き愈明淨なること故の

今此の衆中の何人の妻か最も相戀慕するや。何の所見有るや。其の事云何と。時に衆人中、有るが、言く。彼れ上味の飲食を以て我に供給すと。或は有るが說いて言く、彼れ種々の衣服を以て我に與ふと。或は有るが說いて言く、彼れ天冠珥璫衣服を以て我に與ふと。或は有るが說いて言く、得る所唯心に構はざる無しと。或は有るが說いて言く、彼れ種々の龍麝栴檀の香を以て我に與ふと。時に諸商人是の說を作し已る。我當に汝に解脫すること難きを告げて言ふべし。何が故に此の羅刹女を貪愛する耶と。衆商人聞いて心に怖畏を懷き、而して問うて言く、大商主實に是の如くなり耶と。我れ乃ち告げて言く、此の師子國は羅刹女の所住にして是れ人に非ざる耳。此れ實に是の羅刹女是の誓言を作す。佛法僧等知る可し此れ羅刹女なりと。

　時に諸商主聞き已り我に告げて言く。何の方便を以て此の難を免るるを得るやと。是に於て我れ彼に告げて言く。此の師子國に聖馬王有り、能く一切の有情を救ふ。彼れ大白藥草を食し、金砂に於て驟じ而して起ち身を振ひ擺き已り、三たび復言ひて云く、誰人か彼岸に往かんと欲するやと。我れ已に彼の馬王に告げて言く、我れ今彼岸に往かんと欲すと。時に諸商人復我に告げて言く、何の日に去る耶と。我れ衆に告げて言く、却後三日決定して去る。衆人宜しく應に資糧を備辦すべしと。是の語を作し已るに衆人還つて城に入り、各各本の羅刹女の舍に往く。其の女來るを見て相問訊して言く、汝今疲勞する耶と。我れ當に彼の羅刹女に問ふべし、我れ未だ曾て汝の悅意するを見ず、園林浴池は實に有りと爲す耶と。時に彼の羅刹女我に告げて言く、大商主よ、此師子國に種々適意の園林浴池有りと。彼の女に告げて言く、我が與に如法に資糧を辦具せよ、我れ三日を候つて往いて種々の園林池沼に遊觀し、彼の名花を看んと欲す。我れ當に種々の華を將つて而も家に來り歸るべしと。時に羅刹女、我に告げて言く、大商主よ、我れ爲に資糧を辦具せんと。是の時、恐くは彼の羅刹女、我が方計を知り必ず當に我を殺すべし。是の如く思惟し、默然として住す。彼の羅

ば、自ら當に我を信ずべしと。是の時、我れ彼の女の惛沈睡眠せるを伺ひ、是に於て菩薩向夜分時に月光劍を持し南路を往いて而して行いて彼の鐵城に到り、周匝して看るに、一として門戸無く亦窓牖無し。彼の鐵城の邊に一瞻波迦樹有り、樹上に攀昇し、我れ時に高聲に喚問す。時に鐵城內の商人我に告げて言く。賢大商主よ、而ち還つて知るや不や。我等羅刹女に致されて鐵城に在り。而も日日に於て百人を食噉すと。彼等昔時の事を具に說き已る。是に於て我れ瞻波迦樹を下り、却つて南路に依り急速に彼の羅刹女の處に還る。是の時、彼の女而ち我に問ふて言く。賢大商主よ、所說の鐵城、還つて當に見るや不や、今應に實に說くべしと。我れ言く、已に見ると。是に於て又彼女に問ふ、何の方便を以て我をして此を出づるを得しむるやと。彼の羅刹女而ち我に告げて言く。而ち今大方便有り、汝をして安穩ならしめ、善く此の師子國を出で却つて彼の南瞻部洲に還らしむべしと。我れ是の說を見て復た彼女に問ふ。我をして何の道路に於て此の國を出でしむる耶と。時に羅底迦嚩我に告げて言く。聖馬王有つて能く一切有情を救度すと。我れ當に尋ぬべし。時に彼の聖馬王の所に往くに白藥草を食す。食し已つて金砂地に於て輾じ已り、而して起ち身毛を振り擺く。是の如く作し已つて是の言を作す。何人か而も彼岸に達せんと欲するやと。三たび復告げて言く。若し去らんと欲する者は當に自ら言說すべしと。是に於て我れ聖馬王に告げて言く。我れ今に於ては往いて彼に去らんと欲すと。是の如く說き已つて復彼の羅刹女の處に到り同じく共に止宿す。

彼の羅刹女、睡眠より覺め已り、心に追悔を生じて我れに問うて言く。商主よ、汝の身は何が故に冷き耶と。是に於て我れ彼の意我を去らしめざるを意り、遂に方便を以て彼女に告ぐ。我れ向者に暫く、城外に出で便利して廻るが故に我が身冷なりと。彼女我に告げて言く。應に却つて睡眠すべしと。日出に至り、我れ時に方に起き、遂に乃ち諸商人を喚んで告げて言く。而ち今宜しく此の城を出づべしと。時に諸商人皆城を出で已り、倶に一處に在つて而して歛み共に相ひ謂ひて言く。

に至り承を大舶に欲す。是に於て倶に舶內に昇る。我れ當に舶主に問うて言ふべし。汝應に其の風信を看るべし。何れより起つて何れの國土に往くや。[六]寶洲に往くと爲すや。[七]閣婆國、[八]羅刹國と爲す耶と。是に於て舶主其の風信を瞻て是の如き言を作す。而ち今此の風は宜しく往いて師子國に去るべしと。是の時風を承けて駕り放ちて師子國に往く。彼の國中に於て五百の羅刹女有り、忽然として變じて劇暴大風を發し、鼓浪其の舶を漂激し破壞す。時に諸の商人水中に貼墮し、其の身を漂淺し、浮んで海濱に及び岸上に至る。彼の五百の羅刹女諸の商人を見、各々其の身を搖動して惡聲を出す。童女の相を現じて商人の所に來り、各衣服を以て諸の商人に與ふ。是に於て彼の衣服を著し、自らの濕衣を捩り之を曝して乾かしめ、而して彼の處を離れ、卽ち[九]瞻波迦樹下に往きて憩歇す。歇み已つて互相に謂つて言く。我れ今云何んか何の方便をか作さん。復方計無しと說き已つて默然たり。是の時、彼の羅刹女、又商人の前に來り是の如きの言を作す。我れに夫主無し、與に我れに於て而も夫と爲す可きや。此に於て我に飲食衣服庫藏園林浴池有りと。時に彼の羅刹女各各一商人を將ゐて自ら居る所に歸る。是に於て羅刹女中に而も一女有り、大主宰と爲し、囉底迦嚩と名づく。彼の女我れと與に相將ゐて彼の所居に歸る。彼女而も上味の飲食を以て我に供給して豐足飽滿なり。我れ當に快樂すること人間と異ること無るべし。彼に於て止宿して二三七日を經停す。忽然として彼の囉底迦嚩の欣然として而も笑ふを見る。我れ時に、心に疑を生じ未だ曾て見聞せざるを怪しむ。彼の羅刹女の是の如き笑を作す時に、我れ問ふて言く、汝今何が故に是の笑を作すやと。羅刹女言く、此の師子國は羅刹女所住の地なり、恐くは汝が命を傷けんと。是に於て我れ問ふ、汝何が故に知る耶と。羅刹女言く、南路を履んで去ること勿れ。何を以ての故にとならば、彼に鐵城有り上下周圍に而も門戸無し、其の中に無數の商人有り、其の中多く已に彼に食噉せられ唯骸骨を餘す。彼れ今活者死者有るを見るも恐くは相信ぜず。但し此の路に依つて而も去つて彼に到ら

【六】寶洲は西域記卷十一僧伽羅國の條を見るに錫蘭のことなり。

【七】閣婆國、開元錄五、(正、五五、五二六b)、高僧傳三、(正、五〇、三四〇)等と罽賓國求那跋摩師子國に到り教を弘め、後閣婆國に到ると說く、こと文よりせば師子國の近くの南海上の國なるは明なり。

【八】羅刹國、食人鬼所住の國なり。大海中にありと。西域記卷十一によれば錫蘭に鬼人住す、僧伽羅之を征伏し國を建て、名づけて僧伽羅國と云ふと。

【九】瞻波迦(Campaka)樹名、金色花と譯す。香氣有り遠く重ずと。

卷の第三

[一]爾の時、除蓋障菩薩、世尊に白して言さく。觀自在菩薩の往昔の事は已に佛の說きたまへるを聞けり。彼の菩薩は何の[二]三摩地門有りや。唯願くは世尊、我が爲に宣說したまへと。

佛、善男子に告げたまふ。其の三摩地門は、所謂る[三]有相三摩地、無相三摩地、金剛生三摩地、日光明三摩地、廣博三摩地、莊嚴三摩地、旌旗三摩地、作莊嚴三摩地、莊嚴王三摩地、照十方三摩地、妙眼如意三摩地、持法三摩地、妙最勝三摩地、施愛三摩地、金剛幡三摩地、觀察一切世界三摩地、樂善逝三摩地、神通業三摩地、佛頂輪三摩地、妙眼月三摩地、了多眷屬三摩地、天眼三摩地、明照劫三摩地、變現見三摩地、蓮華上三摩地、上王三摩地、清淨阿鼻三摩地、信相三摩地、天輪三摩地、灑甘露三摩地、輪光明三摩地、海深三摩地、多宮三摩地、迦陵頻伽聲三摩地、青蓮華香三摩地、運載三摩地、金剛鎧三摩地、除煩惱三摩地、師子步三摩地、無上三摩地、降伏三摩地、妙月三摩地、光曜三摩地、百光明三摩地、光熾盛三摩地、光明業三摩地、妙相三摩地、勸阿蘇囉三摩地、宮殿三摩地、現圓寂三摩地、大燈明三摩地、燈明王三摩地、救輪廻三摩地、文字用三摩地、天現前三摩地、相應業三摩地、見眞如三摩地、電光三摩地、龍嚴三摩地、師子頻伸三摩地、莎底面三摩地、往復三摩地、覺悟變三摩地、念根增長三摩地、無相解脫三摩地、最勝三摩地、開導三摩地なり。

善男子よ、觀自在菩薩摩訶薩は唯是の三摩地を有するのみに非ず、而も一一の毛孔に於て百千萬の三摩地を具ふ。善男子よ、觀自在菩薩摩訶薩は住菩薩に居て功德は是の如し。乃至諸佛如來も未曾有の是の如き功德を歎じたまふ。

[四]善男子よ、[五]我れ往昔に於て菩薩たりし時、五百の商人と與に師子國中に往かんと欲し、諸車を將ゐ馲駝牛等に乘り財寶を求む。卽ち發して彼の道路を往き、村營城邑聚落の處を經歷し相次で海濱

[一] 佛、除蓋障菩薩の爲に觀自在の具足せる三摩地門を說く。

[二] 三摩地(Samādhi)等持と譯す。

[三] 以下六十七三摩地を擧ぐ。

[四] 五百商主の本生譚。

[五] 此の物語は六度集經第六、馬王駈耶の物語、佛本行集經第四十九鷄尸馬王の物語、西域記第十一等と比較すべし。

國土の有情は而も菩薩と爲る。是の時、虚空藏菩薩、觀自在の前に於て立ちて觀自在菩薩に問訊して言く。是の如く化度して疲勞無き耶と。觀自在言く、我れ疲勞無しと。而して問訊し已り默然として住す。

爾の時、世尊、善男子に告げて言はく。汝等、諦聽せよ、我れ今汝の爲に六波羅蜜多法を說かん。善男子、若し菩薩と爲らんには、應に先づ布施波羅蜜多を修行し、然る後是の如く持戒忍辱精進靜慮般若波羅多を修行すべし。是の如くして圓滿具足を得と。斯の法を說き已り默然として住す。時に彼の衆會各々而ち退き本處に還歸す。彼の菩薩衆も而ち亦退き本佛刹土に還る。

く。盲冥者の爲には而ち明燈と爲り、陽焔熾盛には爲に蔭覆と作り、渇乏の者には爲に河流を現じ、恐畏處に於ては施して無畏ならしめ、病苦に惱む所には而ち醫藥と爲り、苦を受くる有情には爲に父母と作り、阿鼻地獄の其の中の有情には涅槃の道を見せしめ、能く世間の一切の有情をして是の功德利益安樂を得しむ。若し復人有つて是の觀自在菩薩の名を念ずる者は、是の人は當來に一切輪廻の苦を遠離すと。衆人聞き已り咸善哉と稱ふ。若し人有つて能く觀自在の像の前に於て四方[四五]曼拏羅を建立し、當に香華を以て觀自在菩薩を供養する者は、是の人當來に而ち轉輪聖王を得て七寶具足す。所謂る金輪寶、象寶、馬寶、珠寶、女寶、主藏寶、主兵寶なり。是の如き七寶を得。若し復人有つて能く一華を以て觀自在菩薩に供養する者は、是人は當に身に妙香を出し、所生處に隨て身相圓滿なるを得べしと。是に於て耆舊觀自在菩薩の功德神力を說き已る。時に諸人衆各各所住に還歸し、耆舊の人既に法を法き已り廻り還ること亦爾なり。

[四六]是の時、觀自在菩薩虛空に上昇し、是に於て思惟すらく。久しく尾舍浮如來を見ず。而して今應當に祇陀樹林の精舍の中に往到し彼の世尊を見たてまつるべしと。是の時、觀自在菩薩即ち彼の精舍に往到し、無數百千萬の天、龍、夜叉、彥達嚩、阿蘇囉、蘗嚕拏、緊那囉、摩護囉誐、人及び非人有るを見る。復無數百千萬の菩薩有り、悉く皆集會す。

是の時、虛空藏菩薩、佛に白して言く、世尊、今此に來る者は是れ何菩薩なりやと。佛、善男子に告ぐ。是れ觀自在菩薩摩訶薩なりと。時に虛空藏菩薩、默然として住す。是れ於て觀自在菩薩、佛を遶ること三匝し却つて左邊に坐す。世尊是に於て而ち慰問して言く、汝疲勞無き耶。善男子、汝餘處に於て爲す所の化事而ち云何ん耶と。觀自在是に於て卽ち昔の所化の事を說き、我れ已に如是如是の有情を救度すと。時に虛空藏菩薩聞き已り、心中怪むこと未曾有なり。今我れ此の觀自在を見て而して菩薩と爲り、乃ち能く是の如きの國土の有情を救度す。如來を見るを得て是の如きの

【四五】曼拏羅(Mandala)壇、道場或は輪圓具足と譯す。

【四六】觀自在、祇陀林の尾舍浮如來のもとに到り、化度の事を語る。

の意無く、其の心法を樂み、戒に住するを樂み、是の如き言を作す、我今從り已去而も殺生せず、南瞻部洲の戒を奉ずる人の清淨の飲食もて是の如く活命する如く、我自ら手に今活命するも亦爾りと。是に於て羅刹女惡業を造らず、[三九]學處を受持す。

[四〇]觀自在菩薩摩訶薩、師子國を出でて[四一]波羅奈大城の穢惡の處に往く。彼に無數百千萬數の蟲蛆の屬有つて依止して住す。觀自在菩薩、彼の有情を救度せんと欲するが、爲め故に、遂に蜂形を現じて往く。彼の口中に於て聲を出し、是の如きを作す。云く。[四二]曩謨沒馱野。彼の諸蟲類其の所聞に隨ひて皆稱念すること亦復是の如し。斯の力に由るが故に彼の類の有情所執の身見は山峯の如しと雖及び諸の隨惑は金剛智杵もし一切破壞し、便ち極樂世界に往生するを得、皆菩薩と爲り同じく妙香口と名づく。

[四三]是に於て彼の有情を救度し已り、波羅奈大城を出でゝ[四四]摩伽陀國に往く。時に彼の國中天の亢旱に値ふこと二十歲に滿つ。彼の衆人及び諸有情を見るに飢饉苦惱の逼切する所、悉く皆互相に身内を食噉す。是の時、觀自在菩薩心に思惟を懷く。何の方便を以て此の有情を救はんと。時に觀自在菩薩種々降雨す。先づ雨澤を降し枯涸を蘇息し、然る後復種々の器を雨し、各々中を滿すに、而ち味の中上味なる飲食を盛る。時に彼の衆人皆是の如き飲食を得て飽滿す。是の時、又資糧粟豆等の物を雨す。是に於て彼の諸人等は須ふる所の物意に隨つて滿足し。時に摩伽陀國の一切人民は心に驚愕を壞き怪むこと未曾有なり。時に衆是に於て集つて一處に在り。既に倶り集り已り各是の言を作す。今に于て云何んか天の威力是の如きを致す耶と。彼の衆中に於て而ち一人の耆年老大有り。其の身傴僂にして其の杖を策つ。此の人壽命無數百千なり。衆人に告げて言く、此は是れ天の威力に非ず。今此の所現は定めて是れ觀自在菩薩の威神力の變現する所なりと。衆人問ふて言く。彼の觀自在菩薩何が故に而も能く斯の瑞を出現するやと。耆舊是に於て卽ち彼の聖觀自在の功德神力を說

【三九】學處、菩薩の學ぶべき處。七處あり、卽ち一、自利。二、利地。三、眞實義。四、力。五、衆生を成熟す。六、自ら佛法を熟す。七、無上菩提なり。

【四〇】觀自在、波羅奈城中の虫類を度す。

【四一】波羅奈(Vārāṇasī)恒河の流域にあり、此處に鹿野苑あり。

【四二】曩謨沒馱野(namaḥ buddhāya)

【四三】觀自在、摩伽陀國に到り飢饉の苦を救ふ。

【四四】摩伽陀(Magadha)中印度の國名、王舍城此の國に在り。

て供養し奉る。斯の供を受け已りて呪願して言く。安樂長壽なれと。時に彼の天子、婆羅門に白して言く。賢者何方從り來つて此に到ると爲すやと。婆羅門言く、我れ祇陀樹林の大精舍中從り、彼より而も來ると。天子問ふて言く、彼の地は云何んと。婆羅門告げて言く、彼の祇陀林の精舍の中は、其の地清淨にして天摩尼寶出現し、劫樹をもて莊嚴す。又種々適意摩尼の寶を現じ、又種々の寶池を現じ、又戒德威嚴にして大智慧を具する無數の大衆有つて其の中に出現す。彼に佛有り、尾舍浮如來と號す。是の聖天所住の地に於て是の如き變化出現の事有りと。時に彼の天子賢者に白して言く。云何んか、大婆羅門宜しく誠に諦に說くべし。是れ天と爲す耶、是れ人と爲す耶。賢者、于(こゝ)に今云何んか斯の瑞を出現するやと。時に婆羅門言く。我は是れ天に非ず亦是れ人に非ず。我は是れ菩薩なり、一切有情を救度せんと欲するが爲に、皆大菩提道を見るを得しむと。是に於て天子旣に斯を聞き已り、即ち天妙寶冠莊嚴珥璫を以て持して供養し奉り、而して偈を說いて言く。

我れ功德に遇ひ、諸垢罪を遠離すること、今勝田に種えて、現に果報を獲るが如し。

[三六]是に於て天子斯の偈を說く時、彼の婆羅門は化度の事訖り、而して天宮を出で即時に而ち[三七]師子國內に往く。到り已つて諸羅刹女の前に於て當面して立つ。其の所現の身は相貌端嚴殊色希奇なり。諸羅刹女斯の容質を見て慾心を起し欣慕を懷く。是に於て步を移し親近して彼に告げて言く。我が爲に夫と爲る可し、我は是れ童女、未だ適娉(てきへい)を經ず、願くは我が夫と爲りたまへ。今旣に此に來る、復餘に去ること勿れ。人の主無くして能く主と爲るが如く、又闇室は爲に明炬を燃ずるが如し。我れ今此に飮食衣服有り、庫藏に豐盈す、及び適意果園、悅意の水池有りと。羅刹女に告げて言く。汝今應當に我が所說を聽くべしと。羅刹女言く、唯然り、願くは旨論を聞かん、云何と。我れ今汝の爲に八正道法を說かん。又爲に[三八]四聖諦法を說かんと。時に羅刹女是の法を聞くを得て各果を證するを獲たり。預流果を得る者、或は一來果を得る者有り。貪瞋癡の苦無く、惡心を起さず、殺命

【三六】觀自在、師子國に到り羅刹女を度す。
【三七】師子國、今の錫蘭島なり。
【三八】四聖諦法とは苦聖諦、集聖諦、滅聖諦、道聖諦の四法を云ふ。

有つて能く常時に但し經の名號を念ぜば、是の人は速に輪廻の苦を解說するを得、老死憂悲苦惱を遠離す。是の人後に所生の處に於て能く宿命を憶し、其の身は常に[三四]牛頭栴檀の香有つて、口中常に青蓮華の香を出し、身相圓滿にして大勢力を具すと。是の法を說く時、彼の諸藥叉羅刹は、預流果を得る者有り、其の中或は一來果を得る者有り。是の如き言を作す、唯願はくは菩薩、且く此に住り餘處に往くこと勿れ。我れ今此の黑暗の地に於て天金寶を以て窣堵波を造り、又金寶を以て經行處を造らんと。是の時、觀自在菩薩摩訶薩告げて言く。我れ無數の有情を救度し、皆當に菩提道を得べからしめんが爲め故に餘處に往かんと欲すと。時に諸藥叉羅刹各々低頭し、手を以て顋を搘へ徘徊意緒し、而して之を思惟し是の如きの言を作す。今觀自在菩薩摩訶薩、此を捨てて去る。後に於て誰か能く我等が爲に微妙法を說かんと。觀自在菩薩摩訶薩、是に於て去り、彼の諸の藥叉羅刹悉く皆隨侍して送る。觀自在菩薩摩訶薩告げて言く。汝等而ち來ること已に遠し、應に所住に還るべしと。時に諸藥叉羅刹頭面もて地に著け、觀自在菩薩摩訶薩の足を禮し已り本處に還歸す。

[三五]時に觀自在菩薩摩訶薩、猶し火焰の如く虛空に上昇して天宮に往き、彼の天上に到り婆羅門身を現ず。彼の天衆中に一天子有り、妙嚴耳と名づく。而して常に貧窮にして斯の苦報を受く。時に觀自在菩薩所現の婆羅門身は彼の天子の所に詣り、到り已り告げて言く。我れ飢饉を患へ、而して復渴に困しむと。時に彼の天子垂泣して婆羅門に告げて言く。我れ今貧匱にして物として奉る所無しと。婆羅門言く、我れ切に須ふる所なり。必ず應に相饋乃し少分に至るべしと。時に彼の天子俛仰して宮に入り有する所を搜求するに、忽然として其の諸大寶器を見る。復異寶を盛り其の中に盈滿す。復寶器有り中に滿ちて上味の飲食を盛る。復嚴身の上妙衣服有つて空中に盈滿す。時に彼の天子、心に思惟を懷く。今此の門外の婆羅門は決定して是れ其れ不可思議の人なり。我をして是の殊常の福を得しむと。是に於て彼の大婆羅門を請ひ其の宮中に入れ、天妙寶及び天上味飲食を持し、以

【三四】牛頭栴檀、牛頭山より出づる栴檀香木。

【三五】觀自在、天宮に往き妙嚴耳天子を度す。

て觀自在菩薩を迎逆し、頭面もて足を禮して問訊して言く。菩薩今に于て疲勞無き耶。久しく此の黑暗の地に來らざるなりと。觀自在菩薩言く。我れ諸有情を救度せんが爲の故なりと。時に、彼の藥叉羅刹、天金寶師子の座を以て坐に就かんことを請ふ。是に於て菩薩、彼の藥叉羅刹の爲に說法す。汝當に諦聽すべし。大乘經有り、莊嚴寶王と名づく。若し一四句偈を聞くを得て、而も能く受持讀誦し、其の義を解說して心に常に思惟するもの有らば獲る所の福德は限量有ること無し。善男子、所有る微塵は我れ能く其の是の如き數量を數ふ。善男子、若し此の大乘莊嚴寶王經に於て而も能く一四句偈を受持するもの有らば、獲る所の福德は而も我れ能く其の數量を數ふること能はず。若し大海の所有水を以てするも我れ能く其の一一の滴數を數ふ。若し此の經に於て能く一四句偈を受持するもの有らば、獲る所の福德は而も我れ能く其の數量を數ふる能はず、假使十二殑伽河沙數の如來應正等覺、十二[三二]劫を經て俱に一處に在り、恒に衣服飲食臥具湯藥及び餘の資具を以て是の如き諸神に施し供養し奉るも而も亦よく是の如き福德の數量を說き盡す能はず。唯我れのみに非らず。黑暗處に在つても說き盡す能はず。善男子、又如し四大洲の人、各各自ら居る所の舍宅を以て精舍を造立し、而も其の中に於て天金寶を以て千の[三三]窣堵波を造り、而して一日に於て悉く皆成就し、種々供養して獲る所の福德は、此の經中に於て而も能く一四句偈を受持して獲る所の福德に如かず。善男子、五大河は大海に入り、是の如く流行して窮盡有ること無きが如く、若し能く此の大乘經の四句偈を持する者有らば、獲る所の福德の流行も亦復盡くることを無しと。時に彼の藥叉羅刹、觀自在菩薩に白して言く。若し有情有て能く此の大乘經を書寫するに、獲る所の福德は其の量云何んと。善男子、獲る所の福德は邊際有ること無し。若し人有つて能く此の經を書寫せば、則ち八萬四千の法藏を書寫するに同じくして異ること有ること無し。是の人當に轉輪聖王となるを得て四大洲を統べ威德自在なるべし。面貌端嚴にして千子圍遶し、一切の他の敵自然に臣伏す。若し人

【三二】劫、劫波(Kalpa)の略、長時と譯す。

【三三】窣堵波(Stūpa) 塔と決す。

大力阿蘇囉王に告げて言く。斯の苦を受くる時に而も一人も能く相ひ救ふ者無し、汝當に之を知るべし。我れ今汝の爲に是の如きの法を說かん。汝等應當に躬自ら作福すべしと。時に觀自在菩薩摩訶薩、大力阿蘇囉王に告げて言く。我れ今[二七]祇樹林園に往んと欲す、彼に今日大衆集會すと。是の時、觀自在菩薩、無數雜色の光明を放つ。所謂る、青色光明、黃色光明、紅色光明、白色光明、[二八]玻胝迦色光明、金色光明等なり。是の如き光明尾舍浮如來の前に往く。時に天龍藥叉囉刹娑緊那囉摩護囉誐幷に諸人等有り。悉く皆集會す。復無數の菩薩摩訶薩有り亦皆集會す。是の衆中に於て一菩薩有り、[二九]虛空藏と名づく。座從り起ち衣服を整へ偏袒右肩し、右膝を地に著け、恭敬合掌して佛に向ひて佛に白して言さく。世尊、今此の光明は何從り來ると爲すやと。佛告げたまはく、善男子　今此の光明は是れ觀自在菩薩、大力阿蘇囉王宮中に在り、斯の光明を放ち而して來つて此に至ると。時に虛空藏菩薩、世尊に白して言さく。我れ今何の方便を以て而も能く彼の觀自在菩薩を見るやと。佛告げたまふ。善男子よ、彼の菩薩亦當に此に來るべしと。觀自在菩薩、大力阿蘇囉王宮を出づる時、[三〇]祇陀林園忽然として天妙華樹天劫波樹有り、而して無數の諸天鮮妙雜色有つて莊嚴し、上に百種の眞珠瓔珞を懸け、叉憍尸迦衣及び餘の種々の衣服を懸く。樹身枝條は其の色深紅にして金銀をもて葉と爲す。復無數微妙の香樹、殊妙華樹有り。無數の寶池には百千萬雜色の妙華有つて其の中に充滿す。

[三一]是の如く出現する時、虛空藏菩薩、世尊に白して言さく。彼の觀自在菩薩は今に於て何が故に而も未だ來らざる耶と。佛、告げたまはく、善男子、彼の觀自在菩薩、大力阿蘇囉王宮從り出で已り、一處有り、名づけて黑暗と曰ひ、人能く到る無し。善男子、彼の黑暗處は日月の光明の照さざる所なり。如意寶有り名づけて隨願と曰ひ、恒時に於て光明を發して照す。彼に無數百千萬藥叉有つて其の中に止住す。時に、觀自在菩薩の其の中に入るを見て心に歡喜を懷き踴躍奔馳し、而して來つ

【二七】祇樹林(Jetavana)祇陀太子の樹林の略なり。これ祇園精舍の事。

【二八】玻胝迦(Sphaṭika)水精なり。

【二九】虛空藏(Ākāśagarbha)

【三〇】祇陀林は祇樹林に同じ。

【三一】觀自在、黑暗處の有情の爲に寶王經の功德を說く。

受納を垂れたまはんことを願ふ。[二二]爾の時、觀自在菩薩摩訶薩、大力阿蘇囉王に告げて言く。我れ今汝の爲に法を說く、應に當に諦聽すべし。汝應に思惟すべし、乃し人に至るまで無常幻化にして命久しく保ち難しと。汝等而も常に心中に貪愛は大德を具すと思惟す。心常に奴婢人民乃至穀麥倉庫及び大伏藏を愛樂し、心常に父母妻子及び諸眷屬を愛樂す。是の如き等の物は恒に愛樂すと雖も、夢に見る所の如く、命終時に臨んで能く相ひ救ひて此の南贍部洲に命終せざるを得ること無し。是の顚倒に由り命終の後、大[二三]奈河の膿血盈流するを見、大樹の猛火熾燃たるを見る。斯の事を見已り心に驚怖を生ず。是の時に[二四]閻魔獄卒、繩を以て繫縛し、急急に索挽し走つて鋒刃の大路を履む。擧足下足剗割傷截す。而して無數の鳥鷲[二五]矩囉囉鳥及び猘狗等有つて之を啖食し、大地獄に於て其の極苦を受く。履む所の鋒刃の大路の中に、復大荊有り、長さ十六指、一一步に隨つて五百荊有り、脚中に刺入し、悲啼號哭して言く。我等有情は皆罪業を造ることを愛するが爲に今大苦を受く。我れ今云何んと。時に閻魔獄卒告げて言く。汝昔より來、未だ曾て食を以て諸沙門に施さず、亦未だ曾て法の[二六]犍稚の聲を聞かず、未だ曾て塔像を旋繞せずと。時に諸罪人閻魔獄卒に告げて言く。我れ罪障の爲に佛法僧に於て信敬を解せずして恒に遠離すと。獄卒告げて言く。汝自ら種々の惡業を造るを以て今苦報を受くと。獄卒是に於て諸罪人を將て閻魔王の所に往き、到り已り立て面前に在り。時に閻魔王言く。汝業報の處に去り往けと。是の時、閻魔獄卒罪人を驅領して黑繩大地獄の所に往く。到り已り是の諸罪人を一一地獄中に拋擲す。既に擲入し已り、一一の罪人に各百槍有り、其の身を攢刺するに命皆死せず。次に二百の大槍有り、俱に身を攢刺するに命亦活く。後に三百の大槍有り、一時に其の身を攢刺するに命亦死せず、命既に生活す。是の時に又之を擲げて大火抗に入るゝに命亦死せず、而して是の時に於て熱鐵丸を以て口中に入れ之を吞咽せしむ。脣齒斷齶及び其の咽喉悉く燒け爛壞し、藏腸肚は煎煮沸然し遍身燋壞す。

[二二] 觀自在、阿蘇囉王は苦報を說く。
[二三] 奈河、地獄の三途の川なり。
[二四] 閻魔(yama)
[二五] 矩囉囉(Kulālaḥ)、野雉鷄。
[二六] 犍稚(Ghaṇṭa)

鈴鐸蓋妙拂、師子寶座寶嚴黃牛、及び諸寶莊嚴の具、時に諸小王衆等悉く皆之を受け、便乃ち是の大力阿蘇囉王の作法の地を出づ。

大力阿蘇囉王、觀自在菩薩摩訶薩に白して言く。我れ今身心に思惟すらく、往昔に於て婆羅門の法に依りて廣大の布施の會を設け施す所の境は垢黑不淨と爲す。我今諸眷屬を幷せて是を以て禁縛して斯の鐵窟中に在りて大苦惱を受くと。觀自在、我れ今歸依したてまつる、願くは哀愍を垂れ我れ等の是の如き苦難を救脫したまへと。而して讃歎して曰く。

[15]大悲蓮華手、大蓮華王、大吉祥に歸命したてまつる。種々莊嚴の妙色身は、首髻の天冠衆寶を嚴にし、[16]彌陀の一切智を頂戴し、有情を救度して無數なり、病苦の人は安樂を求め、菩薩は身を現じて醫王と作る。大地眼と爲り明きこと日に踰え、最上清淨の微妙の眼は、有情を照矚して解脫を得、解脫を得已り妙相應す。猶し[17]如意摩尼寶の如く、能く眞實妙寶藏を獲り、而も恒に[18]五波羅蜜を說き、斯の法を稱揚して大智を具す。我れ今虔懇に至歸依し、大悲觀自在を讃歎す。有情は菩薩の名を憶念して、離苦解脫し安穩を獲。惡業を作すが故に、黑繩及び大阿鼻地獄道に墮ち、諸の餓鬼の苦趣に有る者は、名を稱へ恐怖皆解脫す。是の如く、惡道の諸有情は、悉く皆苦を離れ安樂を得。若し人恒に大士の名を念ぜば、當に極樂世界に往生して、如來無量壽を見、妙法を聽聞して[19]無生を證するを得べし。

是の時、觀自在菩薩摩訶薩、大力阿蘇囉王の與に其の[20]記別を授く。汝當來に於て佛と爲るを成ずるを得、號して吉祥如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ。汝是の時に於て當に[21]六字大明總持門を證すべし。今此の一切阿蘇囉王は、汝當來に於て悉く皆救度し、是の如き佛刹の一切有情は而も貪瞋癡の聲有るを聞かずと。時に大阿蘇囉王、斯の授記を聞き、卽ち價直百千の眞珠瓔珞を以て、復種々妙寶の莊嚴なる百千萬數の天冠珥璫を以て、持し以て奉上し

【一五】大悲蓮華手、大蓮華王、大吉祥はこれ觀自在の名なり。
【一六】彌陀、阿彌陀(Amita)の略、無量と譯す。
【一七】如意摩尼、振多摩尼(Cintā-maṇi)の譯。
【一八】六波羅蜜、六度とも云ふ。檀、戒、忍、進、禪、慧の六度なり。
【一九】無生は無生滅の理卽ち涅槃の理なり。
【二〇】記別、豫言のこと。
【二一】六字大明とは云く、唵麼抳鉢訥銘吽(Oṁ maṇi pad-me hūṁ)なり。總持は陀羅尼(Dhāraṇī)の譯。

り其の身矬陋而ち來り此に到ると。大力阿蘇囉王言く。是の人今來る、何の須ふる所なる耶と。守門人言く、我れ今須ふる所の云何を知らずと。大力阿蘇囉王告げて言く。汝去りて是の婆羅門を喚び來れと。守門の人既に敎勅を奉じ、遂に婆羅門を喚んで其の中に入る。大力阿蘇囉王、見已り寶座を與へて坐せしむ。大力阿蘇囉王の師として事へ奉る所の金星は先に已に中に在り。大力阿蘇囉王に告げて言く。今此の婆羅門は是れ其れ惡人なり、而して來りて、此に到る、決定して汝が師を破壞せん。今何が故に而も能く知る耶。告げて言く。我れ今此れを知る。所現の身、知ること是れ云何。此れは是れ那羅延天なり。既に此れを聞き已り、心卽ち思惟す。我れ惠施を行ずるに而も反覆無く。今障難來り我を破壞すと。大力阿蘇囉言く。我が口辯才なり當に須ふべしと。婆羅門に問うて言く。今我が所に來る、意に於て云何。婆羅門曰く。我れ王より地を乞ふこと兩步なり。婆羅門に告げて言く、卿の須ふる所の地而ち兩步と言ふ。我れ當に卿に其の地三步を與ふべしと。先づ金瓶を以て淨水を授與し、告げて言く、須ふる地は卿當に受け取るべしと。婆羅門受け已り呪願して曰く、安樂長壽なれと。時に婆羅門の矬陋の身隱れて現れず。

爾の時、金星、阿蘇囉王に告げて曰く。汝今當に惡業の果報を受くべしと。時に那羅延天、忽然として身を現ず。兩肩上に於て日月を荷負し、手に利劍輪棒弓箭、是の如き器仗を執る。時に大力阿蘇囉王は忽然として見已り憧惶戰慄し、其の身は蹎仆迷悶し地に躄り、良久しくして起ち、今當に云何せん、我れ寧ろ其の毒藥を服して死すべき耶と。是の時、那羅延天其の地を步量するに只兩步に及んで更に餘有ること無く、三步に迨ばず、先に許す所に違ふ、我れ今云何んと。那羅延王言く、今應當に我が敎ふる所に隨ふべしと。時に大力阿蘇囉王白して言く。我は敎ふる所の如しと。那羅延曰く、汝實に爾る耶と。大力阿蘇囉王言く、我れ實に是の如し、此の言誠にして諦に心に悔恪無しと。是の時、我が婆羅門の敎に依る作法の處は悉く皆破壞し、所有る金銀珍寶莊嚴童女、衣服寶

第四重門と爲し、又生銅を以て第五重門と爲し、又白銀を以て第六重門と爲し、又黃金を以て第七重門と爲す。是の如き七重門の上に各五百の關鎖を以て而して之を牢固にす。又一一門上に於て各一山を置く。是の時[一三]那羅延天有り、忽ち一日に於て身を現じて蠅と爲つて來り探り視る。又一日に於て而ち蜂形を現じ、又一日に於て而ち猪身を現じ、又一日に於て非人の相を現じ。是の如く、日日身相變異して而して相探り覘ふ。我れ時に心中思惟すらく、是れ婆羅門の法を爲すと。那羅延天斯の法を作すを見、銅窟に來りて相破壞し、門上の七山を去り除き、一一異處に棄擲し、彼の禁めらるゝ所の人を高聲をもて喚で言く。無勝天子等、汝の身は大苦惱を受く、汝等の身命は存活すと爲す耶、當に已に死すべしと爲すやと。此の諸人等其の喚問を聞き、聲に隨て應へて言く。我が命今在り。那羅延天尊、大力精進して我が苦難を救ひたまへと。其の天使乃ち銅窟七重の門を破壞す。時に諸小王窟内に在り、繫縛の難を得脫し、而して那羅延天を見る。是の時、各各心中に思惟すらく。其の大力阿蘇囉王已に死すと爲す耶。復而ち今死時方に至ると爲すやと。刹帝利等又是の言を作す。我れ寧ろ彼と鬪ひ敵と相殺して死するに而せ地有り、此の禁縛を受けて而も我を死なしむ應らず。我今當に刹帝利法に依つて彼と戰鬪して相殺すべし。設ひ其の地に死するも而も生天を得ん。時に諸小王各自舍に於て駕する車乘を排し馬に鞁勒し鞍して器仗を執持し大に戰鬪せんと欲す。

時に那羅延天、婆羅門に現じ其の身矬陋なり。著るに鹿皮を以てし、而して絡腋と爲し、手中に三岐拄杖を執持し、所坐の物は身に隨へ持行し來て我が門に至る。時に守門者、彼に告げて言く。應に此の門内に入るべからず。汝矬陋の人止り中に入る勿れと。婆羅門言く。我れ今遠より來り此に到ると。守門者、婆羅門に問うて言く。汝何より來ると。婆羅門曰く、我は是れ[一四]月氏國王の處の大仙人なり。彼より而ち來ると。時に守門者、大力阿蘇囉王の所に往き白して言く。今婆羅門有

【一三】那羅延天（Nārāyaṇa）天上の力士の名。

【一四】月氏國、史記大宛列傳には月氏國は大宛の西二三千里ばかり、其南は則大夏、西は則安息、北は則康居なりと。玄應音義四には月氏國は雪山の西北に在りと云ふ。

吁嗟して觀自在菩薩摩訶薩に白して言さく。我れ往昔に於て而も布施を行ぜり。施す所の境垢黑にして法に非ず。斯の施に由るが故に、我れ今諸眷屬を并せて反つて禁縛を受て惡趣に在つて斯の業報を受く。今に於て何が故に少分の食を持して如來に施し奉るに變じて甘露と成るや。我れ昔從り來愚癡無智にして外道波羅門の法を習行す。時に一人有つて身形矬陋なり。我が所に來り匃須なる所を求む。我れ當に種種の寶冠、金銀の耳鐶、上妙衣服、寶莊嚴具、[九]閼伽器等を具辦すべし。復百千の象馬寶車有り、眞珠瓔珞、寶網莊嚴し、衆妙纓を懸けて之を校飾す。種々寶蓋寶網絞羅を其の上に張り施し、諸寶鈴を繫け、震響丁丁たり。復一千の黃牛有り、毛色姝好、白銀もて蹄を嚴にし、黃金もて角を飾る。又眞珠雜寶を以て而して莊校を爲す。復一千の童女有り、形體姝好、容貌端嚴にして狀天女の如く、首に天冠を飾り、金寶の珥璫、種々の妙衣、間厠せる寶帶指鐶寶釧瓔珞、玲瓏微妙なる華鬘あり。是の如く種々に其の身を嚴飾す。復無數百千の雜寶の座有り。復金銀雜寶有り、積聚すること無數なり。復群牛數百千萬及び牧人有り。又無數の天上の味香、美飮食の如き有り。又無數の寶鈴、無數の金銀師子の座、無數の金柄の妙拂、無數の七寶莊嚴の繖蓋有り。是の如く種々を辦具して大施を作す時、而ち百千の小王有つて皆來り集會し、百千[一〇]婆羅門も亦皆來り集り、無數百千萬の[一一]刹帝利衆も亦來り集會す。

時に我れ見已り心に疑怪を懷く。是の時に當り唯我れ最尊なり、大勢力を具し大地を統領す。我れ婆羅門法に依り、專ら爲に宿世の惡業を[一二]懺悔し、而して諸刹帝利等及び諸妻子眷屬を殺し、其の心肝を取り、割剖して天を祀り、其の罪の滅するを覬んと欲す。是の時、百千萬刹帝利小王を我れ枷鎖を以て銅宿に禁め在き及び無數百千の邊地の人は悉く皆是の宿中に禁む。而して鐵橛を以て上に安き、鐵索もて諸刹帝利の手足を繫縛す。時に我れ宿に於て其の門を造立す。之に常木を以て第一重門と爲し、佉徧囉木を以て第二重門と爲し、復其の鐵を用ひて第三重門と爲し、又熟銅を以て

【九】閼伽(Arghya)譯して水と云ふ。

【一〇】婆羅門(Brahmana)族姓の名。

【一一】刹帝利(Ksatriya)族姓名。田主、或は王主と譯す。

【一二】懺悔(Ksama)これ梵漢並出したるもの、忍容の義なり。

是の罪業を造り、我が心憂愁、老死輪廻を恐怖し、諸の苦惱を受け、主無く依無し。垂愍救度し爲に禁縛を開解するの道を說きたまへと。[五]觀自在の言く。善男子、如來應正等覺は常に乞食を行ず。若し能く施食せば獲る所の福德は說き盡すこと有ること無し。善男子、唯我が身のみに非ず、阿蘇囉窟に於ても說き盡すこと能はず。乃至十二[六]殑伽河沙數の如き如來應正等覺倶に一處に在るも亦是の如き福德の數量を說き盡すこと能はず。善男子、所有る微塵は我れ能く是の如きの數量を數ふ。善男子、如來に食を施して獲る所の福德は而も我れ數量を說き盡すこと能はず。善男子、又如し大海は我れ能く其の一一の滴數を數ふ。善男子、如來に食を施して獲る所の福德は而も我れ數量を說き盡すこと能はず。善男子、又如し[七]四大洲の所有る男子女人童子童女、悉く皆田に種ゑて四大洲に滿ち、餘の物を植ゑず唯芥子を種うるに、龍時序に順じて雨澤を降澍し芥子成熟し、一洲內に於て以て其の場と爲し、治踐すると倶に畢く都て大聚を成すに、善男子、是の如きは我れ能く一一の粒數を數へ盡す。善男子、佛に食を施して獲る所の福德は而も我れ數量を說き盡すこと能はず。善男子、又[八]妙高山王の如きは、水に入ること八萬四千踰繕那、水より出づること八萬四千踰繕那なり。善男子、是の如き山王を以て帋と爲して積み、大海水を以て其の中に充滿して皆墨汁と爲し、四大洲の所有る一切の男子女子童子童女を以て悉く皆妙高山の量を書寫するに積む所の帋聚書き盡して餘無きも、是の如きは我れ能く其の一一の字數を數ふ。善男子、佛に食を施して獲る所の福德は而も我れよく數量を說き盡すこと能はず。善男子、是の如きの一切の書寫の人皆十地の菩薩の位を得るも、是の如き菩薩所有の福德は如來に一食を施す福德と其の量異ること無し。善男子、又殑伽河沙數の如き大海の中の所有る沙數は、我れ能く其の一一の沙數を數ふ。善男子、如來に食を施して獲る所の福德は而も我れ數量を說き盡すこと能はずと。

是の時、大力阿蘇囉王、是の事を說くを聞き、涕淚悲泣し面目に盈流す。心に懊惱を懷き、哽噎

【五】觀自在布施の功德を說く。

【六】殑伽河(Gaṅgā-nadī)

【七】四大洲、須彌山の四方にある大洲卽ち南贍部洲、東勝身洲、西牛貨洲、北瞿盧洲なり。

【八】妙高山王須彌(Sumeru)を譯して妙高と云ふ。印度の世界觀の中心をなせる山の名。此の山は諸山中の王なる故にかく名づく。

卷の第二

是に於て式棄佛の後に佛有て世に出でたまひ、[二]尾舍浮如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と號す。除蓋障よ、我れ是の時に於て忍辱仙人と爲り深山に住處す。其の間礉𥕞崟にして、人能く到て久しく其の中に住る無し。是の時、我れ彼の如來の處に於て是の觀自在菩薩摩訶薩の威神功德を聞けり。是の觀自在は金地に入り身を現じて彼の覆面の有情の爲に妙法を說き八聖道を示し、皆當に涅槃の地を得べからしむ。此の金地を出でゝ又銀地に入る。是の處の有情は而も四足もて其の中に止住す。觀自在菩薩摩訶薩彼の有情を救ひ而して爲に說法す。汝應に是の如き正法を諦聽し、當に須く發心して審諦に思惟すべし。我れ今汝に涅槃の資量を示さんと。是の諸の有情は觀自在の前に立ち、菩薩に白して言く。無眼の有情を救んが爲に開明し其の道を見せしめよ。恃怙無き者には爲に父母と作り恃怙を得しめよ。黑闇道中には爲に明炬を燃じて解脫の正道を開示せよ。有情若し菩薩の名號を念ぜば而ち安樂を得ん。我れ等常に是の如き苦難を受くと。是の時、此れ等一切有情は大乘莊嚴寶王經を開き、是を聞き得已つて皆安樂を得、[三]不退地を獲たり。

是の時、觀自在菩薩摩訶薩是の中より出で又鐵地に入る。而して是の處に於て大力[四]阿蘇囉王を禁む。菩薩是の處に往くに身を現ずること佛の如し。是の時、大力阿蘇囉王、遠くより來り是の觀自在菩薩を迎ふ。阿蘇囉宮中に無數の眷屬有り、其の中多く是れ背傴矬陋なり。是の如き眷屬皆來り、親しく觀て觀自在菩薩摩訶薩の足を禮す、而して偈を說いて曰く。

我れ今生に果を得、所願悉く圓滿す、意に希ふ所の如きは、斯れ是れ我が正見なり。

既に菩薩を見るを得、我れ及び諸眷屬皆安樂を得たり。是に於て寶座を以て觀自在菩薩に獻じ恭敬合掌して白して言く。我等眷屬昔より已來、好んで邪婬を樂み、常に瞋恚を懷き、殺生命を愛す。

【一】佛、過去世に尾舍浮佛の時忍辱仙人となり、觀自在より寶王經を聞く。
【二】尾舍浮(Viśvabhū)徧一切自在と譯す。過去七佛の第三佛、莊嚴劫中千佛の最後の佛なり。
【三】不退地、成佛の道を退轉せざる菩薩の位地なり。菩薩の初地位を云ふ。
【四】阿蘇囉(Asura)、阿修羅ともす。非天と譯す。

蘇羅衆は是の經を聞くを得て皆慈善の心を發して手掌を以て觀自在菩薩摩訶薩の足を捧げ、斯の正法を聽き皆安樂を得たり。若し人是の如き經王を聞くを得て能讀誦せば、是の人若し〔六二〕五無間業有るも皆消除を得、命終時に臨み十二如來有つて之を來迎し、是の人に告げて言く。善男子、應に恐怖すること勿れ、汝既に是の大乘莊嚴寶王經を聞けり、種々の道を示して極樂世界に往生し、微妙蓋、天冠、珥瑞、上妙衣服是の如きの相を現ぜん。命終し決定して極樂世界に往生せんと。寶手よ、觀自在菩薩摩訶薩は最勝無比にして阿蘇羅身を現じ、彼の阿蘇羅をして當に涅槃の地を得べからしむと。是の時、寶手菩薩は頭面もて地に著け、世尊の足を禮し、禮し已て退きき。

〔六二〕五無間業、五逆とも云ふ。一、母を殺す、二、父を殺す、三、羅漢を殺す、四、佛身より血を出す、五、和合僧を破る。

を以て得度すべき者には、即ち菩薩を現じて爲に說法す。應に緣覺身を以て得度すべき者には、即ち緣覺身を現じて爲に說法す。應に聲聞身を以て得度すべき者には、即ち聲聞身を現じて爲に說法す。應に大自在天身を以て得度すべき者には、即ち大自在天心を現じて爲に說法す。應に那羅延身を以て得度すべき者には、即ち那羅延身を現じて爲に說法す。應に梵王身を以て得度すべき者には、即ち梵王身を現じて爲に說法す。應に帝釋身を以て得度すべき者には、即ち帝釋身を現じて爲に說法す。應に日天子身を以て得度すべき者には、即ち日天子身を現じて爲に說法す。應に月天子身を以て得度すべき者には、即ち月天子身を現じて爲に說法す。應に火天身を以て得度すべき者には、即ち火天身を現じて爲に說法す。應に水天身を以て得度すべき者には、即ち水天身を現じて爲に說法す。應に風天身を以て得度すべき者には、即ち風天身を現じて爲に說法す。應に龍身を以て得度すべき者には、即ち龍身を現じて爲に說法す。應に[五九]頻那夜迦身を以て得度すべき者には、即ち頻那夜迦身を現じて爲に說法す。應に藥叉身を以て得度すべき者には、即ち藥叉身を現じて爲に說法す。應に[六〇]多聞天王身を以て得度すべき者には、即ち多聞天王身を現じて爲に說法す。應に人王身を以て得度すべき者には、即ち人王身を現じて爲に說法す。應に宰官身を以て得度すべき者には、即ち宰官身を現じて爲に說法す。應に父母身を以て得度すべき者には、即ち父母身を現じて爲に說法す。善男子、觀自在菩薩摩訶薩は彼の有情の應に度す可き者に隨つて、是の如く身を現じて爲に說法し、諸の有情を救ひ皆當に如來涅槃の地を證すべからしむと。

是の時、寶手菩薩、世尊に白して言さく。我れ未だ曾て是の如き不可思議希有のことを見聞せず、世尊、觀自在菩薩摩訶薩は是の如き不可思議有り、實に未だ曾有なりと。佛善男子に告げたまはく。此の南瞻部洲を金剛窟と爲し、彼に無數百千萬俱胝那庾多の阿蘇羅有つて其の中に止住するに、善男子觀自在菩薩摩訶薩は阿蘇羅身を現じ、是の阿蘇羅の爲に此の大乘莊嚴寶王經を說くに、阿

【五九】　頻那夜迦（Vināyaka）常隨魔或は障碍神と譯す。

【六〇】　多聞天（Vaiśravaṇa）毘沙聞天のこと。四天の中の一、此の天の王を多聞天王と云ふ。

在菩薩所有の福德は而も我れよく數量を說き盡すこと能はず。善男子、又如し人有て天の金寶を以て造作せる塵數の如き如來の形象は而も一日に於て種々の供養を成就するを得て獲る所の功德は而も我悉くよく其の數量を數へ能ふ。善男子、觀自在菩薩の所有の福德は、而も我れ數量を說き盡すこと能はず。善男子、又如し一切樹林は我れよく其の一一の葉數を數へ能ふも、觀自在菩薩の所有の福德は、而も我れよく數量を說き盡すこと能はず。善男子、又如し四大洲所有の男子女人童男童女、是の如きの人皆[五七]預流果、一來、不還、阿羅漢果、緣覺、菩提を成ずるも、是の如きの所有の福德は觀自在菩薩の一毛端の福と其の量異ること無しと。

是の時、寶手菩薩、世尊に白し言さく。我れ昔より已來、諸佛如來の是の如き福德の者有るを未だ曾て見ず、亦未だ曾て聞かざる所なり。世尊、觀自在菩薩は位菩薩に居り、云何んか而も是の如きの福德有る耶と。佛、告げたまはく、善男子、獨り此の界の唯我が一身のみに非ず、乃至他方の無數の如來應正等覺倶に一處に集るも亦よく觀自在菩薩の福德の數量を說くこと能はず。善男子、此の世界に若し人有つてよく觀自在菩薩の名を憶念せば、是の人は當來に生老病死輪廻の苦を遠離し、猶し鵝王の風に隨つて去るが如く、速に極樂世界に往生するを得、面のあたり無量壽如來を見、妙法を聽聞せん。是の如きの人は而も永く輪廻の苦を受けず、貪瞋癡無く、老病死無く、飢饉の苦無く、胎胞生身の苦を受けず、法の威力を承けて蓮華より化生し、彼土に居り、是の觀自在菩薩摩訶薩に候ひ一切有情を救度し、皆解脫を得て堅固に願滿つと。

[五八]是の時、寶手菩薩、世尊に白して言さく。此の觀自在而も何の時に於てか一切有情を救度し、皆解脫を得て堅固に願滿つるや。世尊、告げて言はく。有情は無數なり、常に生死輪廻を受けて休息有ること無し。是の觀自在是の如き有情を救度せんと欲するが爲に菩提道を證し有情の類に隨つて身を現じて說法す。應に佛身を以て得度すべき者には、即ち佛身を現じて爲に說法す。應に菩薩身

【五七】預流(Srota-apannah)、一來(Sakṛdāgāmī)、不還(Anāgāmī)、阿羅漢(Arhat)。

【五八】觀自在の救度現身の相を說く。

是の時、觀自在菩薩摩訶薩彼の極樂世界を出でたまふの時なり。地は六震動す。

爾の時、寶手菩薩摩訶薩、世界に白し言さく。何の因緣を以て斯の瑞を出現したまふやと。佛、善男子に言ふ。是れ觀自在菩薩摩訶薩、此に來り到らんと欲したまふが故に斯の瑞を現じたまふと。是の時又適意の妙華及び妙蓮華を雨したまふ。時に觀自在菩薩、手に金色光明の千葉蓮華を執り、佛所に來詣して佛足を頂禮し、是の蓮華を持して佛に上げ奉る。此の華は是れ無量壽佛の我をして持ち來らしむるなりと。世尊此の蓮華を受け左邊に致在したまふ。

佛、觀自在菩薩摩訶薩に告げたまふ。汝今是の神力功德の莊嚴を現ずるは意に於て云何ん。觀自在言く。我れ一切惡趣の諸有情を救度せんが爲の故なり。所謂る一切餓鬼、阿鼻地獄、黑繩地獄、等活地獄、燒燃地獄、[五三]煻煨地獄、鑊湯地獄、是の如き等の大地獄中の所有る衆生なり。我れ皆救ひ諸惡趣を拔離し、當に[五四]阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の時、觀自在菩薩は是の如く說き已り佛、足を頂禮し畢つて去り、忽然として現れざること由し火焰の虛中に入るが如し。

[五五]爾の時、寶手菩薩、世尊に白して言さく。我れ今疑有り、問はんと欲す、如來願くは爲に宣說したまへ。觀自在菩薩は何の福德有て而して能く是の神力を現ずるやと。佛、言はく。如殑伽河沙數の如來應正等覺、天妙衣を以て及び袈裟、飲食湯藥、坐臥具等を以て供養し、是の如き諸佛の獲る所の福德は、觀自在菩薩の一毛端の福と其の量異ること無し。善男子、如し[五六]四大洲、其の一年十二月中に於て、晝夜分に於て恒に大雨を降すに、我れ能く其の一一の滴數を數ふるも、善男子よ、觀自在菩薩所有の福德は而も我れよく數量を說き盡す能はず。善男子、又如し大海の深廣なること八萬四千踰繕那なるも、是の如き四大海の水は我れ能く其の一一の滴數を數ふ。善男子、觀自在菩薩所有の福德は而も我れ數量を說き盡す能はず。善男子、又如し四大洲所有の四足の有情、師子象馬虎狼熊鹿牛羊、是の如き一切四足の類は、我れ悉く能く一一身中所有毛數を數ふとも、善男子、觀自

【五三】煻煨（Kukūlam）、火星焰黑沙とも譯す。熱風は熱黑沙を吹き、沙有情の身に著き皮骨焦爛して久しく苦を受く。

【五四】阿耨多羅三藐三菩提（Anuttara-samyak-sambodhi）無上正遍知或無上等正覺と譯す。

【五五】觀自在の福德は不可說なり。

【五六】四大洲、一、南贍部洲、二、東勝身洲、三、西牛貨洲、四、北瞿盧洲。この四洲は須彌山を中心として四方に在り。

を出す。觀自在の身は是の如き諸天を出す。時に觀自在菩薩、大自在天子に告げて言く。汝未來の[四九]末法世時に於て衆生界中に有り、而して衆生有つて邪見に執着し、皆汝は無始已來に於て大主宰と爲り而して能く一切有情を出生すと謂はん。是の時に衆生は菩提道を失ひ愚癡迷惑にして是の如きの言を作さん。

此の虛空の大身は、大地を以て座と爲す。境界及び有情は、皆是の身從り出づ。

是の如く善男子よ、我れ尾鉢尸如來の所に於て是を聞き已りて後復佛有て出でたまふ。[五〇]式棄如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號したてまつる。除蓋障よ、我れ是の時に於て勇施菩薩摩訶薩の爲に彼の佛の所に於て觀自在菩薩摩訶薩の威神功德を聞けりと。除蓋障の言く。世尊の聞きたまふ所の觀自在菩薩摩訶薩の威神功德は其の事云何んと。佛言はく。是の時、式棄如來の會中に一切天、龍、[五一]藥叉、阿蘇囉、蘗嚕拏、摩護囉誐、人及び非人有て悉く來り集會す。時に彼の世尊は是の衆中に於て法を說んと欲す。時に口にて種々雜色の光明を放つ。所謂る靑色の靑光、黃色の黃光、赤色の赤光、白色の白光、紅色の紅光、[五二]玻胝迦色の玻胝迦光、金色の金光なり。其の光遍く十方の一切世界を照し、其の光還り來て佛を遶ること三匝にして却て口に入る。時に彼の會中に寶手菩薩摩訶薩有り、座從り起て偏に右肩を袒にし、右膝を地に著け合掌恭敬して世尊に白して言さく。何の因、何の緣により斯の瑞を出現したまふやと。佛、善男子に告げたまふ。極樂世界に觀自在菩薩摩訶薩有り、此に來らんと欲したまふが故に斯の瑞を現じたまふ。彼の觀自在此に來りたまふ時、種々の劫樹、華樹、矩母那華樹、瞻波迦華樹を出現し、復雜華、寶池、樹雨、種々妙華を現じ、又諸寶摩尼、眞珠、琉璃、螺貝、璧玉、珊瑚等の寶を雨し、又天衣を雨すこと雲の如くにして下る。彼の時に祇樹給孤獨園に七寶出現す。所謂る金輪寶、象寶、馬寶、珠寶、女寶、主藏寶、主兵寶なり。是の如き七寶出現の時は其の地悉く皆變じて金色と成る。

[四九] 末法世時、世に三時あり、正像末と云ふ。佛法世に滅したるを末法世時と云ふ。

[五〇] 式棄（'Sikhin）、過去七佛中の第二佛名。

[五一] 藥叉（Yaksa）、阿蘇囉（Asura）、蘗嚕拏（Garuda）、摩護囉誐（Mahoraga）

[五二] 玻胝迦(Sphatika) 水精なり。

樂を獲、各々心中に審諦に思惟す。[四〇]南贍部洲の人は何が故に常に清涼安隱の快樂を受け、其の中に或は善く能く常に父母に恭敬孝養を行ふ者有り、或は善く能く善知識に惠施し遵奉する者有り、或は聰慧明達にして常に大乘を好む者有り、或は善く能く[四一]八聖道を行ずる者有り、或は善く能く法の[四二]犍稚(かんち)を擊つ者有り、或は善く能く破壞せる僧伽藍を修むる者有り、或は善く能く故佛塔を修むる者有り、或は善く能く破損せる塔の相輪を修むる者有り、或は善く能く法師を供養し尊重する者有り、或は善く能く如來の[四三]經行處を見る者有り、或は善く能く菩薩の經行處を見る者有り、或は善く能く[四四]辟支佛の經行處を見る者有り、或は善く能く[四五]阿羅漢の經行處を見る者有るやと。是の思惟を作す。南贍部洲に是の如き等の修行の事有りと。是の時、此の大乘莊嚴寶王經中に自然に微妙の聲を出す、是の諸の餓鬼は其の聲を聞くを得、所執の身見は山峯の如く、諸煩惱ありと雖も金剛智の杵は破壞して餘無し。便ち極樂世界に往生するを得。皆菩薩と爲り。隨意にと名づく。

[四六]是の時、觀自在菩薩摩訶薩、斯の苦を救ひ已り、又他方諸世界中に往き有情を救度す。是の時、除蓋障復佛に白して言さく。世尊よ、觀自在菩薩摩訶薩は此の處に來り有情を救度するやと。世尊告げて言はく。善男子是の觀自在菩薩は無數百千俱胝那庾多の有情を救度して恒に間息無く。大威力を具すること如來に過ぎたりと。[四七]除蓋障白して言さく。世尊よ、觀自在菩薩摩訶薩は云何が是の如き大威神力有るやと。佛、善男子に告げたまふ。過去劫に於て佛有り、出世したまひ、[四八]尾鉢尸如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名づく。我れ是の時に於て一長者の家に於て子と爲り妙香口と名づく。彼の佛の所に於て是の觀自在菩薩の威神功德を聞けりと。時に除蓋障白して言さく。世尊の聞きたまふ所の觀自在菩薩摩訶薩の威神功德は其の事云何ん。世尊告げて言はく。觀自在菩薩は其の眼中に於て而ち日月を出し、額中に大自在天を出し、肩は梵王天を出し、心は那羅延天を出し、牙は大辨才天を出し、口は風天を出し、腹は水天

[四〇] 南贍部洲 (Jambudvīpa) 須彌山南方の大洲、吾人の依土。

[四一] 八正道、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を云ふ。

[四二] 犍稚 (Ghaṇṭā) 打木なり。

[四三] 經行、坐禪の爲に睡眠を催せるを防ぎ、又は養生の爲に一定の地を施繞往來するを云ふ。

[四四] 辟支佛 (Pratyekabuddha) 緣覺又は獨覺と譯す。

[四五] 阿羅漢(Arhān) 無學と譯す。

[四六] 觀自在の威神力の相を說く。

[四七] 劫 (Kalpa)

[四八] 尾鉢尸 (Vipaśin)、過去七佛中の第一佛名、勝觀、又は淨觀と譯す。

眞如意に相應す。妙德口中に現じ、[三二]三摩地を積集す。無數百千萬、無量の快樂有り、端嚴最上の仙は、惡道中に恐怖す。枷鎖解脱を得、一切無畏を施し、眷屬衆圍遶し、諸願皆意の如きこと、[三三]摩尼寶を獲るが如し。餓鬼城を破壞し、開いて寂靜道と爲し、世間の病を救度すること、幢を蓋覆するが如し。[三四]難陀、跋難陀の二龍、爲に腋に絡り、手に不空索を執り、無數の威德を現じ、能く三界の怖を破る。金剛手と藥叉と羅刹及び[三五]步多と尾多と[三六]拏枳儞と及び[三七]拱畔拏と阿鉢娑麼囉とは、皆悉く恐怖を壞く。[三八]優鉢羅華眼の明主は無畏を施し、一切の煩惱等種々皆解脱し、微塵數百千の三摩地に入り、諸境界を一切惡道中に開示し、皆解脱を得て、菩提道を成就せしむ。

是の時、閻魔天子、種々に觀自在菩薩摩訶薩を讃歎し供養し已り、旋遶すること三匝し却つて本處に還る。

爾の時に除蓋障菩薩、復佛に白し言さく。世尊よ、彼の觀自在菩薩摩訶薩は是の苦を救ひ已り此の會中に還り來る耶と。

[三九]佛、除蓋障菩薩に告げて言はく。善男子よ、彼の觀自在菩薩は大阿鼻地獄從り出で已り、復餓鬼大城に入る。其の中に無數百千の餓鬼有り、口より火焔を出し、面目を燒燃し形體枯瘦し、頭髮蓬亂し身毛皆堅つ。腹の大なること山の如く、其の咽は針の如し。是の時に觀自在菩薩摩訶薩は餓鬼大城に往詣するに、其の城の熾燃たる業火悉く滅して清涼に變成す。時に門を守る鬼將有り、熱鐵棒を執る。醜形にして巨質、兩眼深赤なり。慈心を發起し、我れ今是の如き惡業の地を守護すること能はずと。是の時、觀自在菩薩摩訶薩大悲心を起し、十指の端に於て各々河を出す。又足指に於ても亦各河を出し、一一の毛孔皆大河を出す。是の諸餓鬼其の中の水を飲む。是の水を飲む時に咽喉寛大にして身相圓滿なり。復種々上味の飲食を得悉く皆飽滿す。此の諸餓鬼旣に是の如き利益安

【三二】三摩地（Samādhi）
【三三】摩尼（Maṇi）珠、或は如意味なり。
【三四】難陀（Nanda）、跋難陀（Upananda）
【三五】步多（Bhūtāḥ）、夜叉の類と云はる。
【三六】拏供儞（Ḍākinī）大黑神の眷屬にして人の心肝を食ふ。
【三七】拱畔拏（Kumbhāṇḍāḥ）增長天の眷屬の鬼神なり。
【三八】優鉢羅（Utpala）は睡蓮と譯す。此の花を佛眼に喩へたるなり。
【三九】觀自在の餓鬼趣を濟ふ事を說く。

是の如く善男子、聖觀自在菩薩摩訶薩、大阿鼻地獄に入る時、其の身所障礙有る能はず。時に阿鼻地獄の一切の苦具るも菩薩の身を逼切すること能ふこと無く、其の大地獄の猛火悉く滅して清涼地る成る。是の時、獄中の閻魔獄卒心に驚を生じ、疑怪すること未曾有なり。何が故に此の中に忽然として變じて是の如きの非常の相を成ずるやと。是の時、觀自在菩薩摩訶薩其の獄中に入り彼の鑊湯を破り猛火悉く滅し、其の大火坑變じて寶池と成り、池中の蓮華大なること車輪の如し。是の時、閻魔[24]獄卒是の事を見已て諸の治罰の器杖弓劍鎚棒弓箭鐵輪三股叉等を將て閻魔天子に往詣す。到り已て白して言く、大王決定して能く我が此の業報の地を知る。事を以ての故に悉く皆滅盡するやと。復閻魔天子に白し言く、大阿鼻地獄變じて清涼と成る。是の如き事の時に、一の色相端嚴の人有り、髮髻は天妙の寶冠を頂戴し其の身を莊嚴して地獄中に入る。鑊湯破壞し、火坑は池と成り、池中の蓮華大なること車輪の如しと。是の時に閻魔天子、諦に心に思惟すらく、是れ何の天人の威力か是の如くなる。[25]大自在天と爲すや、[26]那羅延天等と爲すや。彼の地獄に到り是の如く現ずるは不可思議なり。是れ大力十頭[27]羅刹の威神の變化と爲す耶と。爾の時、閻魔天子、[28]天眼通を以て此の天上を觀じ、諸天を觀じ已る。是の時、復阿鼻地獄を觀じ、觀自在菩薩を見る。是の如く見已り、速疾に觀自在菩薩の所に往詣し、到り已て頭面もて禮足し、誠實の言を發し、偈を以て讃じて曰く。

蓮華王に歸命したてまつり。大悲觀自在は、大自在吉祥をもつて、能く有情の願に施す。大威神力を具して、極暴惡を降伏し、暗趣に明燈と爲り、覩る者皆畏無し。百千臂を示現し、其の眼亦復然なり。十一面を具足し、智は四大海の如く、微妙法を愛樂し、諸有情、龜魚水族等を救はんが爲に、最上智は山の如く、寶を施し群生を濟ひ、最上大吉祥にして、福智莊嚴を具し、阿鼻獄に入り、清涼地を變成し、諸天皆供養し、[29]施無畏を頂禮す。[30]六波羅蜜を說き、恒に法燈炬を燃じ、[31]法眼は日明に逾え、端嚴なる妙色の相あり、身相金山の如し。妙腹の深法界は、

【二四】閻魔（Yama-rāja）平等に罪を治する義、地獄の總司なり。已以閻魔王觀世音を見讃歎す。

【二五】大自在（Maheśvara）天摩醯濕伐羅と音譯す。色界頂に在り、三千界の主なり。

【二六】那羅延（Nārāyaṇa）

【二七】羅刹（Rākṣasa）

【二八】天眼通、色界の清淨なる四大を以て成れる眼根を以て遠近粗細を覩じて通達無礙なるもの。

【二九】施無畏、觀世音は衆生の依怙となり、怖畏なからしむ。卽ち無畏を施す。故に觀世音を施無畏と云ふ。

【三〇】六波羅蜜、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度。

【三一】法眼、五眼の一、一切法門を照見する智慧。

の寶篋を以て嚴飾を爲す。是の如き種々莊嚴せる劫樹出現し其の數而ち百千有り。其の祇陀林衆園の門樓は金剛妙寶を以て階陛と爲し、其の樓上に無數の殊妙の綺婇、眞珠の瓔珞有り、是の如く莊嚴す。復百千の上妙の寶池有り、[一八]八功德水其の中に充滿し、而して上妙圓滿の雜華有り。所謂る優鉢羅華、矩母那華、奔拏哩引迦華、曼那囉華、摩訶曼那囉華、優曇鉢羅華等なり、池中に盈滿す。復種々種々上妙の華樹有り。所謂る瞻波迦華樹、迦囉尾囉華樹、波吒囉華樹、妙解脫華樹、香雨華樹、妙意華樹なり。是の如き等の悅意の華樹有り。其の祇樹園是の如き等の希有の淨妙莊嚴の相を現ず。

是の時、會中に[一九]除蓋障菩薩摩訶薩有り、座從り起ち偏に右膝を袒ぎ、右膝を地に著け合掌恭敬し、尊顏を瞻仰して佛に白して言く。希有なり世尊、我れ今心中に而ち疑事有り如來に問んと欲す、唯願くは世尊よ、我が所問を聽きたまへ。世尊、今此處に於て大光明有り、何從り來り、何の因緣を以て而も是の如き希奇の相を現ずと爲すや。

[二〇]爾の時、世尊、除蓋障菩薩に告げて言く。善男子、汝等諦に聽け、吾れ汝が爲に引別解說せん。此の大光明は是れ聖觀自在菩薩摩訶薩、[二一]大阿鼻地獄の中に入り、一切の大苦惱を受くる諸有情を救度せんと欲するが爲の故なり。彼の苦を救ひ已て復大城に入り一切餓鬼の苦を救度すと。是の時、除蓋障菩薩摩訶薩、佛に白して言さく。世尊よ、其の大阿鼻地獄は周圍鐵城にして地復是れ鐵なり。其の城の四周間斷有ること無く、猛火の煙焰恒時に熾燃たり。是の如き惡趣地獄の中に大鑊湯有り、其の水湧沸す。而して百千[二二]倶胝那庾多の有情有り、悉く皆鑊湯中に擲入すること譬へば水鍋の諸豆を煎煮するが如し。盛に之を沸る時、或は上り或は下り、而して間斷無く之を煮て糜爛す。阿鼻地獄は其の中の有情是の如きの苦を受く。世尊よ、聖觀自在菩薩摩訶薩は何の方便を以て其の中に入るや。世尊、復除蓋障菩薩摩訶薩に告げて言はく。善男子よ、[二三]轉輪聖王の天摩尼寶園に入るが如く、

【一八】八功德水、一、甘、二、冷、三、輭、四、輕、五、清淨、六、不臭、七、飲時喉を損せず、八、飲み已つて腸を傷はず。此の八功德を具足す。

【一九】除蓋障菩薩（Sarvanivaraṇaviṣkambhi）除一切蓋障菩薩、或は除一切惡趣菩薩とも云ふ。大慈悲拔苦除障門に住し、正に菩提心中の如意寶珠を以て一切衆生に無畏を施し、その所願を滿足すと。

【二〇】佛、聖觀音の地獄救濟の事を說く。

【二一】阿鼻（Aviciḥ）無間と譯す。

【二二】倶胝那庾多（(Koṭinayuta)

【二三】轉輪聖王(Cakravartinrājā)王身に三十二相を具し、即位するや天より輪寶を感得し、此の輪寶轉じて四天下を降伏すと、故にこの名あり。

[一二]復百千の緊那囉女有り。所謂る一意緊那囉女、深意緊那囉女、風行緊那囉女、水行緊那囉女、乘空緊那囉女、迅疾緊那囉女、財施緊那囉女、妙牙緊那囉女、無動吉祥緊那囉女、染界緊那囉女、熾盛光遍緊那囉女、妙吉祥緊那囉女、寶餞緊那囉女、觀財緊那囉女、端嚴緊那囉女、金剛面緊那囉女、金色緊那囉女、殊妙莊嚴緊那囉女、廣額緊那囉女、圓遠善知識緊那囉女、主世緊那囉女、虛空護緊那囉女、莊嚴王緊那囉女、珠髻緊那囉女、總持珠緊那囉女、明人圓遠緊那囉女、百名緊那囉女、施壽緊那囉女、護持佛法緊那囉女、法界護緊那囉女、上莊嚴緊那囉女、刹那上緊那囉女、求法常持緊那囉女、時常見緊那囉女、無畏緊那囉女、趣解脫緊那囉女、常祕密緊那囉女、駛總持緊那囉女、燄光焰緊那囉女、地行緊那囉女、護天主緊那囉女、妙天主緊那囉女、寶王緊那囉女、忍辱部緊那囉女、行施緊那囉女、多住處緊那囉女、持戰器緊那囉女、妙嚴緊那囉女、妙意緊那囉女なり。是の如き等の諸緊那囉女も亦來り集會せり。

[一三]復百千の鄔波索迦(うばそか)、鄔波斯迦も亦來り集會し、及び餘の無數の在家出家衆百千、異見外道、[一四]尼乾他等も亦皆大集會の中に來れり。

[一五]是の時、大阿鼻地獄より大光明を出し、其の光は祇陀林園を遍く照し、其の園は悉く皆變じて清淨と成り、天摩尼寶莊嚴柱を現じ微妙圓滿なり。大樓閣を現じ金寶校飾せり。復諸房を現じ、黃金房を現じ白銀もて門と爲す。白銀房を現じ黃金もて門と爲す。金銀間錯房を現じ、金銀間錯寶莊嚴殿と現じ、金銀間錯妙寶莊嚴以て其の柱と爲す。黃金殿を現じ、白銀もて柱と爲す。白銀殿を現じ、黃金もて柱と爲す。或は白銀殿には天の諸妙寶を以て其の柱を嚴にし、祇陀林樹上に種々の天の妙衆寶を現じて莊嚴を爲す。後黃金[一六]劫樹を現じ白銀もて其の葉と爲し、其の樹上に種々の莊嚴有り、百種の上妙の衣服、[一七]憍奢耶(きょうしゃや)等を懸挂す。復百千の眞珠の瓔珞は寶網羅の上に有り。復百千の上妙の寶冠、珥璫、繒帶有り。玲瓏の雜寶而ち之を嚴飾す。復上妙の雜華、上妙の臥具有り、微妙

【一二】緊那囉女名を擧ぐ。

【一三】鄔波索迦 (Upāsaka) 鄔波斯迦 (Upāsikā) 鄔波索迦に近事男、鄔波斯迦は近事女と譯す。兩者共に五戒を受けたる人なり。

【一四】尼乾他 (Nirgrantha) 六大外道の一の名。

【一五】聖觀自在菩薩の地獄の有情を救濟する瑞相を說く。

【一六】劫樹、大釋天の喜林園に此の樹あり、時に應じて所要の具を出すと。又曰く此の花の開閉により時を知るが故に劫樹と名づくと。

【一七】憍奢耶、野蚕衣と譯す。

莊嚴緊那囉王、珠寶緊那囉王、大腹緊那囉王、堅固精進緊那囉王、妙勇緊那囉王、百口緊那囉王、大樹緊那囉王なり。是の如き等の諸緊那囉王皆來り集會す。

一〇 復百千の天女有り、所謂る最上天女、妙嚴天女、金帶天女、莊嚴天女、聞持天女、甘露月天女、清淨身天女、寶光天女、花身天女、天面天女、口演五樂音天女、快樂天女、金鬘天女、青蓮華天女、宣法音天女、妙樂天女、樂生天女、妙嚴相天女、嚴持天女、布施天女、潔已天女なり。是の如き諸天女等も亦來り集會す。

一一 復百千の諸王女有り。所謂る妙嚴持龍女、母呰鄰那龍女、三髻龍女、和容龍女、勝吉祥龍女、電眼龍女、電光龍女、妙山龍女、百眷屬龍女、大藥龍女、月光龍女、一首龍女、百臂龍女、受持龍女、無煩惱龍女、善莊嚴龍女、白雲龍女、乘車龍女、未來龍女、多眷屬龍女、海腹龍女、蓋面龍女、法座龍女、妙手龍女、海深龍女、妙高吉祥龍女なり。是の如き諸龍女も亦來り集會す。

復百千の彥達嚩女有り。所謂る愛面彥達嚩女、愛施彥達嚩女、無見彥達嚩女、妙吉祥彥達嚩女、金剛鬘彥達嚩女、妙鬘彥達嚩女、樹林彥達嚩女、百花彥達嚩女、花敷彥達嚩女、寶鬘彥達嚩女、妙腹彥達嚩女、吉祥王彥達嚩女、鼓音彥達嚩女、妙莊嚴彥達嚩女、豐禮彥達嚩女、法愛彥達嚩女、法施彥達嚩女、青蓮華彥達嚩女、百手彥達嚩女、蓮華吉祥彥達嚩女、大蓮華彥達嚩女、體清淨彥達嚩女、自在行彥達嚩女、施地彥達嚩女、施果彥達嚩女、師子步彥達嚩女、炬母那花彥達嚩女、妙意彥達嚩女、惠施彥達嚩女、天語言彥達嚩女、愛忍辱彥達嚩女、樂眞寂彥達嚩女、寶牙彥達嚩女、帝釋樂彥達嚩女、世主眷屬彥達嚩女、鹿王彥達嚩女、變化吉祥彥達嚩女、焰峯彥達嚩女、貪解脫彥達嚩女、瞋解脫彥達嚩女、癡解脫彥達嚩女、善知識眷屬彥達嚩女、寶座彥達嚩女、往來彥達嚩女、火光彥達嚩女、月光彥達嚩女、遍照眼彥達嚩女、金耀彥達嚩女、樂善知識彥達嚩女なり。是の如き等の彥達嚩女も亦來り集會せり。

【一〇】天女名を擧ぐ。

【一一】王女名を擧ぐ。

佛說大乘莊嚴寶王經

卷の第一

中印度惹爛馱囉國密林寺三藏
賜紫沙門臣天息災奉制譯

是の如く我れ聞き。一時世尊、[一]舍衞國[二]祇樹給孤獨園に在し、大比丘衆千二百五十人と倶なり。並に諸菩薩摩訶薩衆あり。其の名は曰く、[三]金剛手菩薩摩訶薩、智見菩薩摩訶薩、金剛軍菩薩摩訶薩、祕密藏菩薩摩訶薩、虛空藏菩薩摩訶薩、日藏菩薩摩訶薩、無動菩薩摩訶薩、寶手菩薩摩訶薩、普賢菩薩摩訶薩、眞常菩薩摩訶薩、除蓋障菩薩摩訶薩、大勤勇菩薩摩訶薩、藥王菩薩摩訶薩、觀自在菩薩摩訶薩、執金剛菩薩摩訶薩、海慧菩薩摩訶薩、持法菩薩摩訶薩等なり。八十[四]倶胝の菩薩皆來り集會す。

[五]是の時、復三十二の諸天子衆有り、皆來り集會す。大自在天及び那羅延天而ち上首と爲る。帝釋天王、[六]索訶世界の主大梵天王、日天、月天、風天、水天是の如きの諸天衆等皆來り集會す。

[七]復百千の龍王有り。所謂る阿鉢邏羅龍王、瞖攞鉢怛哩二合龍王、底銘嚟𪿸龍王、主地龍王、百頭龍王、虎膚紇拏龍王、得叉計龍王、牛頭龍、鹿頭龍王、難陀龍王、跋難陀龍王、魚子龍王、無熱惱龍王、娑蘖哩拏龍王なり。是の如きの諸龍王等皆來り集會す。

[八]復百千の彥達嚩王有り。所謂る鼓音彥達嚩王、妙聲彥達嚩王、千臂達嚩王、天主彥達嚩王、身歡喜彥達嚩王、種々樂音彥達嚩王、莊嚴彥達嚩王、現童子身彥達嚩王、妙臂彥達嚩王、法樂彥達嚩王なり。是の如き等の彥達嚩王皆來り集會す。

[九]復百千の緊那囉王有り、所謂る妙に緊那囉王、寶冠緊那囉王、熙怡緊那囉王、歡喜緊那囉王、輪

[一] 舍衞('Srâvastî)
[二] 祇樹(Jetavana)、給孤獨(Anâtapiṇḍika)
[三] 會座衆名を擧ぐ、初に菩薩名。
[四] 倶胝(Koṭi)
[五] 諸天名を擧ぐ。
[六] 索訶(Sahâ)
[七] 諸龍名を擧ぐ。
[八] 彥達嚩(Gandharva)即ち樂人名を擧ぐ。
[九] 緊那囉(Kinnara)名を擧ぐ、是れ人非人又は歌神と譯す。

納銘―道に入ると觀ず。
吽――道を守ると觀ず。
かくして又一字一字に佛を觀じ、この佛は自身に具足すと思惟す。是の如くこの陀羅尼は喇嘛教に於ては信仰の中心を作すものである。又ある者は麼抳は男性を表し、鉢納銘は女性を示し、曼荼羅に蓮花の上に摩尼寶を安くと說けるはこれ陰陽合會して萬物を生ずるを表示するものなりとの說を立て、此の陀羅尼を以て生殖の根本を示すものとなす。何れにしても本經は觀音信仰の動向を知るに缺くべからざるものなり。

本經に說く命終に臨み十二如來來迎の事は望月博士の「淨土教の研究」に述べられたるが如く、無量壽經に說く十二光佛は彌陀一佛の光明の德を讃歎せるものであつて、十二光佛と云ふと雖も一一の別佛を云ふに非ず。然るに莊嚴寶王經卷一に「若し人是の如きの經王を聞くを得て能く讀誦せば、是の人若し五無間業あるも皆消除するを得て命終に臨む時十二如來有り、來つて之を迎へ云云」とあるは是れ十二如來各別にして一如來の上の德を表はせるものにはあらず。是れ十二如來の思想に關し好資料を與へるものなり。

昭和八年十二月二日

譯者　坪井德光　識

あり、外の四角には四賢瓶を安くと。觀自在は斯く曼荼羅を明し已つて、唵麼抳鉢訥銘吽の六字は大明陀羅尼を說くに、蓮華上如來は觀自在を讃歎し、諸寶を以て供養を爲す。觀自在は供養の物を受け已つて之を無量壽佛に捧げ、無量壽佛は之を又蓮華上如來に捧ぐ、此處に於て蓮華上如來は六字大明を受持して本土の蓮華上世界に還往したまふ。佛は往昔に於て此の蓮華上如來より六字大明陀羅尼を聞くを得たりと。次で佛、除蓋障の爲にこの大明の功德を說き、今波羅奈大城に此の大明を持する法師あり、この法師は戒行缺犯して妻子あり、大小便利を以て袈裟を觸汚し、威儀あること無しと。時に除蓋障はこの法師のもとに到り種々供養を作し、六字大明王陀羅尼を乞ふに虛空に於て觀自在の聲あつて法師をして除蓋障の爲に六字大明王陀羅尼を與へしむ。除蓋障は明を受け已り、釋迦牟尼如來の處に到る。その時七十七倶胝の如來は皆集會し七倶胝佛母陀羅尼を說くに觀自在菩薩の身の毛孔より種々の奇瑞の相を現す、最後に佛、阿難の爲に業因果の相を說き玉ふ。（已上第四卷）

三、六字大明及び十二如來の來迎

本經は觀自在菩薩の威神力の廣大なることと及びこの菩薩の微妙本心なる唵麼抳鉢訥銘吽（Oṁ maṇi padme hūṁ）の六字大明王陀羅尼を說き明す事に終つて居るのである、が尙ほ一つ注意すべきは十二如來來迎の事である。

此の六字大明を說けるものは此の經の外には如意寶珠轉輪祕密現身成佛金輪呪王經一卷不空譯（正、十九、三三〇）に唵阿鑁覽坎佉摩尼鉢頭迷吽（Oṁ a vaṁ raṁ haṁ kha maṇi padme hūṁ）を說くを見るのみである。然るに此の經は僞作にあらずやと云はるゝものである。要するに唵麼抳鉢納銘吽の明を說くは大乘莊嚴寶王經に始まると云ふべきである。又此の陀羅尼を扱へる末書には顯密圓通成佛心要集二卷宋道顧集（西紀九六〇—一一二七）がある。これは卷一に密教心要を說く中にこの六字大明を一百八遍誦すること及び其によつて得る功德を莊嚴寶王經に說く所によつて示して居る。然し乍し六字大明は西藏喇嘛教に於ては日本佛教に於ける光明眞言、彌陀名號、日蓮宗の題目の如くに一般に用ひられ、また大に威德あるものとされて居るのである。喇嘛教にては此の六字明を輪轉器に彫り、以て觀音の功德を歎し、其の功德を得んが爲に毎日この器を轉じ、六字の一一に次の如く觀想をなす。

唵——心を明らむと觀す。

麼——性を見ると觀ず。

抳——生を衞ると觀ず。

鉢——氣を養ふと觀す。

佛、尾舍浮如來の世に忍辱仙人と爲り、彼の如來より觀自在の此の經を說けるを聞く、又觀自在は佛の爲に布施の功德、地獄の苦相を說く。時に觀自在は祇陀林に來らんとし途中に於て黑闇處の有情の爲に此の話の功德を說き、天宮中に到り妙嚴耳天子を度し、次で師子國に到り羅刹女を度し、波羅奈大城に到り蟲類を化度し、摩伽陀國に於て飢饉の苦を救ひ已り祇陀林の尾舍浮如來の前に到り化度の事を告ぐと。是の如く、佛過去世の事を說き玉へる時に虛空藏菩薩、佛前に在り觀自在の威神力の廣大なるを歎じ、佛は此の菩薩の爲に六波羅蜜を說き玉ふ。(已上第二卷)

佛、除蓋障の爲に觀自在の具足せる六十七三摩地、化現して師子國の五百の商主を羅刹女の難より救濟せること、具足せる功德及び此の經の功德を說く。卽ち觀自在の德は廣大にして不可說なり、此の菩薩は見無く、聞無し、彼れ無自性の故に普賢と雖も彼の變化せる所を思議するを得ず。然もその德は一切有情をして極樂世界に往生せしめ、無量壽如來を拜し、法を聞くことを得しむ。又觀自在の娑婆世界化度の時は無時にして來り、一切有情の爲に父母と爲り、無畏を施し、開導す。又彼に六字大明あり、この明を稱念せば圓寂地を證すと。此の六字大明の功德は廣大にして思量すべからず、而してこの明を得る處は知るを得ずと雖も之を持誦せば無數の如來、菩薩、三十二天等集會し、四大天王、諸龍王、藥叉、虛空神等あつて持誦者を衞護し、この人は無盡の辯才、淸淨智聚大慈悲を得、六度を具足す、若しこの人の口より出づる氣息に觸るゝ者あらば、その人は菩薩の位を得。或は手に觸れ、或はこの人を見るを得る人は菩薩の位に到るを得と。(已上第三卷)

二

佛、除蓋障の爲に六字の明を得る因緣を說く。卽ち、佛過去世に於て寶上如來の前に到り六字大明を乞ひ求むるに、然も得ず。次で蓮華上如來に求むるに、此の如來は六字大明の功德無量なる事を明し、而して觀自在菩薩のみこの大明に住するものなりと說き、此處に於て如來は無量壽佛にこの大明を乞ふに、無量壽佛は又觀自在に此の大明を說くことを乞ふ。時に觀自在は未だ曼荼羅を見ざる者には此の大明を說き聞かすべからずとて、先づ曼荼羅を說いて曰く、五肘四方の壇の中央に五種の色寶粖を以て無量壽佛を畫き、その右に持大摩尼寶菩薩、右に六字大明(卽ち觀自在なり)を畫くべし。この尊は四臂にして、左手は蓮華を持ち、華上に摩尼寶を安く、右手は數珠を持ち、下の二手は一切王印を結ぶ。六字大明の足下に天人を安き、その右手に香爐、左手に鉢を持つ、曼荼羅の四角には四天大王

佛說大乘莊嚴寶王經解題

一、譯者の傳

迦濕彌羅國（Kaśmiira）沙門天息災は宋太宗興國五年二月（西紀九八〇）烏塡曩國（Udyāra）三藏施護と共に來朝し、帝に召されて紫衣を賜はり、七年六月明教大師の號を賜はる。時に譯經儀式を述べ、一、譯主、二、證義、三、證文、四、書字梵學僧、五、筆受、六、綴文、七、參譯、八、刊定、九、潤文等の位次を定む。七月聖佛母小字般若波羅蜜多經一卷を譯す。雍熙三年には御製三藏聖敎序を賜はり、新譯經に冠す。咸平元年（西紀六九八）眞宗は御製三藏聖敎序を賜ひ先帝の聖敎序の後に置かしむ。三年八月（西紀一〇〇〇）三藏示寂す。慧辨法師の諡號を賜はる。以上佛祖統紀四十三及び四十四に說ける大要であるが、此の傳に依れば本經の譯時は不明である。而して天息災の生國は迦濕彌羅とされて居るが、彼の譯經十八種の內一經も迦濕彌羅國と題せるものを見ぬ、然るに十一經には惹爛達羅國（Jaidara）三藏として居るのである。西域記三及び四に迦濕彌羅と闍爛達羅とは共に北印度の境にありとして居るのである。然る時に天息災は何れの國人と爲すべきか。咸淳五年（西紀一二六九）に、成れる佛祖統紀に說く所よりも、譯者がその譯經に題せる文を以て勝れたりと云ふべし。

二、本經の內容

本經は四卷より成り、雜部密經に屬し、觀音法を說けるものなり。佛、舍衞國給孤獨園に在し、除蓋障菩薩の請により說き玉へるものなり。

除蓋障菩薩、天、龍、彥達嚩、緊那羅、天女、王女、緊那羅女、近事男女等の衆と共に佛前に在る時、大阿鼻地獄より種々の瑞相現じて祇陀林園を莊嚴す。爰に於て佛、此の瑞相は觀自在菩薩が地獄を化度し玉ふに由るなりとて、觀自在の地獄救濟の相及び閻魔王の觀自在を讚歎する事を明す。次で、佛過去尾鉢尸佛の世に長者の子に生れ妙香口と名づけらたる時、尾鉢尸佛より聞き奉れる觀自在の威神力の相を說き、又式棄佛より聞受せる觀自在の不可說の福德、二十身に化現して衆生を濟度する相並に觀自在が過去世に於て既に大乘莊嚴寶王經を說ける所以と此の經の功德を說き、若し此の經を聞き讀誦せば五無間消滅して命終時に十二如來來迎して必ず極樂へ往生すと說く。

（以上第一卷）

し惡友を遠離し、天龍・藥叉・部多・魅母天・毘舍遮・緊那羅・摩睺羅伽等、能く沮壞すること無く、一切の疾病を離れ、非時に夭死せず、一切の明は皆な成就することを得、一切發起する所は皆な善く作し善妙方便を以て、能く一切の事業を成就せん。善男子よ、我れ略して說せり。頂輪の眞言を成就する者は、無量の功德の福利を獲傳す。一切世間の書論工巧は皆な能く知り、乃し菩提場に坐するに至らん。

世尊よ是の經を說き已り、彼の大菩薩摩訶薩及び聲聞、一切天、龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等彼の一切の集會、佛の所說を聞きて、皆な大歡喜に信受し、奉行しき。

一字奇特佛頂經（終）

(10) 佛は天衆に此の王呪の流布を命ず

その時、世尊は、天衆に告て言く天子よ、此の法教を方所に流轉せよ。汝等應に轉法輪の想を作すべし。是の如く善男子よ、正法を若し供養せば、當に知るべし。我に供養せるなり、何を以ての故に、天よ、法身は、是れ如來なればなり。若の法に供養すれば、卽ち如來に供養することと爲るなり。と

その時世尊は、伽多を說き玉へり。

戒を持して蘭若、城邑及び聚落に住せよ。若し上成就を欲せば　誇せず矯誑せず　常に利益を作すべし。

その時、世尊は曼殊室利菩薩童子に告て言く、是の如く佛頂眞言菩薩摩訶薩を修して、是の如くの法を獲得し、眞言行を修し、一切の菩薩法を滿せよ。童子、我れ略して無量の菩薩の神通法を得るを說けり。此に於て復佛頂眞言行の善巧法を說かん。と

時に無量百千の菩薩は、世尊に於て、種種の金銀眞珠瓔珞を、自の頸より脫して爲に法に供養するが故に捨施供養す。

その時、世尊は一切の衆會に告て、是の言を作し玉へり。

(11) 輪王明呪の功德

若し此の明王を成就するものあらば、彼の菩薩行に於て、此れより（身を）捨て終つて、乃し菩提場に坐するに至るまで、惡趣に墮せず、下族に生ぜず弊惡ならず、短壽ならず、壽命長遠にして善く有情を成熟せん。佛刹を成就して、菩提心を迷惑せず、所生の處に宿命を憶し、聞持を得て忘れず、無盡の集會は常に寂靜を樂ひ、大自在の大福を成就し、妙色闕減せず、語（言）威肅にして、人をして聞かんと樂はしめ、善く一切如來に承事して、善く諸の波羅蜜を滿ぜん。善友を攝受

【三六】蘭若は具には阿蘭若(araṇya)と云ひ、閑寂處と譯し寺院を指す。

時に金剛手は是の如きの言を作せり。世尊よ若し輪王佛頂の眞言を成就する善男子・善女人・比丘比丘尼有りて、菩提心を發し、三時に我が眞言一遍を誦ずれば、一印の障（者）毘那夜迦は近附くことを得ず。我れ彼の持明の持金剛杵の爲めに、加護して、一切時に彼の行者の眞言明に成就を與へん。と

(8) 輪王佛頂大明王の功力

その時、世尊は金剛手に告て言く、祕密主よ、若し此の輪王佛頂大明王を受持すれば、一切如來の三昧最勝なり。若くは讀（誦）し、若くは他の爲に廣説顯示すれば、多くの有情の爲に、長夜に利益安樂を爲さん。如來智を證せんが爲めの故に修行せよ。若し善男子・善女人ありて、若し此の（妙法を）成就し、若しくは讀誦し、若しくは供養し、若しくは常に念誦すれば、其の人久しからずして、速に無上正等菩提を證せん。

(9) 釋尊は末法の衆生を愛護することを約す

その時、世尊は上首の普賢菩薩等に告て言く、此の阿僧祇倶胝劫に積集する正等菩提を、我は隨喜す。是の如くの法要に於て、佛は加持し攝受す。如來涅槃後の末時に、贍部洲に於て、善根を積集する有情、經卷を書寫し、經を手にする者と若し復善男子・善女人・天龍・藥叉王・大羅刹王・善根を積集して、無上正等菩提を獲得する（者）あらば、我は身を衆生に隱して加護を作さん。と

時に普賢等の上首の菩薩は、佛に白して言く、世尊よ、奇なる哉、此の法教善男子・善女人の此の如來の無數百千那由他劫に集積する所の無上菩提を、我等は護持せん。是の如く世尊よ、我等は、彼れに頂輪を勤修する者に於て若しくは受持し、若くは讀誦し、乃至經卷を書寫する（者をば擁護せん）我等は（又）彼の念力を加護せん。此の念力に由て、（衆生若し）是の如き類の法教を聞き、若し圓證を聞かば、當に受持し讀誦し書寫すべし。と

時に彼の一切障（者）毘那夜迦は、一音を以て是の言を作せり。世尊よ、彼の善男子(卽ち)頂輪の眞言を勤修する者の爲に、加護を作し、其の念力を加へん。と

(5)　**天帝釋は行者を守護することを約す**

その時、天帝釋は頭面禮足し、佛に白して言く、世尊、我れ多くの如來より、眞言行の所說を聞けり、世尊よ、若し復轉輪王の三摩地に入りて變化し得れば、此の頂輪王の三摩地に於て、無疑を得て、有情は無量の善根を積集せん。

世尊よ、若し佛頂眞言行を修するもの有れば入ることを得ん。若し受持し讀誦し、廣く他の爲に說かば、世尊よ、我等は、彼の善男子の爲に、承事、並に諸營を作さん。と

(6)　**四大天王は護衞を誓ふ**

時に四大天王並に眷屬は、佛に白して言く、村色・聚落・主城に於て、此の佛頂輪王を成就せんとする者あらば、念誦の所在處、五百由旬の間、世尊よ、我並に眷屬は、軍營を從へて加護せん。世尊若し明王を念誦することを成就せば、我等四天王並に眷屬は、彼れに往て彼の輪王眞言行者を供養し侍衞せん。一切の障（者）毘那夜迦の便を求むる者も、其の便を得ざらしめん。と

(7)　**金剛手菩薩の眞言**

時に世尊は、金剛手に告て言く、祕密主よ、汝自の眞言を說け、頂輪王の眞言を修する者の障を壞せんが爲めの故に、守護吉祥、息災の故にと、時に金剛手は世尊の敎令を得て佛の威神力を以て自心の四字の眞言明王を說く。

娜謨三漫多勃馱南阿鉢囉二合底呵多舍娑那南嚩曰囉二合吽嚩二合

時に金剛手は、大明王の眞言を說く時に、此の三千大世界は六種に震動し、十方の（虛）空中に於て、毘那夜迦は阿呵の聲を作せり。

退轉の菩薩地を獲得せしめんが故に、一切如來の教に入らしむ。如來教を安立するが故に、一切の佛菩薩行を修するが爲に、大乘に入りて惡有情、暴怒難調の罪心者と佛法を壞する難調障の毘那夜迦とを調伏し、是の如くの身形を以て、三歸依を受けしざるが故に、一切の難調（者）をして、無上正等菩提を發心せしむるが故に、一切世界に於て佛事を作し、當に衆生に利益安樂を成じて、無上の解脱道を得べきが故に。と

時[二五]に大忿怒王は衆生利益の故に、大忿怒王に變化し、此の三千大千世界を、吽聲（卽ち）一切如來所説の成就眞言を遍滿し、一切の佛菩薩行を作し、一切如來の加持を以て、復此の眞言を説く。

娜謨三漫多勃馱南阿鉢羅二合底呵多舍娑那南唵吽爾拏哩致吒吽吽發娑嚩二合訶

彼の時、如來は勝三摩地を得て、忿怒眞言の句を成就し玉へり。時に一切の大地を見るに劫燒の時の如く、一切三千大千世界は震・極震・遍震し、動・極動・遍動しき。是の如く、此の世界に六種に震動せり。一切の天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅等の魔宮は皆な震動し、熾然に光明遍く、一切の天は自の神通を失ひて、皆な戰掉す。一切難調の毘那夜迦等は悲惱し、光明を以て遍り、皆な佛法僧に歸依し、皆な是の如き言を作せり。

(4) 毘那夜迦の誓約

世尊よ、今より已後、我等は咸な一切有情の利益を作さん。一切の障（者）毘那夜迦、及び餘の大威德難調の鬼魅等は、世尊に往詣して、頭面禮足し、一音聲を以て、是の言を作せり。

世尊よ、所有の後末時に於て、此の頂輪王の眞言を成就せんと欲する者、若し誦ずれば、我等が成就を與へん。と

その時、世尊は彼の障（者）毘那夜迦の爲に讃歎し、善哉、善哉、大障（者）毘那夜迦よ、善く此の語を説けり、如來は皆な隨喜せん。と

【二五】大忿怒王は卽ち金剛手菩薩の降伏三昧の身相なり。

金剛手よ、此を無能勝大忿怒と名く。能く一切の障（者）毘那夜迦を摧き、能く一切の魔道を超え能く一切の惡障毘那夜迦・天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・摩睺羅伽等を調（伏）し、百量百千俱胝佛の說き玉ふ所の能斷一切世間出世間忿怒の眞言は能く一切の佛頂眞言を修する者の利益を作し能く無量百千俱胝の魔を摧き、能く輪王の眞言を修する者を護り、一切時に一切の魔障を調伏すと（說已つて世尊は）頂輪王の三摩地に攝入し玉ふ、

時に世尊が、是の大忿怒王を說く時に、刹那の頃に（一切の毘那夜迦は）佛の威神力を以てこの曼荼羅に集會して（大忿怒王の眞言）字句の言說を聞き、此に於て大恐怖の師子吼を出し、暴怒の形を現す。

(3) 金剛手は大忿怒三昧に入る

世尊釋迦牟尼佛は、難調の衆生を哀愍し調伏せんが爲めの故に、如來事を作すが故に大忿怒（身）を變化し、頂輪の眞言を勤修する菩薩摩訶薩を利益するが故に薩婆惹を示現するが故に、大師子吼の如來は、是の如くの形像を（金剛手菩薩の身上に）加持し玉へり。（菩薩は忽にして變身して大忿怒王と成り）恐怖形・狗牙上に種種の頭を出し、眼光熾盛にして、種種の龍を以て、瓔珞となし、身の高さは八萬四千由旬、無量の臂に、種種の器仗を持し、光明は劫盡時に照耀するが如し、雨唇頰戰掉し、一切の星耀・天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅等を皆な摧伏し玉ふ。一切の三千大千世界に於て、威光の映蔽を以て、佛の光明と及び住不思議解脫三摩地菩薩とを除き、餘の光は悉く照耀せず、何を以ての故にとならば、加持の故に。

時に大忿怒王は右に釋迦牟尼佛を遶り、世尊に白して言く、大精進、敎令を示し玉へ、我は何を爲して、如來の敎に依て住すべきや。と

佛は大忿怒に告ぐ、汝は一切佛菩薩の加行を行する者に往き、利益安樂を作せ（今汝をして）不

切を佛頂王に攝入す。能摧一切魔の三摩地に入るに由るが故に、是の如く北方に於ては、光明王如來を上首となして是の如し、南方に於ては、帝釋幢如來を上首と爲して是の如し、上方に於ては勝闘戰如來を上首と爲して是の如し、下方に於ては寶蓮華山王如來を上首と爲して是の如し、十方一切如來皆な頂輪王の眞言に入り、彼等は皆な能摧一切魔三摩地に入る。彼の一切世界所有の魔宮は皆な一火聚の如く、所有の魔界衆の天子、號叫驚怖し、遍身に汗を流し、皆な自らの神通を告ふ、一切の菩薩は釋迦牟尼佛を供養するが爲めの故に、上は虚空より花を雨らし、或は劫樹を雨らし、蓮華・牛頭栴檀・衣裓雲等を覆ひ雨らし、所有の地獄・傍生・餓鬼等の趣に生する所の有情、彼れ一切は皆な刹那の頃に最勝安樂を得、一切の苦逼を離る。

その時、釋迦牟尼如來は、彼の三摩地より起て、金剛手祕密主に告て言く、汝は今此の大忿怒王一切如來の所説を受く、頂輪王の眞言を成就する者の爲に。加護を作さしめよ、是の如く一切世界中の一切如來は、皆な彼の三摩地より起ち、各各に世界の中に於て、彼の菩薩の爲に說く。

その時、金剛手祕密主は、釋迦牟尼如來、應供正遍知を遶ること百千匝し、還りて寶蓮華座は坐し、瞬目せずして觀察して而も住せり。觀じ已て、世尊に白して言く、世尊、唯願くば大忿怒王を說き玉へ、我が成就の爲の故に佛頂輪王の眞言菩薩摩訶薩を成就するが故に。と

(2) 釋尊は無能勝大忿怒王を說き玉ふ

時に釋迦牟尼如來は、自の意樂を以て、鼓音の如く顯暢し、海擊の如く、雷震の如く、甚深善妙の種種の廣美なること、[二三]迦羅頻迦の聲の如く、健妙に無邊の世界に警告し、如來吼の如く一切の意願を滿じ、一切の菩薩をして歡悦せしむ。世尊、釋迦牟尼如來は、平等に三千大千世界に住し、無能勝大忿怒王を說き玉へり。

南讃三漫多沒馱南阿鉢羅二合底呵多舍娑那南唵吽爾拏哩致吒吽吽發娑嚩二合訶

【二三】迦羅頻迦（Kalaviṅka）は好聲鳥。

加持する三摩地の金剛なり。善男子よ、此れを以て、汝は有情の利益を作せ。佛世尊に於て金拂を持し、佛世尊に於て敎令を護持し、菩薩行に於て慇懃に作せよ。祕密主は是の如く語り已て、須臾にして隱れて現せず。刹那にして其の行者は、金剛手の如く、見難く、眷屬と與に乃至人を見、及び人彼を見るに、皆な空に騰りて、遍く光明に滿ち、諸天讃揚して花を雨らし、所樂の有情は共に空に騰に、菩薩と爲ることを得て、神通を得、難調を調伏して、能く對敵するもの無し、大持明轉輪王と爲りて、意に隨て世に住し、百千の眷屬と共に空に騰り、無量の世界に行き、彼の佛を見て法を聞て皆な勝解を得、一切の遊戲神通を知り、大菩薩と與に住し、乃至極樂世界に行き、無量壽佛を見、及び曼殊室利菩薩と及び餘の菩薩とを見、共に俱に大人相を以て莊嚴せられ、頭を頂髻と爲し、種種の眞言敎を以て、衆生利益を作し玉ふ。

(6)　**この法は如何なる者にも成就す**

我れ略說す。乃至次第に菩提場に坐し、無上正等菩提を證し、是の如く一切最勝に成就す。灌頂を受けざる者と、與みすべからざる惡人と、及び菩提心を發さざる者と、弭戾車〔三二〕と資糧を積集せざる者と和尙と阿闍梨とを毁謗する者と說の如く修行する者と一切皆な成就することを得るなり。

菩薩藏品第九〔三三〕

(1)　**攝一切覺三摩地**

その時、釋迦牟尼如來は、一切佛頂能摧一切魔三摩地に入攝し玉ふ。佛綫に此の三摩地に入るに由り、故に、彼の時に於て、此の三千大千世界は六種震動し、無邊の光明を出し、彼の光明を以て乃至十六無量の世界を照曜し、皆な一切周遍し、大光明を以て照曜し、東方に於ては金剛幢如來を上首と爲し、河阿沙數等の如來も是の如し、西方に於ては、無量壽如來を上首となし、是の如く一

〔三二〕弭戾車(Mleccha)とは異人種若しくは蠻人の稱。

〔三三〕正藏、一九、三〇五、C——三〇七、B

大自在天王、或は梵那羅延、日天或は火天、水月天、焔魔、曠野に住する者、叉王[三二]、倶尾羅は印と眞言とにて教の如くすれば、刹那に卽ち滅壞せん。

卽ち成就者は、一切皆な大忿怒王の無能勝を以て、隨方所來の障難を息めしむ。先づ白芥子等を加持して、助伴をして擲散せしめ、或は自ら擲て、先づ別に花香を置き、一一加持して頂輪王を擲散し、心に念を作して、金剛手祕密主を觀じて、警覺し加持せしむるが故に、卽ち魔障皆な息む。

(5) 金剛手祕密主の威德

佛頂王より光明を出し、三千大千世界を照耀し、一切の天宮を映蔽す。金剛手を警覺するが爲めの故に、光明は照耀し、警覺し身を滋澤す。自の宮より事無量百千の持明明王尊の上首たる金剛將蘇摩呼頂行は、持明無量勝慧女の使者の上首たる明王妃と倶に無量の大菩薩に前後に圍遶せられ、無量の使者制吒、奉教及び女奉教、無量倶胝、千印契倶胝輪王は、成就者の願を授與せんが爲めの故に來り、先本願に由るが故に、佛世尊の不空言の故に、祕密主來る時、其の中間に於て、三千大千世界、六種振動し、一切の天龍・藥叉・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅等の種種の色類金剛手に於て供養を作し一切地獄の有情、刹那の頃に、須臾に安樂を得、彼の時に當て、一有情の互に相害する者有ること無し。一切の世間出世間の修眞言明者は、菩薩の加持を以て、皆な成就することを得、則ち行者先づ置く所の香水と閼伽とをもつて（供養すべし）金剛手は行者頂を摩し、讃して言く、善哉、善哉、大薩埵、善哉、大丈夫、是の如く菩薩皆讃歎す。金剛王は纔に（行者を）摩頂するに由るが故に、一切の天龍・藥叉等、及び淨居天は花を雨らし、上虛空に於て、皆な音樂を奏す。一切の草樹及び山等、皆な金剛手菩薩に向つて、低靡し、一有情をも能く損壞する者あることなし。卽ち金剛手祕密主は、能く無量難調の有情を調し、大菩薩の慈（悲）を以て行者を加持し、金剛杵を授與す。大薩埵此の金剛杵は、難調伏の有情を調伏せしめんが爲に、菩薩地に獲得するが故に、慈（悲）を以て

[三二] 叉王は具には夜叉王と云ふ。

世尊を見、卽ち五神通を得、地大菩薩、一切有情の語言威儀を知るを得、乃身上に水を出し、身下に火を出す等に至る。帝釋（天宮）に往詣し、（天は）成就者を見、彼と共に虛（空）を淩ぎ、無量の持明（者）に圍遶せられ、菩薩行[一八]を獲得し、威德無比にし一身を多身と爲し、多身を一身と爲す百千無量の變化を作し、石壁及び水（中）に去來無礙なり。意に樂ふ所に隨て、世に住することも是の如く（長短自在なり）如來を見ることに由て、百千の功德を得、聞持陀羅尼を得て刧壞する時餘の世界に移る。

(4) 諸尊供養と除障

その時、釋迦牟尼如來は、金剛手祕密主を觀じ、大成就を說き、先づ所說の處に、先事法を作し淸淨處に於て本尊の像を安じ、神通分の滿月に於て助伴あるも、或は助伴なきも、堅固勤勇にして一日一夜、像前に對して、廣大に供養し、三白食[一九]を獻じ、外は諸鬼神に施すべし。轉輪王曼荼羅あり。阿闍梨は曼荼羅を畫け、或は師に從て印可を得くる者は、自ら畫くも過なけん。曼荼羅の中に於て、像を張りて護を作し、方隅界を結することは、先に說く所の如く。眞言と一切の印契と皆な用ひて、結跏趺坐せよ。本尊は本眞言を以て迎請し、一切の白花及び有香花を以て、應に一切の佛菩薩聲聞緣覺に供養すべし。飮食等有るに隨て供養せよ。則ち意を定めて金剛手を觀じて而も大供養を作せ。金剛鉤、金剛拳菩薩を慇懃に供養し、餘の金剛部の智者には、花を以て供養せよ。卽ち結跏趺坐して、佛前に對して、無煙火を以て、沈水香を燒き（明）一千八遍を誦じて、而して護摩し、卽ち障難と種種の惡形と現はれなば、忿怒王の印を以て、打て當に卽ち四方に驅散すべし。

眞言と印と相應して、當に四方に擲つべし、設令是れ天王、及びこれ帝釋、世間欲、自在魔王大波旬[二〇]、或は自の頂行尊なりとも、忿怒王は當に壞すべし、印と眞言との威力にて、

その時、釋迦牟尼如來は此の伽他を說き玉へり。

【一八】以下本文に所樂去處皆隨卽至、無量復來の十一字あり。

【一九】三白食とは粳米飯に乳酥、酪を和したるもの。

【二〇】彼旬（Pāpiman）とは殺者、惡者と譯す、魔の稱なり。

の甲を壓す。

それ此の印を結べば、先づ自身、無能勝忿怒主と爲ると觀じ、加持して恐怖の形を作り、狗牙上に出で、種種の頭、眼光熾盛、種種の髗を以て、瓔珞と爲し、身の高さ八萬四千由旬、無量の臂に種種の器杖を持し、光明は劫盡時の照曜の如く、雨の唇頰は戰掉すと觀じ已て、應に本印を以て、自身の五處を加持せよ。印を結て心に當て、印は金剛羂索と爲ると想へ、右足或は鉢囉[一七]參哩茶に立つ魔の所在の方に隨て而して打て、卽ち一切の障は皆な退散せん。

忿怒王の印と名く、能く一切の障を壞せん、帝釋の如く成就し、丈夫・那羅延、及び餘の大威德速疾に諸天を壞せん、是の如く印の大力と、相應すれば久しからずして壞せん。諸の有情所得の衆生界有ることとなし、此の印を以てすれば、速疾に調伏するを得るや疑なし、能く一切の毒を除き、纔に念ずれば諸魔を除かん。暴惡の諸の有情、及び諸の惡龍等、諸魔大障主は、速疾に皆な滅除して、諸事を作すや疑ひ無けん。

是の如くの大印無能勝大忿怒王を、佛頂の敎に於て修行するものは、一切大障處に應に用ふべし一切の事業を成辦せん。

(3) 供養作法

卽ち持明者は、像前に對して、蘇燈を然すこと一千八盞せよ、助伴あれば、有情利益の爲に大悲を起し、輪王根本印を結んで、念誦して乃し、中夜に至つて、卽ち相を現ずれば、卽ち持眞言者は應に我れ決定して成就すと知るべし。像動き或は地動きなば、卽ち先に致す所の香花等を取りて、佛菩薩の像及び一切金剛部に香花を供養し、獻し已て、金剛手に沈水香を燒き獻ずるに頂輪王根本の眞言を以てすべし。

復印を結び結跏趺坐して、專注して一意に念誦し、乃し明相の時に至るまで、中間に於て卽ち佛

【一七】鉢囉參哩茶(Prayrddha?)は丁字形を意味す。

すべし。後に應に蓮華と、乳糜と及び酥蜜との千數を以て、應に護摩すべし。誦終らば天は召に趣かん。帝釋及び舍支[一三]（をも召に應ぜん）何に況んや王類等をや、應に鉤召の事を作すべし所有の王の妙事、及び諸の人間の事、能く一切事を作すは頂輪王を誦ずるに由る。諸毒も暴惡形も、諸魅の峻威力も、諸疾難療者も（咸な悉く除去せられん）若し諸の事業を作さんには意を定めて（頂輪王を）千八遍を誦せよ、若し諸の小事を作さんにも（亦然り）諸の降伏の事に於ては、相應の諸の事業には、赤白芥油麻と、毒苦楝と犬脂[一四]とを、一切應に護摩すべし。彼の生を護らしめんが爲に。大菩提[一五]の妙樹の、吉祥下の天處と、及び轉法輪處と、神通を示現せる處と、靈鷲と吠舍離と、並に藍毘尼林と拘尸城等處とはには、速疾に成就を現せん。乃至佛眞言一切成（就すること）疑ひなし。彼の無障難に於て、魔の惱害有ることなし、この故に彼の處に於て、速疾成就を說かん。及び餘の寂靜處。山峯大河に、悅意の池や恒河、彼の殊勝處是の如くの所說處に、像を安じて不亂意に師に從て灌頂を得、然して後に成就を作せ。先づ儀軌の如く行じ、應に是の如き事を作すべし。七月に大勤勇し、心（眞言と）及び隨心の明とを、印を以て慇懃に護り、當に神通分に於て、慇懃に念誦を作して、滿月に成就を起すべし。借像に供養し、應に三白食を供ずべし。一切の佛、菩薩及び聲聞に獻じ、力に隨て緣覺と及び、應に金剛手とに、飮食等の供養を獻ずべし。

(2) 大忿怒無能勝の印

則ち茅薦に坐し、或に結跏趺坐し、一心に自身にて佛菩薩に獻じ、沈水香を燒て、佛に供養し、一切の鬼神及び餓鬼、毘舍遮等に食を施與し、卽ち大忿怒無能勝の印を結び、眞言と相應して一切障者に擲てば、皆な壞散せん。此の印と相應するに由るが(故なり)。

二羽[一六]を以て互に交へ、二蓋面相合し、上節を屈して、右にて左を壓し、二輪を以て各々餘の三指

【一三】 舍支(Śacī)とは帝釋天の妃。

【一四】 犬脂は一本に大指とあれど誤りならん。

【一五】 菩提樹下等に曼荼羅を構て、修法すれば決定して成就す。

【一六】 この印は二內手縛にして二蓋(二頭指)の上節を屈して、二輪(二大指)にて、光高勝(中指、無名指、小指)の瓜甲を壓す。

男子よ、是の如く輪王佛頂眞言を修する者は、十地に住する菩薩も尙ほ加護を作す。是の如く汝等天王も、亦彼の菩薩行を勤修するもの幷に營從の眷屬を觀ること、佛の想の如くすべし。と彼の天等は咸な是の言を作さく、大菩薩[八]よ今より已後、此の輪王佛頂眞言を修する者にして、若し（人有りて）世尊の眞言と此の法教とを稱（讃）し、若しくは讀み若しくは淨信すれば、彼（の人）に於て皆な擁護を作さん。彼をして威力と念力と精進と慧力と三摩地力有りて、果報を得せしめん。汝は尊の眞言に由て（誦持者に對して）驚覺を作せ、我等（も亦）皆（驚覺を）作さん。佛の加持を以て、乃至一切の利益を作して、皆な奉敎せん。

最勝成就品第八[九]

(1) 輪王佛頂成就の妙業

その時に、釋迦牟尼如來は、復金剛手祕密主に告て言く、復次て祕密主よ、我れ今輪王佛頂成就の業を說かん。汝諦聽せよ。眷屬眞言心、及び隨心一切成就事業をば、根本眞言儀軌に依て、已に先事法を作し、牛欄[一〇]に於て成就者は、手を以て所成就物に按せよ。

牛黃或は雌黃、或は復一切寶は、鬼神敬愛するが故に、智者は百八を誦じ、勝儀淸淨者は、諸の有情を矜愍し、一心決定すれば、その物[一一]光明を得、若し暖[一二]なれば空に行くことを得、煙成ずれば最勝と爲す、光あれば空に乘ずるを（得）吉祥なり、彼の時に輪王たることを得ん。煙に由て陰身を得、暖相は敬愛を成ず、所成就等の物は、成就するに、皆礙げなし、大制底を禮敬し、及び窣堵波を作れ、少福の者も成就せん、決定して惑ふべからず。曼茶羅灌頂に、慇懃に應に入るべし。彼れ曼茶羅を見て、慇懃に灌頂を受けなば、過現の二罪滅しなん。憂怖及び諸魅も（亦滅しなん）若し諸天等を作らは、諸の凡類を鉤召し（て供養し）（又）廣し佛像を供養

【八】大菩薩とは觀自在尊。

【九】正藏、一九。三〇三c—三〇五c

【一〇】牛欄とは牛飼處。

【一一】その物とは牛黃等の成就物を指す。

【一二】暖・烟・光とは成就物の上に現はれる成就の兆候なり

益し安樂するが故に。と

時に觀自在菩薩摩訶薩と並に得大勢菩薩は、右に釋迦牟尼佛を遶ること七匝し、蓮華大警覺[六]に入る。大菩薩の三摩地と名く。此の大眞言を說く。

娜謨囉怛那二合怛囉二合夜耶娜謨阿哩野二合嚩盧吉帝濕嚩二合囉耶冒地薩怛嚩二合野摩訶薩怛嚩二合耶摩訶冒地薩怛嚩二合引奴枳娘二合多引山耶度那度那馱囉馱囉冒地薩怛嚩二合鉢囉二合底半寧娜呵娜呵跛遮跛遮阿羯哩灑二合沙耶阿羯哩灑二合沙耶吽發

大菩薩、纔に忿怒眞言王を說き玉へば、摩醯首羅・帝釋・焰摩・水天・倶尾羅・那羅延等、及び迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の一切の集會、及び餘の天類・母天・部多・障毘那夜迦等、皆な座より起ち、佛世尊に於て歸依し、唯願くば、世尊よ、我を救濟し玉へ。唯願くば善逝よ我を救濟し玉へ、世尊よ、大菩薩の光明を以て、我等に逼惱すれば、我等は皆な自らの神通を失はん。

その時、釋迦牟尼佛は彈指を以て、觀自在菩薩摩訶薩をして起たしむ、即ち刹那の頃、觀自在菩薩摩訶薩は、後の菩薩の三摩地よりて起て、瞬目せずして佛を觀已つて、彼の一切摩醯首羅、帝釋、梵王天等に告て言く、若し善男子善女人ありて、此の輪王佛頂を修し若しくは此の經を持して、早起し散華して、曼荼羅を作り、塗香花等を（供じ）淨信を以て（この經を）讀み、菩薩の眞言行に於て行すれば、一切の天王、一切の阿修羅一切の龍王（王一切）の迦樓羅王、一切の乾闥婆王、一切の摩睺羅伽王、一切の毘舍遮鬼神王等は、皆な成就輪王佛頂（明の誦持）者に於て、擁護を作さん。之を修するの時に當て、汝當に（飮食）等の物を供養し。彼の人に於て障難を起す莫れ。輪王佛頂眞言を修する者は、我[七]が蓮華より生ずる所の忿怒王なり。若し常に誦する者をば、我れ自ら當に彼に於て加護すべし。何を以ての故に、如來は即ち此の輪王の形に住し玉へばなり。是の故に善

【六】蓮華大警覺とは三摩地の稱。

【七】我とは觀自在菩薩。

この大忿怒王の眞言を以て、迦羅奢[五]を加持し、種種の飲食・懸蓋・幢幡を供養し、酥燈を然し、この眞言を以て、應に一切を加護すべし。師は應に灌頂を與へ、聖に於て殊勝の物を捨施すべし。先に說く所の壇儀軌の如く、入らしめ、灌頂を作し已れば、一切の天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・毘舍遮等は、障難を爲さず。地下の阿修羅女持明天及び餘は皆な隨順せん。一切の毘那夜迦族は、持明者を見れば、皆な馳散せん。此れより已後、諸毒癲癇蠱毒、皆な便を得ず。一切の明眞言の聖衆は皆な隨順せん。

(7) 入壇灌頂

此の中、纔に灌頂せる持明者の發起する所の成就も一切皆獲得せん。彼の有情果報の所得の聖甘露軍茶利法の灌頂には、不淨信者と矯誑者と師長に於て、恭敬せざる者とは、この灌頂に入らしむべからず。淨信者にして囉惹の敬愛を求むる者をして、上上の成就を求めしむべし。灌頂に由り、其人の有する殊勝の寶物を聖衆と及び師と施せば、彼の人の福は、七輪王に勝る。此の曼荼羅に遇ふて、此れに入ることに由て灌頂を得、一心に禁（戒）に住し、具に精進し、具戒に耽著せず、師をして歡喜せしむれば、彼れ一切悉く皆な獲得すること疑なきなり。

(8) 觀自在菩薩の眞言

その時、觀自在菩薩摩訶薩、佛の威神の力を以て、座より起ち、偏袒右肩し、右膝を地に著け、蓮華臺に於ける世尊に、合掌禮し已て、佛に白して言く、世尊よ、佛頂眞言王を修する者を、我は護持し、一切をして福報をなさしめん。一切の惡毘那夜迦等をして慈心を作さしめ、我が族中堅實にして我が蓮華より生ずる大眞言王を我今說かん。

佛の言く、汝今之を說け、有情を利益する大悲は、一切を增益して、成就を作すが爲めの故に汝は自己の蓮華より生ずる所の大忿怒王なり。應に之を說くべし。佛頂を修する眞言者は、天人を利

【五】迦羅奢 (kalaśa) は水瓶なり。

絕す。祕密主加持の故に、時に頂行は大障（者）毘那夜迦に（向つて）指端を以て彼等に擬し、纔に此の眞言を說けば、一切皆な起つ頂行は言く、汝大障主よ、如來は此の眞言形[四]を以て、輪王の眞言殊勝三摩地に住し玉へり。今より已後、惡心を起して、輪王眞言道を修する昇進者と、我が眞言を日に憶念する者と、彼の成就者とに於て汝等は障難の心を起すべからず。我は彼（行者）に於て擁護を作さん我が加護に由て、障難ある（者を）親近せしめず。大障將主よ我略說す。障難を作すべからず。若し作す者有らば、我は自らの杵を以て汝等の頂を摧かん。

(6) 曼荼羅と眞言

その時、釋迦牟尼如來、是の如くの加持を作し玉へり。加持に由るが故に、金剛手祕密主は、座より起て、佛に白して言く、世尊よ、我れ佛頂の眞言者と及び餘の眞言を修する者とを說けり。大明王は如來族なり。蓮華族なり、及び我が（金剛部）族なり。先事法を作す者は、此の大忿怒甘露軍荼利の、三昧耶を成すが故に、佛頂輪王を成就する者の灌頂の故に、狂心の有情を狂せざらしめんが爲めの故に、此の曼荼羅を盡く、河岸邊或は餘の淨地に於て先きに說く所の輪天曼荼羅儀則の如く、應に四肘の曼荼羅を緋くべし。四門に五色を以て曼荼羅を畫き、中央に佛世尊を畫き、蓮華に坐し頂より光を出し、左右に八毘那夜迦衆を畫く、皆な蓮華に坐す。彼等は謂ゆる金剛莊嚴・金剛塵・金剛索・金剛鉞斧・金剛極笑・金剛成莊嚴・金剛頂・金剛毘那夜迦能斷なり。皆な本形の如く、佛に請ふに本眞言を以てし、餘は皆な此の眞言を以てす。

娜謨囉怛那二合怛羅二合夜耶娜謨室戰二合拏嚩日囉二合波拏曳波訶藥乞叉二合細那波多曳娜莫室戰二合拏嚩曰羅二合句嚕馱耶唵虎嚕虎嚕底瑟姹二合底瑟姹二合滿馱滿馱呵那呵那阿蜜哩二合帝吽發娑嚩二合訶

【四】眞言形とは法曼荼羅なり。

中に遮ぎらる。輪王佛頂眞言を修して成就せる者は、若し此等を食するとも、汝等は過を執るべからず、惱害すべからず、悉地を奪ふべからず、心をして散動せしむべからず。我が敎令を以て、佛頂眞言を修する者に惡心を起すべからず。汝等彼の修行者を見れば、應に慈心を起すべし、汝等は（修眞言行者）をして本處を移動せしむる勿れ。若し我が語に違ひ、彼れに於て異心を起す者は阿吒迦嚩底王宮[二]、金剛手祕密主宮に住することを得ず。我が敎令に違越せば、我當に損罰すべし。及び餘の所有る天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺伽・一切餓鬼・毘舍遮・起屍作障毘那夜迦・羯吒布單・拏吉尼等も、輪王佛頂の眞言を修する者に、惡心を起し、心をし散動せしむべからず若し障難を作せば、我[三]れ金剛杵を以て、彼の頂を碎らん、我が語は誠實なり。と・

時に彼の一切障の將主謂ゆる金剛莊嚴・金剛索・金剛塵・金剛鉞斧・金剛成莊嚴・金剛頂・金剛極笑金剛毘那夜迦能斷、及び餘の大障毘那夜迦將主は、座より起て、頂行所に至り、致り已て、一音聲を以て、是の言を作し、敎令せらるるが如く、我等一切悉く皆作さん。今より已後、世尊の敎令に違越せずと。

(5) **頂行は除障の眞言を說く**

時に（大忿怒王は）頂行（即ち）大障（者）毘那夜伽等の作障の將主に告て曰く、我れ今成就佛頂眞言王を說かん。成就者に不饒益心を有する所の者は、百段せられん。速疾に馳散すべし。所有の天世毘那夜迦も能く障を作すこと無けん。是の如くの語を作し已て、彼の一切大作障將主の上首等と一切世界の作障者と悉地を奪ふ者と成就を攪擾する者とに於て、我れ自らの眞言を說かん。

那謨囉怛那二合怛囉二合夜耶娜謨室戰拏嚩曰囉二合波拏曳摩訶藥乞叉二合細那波多曳唵吽發吽吽發發娑嚩二合訶

復次に頂行は、自の眞言を說く、時に一切の彼の金剛莊嚴等の大障毘那夜迦は、皆な戰掉驚怖悶

[二] 阿吒迦嚩底(Atakavati)王宮とは毘沙門天王の宮殿なり。

[三] 我とは如來變化の大忿怒王即ち頂行を指す。

して四諦を見玉ふ我が爲に此の微笑の因を說き玉へり。梵王天・衆及び一切は、頭面に如來を頂禮し、瞻仰し恭敬し觀察したてまつる。我が爲に此の微笑の因を說き玉へ、山の如き善行と妙行とを行じ玉へ、定慧は智の光明と、解脫堅力と眞實の見とを涌起せん、我が爲に此の微笑の因を說き玉へ、金剛身は性堅にして壞し難く、那羅延は志人中の勝なり、梵音と妙音と文殊音とゐます我が爲に此の微笑因を說き玉へ、光明を獲得して幽暗を離れ普見の眼目ありて平等に住し、功德殊勝にして堅勇を得、我が爲に此の微笑の因を說き玉へ、世尊は已に勝法輪を轉じ、佛頂の聲で以て人天、並に龍藥叉及び一切に於て(示し玉へり)我が爲に此の微笑の因を說き玉へ。

(4) 毘那夜迦が輪王誦持者を害せざることを誓ふ

その時、頂行持童子形無畏を上首と爲す、百千の障者は圍遶し、佛の威神威怒の加持を以て座より起て、偏袒右肩し、世尊に於て合掌作禮し已て、佛に白して言く、世尊よ、我一切障者は、毘那夜迦中の主たり。世尊よ一切の障者は、我に遵奉す。一の障者は我に屬すと。(佛陀は)彼の一切障(者)毘那夜迦を觀じて、告て言く、汝等障(者)毘那夜迦、諦聽せよ、一切世界に於て、作障者にして、成就の人に於て、饒益せざる者の罪は、忿怒惡鬼魅等とし。と(毘那夜迦曰く)世尊よ、今より已後、頂輪を成就せん者にして、此の大忿怒眞言を、晨朝七遍誦すれば、世尊よ、我等は彼の一切作障(者)毘那夜迦を遠離せしめん。作成就のものには、魔障を起さしめず、身心をして散動せしめず、世尊よ、若し此の大忿怒眞言を以て、常に(自身)が護を作す者と、彼の持明成就明王者とには、我等が護を作り刑罰を遮り、爲に息災を作し吉祥を作し、一切の利益を作さん。世尊の曰く、汝等今より已後、頂輪敎王の勤行者と、修眞言者とに於て、障心を起すべからず。若し障を爲す時は、此の如來變化の大忿怒王は、必ず汝等を壞(滅)せん。汝等よ、行より已後、彼の修眞言行者を加護せよ。眞言行儀軌に於て、說く所の蜜・油麻・葱蒜薤・蘿蔔・鉢跛吒等を食せば、眞言行

巻の下

調伏一切障毘那夜迦天王品第七

(1) 文殊菩薩の請問

その時、曼殊室利童眞菩薩摩訶薩は、世尊の說法に於て、究竟すと知り已て、合掌して世尊に親近し頭面禮足し、右に遶ること三匝し、退て一面に坐し、曼殊室利童と眞菩薩は、佛に白して言く、世尊よ、是の如くの有情は、無始より(以來)四生に生じ、六道に長養す。世尊よ、此の有情聚、有情海の有情の增減は、盡く不可得なり。云何んか、世尊よ、如來の三摩地は、應に色相加持を見ることを得べきや。世尊の說の如くきは、此の眞言王を持する菩薩摩訶薩は、不退轉を得、乃至次第に無上正等菩提を證すと。世尊よ云何んが法門の理趣に入るや。云何んが法の功德を安立するや。云何んが三摩地法界の大威德は廣博に攝する示現を爲すや。と

(2) 佛の訓諭

その時に、世尊は微笑して是の言を作して言く、善哉、善哉、曼殊室利よ、復言く、善哉曼殊室利よ、汝は如來に是の如くの義と多人を利益し安樂し、世間の天人を矜愍する法と問へりと。

その時、佛世尊は、微笑を作して、口より種種の色光を出し玉へり。謂ゆる青・黃・赤・白・紫・頗胝・銀色なり。無量の世界乃至梵世を照らし、日月光を映蔽し、復來りて佛の口中に入れり。

(3) 文殊の佛讃歎

その時、曼殊室利童眞菩薩摩訶薩は、相を知り、相を知り已て、伽他を以て世尊を讃揚す。

妙に見え能く色相を現する者、八十隨形端嚴の者は、尋光・妙光、圓滿光ありて、是の如く我が爲に笑因を說き玉へり。忍辱と十力とある持進者は、精進して高く踊つて傾動なく、眼目愛樂

【二】正藏、一九、三〇一c—三〇三c

清淨慧は是の如し。菩薩摩訶薩は、四法を成就して、速に無上正等菩提を證し、甚深の法に於て忍を得、世尊が此の四法を説き玉ふ時に、無量の菩薩は無生法忍を得、無量の天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽も無上正等菩提心を發しき。

その時、世尊は此の伽他を説き玉へり。

是の如くの法の理趣は、正等覺の所説なり、此の眞言を修するに由りて、一切は如來と爲る、
若し生死を護せんと樂ひ、若し諸結を斷ぜんと欲し、一切の依止と爲らんとすれば、久しく此の行を修して、殊勝の想を起さしめよ、我れ端嚴に趣き、思惟して此の言を轉じ、常に平等の行を修し、不等の行を作さざれば、則ち菩薩の位を成せん。

し、彼に從て大明王を受け、廣く流布しき。彼の善根に由りて則ち廣大の功德を得て、威德是の如し、善男子よ。一切如來の不思議の三摩地は殊勝なり、是の故に菩薩は身に意を護りて、此の一字轉輪王を修持すべし、是の如く、善男子よ、如來は一切有情に於て、[五二]眞言形を以て善友と爲り玉ふ善男子善女人は、恭敬すること善友の如く想ふて、應に大明王[五三]を習ひ、應に承事し供養すべし。何を以ての故に、寂靜慧よ、若し善知識に於て親近し修習すれば、善法を成じ、善妙法を聞くことを得ん。善の意業を以てすれば、則ち善が行を得、善業を以て善に趣き、善助伴を得て、罪業を爲さず。善加行を作して、善に趣き已て、善の助伴に承事して、惡業を爲さず、旣に他に惡を爲さず、他の（善）意を護り、菩提道を圓滿すれば、道に住するに堪任し。大力ありて惡道に使する有情に於て義利を作す。是の故に、寂靜慧よ、善友に親近すれば、一切の功德を皆な圓滿することを得て皆な稱讚せらる。と

(3) 寂靜慧菩薩の問

時に寂靜慧菩薩摩訶薩は佛に白しく言く、世尊よ、菩薩摩訶薩に幾くの法を成就して、疾く無上正等菩提を證し、甚深の法忍を得るや。

(4) 佛の答

佛は寂靜慧菩薩摩訶薩に告ぐ、四法成就ありて、疾く無上正等菩提を證し、甚深の法忍を得るなり。何をか四法なりや、緣生法智に入り、無衆生と無人と無壽者とに入り、空法性に於て、決定して境界を勝解し、斷常の二見を遠離す。是の如くの四法は、前際も淸淨にして、後は來らず。三世平等なり。現在智を以て是の如く四法を（知る）又四法あり、佛性を應に觀ずべし。[五四]如來は慧眼を以て（諸法を觀じ）玉ふ。慧眼淸淨の（故に諸法亦淸淨なり）

又四（法）あり、波羅蜜を圓滿し、四攝の法を捨てず、善巧方便[五五]を以ての故に、大悲を發生す。

【五二】眞言形とは法曼荼羅の意。

【五三】大明王を善友の如く想ふて、之を習ひ、且し承事すべしとの意。

【五四】本文に佛色性說默僧の三字あり。

【五五】本文に無人決定の四字あり。

て供養を得、末利花鬘の如く、風は香を吹いて悦意なり。油に雜へたる麻は油と成り、その香亦芬馥たり、世尊の色は比びなく、群品は算量し難し、甚深及び威德を、色及び神通と名く、今所此の地に於て、我れ高廣の想を觀じ、云何んが女男に於て、少功德を讚揚せん、若し今聞く所の者は、法を聞かば復信を生ぜん、若し能く捨施せんものは、世尊[49]の敎中に於てせん、若し非家に趣かば、釋王敎中に於てせん、我れ彼の一切に於て、憐愍して親族の想あり、空中の蚊蚋の如く、大海の牛洼の如し、是の如く佛の功德は、讚する所竊言の如く我の如く天王に於ても、功德者を讚揚せん。或は佛聲の功德は、力に隨て我れ讚歎せん、恭敬し持して、珠鬘無價寶を供養せん、此の勝善根を以て、有情皆な佛の如くならん。

時に寂靜慧菩薩摩訶薩は、伽他[50]を以て世尊を讚揚し已て、佛に白して言く、菩薩は幾法の成就ありて、此の佛頂輪王一切如來三摩地熾盛を修するや。

(2) 佛は寂靜慧菩薩に對して法成就者の資格を明し玉ふ

爾の時、世尊は、伽他を以て、寂靜慧菩薩摩訶薩に答へ玉へり。

若し慈心と清淨心となりて、麁ならず柔軟に念を具する者は、禁を護り正直にして梵行を修せよ。彼の人は此の明王を成就せん。有ゆる罪を離れて惡を爲さず、常寂を增長して嗔恚を離れん。是の如くの人は明王を成す。他を嫌恨し及び調戲せんこと、是の如きを他に於て常に作さざれ、他の長短を窺はざれ、是の如くの人は、明王を成せん。若し佛法に於て功德具はり、常に恭敬を作りて而して供養し、他に於て打たず及び毀たざれば、彼れ皆な此の明王を成就せん。悋嫉妬なく及び慢なく、他に於て不饒益を作さず、他に於て實の過患を作さず、是の如くにして眞言王[51]を成就せん。

善男子よ我れ六十倶胝の佛に承事し供養し、彼の倶胝佛に於て本梵行を修し、法を求め勤て修行

【四九】非家とは出家の意。

【五〇】伽他(Gāthā)とは偈文を指す。

【五一】眞言王とは一字金輪王を意味す。

佛の境界は無量なり、佛所行の境は無量なり、佛世尊は、無量の三摩地に遊戲す。祕密主よ、此の一切は賢劫中の如來の說なり、過去・未來・現在佛の說なり。我今亦說かん。恒河沙數を同く如來の說と名け、皆な隨喜せん。若し善男子、善女人あり、後世後時に於て、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・淨澡浴して、佛前に對して供養を作し、此の明王の眞言を誦持すれば、是の如くの福利を成就し、淨信を生じて、當に天趣に生じて、天の大威德を得べし。若し人中に生ずれば、王と爲り宿命智を得此の生中に於て念誦すれば、一切の疾病を離れん。若し此の（法を）成就すれば、此の人の末後の身は菩薩の境界に入り、無量の佛世界に遊び、一切如來の如く遊戲せん。

說法品第六

(1) 寂靜慧菩薩の讚偈

その時、寂靜慧菩薩摩訶薩は、金剛手菩薩の弟なり。彼の大衆集會より起ちて、合掌して佛を禮し、世尊を供養せんが爲めの故に、自らの頸より無價の大眞珠鬘を脫し、右手を以て之を持し、世尊に獻じ、妙伽他を說て佛を讚し上る。

[四六]頂聲は三界の諸の有情の悅意なり。佛の此の聲は最勝にして、語を現はせば榮盛を得ん、所有の佛は法に住し、[四七]調御は彼に說法し玉へり。所生の等覺者、世尊は菩提を得、妙法輪を轉ずる者は、過往の圓修者なり。諸佛は皆な此に坐して、世間無比の人、彼彼の地所に於て、皆な成じて金剛の如くならん、現に世尊に對して、見ることを得るを吉祥と爲す。過去を吉祥と爲さば、誰か復妙法を聞かん。先づ是れ又吉祥にして、彼の吉祥は亦然り、彼れ敎の不壞を聞き、智慧者は正住す、彼に於て常に天を想へ、亦父母の想を觀じ、親しく姉妹の想を敎ければ、皆な無畏者を見る。先づ敎令を修作せよ、[四八]尸羅よりも最勝なり。彼の法天に由て、依附し

【四五】正藏、一九、三〇〇B——三〇一B

【四六】頂聲とは一字金輪の眞言。

【四七】調御とは具には調御師と云ひ、衆生の無明煩惱の野馬を調御する人にして、卽ち佛陀の異名なり。

【四八】尸羅(śīla)とは本性戒と云ふ、制戒に對す。

又法あり、王宮に入らんに、水を加持すること一百八遍し、用て面に塗れば、囉惹[四三]並に輔佐皆な敬愛せん。

又法あり、衣・花・香、瓔珞等を加持し、或は役に與へ、或は自ら著すれば、皆敬愛を得ん。

又法あり諸の飲食を加持すること一百八遍し、彼の人名を稱し、思念して而して食すれば、即ち敬愛を得ん。

(90) 瘴疰を癒す法

又法あり、瘴[四四]疰等は、泥を加持すること七遍して、之を塗れば、即ち愈ゆ。

(91) 大明王輪王佛頂の功德

我略して所作を說く、皆な成就することを得ん。世尊は、彼の時に於て、金剛手祕密主に告て言く、善男子よ、是の如くの一字輪王は、能く一切の事業を作す。一切佛の所說にして、無碍の教令なり無量百千俱胝佛の所說なり。我今亦說かん。我今福利を說かん。祕密主よ、汝諦聽せよ、諦聽せよ一切佛の所說にして、一切の菩薩隨喜せん。祕密主よ、此の大明王輪王佛頂を、若し能く受持し讀誦し若くは演說を聞き、乃至經卷を書寫し供養し、念誦すれば、彼れ必ず惡趣に墮せず、餓鬼と藥叉とに爲らず、貧匱せず、一切の罪を爲さず。一切の有情に皆な敬愛を得、一切皆な隨順を得、所生の處に皆宿命を得、一切の鬼魅は身に著かず、謂ゆる天魅或は龍魅、或は嬰孩魅、羅刹魅、或は緊那羅魅、或は摩睺羅伽魅、或は補怛那魅、或は羯吒補怛那魅、或は毘舍遮魅、或は迦樓羅魅、或は阿修羅魅、或は諸母天魅、或は鳩槃茶魅、刀杖も身に著かず、毒火水の中る所とならず。一切の他敵、飢儉曠野、是の如き處には必ず生せず、一切の毒瘡腫蠱魅、起屍作法の不祥を皆な解脫することを得、一切の天龍、藥叉、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽皆な禮敬す。

善男子よ、我今略說せん。所有の一切の災難、彼れに一切皆害を爲す能はず。何を以ての故に、

【四三】囉惹(rāja)は王と譯す。

【四四】疰は疽なり。

(83) 龍を遮止する法

又法あり、龍を遮止せんには、倶那衞枝を用て、諸印を破りて以て灰とし、賊を遮するには、土塊を加持すること七遍して四方に擲つなり。

(84) 事を未然に知る法

又法あり、求めんと欲する所のものは、清淨に澡浴し新淨衣を著し、像前に對して、一日一夜食せずして、薫陸香を燒き、眞言を誦すること一百八遍像前に寢息すれば、夢中に善惡求むる所を皆な説示せん。

(85) 霖雨を止むる法

又法あり、霖雨を止めんと欲し、水に入りて念誦すれば、一切皆止まん。又雨を求めんと欲し、水に入りて念誦すれば、意の多少に隨て雨ふらん。

(86) 食を求て得る法

又法あり、食を求めんと欲すれば、初日分に、村邑にて城門に對して住し、蘇摩那花を加持すること、百八遍し、城門に向て擲ち、然して後に城に入れば、得ることを求めずして、食皆な豐足なり。

(87) 魅害を除く法

又法あり、嬰孩が魅の爲に持せらるれば、樺皮の上に、一字頂輪の眞言を書し、項下に繫れば、卽ち愈ゆ。

(88) 敬愛の法

又法あり、常に念誦すれば、一切の人に皆な敬愛を得ん。

(89) 王より敬愛を得る法

の病は五色線を加持すること一百八遍し、病者に繫くれば、即ち除差するを得、沈水香或は薫陸香を焼けば、能く一切の瘧を除き、一切の怖畏處に此の明王を誦ずれば、皆な無畏を得ん。

(75) **囚縛を脱する法**

又法あり、茅を加持して拂へば一切の毒を除かん。囚繫處に於て誦ずれば、縛より解脱することを得、患瘡者は、線を加持して、腰に繫げば即ち差ゆ。

(76) **牛畜の疫を除く法**

又法あり、自己の身を護るに、心を以て誦じ、牛畜等の疫は、黒線を加持して、頸に結繫すれば即ち差ゆるなり。

(77) **惡法から免れる法**

又法あり、惡法印を被る者は、白線を加持すること七遍し、身上に結繫すれば即ち除かん。

(78) **結界法**

又法あり、方隅界を結するには、白芥子を以てす。

(79) **風魅を除く法**

又法あり、風魅を患ふれば油を加持して飲ましむれば、即ち差ゆ。

(80) **眼病を治する法**

又法なり、眼を患ふれば、水を加持して與へて洗はしむれば即ち差ゆ。

(81) **藥叉より免る法**

又法あり、藥叉に持せらるれば、水を加持して散灑すれば即ち解脱することを得ん。

(82) **餓鬼より免るる法**

又法あり、餓鬼に持せられ及び癲癇なれば、線を加持して、與へて繫げしむれば愈ゆるを得。

又法あり、蘇摩那花を以て加持すること一百八遍し、空中に擲てば、即ち天晴れ雲無きを得るなり。

(69) **某人より敬愛を得る法**

又法あり、彼の人の爲に其の名を稱して飲めば、彼をして敬愛を得せしめん。

又法あり、俱那衛の枝を以て加持すること七遍し、若し雹下りて之れに向て打ち其の雹即ち惡雲に移らば亦此の法を用ひよ。

(70) **結界の法**

又法あり、方隅界を結するに佉陀羅木の橛を用ひ、水或は白芥子を以て毘那夜迦を縛せよ。

(71) **除病の法**

又法あり、一切の病は五色線を加持して帶せしなれば即ち差ゆ。一切の鬼魅、一切の病は護摩すれば即ち止む。

(72) **敬愛を得る法**

花菓を加持して彼の人に與ふれば、敬愛を得ん。

又法あり、飲食を加持して、人に與ふれば、皆な敬愛を得ん。

(73) **一切の怖畏障難を除く法**

又法あり、鐵の橛を作りて加持すれば、一切の怖畏、一切の障難、皆な加護を得、天及び鬼神・羅刹は橛の故に近附き違越することを得ず。一切の怖畏に於て加護を得、一由旬結界せらる。

(74) **毒を禁ずる法**

又法あり、毒を禁ぜんと欲せば、線を加持すること七遍し、乳木に繫くれば、一切の毒皆消えん所有の毒は、土或は白芥子、或は水を以て加持して、之を用ふれば、皆な深度することを得、一切

得又彼人皆な敬愛を得ん。

祕密主、是の如く等の一切の世間出世間の（事は）輪王佛頂皆な能く作すなり。

(65) 偈頌

天龍藥叉王、餓鬼惡羅刹、及び餘の諸の部多、持誦を見て消融し、皆な諸天の法を息め、蠱毒部多那、常に行人の手に在り、彼の罪は不可得にして、一切の求めは成就せん、相應者は、當に教を得て、彼人の手に至るべし、速疾に諸の利を作さん。

(66) 無病長壽の法

その時、金剛手祕密主は、佛に白して言く、彼の有情は大福を以て攝受せらる。此の教は當に彼の人の手に至ることを得ん。一切の有情界に於て、此の明王は、一切の事業を作り、能く一切の怖畏を滅し、常に加護を作し、財穀增長し、無病にして壽命長遠ならん。

八萬の鬼魅族は皆な除かれ、一切の厭蠱の法を作す者を息め、非時に毒火に死することを遮止し一切の有情を利益して、能く一切の病を除き、一切の執曜を斷するを得、勤勇に師子（吼）す、一切の有情を矜愍するが爲めの故に、是の如くの說を爲す。と

(67) 鬼魅を除く法

時に世尊は金剛手祕密主に告て言く、我今功能を說きて、一切の罪を除き、一切の病を除かしめん。汝當に諦聽すべし、金剛手よ一切の鬼魅を患ひなば、五色線を加持と、手に繫け、身を護れ、灰を以て加持して方隅界を結し、水を加持して一切の瘧を除き、線を以て加持して手に繫げ、一切の鬼魅を除き、自他一切の罪を除かしめん。白芥子に酥を和して護摩せよ。增命の故に、俱蘇摩花を加持して、佛世尊に供養せよ。

(68) 晴天にする法

(58) 求願を滿する法

又法あり、油麻と白芥子とを酥に和して七日像前に對して護摩すれば求むる所皆得ん。

(59) 男女をして敬愛せしむる法

又法あり、男女をして敬愛せしめんには、蠟にて彼の人形を作り、時に一字頂輪を誦じ、苦油を以て其の肚に滿たし、七摩那の刺を以て七關節を刺し、佉陀羅（木）の火上にて炙り、加持すること一百八遍すれば、七夜にして卽ち求むる所を得ん。

(60) 他を驅擯する法

又法あり、他を驅擯せしむるなり。赤芥子を擣て末と作し、彼の人形を作り、右脚より截り、佉陀羅木の炭火中に（置き）眞言を誦じて護摩すること七日すれば、卽ち願の如くなるを得ん。

(61) 自身息災の法

又法あり、自身をして息災ならしむ。舍利を有する塔に於て、本尊の像を安じ、香華等を供養し新瓶を取りて、香水並に一切の藥（種）及び諸寶等を盛り滿たし、加持すること一百八遍し截らざる𦁆を以て瓶項に繫け、自身を灌浴すれば、一切の罪と一切の障難とを離る。

(62) 他の敬愛を得る法

又法なり、青木香を加持すること一百八遍し、口中に含んで人と共に語れば、皆な敬愛を得ん。官府に於て理を論すれば、皆な語の勝を得ん。

(63) 金千兩を得る法

又法あり、黃花を佉陀羅木に取りて、護摩すること一千すれば金千兩を得ん。

(64) 敬愛を得る法

又法あり、鹽を以て他の形を作り、佉陀羅木の火に於て加持し、一千遍護摩すれば求めざる所を

又法あり、若し障難を息めんには、濕衣を（着し）忿怒して念誦し、油麻、白芥子を酥に和して焼くこと、一百八遍し、三日、日に三時に（之を行すれば）一切の魔障皆な除滅することを得ん。

(54) 持明仙となる法

又法あり、山頂の上にて乳を飲み、一切の香を以て十二指（量）或は六指（量）の金剛杵を作り左手にて念誦を持し、乃し暖、烟、光に至る、若し烟なれば、安怛駄那成就中の王と成り、若し暖ならば、金剛杵を持する（時行者を）見るもの皆敬愛せん。若し光あらば、持明仙となることを得たり。

(55) 隱形法

又法あり、[四一]素路多惹那を取り、先づ千の三波多を以て護摩し、太陽の蝕する時に至て、加持すること、一百八遍し、口中に安じて念誦し、乃し太陽復するに至つて、婆羅門の女をして研かしめ、加持すること一千八遍して、點眼に用ふれば、即ち安怛駄那を得、[四二]一切の安怛駄那成就者も、能く自ら隱るなきなり。

(56) 語の如く成る法

又法あり、語の成就を求めんには、先事法を作せ、清淨處に於て、本尊の像を安じ、一切の天龍藥叉等に於て、次第に施食し、像前に於て護摩爐を作り、青蓮華に三甜を和し、護摩すること十萬遍すれば、即ち成就す。右に本尊の像を造り、像に對して念誦し、餘日に於て、力に隨て僧に施せば成就せん。此れより已後は、求めんと欲する所は、一切の語を以て皆な得ん。

(57) 意樂滿足の法

又法あり、安悉香を丸に作り、三時に護摩して、各々一百八遍すれば、意に樂ふ所、皆な圓滿することを得。

【四一】素路多惹那（sruta-janā?）は安膳那なりと云ふ。

【四二】安怛駄那（antardhāna）とは隱形の梵語。

(50) 大威德を得る法

又法あり、先事法を作せ、舍利を有する窣堵波に於て、清淨處に於て、滿月に晝夜食せず、慇重の心を發して（地に）墮せざる、[三八]瞿摩夷を取りて壇に塗り、八瓶を取りて水及び諸の種子と諸藥等とを盛り、種種の花鬘を頸に繫け、種種の燒香、薰陸、沈水、檀香等を以て盛る所の水と和し、自身を捨てて、一切の佛菩薩に奉獻し、結跏趺坐して念誦し、乃至頂より光明を出し、右に旋遶して持誦者の身に隱入すれば、卽ち身成就を得るなり。卽ち其の身の光明は、刹那の頃、[三九]環髮して二八（靑）年の狀を得、五神通を(得)、威光は金に融して照耀するが如し。眷屬を併せて淩虛す。一切の天龍、藥叉、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽は皆な（成就者）を禮敬し、刹那の頃、無量の佛世界に遊び、梵行を爲して欲心に傾動せず、彼彼の處に於て帝釋半座を與へ、威德無比にして、不思議を超え、佛世界に於て無量の佛を見、彼れに從て法を聽聞して、皆な勝解を得、是の如く次第して菩薩行を修する時、菩薩行に於て、調伏善巧方便行に入ることを得、彼の三摩地力に從て、損減せず意に隨て住し乃至受生せん。

(51) 痔を除く法

又法あり、水に入りて念誦すること一洛叉し、是の功を作し已りて、痔に持せられたるを解脫せんと欲せば、酥、蜜と相和して護摩すれば、卽ち除愈を得。若し息災を作さんには[四〇]薩嚩二合訶の字を加ふべし。

(52) 一族敬愛を得る法

又法あり、靜處に於て、本尊像を安じ、一千の俱那衞花を以て、像上に擲て彼の名を稱し、一誦一擲すれば、爲に彼並に種族は、皆な敬愛を得す。

(53) 障難を止さる法

【三八】瞿摩夷(Gomayi)とは牛糞。

【三九】環髮とは螺髮卽ちチヂレ髮を意味す。

【四〇】薩縛二合訶(svāhā)とは眞言の終句にして吉祥等の意義あり。

又法あり、滿四日一發等、並に蟲毒等、加持すれば即ち除遣することを得ん。

(46) 息止の法

又法あり、賖摩賖那に於て、奢覩嚕[三五]の形を作り、左脚を以て心を踏み、右手の頭指を以て擬し、吽字と倂せて一字頂輪を誦ずること一千遍すれば、即ち彼れ刹那の頃に滅壞せん。亦此の眞言を以て、却て能く止息せしむるなり。

又法あり、賖摩賖那の灰を取りて、奢覩嚕の形を作り、佉陀羅（木）の橛を以て、眞言を誦じ、頂に當てて之れに釘すれば、時に應じて滅壞せん。

(47) 關鍵を摧く法

又法あり、白芥子を取りて、賖摩賖那に於て加持すること十萬遍すれば、能く一切の關鍵、[三六]扂鎖等を摧倒せん。

(48) 大持明天と成る法

又法あり、賖摩賖那に於て八日壞損せざる沒嘌多補嚕沙を取り、法に依りて、洗浴し莊嚴し、[三七]心上に坐し、彼の心中に於て、白芥子を以て一誦一擲し、乃至舌を出して利刀を以て截れば即ち劍と爲る。此の劍を持することに由りて、一切の持明（者）中の王と爲る。無比超勝力にして、意に隨て此の世界に於て遊行せん。

(49) 長壽主に闡持を成就する法

又法あり、舍利を有する窣堵波に於て、香花・飲食を供養し、滿月に於て像前に對し、沈水香を燒き晝夜に念誦し、即ち晨朝に於て僧に請ひ、次に彼の大衆に供養して悉地を乞ふべし。則ち此の儀軌を以て、結跏趺坐し念誦すれば、即ち不思議王を成就することを得、長壽闡持皆な成就するを得ん。

【三五】奢覩嚕(śatru)とは敵。

【三六】扂とは戸を閉づる具。即ちトザシなり。

【三七】本文に四方一切鬼神食の七字あり。

又法あり、右手の頭指を加持すること七遍、或は囉惹類或は餘人より皆な敬愛を得、卽ち此の指を以て馬象水牛等を皆な能く禁止することを得ん。

(41) **龍女を鉤召する法**

又法あり、自己を成就せんと欲すれば、賖摩賖那の中に入りて、莽娑[三三]を賣り、一字頂輪を用ひ身を護り、七遍加持す。龍底利及び持明底利[三四]を召すにも、亦此の眞言を以て鉤召す。

(42) **他軍を禁止する法**

又法あり、霹靂木を取り、七二指(量)にして、金剛杵を作り、賖摩賖那の中に於て、念誦すること三洛叉すれば、阿修羅門の關鍵、內外開摧せられん。

(43) **他軍を禁止する法**

又法あり、一字頂輪の眞言に吽字を加すれば、能く他軍を禁止し、未だ成就せざるも、忿怒して誦ずれば、亦能く他軍を禁止す。若し成就すれば樹を倒さしめ、能く一切の明を損す。眞言並に吽字を賖摩賖那中に誦ずれば加護を得ん。

(44) **大持明王と成る法**

又法あり、沙鐵を補ふ匠にして八戒を受くる者、金剛杵を作り、賖摩賖那に於て、八戒を受け、心散動せずして、先事法を作し、手に金剛杵を持して、誦ずること十洛叉し、黑月十四日の中夜の時に於て、一切の香花・燒香・飲食・燈明を儀軌に依よりて佛に供養し、右手に金剛杵を持し、結跏趺坐して念誦し、晨朝時に於て、其の杵千光照耀し、此を杵を持することに由て、卽ち成就することを得。纔に發心すれば、並に眷屬虛(空)を凌ぎ、能く一切の持明を罰し、威光能く與等するものなく帝釋半座を與へ、大持明王と爲り、住すること一大劫、金剛杵を持して、意に隨て遊行せん。

(45) **瘻並に蠱毒を除く法**

【三三】莽娑(mâṁsa)は肉。
【三四】底利(stri)は女。

又法あり、三夜食せず、賖摩賖那の南邊に於て住し、單獨にして俗なく、一洛叉を誦ずれば、則ち一切の事に於て、皆な堪仕することを得るなり。

(35) 惡龍退治の法

又法あり、難調伏の惡龍ありて、佛法を壞し、有情を損害す（之を）調伏せんと欲すれば、三夜食せず、龍處に於て、白芥子を取り、毒と及び嚕地囉とに和して護摩すれば、其の龍は池中より出づ。七日中間に作す所は皆な成し、求むる所は皆な得ん。若し出でざれば念誦すること二洛叉或は三洛叉に至れば、彼の龍卽ち死し、龍池中に臭爛の氣を聞かん。

(36) 象馬を禁止する法

又法あり、左脚を加持すること七遍し、忿怒を以て地を踏み、一字頂輪を誦じ、並に吽字を加へて誦すれば、則ち象馬車步兵等を禁止せん。

(37) 怨家を呪詛する法

又法あり、怨家をして麼羅せしめんには、賖摩賖那に往き、賖摩賖那の灰を取り、忿怒して彼の人形を作り、利刀を加持して、脚より段段に截り、賖摩賖那火に於て護摩すれば、第七日に於て、其の命存せず。

(38) 諍訟の法

又法あり、若くは軍陣に於て、若しは王宮に於て、訟處を言はんに、此の呪を誦すれば、勝を得ん。

(39) 男女敬愛の法

又法あり、油麻にて護摩すれば、男女敬愛せられん。

(40) 馬象禁止の法

(30) 病氣に罹らす法

又法あり、旃陀羅家[三一]の火を取り、賒摩賒那に往き、その中の木を取りて然火し、苦瓠子[三二]を取りて彼の人名を稱し、或は護摩を思憶すること一千八遍すれば、則ち彼れ大病に持せられん。解かしめんと欲すれば、像前に對して、佛像を浴し、眞言を誦じて、浴像の水を取りて、彼の身上に灑ぐべし、

(31) 寃家を摧滅する法

又法あり、滅せしめんと欲せば、摩奴沙の骨の八指を取りて、橛を作り、加持すること一千八遍して、寃家の門閫の下に釘せば、財物皆な盡きん。橛を除けば卽ち解けん。

(32) 息止の法

又法あり、賒摩賒那に於て、紫鑛を燒き嚕地羅を和して護摩すること一千八遍すれば、彼れ卽ち息を止めん。

(33) 除障の法

又法あり、自他を灌頂せんと欲せば、四つの黑からざる底の瓶を取りて、河流の水を取り、一切の寶及び香並に種子等を滿盛し、其の中に安じて加持すること一千八遍し、弟子或は營事者をして自らの頂に灌がしむれば、一切の災障・鬪諍言訟・一切の障難は皆解脫することを得ん。

又法あり、舍利を有する窣堵波の前に於て、本尊の像を安じ、乳を飮み、麥を食し、力に隨て供養し、眞言を誦すること三洛叉すれば、卽ち迷亂痴等の事を破らん。

(34) 敬愛隱身

又法あり、三時に罪を說き、隨喜し勸請して發願作樂す。或は水を飮み、粆を食し、大河に於て水を胸に至らしめ、三洛叉を誦じ、敬愛・隱身・雄黃・雌黃・等の事を成就せしめんと欲すれば、皆な能く成就す。

[三一] 旃陀羅(Caṇḍala)は印度の賤族。
[三二] 苦瓠子アケビと訓ず。種子の赤い果實。

若し眞言の明を修して成就せざれば、此の一字頂輪（王）と相和して誦せよ。佛像の前に對して佛を供養し、念誦すれば、則ち像前に於て寢息し、夢中に於て、眞言の增減を見、眞言をして充盛せしめ、像前に對して乳木の柴を然し、酥を用て護摩すること一千八遍、其の本尊は卽ち此の法を成就す。第七番の應用は然らざれば卽ち壞す。

(26) 降伏の法

又法あり、阿毘遮魯[二七]（迦）を作さんと欲せば、賒摩賒那に往きて、[二八]賒摩賒那の柴木を以て然火し、屍を燒きたる灰を以て、護摩すること一千八遍すれば、帝釋も尙自處より移轉せん。

(27) 病氣を起さす法

又法あり。羅惹類を[二九]摩羅せしめんと欲せば、濕衣を著し、脚を以て陵上の哦を踏み、一字頂輪を誦し、乃至衣を乾かせ、是の如くして彼の寃家の身は乾枯せん。

又法あり、薑石を取り一一加持して、城及び村邑の前に對して住し、擲つこと七夜、七夜を過ぐれば、大[三〇]摩梨と爲らん。

(28) 息災法

復息災せしめんとせば、像前に對して、乳護摩すること、一千八遍し、香水を以て加持すること一百八遍し、彼の城及び村邑の聚落に於て、四方に灑げば卽ち止息することを得。

(29) 調伏法

又法あり、若し三寶を損壞する者あらば、彼を調伏せしめて。善巧方便に住して、彼が爲に賒摩賒那に往き尸灰を以て彼の人形を作り、行人は裸躰にして髮を散し、阿毘遮嚕迦の儀に依て、一字頂輪一千八遍を誦すれば、彼れ則ち梵、羅刹に持せられん。自身を除く餘の持誦者は、解く能はず。此れは是れ菩薩の善巧方便なり。菩薩種性のものにして應に作すべし。

【二七】阿毘遮魯迦（Abhicāraka）は降伏と譯す。
【二八】賒摩賒那（śmāśana）は寒林と云ふ屍骸を捨つる所。
【二九】摩羅(māra)は死。
【三〇】摩梨(māri)は死。

(23) 伏藏を得る法

又法あり、囉惹類をして敬愛せしめんと欲せば、遏伽木を然火し、七日三時に、赤芥子を用て護摩す。又法あり、一切の鬼神をして、敬愛せしめんと欲せば、鹽に嚧地囉を和して、護摩すれば卽ち得ん。

又法あり、其處に梵、羅刹及び餘類の鬼神の住處なれば、彼の住處に至りて、禁戒を誦ずること十萬遍すれば、卽ち大伏藏を得、或は能く他をして驅擯せしむ。

(24) 凌虚の法

又法あり、日宿を簡ばず、亦齋戒せず、先づ先事法を作して、不壞の嘌沒多摩奴沙[二四]を取り、淨めて洗浴し莊嚴して、賖摩賖那の中に於て、摩奴沙を安じ、頭を東に向け、行人の面は之れに向けて坐し佉陀羅橛を以て之を緊縛し、一切の鬼神に食を施し、四方に護持の劍を著け、行者は摩奴沙の心上に坐し、鐵末を取りて加持して其の口中に投じ、乃至舌を出して速に利刀を持て截り取り、青蓮華色の劍を成じ、此の劍を持つことに由り、眷屬と併せて凌虚し、一切の持明も能く沮壞することとなし、一切の持明中に於て王たり。壽命大劫、身壞して天に生せん。

(25) 偈頌

計羅の峯は意を悅せ、鬘峯は端嚴を具し、金峯は寶處に於て、人の所居を成就し。彌盧の大峯は、青赤蓮の妙處、頻陀山は適悅にして、金剛帝寶巖、圓會の山は意を悅せ、麼賴仙の山處なり、及び大帝山と、雪山と香嘴[二五]と、是の如くの悅意處は、閑靜豐にして安樂なり、持明女は、樂天女と倶に歌詠し、同天女と遊戲して、最勝の娛樂を受け、遊行せる持明者は、帝釋舍支[二六]の如く、人の能く敵對するなく、彼れ無礙趣を得、一切處に流轉して、是の如く功德を具し、持明常に遊行す。

【二四】 嘌沒多摩奴沙(mrta-manusya)は死人と譯す。

【二五】 香嘴と香醉山を指す。印度の大雪山の北にあり。

【二六】 舍支(Saci)は梵天の夫人の名。

又法あり、藥叉女ありて驗を現せし處にて、先事法を作し已て、彼の處に於て、念誦して小曼荼羅を塗れ、佉陀羅木を以て、燃火し、三夜、白芥子を以て護摩すること一千八遍すれば、藥叉女、卽ち來りて意に隨はん。彼に告て我が長年の藥を與へ、藥を得て服し已れば、壽命一劫ならん。若し來らざれば、白芥子を取りて、自らの嚧地囉に和し、焼くこと一千遍すれば、呵呵の聲を作して卽ち來らん。先づ作すべからず、若し作せば、彼れ卽ち損壞せん。

(20) 長壽法

又法あり、乳を飲み麥を食し、舍利ある塔に於て、本尊の像を安じ、一年念誦して、一黑月分の八日に於て、則ち佛世尊に於て、飲食を供養し、儀軌に依て、奉獻し、像の前に對して然火し、尼瞿陀樹木を燒き、三甜を燒くこと一千八遍すれば、倶尾羅、藥叉皆來らん。怖畏すべからず。先づ置く所の香水を遏伽に獻ずべし。彼の藥叉等言く、尊者は何事有りて我等を喚ぶや。と卽ち彼に告げて我がために奉敎を爲せ、と。是を作し已れば、隱れて而して現せず、卽ち藥叉衆の成就を得るなり。藥求する所を皆な與へん。天妙長年の藥を求むれば皆得ん。百千の眷屬を給し、六味の飲食を具すれば、思ふ所、求むる所皆得ん。

(21) 長年藥の製法

又法あり、梵王・毘紐・摩醯首羅をして、敬愛せしめんと欲する者は、黑月分に於て、本尊像前に對して、無煙炭を用て、安悉香丸を(作り)三時に酥に和して、護摩すること一千遍すれば、中夜に皆來りて、請はんと欲する所に隨はん。及び長年藥を求むれば、求むる所皆得ん。

(22) 王の敬愛を得る法

又法あり、囉惹をして敬愛せしめんには、本尊像前に於て、乳木を然火し、白芥子を三甜に和して、護摩すること一千八遍すれば、七日三時に、四洲の主も尙能く來りて敬愛せん。

【二一】三甜とは酥、蜜、乳。
【二二】倶尾羅(kuvera)は毘沙門天の異名。
【二三】遏伽(argha)卽ち閼伽水に當る。

薩地を超え、身壞して持金剛宮殿に生ず。

若し舍利無き塔處及び不淸淨處に於て、一字頂輪の眞言を誦ずる者は、[一七]王難起りて身に大災難あらん。

(17) 劍の成就物

又法あり、劍の成就を說かん。諸根闕かざる匠、沙鐵を補ふて劍を作り（長さ）一肘量、件なくも堅固なる勇志あるべし。先事法を作せ。山頂の上に於て、緣起を藏する窣堵波を作り、廣大の供養を作し、一切有情を利益する菩提心を發し、塔前に對して發露（懺悔）等を作し、一切の功德に隨喜して、茅薦の（上に）團坐し、右手を以て劍を持し、黃昏より起首して、乃し明相出る時に至る。則ち相現じて、手は戰動し（劍）光は流星の如く、乃し一千道に至る。彼の光は持明者を照耀す。彼の時、大持明王、皆來りて灌頂す。彼の行者並に眷屬は俱に虛（空）を凌し、刹那の頃に諸世界に遊び、無碍行にして五由旬內を照耀す。

(18) 賢瓶の成就物

又法あり、賢瓶の成就を說かん。菩薩に此を成就することに由りて、能く一切の有情の飢渴苦惱を息み、舍利有る塔に於て、本尊像を安じ、寂默嚴毅にして、茅(ちかや)を敷きて而して寢ね、持明の經說に依て、善巧を禁忌し、一年念誦して、白黑月分に於て、三日三夜、食せず、像に於て廣大の供養を作し、黑からざる底迦擺賒を取り、一切の種子[一八]諸寶藥等を盛り、像前に對して、結跏趺坐し、右手を以て瓶口に按じて念誦し、乃至中に於て一切の物を隱す。復念誦して乃至一切物復現はる。彼の瓶は[一九]羯拏羯拏羯拏の聲を作せば當に知るべし卽ち成就するなり。卽ち此の瓶に於て思惟する所、象馬車乘[二〇]眞多摩尼寶、及び諸物悉底利等、則ち瓶中より出生し、意に隨て一切有情に施與せん。

(19) 長壽法

[一七] 本文に不降雨、何以故の六字あり。

[一八] 種子とは五穀。

[一九] 羯拏(kaṇa)は自然音にして、意味はなし。

[二〇] 眞多摩尼(cintāmaṇi)は如意寶珠。

若し初成就せざれば、先事法を作し、後に當に成就を求むべし。第八遍に至れば、設ひ無間罪を作す者なりとも亦成就することを得ん。

(15) 佉吒網迦の法

又法あり、赤氎を以て、赤衣を著し、手に佉吒網迦を持し、[一四]賒摩賒那に於て、七蟻封を取り、如來肘量して、窣堵波を作り、緣起偈を安じ、前に對して、乳を飲み、麥を食ひ、或は乞食し、塔の前に於て、寢息し、一洛叉を誦じ、彼に於て種種の惡状を見るも、恐怖し、怖畏すべからず。黑月の十四日に於て晝夜食せず。窣堵波に於て、廣大に供養し、一切の鬼神に皆之を施して、佉吒網迦を食し、香花、燒香を以て供養し、甲冑を被り、牆等の界を結び、結跏趺坐して念誦し、乃し佉吒網迦より光明を出すり至て、即ち佉吒網迦は成就す。即ち之を持すれば、賢衆に於て敬愛を得ん。

彼等皆な遵奉せん。その佉吒網迦は餘處の夜無人處に於て、地に卓著して、自然に百柱の宮殿と成り、一切の寶をもつて莊嚴し、天女承事し、丈夫旨を承け、一千の眷屬を隨ひ、一切受樂し、壽命五千歲。[一六]

(16) 輪の成就物

又法あり、沙鐵を補ふて輪を作る。量小にして折刄利ならしむ。十二輻を先事法と作す。河岸山頂に舍利ある塔處に於て、本尊の像を安じ、隨て次第して前の如く供養す。靑香等を輪に供養し、諸の鬼神に食を施與し、結跏趺坐して、二手に輪を持し、黃昏より起首して、念誦して乃し相現するに至る。香風空中に起り、呵呵吉哩吉哩の聲を聞き、一切の山皆な震動し、一切の海激動するも怖畏すべからず。

復更に念誦するに一光聚の爲に持誦者を圍遶し、彼れ輪を持し、瞬目にして即ち阿迦尼吒天に到り、菩薩と齊等にして住すること一大劫なり。中劫に於て佛の出世を見、即ち此より後、次第に菩

【一三】佉吒網伽（khatvāṅga）とは髑髏杖と云ふ。杖の頭端に髑髏を附するもの。

【一四】賒摩賒那（śmaśāna）死屍を捨つる所にして、寒林とも云ふ、王舍城の附近にありと云ふ。

【一五】緣起偈。
諸法從緣起。
如來說是因。
彼法因緣盡。
是大沙門說。

【一六】本文に拔劫卽不現の五字あり。

茅草に坐して、儀軌に（依て）供養を作し、一切の意樂の飲食を皆な奉獻せよ。手を以て金剛杵に按じて念誦し、乃し光焰纔に光るに至りて、已て、眷屬を併せて虛（空）を凌がん。色相は金剛甲の如くにして、能く難調の有情を調伏せん。一切成就中の最勝なり。一切の天・龍・藥叉等、福を作し、道を避けず。映徹の身を得て、十佛刹土を超過して、無量の世界に遊び、千の眷屬と與に、壽命大劫なり。命經の（後）は、金剛手の宮に生せん。

(10) 病を癒す法

又法あり、病者の爲に水を加持すること七遍し、彼れに與へて飲ましむれば、即ち際差を得ん

(11) 婁魅を除く法

若し婁魅ならば、白芥子を護摩すれば、其し魅等は皆な馳散せん。

(12) 如意寶を得る法

又法あり。海岸の邊に於て、本尊の像を安じ、儀軌に依りて、一洛叉を誦ずれば、裟伽羅龍王、自ら宮に入れしめん。中に於て如意寶を求むれば、欲するに隨て、身を變現し、自ら恣にして行くことを得ん。

(13) 長壽する法

又法あり、本尊像を阿修羅窟に安じ、一洛叉を誦ずれば、阿修羅出現して、引て行者を入れしめん。入り已りて、阿修羅の長年藥を求むれば、皆な得、或は彼れに住することを得ん。

(14) 隱形の法

又法あり、一窣堵波に於て、乞食し、先事法を作し、十萬遍を誦じ終り、黑月の八日に於て、晝夜に食せず、力に隨て飲食を供養し、念誦して、乃し自影を隱すに至らば、無超勝を得、壽命一萬歲ならん。

し三相を現ずるに至れ。若し暖あれば、轉輪聖王も尙ほ敬愛を作さん。何ぞ餘の有情を恐れんや。壽千年ならん。

若し烟なれば、[一三]安達駄那を成就し、中は天と爲らん。最勝なれば、日に千里を行く、復來らん。一切の成就の中に於て、安達駄那は、心念に一切の飮食を生じ、一切の神變を作さん。帝釋の邊に於て安達駄那を（成就）すれば、何ぞ餘の有情を恐れんや。身に光耀あり、壽命は千倶胝歲ならん若し焰を自ら纔に身に塗れば、自然に紺靑にして、琉璃環髮とならん。身は初日の色の如く、二八六相は、瞻覩し難く、難調者を調伏し、意に隨て現せんと欲すれば、身意迅疾にして、一切の天、梵天等も、沮壞する能はざるや疑なし。周圍一由旬、身光照耀して、神通境智を得、壽命一大劫、無量百千の持明(者)を以て眷屬と爲す。大威德あり、天に於て、阿修羅と鬪戰して、衆能勝を得、帝釋（天宮）に往けば、帝釋は半座を與へん。菩薩と位齊等にして、無量の諸佛に承事し、心を無量の佛世界に傾倒せずして、乃至隨て次第に菩薩地を得ん。

(9) 最勝成就の法

又法あり、復餘の最勝成就の法を說かん。先事法を作せ。已に曼荼羅を見ば、師より灌頂を得。八戒を持し、三歸菩提心を成就して、成就して、成就を作せ。虛空室に或は山、曠野、或は牛欄に於て、其處に種種の土水あり、臭穢爛泥を離れたる（處）又は他の前に成就する處に於て、深く、（土）を掘り、膝に齊とし、瓦礫炭石等を去り、一字頂輪の心眞言を以て水を加持し、彼等の處に灑し、則ち餘の香土を取り、其の處に塡滿し、緣起藏の窣堵波を作りて像を安じ、彼の前夜に於て澡浴し、新淨衣を著し、塗香花、燒香を以て、啓請を作し、一切を辟除する等には、一字輪心を用て、三十洛叉を誦じ、滿じ已て三鐵を用て、金剛杵を作り、其の匠は八戒を受けしめ、千の三波多の護摩を作し已て、黑月の八日、十四日に於て、白芥子を取りて、瓦椀に盛滿し、彼の上に安じ、

【一三】安達駄那（antardadhāna）は隱形若しくは隱身の意。

の）菩提（樹の）葉を以て、酥珠を安じて、念誦し、乃し暖に至り、珠を取りて、齒に著けずして之を呑み、纔に食し已らば、已れの心に思惟する所、皆な一切發生し、力は千丈夫に敵し、欲に隨て身を現じ、命を受くること一劫ならん。纔に吽字を稱すれば、山峯・城邑・天廟、皆な損壞することを得、所有物に隨て、護摩せよ、百由旬內、彼の人の名を稱し、及び囉[八]惹・悉底利・皆な鉤することを得ん。

(6) 伏藏を豫知する法

又法あり、伏藏を驗知す。牛黃・酥・蛇脂・中脂・雄黃・遏迦皮を取りて燭を作り、近くの伏藏處、一肘量の地に於て、其の燭を然し、加持すること二十一遍し、其の燭を旋はし、其の焰の大小に隨て其の藏も亦是の如くならん。若し障難あらば、亦此の眞言を以て遮制せよ。

(7) 一切の所欲を滿足し得る法

又法あり、清閑處・阿[九]蘭若に於て、窣堵波の前に於て、佛像を安じ、三時に澡浴し、三時に衣を換へ、三時に別に一千八遍を誦せよ。日の初分より起首し、乃し月圓に至れ、其の日、晝夜食せず、蘇末那花を以て、像上に於て帳を作り、種種の塗香・花鬘・燒香を以て供養し、酥燈一百八盞を然し、及び種種の飲食を佛に獻じ、結跏趺坐し、助伴あるも、及び（助）伴なきも、大慈心を起し、大精進を具し、念誦して、乃し雲[一〇]聲を見、道場中の幡蓋等動き、燈焰增盛し、佛像より光を出し、像動くに至らん、若し是の如き相を見れば、一切の所欲は、皆な成就することを得ん。

(8) 最勝の願望成就の法

次に最勝の成就を說かん。大阿蘭若に入り、或は大河岸に於て、無畏を作り、彼に於て佛像を安じ、常に意を定めて、根菓等を食し、二十一洛[一一]叉遍を誦じ、念誦して已て、周く力に隨て供養を作せ、荷葉の上の牛黃に於て三波多の護摩を作し已り、結跏趺坐して、二手掌中に安じ、念誦して乃

【八】囉惹悉底利（rāja-strī）は王女。

【九】阿蘭若（Āraṇya）は閑寂處卽ち寺院に當る。

【一〇】雲聲とは雷鳴。

【一一】洛叉（lakṣa）十萬。

於て一字頂輪の眞言を書し、並に輪王を形狀を畫け、竹竿に髑髏を繫け、壇を作りて金剛杵の形の如くにし、中に於て護摩爐を作り、爐の四邊は獨股金剛杵を相連て圍遶し、遏伽木を以て然火く、摩奴沙[六]の骨及び嚕地囉並に毒藥を用て、相和して加持し、一遍に一燒し、乃至一百八遍すれば、軍陣の前に對して、卽ち彼の軍衆は盲の如く迷亂し、一切の器杖は彼の手より落ち並に皆な禁止せられん。

(3) 敵軍を墮落せしむる法

又法あり、他の軍をして墮落せしめんと欲せば、醫をして人の五支[七]より血を取らしめ、爐に於て護摩すれば、瞬目の頃に彼の軍皆な墮落し、則ち意に隨て、縛するを得ん。若し息災せんと欲すれば、酥蜜を取りて、龍華と和して護摩すれば、卽ち安樂なるを得ん。

(4) 敵を摧破する法

又法あり、他の敵を摧かんと欲すれば、念誦して他をして近く來らしめ、旣に近づかば、或は前の曼荼羅及び彼の幡を作り、彼の軍の前に於て、裸體にし髮を散じて、被甲及び牆印を結び、三時に各一百八遍を論じ、麼奴沙の肉を燒き、及び嚕地囉を毒に和して、護摩せよ。行者夜は牛皮の、(上に)眠り、或は意に隨て眠れ、是の如く作し已れば、彼の軍を護らん。俱摩羅天・梵天・摩醯首羅・及び帝釋は彼れの(軍)營を加護せん。七日の中に於て、彼れ決定して、更に互に相鬪論を成じて、馳走し、心に苦惱を生ぜん。彼等互に相見ず、乃至十五日の中間に、彼等に禁止せられん。餘殘の能く動くもの有ることなり、儀軌に依らず忿怒して、軍陣の前に對さば、意に隨て作法せよ。或は餘教に護摩を作せ、皆な成就することを得ん。

(5) 威勢を張り得る法

又法あり、生牛酥を取り、摩尼形を作し、像前に對して、妙香花を以て、壇上に散じ、三(枚

【六】 摩奴沙(manuṣa)は人

【七】 五支とは五體、

成就毘那夜迦品第五

(1) 修法

屏處に於て佛像を安じ、一切有情に於て、悲愍の心を起し、神通の月を取りて、三時に澡浴し、三時に衣を換へ、時別に一千八遍を誦じ、乃至[二]月圓滿なるに其の終日、晝夜食せず、一[三]僧伽梨衣を作りて、新帛を以て淨洗し妙染して、善く縫ひ、量に應ぜよ。一切の香を以て塗り、香泥を以て、一壇に塗り、袈裟を壇中に安じ、酥燈を然すこと一千八盞、一切の佛菩薩に於て、全身にて作禮して結跏趺坐して、左手を以て袈裟を按じ、念誦し了り、是の言を作せ。我れ菩薩行を行じて、是の如くの心を發す。虚空に飛騰することを得て、初日暉の如くなるに至らんと。一切の佛菩薩を禮し、一字頂輪王の名を稱すべし。纔に稱名して無超勝力を得れば、一[四]切の天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅緊那羅・摩睺羅伽等、皆な作禮して、是の言を作さん。我等は何をか作さん。と若し僧伽梨衣を拔けば、彼等は地に倒れんのみ。復た(慈)心を以て起さしめよ。

(2) 敵軍を降伏する法

又法あり、光事法を作せ。山及び池測或は餘處に於て、或は菜麥を食し、或は乳を飲み、或は乞食して、佛を禮して罪を說き、隨喜功德を作して、二十洛叉を誦されば、所爲所作、皆な成就することを得。

又法あり、殺害を禁止し、彼をして昏睡して、器杖を禁ぜしめんと欲せば、四印曼荼羅を畫き或は蓮華廣大の曼荼羅を畫き、力に隨て飲食を供養し、一[五]髻羅刹尊の處に於て、門に對して、青幡を作れ。其の幡は三橛金剛杵形に作り、幡上に於て、自らの嚕地囉を以て、三股金剛杵を畫き、中に

【一】正藏、一九、二九四、とし——三〇〇、B

【二】月圓滿は十五日。

【三】僧伽梨（Saṃghāti）は三衣の一にして、大衣と稱す七條と五條とに對す。

【四】本文には徃詣於金剛手菩薩の八字あり。

【五】嚕地囉（rudhira）は血と譯す。

若し佛法に於て淨信を生ずれば、則ち忿怒を息めよ。若し忿怒を息めて慈心を生ずれば、即ち持明者は、急速に香水を以て佛像を灌沐し、念誦して慈心を起し、須臾の頃、水を以て灑げ、その疼痛燒然、皆な止息することを得て、復故の如くなるを得ん。善男子よ、菩薩は、方便を以て、三寶を損する者に於て、應に作すべし。

(33) 降魔の法

又法あり、先事法を作せ、一切有情を利益することを思惟し、苦を離れて怖畏なく、不怯弱勇健にして、下劣の心なく、八戒を持し、灌頂を得るものは、三昧耶を知りて常に修し、如來並に菩薩、聲聞を念じて、罪を說き隨喜する者は、像を賖摩賖那に安じ、身に赤衣を著し、賖摩賖那花を以て、身及び頭を莊嚴し、及び賖摩賖那の食を食し、念に住して無限に念誦し、方偶・甲冑・牆等の儀軌を護ることを失念せざれ、是の如く念誦すること初七日にして、恐怖の惡形牙齪熾然として髮を竪て、或は一足・兩足・三足・兩臂・三臂・四臂・或は八臂、或は兩頭・三頭・四頭なるを見ん。則ち持明者忿怒して誦すれば、その時、大風の大雲を吹くが如く、即ち四方に馳散せん。即ち慈心を起すべし。第二七日には、女人現じて、悅意端正にして、瓔珞をもつて身を嚴り、愛す可き色を示現するを見ん見已て念誦して慈心を起し、不淨觀を作せば即ち滅して現はれず。第三七日には、即ち毘那夜迦惡形の羅刹を見ん。寂靜を作して來り、來り已て是の言を作さん。我何をか作さん。と修行者は是の言を作せ、敎を奉ぜんが爲めなれば、則ち使命と爲れ、使ふ所は、皆な敎に依て成辨せしめん、と。其の魔若し忿怒の心を起して、修行者を觀れば、即ち滅壞せん。

それ先事を作す者は、河或は蓮華池・或は一樹、或は大花園に於て而も作せ。

作り、塔の前に於て像を安じ、或は水を飲み、粆を食し、遏伽木に酥を搵けて、護摩を燒くこと十萬遍すれば卽ち地動き、盡く其の地主内に於て、或は流星あり、或は自在に雲雨を隱し、大伏藏を[六九]得て、光明を見、意樂轉依し壽命一劫ならん。一切の有情も阻壞する能はず。大明王の爲に、一切方に熾盛なり。

(30) 成就法を行じ得る資格

若し能く普遍に一切に入るを見れば、此の成就像法をば、少勇志者は作るべからず、少慧の無悲者は、作るべからず、雜穢にして資糧を積集せざる者は作るべからず。尊師を輕毀し、麁惡語・欺誑・散動心及び曼荼羅を見ざる者、多く作務を營む者、希望をもつて事を作す者は(此の成就像法を)作すべからず。若し是の如くの惡を離るる者有れば、是の如くの功德(者)は、久しからずして當に成就すべし。若し前の如き作者に異なれば、則ち癲狂して成就せざるなり。

(31) 人を花に至らしむる法

又法あり、若し菩薩藏を謗毀し、及び菩提心を發して加行する佛敎者を謗するものを麼羅せんと欲せば、像前或は人の髑髏の前に於て、人の髑髏を以て彼の人形を作り、面を北に向け、[七〇]賒摩賒那に於て、或は河に於て、或は池に於て、乞食寂默し其の形を忿怒にし、左脚を以て踏み、小指を以て刺して、誦ずること七日、日に三時に(作法すれば)卽ち大瘡を被り、遍身瘡疱を(生じ)死に至るまで疼痛を受けん。卽ち吃哩爹の大指節の如く、熾盛の火焰ありて金光明聚の如くなるを見ん。

指を以て剋作を期し、遍く諸方を香勢して聲を以て告げんと欲すれば、某甲は我をして來りて汝を害せしめんが爲に、是の如き語を作すと時に彼れ見已りて、卽ち血を吐きて而して死せん。

(32) 病痛を除く法

【六九】伏藏とは地中に金銀寶石を埋る藏してある場所を意味す。

【七〇】賒摩賒那とは寒林。

(25)　**先事法を修する場所**

又法あり、先事法を作さんに、河岸或は一樹、或は山間、或は池側に於て、或は助伴あるも或は助伴なきも、乞食し寂默にして慈心相應し、三時に罪を說き、意常に勇健にして、怯弱なく、心常に捨施を樂ひ、自ら灌頂を作し、加護を作し、被用し、方隅の壇界を結し、眞言水を以て衣に灑ぎ、塗香・花鬘・燒香・飲食・燈明を(供し)迎請奉送等の一切時作に、眞言を誦すること、十萬遍して、則ち終意せよ。

(26)　**先事法の行後の注意**

先事を作すの後若し忿怒して他を視れば、彼れ癲癇を所持すれば、即ち狂亂を得て身は自在ならず。

若し復念誦して瞻視すれば、則ち身上の瘡疱は、燒かれて死に至らん。此れは是れ無碍なり。

(27)　**火事を起す法**

或は右脚の頭指を以て地を捺へて而して誦ずれば、則ち刹那の頃に、空より火を雨らし、一切處大に燒然せん。慈心を起して、念誦すれば則ち解けん。

(28)　**他を殺害する法**

是の如く忿怒して誦ずれば他軍を摧き、能く一切の病を生じて、驅擯し殺害し枯竭し迷亂し狂惑し、癲癇魅瘧を持する支分を斷じ及び逼惱せしめん。

若し此の如く誦ずれば、一切の不空(の願念)皆な成就することを得ん。若し淨意慈心を起して誦ずれば、即ち皆な止息することを得ん。

(29)　**伏藏を發見する法**

又法あり、成就せんと欲せば、神通の月分に於て、何の交會する處に於て、緣生の胎藏窣堵波を

して、之を抜けば、即ち故の如くなるを得ん。

又發吒の字を去り、安悉香を取り、丸に作りて焼き念誦すること一百八遍し、彼の名を稱し、或は囉惹[六八]の類を、即ち鉤召することを成ず。白膠香を焼きて二十一遍を誦ずれば、即ち解くることを得ん。

(21) **敵軍を惱す法**

又一字佛頂輪王の眞言に兼て、發吒の字を絹素にし、又樺皮の上に書して、幢上に安すれば、その軍は即ち以て他を禁止せん。即ち此の幢を以て前に引けば、即ちその敵軍は逼惱して安からず。水掬して誦すること七遍して四方に散ぜば、幢却て引き來りて即ち安隱なるを得ん。

又箭を除かんと欲すれば、油を取て加持すること二十一遍して上に塗れば箭は即ち出でん。

(22) **安産の法**

又發吒の字を除きて、水又は油を加持して、難產の婦人に與へて飲ませ及び塗れば、即ち產し易からん。

(23) **敵の辯論を縛する法**

又土塊を加持すること一遍し、彼の人形を畫き、口上に安ずれば、即ち其の讒說を禁じ、及び論議に勝を得ん。解かんと欲すれば、並に發吒の字にて膏石を加持して、上に安ずれば、即ち解けん。

(24) **鉤召と發遣との法**

又白芥子を加持すること一百八遍すれば、即ち鉤召を成せん。掬水を以て加持すること七遍して之を散せば、即ち發遣を成せん。

此の一字佛頂輪王は障碍なく一切の敎相に依て、應に作法すべし。

【六八】囉惹(rāja)は王と譯す。

の形を作り、左手を以て上に按し、念誦すること一千遍すれば、一切の眞言即ち損壞せず。

(17) 鬼瘧を除く法

若し寒熱病を除かんと欲すれば、山耳花を取りて加持すること一百八遍して燒けば、設ひ鬼瘧なりとも亦除差することを得ん。

(18) 鬼魅を除く法

又法あり、佉陀羅木を護摩すること一百八遍すれば、一切の鬼魅を除かん。又灰を加持すること七遍すれば、他の眞言を遮せん。一遍を誦じて水を以て灑げば即ち解けん。

(19) 蛇毒を除く法

又蛇の人を咬みたる蛇形を畫き、刀を把りて、一遍を誦じ、割一下されば、その人を咬める蛇、即ち來らん。其刀を以て左旋すれば、即ち發遣を成ぜん。並に眞言を誦するには歸命に二吽字を加へよ。即ち蛇を禁止吽せん。並に歸命に吽字を加へて、眞言を誦ずれば、即ち解を成せん。二發吒[六六]を加へて眞言を誦じ、左の大指を以て、地を畫せばその人を咬む所の蛇即ち來去せん。發吒字を二十一遍誦じ、手を以て額に觸るれば、その嚙まれたる人は即ち起たん。加持すること二十一遍、水を以て頭上に灑ぎ、輪の如く旋轉し、兼て發吒を誦すること二十一遍し、水を取りて鼻に當て加持して四方に散せよ、即ち本居に往かん。水を取り前に依て加持し、覆ふて地に擲てば復來らん。

(20) 病鬼魅を除く法

又倶邪衛の枝を以て、並に發吒の字を誦じて、地を打てば、鬼魅聲を作さん。並に歸命を誦じて右手を觸れば即ち除愈を得ん。

又歸命を除て、誦すること二十一遍し、[六七]摩奴沙の骨を以て橛を作り、彼人の名を稱し、地に隨て之を釘せば、其の摩奴沙の病鬼魅は壞亂せん。髮を以て繩を作り、其の橛に繫ぎ、誦すること一遍

【六六】發吒(Phata)は叱聲。

【六七】摩奴沙(manusya)は人と譯す。

主たることを得ん。

(12) **大金を得る法**

又法あり、前法を用ゐて、安悉香を燒き、千萬瞻蔔花を以て佛に獻すれば、金一千兩を得ん。

又法あり、蘂ある花を十萬取りて佛に獻すれば、白氎千張を得ん。是の如く、一切の花は色に隨て氎を得ん。

(13) **敬愛を得る法**

又法あり、奢摩奢那の灰を取りて、滿身に於て、晝夜食せず、無名指を以て、[六三]嚕地羅と和して、彼の人形を作り、左脚にて踏み、念誦すること一千遍すれば、並に種族も皆な敬愛を得ん。

(14) **愛女を得る法**

又法あり、婚を求めんと欲せば、稻花を取りて酥蜜酪に和し、護摩すること一千八遍して、其の女の名を稱して念誦すれば、即ち所願に隨はん。如し隨はざれば彼女必ず終らん。

(15) **人に敬愛せらるる法**

又法あり、粳米粉にて人形を作り、苦油を以て心に當てて盛り滿たせ、鐵籤刺に芥子油を以て塗り、[六四]賖摩賖那火を取りて之を炙りて念誦すること一千八遍し、一日間なれば即ち男女をして敬愛せしめん。二日なれば毘舍王、[六五]三日なれば、沙門・婆羅門皆敬愛せん。

我今成就の事業を說示せん。牛黃を取りて加持すること七遍して面を洗へば、見る者皆な敬愛せん。若し黠額を用ふれば、彼を見る人及び彼れの見る者、皆な敬愛を得ん。賊中に於て作意し念誦すれば、皆な解脫を得ん。

(16) **他の一切法を損壞する法**

若し彼の人作法して、自ら持する眞言を損壞すれば、粳米稻穀・白俱那衛花・白芥子に以て、本尊

【六三】嚕地羅(rudhira)は血。

【六四】賖摩賖那(Smaśāna)とは寒林。

【六五】毘舍(veśa)とは印度の四姓中の一。

誦し、乃至晨朝に其の指を以て招けば、則ち敬愛を得ん。

(7) 成就物としての曼荼羅

又法あり、三日三夜、食せずして念誦し、佛前に對して、曼荼羅を作り、酥燈を然して供養し、香を焼き、茅を敷て而して坐し、子母同色の牛乳を取り、盛るに瓦器を以てし、加持すること一千八遍し、灰を以て壇界を結し、晨朝澡浴して、眞言を誦じ、乳を捽して生酥を取り、佛前に廣大に供養し、酥燈を然し、眞言を誦じ、前に捽す所の酥を以て、人形の像を作り、七枚の菩提（樹の）葉上に安じ、像の前に對して、加持念誦し、乃し微動するに至れば、此の酥を取れば觸る所は、皆な敬愛を得ん。

(8) 成就物としての人形

又法あり、前法を用て、龍花蘂の末を取りて、人形を作り香の瓦器を取りて之を安じ、加持すること一百八遍すれば、觸る所、思ふ所、皆な敬愛を得るなり。

(9) 牛膝（イノコヅチと云ふ草の名）苗莖

又法あり、前法を用て、牛膝苗莖を焼きて、護摩すれば、求むる所の財利皆な得ん。

(10) 多牛を得る法

又法あり、牛欄の中に於て、佛像の前に對して、一窣堵波を作り、高さ一肘、法に依て供養し、安悉香を焼きて護摩すること十萬遍なれば、一千の牛を得ん。

(11) 城邑の主となることを得る法

又法あり、前法を用て、白膠香を取りて酥と和して護摩すること十萬遍すれば、十二最勝の村を得ん。

又法あり、前法を用ゐて蓮華を取り、檀香を塗ること一千枚（之を）佛に獻すれば、即ち城邑の

愛を得ん。第二位を成就すれば力は千象に敵して、行くこと風の如し。壽命五百年にして、十分の一を竊む。諸の持明（者）は、敢て凌突せず。第三位を成就せば、身は初日暉の如く、寶をもつて莊嚴す。壽命は中劫なり。餘類の持明仙は、敢て輕慢せず。輪王に倨傲し、七風を起して而して行かん。是の如く素路旦（安）善那・雌黃・雄黃等・三種を成就すれば獲る所の悉地、皆同じ。

(6) 金剛杵の製方と其の効驗

又法あり、[六〇]金剛杵を成就せんと欲せば、霹靂木の十六指を取りて、金剛杵を作れ、圓月內に三日三夜食せず、佛、菩薩に於て、廣大の供養を作し、其の杵を佛に獻じ、種種の飲食を佛に供養し、然して後に金剛杵を以て、[六一]奢摩奢那に往き、東流河の兩邊の土を取り、和するに五淨を以てし、一肘量の窣堵波を作り、前に對して、儀軌に依りて供養し、奢摩奢那の灰を取りて、塔の前に於て、金剛杵の形を作り、金剛杵を上に安じ、手を以て上し按じて念誦せよ。乃至乞食時にも彼の杵を取りて食を乞ひ、得巳て分食して、佛に供養せよ。然して後に自ら食して護身せよ。或は伴あるも、或は伴なきも、二手を其杵の上に按じて、念誦せよ。乃し三種を成就するに至らん。

神位を成就すれば彼を見るもの及び彼の持金剛者を見る者は、皆な敬愛を得、第二位を成就すれば、牛の埃塵を高く飛騰して、而して行くが如く、力は九千象に敵して、奔走して風の如く、六分の一を竊んで求むる所を自在に能く鉤召して、身に光耀あり、大威德を得、第三位の成就は、身は初日暉の如く、壽命一萬歲にして、輪王に倨傲し、金剛杵を持して遊行す。是の如く蓮華・輪・三戟叉・鉞斧等、求むる所の悉地成就は皆な同なり。

又法あり指を[六二]成就せんと欲せば、先づ先事の法を作せ、滿晬せざる孩子の頭指を取り、前法の如く、窣堵波を作り、奢摩奢那に就て、廣大に供養し、茅を敷き、面を東に向て坐し、其指を佛に獻じ巳て、手を以て之を按じ、乃至光を放て燈焰增盛すれば、則ち意の如く結護し、一夜を盡して念

【六〇】金剛杵は成就物の一。指とは約五分に當る。

【六一】奢摩奢那（Śmāśana）寒林と云ふ、屍骸を捨つる所にして王舍城の附近にありと云ふ。

【六二】成就物としての指。

頂より光明を出し、其の光は青黄赤白なり。

(6) 行者の用心

則ち此の像を寂靜處に安じ、急躁ならず聖默節食せよ。眞言契經毘尼[五〇]等に依りて、應に放逸ならざるべし。一切受苦の有情に於て、悲愍の心を生じ、智眼を以て善く諸根を攝し、心は散動せず、意は常に等引に（住し）一切の愆過[五一]を遠離し、爲に諸の障難を遮り、無肉等を食すべからず、[五二]三寶を淨信して、現前に敬信し、一切有情を矜愍[五三]し、大菩提を成就する願意を發し、三時に澡浴して、新淨衣を著し、閑靜無人の大河或は山に(住し)、身口心を疲倦せず、一切時に佛世尊に於て廣大の供養を作せ、[五四]圓月に於て、晝夜食せず、[五五]白月一日より起首し、或は菜を食し、或は穬麥を食し、或は食を乞ひ、或は水を飲み、或は粆を食し、[五六]八洛叉を誦じて、先事の法を作せ。

(5) 安善那の製法と其の効力

若し安善那[五七]を成就せんと欲せば、勇士交易して、掃尾蘭。安善那一兩を買ひ、婆羅門の童女をして五淨を以て洗はしめよ、面を北に向けて碎き、右指を以て撚て丸と爲し（雨水を用て利し、撚る時には、蠟を以て指面に塗り、帖するに竹膜を以てす、然して之を撚て丸と作し、若し丸に指文あれば成就せず。）四丸を作りて以て蓮華葉に盛り、之を覆ふて陰乾にす。然して後に佛前に安じ、[五八]護摩の儀軌に依て、柴を燃し、一千の三波多[五九]を作り、作り已て、即ち舍利を有する塔の前に於て、或は像前に於て、廣大に供養し、波羅奢木を燒て八日護摩す。一小曼荼羅を塗り、四方を安護し、第二重の曼荼羅に於て、白芥子を以て警覺し、第三重の曼荼羅に於て、伴あるも伴なきも、廣大に供養し、眞言にて加護を作せ。面を東に向けて、茅を敷て坐し、三（枚の）菩提（樹の）葉の上に於て、藥器を安じ、四（枚の）菩提（樹の）葉を以て覆ひ、右手を以て藥器を按じて念誦し、乃し暖煙、焰に至る。若し初位成就せば點眼に用よ。持誦者の見る所の人、及び彼の持誦者を見る所の人は、皆な敬

【五〇】毘尼(vini)は正しくは毘那耶(vinaya)譯して戒律と云ふ。

【五一】愆　アヤマチ。

【五二】本文に不異作意の四字あり。

【五三】矜　アハレム。

【五四】圓月とは白月十五日。

【五五】白月とは陰曆の一日より十五日までを云ふ。

【五六】洛叉(laksa)は十萬。

【五七】安善那（Añjana）と樹木の名、この木の葉が眼藥と成る。これ成就物の一である。

【五八】護摩（homa）は燒供と譯す。

【五九】三波多（Sampāta）は成就と譯す。今は成就物を指す。

先づ當に畫像の儀を說くべし。纔に此の像を見ることに由りて、一切の眞言を修して、一切教に於て、成就するに堪任す。纔に此を見ることに由りて、一切の罪を解脫し、一切世間出世間の眞言を皆な流通することを得、纔に此を見ることに由りて、持金剛に攝受せられ、纔に此を見ることに由りて、一切の障をなす毘那夜迦を遠離し、纔に此を見ることに由りて、大教王を安樂に易く成就することを得、纔に此を見ることに由りて、一切の天龍、藥叉、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等、成な禮敬す。乃至略說す。善男子よ、纔に此を見ることに由りて、一切の世間出世間の一切の明教中の所說の句義を皆な成就することを得。是れ一切世間出世間の眞言明の上上なり。此の佛頂は一切佛頂中の主宰なり。

(4) 畫工の準備

我今像を畫くことを說かん。童女、線を撚り、割截せざれ、勇士の交易の如く、織師は齋戒を受けて、應に織緤すべし。方三肘、先づ五淨[四六]を以て洗ひ、後に栴檀香水を以て洗ひ、壁に於て塗香し畫く所の像緤を張り、面を東に向て前に對し、瓶の底黑からざる者を安じ、香水及び一切の寶藥を盛り滿たし、廣大に一切の佛菩薩に供養し、三時[四七]に沈水香を燒き、その畫師は三寶[四八]を淨信して、餘の天を信ぜざる者、極て嚴敬に八戒[四九]を受け、茅(ちがや)を敷きて寢息し、身に白衣を著け、三時に澡浴し、三時に衣を換へ、是の如く畫人は不放逸者にして、應に聖者を畫くべし。

(5) 頂輪王の曼荼羅

大海より涌起せる須彌廬山王は、四寶より成る所にして、上に於て白蓮華を坐し、身に白金色にして、一切の三摩地の最勝王の三摩地を正受して、結跏趺坐し、一切の身より、遍滿に輪を出し、熾盛の光明あり、上に於て廣に山峯を畫くべし。その峯は種種の寶を以て成り、持誦者は佛の右邊に在り、本色形は、香爐を持し、如來面を觀じ、右膝を地に著け、下に應に蓮華地を畫くべし。佛

[四六] 五淨とは牛の尿・糞・乳・酪・酥にして、尿と糞とは未だ地に落ちない淨物に限る。
[四七] 三時とは朝と晝と夕方とを指す。
[四八] 三寶とは佛・法・僧。
[四九] 八戒とは八齋戒とも云ふ。不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不飲酒・不坐高廣大床・不著花鬘瓔珞・不習歌舞戲樂。

請はしめ、阿闍梨は弟子の爲に諸佛に告げて、是の如くの言を作せ、世尊此の弟子を我れ灌頂し已れり此の善男子は今より已往、無希望悲愍の心を以て、一切の有情を哀愍し、應に一切の世間出世間の曼荼羅を書くべし。說の如く應に作すべし。この一切の曼荼羅儀軌の如く、應に加行すべし。是の如くの灌頂者は、即ち阿闍梨と爲り、一切の菩提の道に入らん、是の如く、菩薩行に於て行する時は、無量の功德の果報を得ん。

先行品第四[四四]

(1) 金剛手の請問

その時、金剛手祕密主菩薩摩訶薩は、座より起て、偏袒右肩にし、合掌して佛に禮し、佛に白しく言さく、世尊よ、[四五]我に印可し玉へ。一切眞言に於て、灌頂を得、一切如來に於て、祕密を持す。世尊よ、菩薩大集會に於て、眞言行を修する者の爲に、我及び一切有情の爲に、哀愍して、一切衆生を利益せよ。唯願くは、佛頂、轉輪王教の方便を說き玉へ、或は當來後世に人有りて、利益安樂するが故に。

(2) 世尊は先事の儀軌を說き玉ふ

時に世尊は、金剛手祕密主に告て言はく、善哉、善哉、祕密主よ、汝は能く是の如く利益し、是の如き問を作す。汝應に諦聽すべし。我今說かん。祕密主よ、此の無障碍如來頂一切明眞言王三昧耶は儀軌灌頂儀に入り已つて說かん。我今譬喩せん。祕密主よ、如來の如きは、天と世の有情とに勝ること上上と爲す。善男子よ、此の轉輪天佛頂は、一切眞言中に最勝なり。一切眞言王中にて上上と爲す。是の如く先事の儀軌は即ち成就の儀を成するなり。

(3) 畫像の功德

【四四】正藏、一九、二九二A、—二九四、C。
【四五】印可とは受法を許す意。

(18) 三昧耶の敎誡

汝等は眞言行に於て當に勤修すべし。大乘に於て、疑惑を生ずべからず、一切天を輕賤すべからず。佛敎中に疑惑すべからず、弟子等に阿闍梨に於て、殊勝に捨施し供養して已身を捨て、應に轉輪王佛頂を受くべし。阿闍梨は彼に於て悋心すること無し、悲愍の心をもつて、印契及び眞言を應に教授すべし。即ち此れより已後、成就する者は、一切天龍、藥叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等及び一切有情も惱害する能はず。一切の眞言に於て成就し、必ず能く堪任して不退轉を得て一切菩薩の位に入らん。一切の天も沮壞する能はず。則ち一切世間出世間の曼荼羅に入りて、三昧耶を成することを、一切の天皆な知り玉ふ。

是の如く善男子よ、菩提を成就する者は、則ち悉地を得、持金剛の加持する所となり、行に隨て安樂せん。我略々此の儀則を說きつ、次第に應に一切の曼荼羅王の稱說する所を作すべし。

(19) 灌　頂

その時、曼殊室利童眞菩薩は、佛に白して言く。世尊云何んが阿闍梨たらん。云何んが灌頂せん。と時に世尊は讚歎して、善哉、善哉、妙聲よ、善哉妙音よ、若し灌頂を受けんと欲する者あらば、阿闍梨の所に於て、前に比して兩倍（の供養を）應に施すべし。應に雙襟を施すべし。應に金銀熟銅器に諸の種子及び藥香水を滿盛するを施すべし。則ち阿闍梨は、曼荼羅の前に對して、四方に曼荼羅を塗作し、白粉を以て三肘量に、蓮華を畫き、上に於て師子座を安じ灌頂を受くる者、坐し已て蓋及び拂（子）を持して、吉慶（の讚）を誦して讚揚し、中瓶を取りて加持すること一百八遍し、弟子をして佛頂の印を結んで、頭上に安ぜしめ、阿闍梨自ら弟子をして灌頂せしめ、螺を吹き鼓を擊て、諸の音聲を作し、國王の灌頂を受くるが如くす。阿闍梨は應に右の手を以て、弟子の手を執り曼荼羅に引入して、一切の佛菩薩に於て、弟子を奉獻し、弟子をして佛菩薩に於て、印可を

(14) 讃眞言

牆眞言歸命前に准ず
噁引莫塈

(15) 大三昧耶印

是の如く前の如く印を說く、事業に隨て應に之を用ふべし。一切の眞言天明は、根本の眞言を以て安立す。則ち世尊聖衆に於て、食飮を作り、力に隨て供養せよ。一切の佛・菩薩を禮し、五輪を地に著け、香泥を以て、手に塗り、大三昧耶の印を結んで、之に示せ。二手虛心合掌して、諸度各々微しく屈して、芙蓉の如くす。如來族三昧耶の印と名く。然して後に一一に一百八遍を誦じ、心眞言をも亦誦す。曼荼羅を旋遶し聖衆に啓白す。

(16) 啓白の文

我は作すべからさる所のものを而も作せり。所有の過は儀軌を犯して加減す。唯願くば聖衆、過を捨てよ。是の如く、第二も第三も亦是の如く說く。弟子已に戒を受くる者は、眞言法に於て、淨信を生じ、已に菩提心を發する者は、三寶に於て淨信す。弟子に是の如くの德あれば、應に入らしむべし。入る者は七八を限る。若し曼荼羅に入らんと欲せば、淨澡浴して遍身に香を塗り、誓を設けしむ。若し三昧耶を越し、或は愚痴あらば、無間地獄に墮せん。汝等善男子よ、應に常に三昧耶を護持すること是の如くすべし。

(17) 覆面

弟子の爲に三昧耶を告げ、綃帛を以て面を覆ひ、三昧耶の印を結び、心眞言を稱せしめ、花を擲たしめ、彼の上に花の落つる所を、卽ち其の部族と定む。是の如く弟子を引き(入れ)已て、一一弟子の爲に根本眞言を誦じ、酥を以て護摩すること一百八遍す。是の如く作し已て、應に三昧耶を告ぐべし。

し、復菩提心を發して、金銀或は瓦器を取りて諸の種子及び花香水を盛りて滿たしめ、右膝を地に著け、根本印を結び、應に明王を請すべし。心眞言を用て、次第に依り、應に、天龍、藥叉等を請すべし。卽ち明王の心（眞言）を以て、中瓶を加持すること一百八遍し、然して後に菩提樹木を取りて、（此の上にては夜合を用ふ）然火し、[四三]三甜に和して明王の眞言を用て護摩すること一百八遍す。卽ち二の眞言に各々護摩して一百八遍す。

(11) 頂眞言

頂眞言に曰く

南莫三漫多勃馱南阿鉢囉二合底訶多舍娑那南唵斫羯囉二合韎嘌底二合唵吽

頭眞言に曰く

唵斫羯囉二合韎嘌底二合吽發娑嚩二合訶（歸命上に同じ）

(12) 結上界眞言

上方界下結する眞言に曰く

唵徽枳囉拏徽特防二合娑尼迦比羅貳嚩哩尼怛囉二合娑耶嚩日羅二合引吠賖薩帝㕧引羅特嚩二合能瑟吒羅二合囉乞沙二合𤙖發（歸命は頂眞言に同じ）

(13) 甲冑の眞言

甲冑眞言（歸命前に准ず）

唵斫羯囉二合韎嘌底二合鉢囉二合賖弭多囉捺囉二合引囉捺囉二合引娑薩摩二合車盧瑟尼二合沙囉乞沙二合囉乞沙二合𤙖吽發娑縛二合訶

【四三】三甜とは牛蘇と蜜と乳となり。

を釘すべし。是の如く等の線を四方四門に(用ふ)。

(8)　三昧耶曼荼羅の第一院第二院

その中央に佛頂輪王を安じ、或は佛印を以てす、佛の左右に煩惱雹(碎)法輪を安じ、又は光聚高の二佛頂王を畫き、亦は左右に白傘蓋佛頂、勝佛頂、佛眼、佛毫相、爍吃底牙[四〇]を安じ、應に佛の慈火、福德の明、及威德の明、最勝、及び商羯梨三部の母明、阿難、須菩提、鉢及び錫杖等を安ずべし。佛の右左に於て次第して畫け。外の四門の左右に各々應に佛の佛者を畫くべし。西門の中に無能勝を畫き、並に門の界道の中に於て、難陀、烏波難陀二龍王を畫き、四門に持蓮華と持金剛とを畫き應に佛の右左に摩醯首羅並に妻を畫くべし。倶尾羅天と持棒とを一切處の門の兩邊に於て應に置くべし。

(9)　三昧耶曼荼羅の第三院

第三院は、應に十二院の半を取るべし。第三院の中に於て、梵天及び諸天、迦樓羅、護世(天)等を畫き、及び餘の天を隨意に畫くべし。彼の三部[四一]本族の眷屬も、亦應に畫くべし。一切は皆な無能勝壇儀軌(金剛契中の說)に依りて壇を畫き已りて、應に新瓶の底の黑からざる者を取りて、應に量らしむべし、阿摩羅[四二]の梢葉を取りて其の中に挿め、又倶緣菓を取りて瓶口の上に安ぜよ。(枝葉の相、端正を兼ぬる者を取れ、)瓶中に諸寶及び諸の種子を置き、並に香水を滿たしめ、細繒帛を以て其の項に繫け、壇の四角及び中央に安ぜよ。門に皆刹柱を立て、時花を以て鬘と爲して莊嚴し、並に幢幡を懸け、(此の土に無ければ時に隨て花菓)應に香爐燒、沈水香、壇香を置くべし。

(10)　護摩

即ち阿闍梨は壇の側に於て應に護摩を作すべし。根本の眞言を以て、酥を用て護摩すること一百八遍、然して後に迎請せよ。明王の頭頂甲冑を以て、自ら身を加持し、一切有情に於て大悲心を起

[四〇]　爍吃底(śakti)は戟。

[四一]　三部とは佛頂部、菩薩部、金剛部。

[四二]　阿摩羅(amala)は無垢と譯す。

合駄哩尼吽發娑嚩二合訶

此を輪王心と名く、曼荼羅の中に於て、壇中に先づ置く所の香花を加持すること一百八遍し、壇中に於て閼伽[三五]を獻じ已て、然して後に、一切の色を拼(あは)すに皆心眞言の加持を用ふ。應に先づ白、次に赤次に黃、次に綠、次に黑にて畫くべし。是の如く等の粉は或は珊瑚、金、摩尼、眞珠、吠瑠璃等を用ひ、應に錯して末と爲すべし、或は粳米粉を種種に染めて色と爲し、香に和して用ふ。是の如きを色の次第と名く。若し如上の色を得ざれば、赤土、黃土、綠土等を取りて、用ふ。

(7) **輪天隨心眞言**

自身を護り、曼荼羅處を護り、弟子を護るに皆な心眞言を用ふ。一切應に作すべきには、持明王の心眞言を誦ずべし。應に曼荼羅を拼(ただ)すに、心に隨て香木を加持して、壇上に散灑すべく。隨心眞言に曰く、

南莫三漫多勃駄南阿鉢囉二合底呵多舍娑那南唵阿鉢囉二合爾多特

此を輪王隨心と名く。

此の眞言を以て、一切の方便、塗香、花、燒香、飮食、閼伽(あか)等を一一加持して獻ず、則ち展轉して伊舍那[三六]の方より起首す。中央に於て、羯剌賒[三七]を安じ、水を盛り、諸の種子及び藥を盛り滿て、繒を以て、(瓶の)項に繫け、四隅に於て、線を展べて各々兩道を抨し、若し線斷ち若しくは亂れ若しくは結すれば、酥を用ひ、六字の辨事眞言を以て護摩し眞言を誦ずること一百八遍、眞言に曰く。

南莫三漫多勃駄南阿鉢囉二合底呵多舍娑那南唵吒嚧唵二合滿駄娑嚩二合訶

若し拼(ただ)して直からざれば、多く如(法)に乖く。若し線亂るれば卽ち迷惑し、執線の時、趄[三八]るべからず、若し趄ゆれば卽ち身疾病す。是の故に漬線の時、須らく良久しく粉汁をして、潤徹せしむべし。卽ち道を拼(ただ)すに、麁細勻[三九](いん)を得四角の橛(くえ)は、太だ麁ならず太だ細ならず壇と相稱(かな)はしめて、之

[三五] 閼伽(Argha)

[三六] 伊舍那(Īśāna)方とは東北の角。

[三七] 羯剌賒(kalaśa)とは寶瓶にして、五寶を藏する瓶。

[三八] 趄は趦なり。

[三九] 勻は均齊の意。

益を作す。末後の身を捨てて安樂を得て、沮壞なし、大曼荼羅の佛頂輪王を得て修行する者は、一切の意願を豐足せん。善男子よ、先づ應に阿闍梨は、[三〇]大菩提心に於て堅固に、大願に於て決定し、常に念誦し、[三一]平等戒の梵行者は大悲を具して、恩を知り、多聞にして恩に報ゆる者と、戒禁を護る者とは、應に輪王の曼荼羅を畫くべし。此れに異りて而して畫かしさる者は惡趣に墮せん。

(4) 曼荼羅を設く可き淨處

彼れ應に先づ其の地を淨め、多く花菓有る處、山頂の金剛座に於て、法輪等を轉ずる處は、勝上の成就なり。應に東北の微しく下の處に畫くべし。その地は、平正にして、[三二]鹹鹵ならず、棘刺、骨毛髮、爪甲無き處、礓石、髑髏、沙礫、黑泥を離るる處、若し土色好く、及び如上の穢惡無ければ當に土を掘出し、却て用て塡築すべし。地已に堅くして、土に餘有れば卽ち是れ上處なり。成就を爲すに堪へたり。如し土足らざれば此の處堪へず。當に改めて勝處を覓むべし、地を驗し已らば、是の如き相貌の地に於て、廣大悅意の端嚴樹にて莊嚴する處に於て、是の如くの功德を具する處に於て、應に曼荼羅を畫くべし。

(5) 五色線

童女をして、白㲲縷を合せて、五色線を作らしめ、[三三]或は藕絲（ぐうし）の斷續なく、無結の類のものを用ひ或は野麻を用ひ、或は牧牛の繩を用ひ、應に[三四]拼地に用ふべし。

(6) 護摩の心眞言

初め拼線を起首するに、心眞言を用ふること一百八遍す。護摩の心眞言に曰く、

南麼三漫多勃駄南、阿鉢羅二合底阿多捨娑那南唵怛他孽都瑟尼二合沙阿那嚩盧枳多、沒駄尼斫羯羅二合𩕳嘌底二合吽惹嚩二合羅惹嚩二合羅駄迦駄迦度那微度那怛囉沙野麼囉逾瑳囉耶訶那訶那伴惹伴惹暗惡𡅏𡅏鉢嚧二合企尼君吒哩尼阿鉢囉二合爾多薩怛囉二

[三〇] 阿闍梨(Ācārya)は譯して敎授と云ふ。
[三一] 平等戒とは卽ち三昧耶戒。
[三二] 鹹は鹽氣の多きこと、鹵は鹽地なり。
[三三] 藕絲　ハスの絲。野麻とは麁麻（アラソ）を云ふ。
[三四] 拼　ノゾク、スツル

來の加持を得たり。世尊よ、我曾て憶念す。恒何沙の數劫を超て、彼の時に當て佛あり、寶髻如來應供正遍知と名け。世界を妙慧と名く。我れ彼の時に當りて、貧匱にして、柴を賣るを以て、方便活命す。我聞く、寶髻如來應供正遍知し、彼は、無量の功德を成就す。と、如來の前に於て發願す。如來は皆成就せしめんと。我れ彼の時に於て、家に在りて此の思惟を作せり。我れ今寶髻如來に請ふて、飯食を設け、早起して柴を賣り、食飲を營辨し、世尊に往詣して、佛に飯食を請ふ。如來は請を受く。我れ佛世尊に於て、廣大の淨信を發し、食を奉獻して、佛を禮し已て、是の願を作して言く、一切衆生を貧匱せしむる勿れ、と彼の如來は、我が信心の猛利清淨なるを知りて、我に謂て言く、善男子よ、此の一字佛頂輪王を持せよ。と、廣く我が爲に本教の福利を說き、卽ち彼の世尊は、我が爲に說き玉へり、我れ歡喜し奉行しき。我れ大精進勤勇を以て、此の身を以て、大明王を得たり。無碍嚴三摩地を得たり。世尊、此の三摩地に由りて、無上正等菩提に於て、無量百千の持明を成就せり。世尊よ我れ當に知るべしに、此の如來佛頂の不思議なることは、是の如し。佛は三十二大人相中、佛頂を最勝と爲す。是の如く、一切の眞言の中、此の佛頂は眞言中の最勝なり。是の如く、世尊は天中（の天にして）佛を無上の大師と爲す。是の如く佛頂輪王は一切眞言中の明王、是の如く廣大なり。唯願くば世尊應供正遍知よ、我が爲に曼荼羅を說き玉へ、と

(3) 頂輪王の曼荼羅

その時、世尊は觀自在菩薩摩訶薩に告て言はく、汝大悲者、大菩提薩埵よ[二九]、有情に於て大悲を體として生じ、無量の大悲にて有情を利益するが故に、大薩埵よ、汝應に諦聽すべし。我れ略して曼荼羅を說かん。一切曼荼羅中の王、一切天龍、藥叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽は、集會の中に於て、一切佛菩薩の遊戲する所、金剛手菩薩の輪王三昧耶の加持する所、諸の菩薩の爲に、三昧耶は利益するが故に、此の輪王を持誦することに由りて、善男子よ、如來は有情に於て、利

〔二九〕菩提薩埵(Bodhi-sattva)卽ち眞言行菩薩を指す。

若し此の結印に異なれば、傷損を破らん。成就の時に、遍擲の印を結び、大魔大障の難處に於て用ひ、天修羅と闘戰し、及び難調伏の有難を調伏せよ。若し餘處に用ひなば、有情を傷損せんのみ。

(32) 遍擲の印

二八 曼荼羅儀軌品第三

(1) 三昧耶曼荼羅に入る功德

その時、觀自在菩薩摩訶薩は、佛の威神の力を以て、座より起て、偏袒右肩し、右膝を地に著け、世尊の前に於て、合掌禮し已て、佛に白して言く、我れ謂ふ、世尊よ、眞言の不思議を說き玉へ。世尊よ、諸佛世尊の明王佛頂には不思議（力）あり。設ひ十地に住する菩薩なりとも瞻覩する能はず、何に況んや、餘の釋梵護世天等をや。今請ふらくば、世尊應供正遍知よ、唯願くば、三昧耶曼茶羅を說き玉へ、過法の先佛世尊は、已に說き玉へり。此の曼荼羅に入ることに由りて、即ち一切の曼荼羅に入ることを成ず。此の灌頂に於て、一切の曼荼羅に於て、灌頂を得、此に於て印可を得れば、一切の曼荼羅に於て印可を得、此に於て入ることを得れば、一切の魔道を超越す。此れを見ることに由りて、一切の魔道を解脫することを得、此れに入ることに由りて、不退轉を得、此に於て、灌頂を得れば、一切の眞言印に於て自在なり。此れに入ることに由りて、持金剛に攝受せられ、一切の罪を離るることを得、此れに入ることに由りて、能く一切の事業に堪任す。此れに入ることに由り、安んじて易の方便を樂はん。能く大明王を成じて、一切の障難を離る。此れに入ることに由りて、或は善男子、或は善女人は、無量の功德を成就せん。

(2) 觀世音菩薩の往昔の念願と一字頂輪王

世尊よ、我れ曾て人の爲めに、此の一字明轉輪王を修して、無量の菩薩の三摩地を得、不思議如

【二八】正藏、一九、二八九、B上—二九二、A

ち、後に應に慈心を起して、息災の法を作すべし。佛母の眞言を誦じ、或は心眞言を誦じて、息災護摩し、或は彼の形を作り、牛乳を用て、佛母の眞言を誦じて以て之を灌沐し、彼をして安樂ならしめよ。然らざれば、果劫障道の因緣と作らん。

(30) 消毒の法

その時、金剛手菩薩は、佛に白して言く、願くは世尊よ、易の方便を説き玉へ。世尊よ、或は有情あり、下劣精進にして、勤勇なくば、世尊よ、最勝の成就を修する能はず。是の故に、彼の有情は大乘に住するが爲に、作業の易き方便を説き玉へ。世尊よ、如來の加持力に由るが故に、五濁末時に於て、此の大明王に由り、少方便を以て、一切の毒を治せんことを。と

佛は執金剛に告ぐ、

卽ち前の根本印にて、二風[二四]を竪て合せて針の如くし、以て毒を發動せん。卽ち前印にて、二蓋を以て、相拄へ、下に向け屈して搖動し、迷悶の毒を召て、然して二蓋[二五]を開けば、便ち發遣を成して、毒を散ぜしむ。

卽ち前の根本印にて、二勝[二六]を開き竪つれば、是れ語らしむるなり。

卽ち前の根本印にて、二輪を並べ竪て、蓋頂に著けず、阿尾捨[二七]をして互に搖動して、倒れしめ、互に相繫して語らしめ、互に相纒して舞はしめ、各々擲散して、毒無からしめん。善男子よ、此の明王は能く一切の事業を作し、鬼魅等に於ても、亦是の如く作さん。と

(31) 持明の場所

その時に、金剛手祕密主は佛に白して言く、云何んが持明者は、印を結し、當に何處に於てすべきや。と、佛は持金剛に告ぐ、彼れ應に淨澡浴すべし。閑靜隱密にして、舍利の有る處に於て、像前に對して、應に結すべし。

【二四】二風とは左右の二頭指。

【二五】二蓋は二風と同。

【二六】二勝とは左右二小指。

【二七】阿尾捨(Āveśa)とは靈氣の遍入せる童男童女を指す。俗に云ふ所の口寄せに使用さるゝ子供に當る。

(27) 大擲印

善男子よ、我れ中に於て、一切の印、大輪王を加持する廣大なる大擲印相を說かん。

兩脚を並べ立て、左脚の大指を以て、右脚の大指を壓し、二手を右の膝より左右に旋轉して、金剛舞の如くし、漸く上せて乳に至り、又兩頰に於て旋轉して、頂上に至り、根本印を結び、卽ち尾捨佉[三二]に住して立てよ。

纔に梵天、倶魔（羅）天 帝釋、摩醯首羅天、那羅延天及び大衆 龍・藥叉衆・及び修羅羅刹、毘那夜迦等、一切の隨族及び鬼衆を擲て 迷亂、悶絕して恐怖を生じ 所有の住者、天羅刹 地下に住する鬼神類 纔見に此の印を結べば皆な馳散せん 行者應に悲愍の心を起して息災を念誦して苦惱を除き、心眞言を誦じて心印を結び、心を淨め彼等に安樂を得せむべし。

(28) 共の擲印

是の如し、金剛手よ、擲印に二種あり、謂ゆる共と不共[三三]となり。これは是れ不共印なり、我今次に共印を說かん。

(29) 害印

平に脚を立て、左脚を擧げて、舞勢の如くに旋轉し、根本印を結び、頂上に安ず。此を害印と名く。天魔障難の處に於て應に用ふべし。纔に此の印を結べば、一切の諸魔、十方に馳散せん。金剛手よ、此を共印と名く。

夫れ擲印を結すれば、事法に依て、五支身を成ず。自身は一字頂輪王の如く、七珍圍遶して光明赫奕として瞻睹す可きこと難しと想へ。左手にて右の跨を拄へ、右手に輪を持し、左右阿哩茶鉢羅二合 哆哩茶按步、目を怒らし左右を顧視して、師子王の奮迅するが如くす。然して後に擲印に住せよ。印を結んで頂に安じ、卽ち十二輻の金輪を魔の所在の方に隨て、而も其の印を擲て、或は後の魔形を畫き、印を以て之れに向て擲

【三二】 尾捨佉（viçakhā）とは氐宿の位置にして、東南に當る。一說に尾捨佉は遷入の義なりとあるも、今は取らず。

【三三】 不共とは天等に限て、他に通ぜざる意。

切佛は稱讃し稱譽し、歡喜し大師子吼せん。纔に結べば、設ひ十地に住する菩薩なりとも、皆な消融し驚駭せん。何に況んや、餘の梵天等をや。

(25) 一字頂輪王の眞言の由來

この故に、善男子よ、我は汝及び觀自在菩薩の爲に大師子吼せん。善男子よ、此の一字轉輪王の眞言は、無量の如來より受け得て、轉じて他說と爲す。一切天、衆生は奇特とす。善男子よ、此の不思議一字輪王は、一切如來の說なり。善男子よ、我が過去世阿僧祇劫[一九]に、彼の時に當て、佛有り、轉輪聖王如來應供正遍知と名く。三摩地を以て、轉輪王の形に住せり。善男子よ、我れ彼の時に於て曾て長者たり、彼の如來の所に於て、諸佛に承事供養して、設食す、金剛手よ、時に彼の如來は、此の一字輪王の眞言を說き玉へり、我れ彼の時に於て、家を捨て、非家に趣き、大精進を以て成就を求め、此の身を捨てずして、明轉輪聖王を成就することを得、神通を得て阿迦尼吒天[二〇]に遊べり。善男子よ、我れ無量百千俱胝の有情を成熟して、無上正等菩提を安立し、無量百千の難調の有情を調伏し、次第に皆な等正覺を成ずるを得たり。

(26) 一字頂輪王の奇特

善男子よ、當に知るべし。此の不思議輪王佛頂は、大威德あり、大精進勇健にして、百劫にも、具に說く能はず。我今少分を說けり。後の五濁世に於て、應に廣く顯揚して、堅固の有情と降信の大乘者とに宣布すべし。其の人は則ち一切如來の祕密を持せん。善男子よ、此の一字輪王は、一切如來の祕密、一切如來の堅實、一切如來の最勝にして、一切如來の加持三摩地を眞實と爲す。一切の三摩地の上上にして、如來最勝の三摩地と等同なり。一切菩薩をして、寄特の三摩地を生ぜしめん。一切如來を顯示して、諸の菩薩をして、思惟し校量する能はさらしむ。善男子よ、我れ略して、如來自在の眞言形[二一]を說けり。

【一九】阿僧祇劫(Asamkya-kalpa)とは無數時分と譯す。

【二〇】阿迦尼吒 Akanistha)は色界十八天中の最上界にして色究竟天と稱す。

【二一】眞言形とは法曼荼羅を意味す。

(20) 獻食の印

卽ち前の根本印にて、二蓋の一節を屈して、各々二輪の側に附す。是を獻食の印と名く。

(21) 燈明の印

卽ち前の根本印にて、二蓋の兩節を屈して、背をして相著かざらしめ、並に二輪を竪てて以て蓋側を捻す。是を燈印と名く。

(22) 能縛一切難調の印

修行者は此等の印を以て、念誦する時に、結用す。卽ち前の根本印にて、二蓋の甲を、二輪の甲上に拄ふ。是を能縛一切難調の印と名く。鬼魅起屍、荼吉尼及び水行者の口を縛し、却て結することと根本印の如くすれば解を成す。

(23) 根本印の威德

根本印を結し、花菓を以て印中に安じ、念誦して人に與ふれば、卽ち敬愛を得。

則ち前の根本印にて、二蓋の一節を屈して、相逼め二輪を以て並べ壓し、忿怒を以て根本の眞言を誦ずれば、能く象馬の車輪を禁止す。卽ち此の印にて乘象を結し、遙に擲ち能他の敵を禁止す。

根本印を結んで、軍陣に入れば、能く一切の刀兵を禁じて、害する能はず。

根本印を結んで、忿怒して、池井泉に擲てば、一切の龍宮、火焰熾然して、一切の那伽[一八]を殺害し、空中に擲てば、一切の持明仙、乾闥婆、緊那羅をも、能く殺害せん。

(24) 一字頂輪王の印害の威德

その時、世尊は、復金剛手菩薩に告て言はく、此の大曼荼羅を持三昧耶と名く、能く一切の天龍藥叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅、伽、人、非人等を摧き、一切の菩薩も違越する能はず。一切の難調伏の有情を調伏し、能く一切の眞言明句を壞して、一切の菩薩を鉤召せん。一

【一八】 那伽（Nāga）とは龍。

を用て閼伽を獻し奉る。

(12) 方隅界の印

即ち前の根本印にて、二輪各々屈して掌中に入る。即ち方隅界の印を成す。

(13) 上方印

即ち前印の二輪並べ竪て、微して蓋に著けず、目上に瞻視して而して結ぶ。是を上方印と名く。

(14) 摧關鍵の印

即ち前印の二輪並べ竪て、更に互に左右に動招す。是を諸の關鍵を摧する印と名く。

(15) 縛[illegible]印

即ち前の根本印にて、左右の蓋輪[一七]は各々相拄へて環の如くし、各々光に依て而して住せよ。是を一切有情及び倶摩羅天、梵天、大自在天、那羅延天等を縛し、縛し已て召して順伏せしむる印と名く。蓋輪を解けば即ち解脫印を成す。

(16) 斷壞の印

即ち前の根本印にて、他の眞言を斷壞することを得んと欲せば、二輪の用を以て二蓋の甲側を拾ふ。一切眞言明の斷壞の印と成す。

(17) 塗香の印

即ち前の根本印にて右蓋を屈して、右光の下節に倚す。是れ塗香の印なり。

(18) 花の印

即ち前の根本印にて、左蓋を屈して、左光の下節に倚す。即ち是れ花の印なり。

(19) 燒香の印

印ち前の根本印にて、二蓋各々屈して、二光の下節に倚す。是れ燒香の印なり。

[一七] 蓋輪とは頭指。

(5) 甲冑印

卽ち前の根本印にて、二蓋各々屈して二光の背に柱す。是れ甲冑の印なり。

(6) 鞴印

卽ち前の根本印にて、二蓋の二節を屈して、背相逼り、二輪平に竪てて二蓋に附す。是れ鞴印なり。持明者、此の印を結ぶことに由て、設ひ[一六]頂行等も、近附く能はず。何に況んや餘の作障、毘那夜迦等をや。

(7) 輪王心印

卽ち前の根本印にて、二蓋屈して、二光の第三節を柱ふべし。是を輪王心印と名く。眞言と相應して、能く一切の事業を作せ。

(8) 輪王心中心印

卽ち前の根本印にて、二蓋を屈して、二光の第三節の上に附す。是を輪王心中心印と名く。

(9) 迎請の印

卽ち前に根本印にて、右蓋を右光の後に屈して、身に向けて三招す。是れ迎請の印なり。此の印に由つて一切の眞言聖天を請し、及び持金剛を召す。何に況んや餘の菩薩等をや。

(10) 奉送の印

左蓋を外に向けて三擲す、是れ奉送の印なり。

(11) 閼伽の印

卽ち前の根本印にて、二蓋を屈して相柱へ、二光に附し、二輪各各竪てて蓋側に附す。是れ閼伽の印なり。

先づ掌中に於て、花を安じ、然して後に此の印を結び、初に迎請し及び奉送するに、各々北の印

【一六】頂行とは龍象部の毘那夜迦の上首である。

して言く、世尊よ、若し持明者有りて、佛教に於て、眞言行を修行し、彼れ方便を具せず、善く儀則を知らず、彼れ有情の利益の爲に、此の方便に由て、速に成就することを得るや。唯願くば世尊よ、佛頂眞言教を演説し玉へ。と。

佛は、執金剛に告げ玉はく、持明者は先づ當に三歸と發菩提心戒を受くべし。清淨に澡浴して、一切有情を大悲愍念し、寂靜處に於て、應に契印を結ぶべし。親しく（阿闍梨に）承稟して而して受けよ。若し此れに異りて結（印）する者は、諸魅及び毘那夜迦[五]、而も障難を作し、死して地獄に墮せん。灌頂せざる者、菩提心を發さざる者は、彼の人、前に應に此等の印を結ぶべからず。

(2) 三部の心印

先づ應に三部の心印を結ぶべし、四頂[六]互に內に結合してその二輪[七]を並べ竪て、前に指を附著せよ是を一切如來心印と名く。卽ち前印の左輪[八]を掌中に屈入し、右輪[九]は前の如く竪つ、是を蓮華部心と名く。卽ち前の蓮花部心印にて、右輪を掌中に屈入し、左輪は前に依て竪つ、是を金剛部心印と名く、二手を竪てて、互に諸頂[一〇]を交へ、虛心合掌して、花の掌中に在るが如くす。是れ普通一切佛頂印なり。

(3) 普通一切佛頂の印

金剛藏[一一]は、先づ當に一切世間、出世間の眞言上上の一切佛頂主轉輪王の印相を結ぶべし。二手內相に叉へて拳に作り、二光[一二]を竪てゝ上節を屈し、二輪を並べ竪て、二蓋[一三]は兩節を屈し、二輪の上に相拄ふ。此れ輪天根本印にして、一切印中最も殊勝なり。卽ち前の根本印にて、右蓋[一四]を右光[一五]の後に於て、直く竪てて著けざらしむ。之を頂印と名く。

(4) 頭の印

卽ち前の根本印にて、二蓋各々光後に於て、直く竪てて相著かざらしむ。是を頭印と名く。

【五】毘那夜迦(vinayaka)は魔神又は障碍神若しくは常隨魔と云ふ。
【六】四頂とは頭指(蓋)中指(光)無名指(高)小指(勝)の尖端。
【七】二輪とは左右の大指。
【八】左輪とは左の大指。
【九】右輪とは右の大指。
【一〇】諸頂とは指端。佛頂の根本印。
【一一】金剛藏とは金剛手菩薩を指す。
【一二】二光とは左右の中指を云ふ。
【一三】二蓋とは左右の頭指。
【一四】右蓋とは右の頭指。
【一五】右光とは右の中指。

見る者は必ず座を分たん。天帝は有情界の攝にあらざれば、頂輪を成就するものを見るも、而も半座を與へず、地位を得る菩薩と。不思議解脱に任して三摩地を得る者と、及び緣覺と離欲の聲聞とを除く。天帝の法も爾なり。或は餘に頂輪王呪を成就する（者）を見て、座より起たざる者有れば彼の頭は破れて百分とならん。と

時に天帝釋は是の言を作さく、世尊、我れ持明者を加護せん。若し此の明王を修し、若しは讀み若しは供養し、若しは經典を書寫し、乃至受持すれば、彼れ惡趣に墮せず、彼をして正念を得せしめん。と

(8) 世尊も亦一字頂輪王の受持者を讚歎し玉ふ

世尊は天帝釋を讚歎し、是の如し、是の如し、天帝よ、若し此の明王を成就する者、讀誦する者有らば、必ず惡趣に墮せず、宿命智を得、諂曲せず、離間語なく、不矯不異にして、心に善巧方便を具す。天帝釋よ、頂輪を持する者は、惡趣に墮すと（言ふも）是の處り有ることなし。常に婆羅門、刹利大王族に生じ、端正にして色相好を具し、文筆、書論、工巧を成就して、慳悋ならず、聞持不忘を得、父母は法を離れざるなり。佛頂の威德は不思議にして、比量なし。佛頂族に不思議なり。と

時に彼の一切の天衆、菩薩は、皆な奇特を生ず。その有情は無量の佛を供養す。彼の人の手に至ることを得れば、一切の世天も攝受せん。若し彼の人の手に至れば、沮壞なし。若し此を得る者は、不思議の功德を成就す。

印契品第二[三]

(1) 傳法の必要を明す

その時、金剛手菩薩は、無量俱胝[四]の持明衆に圍遶せられ、世尊に往詣して、頭面禮足し、佛に白

【三】正藏、一九、二八七B——二八九、B、

【四】俱胝（koṭi）とは億。

を離れて、互に觀すること父母の想の如くし、有らゆる彼の中の有情は、互に是の如き見を作す、三千大千世界中に於て、輪圍山、大輪圍山及び餘の黑山は、此の明王佛頂の光明照曜に由るが故に、下は無間大地獄に至り、上は阿迦尼吒天等に至るまで、有らゆる日月大神通、大威德、大自在は、皆な映蔽して照曜する能はず。一處として而も光明に遍く照されざるなし。是の如く世尊の神通行を以て神通を作し、癲狂者は念を得、盲者は視を得、瘂者は言を得、跛者は能く行き、聾者は聞くことを得、裸者は衣を得、思求する所の者は皆な飲食及び資緣の具を得、受苦者は安隱を得、乃至懷胎者は產生の時、皆な安隱を得ん。

(6) 集會の諸尊は一字頂輪王の威德を讃歎す

その時、彼等菩薩は、世尊に往詣し、皆な奇特を生じて、是の言を作す。世尊、不思議、奇特、大奇特なるは、此の佛頂王なり。世尊、是の如し、此の三千大千世界を見るに、寶網遍く上に覆ひ虛空は、天妙花、天妙花雲、末香雲、旃檀雲、衣服、塗香雲、花鬘雲、天妙花鬘雲を雨らし、一切の菩薩、一切の天龍、藥叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等は、天妙花を以て、佛の上に散じ、又繒衣、寶蓋、幢幡を雨らし、天妙音樂を空中に於て奏し、彼の音樂より、是の如き聲を出す。奇なる哉、世尊よ、佛頂は設ひ十地の菩薩なりとも、瞻覩する能はず、所有の一切の有情、互に安樂を得、念佛の三摩地を得。

(7) 釋提桓因は一字頂輪王を受持する行者を加護することを世尊に約す

彼の時、釋提桓因、一切盡くの欲界の天子、俱に世尊に往詣して、佛に白しく言く、世尊よ、若し此の大明王を持するものあらば、我等所有の一切天は、彼を見て皆な起て半座を分けて與に坐せん。と[illegible]

時に世尊は天帝釋に告て言く、天帝の法は爾なり、頂輪を成就する者は、天帝釋等の諸天にして

眷屬、及び娑蘇吉龍王、蓮花龍王、大蓮花龍王、娑伽羅龍王を上首と爲す。無量百千の龍王を以て、眷屬と爲し、及び餘の天龍、藥叉、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等と倶なりき。

(4) 世尊は一字輪王佛頂の眞言を說き玉ふ

その時、世尊無量百千の衆の與に、前後に圍遶せられて、如來頂眞言行の發起を說き、大嚴師子座に坐し、師子の如くに吼え、光耀は日の如く、照曜は月の如し。遍く照すこと帝釋の如く、熾盛なること炬の如し。光耀は梵王の如く、高踊は須彌大の海に於けるが如し。佛頂眞言行を次弟して說き玉へり。

その時、世尊は菩薩等に告て言はく、善男子よ、一切如來の一切三摩地の最勝三摩地王有り、此の三摩地に住することに由り、一字輪王佛頂を、汝當に諦聽し、善く聽き、極善に聽き、慇懃に作意し受持せよ。受持するに由るが故に、菩薩は無上正等菩提に於て、退轉せず。時に一切の大菩薩、合掌して佛に白して言く、唯願くば世尊よ、大明王一字を說き玉へ。と

その時、世尊一切最勝三摩地王に入りて、此の明王を說き玉へり。

[二]南莫三漫多勃駄南歩林吽三合

(5) 一字頂輪王の威德

纔に此の明王を說き玉ふと、三千大千世界は光明網と爲り、普通に照曜して、恒河沙世界の如く一切の彼の世界を照曜し、一切の彼の世界を震動し、一切如來は一切の三摩地の最勝三摩地王に入り、亦此の大明王を說き玉へり。時に一切處に皆な聞くことを得たり。此の三千大千世界は、六種に震動し、東踊西沒、南踊北沒、上踊下沒し、震動大震動あり。一切の天は座よりして如來の前に到り、乃し阿迦尼吒天衆に至るまで、彼等悉く皆な如來を思念し、所有の三千大千世界中の有情は、地獄、傍生、焔魔界、照徧せる頂王光に由るが故に、一切の苦受を除く。彼の時、有情は嗔恚

【二】 Namaḥ samanta budhā nāmbhrūṃ

き、名稱を建立して、十方に稱讃し、無量の檀・戒・忍・進・禪・慧・方便を出生し、一切佛を讃歎し稱揚し、無數那庾多百千倶祇劫に、圓滿に作業して、甚深にして測り難き緣生法を遠離し、顯の邊常斷見に入り、遍く一切有情の煩惱の病を知りて、應に隨て法藥を施し、善く清淨端嚴、無垢の意樂を淨め、勇猛堅固、金剛不壞の慈善を以て、一切有情に於て、能く苦を攝受し、敎ゆるに平等慧を以てし、無量の功德智は、虛空際を盡し、十力陀羅尼辯才理趣に住し玉へり。

(3) 集會の諸衆

謂ゆる觀自在菩薩摩訶薩、常觀自在菩薩、得大勢菩薩、勝慧菩薩、金剛慧菩薩、師子慧菩薩師子勇健步菩薩、金剛勇健步菩薩、金剛將菩薩、金剛幢菩薩、無動步勇健菩薩、清淨眼菩薩、三世步勇健菩薩、蓮華嚴菩薩、蓮華眼菩薩、寶嚴菩薩、金剛手菩薩、虛空無垢菩薩、妙臂菩薩、妙慧菩薩、大慧菩薩、寶藏菩薩、寶幢菩薩、寶印手菩薩、嚴王影像菩薩、功德王影像菩薩、嚴王菩薩、電光莊嚴菩薩、虛空庫藏菩薩、摧疑惑菩薩、雲音菩薩、清淨慧菩薩、雷音菩薩、曼殊室利童眞菩薩、及び慈氏菩薩を上首と爲し、一切の賢劫の菩薩摩訶薩と倶なりき。

復妙界分天子、勝魔天子、功德嚴天子、勝天子、寂調自在天子、勝慧天子、善思惟天子あり。是の如く等の大威德天子は二萬天子と倶なりき。皆な菩提心を發して、善根を種植す。

復四天王天、衆天、天帝釋、商主天、摩醯首羅天、梵王娑訶世界主、魔天子あり。

復大聲聞衆、謂ゆる舍利子、大目揵連、迦旃延子、富樓那、賓頭盧驕梵波提、鴦宿塔象、迦葉波大迦葉波、伽耶迦葉波、羅睺羅、是の如く等を上首と爲す。復五千の大藥叉將あり、謂ゆる滿賢藥叉將、珠賢藥叉將、蠶婆羅水帝藥叉將、那訶羅藥叉將、般志迦藥叉將、並に訶哩底母五百子を以て眷屬と爲す。一切の山及び大河王、金翅（鳥）を上首を爲す。無量百千の迦樓羅王と及び樹緊那羅王とあり。無量緊那羅有り、以て眷屬と爲す。及び群生主、那羅延天、伊舍那鬼主の無量百千の

りて、覆ふに寶張を以てす。龍堅旃檀にて塗飾し、自在の玉鈿にて飾り、摩尼寶網にて彌覆せらる。龍勝建立の地は、嚴智に徹して普遍の光明あり。摩尼の寶柱に、寶網は交絡し、師子蘂の摩尼寶王の娑羅樹は彌覆し、師子憧と、摩尼の寶しと殺窓とは妙に莊嚴して、相映じて壞せず。曼陀羅花・摩訶曼陀羅花、曼殊沙花、摩訶曼殊沙花、盧遮花、摩訶盧遮花、輪花、大輪花、蘇摩那花、鉢師迦花、多羅那花、末羅花、瞿達羅花、蘇件地花、陀弩色迦利花、天蘇摩那花、烏波羅花、蓮花、倶勿頭花、白蓮花を以て散す。

(2) 淨刹に於ける諸佛の三昧相

無礙智は嚴藏師子座に坐し、妙清淨慧をもつて、無二現行し、無相の法を說て、佛性に住し、一切の佛は平等無碍通達の不退轉法と、無碍境界、不思議清淨とを得、三世平等の遍一切世界身の能く頂相を覩する無きを得て、一切法の無碍智に於て、一切の行寶を成就し玉へり。無惑覺智と無分別身とは、無二の慧にして、最勝到彼岸に住し、如來の無壞智と解脫智とは究竟して、平等の無中邊の盡虛空遍法界の無功用智を證得し、一切の佛事を獲得す。未來際の一切無數劫に、轉じて退轉せずして加持し、菩提場に往きて、摧魔し、正等覺を證して、法輪を轉じ、無著の智嚴藏を現じ、一切相圓備して、知る所壞なく依なし。善く頸に廣く十方一切世界に現じ、兜率天宮に住し、生を現じて出家し苦行し加行し、菩提場に往きて、魔を摧き菩提を現證して、法輪を轉じ、般涅槃して、法隱法に住し、四萬の比丘、八萬四千の菩薩と與に、皆十方世界より來集し、皆な一生補處に住して、灌頂位を得、無量の三摩地を出生して解脫し、金剛最勝の三摩地に住して、蓮花最勝三摩地を得、及び金剛喩三摩地を得て、遊戲し幢勝嚴を具し、一切の佛法、皆な現前することを得、功德藏莊嚴三摩地に住して、善く菩提場に趣き、安住して、佛境界に入り、無盡の陀羅尼の莊嚴と、一切魔境界の最勝の色相とを說くことを得、無盡句說の不空劫の受記を得、能く他の敎悲の衆を摧

一字奇特佛頂經

巻の上

開府儀同三司特進試鴻臚卿粛國公
食邑三千戸賜紫贈司空謚大監正號
大廣智大興善寺三藏沙門不空奉詔譯

現威德品第一[一]

(1) **世尊の威德を讃歎し且つ三十三天の淨刹を明す**

是の如く我聞きき。一時婆伽梵は三十三天に住し玉ふ。如來の加持を以て、無量の福出生す。普遍光樓閣あり。大福の倶胝を以て莊嚴し、大福の佛の資糧ありて、普遍せる無量の稱讃あり。無數の功德衆と、無量の金剛とあり、堅固不壞の處にして、清淨佛世界の莊嚴あり、一切摩尼寶王をもつて、莊飾開敷し、莊嚴圓淨なり。智の愛樂に於て、無垢光明の熾盛摩尼寶をもつて、善く莊嚴し、乃し世界に至るまで、三摩地は圓に清淨にして、一切法の理趣清淨を說き玉ふ。無量色の廣博摩尼寶海は間錯し、無盡の如來は、三摩地を示現し玉ふ。清淨無盡摩尼寶王をもつて、變化し間錯せる花ありて、旋流せる摩尼の樹枝にて莊嚴す。善巧方便をもつて、佛智を示現し玉ふ。一切の花香、摩尼寶の光明は交絡し、普遍熾盛の佛の加持して現はす所の遊戲神通の普遍光は、大樓閣に於て、一切の摩尼に廣博旋轉し、十方より觀察する所、吠瑠璃等の種種寶にて莊嚴せられ、無量の寶王の階道は、交絡圍遶し、種種の摩尼と眞珠とは垂作し、端嚴なる竪蓋と幢幡とには、珠網と寶網とあ

【一】正藏、一九、二八五C—二八九B

最勝成就法、病を癒す法、如意寶を得る法、長壽する法、隱形の法、等の十四種の祕法を明し、次に成就物としての輪、劍賢瓶を加持する作法を明し、又次に長壽法、凌虛の法（通力）、降伏の法、息災法寃家を摧滅する法、息上の法、勝訟の法、他軍を禁止する法、關鍵を摧く法、大威德を得る法、障難を止むる法、晴天にする法、一切の怖畏障難を除く法、囚縛を脫する法、眼病を治する法、事を未然に知る法、なぞ種々樣々の世間の欲望を滿足する爲めの作法が明されてある。最後に大明王輪王佛頂の功德が明されてある。

說法品第六　金剛手菩薩の弟である寂靜慧菩薩が、佛世尊を讃歎し、說法を促したのに對して、佛は法成就の資格を明し玉ふ一段である。

調伏一切障毘那夜迦天王品第七　文殊菩薩の請問から說き起し、之れに對する佛陀の訓諭があり、次に毘那夜迦の上首である頂行が輪王誦持者を害せざるを誓約したことを說き已つて、曼荼羅と眞言とを明し、次に入壇灌頂、觀自在菩薩の眞言等が明されてある。

最勝成就品第八　輪王佛頂成就の妙業を說き、次に大忿怒無能勝の印、供養作法、除障作法等を明し、金剛手祕密主の威德の深大なることを示し、最後に此の輪王法は如何なる惡人罪人でも成就する法である旨が述べてある。

菩薩藏品第九　先づ摧一切魔の三摩地を明し、無能勝大忿怒王に付て述べ、金剛手菩薩が大忿怒王の三昧に入り玉ふ旨を說き、毘那夜迦の誓約を擧げ、天帝釋四天王等は、大忿怒王の眞言誦持者を愛護する意を表はし、金剛手菩薩は、毘那夜迦を驅除し若しくは降伏する爲に、眞言を說き玉ふ、佛陀は佛頂輪の咒を流布す可きを天衆に命ぜられ、而して終りに輪王明咒の功德を述べてある。

以　上

この一字奇特佛頂經は菩提流志譯の二本と及び不空譯の菩提場所說一字頂輪王經とは文の次第なぞは固より異つて居り內容の增減も勿論有るのではあるが、大體に於て同一種のものであると見做すことが出來る。而して今の經が純雜何れの密部に屬するかと言へば、前にも既に一言した通り、今の經は雜部密敎に屬するを見る可きである。

昭和八年十二月一日

譯者　田島隆純　識

壇の曼荼羅がこの儀軌に於て明されてある。

三、本經の内容

一字奇特佛頂經　上卷
現威德品第一（正藏、一九、二八五、C）
印契品第二（二八七、B）
曼荼羅儀軌品第三（二八九、B）
先行品第四（二九二、A）
一字奇特佛頂經　中卷
成就毘那夜迦品第五（二九四、C）
說法品第六（三〇〇、B）
一字奇特佛頂經　下卷
調伏一切障毘那夜迦天王品第七（三〇一、B）
最勝成就品第八（三〇三、C）
菩薩藏品第九（三〇五、C）

以上

現威德品第一　先づ釋迦牟尼佛の威德を讃歎し、且つ三十三天の淨刹を明し、又同淨刹に於ける諸佛の三昧相を述べ、次に說法の會坐に集り玉ふた諸尊名を列記し、その後に世尊が一字輪王佛頂の眞言を說かれ、尙一字頂輪王の威德を述べ諸尊は一字頂輪王の威德を讃歎し、已つて後に、釋提桓因は一字頂輪王の眞言を受持する者を加讃することを世尊に約し、世尊も亦一字頂輪王の眞言誦受者を讃歎し玉ふ。

印契品第二　傳法の必要なることを先以て明し、次に金剛部蓮華部一切佛頂部の三部を說き、その次に頭印や甲冑印等の約三十の印契が示されてある。

曼荼羅儀軌品第三　先づ三昧耶曼荼羅に入る功德を說き、次に觀世音菩薩は往昔に於て寶髻如來の所に於て一字佛頂輪王を誦持せよと命ぜられ、その命を諦信して修したる結果として、無量百千の持明を成就したと說き、次に頂輪王の曼荼羅を明し、その曼荼羅を說く可き淨處を指示し、その他五色線、護摩、輪王の隨心眞言を說き、次に三昧耶曼荼羅の第一院、第二院、第三院を記し、その次に頂眞言、結上界の眞言、甲冑の眞言牆眞言を明し、相次で大三昧耶の印、啓白の文、覆面、三昧耶の教諭、灌頂等が詳說されてゐる。

先行品第四　金剛手祕密主菩薩の佛世尊に對する請問あり、之れに對して世尊は先事の儀軌に隨順することに依り、成就を得ることを明し、次に畫像の功德を述べ、頂輪王の曼荼羅を略說し、行者の用心を諭し、曼荼羅を畫く畫工の豫備行を說き、次に安善那の製法、獨胎金剛杵の製方と其の効驗を說き、次に成就物として曼荼羅、人形等を略說し、又多牛を得る法、域邑の主となることを得る法、大金を得る法、敬愛を得る法等の二十種を說き次に成就法を行じ得る資格を述べ、又次に人を死に至らしむる法、疼痛を除く法降魔の法が示されてある。

成就毘那夜迦品第五　先づ修法に關して說示し、次に敵軍を降伏する法、伏藏を豫知する法、一切の所欲を滿足する法、

法の組織には成つて居るが、之を以て直に修法次第とするには、尚不足の點がある。但し本軌に於ては遍照佛頂、白傘蓋佛頂、光聚佛頂、高佛頂、勝佛頂、摧毀佛頂、摧碎佛頂、輪王佛頂の八佛頂の印契と眞言とが明してある。

(8)一字頂輪王瑜伽觀行儀軌　一卷(正藏、一九、三一三)

本儀軌は主として、安怛陀那(antardhāna)即ち隱形法が明されてある。修法の次第には成つて居ない。

(9)金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌　一卷(正藏、一九、三二〇)

本儀軌は佛頂部の經軌の中で、純密教の特色が充分に現はれて居る。本儀軌以外のものは概して雜部密教に屬するもので、未だ龐雜を充分に淨除してない感がある。大師は本軌の中から、此毘盧遮那佛三字密言、共一字無異(三二二、C)の三句を即身成佛義に引用して、その宗義の本據として居られる程である。

これ等の外に譯者若しくは作者の明かでないものが二部ある。

(10)奇特最勝金輪佛頂念誦儀軌法要　一卷(正藏、一九、一九〇)

この法要には、開卷第一に一字頂輪王法を修習せんと欲する者は、須らく先づ大曼荼羅海會に入り、親しく阿闍梨から灌頂を受けて、印可を蒙る可きであることが記してある。本書は金輪佛頂の修法用であつて、次第として此不備の點もあるが、稍々完成に近いものである。

(11)一字頂輪王念誦儀軌　一卷(正藏、一九、三一〇)

題下の細註に依忉利天宮所說經譯とある。前記の17にも我今依忉利天宮會、釋迦牟尼如來所說無比力、超勝世間出世間眞言上上一切佛頂主宰一字頂輪王念誦儀則(正藏、一九、三〇七、C)と說てあるから、17の別本と見做し得る。內容に於て多少の異りはあるは、略々同一と見ることが出來る。

(12)金剛頂經一字頂輪王儀軌音義　一卷(正藏、一九、三二七)

本音義は19、時處儀軌(三二〇頁)の註釋である。此の書が日本人の手に依つて作られたものであることは、萬葉假名を使用して居ることで明かである。

(13)頂輪王大曼荼羅灌頂儀軌　一卷(正藏、一九、三二七)

この儀軌は東都聖善寺沙門吉祥集と成つてある。矢張唐代の作と思はれる。題號に於て示されてある如く、佛頂輪王の大曼荼羅を記したものであるが、この曼荼羅は中院(十佛頂)、第二院(三十二聖者)第三院(四十聖者)、第四院(二十天)第五院(二十天)から成り、聖者の數は一百二十二尊である。10奇特法要に於て、一字頂輪王法を修する者は、必ず入壇受法す可きことが說かれてあるが、その入

第二(二六四、B)
一字頂王畫像法品 (二六六、C) 神變如持化像品　第四(二六八、B)

第二卷

五頂王行相三昧耶品　第五 (二六九、A) 儀軌秘密品　第六 (二七一、B) 成就法品第七(二七三、B)

第三卷

密印品　第八(二七四、C)

第四卷

修證悉地品　第九(二八〇、C)

以上の二本が存して居る。

因に一言して置かなければならないのは、同三藏譯の廣大寶樓閣善住秘密陀羅尼經三卷 (正藏九、六三六) は矢張毘那夜迦を降伏することが主眼と成つてあり、種々の世間の悉地を得ることを重要視し、末世破戒の時代に於て、破戒と無戒を論せず、均しく敎益を得ると言はれてある點が略々類似して居るから、末法相應の敎として、今の寶樓閣經も佛頂輪王經と少くも姉妹關係を有するものと見る可きである。

第三に不空三藏譯のものには明かなのが、五譯と不明なのが二譯とある。

(4)菩提場所說一字頂輪王經　五卷 (正藏、一九、一九三)

第一卷

序品第一(一九三、A) 示現眞言大威德品第二(一九四、B)

第二卷

畫像儀軌品第三(一九八、B) 行品第四(二〇〇、B)
儀軌品第五(二〇一、A) 分別秘密相品第六(二〇三、A)

第三卷

末法成就品第七(二〇五、C) 密印品第八(二〇九、A)

第四卷

密印品第八(續)(二一一、C) 諸成就法第九(二一四、B)
世成就品　第十(二一七、C)

第五卷

無能勝加持品　第十一(二二〇、B)
證學法品　第十二(二二二、C)
護摩品　第十三(二二三、B)

以　上

(5)一字奇特佛頂經　三卷 (正藏、一九二八四)

本經の內容は別に出してあるから、此處には記述することを略する。

(6)金輪王佛要略念誦法　一卷 (正藏、一九、一八九)

この念誦法は初學の者には、直に修法次第とは成り難いが、已達の阿闍梨は之れに依つて、充分修法し得ることに成つてある。

(7)一字頂輪王念誦儀軌　一卷 (正藏、一九、三〇七)

この儀軌は前記の念誦法と均しく、修

當る。又同人譯の一字頂輪王念誦儀軌一卷と金剛王佛頂略念誦法と、又北天竺の三藏寶思惟譯の大陀羅尼末法中一字心呪經一卷が出て居るだけで、其の他は記載されて無い。（正藏、五五、九三四参照）又同錄第二十九卷にも記されてあるが同様である。（一〇三三）。

尚又本經の同種の經軌は吾人の知る限りに於て、梵語原本には勿論のこと、西藏譯にも見當らない。

二、本經の類經並に儀軌

本經の類經並に儀軌の譯者は唐時代の寶思惟（譯經に從事したる時代、西暦六九三—七〇六）と菩提流志（同六九三—七一三）と不空（同七四六—七七一）との三師である。

第一に寶思惟三藏の譯せられたのは
（1）大陀羅尼末法中一字心呪經一卷（正藏、一九、三一五）だけであるが、この經に依れば世尊が蓮華藏界に坐して、大衆や諸天仙等を觀察し、後の末世時の一切衆生を利益せんと欲して、一切如來最上大轉輪王頂三昧に入り、眉間から一大光を放たれ、その光の中に忽に聲あり、「我は是れ大轉輪一字の呪であつて、無量の天仙に恭敬圍繞せらる」と、その時に光中に復聲を出して、釋迦如來に告ぐ「我は是れ一切如來の智慧轉輪王一字心呪なり、汝は今當に未來の衆生の爲に、この呪を敷演して諸の衆生をして、大利益を獲せしめよ」と言はれたと記してあるが、これは一字金輪の呪の起原を說いたものである。

第二に菩提流志譯に二本あり、
（2）一字佛頂輪王經　五卷（正藏、一九、二二四）

第一卷
序品　第一、（二二四、A）畫像法　第二、（二二九C）

第二卷
分別成就品　第三（二三三、A）分別密儀品　第四（二三三、C）
分別私相品　第五（二三五、B）成像法品　第六（二三七B）

第三卷
印成就品　第七（二三九C）

第四卷
大法壇品　第八（二四六、A）供養成就品　第九（二五三B）

第五卷
世成就品　第十（二五六C）護法品第十一（二六〇A）
證學法品　第十二（二六一、A）護摩壇法品　第十三（二六一C）

以上

（3）五佛頂三昧陀羅尼經　四卷（正藏、一九、二六三）

第一卷
序品　第一（二六三、B）、加持顯德品

一字奇特佛頂經解題

一、概　説

本經は雜部密教から純密教へ轉移する經過を見る上に於て、必要缺く可らざる資料である。今の此の經だけで考ふるならば、雜部密教に屬する經典で有ると見做す可きで有つて、決して純密教とは見做し難いのである。而して其の內容から見れば、出離生死とか若しくは卽身成佛とか云ふ出世間の道を說て居るのではなく、敬愛法、敵軍降伏法、長壽法等、主として、現在利益を目指しての咒術で有つて、かの阿闥婆吠陀（Atharva veda）と殆んど其の內容を同ふするものもあるから、同吠陀の材題を佛教的に改作したものに外ならないと想はるる點も多く見受けられるのである。

この經は末世相應の教として見做され、破戒無戒を論せず、信じて修すれば如何なる惡人罪人でも、修法の効驗があると言はれて居る所から考ふるに、此の法は在家法であることは勿論であるが、就中、王族が喜んで修する法であるから印度に於ては、主として王族武人の修法の用に供せられたものであり、換言すれば王族を佛教信者となす爲に造られた經であると想はれる。至元法寶勘同總錄第五（正藏目錄二、二〇九A）に於て一字奇特佛頂經の下に、是大部中、現威德品、正爲因達羅菩提（Indra bodhi）天子說とあるのは、一面に於て此の經の成立を物語ると思ふ。

元來佛頂には五佛頂八佛頂等の別はあるが、中に於て最高の位地を占て居るものは金輪佛頂である。この金輪佛頂は智法身大日如來であるとされて居るが、此は純密教の上の取り扱で有つて、本來は釋尊の三昧の一種であるから、釋迦金輪と大日金輪とは別個の尊體を指して居るのではない。然るに相承說では釋迦金輪と大日金輪との別を認め、釋迦金輪を中尊とする經軌は奇特佛頂經と一字頂輪王念誦儀軌と菩提場所說經とであると言ひ、大日金輪を中尊とするは一字頂輪王瑜伽經と一字頂輪王一切時處軌とであると言つて居る。實を言へば、謂ゆる雜部密教の組織を成して居る經軌は、釋迦金輪を中尊となし、純密教の組織に改めたものが、大日金輪を說くことに成つて居るのである。

次に、貞元新定釋教目錄第二十二卷には菩提流支譯の一字佛頂輪王經（亦名五佛頂經或四卷）と不空譯の一字頂輪王瑜伽經一卷これは後に記する 12 の儀軌に

目次

密教部五

田島隆純
坪井德光
阿部宥精 譯

國譯一切經

大東出版社藏版